

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 16 集

なごやじょうさん まる
名古屋城三の丸遺跡(II)

1 9 9 0

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



調査区上空より名古屋城



1. SD 01出土遺物

		231		224	
	228		223	164	170
175			186	200	203
	205		208	207	219



2. SX101出土遺物

		1043	964	969
1044			1244	1167
	1256		1219	
		1223	1220	
		1224		

序

名古屋城の外堀に囲まれた中区三の丸は、今日では名古屋の代表的な官庁街となっています。しかし、江戸時代においては、この一帯は、文字通り、「三の丸」として、成瀬氏、竹腰氏ら、尾張藩の重臣達の屋敷が並ぶ武家屋敷地となっていました。

近年、この三の丸の名城東小公園内に、建設省中部地方建設局により、名古屋第一地方合同庁舎の建設が計画されるに至り、埋蔵文化財の事前調査の必要性が生じたため、愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会を通じ、建設省より委託を受け、昭和63年度事業としてこの発掘調査を実施しました。

調査の結果、近世の遺構、遺物だけでなく、織田信長の生誕地と伝承される「那古野城」の「堀」の一部と思われる大溝が発見されるなど、多くの知見を得ることができました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財への理解への一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施にあたっては、関係諸機関、並びに関係者の方々には、種々御指導と御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 松川 誠次

例 言

1. 本書は、名古屋市中区三の丸に所在する「名古屋城三の丸遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省中部地方建設局による名古屋第一地方合同庁舎建設に伴うものであり、県教育委員会を通じて委託を受けた、(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和63年4月～8月であり、調査に引き続き、平成元年度には報告書作成の為の整理作業を実施した。
4. 調査担当者は、梅本博志・小澤一弘・佐藤公保・城ヶ谷和広であり、他に補助員として、伊藤千春・金子健一・武内剛・山中鹿次の各氏の協力を得た。
5. 調査記録及び出土品の整理等については、調査員・補助員のほか、以下の方々の参加を得た。
天木日出夫・飯島朋子・岩崎繁子・牛田長子・内山伸也・小沢昭子・加賀良子・川北由美・喜田三和子・小島洋子・小林ちゑ・杉山美智子・武市康子・田宮豊子・坪井裕司・寺沢なつ江・戸川真理・平岩圭子・藤井裕子・洞地恭子・松下香代・萬谷さつき・山川和子・水野里美・山口ヤス子・山口やよい・吉田恒美・吉田久子
6. 調査にあたっては、県教育委員会文化財課の指導を得たほか、名古屋市教育委員会、建設省中部地方建設局の協力を得た。
7. 本書の執筆分担は、大よそ以下の通りであるが、文責については、各文末に記した。
なお、編集は梅本が担当した。
梅本 I-1～4・II-1～4・IV-2、佐藤 III-1、小澤 III-2・IV-1、松田 III-2
8. 本書の執筆にあたっては、以下の各氏の御指導、御協力を得た。
赤羽一郎・足立順司・伊藤嘉章・井上喜久男・内堀信雄・江崎武・遠藤才文・古泉弘・斎藤孝正・柴垣勇夫・鈴木忠司・住田誠行・千田嘉博・土山公仁・寺島孝一・仲野泰裕・檜崎彰一・橋口定志・藤澤良祐・村上伸之
9. 調査記録の座標は、国土座標第VII系に準拠する。
10. 調査記録及び出土品は、(財)愛知県埋蔵文化財センターで保管する。

目 次

I. 遺跡調査の概要	
1. 遺跡の立地と沿革	1
2. 調査に至る経過	4
3. 調査の工程	5
4. 調査成果の概要	6
II. 遺 構	
1. 基本層序と遺構の概要	9
2. I期の遺構	11
3. II期の遺構	14
4. 近代の遺構	20
III. 遺 物	
1. I期の遺物	21
2. II期の遺物	36
3. I期以前の遺物	159
IV. ま と め	
1. 三の丸出土の近世陶磁器について	161
2. 遺構と遺跡の変遷	171
付表	
遺構表	182
遺物表	186

図版目次

図版 1	名古屋城全景	図版16	II期の遺物(2) SK148・189
図版 2	調査区周辺・調査区より天守閣方面	図版17	II期の遺物(3) SK130
図版 3	I期の遺構(1) 調査区全景	図版18	II期の遺物(4) SK162
図版 4	I期の遺構(2) 北・中央・南各部分	図版19	II期の遺物(5) SX101(1)
図版 5	I期の遺構(3) SD01・03	図版20	II期の遺物(6) SX101(2)
図版 6	I期の遺構(4) SD03~08・SK47	図版21	II期の遺物(7) 肥前系陶器
図版 7	II期の遺構(1) 調査区全景	図版22	II期の遺物(8) 上絵付製品・他
図版 8	II期の遺構(2) 北・南部分	図版23	II期の遺物(9) 焼塩壺・土製品(1)
図版 9	II期の遺構(3) 中央部分	図版24	II期の遺物(10) 土製品(2)
図版10	II期の遺構(4) SA103・SD102	図版25	II期の遺物(11) 瓦
図版11	II期の遺構(5) SD・SK・SX	図版26	II期の遺物(12) 石製品
図版12	近代の遺構 石組暗渠	図版27	II期の遺物(13) 金属製品
図版13	I期の遺物(1) SK13・SD15・他	図版28	調査区全体図(I期)
図版14	I期の遺物(2) SE05・SD01・他	図版29	調査区全体図(II期)
図版15	II期の遺物(1) SK186・173・145・他		

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第16図	近代の遺構	20
第2図	近世の城と街道	1	第17図	主要器種模式図(I期)	23
第3図	周辺の遺跡	2	第18図	I期の遺物(1) SK13・17・29・他	25
第4図	調査地点位置図	3	第19図	I期の遺物(2) SK31・44・20	27
第5図	調査風景	5	第20図	I期の遺物(3) SD03・04	28
第6図	現地説明会資料	5	第21図	I期の遺物(4) SD05	29
第7図	尾府名古屋図	8	第22図	I期の遺物(5) SD08・09、SK66	31
第8図	三の丸遺跡土層模式図	9	第23図	I期の遺物(6) SE05・SK47・57	32
第9図	主要遺構の配置	10	第24図	I期の遺物(7) SD01(1)	34
第10図	I期の遺構(1) SB01・02・03	11	第25図	I期の遺物(8) SD01(2)	35
第11図	I期の遺構(2) SD01・03~06	13	第26図	主要器種模式図(II期—1)	40
第12図	II期の遺構(1) SB101・102	14	第27図	主要器種模式図(II期—2)	41
第13図	II期の遺構(2) SX101・102・103	15	第28図	II期の遺物(1) SK186	44
第14図	II期の遺構(3) 土層断面図	17	第29図	II期の遺物(2) SD102(1)	45
第15図	II期の遺構(4) SE・SX・SK	19	第30図	II期の遺物(3) SD102(2)	46

第31図	II期の遺物(4)	S K173(1)	………47	第67図	II期の遺物(40)	S K162(8)	………94
第32図	II期の遺物(5)	S K173(2)	………48	第68図	II期の遺物(41)	S K162(9)	………95
第33図	II期の遺物(6)	S K173(3)	………49	第69図	II期の遺物(42)	S X101(1)	………96
第34図	II期の遺物(7)	S K145(1)	………50	第70図	II期の遺物(43)	S X101(2)	………97
第35図	II期の遺物(8)	S K145(2)	………51	第71図	II期の遺物(44)	S X101(3)	………98
第36図	II期の遺物(9)	S K145(3)	………52	第72図	II期の遺物(45)	S X101(4)	………99
第37図	II期の遺物(10)	S K179(1)	………53	第73図	II期の遺物(46)	S X101(5)	………100
第38図	II期の遺物(11)	S K179(2)	………54	第74図	II期の遺物(47)	S X101(6)	………101
第39図	II期の遺物(12)	S K148(1)	………59	第75図	II期の遺物(48)	S X101(7)	………102
第40図	II期の遺物(13)	S K148(2)	………60	第76図	II期の遺物(49)	S X101(8)	………103
第41図	II期の遺物(14)	S K130(1)	………61	第77図	II期の遺物(50)	S X101(9)	………104
第42図	II期の遺物(15)	S K130(2)	………62	第78図	II期の遺物(51)	S X101(10)	………105
第43図	II期の遺物(16)	S K130(3)	………63	第79図	II期の遺物(52)	S X101(11)	………106
第44図	II期の遺物(17)	S K130(4)	………64	第80図	II期の遺物(53)	S X101(12)	………107
第45図	II期の遺物(18)	S K130(5)	………65	第81図	II期の遺物(54)	S X101(13)	………108
第46図	II期の遺物(19)	S K130(6)	………66	第82図	II期の遺物(55)	S X101(14)	………109
第47図	II期の遺物(20)	S K130(7)	………67	第83図	II期の遺物(56)	S X101(15)	………110
第48図	II期の遺物(21)	S K130(8)	………68	第84図	II期の遺物(57)	S X101(16)	………111
第49図	II期の遺物(22)	S K130(9)	………69	第85図	II期の遺物(58)	S X101(17)	………112
第50図	II期の遺物(23)	S K130(10)	………70	第86図	II期の遺物(59)	S X101(18)	………113
第51図	II期の遺物(24)	S K130(11)	………71	第87図	II期の遺物(60)	S X101(19)	………114
第52図	II期の遺物(25)	S K189(1)	………72	第88図	II期の遺物(61)	S X101(20)	………115
第53図	II期の遺物(26)	S K189(2)	………73	第89図	II期の遺物(62)	S X101(21)	………116
第54図	II期の遺物(27)	S K189(3)	………74	第90図	II期の遺物(63)	SX111・112・114	………117
第55図	II期の遺物(28)	S K189(4)	………75	第91図	II期の遺物(64)	刻印集成	………119
第56図	II期の遺物(29)	S K189(5)	………76	第92図	II期の遺物(65)	京焼風陶器(1)	…120
第57図	II期の遺物(30)	S K189(6)	………77	第93図	II期の遺物(66)	京焼風陶器(2)	…121
第58図	II期の遺物(31)	S K173(1)	………85	第94図	II期の遺物(67)	京焼風陶器(3)	…122
第59図	II期の遺物(32)	S K173(2)	………86	第95図	II期の遺物(68)	京焼風陶器(4)	…123
第60図	II期の遺物(33)	S K162(1)	………87	第96図	II期の遺物(69)	刻印のある製品	…124
第61図	II期の遺物(34)	S K162(2)	………88	第97図	II期の遺物(70)	上絵付製品(1)	…126
第62図	II期の遺物(35)	S K162(3)	………89	第98図	II期の遺物(71)	上絵付製品(2)	…127
第63図	II期の遺物(36)	S K162(4)	………90	第99図	II期の遺物(72)	墨書のある製品(1)	128
第64図	II期の遺物(37)	S K162(5)	………91	第100図	II期の遺物(73)	墨書のある製品(2)	129
第65図	II期の遺物(38)	S K162(6)	………92	第101図	II期の遺物(74)	焼塩壺刻印	………131
第66図	II期の遺物(39)	S K162(7)	………93	第102図	II期の遺物(75)	焼塩壺(1)	………132

第103図	II期の遺物(76) 焼塩壺(2) ……	133	第120図	II期の遺物(93) ガラス製品 ……	155
第104図	II期の遺物(77) 土製品(1) ……	135	第121図	II期の遺物(94) 金属製品(1) ……	156
第105図	II期の遺物(78) 土製品(2) ……	136	第122図	II期の遺物(95) 金属製品(2) ……	157
第106図	II期の遺物(79) 土製品(3) ……	137	第123図	II期の遺物(96) 銭貨 ……	158
第107図	II期の遺物(80) 土製品(4) ……	138	第124図	I期以前の遺物 ……	160
第108図	II期の遺物(81) 土製品(5) ……	139	第125図	編年表(1—①) ……	164
第109図	II期の遺物(82) 土製品(6) ……	140	第126図	編年表(1—②) ……	165
第110図	II期の遺物(83) 瓦(1) ……	143	第127図	編年表(2—①) ……	166
第111図	II期の遺物(84) 瓦(2) ……	144	第128図	編年表(2—②) ……	167
第112図	II期の遺物(85) 瓦(3) ……	145	第129図	編年表(2—③) ……	168
第113図	II期の遺物(86) 瓦(4) ……	146	第130図	編年表(2—④) ……	169
第114図	II期の遺物(87) 瓦(5) ……	147	第131図	三の丸の変遷 ……	172
第115図	II期の遺物(88) 瓦(6) ……	148	第132図	名古屋図 ……	173
第116図	II期の遺物(89) 瓦(7) ……	149	第133図	調査区周辺の屋敷地の復原 ……	173
第117図	II期の遺物(90) 石製品(1) ……	152	第134図	遺構の変遷(1) ……	175
第118図	II期の遺物(91) 石製品(2) ……	153	第135図	遺構の変遷(2) ……	176
第119図	II期の遺物(92) 石製品(3) ……	154	第136図	遺構の変遷(3) ……	177

表 目 次

第1表	発掘調査に伴う法的手続き ……	4	第4表	II期の遺構の方向性 ……	16
第2表	調査の工程 ……	5	第5表	器種別出土状況 ……	170
第3表	名古屋城三の丸遺跡関係小年表 ……	7	第6表	屋敷地(a)~(d)居住者の変遷 ……	174

I 遺跡調査の概要

1. 遺跡の立地と沿革

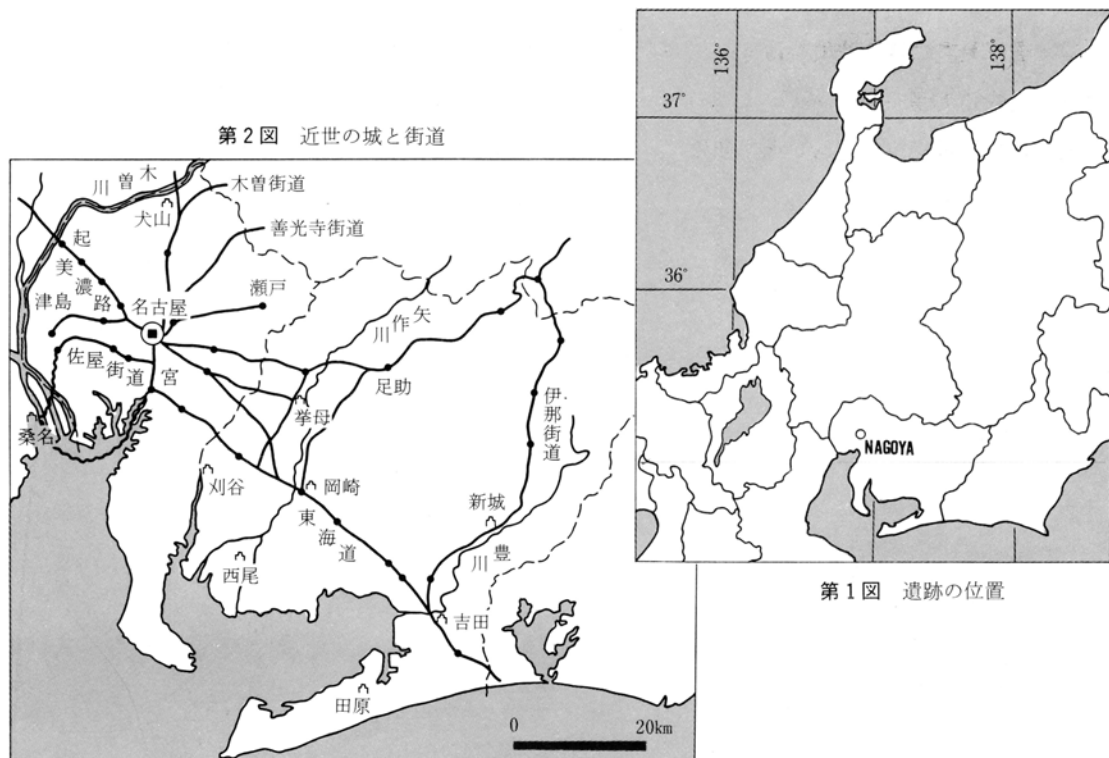
城と城下町 名古屋の近世を象徴する「名古屋城」は、徳川御三家の筆頭、尾張徳川家62万石の居城として造営されたものであり、名古屋台地の西北端部に位置する。

城の縄張りは、台地端に占地する本丸を最高所とし、南西に西丸、南東に二の丸を配し、さらに、その南から東にかけて三の丸が設けられ、外堀で囲まれている。城の北側は、深井丸が配されるのみであるが、この部分は、台地をはずれ、「名古屋新層」とよばれる沖積地となっており、その標高差が自然の要害となっている。

三の丸の南側、台地の延長上には、俗に、「碁盤割」とよばれる商業地が形成され、今日でも名古屋の中心街となっている。

沿革 城と城下町が位置する名古屋台地は、近世のみでなく、各期にわたる遺跡の密集地帯となっており、「愛知県遺跡分布図」においても、縄文早期～近世の遺物が出土した「旧紫川」遺跡、あるいは、弥生時代～古墳時代の遺構がみられた「竪三蔵通」遺跡等の存在が示されている。

また、文献上では、権中納言民部卿藤原顕頼の子で、東大寺別当の小野法印顕忠を開発領主とする「那古野荘」が安元元年（1175）頃成立し、南北朝頃まで存続していたとされているが、その遺構、荘城等は明らかにされていない。



この地に、最初に城を築いたのは、大永2年（1522）頃、駿河の今川氏親であり、この城は、当時「那古野城」あるいは「柳之丸」といわれ、現在の二の丸あたりに位置したとの伝承がある。

那古野城は、清須の織田氏の奉行として、勢力を伸長しつつあった織田信秀により、天文元年（1532）頃には、その手に帰し、長子信長もこの城で誕生したとされている。信長は弘治元年（1555）清須へと進出し、那古野城自体は、その叔父信光、次いで重臣林通勝らに委ねられるが、その後の経緯は明らかでなく、天正10年（1582）頃には一旦廃城となったと考えられている。

近世城郭としての名古屋城は、徳川家康により、慶長15年（1610）幕府直轄の工事として築城がはじめられ、大坂の陣を直前にした慶長20年（1615）には、天守など本丸の中枢部が完成している。大坂の陣後の元和、寛永年間には、尾張藩の手により、二の丸、三の丸等の普請が引き続き実施され、



- | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 志賀公園遺跡 | 2. 西志賀遺跡 | 3. 田幡城跡 | 4. 片山神社遺跡 |
| 5. 長久寺遺跡 | 6. 東二葉町遺跡 | 7. 名古屋城跡 | 8. 名古屋城三の丸遺跡 |
| 9. 白川公園遺跡 | 10. 竪三蔵通遺跡 | 11. 旧紫川遺跡 | 12. 富士見町遺跡 |
| 13. 古渡城跡 | 14. 正木町遺跡 | 15. 伊勢山中学遺跡 | 16. 古沢町遺跡 |
| 17. 尾張元興寺跡 | 18. 八幡山古墳 | | |

第3図 周辺の遺跡（1/50000）

寛永10年（1633）將軍家光の上洛時の宿館施設の造営を以て、一連の整備を完了したとされている。

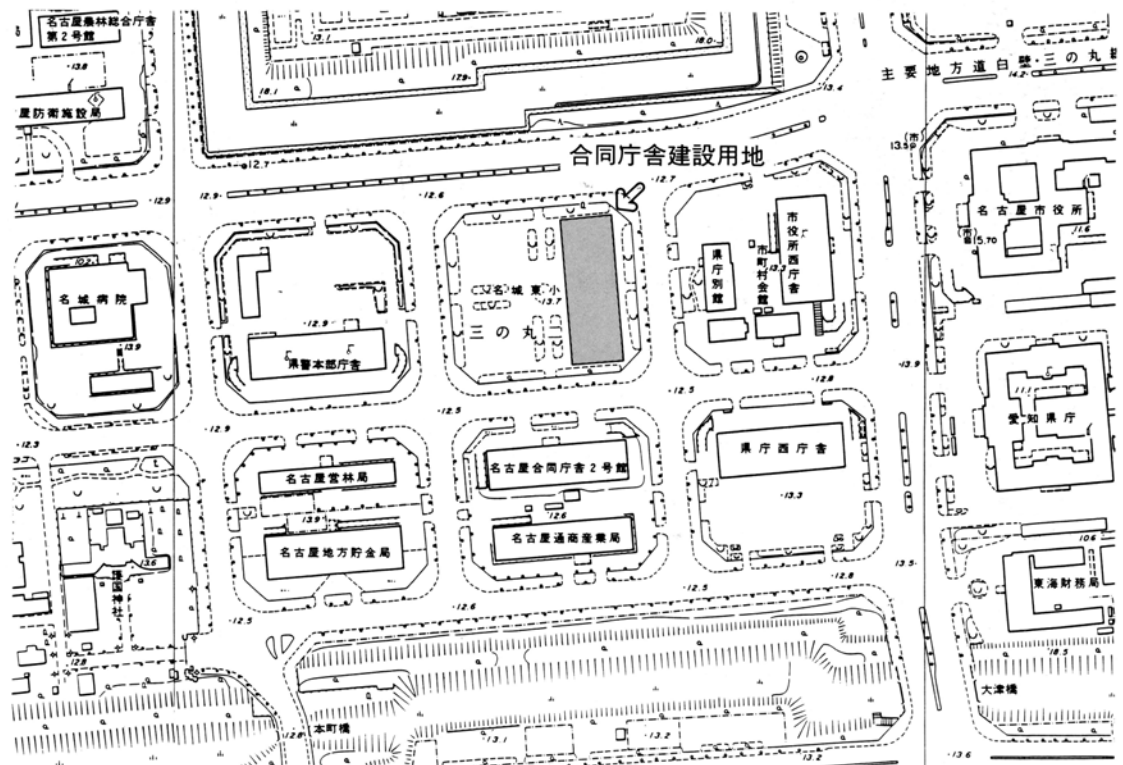
今回調査の対象となった三の丸地内は、近世を通じ、多少の変動はあったものの、東北部の御屋形（藩主一族の屋敷地）及び西の丸に北接する社地（天王社、東照宮等）の他は全て高祿の武家屋敷地で占められており、その面積は、元禄10年（1697）の作事方実測によれば、178500坪（京間坪）程とされている。

明治維新後の名古屋城は、明治4年（1871）の廃藩置県に伴ない陸軍省の管轄へと移されるが、直接には、明治5年に本丸・二の丸が引き渡され、東京鎮台第3分営（後に名古屋鎮台）が城内に設置される。また、三の丸についても、明治7年8月にはその全域が陸軍省へ移管され、続いて明治10年には、郭内の東照宮も旧明倫堂あと（現在地）へ移され、以後城内の兵営化が急速に進められる。

関連調査 名古屋城郭内に関する発掘調査としては、昭和51・52年に名古屋市教育委員会により、二の丸の調査が実施され、庭園に伴なう南北の池、暗渠、建物跡等が確認されている。

三の丸郭内については、同じく名古屋市による調査が昭和62～63年にかけて、3次にわたって実施されている。このうち、南東隅部分にあたる名古屋市三の丸公館予定地を対象とした第1・3次調査では、武家屋敷2軒と、郭内の道路である南御土居筋、東御土居筋が発見されている。

また、昭和63年には、郭内南西隅の愛知県新文化会館予定地の調査が、愛知県教育委員会・（財）愛知県埋蔵文化財センターにより実施され、武家屋敷地2軒分と西御土居筋等が確認されている。



第4図 調査地点位置図（1/5000）

2. 調査に至る経過

名古屋城は、第2次大戦時の空襲により、昭和20年、天守・本丸御殿等が焼失したものの、近世の代表的な城郭遺構として、本丸が国の特別史跡に、二の丸庭園が名勝に指定され、焼失を免れた隅櫓や本丸御殿障壁画、天井板絵等も重要文化財となっている。

今回の調査の対象となった「三の丸」は、堀及び土塁部分が、本丸と同じく特別史跡として指定されていたものの、郭内一帯については、既に官庁街としての再開発が進んでおり、遺構の存在は疑問視されていた。しかし、近年、三の丸西南隅部分に愛知県が新文化会館の建設を計画し、それに伴い、昭和62年8月、県教育委員会が試掘調査を実施したところ、近世のみならず、弥生～古墳時代の遺構が確認され、当該地が極めて保存状態のより遺跡であることが明らかとなった。

同じころ、建設省中部地方建設局では、三の丸地区整備事業の一環として、三の丸東小公園内に、名古屋地方第一合同庁舎の建築を計画していたが、この地点についても、新文化会館建設用地と同様、遺構が残されている可能性が高いと判断されたため、県教育委員会では、昭和62年9月21日～24日にかけて建設予定地内の試掘調査を実施した。

この結果、明治期以降の建物基礎等による攪乱はあるものの、多量の近世陶磁器等が出土し、本格的な発掘調査の必要性が認められるに至り、県教育委員会では、建設省に対し、合同庁舎予定地について、発掘調査の実施を指導した。このため、建設省中部地方建設局では、調査及び報告書の作成を、県教育委員会を通じ、(財)愛知県埋蔵文化財センターに委託した。

これを受けた、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、発掘調査を昭和63年度事業、またその報告書作成を翌年への継続事業として、その実施にあたった。調査は、当初、対象面積2000㎡に対し、昭和63年4月～6月の3カ月間の工程を予定し着手したが、開始後間もなく、工事計画の変更のため、対象面積が3600㎡に増加し、それに伴ない調査期間も1カ月程の延長となった。

区 分	建設省 中部地方建設局	(財)埋蔵文化財 センター	名古屋市 教育委員会	愛知県 教育委員会	文化庁
(所在の照会)	62. 9. 14 建部計第132号	—	—	62. 10. 5 62教文第51-34号	—
文化財保護法 57条の3による通知	63. 2. 23 建部計第27号	—	63. 2. 29 進達	63. 3. 10 63教文第27-62号	—
文化財保護法 57条の1による届出	—	63. 4. 1	63. 5. 6 進達	63. 5. 18 63教文第27-134号	63. 6. 1 63委保第5-745号
遺失物法 第1条による届出	—	63. 9. 12	—	63. 10. 27 (認定)	—
埋蔵文化財保管証	—	63. 9. 12	—	63. 10. 27 (認定)	—

第1表 発掘調査に伴う法的手続き

3. 調査の工程

今回の調査地点は、名城東小公園の敷地内にあっていたため、公園施設、植樹等の撤去を原因者により実施し、更地の状態で発掘区を設定し、調査にとりかかった。

表土の掘削 調査は、明治期以降の整地層と考えられる厚い盛土層をバックホウを用いて除去する作業から着手した。

掘削を開始して間もなく、花崗岩の切石を蓋に用いた南北方向の暗渠が確認された。これは、検出の状況から、明治期以降の設置であり、近年に至るまで機能していたものと判断された。しかし、昭和52年、名古屋市教育委員会による調査において、近世の庭園遺構に伴う同様の施設が発見されていたため、一応、遺存状態の比較的良好な南側の一部について記録を作成し、北半については、近世以前の遺構調査の上で、大きな障害となると考えられたため、バックホウにより除去した。

遺構の調査 遺跡は、近世の度重なる整地を受けていたが、その範囲、盛土の内容は様々であり、各整地層面ごとの遺構の検出は断念せざるを得なかった。従って、近世の遺構は、これらの盛土を取り去った、暗褐色の中世以前の遺物包含層の上面で検出し、上層の写真測量を実施した。

中世以前の遺構の調査は、この包含層の掘削から開始したが、近世と同様、包含層での遺構の確認はなし得ず、基盤となる熟田層上面での検出を行い下層の写真測量を実施した。

包含層中からは、中世陶磁器にまじり、灰釉陶器、須恵器等も若干みられたため、当該期の遺構の存在も念頭においたが、確認はし得なかった。

調査の記録としては、国土座標に基づく1/50基本平面図を写真測量により作成したほか、必要により土層断面図、遺物出土状態図を作成した。

整理作業 出土品の整理作業については現地調査と併行して、洗浄・出土地点の注記等、基礎的な作業を実施し、昭和63年度の「年報」において調査の概要を報告した。また、平成元年度には、報告書作成のための本格的な整理作業にあたった。

成果の公表 調査成果については、発掘調査中の7月23日に市民を対象として、8月5日には、委託者である建設省中部地方建設局の関係者等を対象とした見学会を実施し、合わせて500人余りの参加者があった。また、出土品の一部については、埋蔵文化財調査センターの展示及び、平成元年度の「埋蔵文化財展」等の機会に展示し、一般に公開した。

期 間		88												89												90		
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
調 査	表土掘削	■																										
	上層(Ⅱ期)	■																										
	下層(Ⅰ期)													● 現地説明会														
整 理	基礎整理 報告書作成	■																										
														● 年報刊行						● 報告書刊行								

第2表 調査の工程

4. 調査成果の概要

発掘調査の結果 明治期以降の建物基礎等による攪乱は、当初予想された程ではなく、遺構の残存状態はかなり良好であった。

検出された遺構群は、近世名古屋城の構築以前のもの（Ⅰ期）と、名古屋城三の丸に伴うと考えられるもの（Ⅱ期）の大きく2時期に区分することが可能であった。

Ⅰ期の遺構は、溝、井戸、柵列等であった。なかでも、幅6.5m、深さ3mにも及ぶ大溝(SD01)は、その出土品から、15C後～16C前半頃の時期が想定し得るが、これは、文献にみられる「那古野城」の存続期間と一致するものであり、その「堀」の一部である可能性が高いといえる。

Ⅱ期の遺構は、溝、井戸、礎石建物等の他に、「地下室」と考えられる方形の大型土坑、廃棄土坑等であった。このうち、地割を示すと思われる溝の存在から、調査地内に、4家程の武家屋敷地を想定することができたが、これは、絵図等の所見とよく一致するものであった。

出土遺物は、陶磁器類を中心に、遺物整理用コンテナ(容積約27ℓ)に換算し、約700箱に達したが、遺構と同様、二期の区分が可能であった。



第5図 調査風景

第6図 現地説明会資料

名古屋城三の丸遺跡
現地説明会資料



墓に埋められた真人(真家人)

名古屋城三の丸遺跡

名古屋城の外堀に囲まれた中区三の丸一帯は、江戸時代には、尾張藩の幕臣達の武家屋敷が立ち並んでいた場所で、市内の代表的な遺跡の一つです。しかし、このあたりは、それ以前においても、平安時代には、藤原一族の荘園である「那古野庄」の名が知られ、戦国時代でも、織田信長の生誕地と伝承される「那古野城」の跡地とされています。

また、考古学的にも戦後の名古屋城天守閣再建工事の際に、縄文時代から平安時代にかけての遺物が発見されるなど、三の丸周辺は、事には近世のみならず、これらの時代を通じて遺跡地と考えられます。

発掘調査の概要

今回の調査は、名城東小公園内に計画された「名古屋第一地方合同庁舎」建設に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて、建設省から委託を受けた(財)愛知県歴史文化財センターが主体となり実施しています。

調査の結果、現在までに、名古屋城三の丸跡遺跡のものと考えられる遺跡群を確認し、この上下で、前後二時期における遺跡群を検出することができました。

このうち、上層の遺構は、江戸時代(名古屋城の時期)に属するもので、礎石、井戸、溝、礎石土坑(ごみ穴)など、いずれも、武家屋敷に伴うと考えられるものです。また、これらの遺構からは、地元の瀬戸・美濃窯の陶磁器類を中心に、多量の遺物が出土しましたが、なかには、志野・瀬戸等、いわゆる「茶陶」として用いられたものも多く含まれています。

下層の遺構は、名古屋城構築以前の戦国時代の遺構です。現在確認されているのは、溝が最も多く見られ、土坑などですが、この溝のうち最大規模のものは、幅5m、深さ3m(掘削長からの深さ4.5m)に達するもので、その規模から、城跡の「堀」と考えられるものです。この大溝の時期は、埋土中から出土した土器などから16世紀中頃と推定されますが、これは、文献上知られている「那古野城」の存続期間と一致するもので、その関連性が注目されます。



年号を裏面に刻した茶陶
「正徳六年丙申四月廿日」

1998年7月23日(土)
(財)愛知県歴史文化財センター
三の丸事務所 ☎052-231-5299

I期の遺物は、瀬戸・美濃窯産の施釉陶器を中心に、山茶碗、土師皿、土鍋等であるが、年代的には、概ね14～16C代と考えられるものである。

II期の遺物は、やはり、地元の瀬戸・美濃産の陶磁器類が多数を占めるが、肥前系、あるいは京焼系といった他地域からの搬入品の存在も目立つものとなっている。また、土器類では、土師皿の量は激減するものの、煮沸具としての鍋類は引き続き使用されている。

この他、灰釉陶器、須恵器、弥生土器等、I期以前の出土品も若干みられたが、いずれも量的には少なく、遺構に伴うものではなかった。(梅本博志)

年 代	記 事	区 分
(12C)	九条民部卿顯頼の子、小野法印顯恵(1175没)を開発領主として「那古野荘」が成立	那古野荘期
1364 貞治 3	大須真福寺文庫の「大師入定勘決記」奥書に「那古野荘」の記載	
1433 永享 5	「満濟准后日記」に今川氏所領として「尾張那古屋」の記載	
1524 大永 4	この頃、今川氏親「那古野城」を築き、氏豊を城主とする	那古野城期
1532 天文 1	この頃、織田信秀、今川氏より那古野城を奪い居城とする	
1534 3	織田信長、那古野城に生まれる	
1555 弘治 1	信長、清須城に移り、織田信光(後に林通勝)を那古野城主とする	
1582 天正 10	この頃、那古野城廃城となる	
1609 慶長 14	徳川家康、名古屋築城を決定	
1610 15	築城開始。「清須越」はじまる	
1611 16	本丸・二之丸・西之丸・深井丸で、門・櫓・長屋等の作事はじまる	
1612 17	大天守・小天守等の作事はじまる、城下の検地・町割りはじまる	
1613 18	清須越の諸土・町人等の居住地が定まる	
1615 元和 1	本丸御殿完成、大坂夏の陣	
1616 2	家康没。義直、駿府より名古屋へ移り本丸に居住	
1617 3	二之丸殿舎完成	
1619 5	三之丸に東照宮を勧進	
1620 6	義直二之丸に移る	
1633 寛永 10	将軍家光上洛に備え、本丸に御成書院作事	
1663 寛文 3	二之丸の成瀬・竹腰の両屋敷を三之丸へ移す。三之丸内の屋敷替多数	
1664 4	評定所をおき、私宅での会議を止める	
1745 延享 2	松平君山「士林沂洄」完成	
1752 宝暦 2	大天守修理はじまる	
1882 文政 8	二之丸御殿大改造	
1858 安政 5	奥村得義「金城温古録」完成	
1871 明治 4	二之丸陸軍省兵営となる	兵営期
1874 7	三之丸全域を陸軍省へ移管	

第3表 名古屋城三の丸遺跡関係小年表

II 遺 構

1. 基本層序と遺構の概要

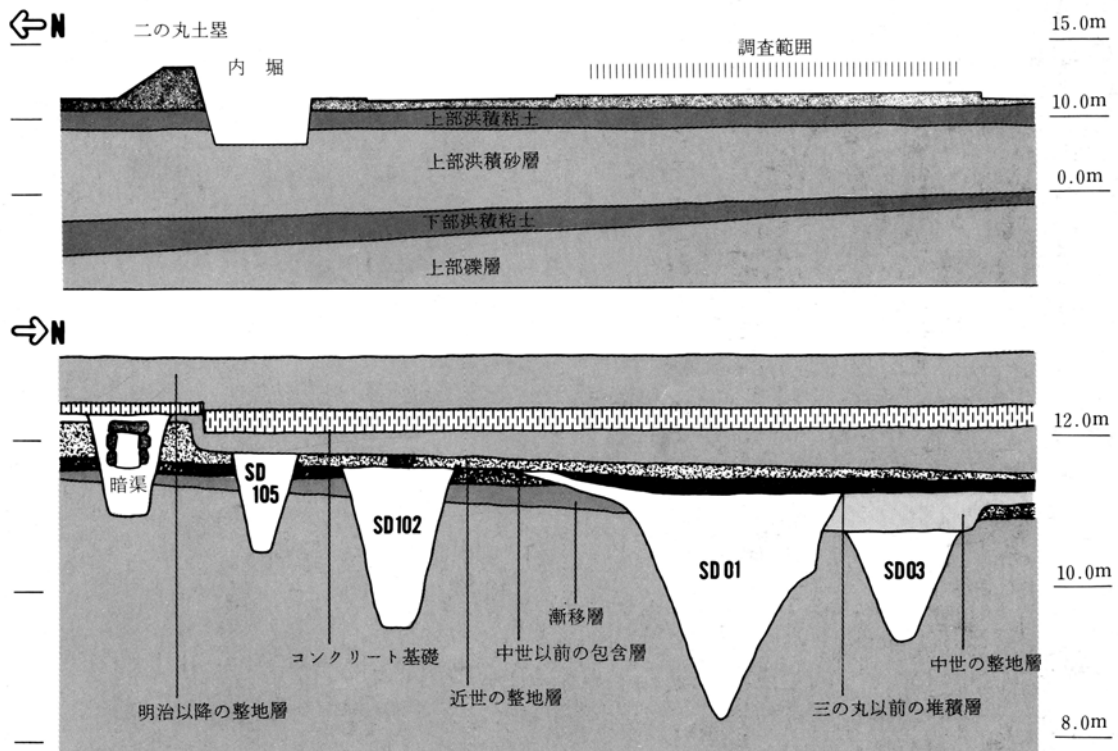
調査地点の基本層序は、地表より、三の丸廃絶以降現在に至るまでの整地層(第I層)、近世の整地層(第II層)、三の丸以前の堆積層(第III層)、中世以前の遺物包含層(第IV層)、基盤としての黄褐色シルト・粘土層(第V層)の順に推移する。

第I層は、大量の土砂の搬入により、数次にわたって形成されたとおもわれ、最も厚い部分では、2m近くにも達するものであった。層中には、石炭殻を用いた整地部分、あるいは、練瓦、コンクリートによる建物基礎が一部残存していた。

第II層は、武家屋敷地として使用されていた近世を通じ、随時形成されたものである。調査区中央部分を中心に断続的にみとめられるが、褐色砂・シルトで構成されるもの、基盤層の小ブロックを多量に含むもの等、土質は一定せず、広がり安定性にも欠ける。

第III層は、調査区北半に堆積する黒褐色のシルト層である。層厚は20cm内外と比較的薄いが、粘質が強く、固く締まっており、自然堆積か人為的なものか判然としない。大溝(SD01)の埋土を覆っていることから、那古野城の廃絶以降、三の丸築造の直前までの堆積層と考えられる。

IV層は、比較的安定した黒褐色の砂・シルト層であり、調査区中央～北寄りの部分にやや厚く堆積している。層中には、弥生～中世までの遺物を含むが、その量は多くない。



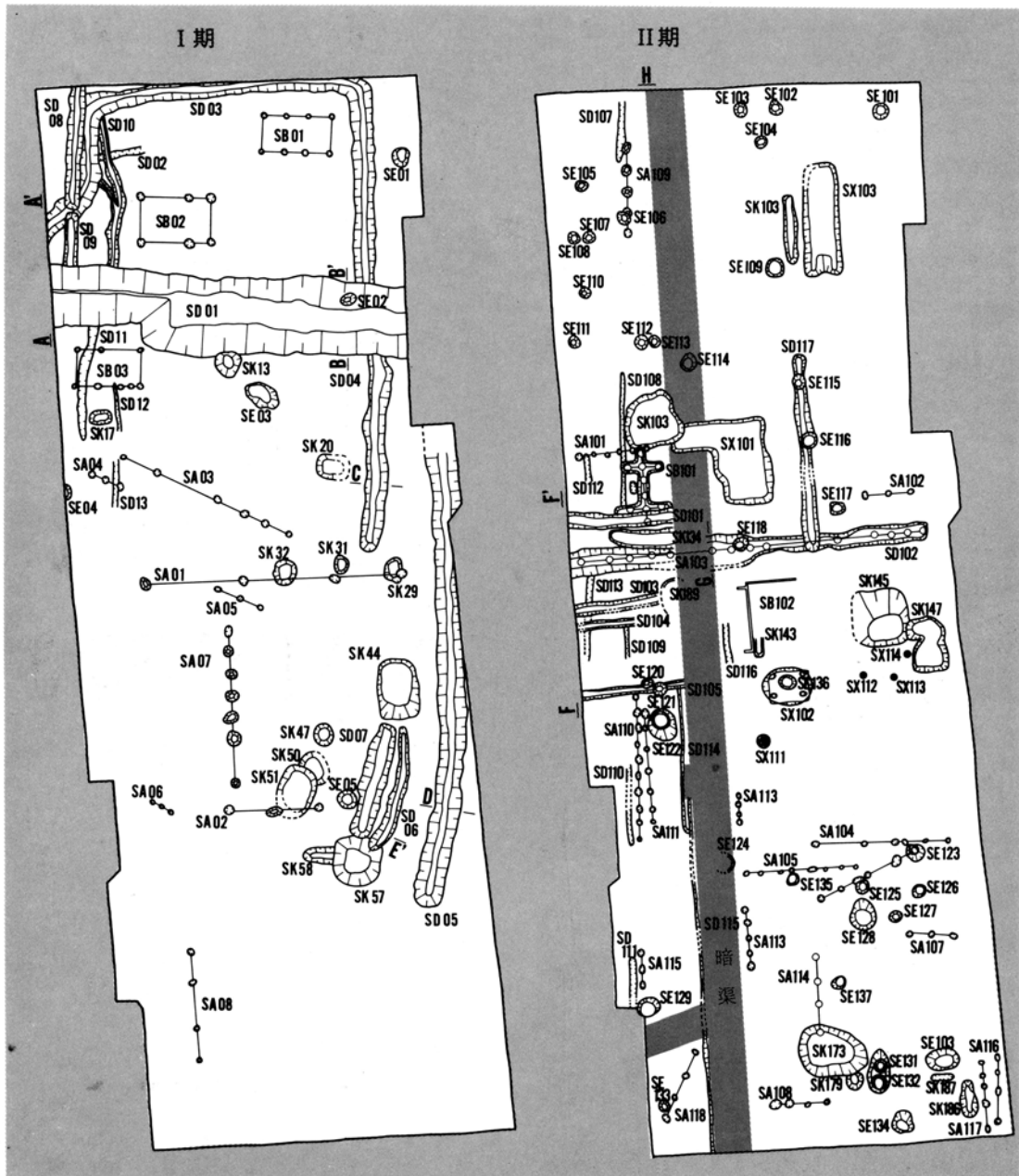
第8図 三の丸遺跡土層模式図

V層は、いわゆる「熱田層」であり、黄褐色～黄白色のシルト・粘土で構成される。IV層の残存状態が良好な部分では、表面に淡褐色で遺物を含まない漸移層が形成されている。

遺構の検出は、II・III・IV層を対象として実施したが、盛土、あるいは包含層中での検出は難しく、III層又はIV層の上面でII期（近世）、V層上面でI期（中世）の遺構を確認するに止まった。

I期の遺構群は、前述の通り、溝、井戸等であるが、当時の生活面は、III・IV層の遺存状況からみて、調査区北端で11.5m（T.P）南端で12.0m程度と推定できる。

II期の遺構群は、調査区の全面に展開するが、特に中央部、南端部での密度が高く、度重なる掘削により、IV層がほとんど遺存しない部分もある。II期の生活面は、12.0～12.5m程度と考えられる。



第9図 主要遺構の配置

2. I期の遺構

(1) 建物 (第10図)

掘立柱の建物3棟が確認できたが、規模はいずれも桁行3間、梁間1間と推定される。建物自体から建立時期は特定し得ないが、3棟共、棟方向が正確に東西方向を示しており、強い規制の下で、ほぼ同時に存在していたものと考えられる。

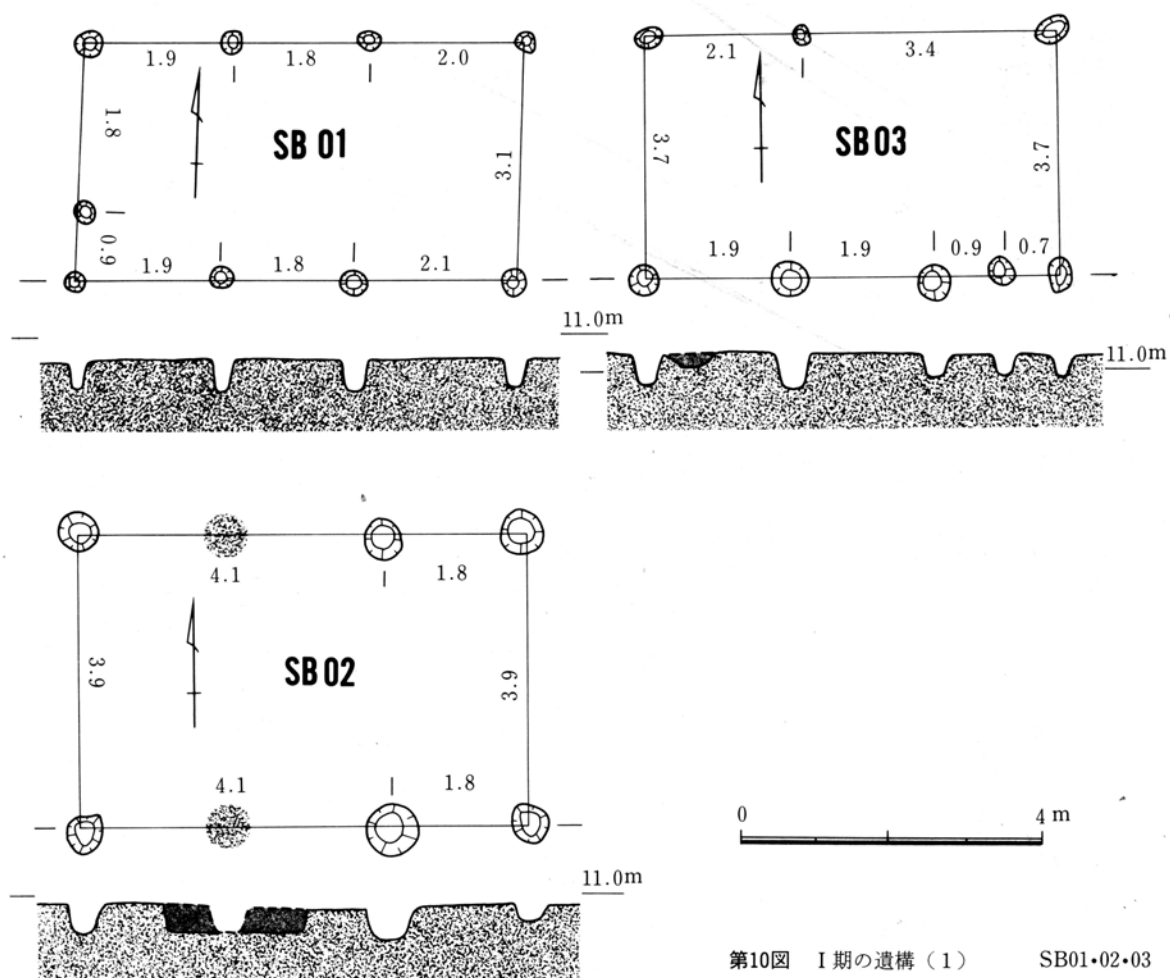
SB01 南北の桁、東西の梁は平行するが、両者は直交せず、平面はやや平行四辺形となる。桁行の柱間寸法は、両脇に比し、中央部分がやや狭い。

SB02 中央西寄りの攪乱部分により柱穴が失なわれるが、本来的には3間×1間の建物と考えられる。柱間寸法はよく整っており、各柱穴も他の2棟より大きく、面積も最大となる。

SB03 南北の桁、東西の梁は平行するが、柱間寸法はやや不正確。梁行はSB01とほぼ一致するが、桁行がやや短かく、3棟のうちでは面積が最少となる。

(2) 柵

3カ以上の相似する柱穴が直線的に並ぶものを「柵」とした。柱穴は、いずれも素掘りのままで、根石等を有するものはない。また、上部構造は全く不明であり、「塀」あるいは何らかの建物の一部で



第10図 I期の遺構 (1) SB01・02・03

ある可能性も否定し得ない。

出土遺物が少なく、時期の決定は困難であるが、その方向性から、いくつかのグループにまとめることができる。

東西方向A群 — E-2 ~ 3°-N SA01・02

B群 — E-23 ~ 25°-N SA03 ~ 06

南北方向A群 — N-40°-W SA07・08

これらのうち、東西方向A群と南北方向A群は、対応する関係と考えられるが、やや西偏するこの方向性は、自然地形に沿ったものであり、近世でも三の丸地内の基本となる方向軸となっている。また、E-23 ~ 25°-Nの方向は、近世では例がなく、I期独自のものとすることができる。

(3) 溝 (第11図)

屈曲するものが多く、方向性からの区分は困難であるが、規模等から3グループにまとめることができた。

A類 — 幅6m、深さ3mを越えるもの。 SD01

B類 — 幅、深さとも、1mを越えるもの。 SD03 ~ 09

C類 — 幅1m以下で、深さも0.5mに満たない比較的浅いもの。 SD02・10 ~ 13

このうち、A類の大溝は、その規模から明らかに、城郭の「堀」に比定し得るものであり、存在自体が注目される場所である。

B類の溝は、幅に比し、掘り方が深いという共通性があり、排水だけでなく、ある程度の防禦機能をも有していたとすることができる。また、SD04 ~ 07は、いずれも埋土中に、基盤である黄色・黄白色のシルト、粘土の小ブロックを多量に含む層があり、人為的に埋め戻された形跡が顕著である。

C類の溝は、防禦的な機能は考えられず、小規模な地割り、あるいは、一般的な排水施設として考えることが可能である。

SD01 城郭の堀と考えられる大溝、当初、幅5m深さ3m程で、断面V字形を呈する「薬研堀」として掘削されたものが、後に、東半部分について、南側へ1.5m程拡張し、幅6.5m程の「箱堀」に改修されている。埋土下層は粘質が強く、ある程度の滞水状態が推定し得る。埋土中からは、15C後半 ~ 16C 後半の遺物が多く出土しており、文献上知られている「那古野城」の堀の一部に比定し得る。

SD03 南に開口するコ字状の溝、層位的に、SD01に先行するものであることが確認できる。埋土の様相がやや異なるが、本来的には、SD04と接続していたものと考えられる。

SD06・07 溝よりもむしろ「土坑」に近い形状を呈する、埋土は、いずれも基盤の黄色シルト・粘土の小ブロックを含む層が大半を占めており、溝としての開口期間は非常に短いと考えられる。南北の土坑(SK44・57)と組み合わせられ、機能していた可能性もある。

SD08・09 わずかな切れ目を残し、直線的にのびる2条の溝、SD01と直交するのが同時期の存在ではなく、これより先行し、SD03よりは新しい。

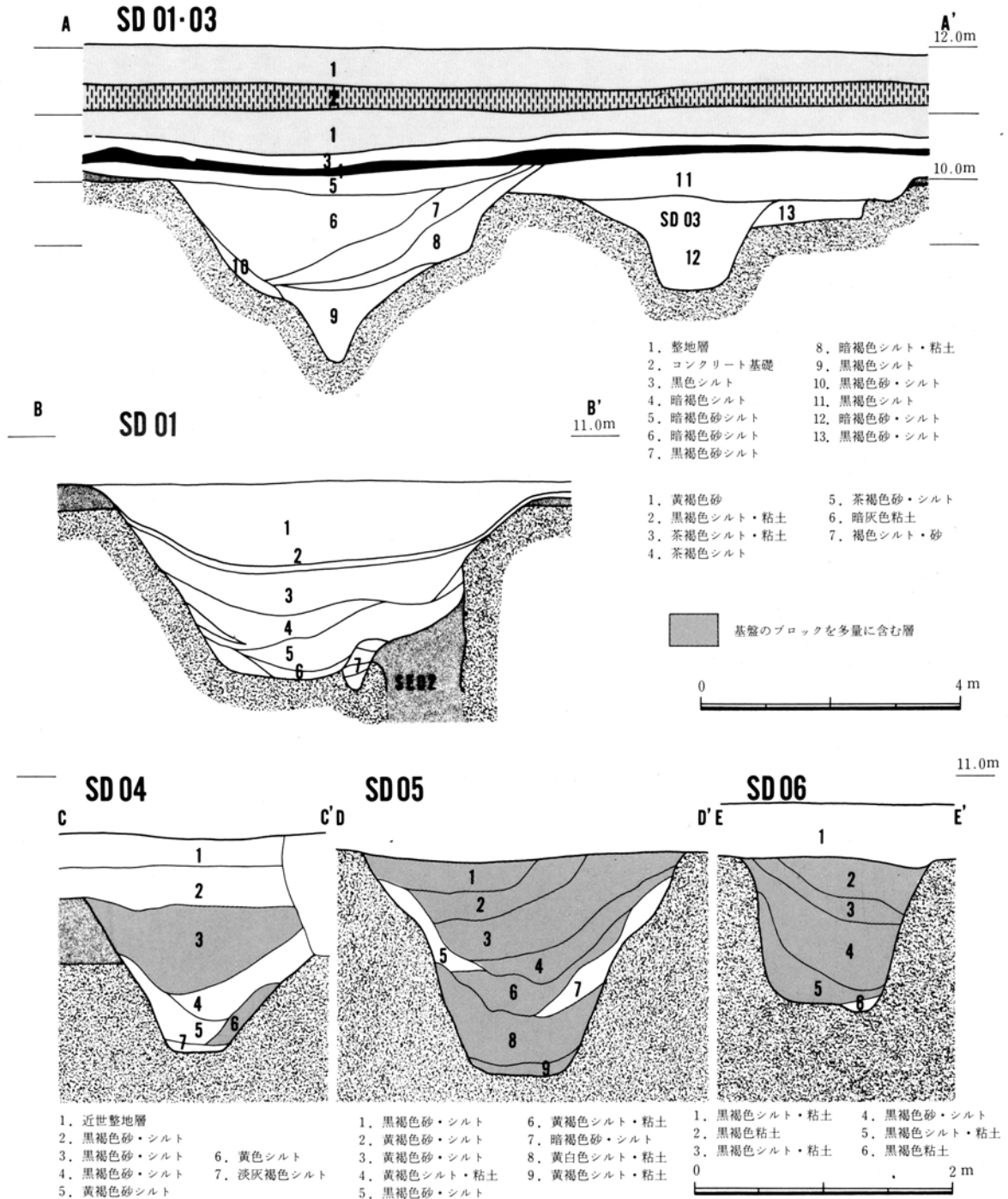
SD10・11 ゆるやかに蛇行する浅く、不安定な溝、SD01に切られるが、本来的には連続するものであり、SD03と同時期の存在と考えられる。

(4) 井戸

5基検出したが、崩壊の危険性があり、完掘し得たものは1基もない。確認できる範囲では、桶等の施設はなく、全て素掘りのままであった。

(5) 土坑

溝SD01より南側に集中する傾向がみられるが、遺物の出土量は多くない。用途が特定し得ないものがほとんどであるが、SK43からは鞆の羽口片が出土している。



第11図 I期の遺構(2)

SD01・03・04・05・06

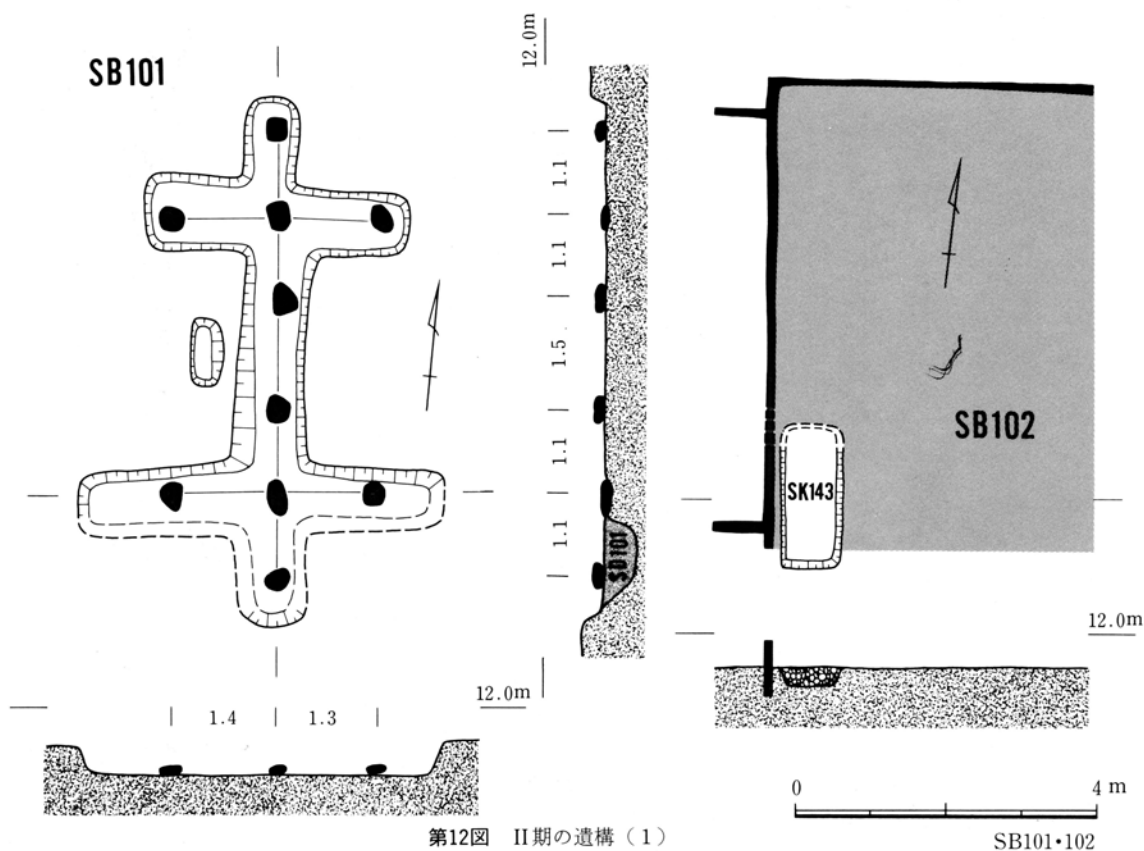
3. II期の遺構

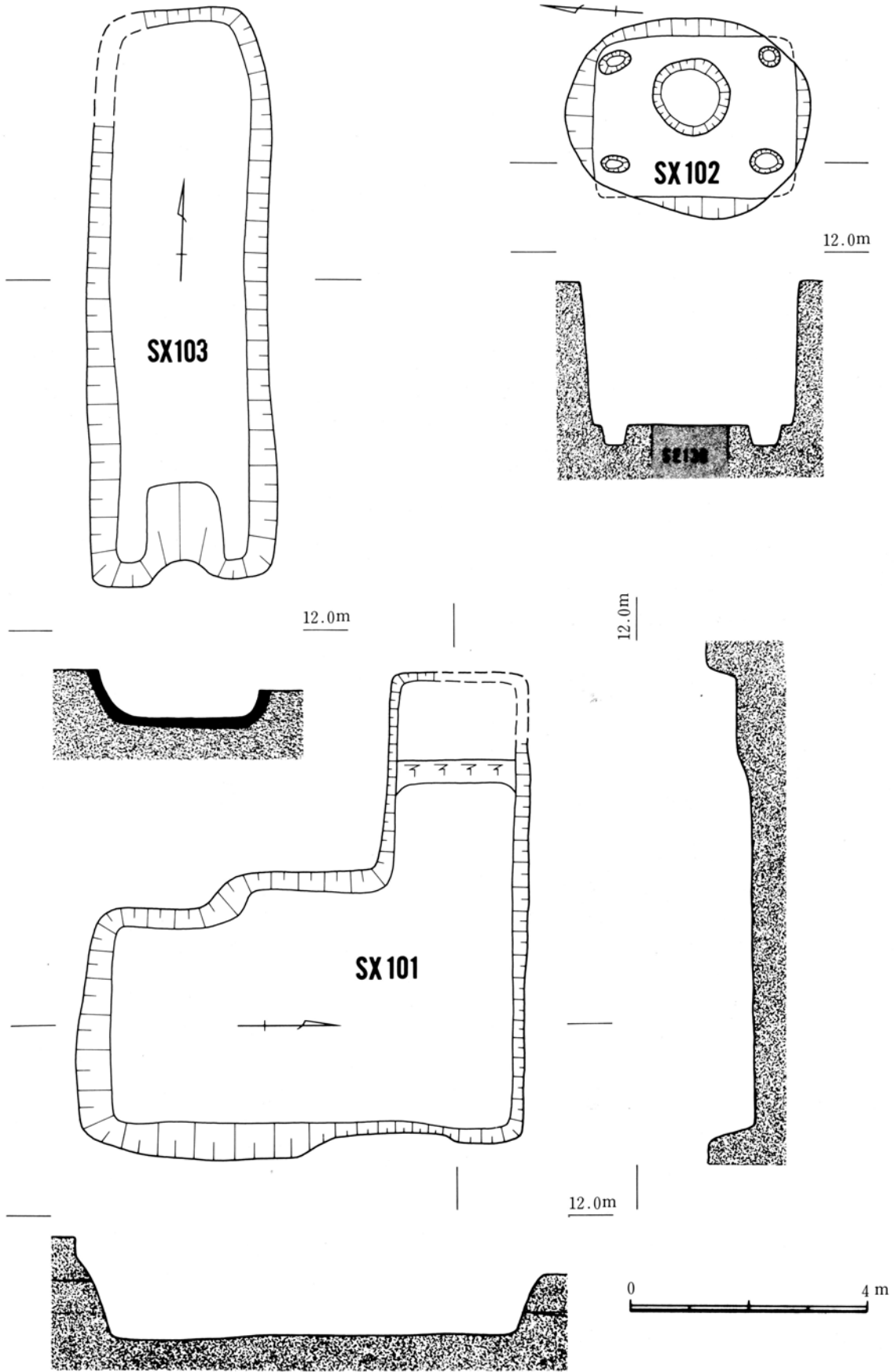
(1) 建物 (第12図)

今回の調査地点は、全てが武家屋敷地内にあたり、多種多様の建物の存在が予想された。調査でも、礎石あるいはその抜き取り穴と考えられる遺構を若干検出したが、相互の関係が把握できず、ある程度具体的な形を示すことができるのは、やや特殊と思われる2例のみであった。

S B 101 偏平な円礫を「サ」字状に10個配列する。本柱の両側に控柱を備えた「門」の遺構と考えられる。礎石上面のレベルは11.7m程であり当時においても、地表に露出していたものではない。S D101の埋没以降の築造である。

S B 102 淡褐色を呈する漆食による厚さ12~15cm、残存する高さ70cm程の建物基礎。検出し得たのは、西・北側のみであるが、端部はいずれも破損しておらず、南・東側は当初より存在しなかったものと考えられる。規模は、東西4.2cm、南北6.2m程で、京間で2間×3間程の空間を想定し得るが、基礎の形状から、これ自体が独立した建物ではなく、さらに大きな建物の一部を構成していた可能性が強い。基礎の内側には、半ば破碎された貝殻が敷かれ、特に、土坑S K143は、埋土に貝殻を多量に含む。建立時期は明らかではないが、三の丸廃絶時まで存続していたと思われる。





第13図 II期の遺構(2)

SX101・102・103

(2) 堅穴施設 (第13図)

構造的に、床面が地表下となる様な建物・施設を「堅穴施設」とした。主体部が、完全に地中となる。いわゆる「地下室」の他、半地下式の構造を有する施設も想定し得る。

S X 101 東西8.0m、南北7.5mを測る大形の施設。西側突出部の床面が一段高くなっており、出入口と考えられる。現況での深さは、最大1.8m、当時の生活面からの換算では、2～2.5m程となるが、この程度では「掘抜き」は不可能であり、天井部を木造とするか、あるいは、これ自体が地上の建物の床下の施設であったと思われる。

廃絶後は、廃棄用の土坑として使用されており、炭化物、瓦片、漆食片と共に、18C～19C前半代と考えられる陶磁器類が大量に出土している。

S X 102 壁の崩壊が激しく、開口部は楕円形となるが、床面は、3.3×2.7m程の方形となり、四隅に柱穴を有する。現況でも床面の隅部分は、開口部より地中に張り出しており、築造当初は、全体的に、「袋状」の掘り方であったと推定し得る。検出面より床面までは2.8m、当時の生活面までは3m以上あったと思われ、四隅の柱で壁面と天井部を補強すれば、完全地下式の構造も可能であったと考えられる。

床面には、厚さ数cmの白色粘土が全面に敷かれており、これを除去すると井戸(S E 136)を検出し得た。両者は同時期の存在とは考えられず、井戸跡の湿気を避ける為に粘土が貼られたものと考えられる。廃絶後は一気に埋められている。

S X 103 長辺9.7m、短辺3.0m程の長方形の土坑。深さは当時の生活面より1.8m程度。底面には、鉄分の沈着がみられ、半ば「鬼板」状となるが、その上に褐色シルト・砂を10cm程埋め戻し、表面に黄褐色の粘土を張りつけ補修(?)を行なう。長期にわたる滞水状態を想定できることから、一般的な堅穴施設ではなく、「用水溜」的な機能を推定し得る。埋土は一気に搬入されたと考えられる褐色砂であり、三の丸廃絶に伴い埋戻されたものと考えられる。

(3) 柵

柱穴に根石を伴うものと、素掘りのままのものがある。上部構造は単なる「柵」ではなく、板塀、あるいは土塀になるものと考えられ、I期と同様、建物の一部を構成している可能性もある。

方向性から、東西・南北方向共、大きく2群に区分できるが、A群がとる5～6°西偏する方位は、三の丸地内では現代でも用いられており、近世を通じて支配的な地割方向であったといえる。

群	方向	建物・堅穴施設	柵 列	溝	
東 西	A	E-5～6°-N	S X 102	S A 101～103・105・108・	S D 101・102・104・105
	B	E-1～2°-N		S A 104・107	S D 106
	その他			S A 106 (E-29°-N)	S D 103(E-9°-N)
南 北	A	N-5～6°-W	S B 101・102, S X 101,	S A 111～114・117	S D 114～117
	B	N-1～2°-W	S X 103	S A 109・110・115・116	S D 107～111・113,
	その他			S A 118(N-23°-E)	S D 112

第4表 II期の遺構の方向性

S A 103 溝 S D 102 とほぼ位置を同じくする柵列。最終的には溝の埋土中に、径30cm程の偏平な円礫が1.8mの間隔で並ぶ形態となるが、溝中にはこれ以外にもレベルを異にする礎石らしい円礫がみられ、S A 103以前においても、礎石を有する同方向の柵列が存在したものと思われる。

S A 109・110・115 ほぼ一直線にのびる一連の柵列群。柱間隔は、S A 109で1.8m、S A 110・115で1.5m程となる。

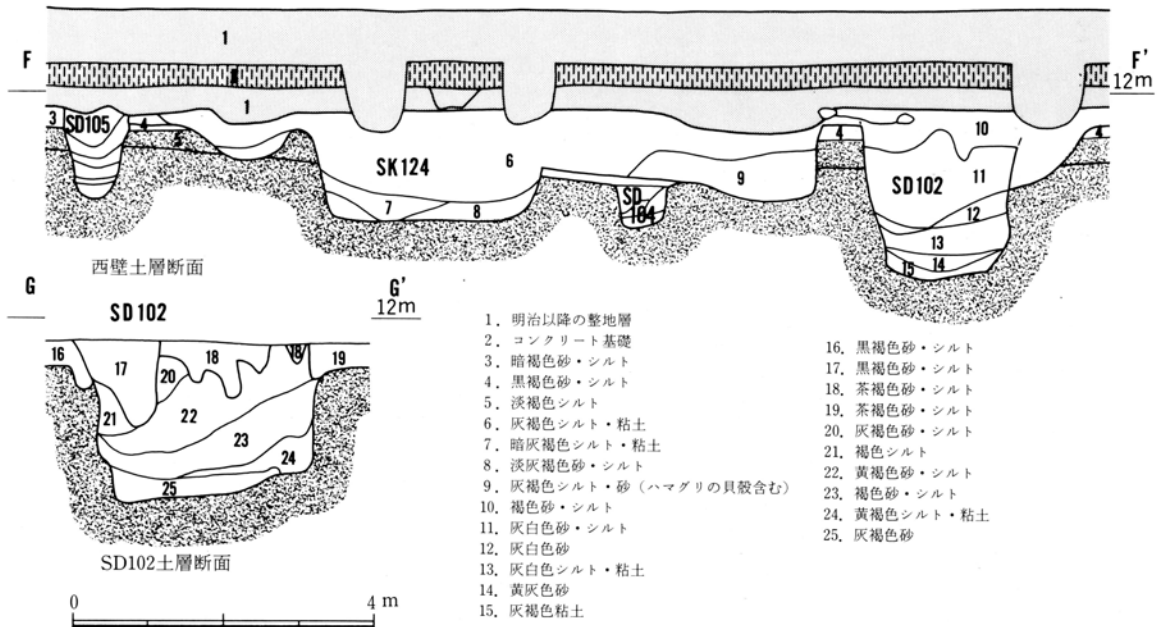
(4) 溝 (第14図)

排水施設としての「溝」を前提とするが、遺構としては、柵列、あるいは建物自体の基礎部分の掘り方が含まれる可能性もある。

柵列と同様、東西・南北方向共、A・B 2群に大別し得る。全体では東西方向が6条に対し、南北方向が8条検出されたが、南北に長い調査区の形状を考えれば、南北方向の溝の密度が著しく高いといえる。

S D 102 東西方向の比較的大規模な溝。埋土下部に粘土層を有することから、当初は滞水状態にあったことが知られるが、後に埋め立てられ、ほぼ同じ位置にS A 102が設けられる。下層より、瀬戸・美濃大窯製品が出土しており、三の丸築造後、間もなく開削されたものと思われる。従って、この部分は、当初は「溝」として、後には「柵 (又は塀)」という形でほぼ近世を通じて、調査区の南と北を隔てる障壁となっていたと考えることができる。

S D 107~111 ほぼ直線上に断続的にのびる一連の溝群。並列するS A 101~111と対応し、同時期の存在と考えられる。大溝S D 01の埋土を覆う第III層よりさらに上層から掘り込まれるものの、S D 102を含めた、II期のどの遺構よりも古いことが切り合い関係から確認できる。



第14図 II期の遺構 (3)

西壁・SB102 土層断面図

(5) 井戸 (第15図)

調査区全体で、35基確認されたが、底部まで完掘し得たものはない。内部構造は、近代以降の掘削の可能性のあるS E09が漆喰で側壁を固めていた他は、全て素掘りのままであった。ただし、名古屋台地上の出土例では、比較的地盤の安定している熱田層上部のシルト・粘土層部分を素掘りとし、湧水点付近のみ桶を用いる形式のものが知られており、同様の構造をとっている可能性は高い。掘り方の形状からA・Bの二類に区分し得る。

A類 — 開口部の平面形がほぼ正円となり、直線的に掘り進められたもの。 S E 101・102・103・104・他

B類 — 開口部の平面形が楕円形となり、掘方の途中に段を有するもの。 S E 119・122・128・130・他

(6) 転置甕 (第15図)

土坑中に、底部に穿孔した常滑窯産の大形甕又は鉢を伏せた状態で配置した一連の遺構、穿孔は全て焼成後に為されており、この施設に用いられた甕、鉢類は一般製品の転用と考えられる。これは、穿孔部分から汚水を流し、甕内において、地中への自然浸透を図る一種の汚水処理施設と考えられ、この方法が特異に発達したものがいわゆる「水琴窟」となる。

転置甕は、その処理能力からみて、台所など、一時に多量の排水を流す部分での使用は困難であり、断続的に少量の汚水を出す、「手水鉢」等と組み合わせられ、設置されたものと考えられる。

S X 111 径1.0m程の土坑中に、径62cm、深さ25cm程の鉢を設置する。

S X 112 径0.6m程の土坑中に、径35cm、深さ30cm程の甕を設置する。

S X 113 土坑中に径45cm程の鉢を設置し、さらに、底部の穴に水が集まり易いように周囲を漆食ですりばち状に固める。漆食部分には装飾の為、拳大の自然円礫が1個はめこまれる。

S X 114 常滑窯産の甕を配置し、さらに、その上に径30cm、深さ20cm程の大形の植木鉢を底部を上にした状態でかぶせ、二重構造とする。甕胴部には、棧瓦が立てかけられる。

(7) 土坑 (第15図)

大小様々なものがあり、用途も明らかでないが、形態等から若干の分類が可能である。

A類 — 面積に比し、比較的浅い形状のもの。近接する何基かが「群」を構成することが多い。 S K 130・112・111・113

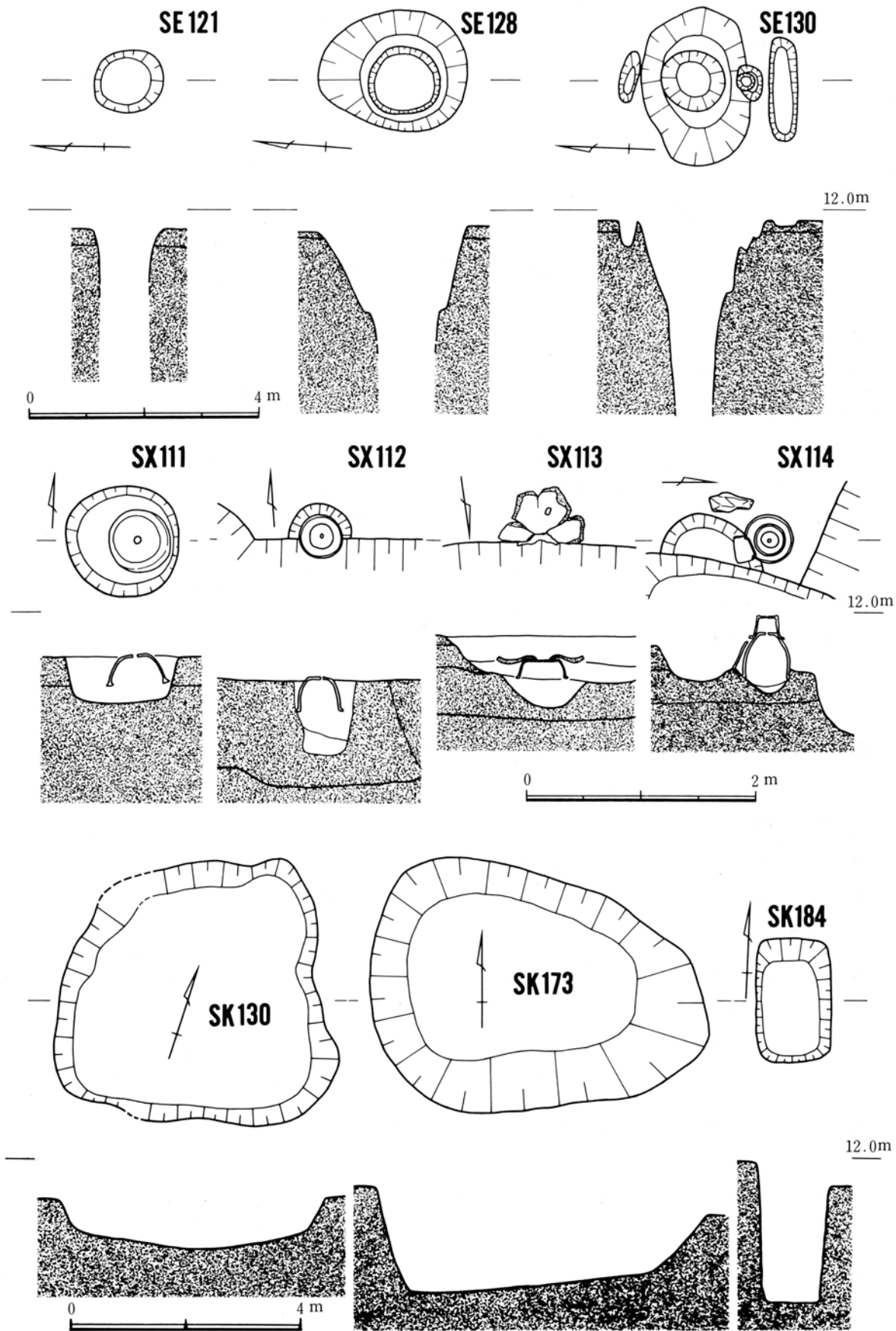
B類 — 掘方が比較的深く、壁面の傾斜も急なものが多い。単独で存在する傾向が強い。 S K 145・147・173

C類 — 比較的小型でありながら、掘方が極めて深いもの。 S K 177・184

これらのうち、A類については、埋土中に、陶磁器・土器類等を多量に含むものが多いことから、「廃棄土坑」と考えられ、小型のものを含め、「土坑」の大半はこれに属すると思われる。

B類は、相当量の遺物が出土するものの、その量はA類には遠く及ばず、「廃棄」を目的として設けられたとは思われない。用途は特定し得ないが、比較的大形のものが多いことから、熱田層中の「粘土」を採集する為の土取り穴、あるいは本来は何らかの堅穴施設であった可能性もある。

C類は、平面が円形とならないこと、また底部まで完掘し得たことから「井戸」との識別が可能であった。埋土中には、遺物を多く含むが、B類同様、廃棄を目的として掘られたものとは考えられない。現在のところ、用途は想定し得ない。

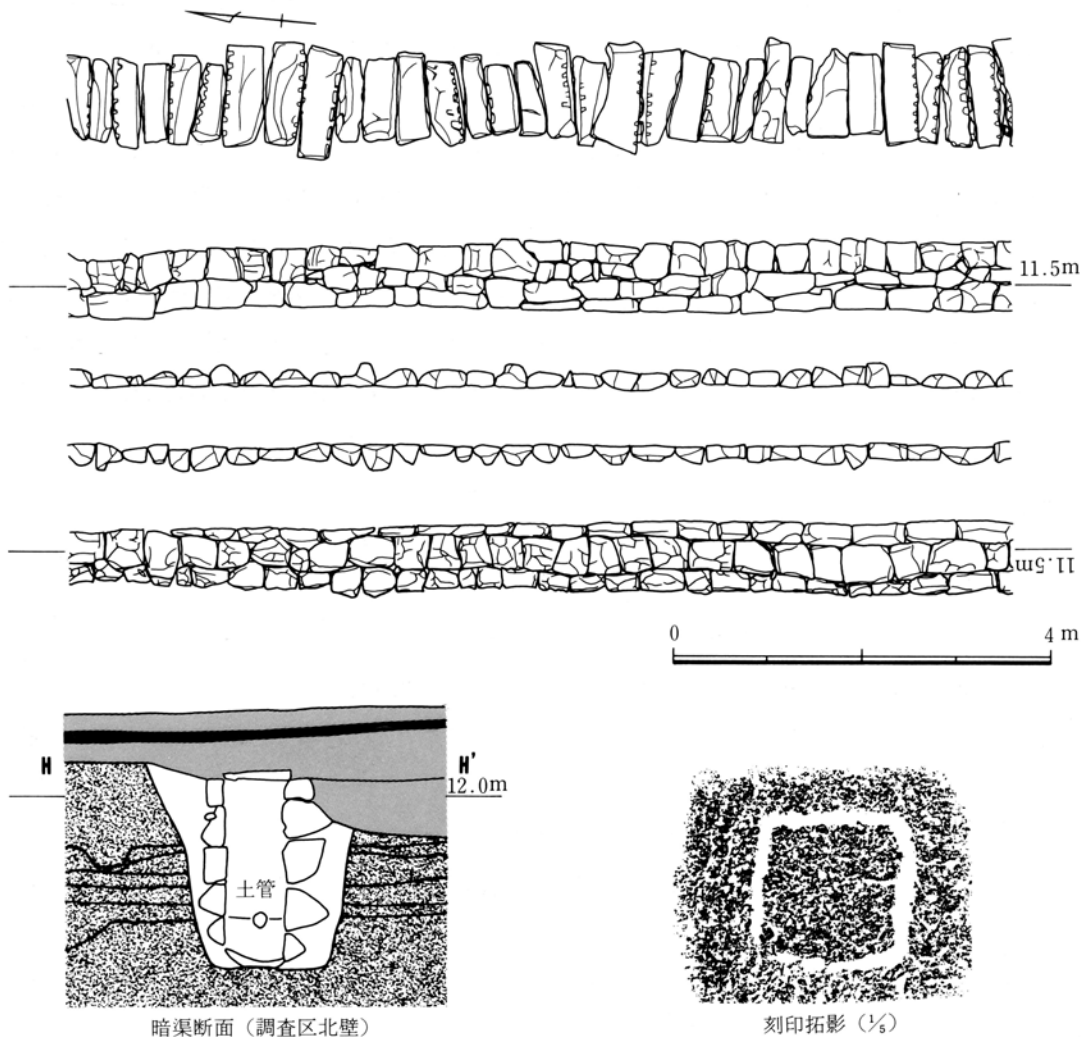


第15図 II期の遺構(4) SE121・128・130・SX111・114・SK130・173・184

4. 近代の遺構

明治期以降の遺構として、調査区を南北に縦断し、二の丸南側の堀への排水機能を有する暗渠がある。これは、側壁に花崗岩又は、硬砂岩の「河戸石」を3段(南端)~5段(北端)積み、底部を漆喰で固め、天井部を長さ1m、幅40~50cm、厚さ15~20cm程の花崗岩の切石で蓋をするものである。層位的には、近世のあらゆる遺構よりも新しく、また、北半では内部に陶製の土管を布設し、付属する枡形等には、コンクリートによる補修もみられることから、明治期以降築造され、最近まで機能していたものと考えられる。

しかし、一方では、名古屋城二の丸庭園の発掘調査時に、同様の石材を用い、類似の構造を有する排水用暗渠が発見されており、庭園に付属する施設として理解されていること、あるいは、側石のうちに、名古屋城の石垣と同様の刻印を有するものがあることから、この暗渠についても、三の丸当時の暗渠に大規模な改修を加えたか、移設をしたものである可能性が高いといえる。(梅本博志)



第16図 近代の遺構

石組暗渠

III 遺物

1. I期の遺物

概要

I期の遺物はそのほとんどが無釉、施釉陶器⁽¹⁾、土器であり、これらは主要器種である碗、皿、鉢、鍋等の組成の変化で2期に大別できる。その概要は下記の通りである。

I-1期の主要構成器種は山茶碗、灰釉系陶器と呼称される無釉陶器の碗・皿・鉢と施釉陶器の鉢、土器の皿・鍋からなる。供膳形態の碗・皿はほとんどが無釉陶器であり、胎土は緻密で締まっている美濃産のものである。全器種の中で無釉陶器の碗・皿の占める割合が一番高い。わずかに見られる土器の皿は手捏成形であり、轆轤成形のものは見られない。鉢には無釉陶器の捏鉢と器高が低く皿状になる施釉陶器とがある。土器の鍋は口縁に短い齔を持つ。

I-2期は陶器の中で施釉陶器の占める割合が増す。新たに主要器種として施釉陶器の碗、皿、土器の釜が加わり、また少量ではあるが青磁、白磁、染付けの碗・皿が見られる。無釉陶器の碗にかわって施釉陶器の碗、高台が削り出され口縁が外反して立ち上がるいわゆる「天目茶碗」が見られるようになり、碗の主体を占める。皿は種類に富み、無釉陶器の皿は、1期のもの比べ、器高が高く内面に螺旋状の沈線か突線、または同心円状の突線が入る。他に口縁の内外面に施釉した皿や全面施釉の皿も見られる。土器の皿は手捏成形のものに代わって、轆轤成形のものが主流を占める。無釉の鉢は少なくなり、代って全面施釉され内面に摺目を持つ播鉢が出現する。土鍋は齔の付くものに代り口縁内面に吊手をもつ内耳鍋が出現する他、土釜も新たに数種出現し、土製の煮炊具が旺盛を極める。

各期は遺物の特色からI-1期は14世紀後半代、I-2期は15世紀から16世紀中頃までの時期が考えられる⁽²⁾。さらにI-1期は2段階、I-2期は3段階に細分できる。

主要器種

I期の主な出土遺物を以下のように分類する。各器種は碗A~D、皿A~L、鉢A~Cが陶器、皿M~R、鍋A・B、釜A~Cが土器である。

- 碗 A 体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。高台は非常に低く断面三角形。無釉。
B 体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。無高台。無釉。
C 体部はわずかに湾曲しながら開き、口縁は外反し直立する。高台は厚く直立する。全面施釉、または外面下半無釉。
D 体部は湾曲しながら立ち上がる。高台は断面四角形。内面及び外面上半施釉。
- 皿 A 体部はわずかに湾曲しながら立ち上がり、内面には螺旋状、または同心円状の突線が入る。口縁は短く直立する。無高台。無釉。
B 体部はわずかに湾曲し口縁は外反する。内面には同心円状の突線が巡る。無高台。無釉。
C 体部は低く、無高台。無釉。
D 体部はわずかに湾曲し口縁は外反する。無高台。口縁内外面のみ施釉。

- E 体部は湾曲し口縁は外反する。高台は断面四角形。ほとんどが全面施釉。
- F 体部は湾曲し口縁はわずかに外反する。高台は低く断面三角形。全面施釉。
- G 体部は湾曲し口縁は外反する。底部は基筒底。ほとんどが全面施釉。
- H 体部は外反して立ち上がる。高台は断面四角形。全面施釉。
- I 体部は湾曲して立ち上がる。底部には基筒底。全面施釉。
- J 体部は湾曲して立ち上がる。体部内外面が菊花状になる。全面施釉。型押し成形。
- K 体部は湾曲して立ち上がる。口縁はヒダ状になる。高台は低く、断面三角形。全面施釉。
- L 体部は湾曲して立ち上がる。内面には舌状の張り付けがある。無高台。全面施釉。
- M 体部は湾曲し口縁は外反する。手捏成形。
- N 体部は外反して立ち上がる。口縁は肥大する。手捏成形。
- O 体部は湾曲して立ち上がる。手捏成形。
- P 体部は非常に低い。底面に指圧痕がみられる。手捏成形。
- Q 体部は湾曲し口縁は外反する。轆轤成形。
- R 体部は湾曲して立ち上がる。轆轤成形。
- 鉢 A 体部は湾曲して立ち上がり、口縁は受口状になる。器高は低く皿状。団子状の脚が付くものもある。
- B 体部はやや外反して立ち上がる。口縁は斜目に面取られ、沈線が施される。注口を有するものもある。
- C 体部はやや外反して立ち上がる。注口がつくものもある。内面には摺目が付く。
- 鍋 A 体部は偏球状で最大径は体部の下方にある。口縁は内湾し、外面に短い鏝が付く⁽³⁾。
- B 体部は直立気味か内湾して立ち上がる。底部はわずかに丸味を持つ。口縁内面に縦方向の吊手が付く。乳頭状の脚が付くものもある。
- 釜 A 体部は筒状で肩が張り、肩の部分に横方向の吊手が付く。底部は丸味を持ち、乳頭状の脚が付く。口縁は直立する。
- B 体部は算盤球状で体部の中位に鏝が付き、鏝の部分が最大径になる。肩の部分には縦方向の吊手が付く。口縁は直立する。
- C 体部はボール状を呈する。口縁外面に鏝が付き、鏝の部分が最大径になる。

1. I-1期の遺物

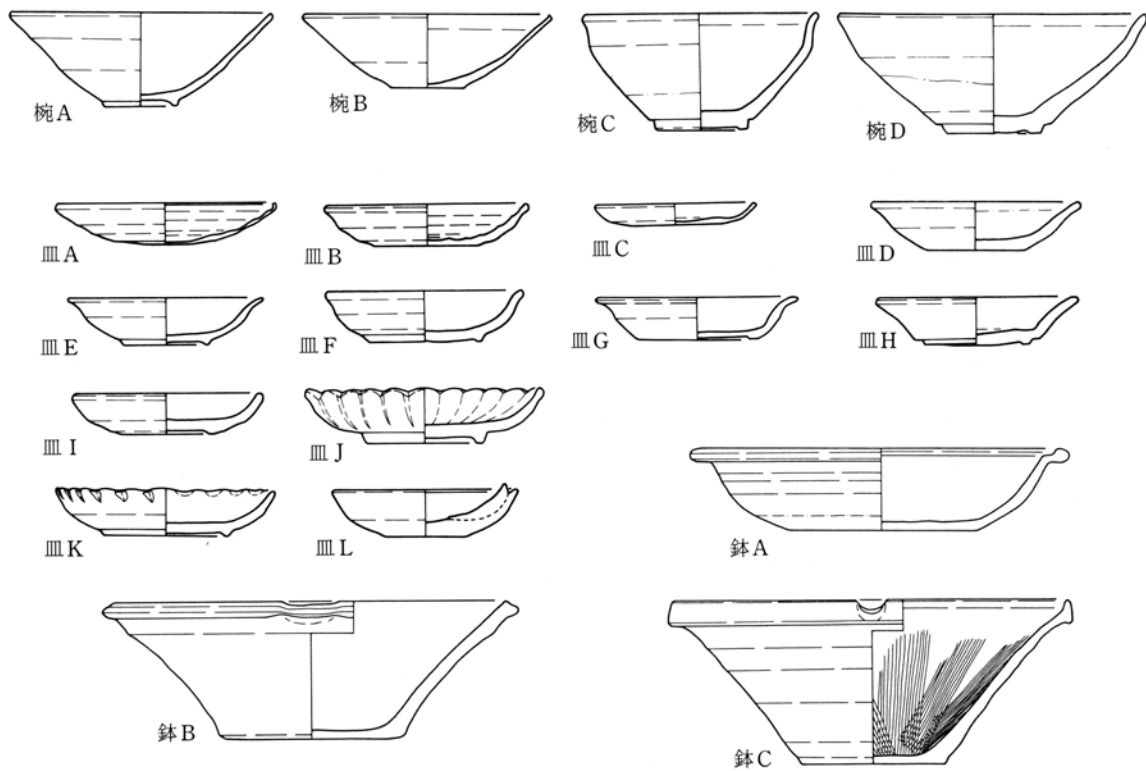
I-1期の遺構はSK13・17・29・32がある。遺物は碗A、皿C・M・O、鉢A・B、鍋Aが基本的な構成器種である。無釉の陶器が圧倒的に多く、わずかに鉢Aのような施釉の陶器が見られる。この時期は各々の器種の形態、組成、法量の変化で3段階に分れる。

(1) I-1期1段階の遺物

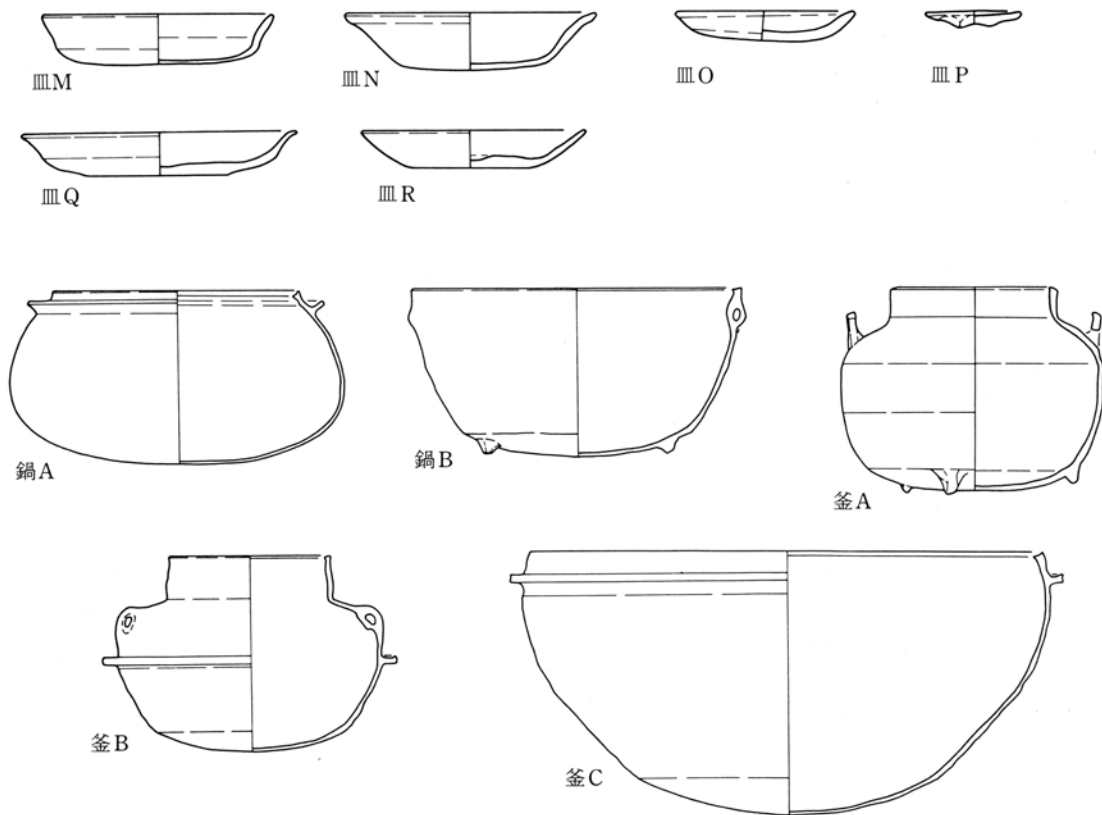
碗A、皿C・M、鉢Aからなる。碗Aは口径が13.6cm、底径が4.0cm、器高が4.9cmを測る。皿Cは口径が8.6cm、底径が1.5cm、器高が1.5cmを測る。

SK17(第18図-1~4) (1)は碗Aで底径は小さいが器高、口径ともに大きい。(2)は皿Cで1.5cmと器高が高い。(3)は皿Mであり、口縁に強い横ナデを施し、やや受口状をなす。

陶器



土器



第17图 主要器種模式图 (I期)

(4)は鉢Aで、口縁はまだ顕著な受口をなさない。

(2) I-1期2段階の遺物

碗A・B、皿C・M・O、鉢A・B、鍋Aからなり、新たに碗Bが出現する。碗Aは前段階と同法量ものに加えて法量が小さいものがみられ、口径が13~14cm、底径が3.8~4cm、器高が4~4.3cm程度のもが多い。皿Cも前段階と同法量ものに加え、器高が低く0.7cmを測るものが出現する。鉢Aの口縁は明確な受口をなす。

S K 29(第18図5~8) (5)は碗A。体部下半の屈曲が強く底部が大きい。(8)は浅い鉢になり、体部はわずかに湾曲して立ち上がり口縁は肥大する。内面下位に1条沈線が入る。内外面とも緑色の釉がかかる。中国産の陶器である。

S K 13(第18図9~26) (9~12)は碗A。(9)は体部の湾曲が強く高台も高い。他の碗に比べ(11・13)は法量が小さい。(14)は青磁の碗。畳付の部分のみ無釉。(15~17)は皿C。(17)は他のものに比べ器高が低い。(18)は皿Mに比べ底部が丸味を持ち、胎土は白色を帯びている。(22)は鉢Aであるが全体的に小さい。(24)は鉢B。体部外面に指圧痕を残す。内面は使用のため磨減が著しい。(25・26)は鍋Aである。

S K 32(第18図27~33) (27)は碗A。(28)は碗Bであり高台がない。(29・30)は皿Cである。(31・32)は共に短頸壺で(31)は外面に灰釉が施され、菊花が印刻される。(32)は灰釉が施され、草花文と思われる図柄が線刻される。

2. I-2期の遺物

I-1期にかわってI-2期は施釉陶器が中心になる。各器種では碗がAからCへ、皿がC・MからD・Qへ、鉢がBからCへ、鍋がAからBへとかわり、供膳具、調理具、煮炊具共全般にわたって、大きな変化が見られる。

さらにI-2期の中の各段階で組成、形態の変化があり、前記のようにI-2期は3段階に区分される。各段階の遺構は以下のようになる。

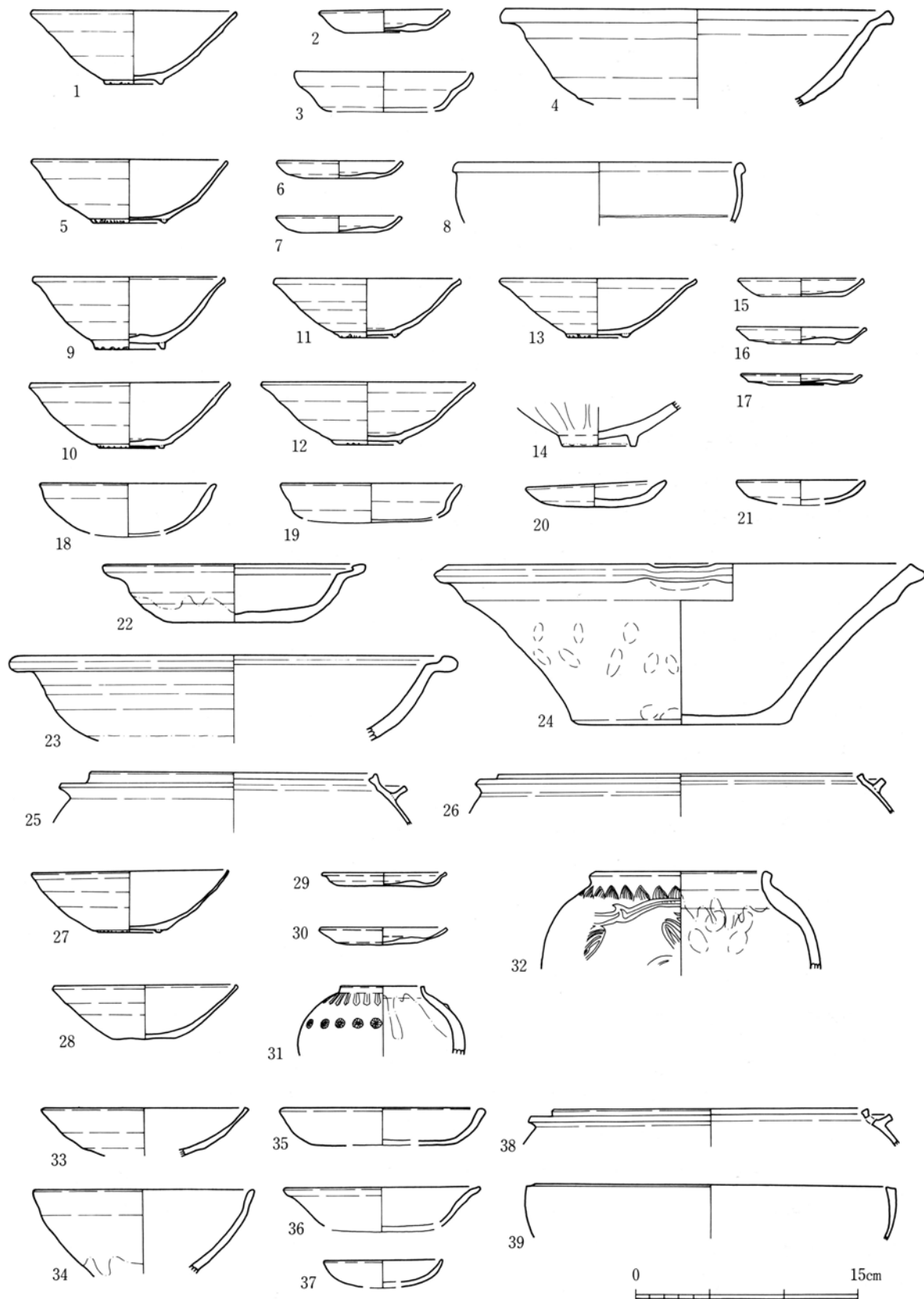
I-2期1段階→S K 20・31・44・51・58、S D 03・04・05

I-2期2段階→S K 47・57・66、S E 05、S D 08・09

I-2期3段階→S D 01

(1) I-2期1段階

この段階までI-1期にあった碗A、皿C、鉢Bが残存する。碗Aは体部が湾曲して立ち上がり法量は口径が10~12cm、底径が3~4cm、器高が3cmとさらに小さくなり、前段階より高台はさらに低くなる。碗Bは器高が低くなり体部が大きく開く。碗A・Bとも器高のわりに口径が大きく皿状になる。碗C・Dが出現するがまだこの段階では数的に少ない。碗Cは口縁の直立する部分は短く高台内の削り込みが浅い。皿Cは形態、法量では変化がないが量的に少なくなり、代わって無釉陶器では皿Aが、施釉陶器では皿Dが出現し、両者で器種の大半を占める。土器は皿Mが少なくなり、皿Oが残るが、1期のものに比べると法量が小さくなる。轆轤成形の皿Qが出現する。鉢Bは口縁の沈線が明確になり、口縁端部が鋭く短く垂下する。内面に摺目をもつ鉢Cが出現し、量的にも鉢Bを凌ぐ。鉢Cは口縁内面に受口状に突帯つくものと、口縁が短く直立するものの2つに大別される。鍋Aはほ



第18図 I期の遺物(1)

I-1期 SK17・29・13・32・51

とんど見られなくなり、鍋Bの他に煮炊具として釜A～Cが新たに出現する。

S K 51 (第18図-34～39) (33)は椀A。外面に泥粧が目立つ。(34)は椀Cに比べ口径が大きく体部が開く。所謂、平椀。(35)は皿M。口縁に成形の際の接合痕が見られる。(36)は皿Nで手捏成形。(37)は体部が短く湾曲して立ち上がる。口縁には油煙が付着する。(38)は鍋A。口縁に焼成前の穿孔が1カ所見られる。(39)は吊手は欠損するが鍋Bである。

S K 31 (第19図-40～44) (40)は椀A。内底面はへこみ、底部は非常に薄い。(43)は白磁の椀。口縁が強く外反する。(45)は轆轤成形の土器の皿。口縁に油煙が付着する。(46)は鉢C。口縁が内側に突出し、口縁外面に使用時の擦痕が付く。

S K 44 (第19図-47～55) (47)は椀B。外面に泥粧が付着する。(49)は土器の皿で口縁に油煙が付く。(50)は皿Qの底部である。(51)は小型の鉢。団子状の脚が3カ所付く。香炉。(52)は筒状の鉢。外面に横方向の吊手が付く。(53)は鉢B。内面は磨滅している。(55)は摺目は無いが鉢Cである。

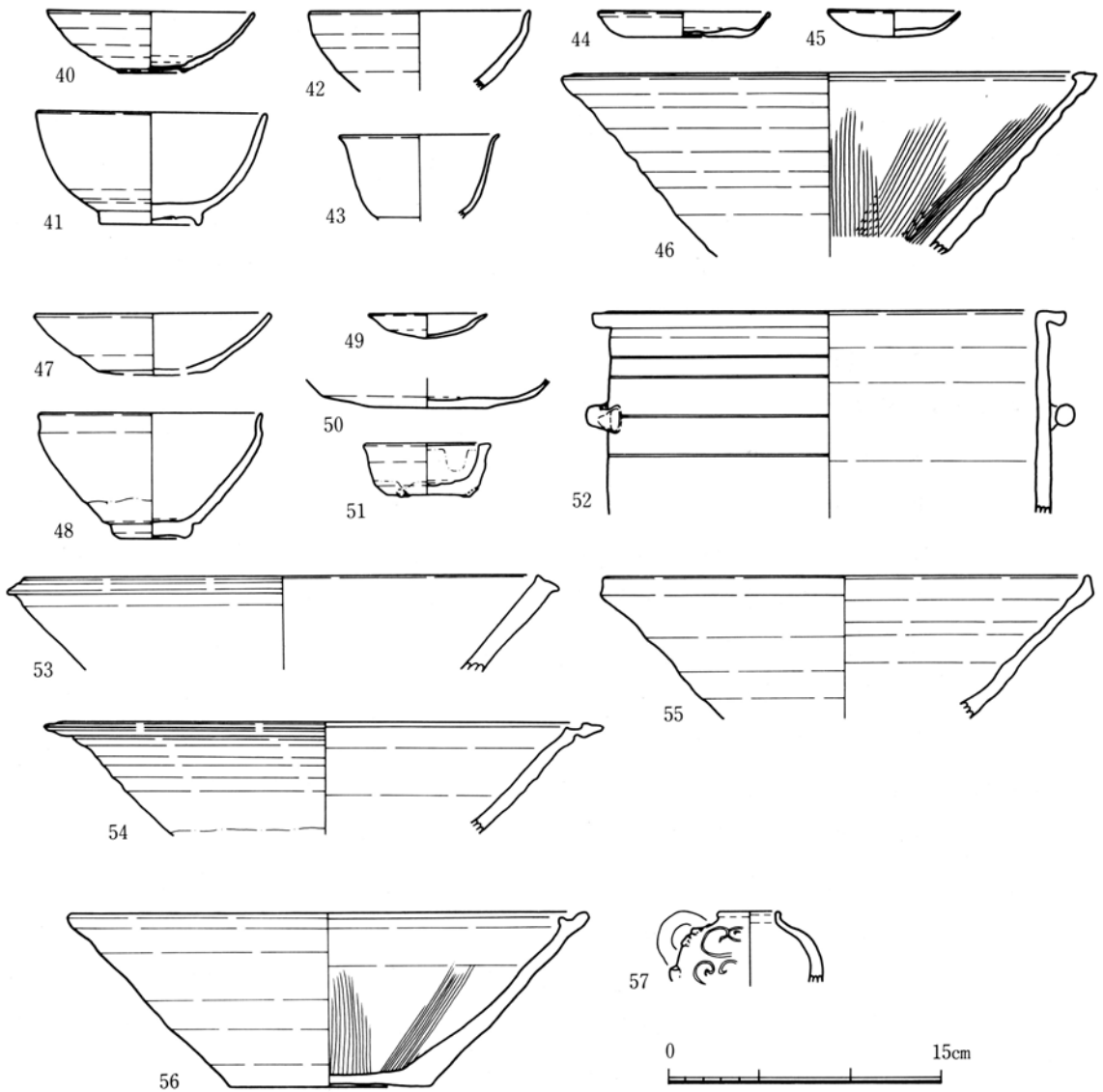
S K 20 (第19図-56・57) (56)は鉢C。摺目が磨滅し、口縁内面の突帯と底部外縁が擦滅する。(57)は瓶。把手が欠落する。水注。

S D 03 (第20図-58～76) (58)は椀A。外面には泥粧が付着し内底面は浅くへこむ。高台は非常に低い。(59・60)は椀B。器高の割には口径が大きい。(61)は小型の鉢。高台は削り出されている。(62)は皿A。(63・64)は皿B。(63)の内面の圈線は3本ある。(66)は小型の壺。茶入。(67)は小型の瓶。水滴。(68)は瓶。花瓶の口縁になると思われる。(69)は鉢A。口縁は水平に面取られ中央がややへこむ。(70)は鍋B。体部はわずかに内湾し口縁はやや肥大し内面に突出する。

S D 04 (第20図-71～83) (72)は青磁の椀。外面に蓮弁が描かれる。高台内無釉。(73)は皿Q。(74)は短頸壺。肩部に横方向の吊手が付く。(75)は鉢。内面に格子状の摺目が付く。内面の磨滅が著しい。(76)は鉢C。内面の磨滅が著しい。底部外縁、口縁端部、内部の突帯が擦滅する。(77)は陶器の鍋。口縁が受口状になり内面に横方向の吊手が付く。(78)は瓦質の風炉。遺存状態は悪い。(79・80)は鍋B。体部は湾曲して立ち上がり、口縁は肥大し上端が面取られる。図示しなかったが鍋Bの底部になると思われる部分が出土しており、短い棒状の脚が3カ所つく。(81)は釜Aの体部で球形に近い形状をなす。鏝はやや上を向いて付き、鏝から下位に煤が付着する。(82)は鍋A。(83)は常滑産の甕。口縁がN字状を呈する。

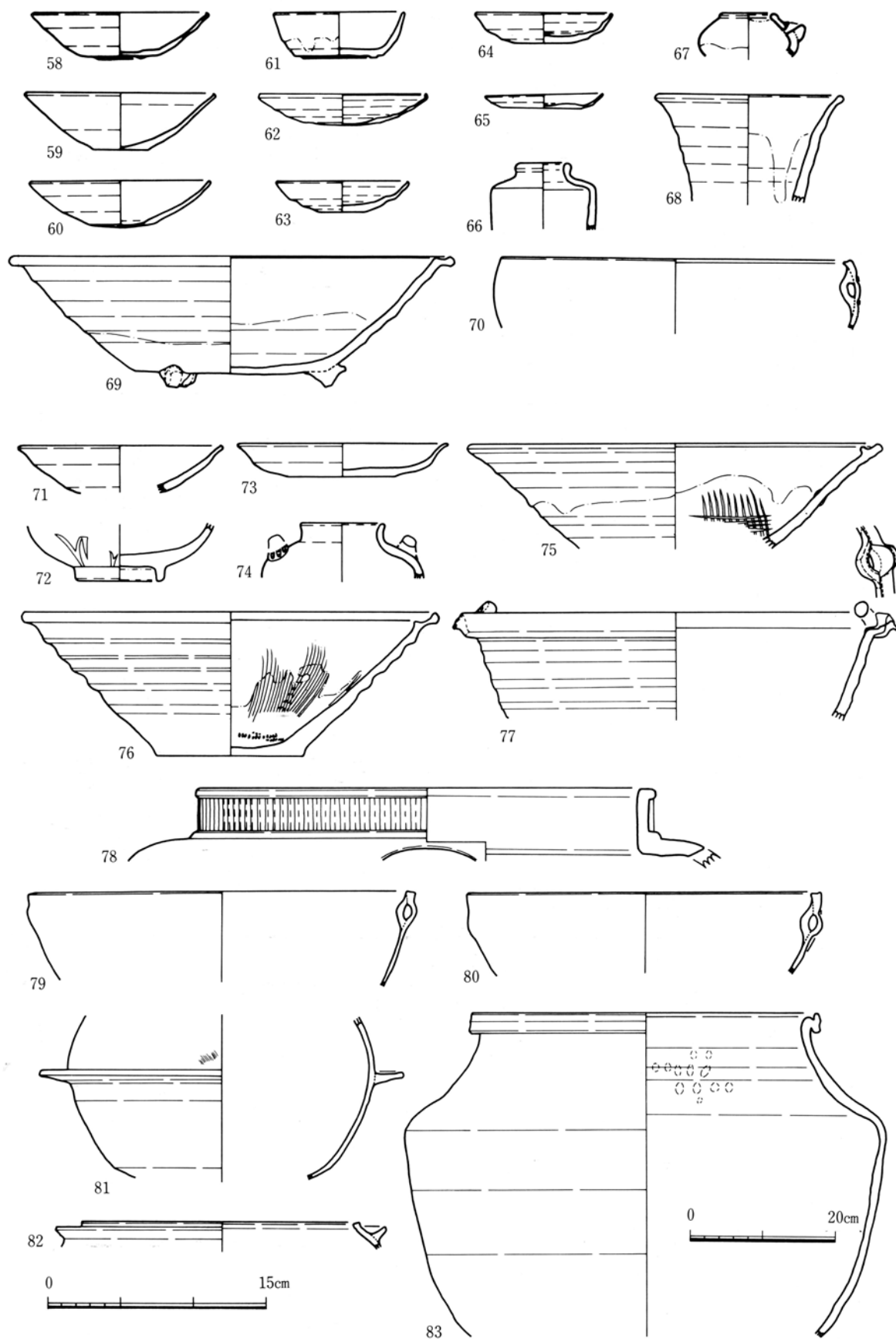
S D 05 (第21図-84～113) (84)は椀C。(85)は椀D。(86)は椀で口縁が外反する。内外面とも釉の剥落が著しい。(87)は鉢で口縁が輪花になる。(88)は鉢。高台内は無釉で格子状の卸目が付く。(89)は青磁の椀。畳付、高台内は無釉である。内底面に花文が陰刻される。(90～93)は皿A。(90・92・93)は胎土が明黄色を呈するのに対し、(91)は暗灰色を呈する。(93)は内面に螺旋状の沈線が入る。(94)は無釉で砂粒を多く含む。入子。(95)は皿C。器高が非常に低く口縁がゆがむ。(96～100)は皿D。法量に大小がある。また(96～99)のように口縁が外反するものと、(100)のようにやや口縁が内湾するものがある。(101)は底部が台状に突出する皿であり、「仏供」と呼称されるものである。(102)は小型の壺の体部下半で

ある。茶入。(103)は蓋。(104)は無頸の壺であり肩部に横方向の吊手が1対付く。(105)は体部下半に鏝が付く椀の底部と思われる。(106)は鉢C。口縁端部にある沈線が顕著で口縁はわずかに垂下する。内面に浅い刷毛状の沈線が入る。常滑産⁽⁴⁾。(109)は鉢C。体部内外面の下方に4つ、団子状の目跡がある。(109)は鉢B。口端部の沈線は顕著であり口縁は垂下する。外面下半には指圧痕が見られ、内面は磨滅が著しい。常滑産。(110)は陶器の釜である。肩部に横方向の吊手が付き体部ほぼ中央に鏝が付く。火を受けた痕跡はない。(111・112)は鍋B。体部がやや開き気味に立ち上がり、口縁端部は肥大し上端に面取られる。吊手は口縁近くに付く。(112)の体部外面に沈線が1条見られる。土器の煮炊具として図示し得ていないが他に鍋A、釜B・Cがある。(113)は壺。四耳壺と呼称されるもので、肩に潰れた横方向の吊手が4つ付く。



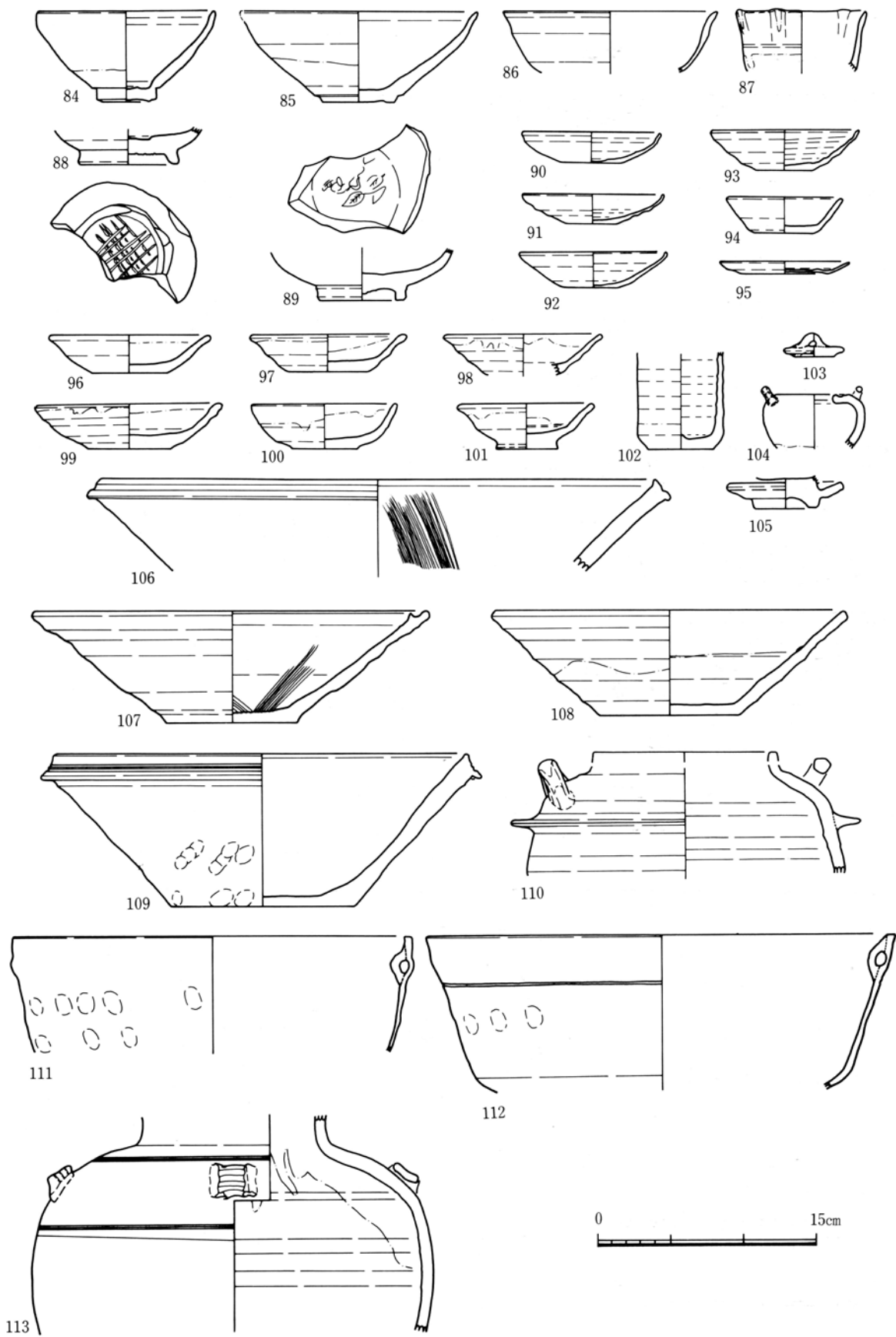
第19図 I期の遺物(2)

I-2期 SK31・44・20



第20図 I期の遺物(3)

I-2期 SD03・04



第21図 I期の遺物(4)

I-2期 SD05

(2) I-2期2段階

供膳具では、椀Aがみられなくなり、椀Cが増加する。椀Cは口縁の直立する部分が長くなり外反し、高台は断面四角形を呈する。無釉陶器の椀Bはさらに器高が低くなり皿状になる。皿C・Dはみられなくなり、全面施釉の皿E・G・I・Kが出現する。無釉陶器の皿A・Bは内面にある螺旋状、同心円状の突線が明確になり密度も高くなる。鉢では鉢Bがみられなくなり、鉢Cは口縁がわずかに垂下する。土器の皿は轆轤成形の皿Rが主体となり、手捏成形の皿Oは極端に小形化する。鍋Aがみられなくなり鍋Bが増加する。鍋Bは前段階のものに比べると口縁端部の面取られた部分が軽くへこむようになる。他に中国陶磁では、青磁、白磁に加えて少量であるが染付が出現する。

S D 08 (第22図-114~116) (114・115)は椀Cである。体部下半は錆釉がかかる。(116)は染付の椀。皿付は無釉である。(117)は皿Eで皿付は無釉である。口縁端部に油煙が付着する。

S D 09 (第22図-117~127) (118)は皿Gで内底面と高台内に輪トチの跡が付く。(119)は皿A。内面に高い密度で同心円状の突線が巡る。(120・121)は皿R。(122)は土器の皿。皿Oと異なって内外面ともに無調整である。底部が軽くへこむ。(123)は釜B。内外面ともに煤が付着するが、鏝より下方には厚くタール状の炭化物が付着する。(124~126)は鍋B。体部は湾曲しながら立ち上がり、内面の吊手は口縁のやや下方に付く。(124)は口縁直下に焼成後の穿孔が2カ所みられる。(126)は他の鍋Bと形態、調整が異なり、平底で、削りが体部上部まで施される。(127)は釜C。鏝は短い。

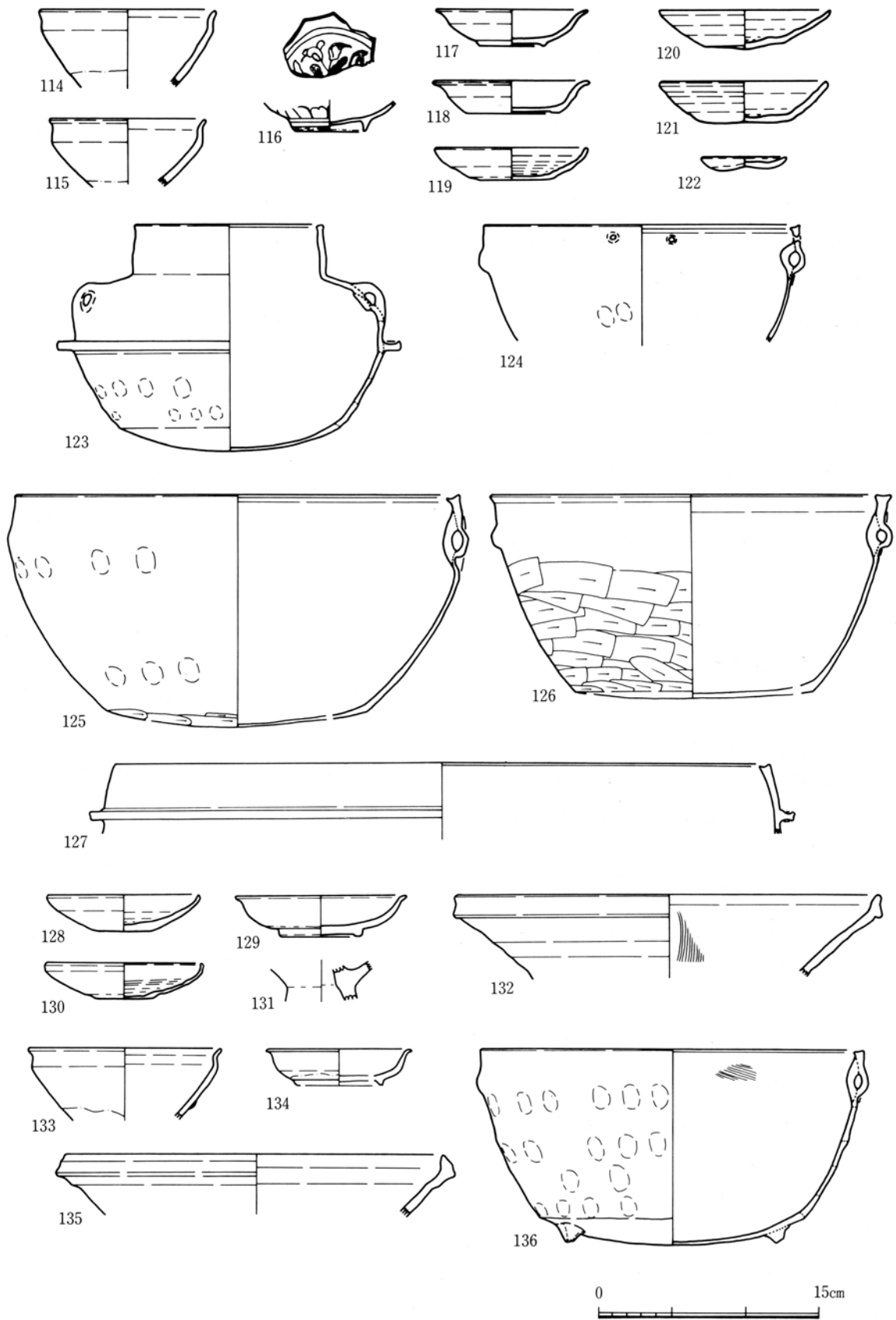
S K 66 (第22図-128~132) (128・130)は皿A。内面に螺旋状のナデが残る。(129)は皿E。高台は短く削り出され断面四角形を呈する。体部下半は無釉で釉は白濁する。(131)は器台。内面は無釉である。燭台の受皿の部分になると思われる。

S K 58 (第22図-133~136) (133)は鉢Cで体部下半は錆釉がかかる。(134)は皿E。(135)は口縁の形状から鉢Cとなると思われる。(136)は鍋B。体部はやや湾曲して立ち上がる。底部には乳頭状の三足が付く。吊手は内面の口縁近くにある。口縁端部は面取られわずかにへこむ。

S E 05 (第23図-137~156) (138・139)は椀C。体部下半は錆釉。高台は断面四角形に削り出される。(139・140)は皿A。(140)は内面に螺旋状の突線がある。図示し得なかったが、皿Aで内面に同心円状の突線が入るものもある。(141)は椀B。焼成があまり胎土が白色を呈する。(142)は皿I。内底面、高台内に輪トチの痕が残る。(143)は皿R。内面にタール状の炭化物が付着。(144)は皿Q。前段階のものに比べ口縁の外反が弱い。(145~152)は皿O。前段階のものに比べ小形化し、口縁は短く立ち上がる。(153・154)は鉢C。(153)の内面の摺目は磨滅し口縁端部が擦滅する。(154)は使用の擦痕はなく体部内外面の下方に団子状の目跡が残る。(155)は鍋B。体部はボール状になり口縁端部がややへこむ。外面は被熱で赤色化するが煤、炭化物は付かない。(156)は石皿である。内面は使用の為磨滅する。

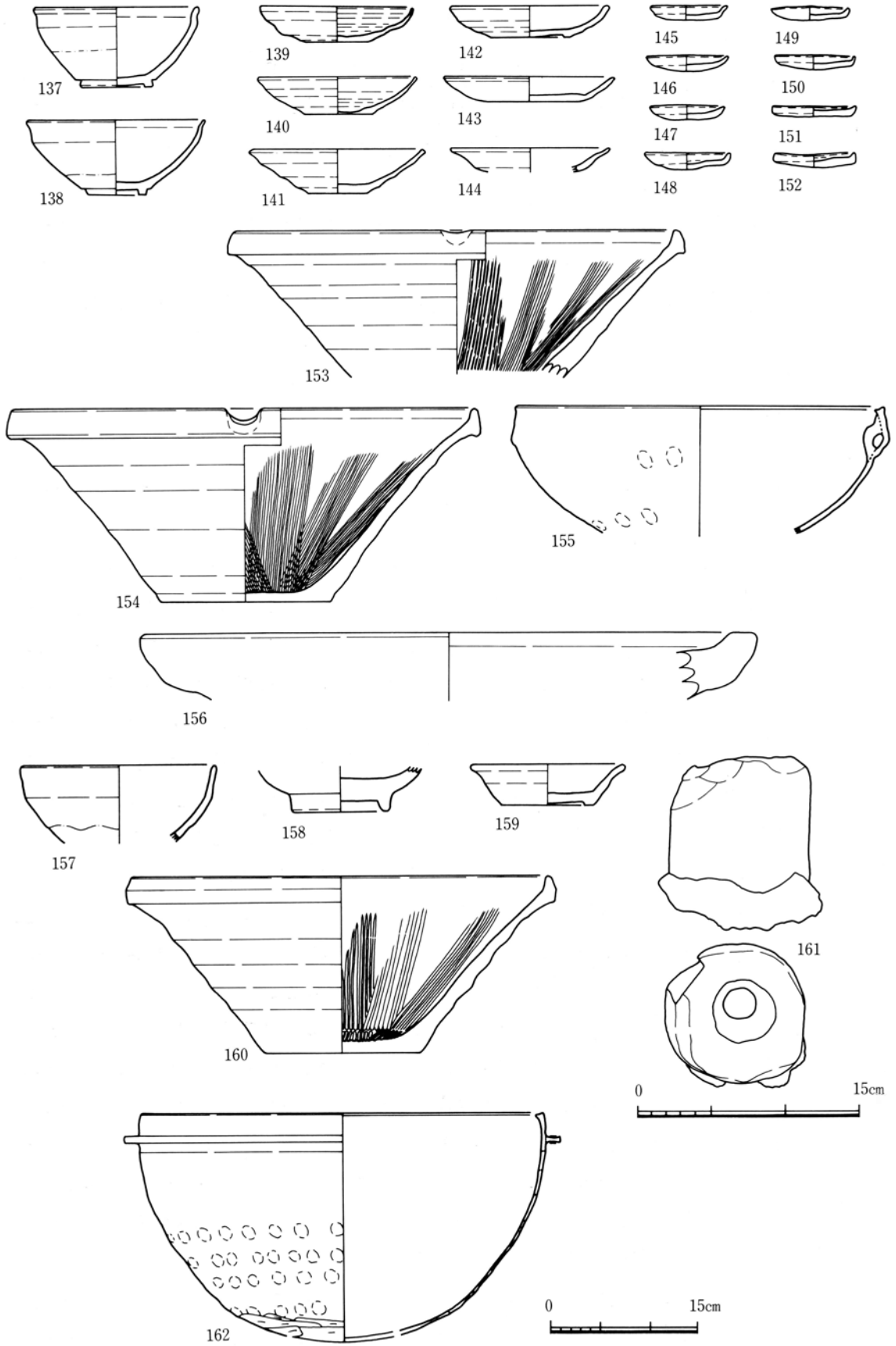
S K 47 (第23図-157~161) (157)は椀C。(158)は青磁の椀。内面中央に陰刻が見られるが内容は不明である。高台内のみ無釉である。(159)は皿Gである。(160)は鉢C。摺目は磨滅し、底面の外縁がわずかに擦滅する。(161)は吹子の羽口。基部に鈇滓が付着する。

S K 57 (第23図-162) (162)は釜C。体部下半に炭化物が付く。



第22図 I期の遺物(5)

I-2期 SD08・09・SK66



第23図 I期の遺物(6)

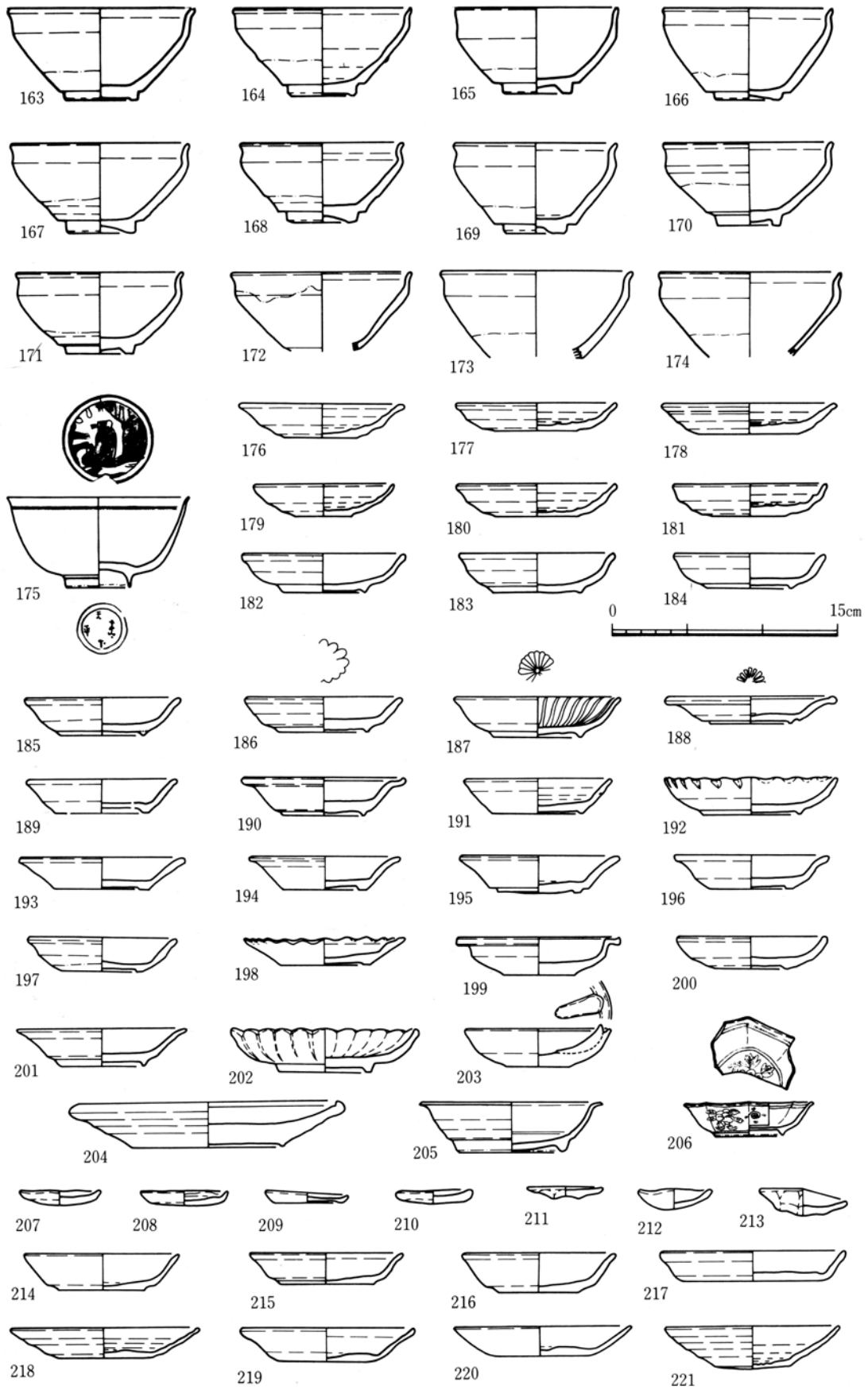
I-2期 SE05・SK47・57

(3) I-2期3段階

基本的には2段階と同様な器種組成であり、供膳具として碗C、皿B・F・G・R・O・P、調理具として鉢C、煮炊具として鍋B、釜A～Cがある。碗B、皿A・Eは見られなくなり、かわって陶器の皿F・H・K・L・土器の皿P、釜Bが出現する。碗の種類がほとんど碗Cからなるのに対し、皿の種類が卓越する。量は少ないが中国磁器の傾向として青磁、白磁に替り染付が主体となる。

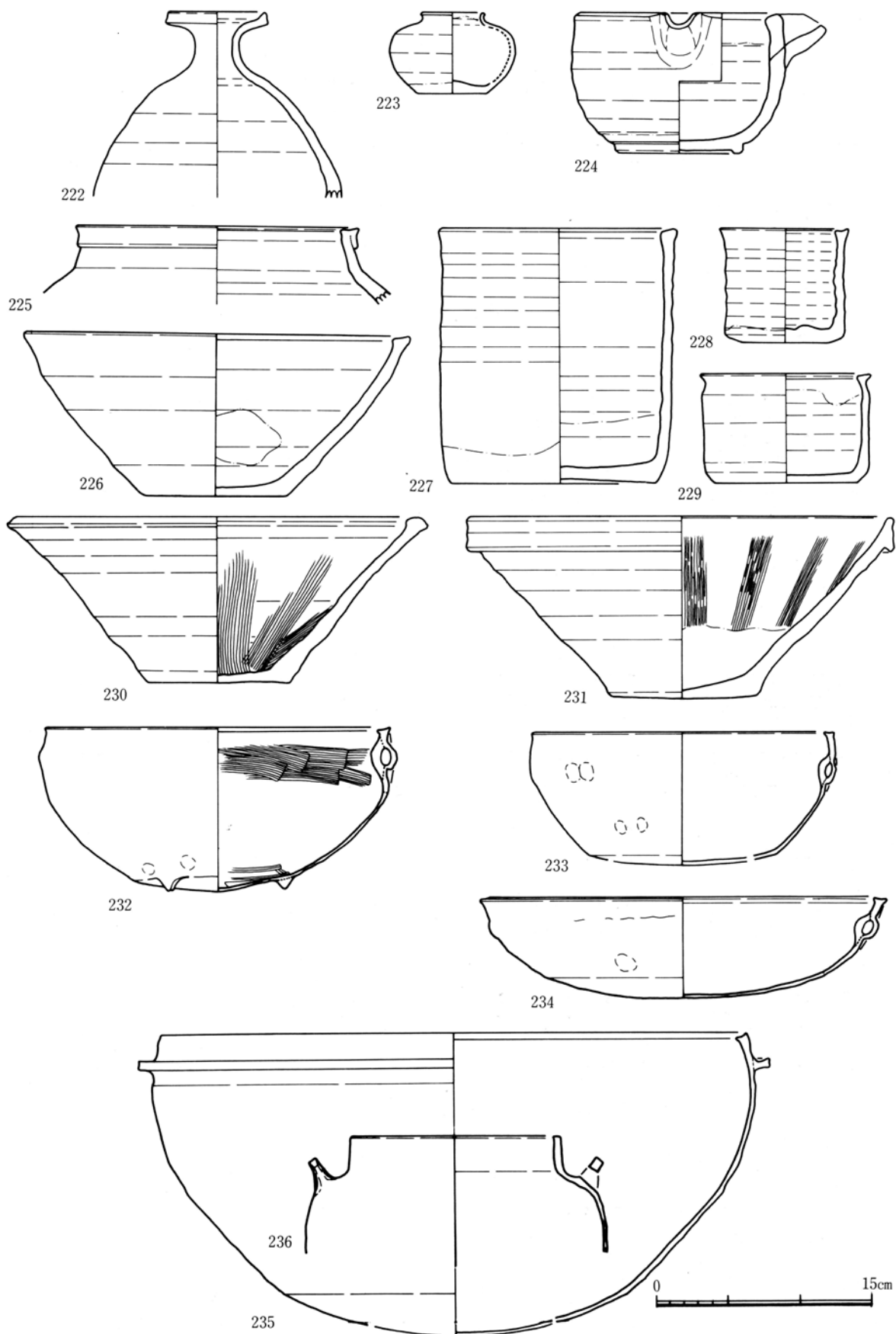
次に形態の変化をみると、碗Cの中に口径の割に器高が低いものや、高台内を丸く削り出すものが見られる。また施釉法からみると体部下半が無釉のものが出現する。皿Bは口縁の外反が強くなる。皿Gは口縁の外反が弱くなる傾向がある。皿Qは口径と底径の差が小さくなり口縁の外反が弱くなる。鉢Cは口縁の垂下が著しくなる。鍋Bは口縁端部のへこみが前段階に比べやや深くなりその結果、口縁端部が外と内に突出する。

S D 01 (第24・25図-163～236) (163～174)は碗C。法量は(173・174)のように大きいもの、(163・164・166・167・169)のように中位のもの、(165・168・170・171)のように小さいものがある。また高台の形状で断面形が四角形になるもの(163～165・170・171)、高台内を丸く削り込むもの(166・169)の2つに区分できる。体部下半が無釉のものには(165・170～172)があり、他は錆釉がかかる。(175)は染付のマントーシンの碗で畳付の部分が無釉になる。(176～181)は皿B。すべて内面に同心円状の圏線が入る。(182～186)は皿F。(185)の内底面は円形に釉が剥ぎ取られる。(186)は内底面中央に菊花の刻印が見られる。(187)は内面に放射線状に丸彫が施され、内底面に菊花が印刻される。高台内には輪トチの跡がみられる。(126)は陶器の皿。内底面に菊花の刻印が見られる。(189・191・193・194・196・197)は皿G。(189・191)は口縁の外反が弱く、(196・193)は体部下半が湾曲する。(189)は内底面は円形に釉が剥ぎ取られる。(189・191)は灰釉で他は鉄釉であり、(197)のみ底部が無釉である。(190)は陶器の皿。口縁が受口状になる。(192)は皿K。内底面に菊花が刻印される。(195・201)は皿H。(200)は皿I。内底面中央の釉が円形に剥ぎ取られる。(202)は皿L。菊花状に型押し成形される。長石釉が施されるが、長石釉のものは他に1点しか見られず共にS D 01の上層の整地層からの出土である。(203)は皿J。(205)は白磁の皿である。畳付は無釉である。(206)は染付の角皿である。畳付は無釉である。(207～210)は皿Oである。(211～213)は皿P。(214～216)は皿Qである。底部から体部下半の稜までが短くなる。(220)は皿Rである。土器の皿O・Pは炭化物が付着するものは全く見られない。(272)は瓶。所謂、船徳利である。(223)は短頸壺。茶入である。(224)は片口鉢。口縁端部及び畳付の部分が磨滅する。(225)は内外面に鉄釉がかかる。瀬戸美濃産の瓶である。(226)は大型の鉢で内面に目跡が残る。(227～229)は筒状の鉢。(228)の口縁、内面には炭化物が付着し、口縁端部は敲打により剥落している。(230・231)は鉢C。(231)は内面下方の摺目がほとんど磨滅し口縁端部、底部外縁が擦滅する(232～234)は鍋B。(234)は口縁に比べ器高が低い焙烙鍋である。(235)は釜C。鏝から以下の体部に炭化物が付着する。(236)は釜A。全体的に炭化物の付着は少なく、体部下半のみにみられる。(佐藤公保)



第24図 I期の遺物(7)

I-2期 SD01



第25図 I期の遺物(8)

I-2期 SD01

2. II期の遺物

概要

本遺跡から大量の遺物が出土し、出土遺物の時期は江戸時代全般にわたっており、陶磁器、土師質製品、土製品、石製品、ガラス製品、金属製品が出土しており、とりわけ陶磁器の出土量が多く、陶磁器の全般的な傾向としては18世紀後半から19世紀中頃に製作されたと考えられる、地元である瀬戸・美濃の製品が中心で、その他に信楽、京都、肥前の製品がわずかであるが出土している。遺物の出土状況は、遺構外出土遺物も遺構内出土遺物もその製品の時期に差はなく、何度も掘り返された土抗の大半は廃棄土抗で、遺物は比較的短期間に堆積した状況であった。

記載にあたっては、各材質ごとにまとめ、膨大な量の陶磁器については、遺構出土の一括資料を重視し、中でも出土量の多い遺構を抽出した。また上絵付のあるものや、肥前系の京焼風製品、墨書のある製品、焼塩壺については、遺構内・外をとわず本遺跡出土の各製品をまとめたものである。

1. 陶磁器

主要器種

碗 A (天目茶碗)

- 1 胴部がほぼ直線的に開き、端部がやや外反し、削り出し高台と輪高台の鉄釉の碗。
- 2 胴部に段を持ち、口唇部がほぼ垂直の長石釉の段付碗。

B (丸碗)

- 1 高台脇から胴部、口唇部にかけて丸味を持って開く灰釉、長石釉、銅緑釉の碗。
- 2 胴部から口唇部にかけて大きく内湾する長石釉・鉄釉の碗で掛け分けする場合もある。
- 3 胴部下方が丸味を帯び、上方がやや開き気味の灰釉の深い碗。
- 4 胴部下方が丸味を帯び、上方が垂直に開いた灰釉の碗。
- 5 胴部下方が丸味を帯び、上方にかけて内湾する灰釉の碗。

C (筒型碗)

- 1 胴部下方は丸味を帯び、上方はほぼ直立し、胴部中央に浅い沈線が巡り2カ所を指で押え凹ませ、高台の低い、鉄釉の碗。わずかではあるが、灰釉の碗もある。
- 2 胴部下方は丸味を帯び、上方はほぼ直立し、胴部中央に浅い沈線が巡り灰釉と鉄釉の掛け分けによる碗。
- 3 高台脇から垂直に立ち上る灰釉の碗。
- 4 腰部下方は丸味を帯び、上方が直立し、その境に稜が入る灰釉の碗。(せんじ)

D (尾呂茶碗) 胴部下方は丸味を帯び、上方がやや開き気味に立ち上る鉄釉の碗で口縁周辺にうのふ釉が漬け掛けされる。

E (御室茶碗) 胴部下方は丸味を帯び、ほぼ垂直に立ち上り、高台径の広い断面方形の付高台を有し、呉須による文様が二方に描かれ、高台周辺を除き灰釉が施された碗。

- F (広東茶碗) 高台から逆「ハ」の字形に開く灰釉の碗で呉須による文様が描かれる。
- G (柳茶碗) 胴部下方はやや丸味を帯び、上方に開く、灰釉の碗で呉須による柳の文様が描かれる。
- H 胴部下方が丸味を帯びる端反の碗で鉄絵が描かれ、灰釉・長石釉が施される。「麦藁手」も含む。
- 磁器碗A (丸碗) 高台脇から丸味を持って開いた碗。
- B (端反碗) 高台脇から丸味を持って開く端反の碗。「麦藁手」も含む。
- C (広東碗) 高台から逆ハの字形に開く碗。
- D (筒型碗) 高台脇から垂直に立ち上る碗。
- 小碗A (天目茶碗) 天目茶碗を小型にした碗で鉄釉が施される。
- B (丸碗)
- 1 高台脇から丸味を持って開いた灰釉・鉄釉の小碗。
- 2 丸味を持って開き、削り込み高台の灰釉・鉄釉の小碗。
- C (端反碗) 口縁が外反した端反の小碗で灰釉・鉄釉が施される。
- D (筒型碗) 高台から口縁にかけて直線的に開いた灰釉の小碗。
- 磁器小碗A (丸碗)
- 1 高台脇から丸味を持って開く内湾気味の小碗。
- 2 高台脇から丸味を持って開いた小碗。
- B (端反碗) 口縁がやや外反した端反の小碗。
- C (筒型碗)
- 1 高台脇がやや丸味を帯びた小碗。
- 2 高台から口縁にかけて直線的に開いた小碗。
- 3 高台脇から垂直に立ち上る小碗。
- 磁器小杯A (丸碗)
- 1 高台脇から丸味を持ってやや内湾気味に開いた碗。
- 2 高台脇から丸味を持って開いた碗。
- B (筒型碗)
- 1 高台から胴部にかけてやや丸味を帯びた碗。
- 2 高台から口縁にかけて直線的に開いた碗。
- 皿
- A (丸皿)
- 1 口縁が直線的な灰釉の皿。
- 2 腰部がやや丸味を帯び、口縁が直線的である。
- 3 (梅文皿) 腰部が丸味を帯び、やや深めの皿。
- B (折縁皿) 腰部からほぼ垂直に立ち上り、口縁が折縁になった皿。
- C (端反皿) 高台脇から丸味を持って立ち上り、口縁が外反した皿。
- D 胴部下端に稜が入り、口縁が外反する皿。

- E (菊花皿) 口縁端を花卉状に切り込み、内側面に丸彫り、外側面に縦の沈線のある皿。
- F (襷皿) 口縁にひだが施された皿。
- G (同心円文皿) 内面に隆帯重圏が施された無釉の皿。
- H (型打皿) 型を押しあてて作った皿。
- I (燈明皿)
 - 1 油皿で腰部より直線的に開いた皿で、腰部より底部にかけてへら削り調整が行われる。
 - 2 受皿で、内面に設けられた棧は一ヶ所が切られ腰部より底部にへら削り調整が行われる。
 - 3 油皿で口縁端部に一ヶ所つまみを付けている。

- 磁器皿
- A (丸皿) 腰部が丸味を帯び、口縁が直線的な皿。
 - B (襷皿) 口縁端部にひだが施された皿。
 - C (菊皿) 口縁端部が花卉状に切り込まれた型打皿。
 - D (角皿) 四角形の型打の浅い大きな皿。
 - E (大皿) 大型の浅い皿。
 - F (紅皿)
 - 1 型打で楕円形の皿。
 - 2 型打で円形の皿。

- 鉢
- A (折縁鉢)
 - 1 腰部から丸味を帯びて立ち上り、口縁が折縁になった黄瀬戸鉢。
 - 2 腰部から丸味を帯び立ち上り、口縁はゆるやかに外反し、端部が若干立ち上る。内側面に櫛描きによる波状文、内底部面には櫛描き同心円と菊花の押印文がみられる鉢。
 - 3 腰部から丸味を帯び立ち上り、口縁が折縁になり、内面に鉄絵の文様を描く深い鉢。
 - B 腰部から丸味を帯びて立ち上った深い大鉢。
 - C (小鉢)
 - 1 腰部に稜を持ち、直線的に立ち上り、口縁端部が若干立ち上る鉢。
 - 2 腰部からはほぼ直線的に立ち上り、口縁がやや外反し、内面に呉須絵が描かれる。
 - D 腰部が丸味を帯びて直線的に立ち上った深い鉢。
 - E (型打鉢)
 - 1 型を利用して作られた菊形鉢。
 - 2 型を利用して作られた角鉢。
 - F (捏鉢)
 - 1 蛇の目高台状の高台で口縁が内湾気味に立ち上り玉縁状の口縁となる捏鉢。
 - 2 輪高台で丸味を帯びて立ち上り玉縁状の口縁となる捏鉢。
 - 3 輪高台で腰部より丸味を帯びて垂直に立ち上った捏鉢。
 - 4 蛇の目高台で丸味を帯びて立ち上り、折り縁の口縁となる大きな捏鉢。
 - G (片口鉢) 腰部から丸味を帯びて立ち上った鉢に片口の付いたもの。

H (挿鉢)

- 1 平底で、胴部は直線的に開き、口縁下で若干くびれ、内面に挿目がある。
- 2 平底で、直線的に開き、口縁下が若干くびれた小型の挿鉢。

I (植木鉢)

- 1 長胴でやや外反気味に開き、口縁は折縁となる。
- 2 胴部が短く、口縁が折縁となる。

J (火鉢)

- 1 腰部より丸味を帯びて立ち上り内湾する口縁をもつもの。
- 2 胴中央部に稜を持った算盤玉状の形態のもの。

K (手水鉢)

- 1 腰部が、丸味を帯びて垂直に立ち上り口縁が外反し玉縁状の縁帯となるもの。
- 2 腰部が丸味を帯びて垂直に立ち上り、口縁が波状となるもの

磁器鉢A (丸鉢)

- 1 腰部から丸味を帯びて立ち上り口縁が外反した鉢。
- 2 腰部から丸味を帯びて立ち上った鉢。

B (角鉢)型を押しあてて作られた鉢。

蓋

A (落し蓋)

- 1 平底で、口縁が外反し、内面底につまみが付くもの。
- 2 平底で、腰部が丸味を帯びてほぼ垂直に立ち上り、口縁が折縁で、内面底につまみが付く。

B 扁平な笠部に粘土塊を貼り付けたつまみのある蓋。扁平蓋。

C 扁平な笠部と直立したかえりを有し、笠部中央に宝珠形につまみのある蓋。

D (環状つまみ付蓋)

- 1 扁平な笠部と環状につまみが付いた蓋。
- 2 笠部の先端が折り縁になり、環状につまみが付いた蓋。

E (蓋)つまみのない笠部だけの蓋。

徳

利A 肩が張り胴部が太く、頸部も太短い。

B 肩が張り、胴部が細く、肩部には楯描きによる平行沈線が巡る。

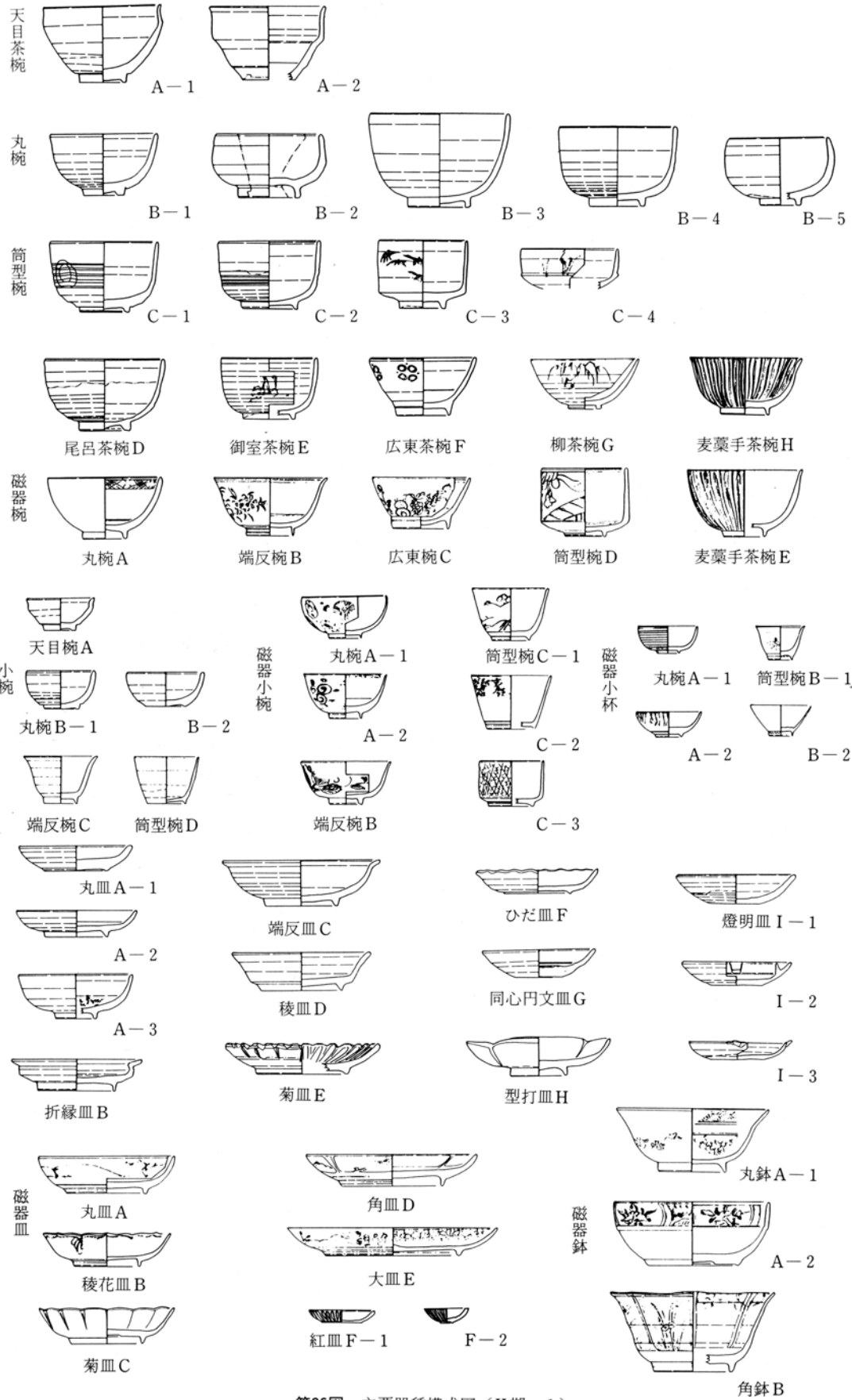
C 三角形の形状で、胴部中央にくぼみがある。

D 肩がやや張り、頸部が短く、胴部にくぼみのあるものとくぼみのないやや小振りのもの。

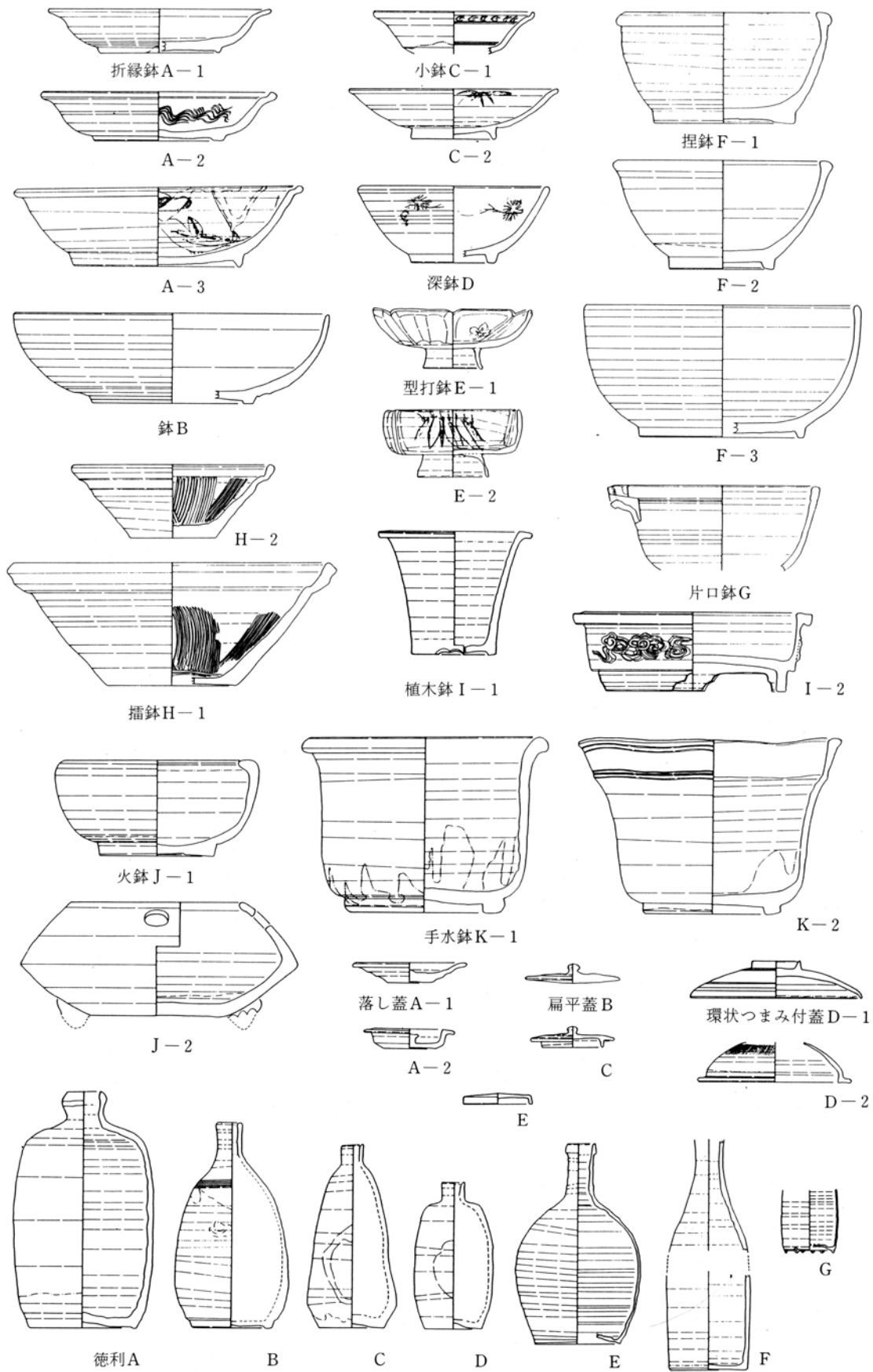
E 頸部が細長く、丸味のある肩を持った備前風のもの。

F 平底で胴部が細長い徳利。

G 平底で胴部が細長い小振の爛徳利で備前焼風のもの。



第26図 主要器種模式図 (II期-1)



第27図 主要器種模式図 (II期-2)

(1) 各遺構出土の遺物

- S K 186 (第28図-1~21) 椀、皿、鉢、煙管、土師質皿が出土したが遺物量は少ない。天目茶椀A-1 (1)と丸椀B-1 (4)の椀がある。(3)は長石釉の椀で削り出し高台となっている。(4)は銅緑釉が施された丸椀である。(5)は折縁の灰釉皿、(6~10)は皿A-1の長石釉丸皿である。(11)も皿A-1の丸皿ではあるが外面に銅緑釉を流したいわゆる黄瀬戸の皿である。(12~15)は土師質の皿でヨコナデを施している。(16)は灰釉の皿Eで口縁端を花卉状に切り込み、内側面に丸彫り、外側面に縦の沈線が施されている。(17)は折縁鉢A-1で内側面に銅緑釉の流し掛けが施された黄瀬戸の鉢である。(18)は折縁鉢A-2で内側面に櫛描きによる波状文、内底部面には櫛描き同心円と菊花の押印文がある。(19)は煙管で受皿部および上面に銅緑釉が施される。(20)は銅緑釉が施された壺の底部である。(21)は受け口状の口縁のある銅緑釉の香炉で、胴部外側面には丸彫りによる縦の沈線が施されている。17世紀前半の時期に比定される。
- S D 102 (第29・30図-22~43) 椀、皿、向付、燭台、挿鉢、土師質皿と磁器椀が出土した。(22・23)は天目茶椀A-1で(22)は削り出し高台。(24)は灰釉の丸椀B-1である。(25~27)は磁器製品で(25)は小椀A-2で高台に「大明年製」と書かれる。(26)は小椀で、(27)は筒型のB-1の小杯で、3点共肥前磁器。(28~34)は長石釉の皿A-1で、(28・29)は鉄絵のある二重圏線の巡る丸皿。(35)は灰釉の皿A-2、(36)は灰釉の皿A-1である。(37~43)は長石釉の盤状を呈した丸皿。(44)は端反の長石釉の皿Cで1点のみの出土。(45)は内底面に鉄絵を描き、外側面に挿座を付けた長石釉向付、(46)は外側面に鉄絵のある小振りの長石釉角向付。(47)は南蛮人の燭台の袖の部分である。(48)は内面の口縁下に呉須による文様のある灰釉の鉢C-2である。(49~51)は鬼板化粧の鉄釉挿鉢で、(51)は底面の挿目が磨滅している。(52)は口縁が直立した土師質の釜、(53)は土師質の内耳鍋である。(54)は土錘、(55~84)は土師質の皿で、(55)は底部に墨書があり、(56~68)はロクロ成形で(69~84)は手捏ねによって作られている。17世紀前半の時期に比定される。
- S K 173 (第31~33図-85~136) 椀、皿、向付、鉢、水滴、壺、土師質の鍋・釜・皿が出土した。(85・86)は天目茶椀A-1、(87・88)は銅緑釉の丸椀B-1で(88)の口縁はやや端反気味である。(89)は長石釉と鉄釉が掛け分けされた丸椀、(90)は長石釉の丸椀、(91)はやや小振りの鉄釉の丸椀である。(92~94)は小椀で(92)は灰釉の小丸椀B-2、(93・94)は長石釉の端反小椀Cである。(95~97)は灰釉の皿A-1、(98~107)は長石釉の皿A-1で高台脇より丸味を帯び直線的に立ち上り、端部は丸い。(103~105)の鉄絵皿は内側面に文様を描いている。(106・107)の鉄絵皿は二重になった圏線の中に蘭竹の文様が描かれている。(108)は長石釉の折縁皿で輪禿の部分が隆帯となり、内底面に菊花の押印がある。(109)は長石釉皿F、襷皿である。(110・111)は内面に隆帯重圏が施された無釉の皿Gである。(112)は鉄釉の蓋A-1、(113)は土錘である。(114)は内面底に菖蒲が描かれた三足の長石釉向付、(115)は内面に鉄絵のある、いわゆる鼠志野の三足付向付、(116)は長石釉

三足付向付である。(117・118)は胎土自体が赤褐色を呈したいわゆる赤織部で、(117)は鉢E-1、(118)は鉢E-2である。(119)は内面に梅の絵が描かれた織部の向付である。

(120)は折縁鉢A-1で内底面に銅緑釉が流し掛けされている。(121~123)は折縁鉢A-2で(122・123)は銅緑釉の流し掛けが施され、内側面に櫛描きによる波状文、内底面には櫛描き同心円と菊花の押印文がみられるいわゆる黄瀬戸鉢である。(124)は上面に枝と葉を付け、先端部周辺が丸彫りによる沈線のある長石釉の水滴である。(125~127)は鬼板化粧の播鉢、(128・129)は鉄釉壺である。(130~133)は手捏ねの土師質皿で(133)は底部穿孔皿である。(134)は本来は焼塩壺の蓋であったものが転用されたもので内面に漆が附着している。(135)は土師質の両耳釜、(136)は土師質の内耳鍋である。S K 173の下層出土遺物で17世紀前半の時期に比定される。

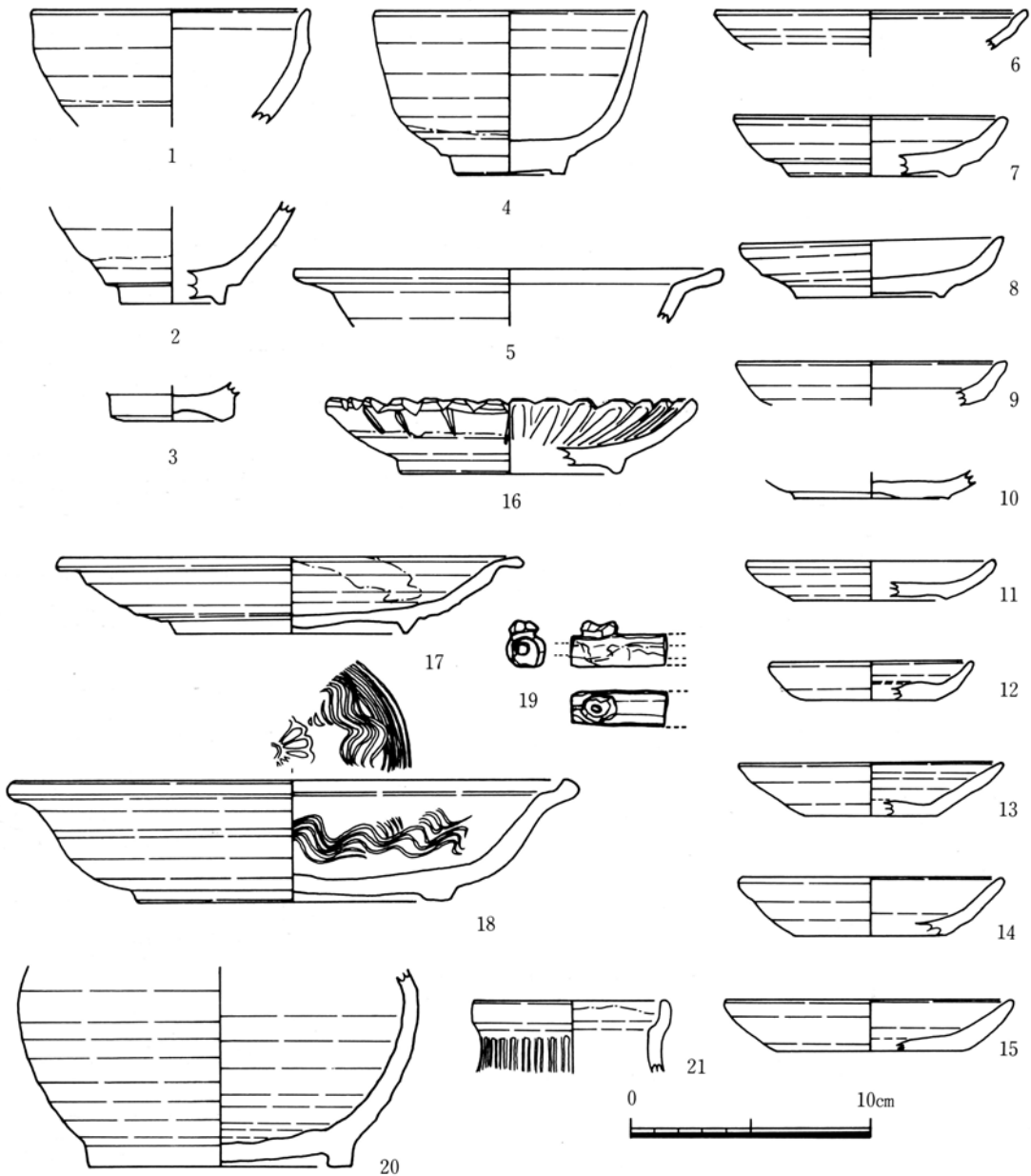
S K 145 (第34~36図-137~203) 碗、皿、向付、鉢、播鉢、甕、土師質皿、中国陶磁が出土した。

(137~141)は天目茶碗A-1で、(140)の内面には灰釉が流し掛けされる。(142)は天目茶碗A-2の胴部に段が付き口縁が直立した長石釉の大振りの碗。(143)は丸碗B-1で長石釉が、(144)は鉄釉で内面に長石釉が流された拳骨茶碗か。(145)は灰釉の丸碗B-1、(146)は灰釉の丸碗B-3、(147)は長石釉の丸碗B-1、(148)はやや端反の丸碗B-1。(149~153)は小碗で、(149)は灰釉の小丸碗B-1、(150~152)は長石釉の小丸碗B-1、(153)は長石釉の小丸碗B-2である。(154)は長石釉小壺。(155)は内底面に二重圏線が描かれた丸碗で内底には紅が附着。(156・157)は内面に渦巻き文様を描いた碗。(158~161)は灰釉丸皿A-1で(158)の内底面には酢漿の押印がある。(162~170)は長石釉の皿で(162~169)は丸皿A-1、(170)は皿Dの腰部に稜のある稜皿。(171)は銅緑釉の小鉢C-1、(172)は高台から直線的に立ち上った長石釉小鉢。(173)は皿Hで貫入の多い長石釉型打皿である。(174)は胴部に鉄絵のある長石釉の向付、(175)は肩部に鉄絵のある長石釉壺。(176~178)は胎土が赤褐色を呈した赤織部で、(176)は筒向付の練り込みで胴部上半が灰白色の粘土を使用した、いわゆる鳴海織部。(177・178)は鉢E-1の型打鉢である。(179・180)は中国陶磁の染付で、(179)は小壺、(180)は皿である。(181)は常滑産の播鉢で播目が細い。(182)は内湾する常滑産の甕。(183)は折縁鉢A-1、(184~186)は折縁鉢A-2のいわゆる黄瀬戸鉢、(187~189)は内側面に鉄絵の文様が描かれ銅緑釉が流し掛けられた折縁鉢A-3である。(190)は鉄釉の鉢Bで内外面に白濁化した釉が流れている。(191)は内耳鍋、(192~202)は土師質の皿で(202)は手捏ねの皿。(203)は軟質の土を用いた杯状のもの。多少の混入があるが時期は17世紀前半に比定できる。

S K 179 (第37~38図-204~244) 碗、皿、鉢、壺が出土している。(204・205)は天目茶碗A-1で、

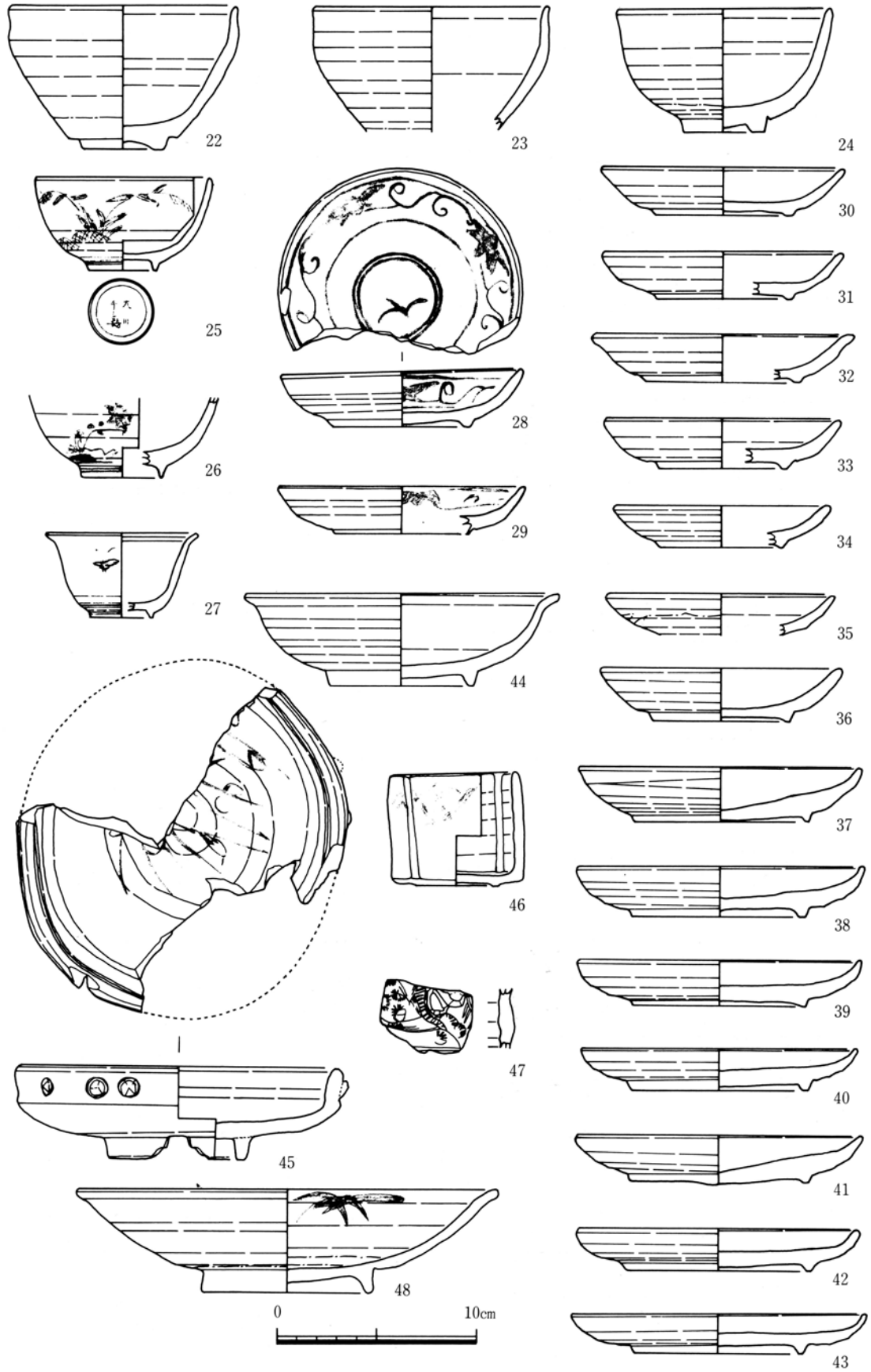
(205)は灰釉の流し掛けが施されている。(206~208)は丸碗B-2で(206)は鉄釉と長石釉が掛分けられており、(207)は長石釉、(208)は鉄釉が施釉されている。(209~211)は小碗で(209)は小碗A、(210)は長石釉小丸碗B-1、(211)は灰釉端反小碗Cである。(212)は皿A-1の灰釉丸皿、(213~220)は長石釉の皿A-1で(213)は二重圏線の巡る丸皿、(215)は鉄絵「蘭竹」文様が内底面に描かれている。(221)は皿Gの隆帯の二重圏

線の巡る無釉の皿である。(222~226)は長石釉の皿Dで(225・226)は胴部下端に稜が入る。(227)は鉢E-1の赤織部である。(228)は皿Hの型打で五角形を呈し、内底面には鉄絵「南蛮人」が描かれている。(229~235)は土師質皿で(232~234)の口縁部には煤が付着している。(236)は鉄釉香炉、(237)は鉢A-1の折縁鉢で黄瀬戸ではなく内底面に鉄絵のある長石釉の鉢、(238)は鉢A-2の黄瀬戸鉢、(239)は鉢A-3のいわゆる「笠原鉢」で、(240)は唐津産の鉢である。(241)は織部の角皿で底部に焼成以前の鉄釉による文字が記されているが判読できなかった。(242)は銅緑釉が施釉された狛犬の水滴である。(243)は受け口をした徳利の口縁、(244)は鉄釉の徳利である。17世紀前半から中頃の時期に比定される。



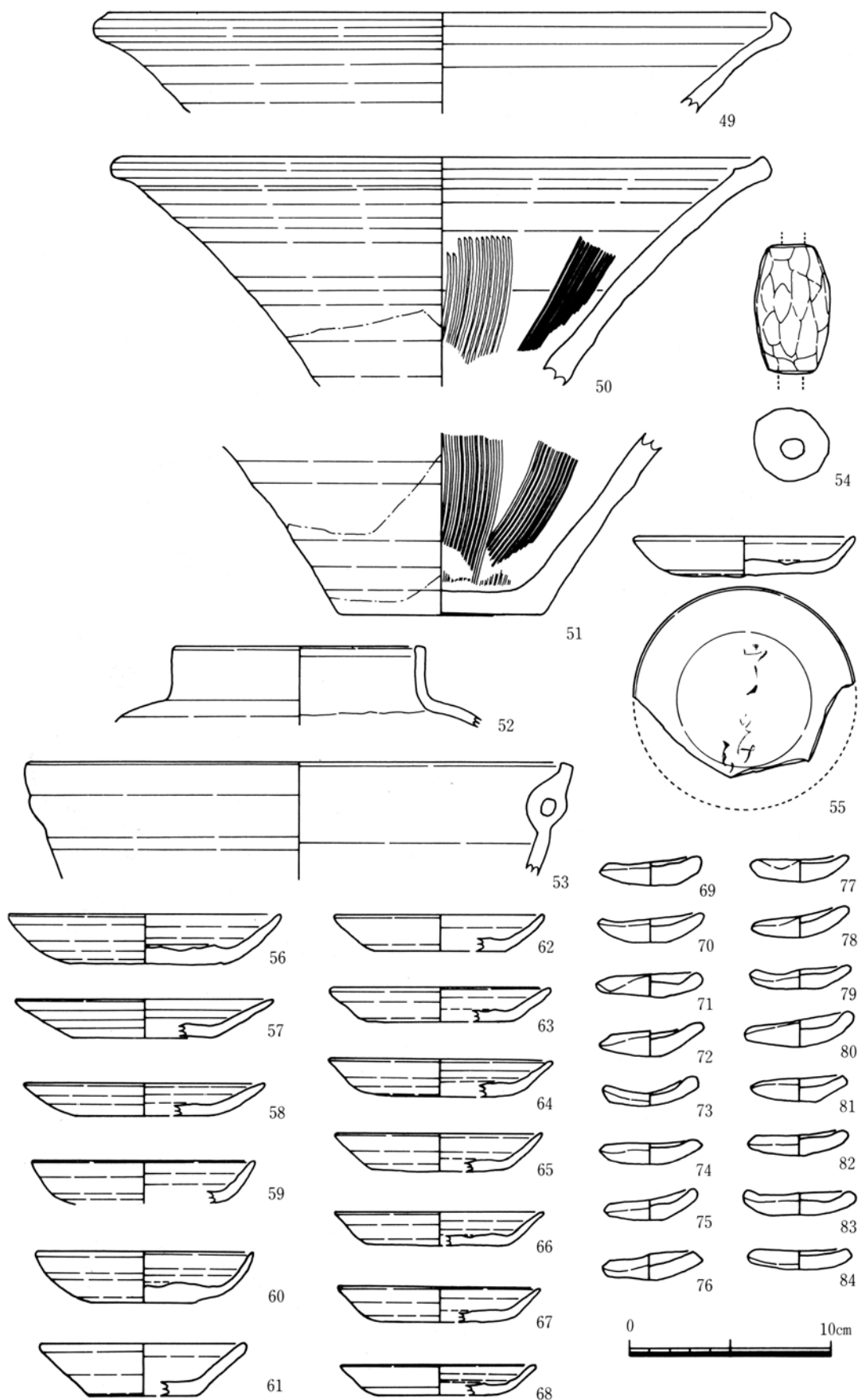
第28図 II期の遺物(1)

SK186



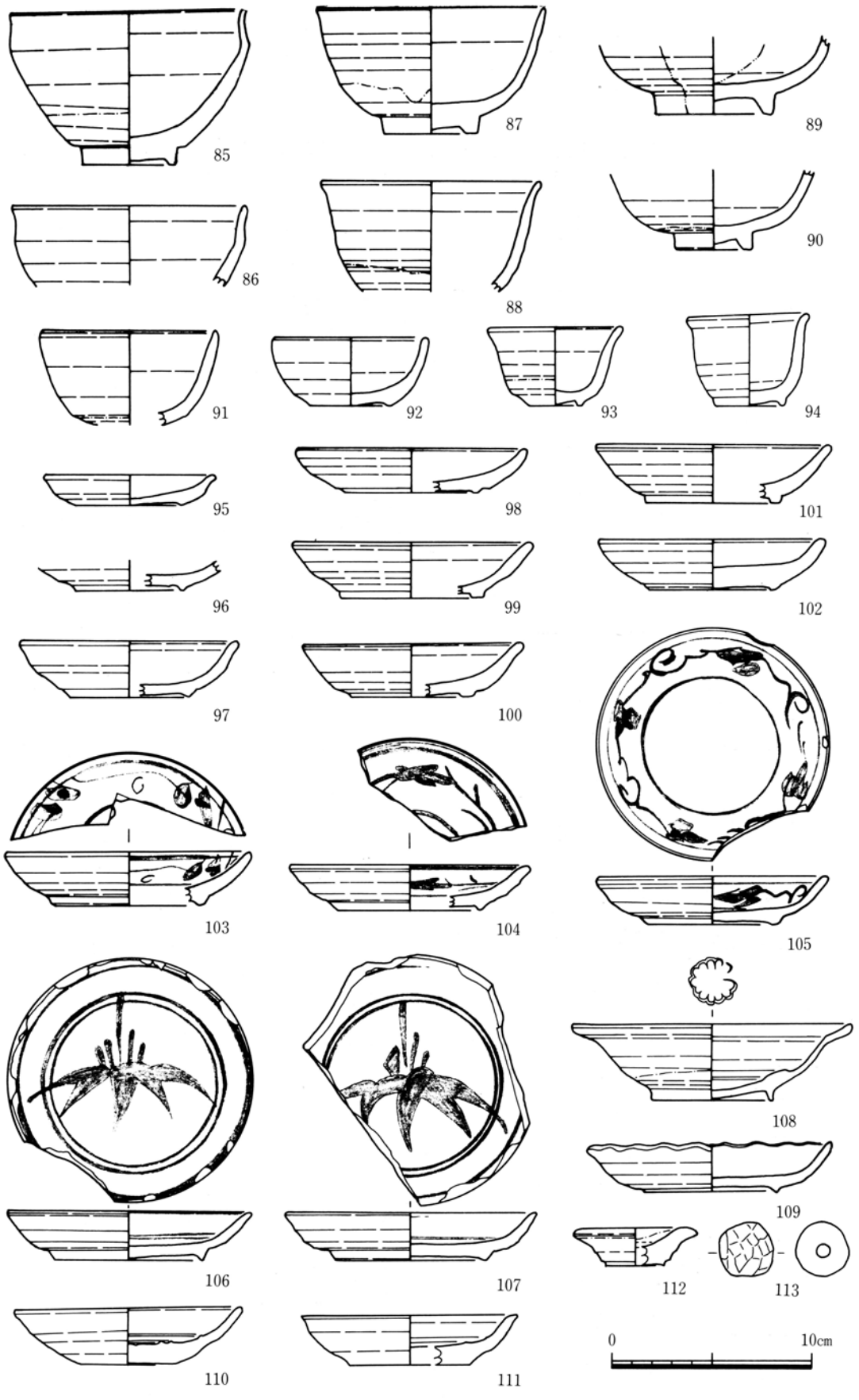
第29図 II期の遺物(2)

SD102(1)



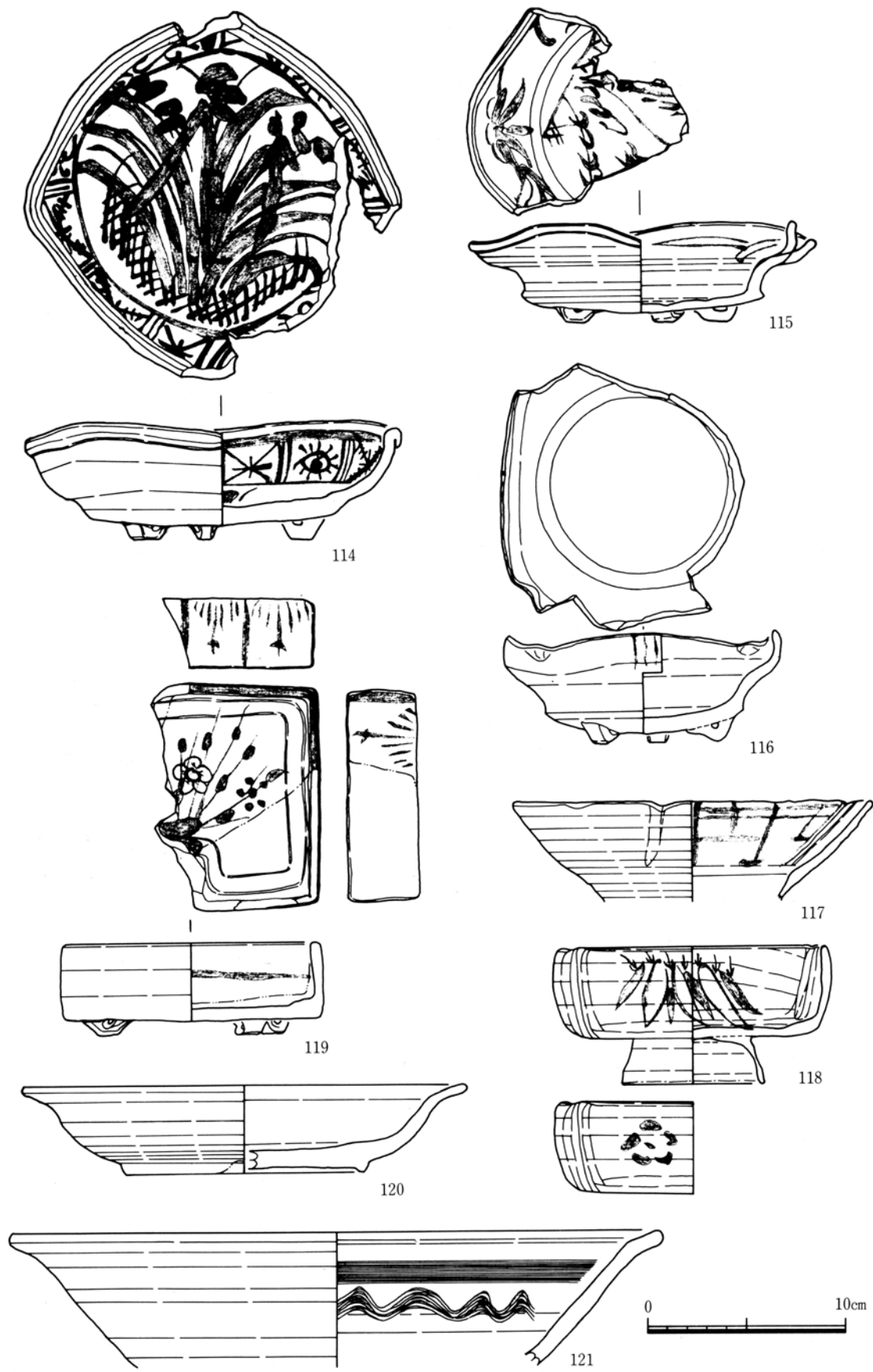
第30図 II期の遺物(3)

SD102(2)



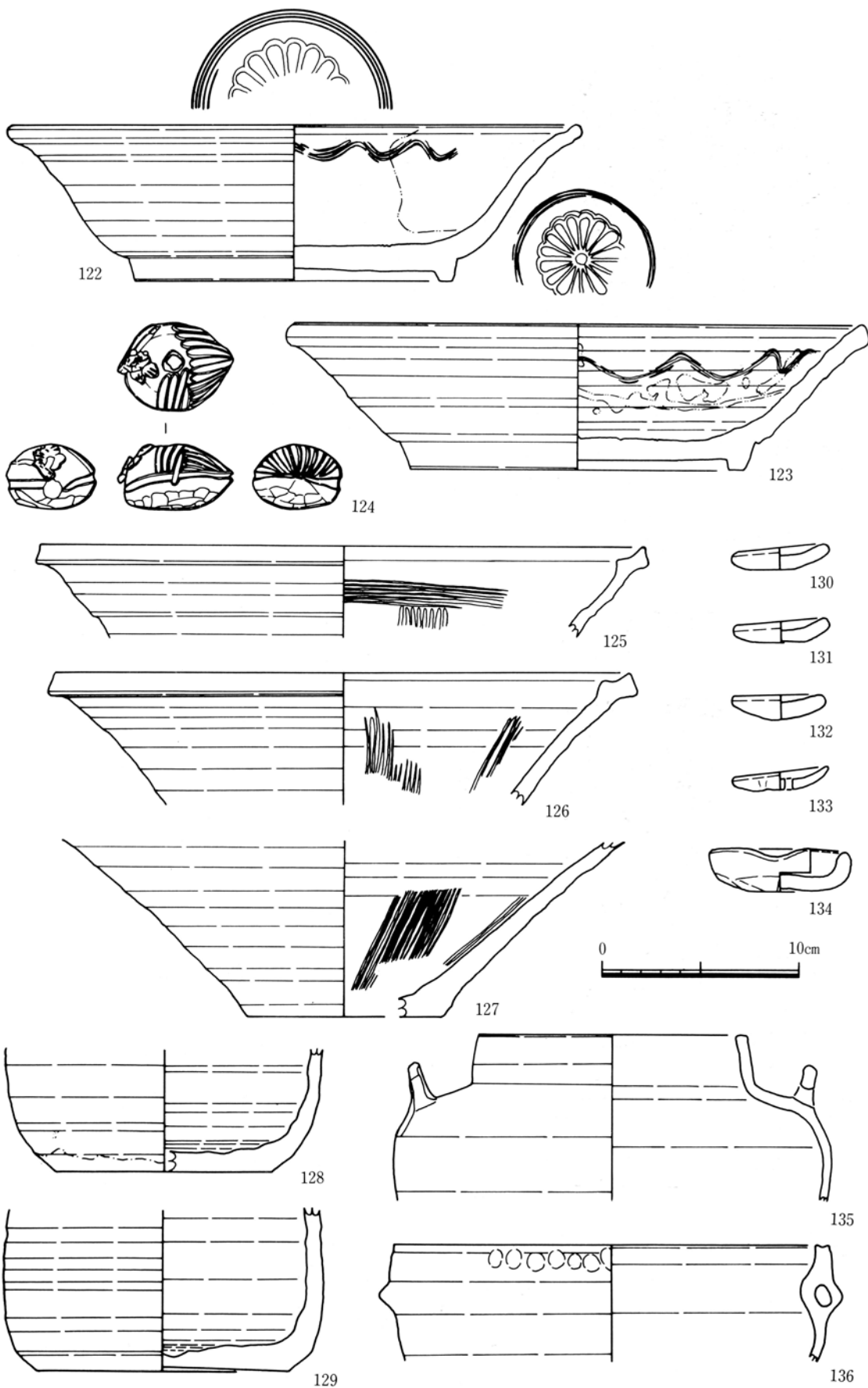
第31図 II期の遺物(4)

SK173(1)



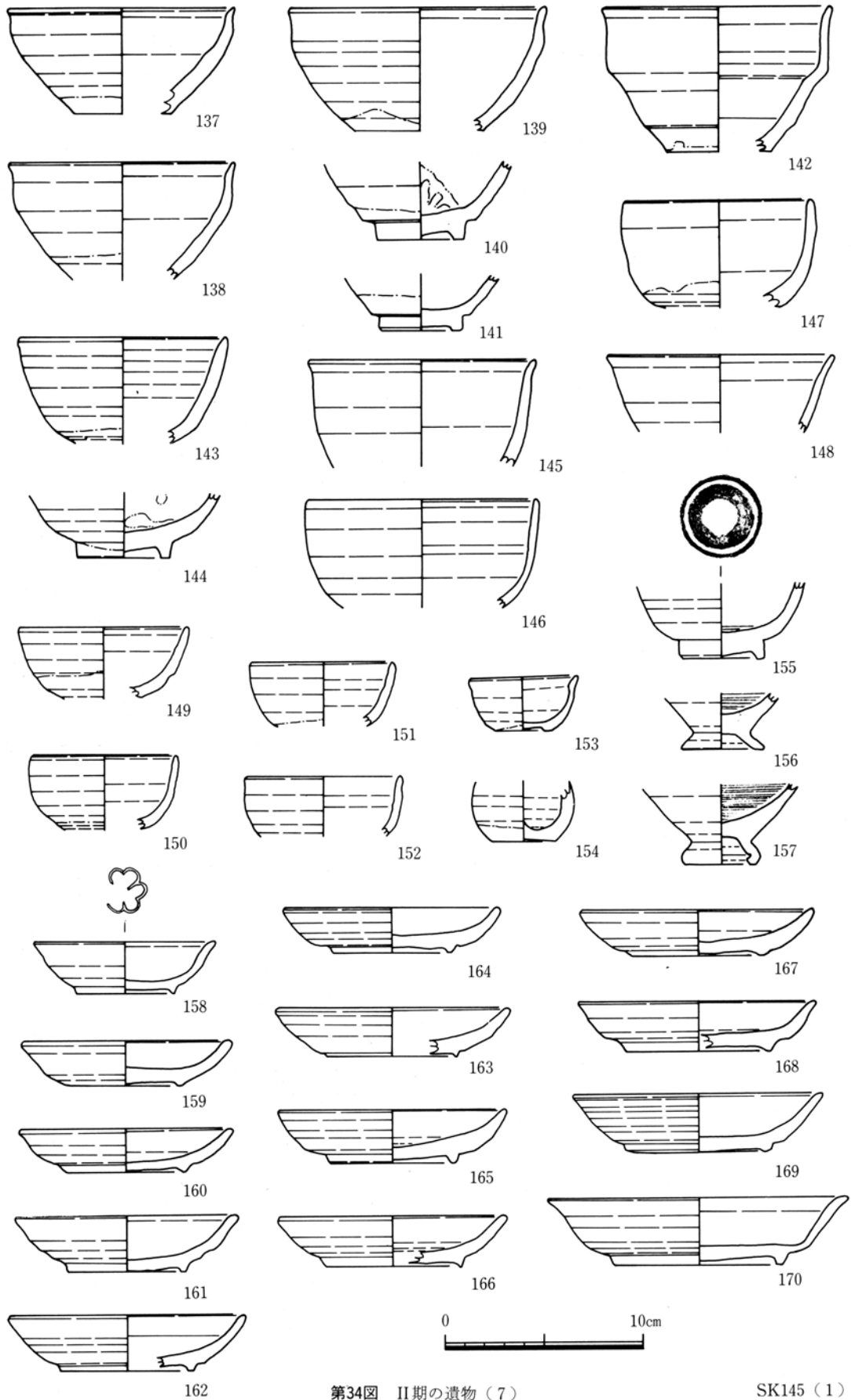
第32図 II期の遺物(5)

SK173(2)



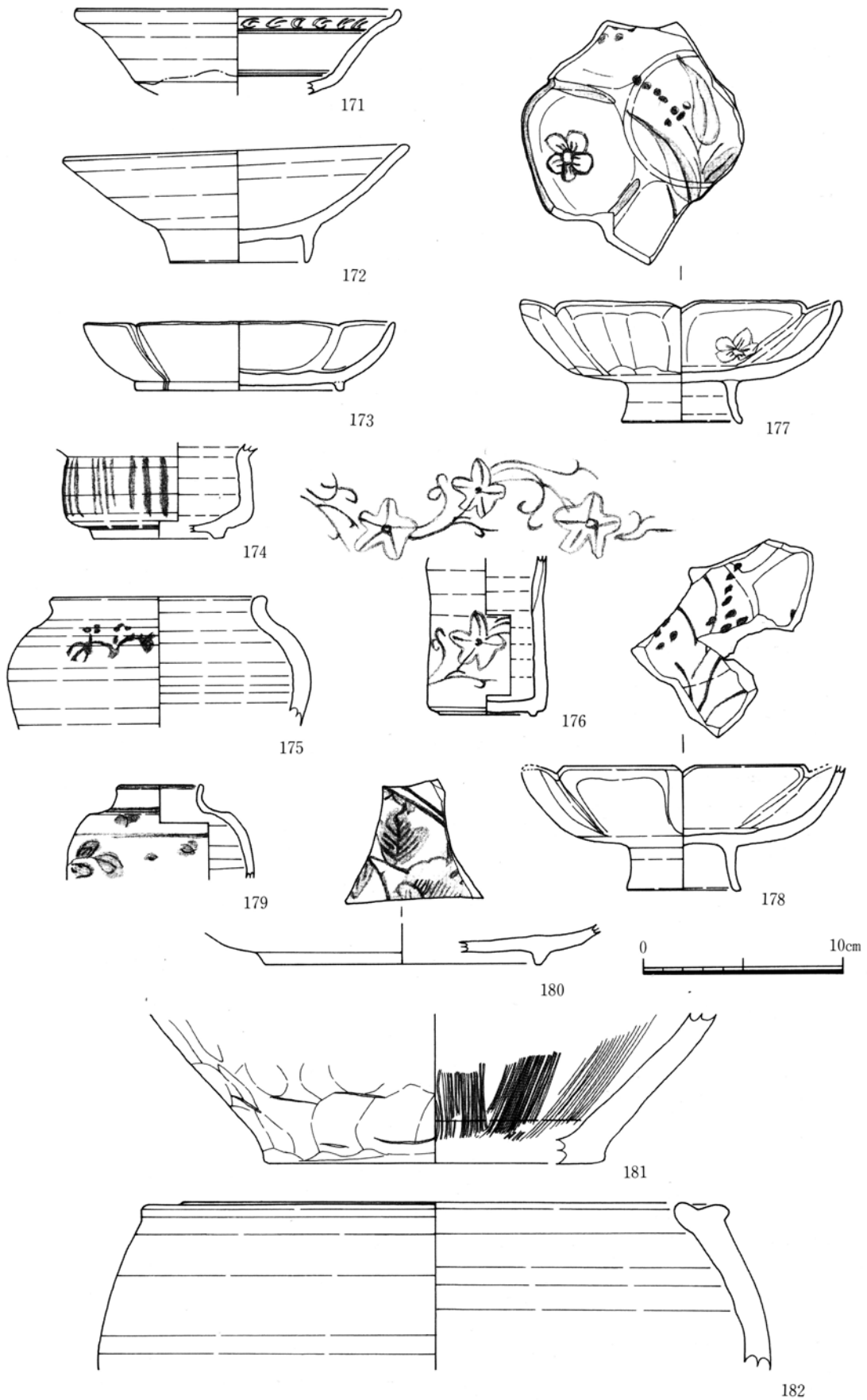
第33図 II期の遺物(6)

SK173(3)



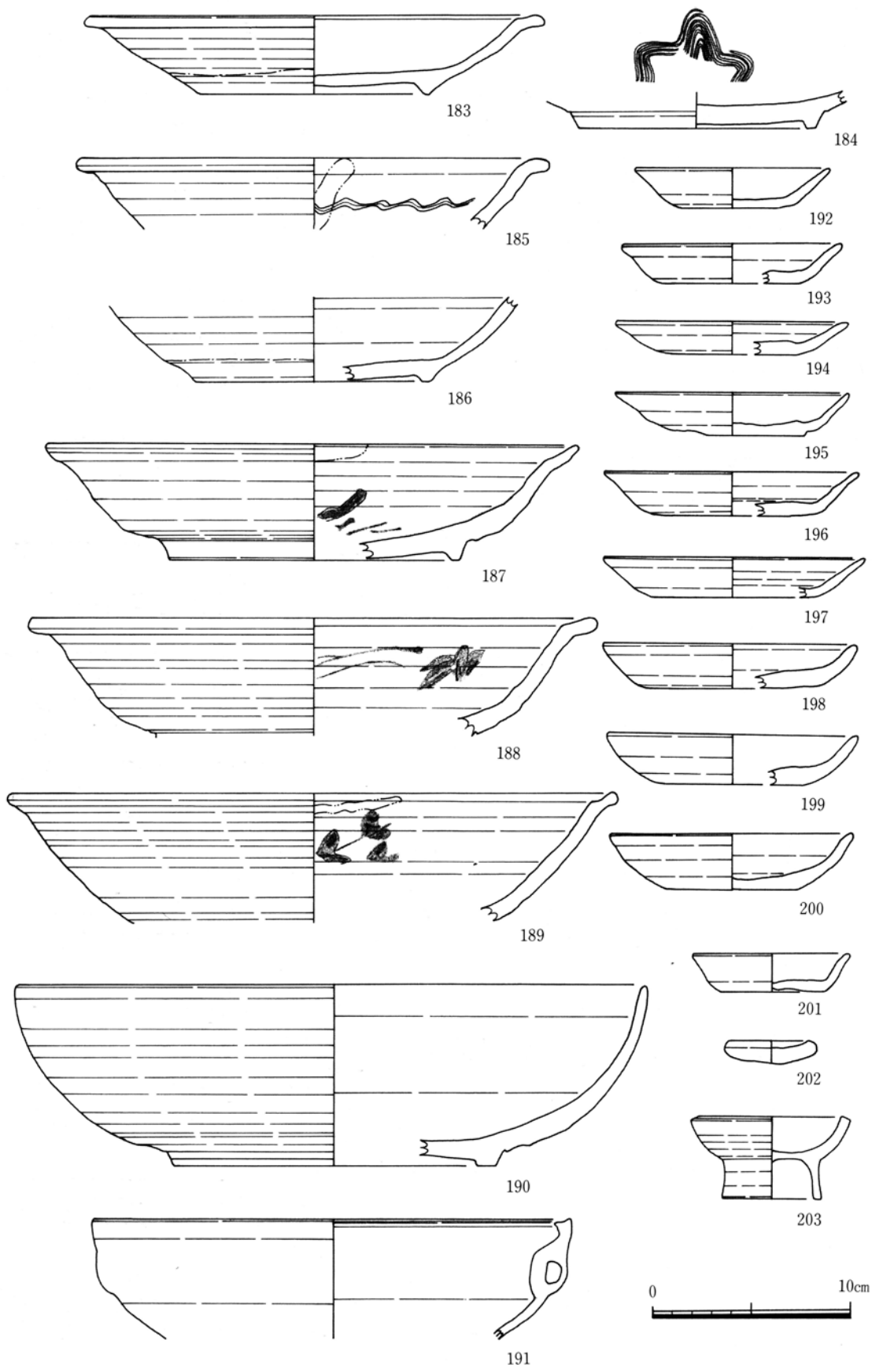
第34図 II期の遺物(7)

SK145(1)



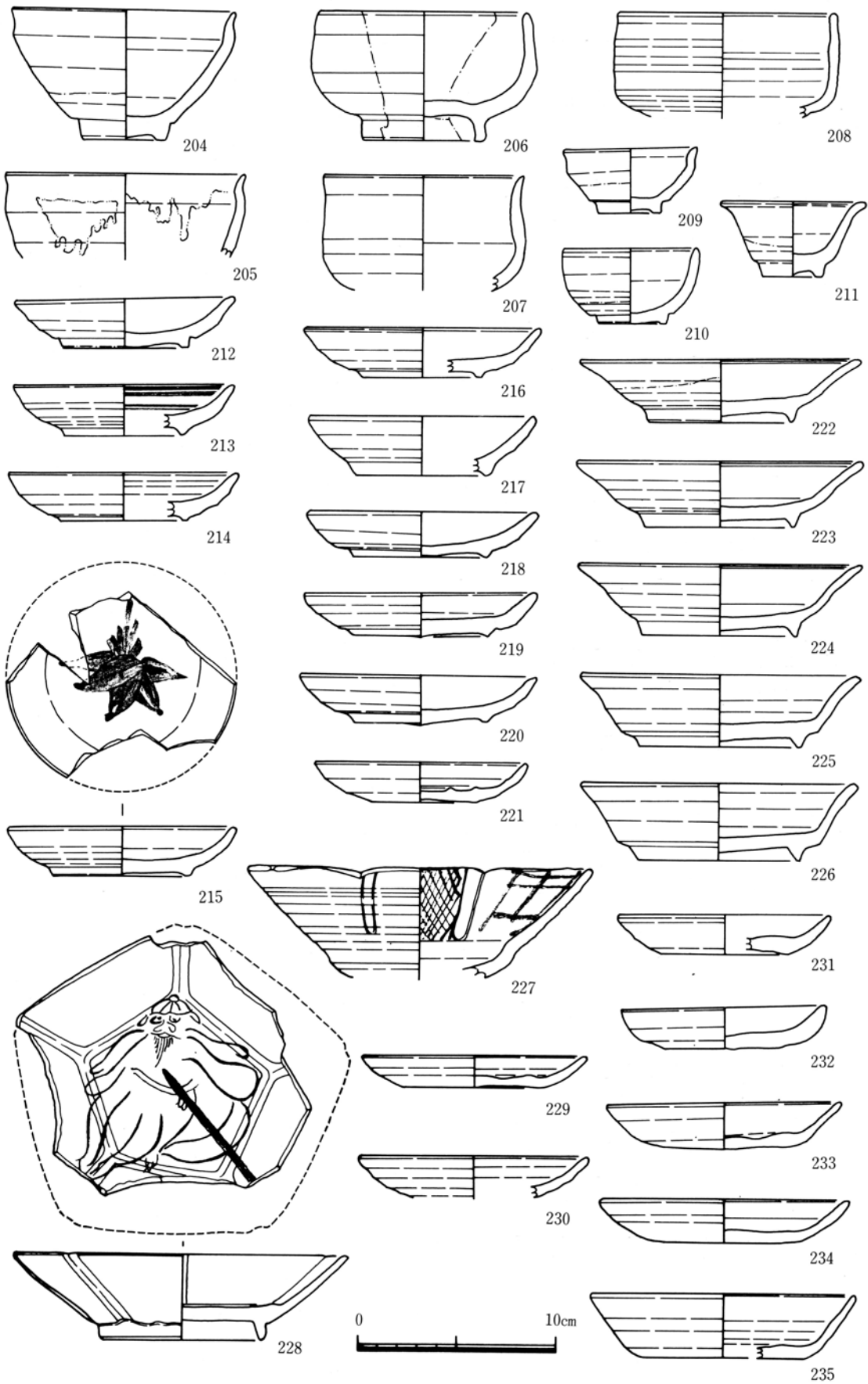
第35図 II期の遺物(8)

SK145(2)



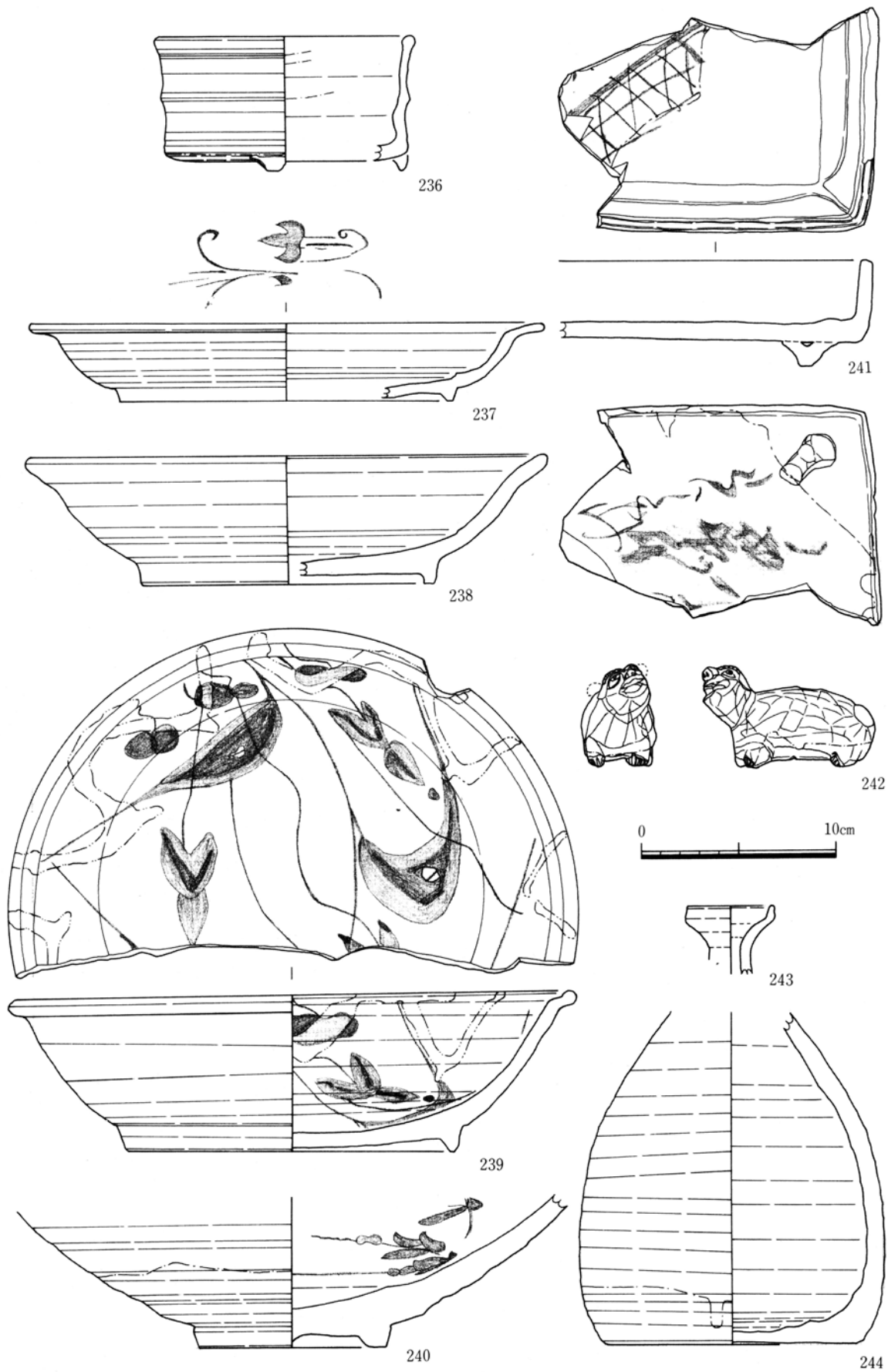
第36図 II期の遺物(9)

SK145(3)



第37図 II期の遺物 (10)

SK179 (1)



第38図 II期の遺物 (11)

SK179 (2)

S K 148 (第39～40図-245～286) 碗、皿、鉢、仏花瓶、油差し、水差し、香炉、甕、播鉢、土師質皿が出土した。(245・246)は碗B-3の灰釉の大形の丸碗、(247)は唐津産の灰釉の丸碗、(248)は鉄釉の碗B-4で口縁から内面にかけて灰釉が施釉された丸碗である。(249・250)は刷毛目装飾を施した現川産の碗である。(251)は内底面に印花文が押印された灰釉の皿、(252)は小碗B-1で鉄釉が施釉されている。(253)は磁器小杯A-2で肥前産である。(254)は皿Hの灰釉型打皿、(255)は皿Hの型打皿で五角形を呈し、内底面には鉄絵「南蛮人」が描かれている。(256)は鉢A-2の黄瀬戸鉢、(257)は内底面に鉄絵のある灰釉の鉢である。(258～260)は皿A-1で高台が三角形を呈し、口縁が反り気味の灰釉の丸皿で、(261)は内底面に呉須絵が描かれた皿である。(262)は灰釉の蓋物の身の部分、(263)は灰釉の仏花瓶で銅緑釉が流し掛けされる。(264～266)は小形の仏花瓶で(264)は鉄釉の上に胴部まで灰釉を施釉しており、(265)は胴部が六角形を呈し肩の部分に銅緑釉を流した灰釉の瓶、(266)は肩部に耳の付いた鉄釉の瓶である。(267)は鉄釉の油差し、(268・269)は共に鉄釉の水差しである。(270)は鉢Gの灰釉片口鉢、(272)は形態が窯道具の匣鉢に似ており、鉄釉が施されたもの、(273)は窯道具の匣鉢である。(274・275)は鉢H-2の小形の播鉢、(276)は鉢H-Iの播鉢である。(277・278)は青磁香炉で、(277)は腰部に播座が付き内面も施釉される肥前産の香炉、(278)は内面が素地となっている。(279)は外側面に鉄絵のある灰釉の香炉である。(280)は鉄釉の蓋A-1、(281～284)は土師質の皿である。(285)は皿I-2の志戸呂産の燈明皿である。(286)は常滑産の甕である。17世紀後半から18世紀のはじめの頃に比定される。

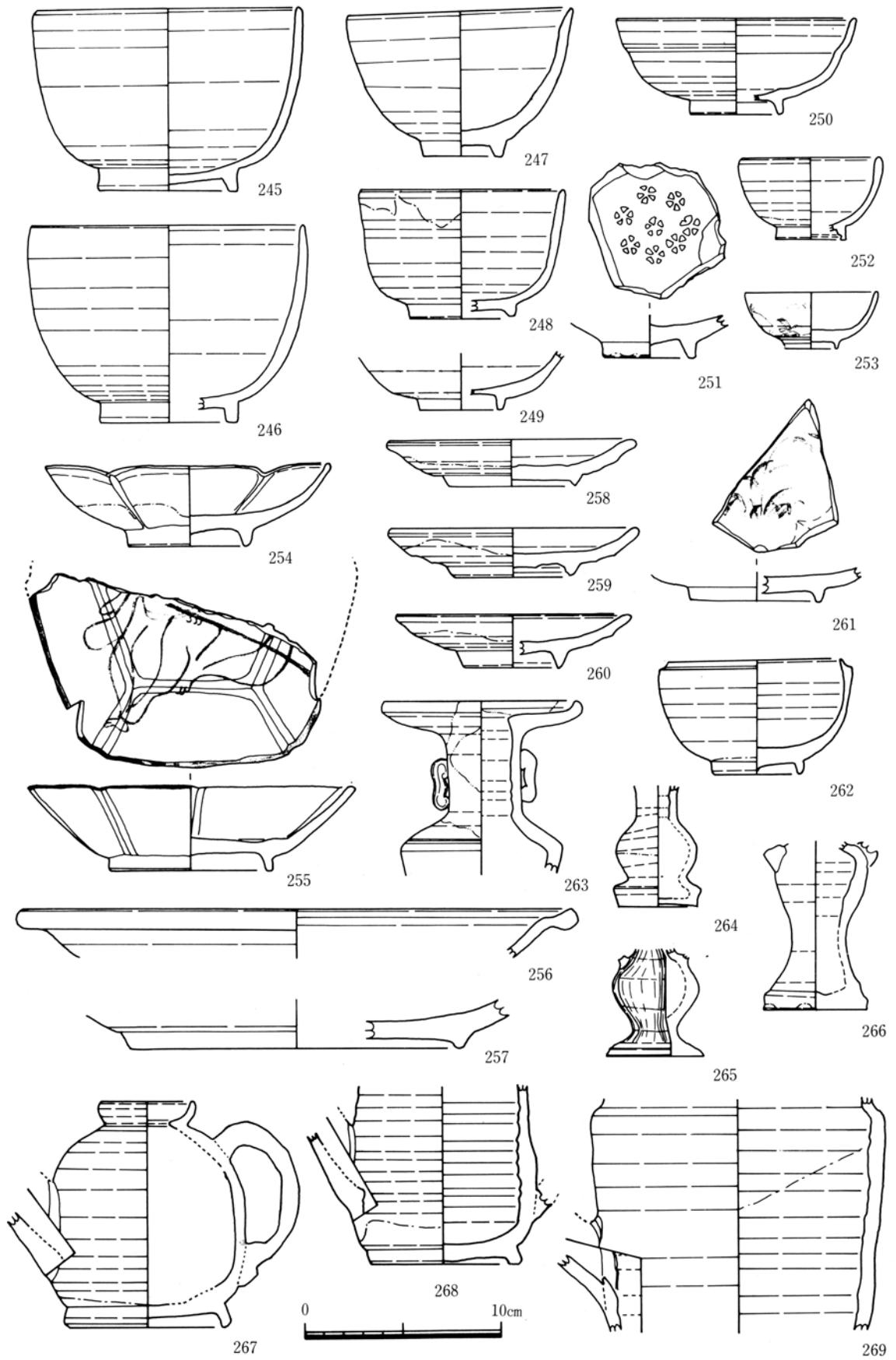
S K 130 (第41～51図-287～528) 碗、皿、鉢、播鉢、蓋、香炉、鬘盥、灰落し、唾壺、双耳壺、仏花瓶、徳利、餌摺り、捏鉢、甕、半胴甕、内耳鍋、火鉢、燈明皿の遺物が大量に出土した。(287～290)は碗B-3で(287)は胴部内側面に六条の沈線が巡る灰釉の丸碗、(288)はやや筒型を呈した灰釉丸碗、(289)は灰釉丸碗、(290)も灰釉丸碗だが外面口縁部に呉須による文様が描かれている。(291～301)は碗B-4の灰釉丸碗で(301)の外面口縁部に呉須による文様がある。(302～305)は碗Eで、(302～304)の口縁下には呉須による文様が描かれた御室茶碗である。(306)は灰釉の碗で胴部下方は丸くやや開き気味に立ち上り、胴部中央に浅い沈線が巡る筒型の碗である。(307)は碗C-1で灰釉が施された筒型碗である。(308)は灰釉の筒型碗で胴部の上方、中央、下方にそれぞれ一条の沈線が巡る。(309)は碗Gの柳茶碗である。(310・311)は碗Dで口縁周辺にうのふ釉が施釉されたいわゆる「尾呂茶碗」である。(312・313)は鉄釉丸碗で、(313)はやや大振りて端反となる。(314～320)は碗C-2の筒型碗でいわゆる「腰鏝」といわれる灰釉と鏝釉の掛け分けによる碗である。(321)は高台が小さい碗B-5に近い鉄釉丸碗、(322)は口縁が端反となった鉄釉丸碗である。(323～336)は刷毛目装飾の現川産の皿A-3で(323～328)は腰部から開き気味に立ち上った丸皿で器高が低く(323～327)の外面はいわゆる「蛸手」になっている。(329～331)は筒型の丸碗で(331)は端反の碗である。(337)は練り込みの内湾気味の胴部から口縁が端反となった丸碗である。(338)は胴部に指押えがあり呉須絵の施された灰釉の丸碗であ

る。(339~342)は信楽産の小型灰釉丸椀で胴部に文様が描かれている。(343~346)は小椀B-1で灰釉が施され、(345)には外面に呉須絵が施され、(347)は小椀Cで口縁が輪花状を呈した端反の灰釉小椀で口縁より呉須が掛けられている。(348~350)は皿A-3の灰釉丸皿で内面に呉須絵が描かれており、(350)は梅文様で花の部分が鉄摺絵で他の枝部分が手描きによる呉須絵となっている。(351)は四角い折縁灰釉皿で内底面には鉄絵が描かれている。(352)は皿A-2で、内側面に呉須絵が描かれている灰釉丸皿で文様がくずれており、(350)と共に19世紀にはいる時期のもので混入の可能性が高い。(353)は灰釉小皿、(354~356・358・359)は皿A-2の灰釉丸皿で(359)は口縁の内側に濃い灰釉が五条流れている大きな皿である。(357)は皿Hの型打角皿で四角になった口縁の間を削り波状口縁風にした内面に鉄絵のある灰釉皿である。(360~375)は皿A-2の摺絵が内底面に描かれた灰釉の丸皿、(376~377)は皿Bの折縁の灰釉皿で内底面には摺絵が描かれている。(378・379)は肥前産の鉢で(378)は内面に象嵌が施されているやや端反気味の鉢、(379)は現川焼で刷毛目装飾が施され、胎土も精緻で成形がシャープである。(380)は鉢A-1の黄瀬戸折縁鉢、(381・382)は鉢A-3の折縁鉢である。(383)は鉢H-2の鉄釉の小型挿鉢、(384・385)は鉢H-1の鉄釉挿鉢で、(385)の内側には「元山」の押印がある。(386~403)は各種の蓋である。(386)はつまみの付いた鉄釉の蓋Bで茶入れの蓋か、(387・388)は蓋Aの鉄釉落し蓋で小壺等の蓋か、(389)はつまみのない灰釉の蓋、(390)は上面に摺絵が描かれた蓋Cでつまみがなくない灰釉蓋、(391)も蓋Cでつまみのない灰釉蓋、(392)は蓋Bの灰釉蓋、(393・394)は蓋Cの灰釉蓋、(395・396)も灰釉蓋で(396)の口縁に鉄絵が描かれている。(397・398)は蓋Eの灰釉蓋、(399・400)は上面に摺絵が施された蓋D-3でつまみの付いた灰釉の蓋、(401)は長方形又は正方形の鉄釉が施されたバンドコ(火箱)の蓋、(402・403)は蚊いぶしの蓋で透かしのあるものとないものがあり、いずれも内面は煤がタール状に付着している。(404~406)は灰釉合子の身の部分であるが、(404)は香炉かもしれない。(407~409)は香炉で、(407)は鉄釉香炉で灰釉が流し掛けられ、口縁が激しく摩滅しており灰落しに転用された可能性がある。(408)は釘彫りによる文様が描かれた灰釉香炉、(409)も灰釉香炉である。(410・411)は灰釉鬚盥で、(410)の側面には摺絵が描かれている。(412・413)は鉄釉灰落しで、胴部には細い沈線と丸彫りによる縦の沈線が巡り、口縁から胴中央部にかけて灰釉が施釉され、(412)は胴部から口縁にかけて内湾し、(413)は胴部からほぼ垂直に立ち上っている。(414・415)は灰釉の唾壺である。(416)は鉄釉茶入れで口縁から肩にかけ灰釉が流れている。(417・418)は鉄釉双耳壺で、(419・420)は鉄釉短頸壺である。(421)は鉄釉鍋、(422)は鉄絵のある灰釉の急須、(423)は摺絵のある長石釉水差し、(424)は灰釉杓立てか、(425・426)は鉄釉仏花瓶で(425)は胴部が細く、(426)は胴部が太い。(427~432)は徳利Bで、(427)は胴部がやや張り出し胴部下方と底部にヘラ削り痕のある灰釉の徳利、(428)は頸部がほぼ直立しており、頸部の付け根には沈線が巡り、沈線と沈線の間には釘彫りによる花文が描かれ、その上を呉須で重ねた灰釉のいわゆる御納戸徳利、(429)は肩が張り胴部がやや太めで肩にうのふ釉が斑点状に

なった鉄釉のいわゆる尾呂徳利、(430)は胴部が細く肩が張り、肩に五条の櫛描きによる平行沈線が巡り、口縁が折り返され帯の広い縁帯となり、肩にうのふ釉が流し掛けられた灰釉の尾呂徳利。(431)は胴部が細く、肩がやや張り、肩部には沈線が巡り、底部周辺の釉が拭き取られた鉄釉の尾呂徳利。(432)は胴部が細く、肩部に五条の櫛描きによる平行沈線の巡る灰釉の尾呂徳利である。(433・434)は灰釉餌入れで、半筒形の胴部を持ち口縁下に把手が付き、(433)は胴部に鉄絵が施されている。(435～441)は鉄釉餌挿りで、平底で、直線的に開いたものと(441)のような底部より丸味を帯びて開いたものがある。(442～445)は鉄釉の餌鉢で、底部より丸味を帯び、口縁が外反した小型の鍋状を呈する。(446～449)は捏鉢で(446)は鉢F-1の内湾する灰釉捏鉢、(447)は鉢F-2の灰釉捏鉢、(448)は鉢F-3の灰釉捏鉢で高台内の釉はふきとっている。(449)は鉢F-4で蛇の目高台で丸味を帯びて立ち上り、折り縁の口縁となり、口縁に鉄釉を流し掛けた灰釉捏鉢である。(450)は水甕の浅形で胴部下方に稜が入り、やや外反気味に立ち上り、胴部には流水文が彫られ、高台周辺を除き灰釉が施され、鉄釉と緑釉を交互に流し掛けている。(451～461)は常滑産の赤褐色を呈した製品で(451～453・460・461)は甕、(454～459)は浅鉢である。(462)は口縁が内湾気味で胴部上方に二条、下方に一条の沈線が巡る鉄釉半胴甕である。(463～465)は内耳鍋で小形のもの(465)もある。(466)は土師質の三足のついた非実用品の小形鍋である。(467)は三足の付く、内湾した胴部を持った瓦質の火鉢で、明赤褐色を呈した胴部には押印による文様が施されている。(468)は身の深い燈明具の長石釉蓋で、つまみが付き鉄絵が描かれている。(469～471)は鉄釉燈明皿で(469・471)は皿I-1、(470)は皿I-3のつまみの付いたものである。(472～492)は底部に糸切り痕のある土師質皿で(480)には底部に角釘が刺っており、(481・482)は底部に穿孔があり、(480)のように角釘を刺し、そこへロウソクを立てた燈明皿の可能性もある。(493～528)は磁器製品で産地は遺物観察表に記してある。(493～498)は椀Aの丸椀で、(495)の高台には「福」が、(498)の高台には「大明年製」のくずれた文字がかかっている。(499～506)は小椀で(499～501・504)はA-1の内湾した丸椀、(502)はA-2の丸椀、(503)は小椀Bの端反椀、(505)は小椀C-1の筒型椀、(506)は小椀C-2の筒型椀である。(507～516)は磁器小杯で(507～510)がA-2の丸型小杯、(511・512)はA-1の丸型小杯、(513・514)はB-1の筒型小杯、(515・516)もB-1の筒型小杯であるが大形である。(517・518)は蓋で(517)にはつまみが付く。(519・520)は仏飯具、(521)は胴部に沈線が巡る青磁の線香立てか、(522)は壺、(523～525)は紅皿で(523)がF-2の丸い紅皿、(524・525)はF-1の隋円形の紅皿である。(526～528)は磁器皿Aの丸皿で(527)には墨弾きによる文様が内側面に描かれ、(528)の内底面にはコンニャク判の五弁花が施されている。18世紀後半の時期に比定される。

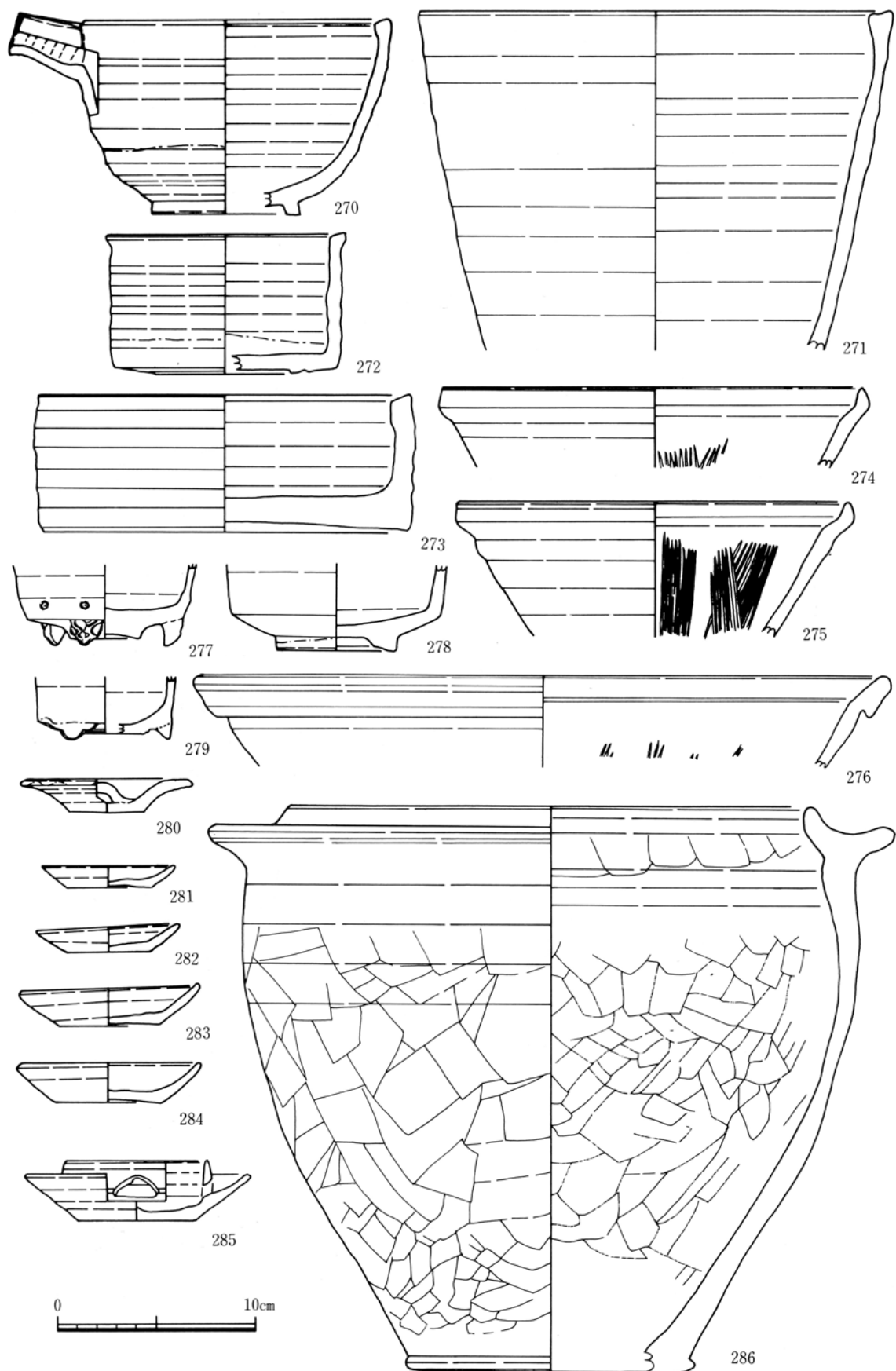
S K 189 (第52～57図-529～646) 椀、皿、鉢、挿鉢、捏鉢、乗燭、燈明皿、火鉢、七輪、植木鉢が出土した。(529～533)は椀B-3の灰釉丸椀である。(534)は椀A-1の灰釉椀、(535)の椀は、胴部下方がやや丸味を帯び、上方に開き渦巻状の鉄絵が描かれた灰釉椀で椀Gに似

ている。(536)は椀Gの胴部に柳文の描かれた柳茶椀であるが小振りである。(537・538)は椀C-1の胴部に沈線が巡り、鉄釉の流し掛けが施された灰釉の筒型椀、(539)は口縁がやや外反し、口縁下に太くて深い沈線による波状が一条巡った鉄釉の筒型椀、(540)は口縁が外反気味で口縁下に五条の沈線が巡る鉄釉の筒型椀、(541)は胴部に四条の沈線が巡る椀C-2の筒型椀で灰釉が施釉されており、(542)は腰部が鋭角になり上方が開いた灰釉筒型椀、(543)は信楽の鉄絵の施された灰釉椀、(544・545)は小椀で(544)は小椀Cで長石釉が施釉された端反小椀、(545)は小椀Dで灰釉が施された筒型小椀、(546~548)は椀B-5の丸椀で(546・548)は灰釉が施され、(548)には鉄絵が描かれており、(547)は鉄釉が施釉されている。(549・550)も椀B-5の灰釉丸椀で、(550)には鉄絵による松が描かれている。(551~553)は椀C-3の筒型椀で、(551・552)は銅部に呉須による文様が描かれた灰釉椀、(553)は銅緑釉が施釉されている。(554)は腰部に段が付き、胴部が短い小鉢で、胴部に呉須による文様が描かれている。(555~557)は皿A-2の呉須絵が内面に描かれた灰釉丸皿、(558)も皿A-1であるが、浅く内底面に摺絵が施された灰釉丸皿である。(559)は皿Fの襲皿で内底面には摺絵が施されている。(560)は皿Hの灰釉が施釉された四角い型打皿、(561)は盃で内面には巴文などの摺絵があり灰釉が施される。(562)は皿Hの灰釉型打皿で六角形を呈し、内底面には呉須絵が描かれている。(563・564)は高台から直線的に開いて立ち上った灰釉丸皿、(565)は皿Dの浅い灰釉の反り皿、(566・567)は皿A-2の灰釉丸皿である。(568)は灰釉の合子の身の部分、(569・570)は灰釉餌入れて半筒形の胴部を持ち、(569)は口縁下に把手が付いている。(571)は灰釉小壺、(572・573)は鉄釉の茶入れ、(574)は灰釉壺、(575~577)は杓立てで細長い胴部には(577)のように摺絵が描かれたものもある。(578・579)は高台付鉄釉乗燭、(580)は灰釉乗燭である。(581・582)は皿I-2の鉄釉燈明皿、(583~585)は皿I-3のつまみ付鉄釉燈明皿、(586~588)は皿I-1の鉄釉燈明皿である。(589・590)は鉢F-3の灰釉捏鉢で(589)は小振りである。(591)は鉢F-2の灰釉捏鉢である。(592・593)は鉄釉鍋、(594)は胴中央に太い沈線が巡り、口縁部に指押え痕のある鉄釉流しの灰釉大皿、(595)は、腰部より直角に立ち上り、口縁が受け口状の灰釉水差し、(596)は灰釉香炉、(597)は匣鉢、(598)は灰釉香炉か、(599)は灰釉の蓋付壺の壺か、(600)は口縁が玉縁状の鉄釉壺である。(601~609)は蓋で、(601・602)は灰釉の蓋B、(603)は灰釉の蓋C、(604)は灰釉の蓋A-1、(605・606)は鉄釉の蓋A-1、(607)は摺絵の施された灰釉の蓋C、(608)は灰釉蓋、(609)は灰釉の蓋Eである。(610)は内側面に呉須による線が描かれた、鉢C-2の輪禿灰釉小鉢。(611)は鉢A-2の口縁がやや外反し、内面に銅緑釉が流し掛けられた黄瀬戸鉢、(612)は鉢A-3の内面に鉄絵が描かれた笠原鉢である。(613)は鉄釉插鉢H-2、(614)は鉄釉插鉢H-1である。(615)は胴上部につまみの付いた仏花瓶、(616)は鉄釉徳利の細長い頸部、(617)は口縁下が三角状の隆帯となった鉄釉徳利の口縁部、(618)は徳利Bで肩部に鉄釉が掛けられた灰釉徳利である。(619)は肩部に六条の沈線が巡る鉄釉甕、(620)は鉄釉半胴甕、(621)は鉢J-2の鉄釉火鉢で三足が付く、(622・623)は常滑産の赤褐色を



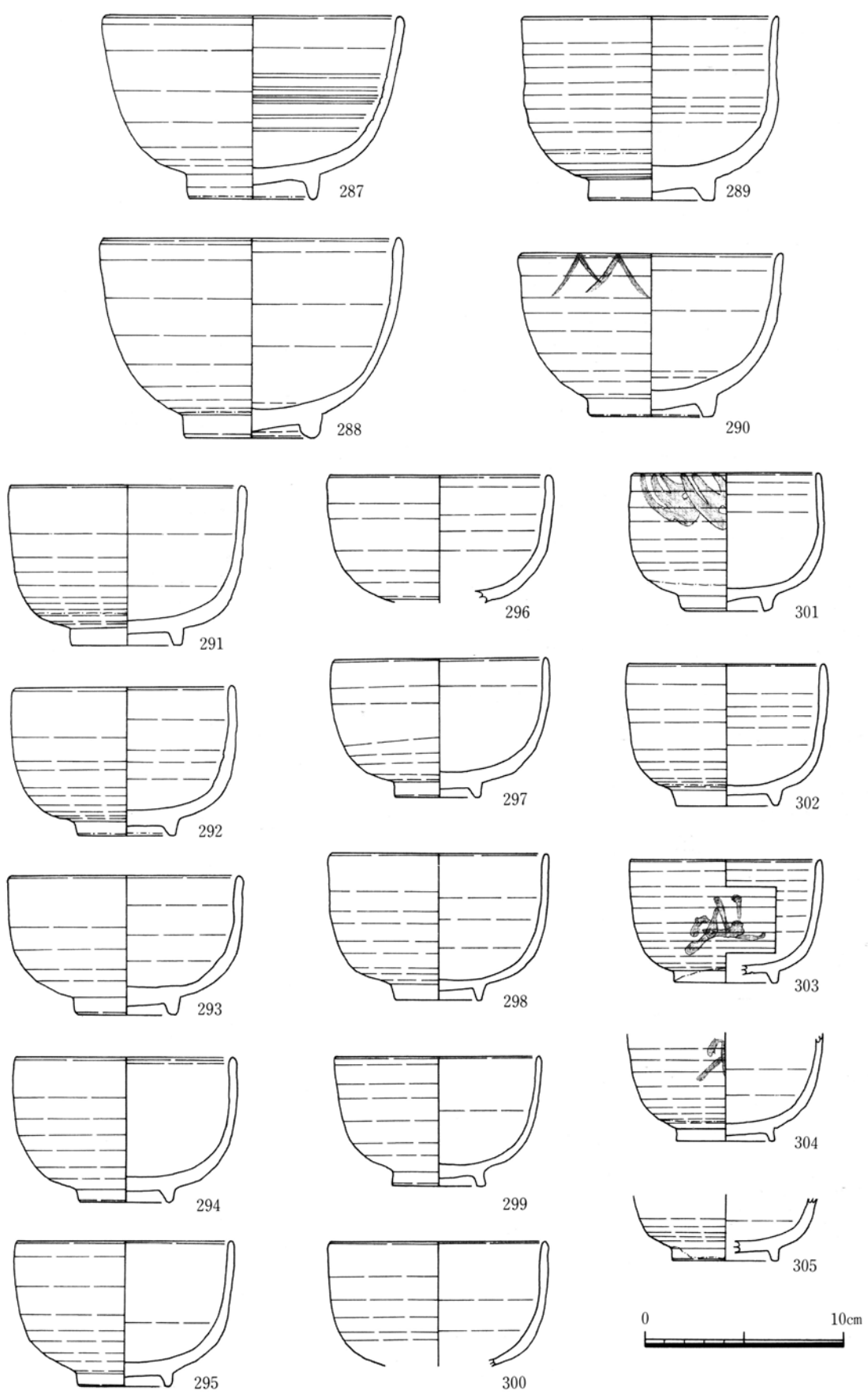
第39図 II期の遺物 (12)

SK148 (1)



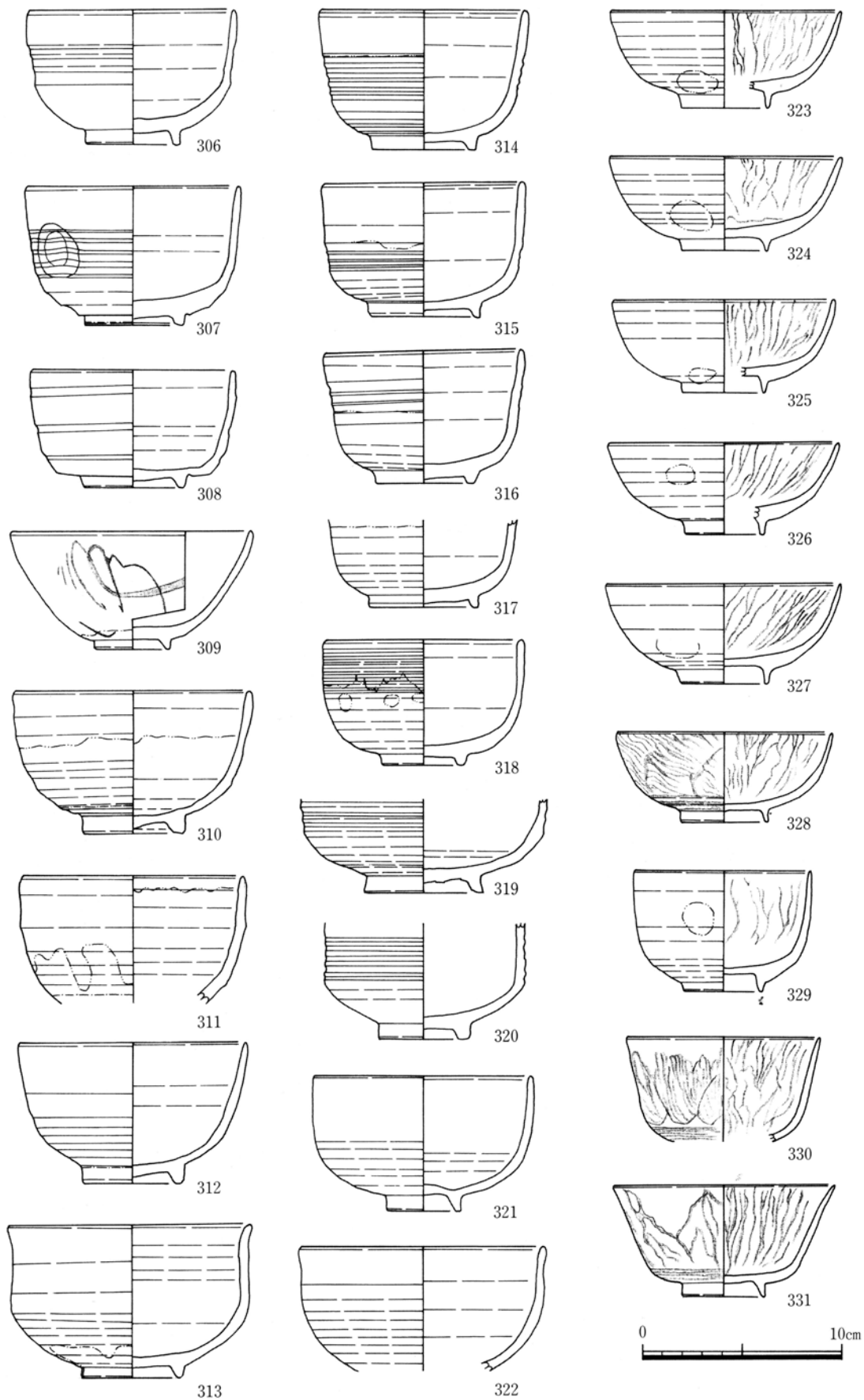
第40図 II期の遺物 (13)

SK148 (2)



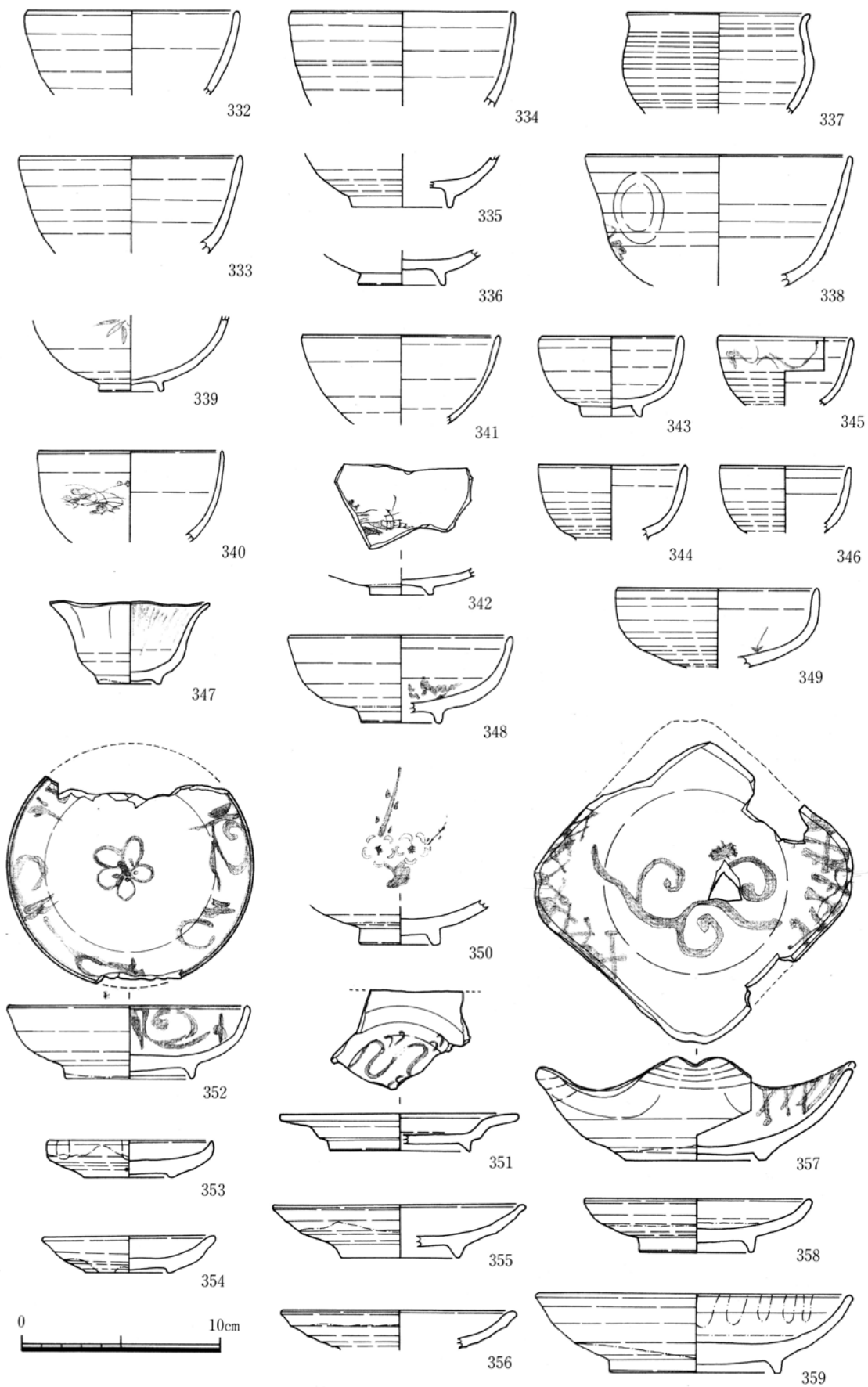
第41図 II期の遺物 (14)

SK130 (1)



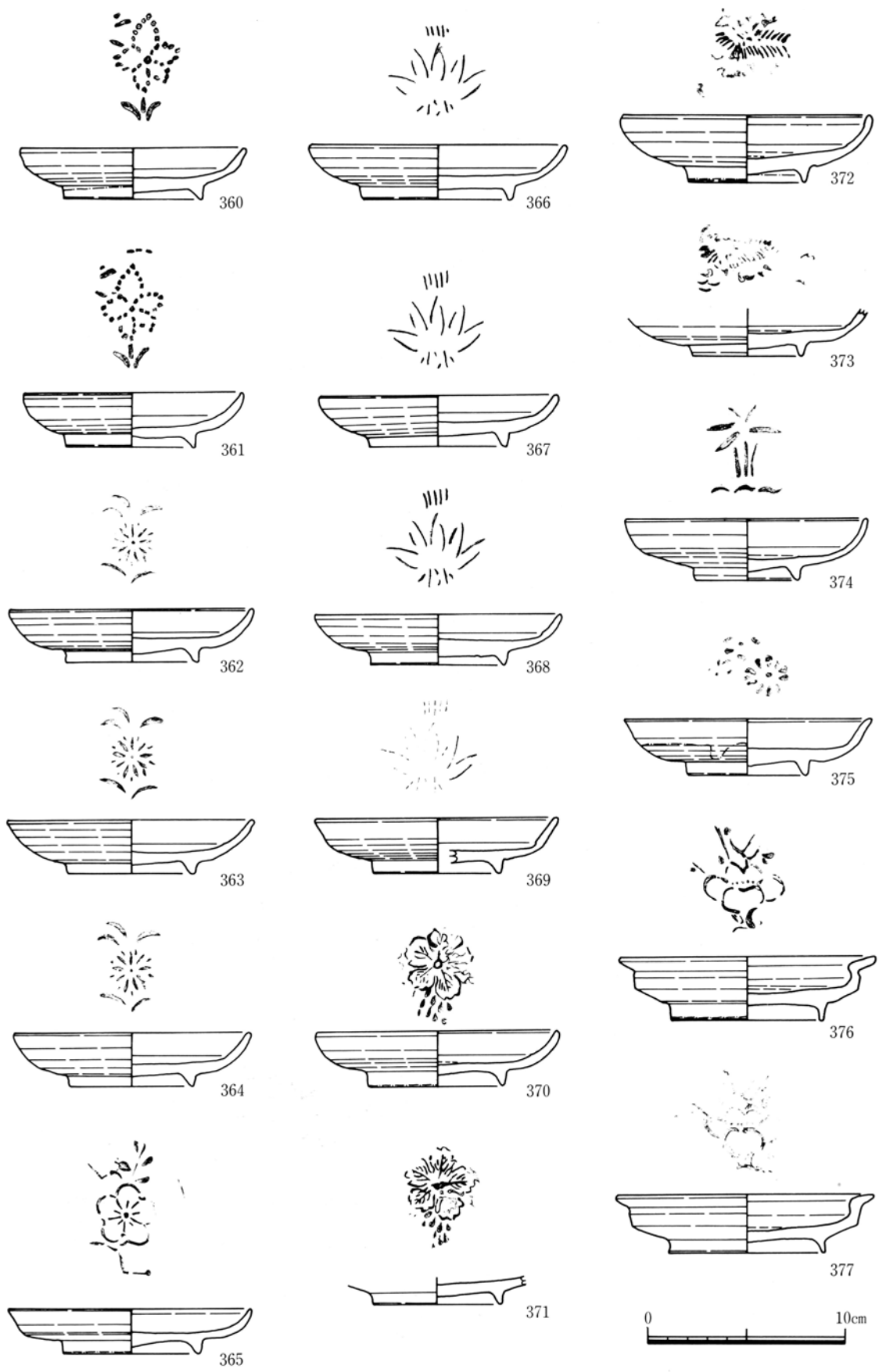
第42図 II期の遺物 (15)

SK130 (2)



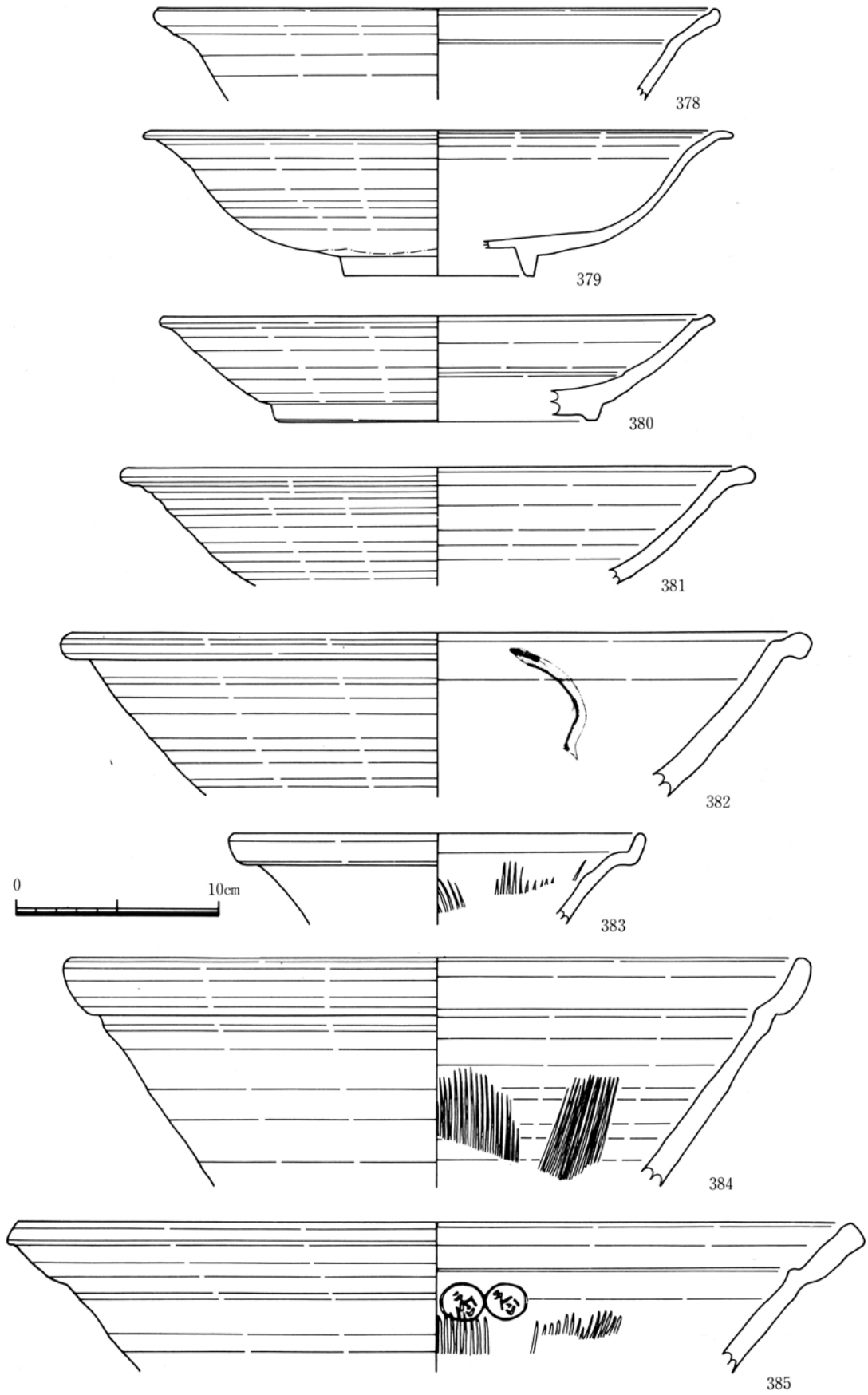
第43図 II期の遺物 (16)

SK130 (3)



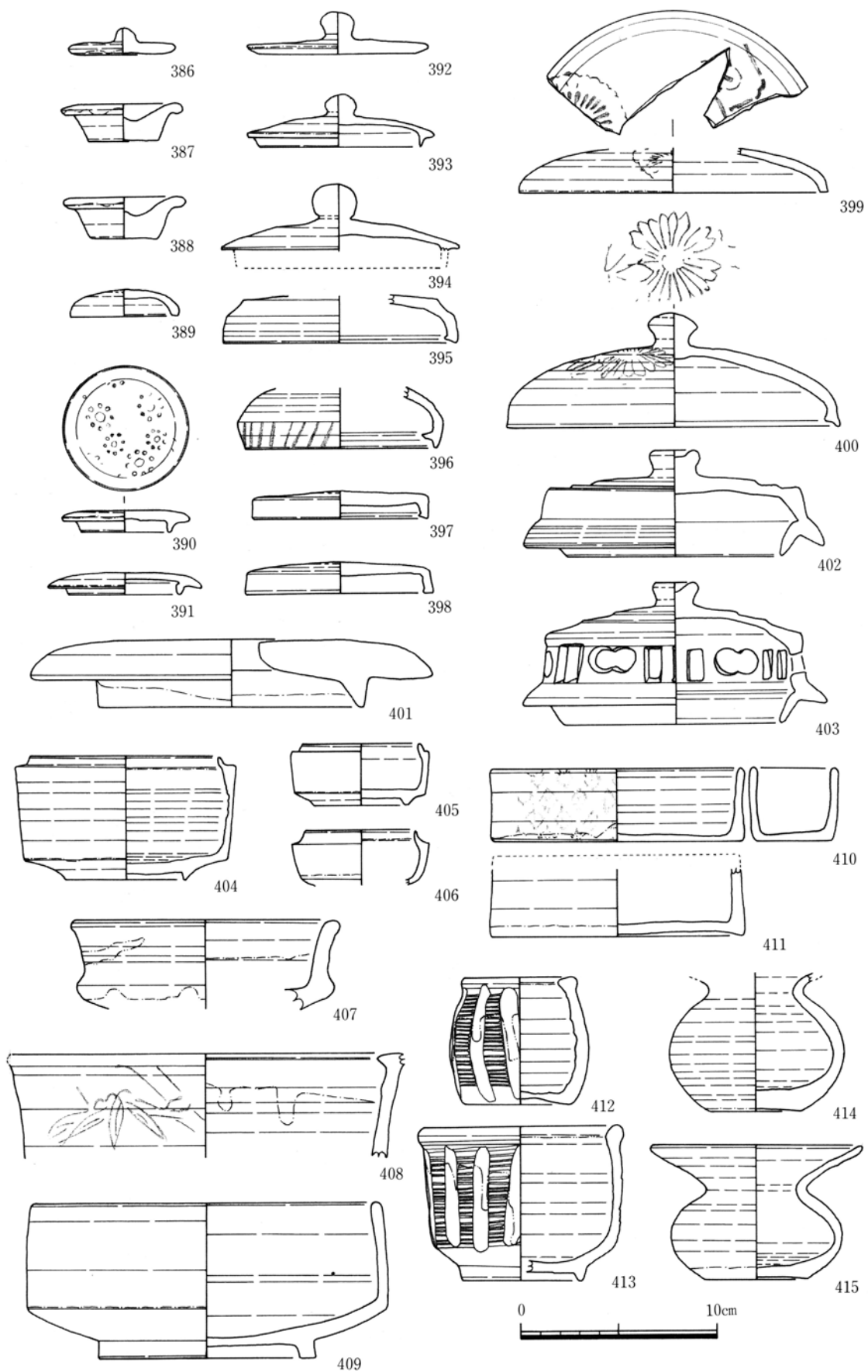
第44図 II期の遺物 (17)

SK130 (4)



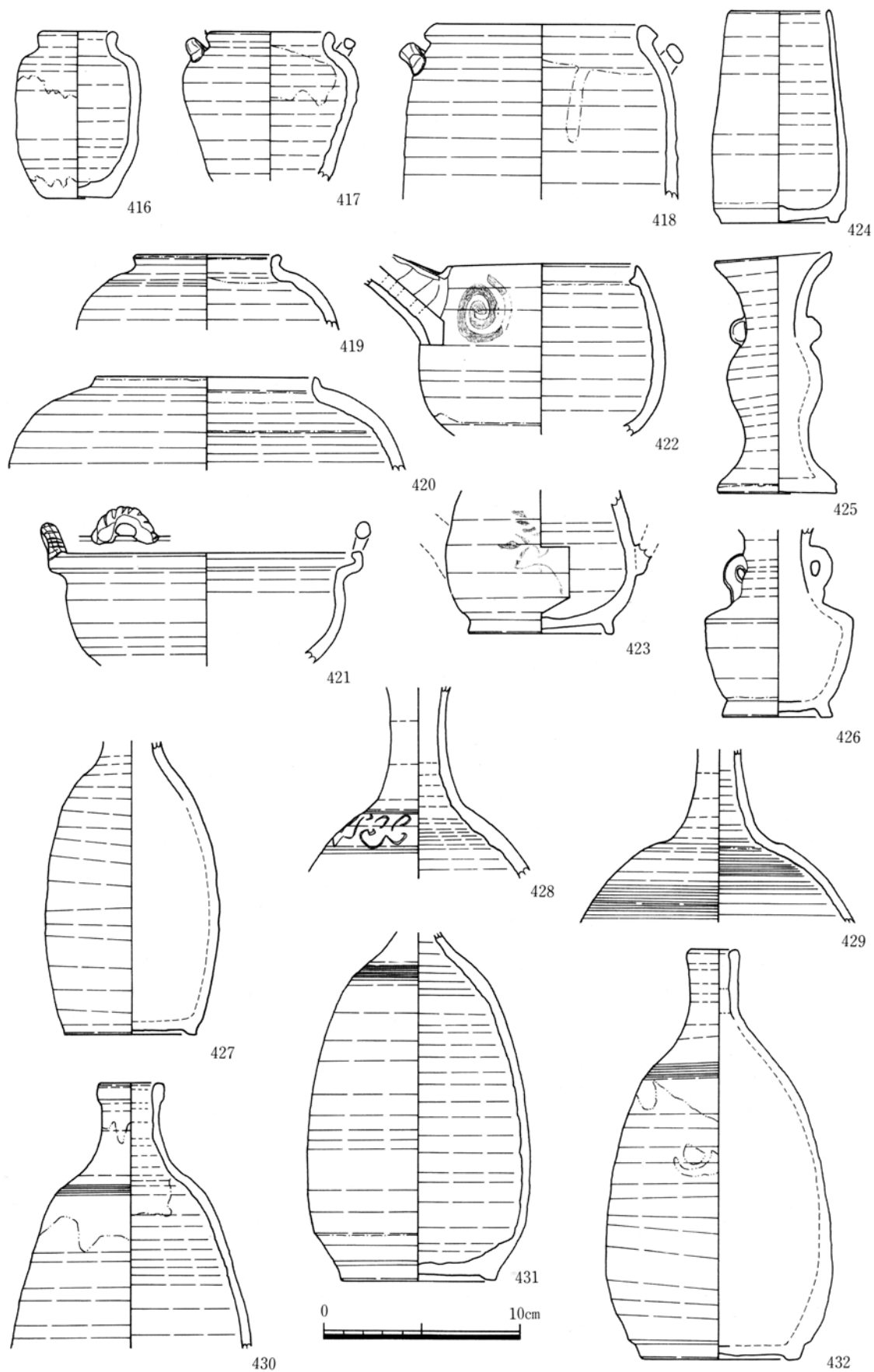
第45図 II期の遺物 (18)

SK130 (5)



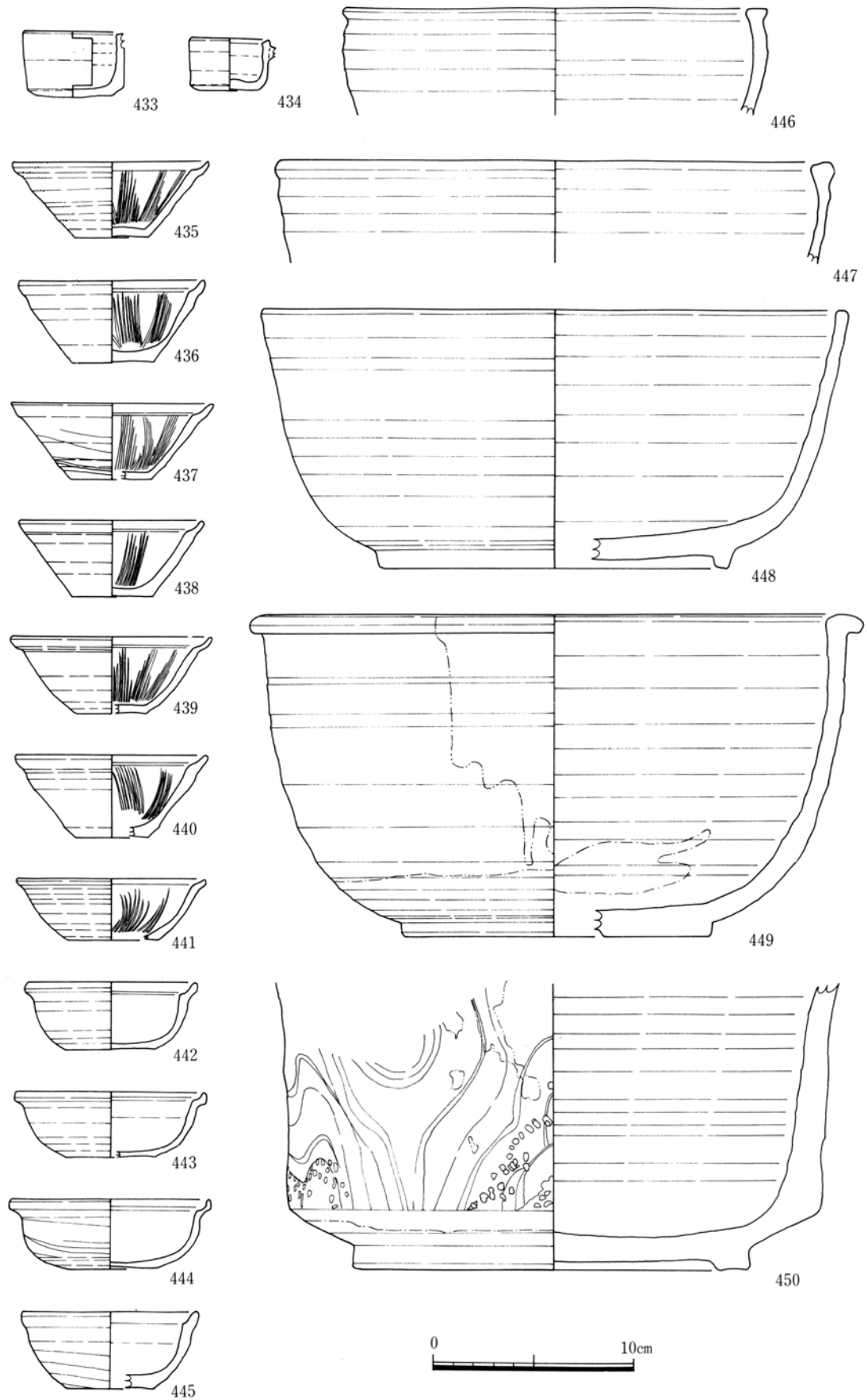
第46図 II期の遺物 (19)

SK130 (6)



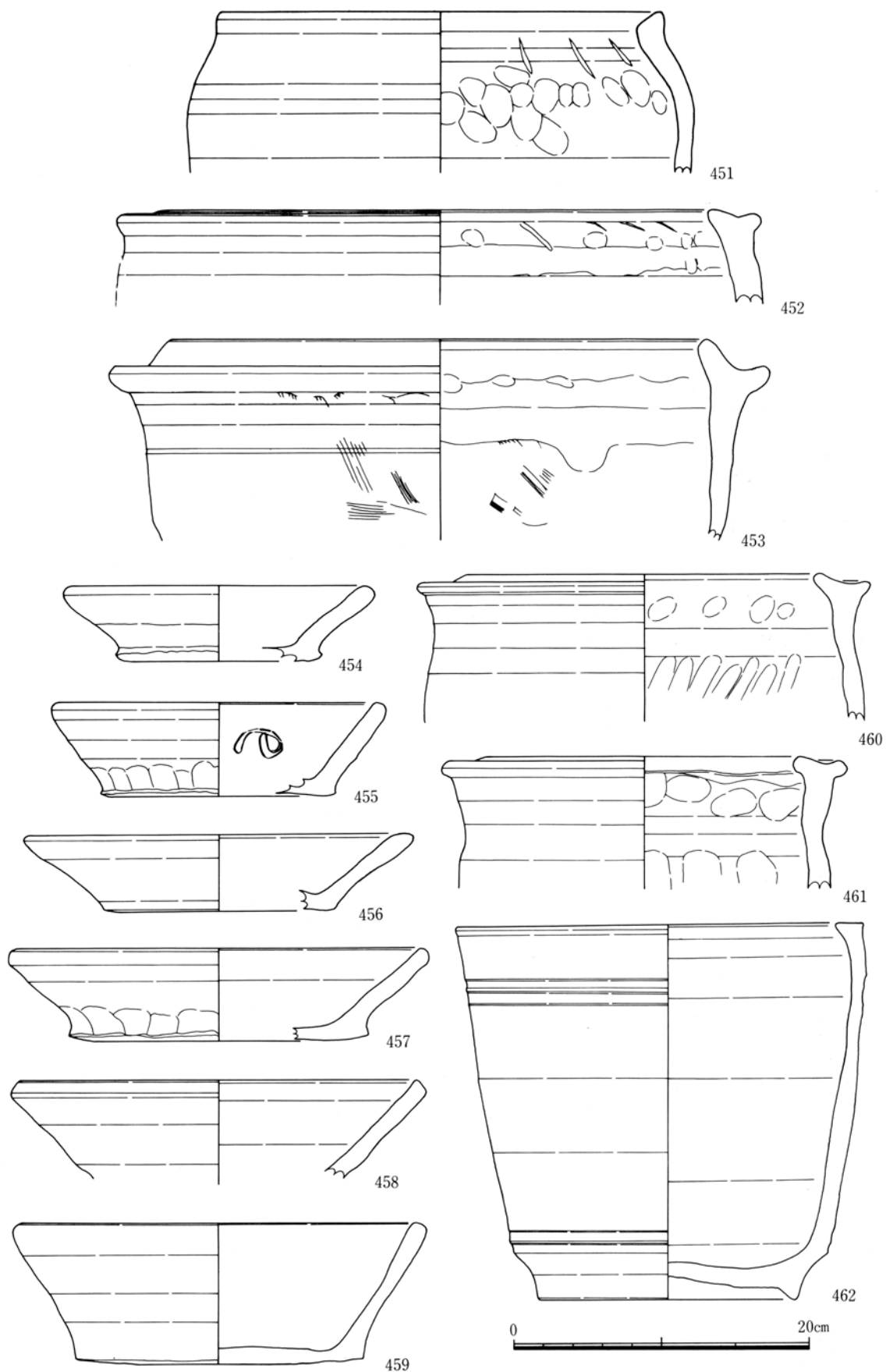
第47図 II期の遺物 (20)

SK130 (7)



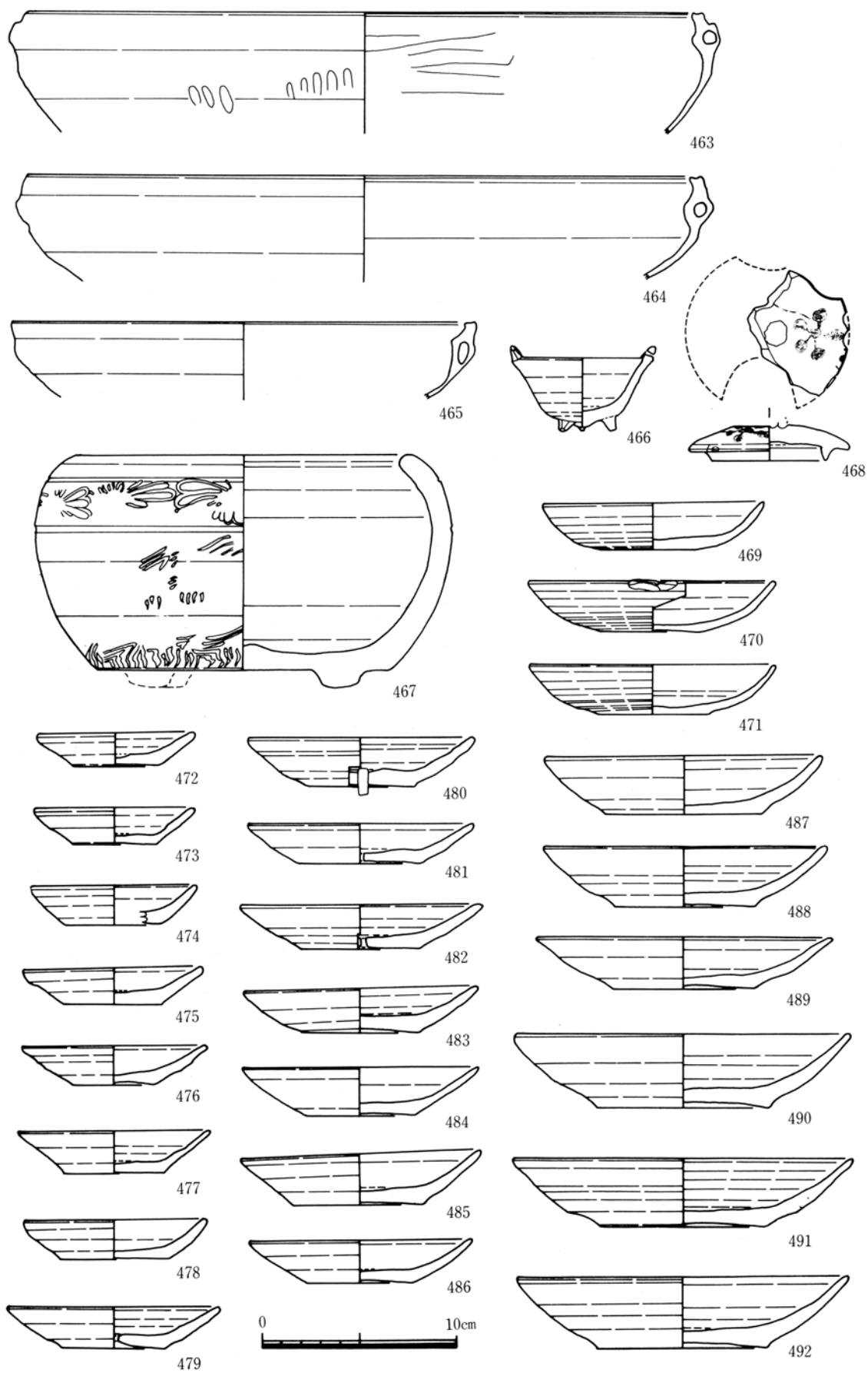
第48図 II期の遺物 (21)

SK130 (8)



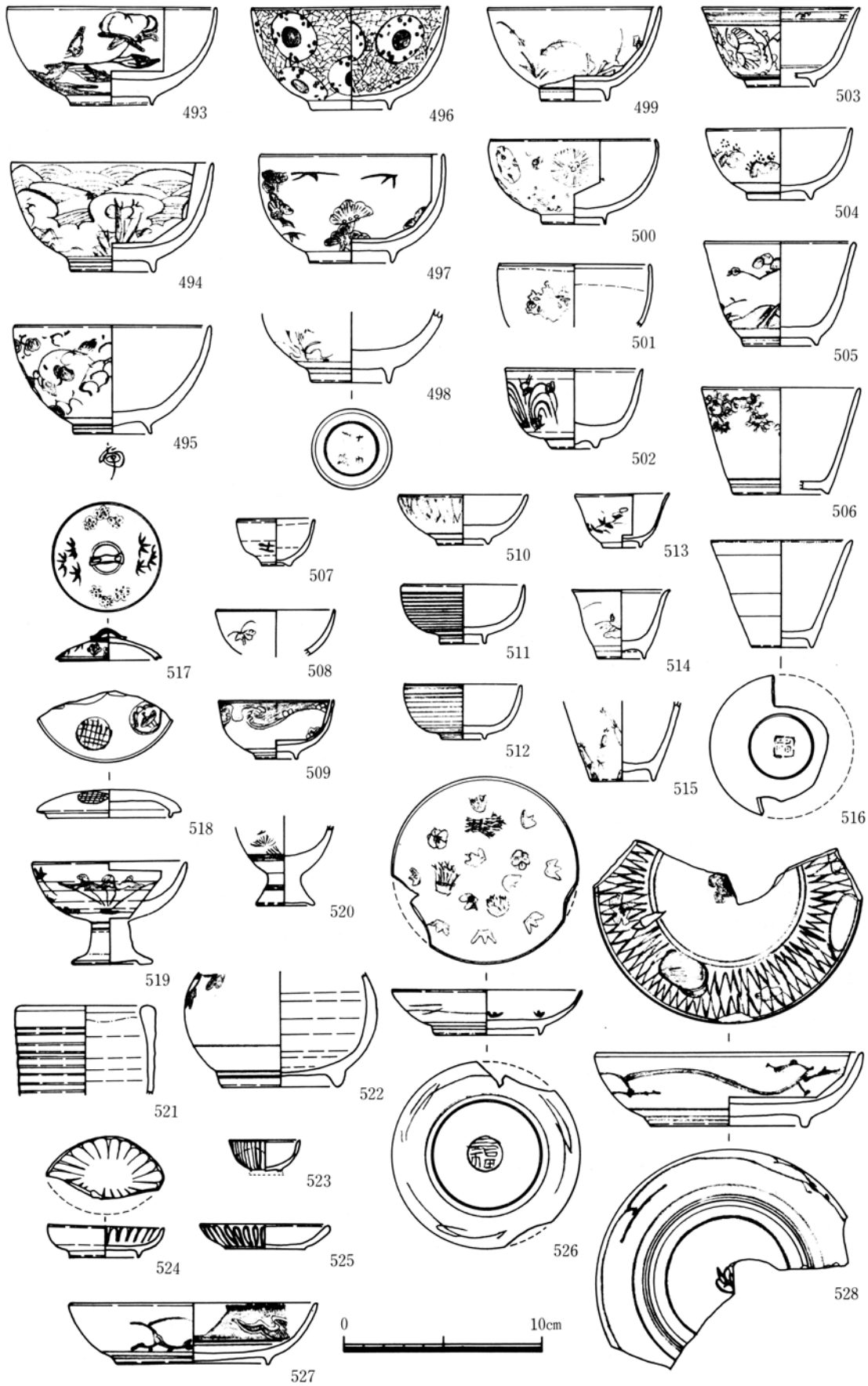
第49図 II期の遺物 (22)

SK130 (9)



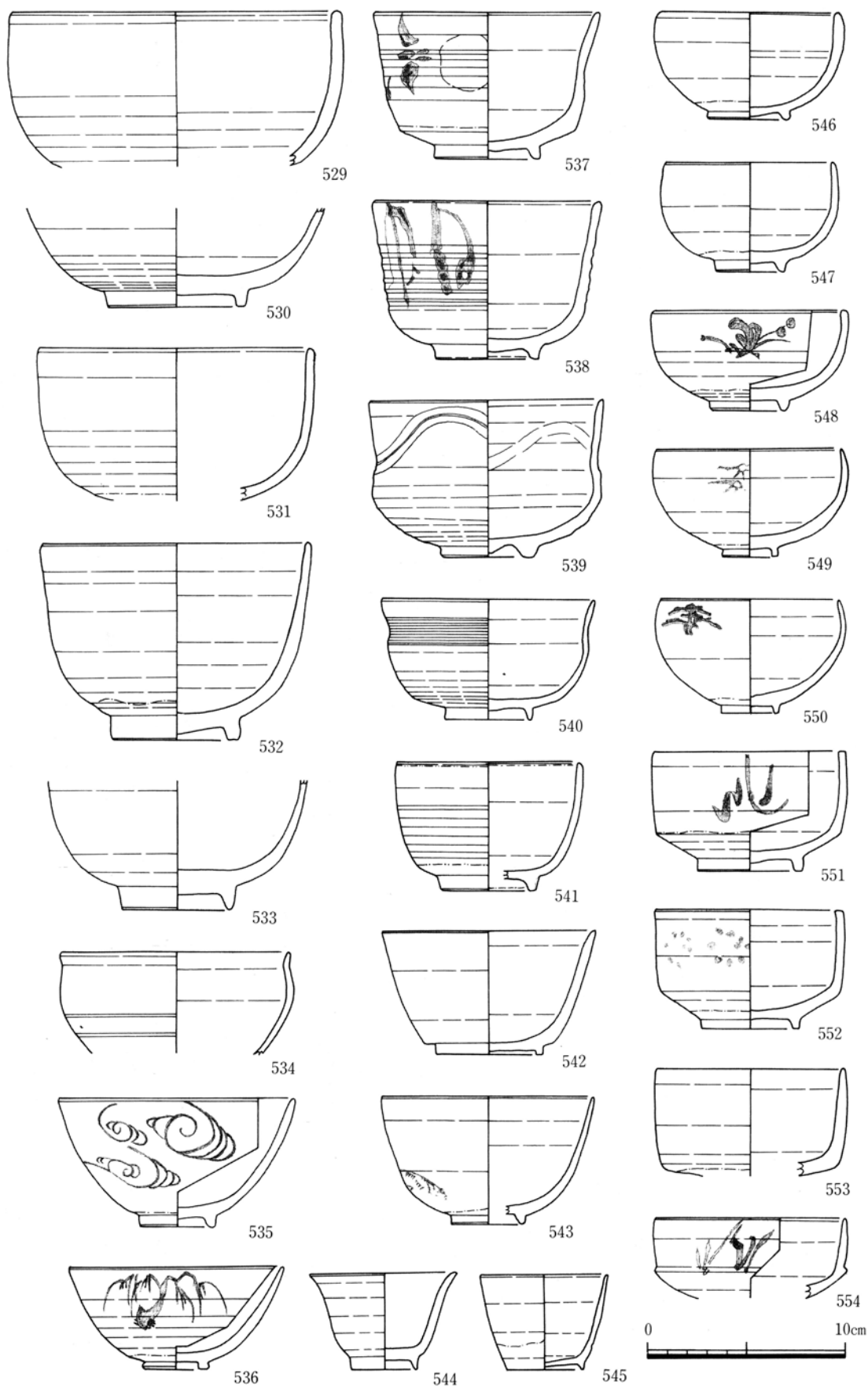
第50図 II期の遺物 (23)

SK130 (10)



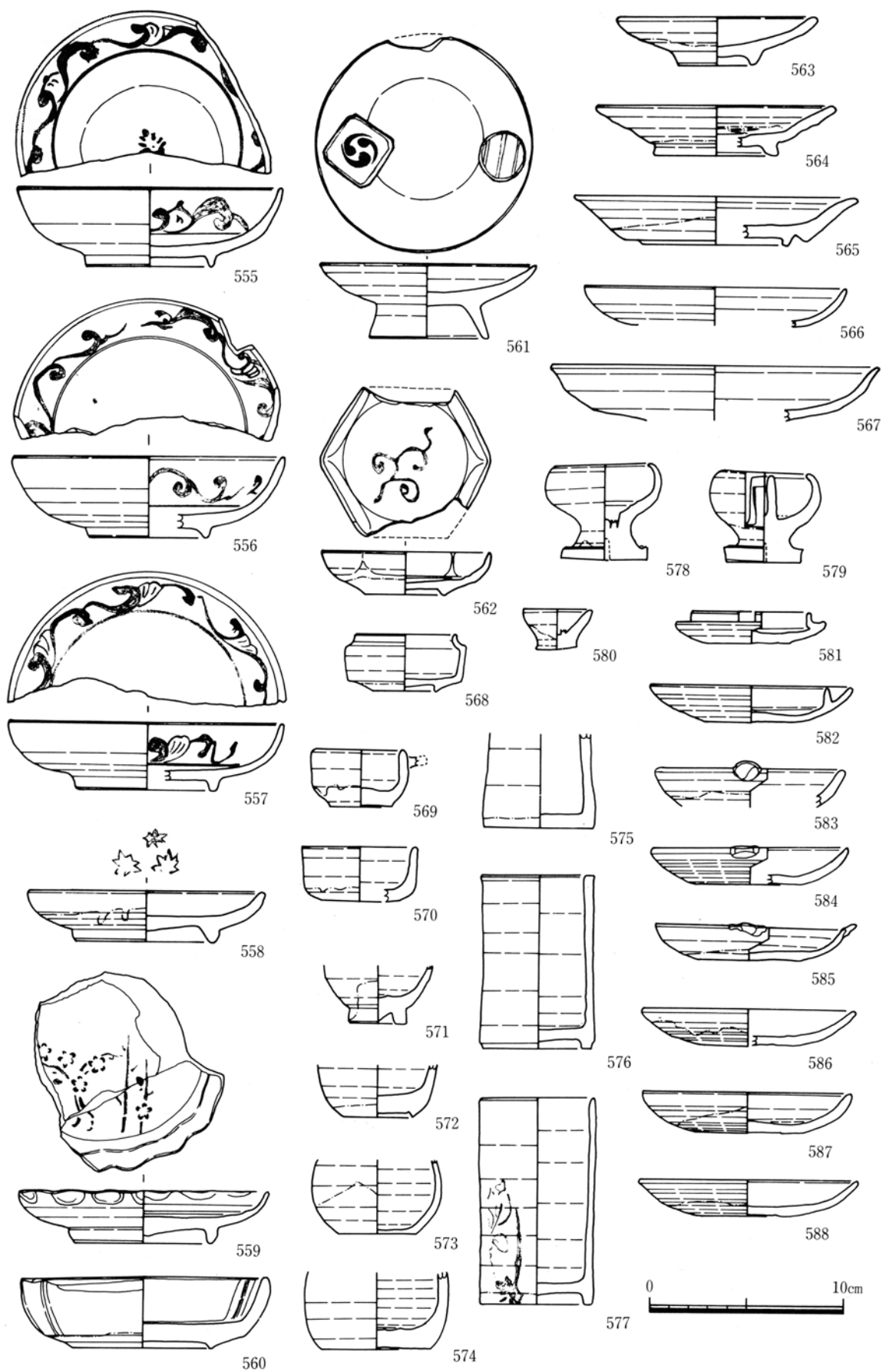
第51図 II期の遺物 (24)

SK130 (11)



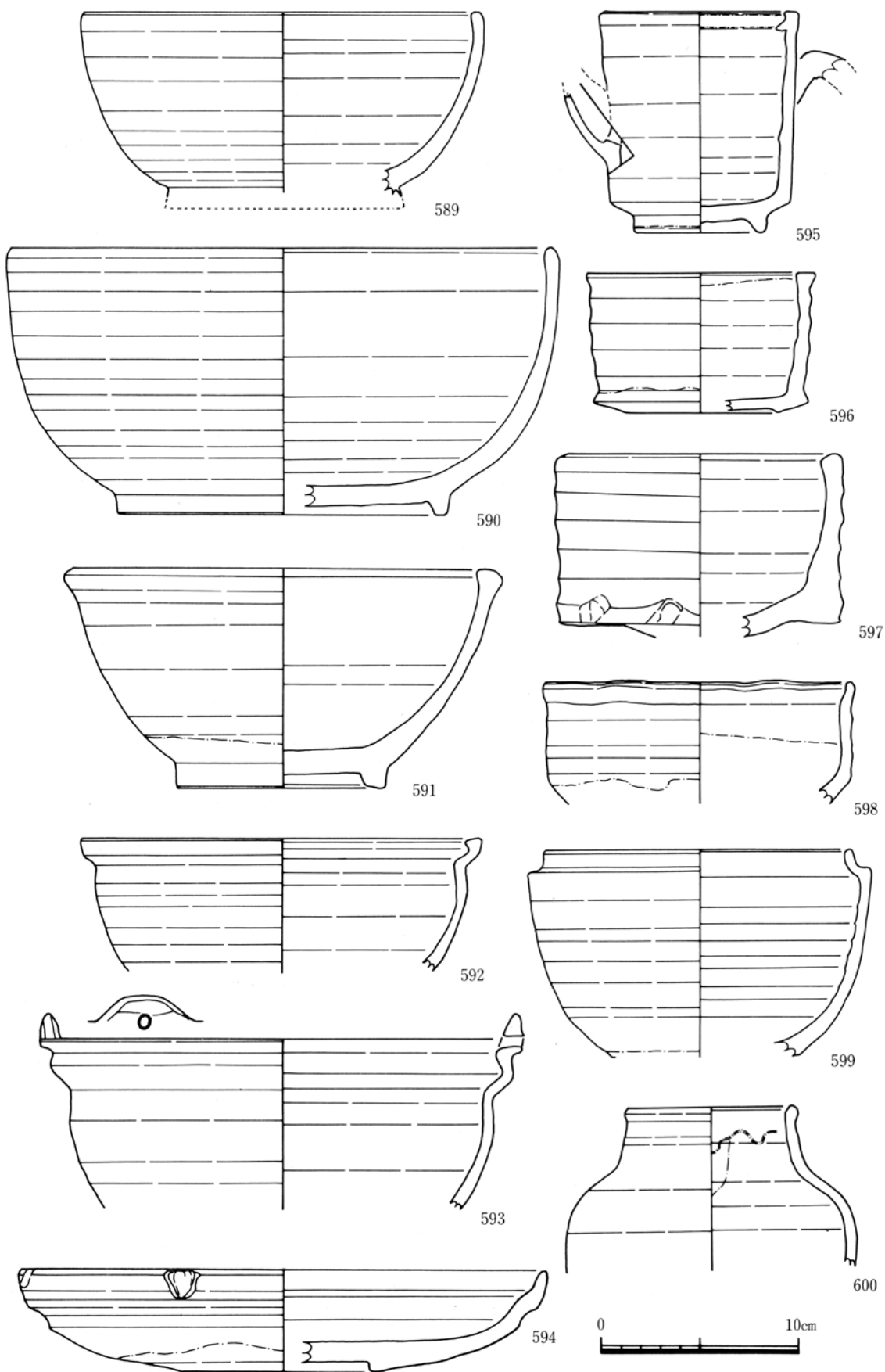
第52図 II期の遺物 (25)

SK189 (1)



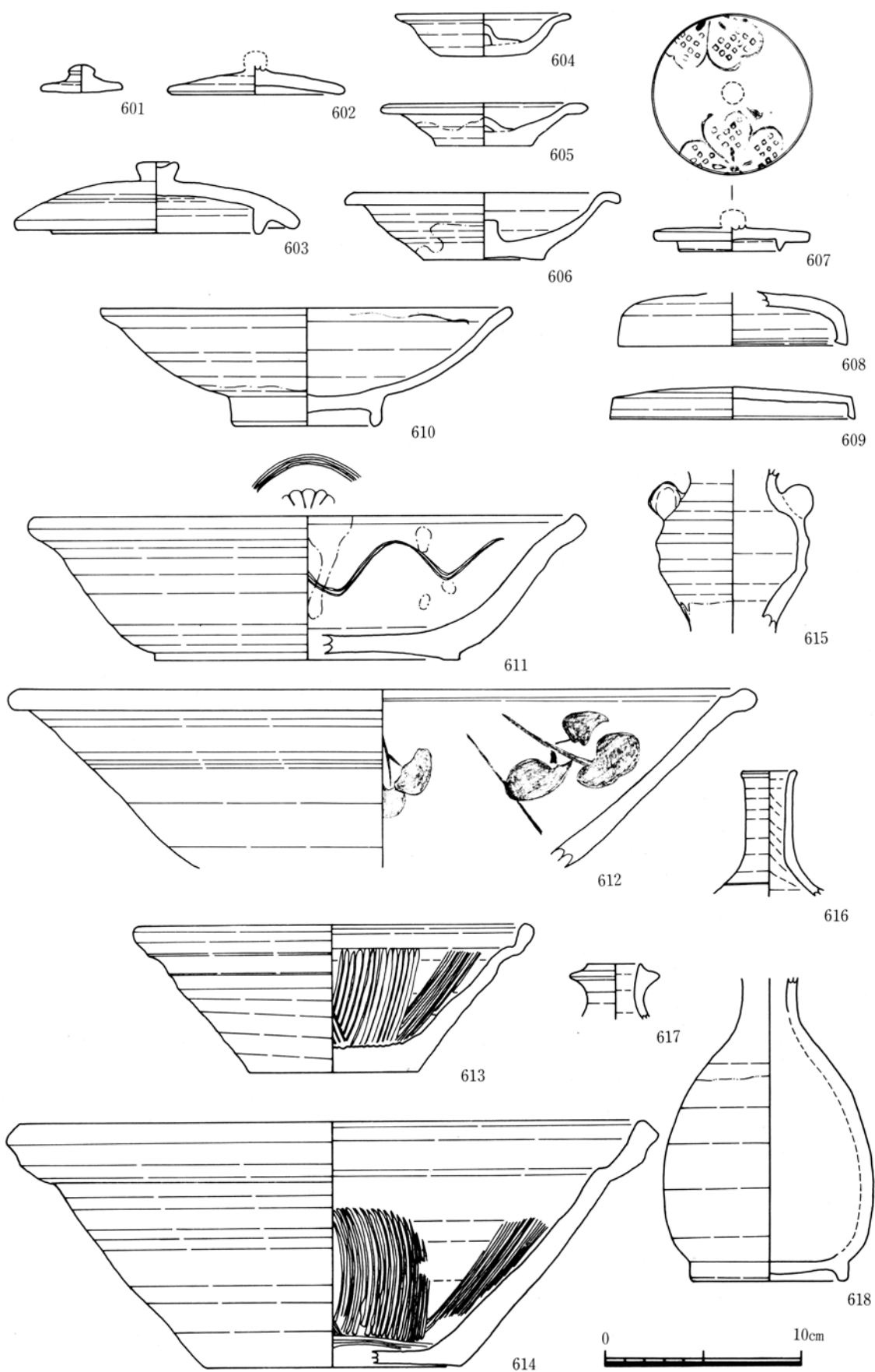
第53図 II期の遺物 (26)

SK189 (2)



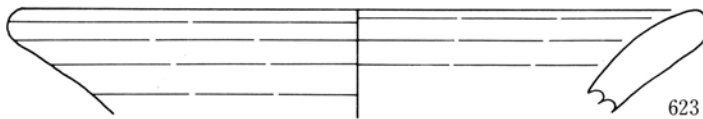
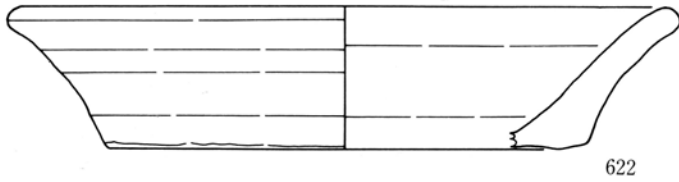
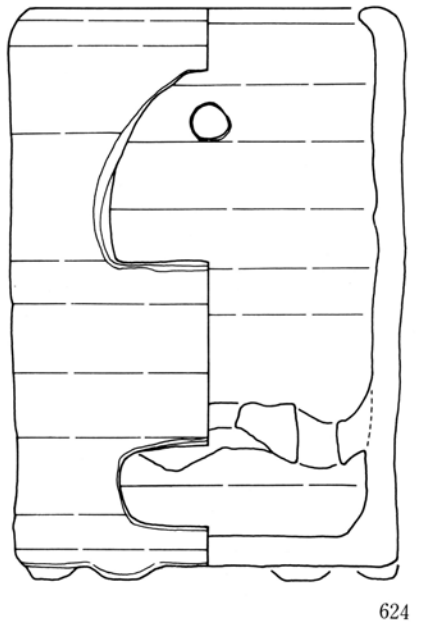
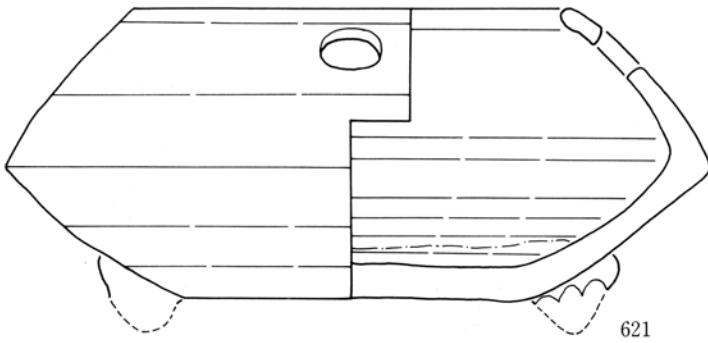
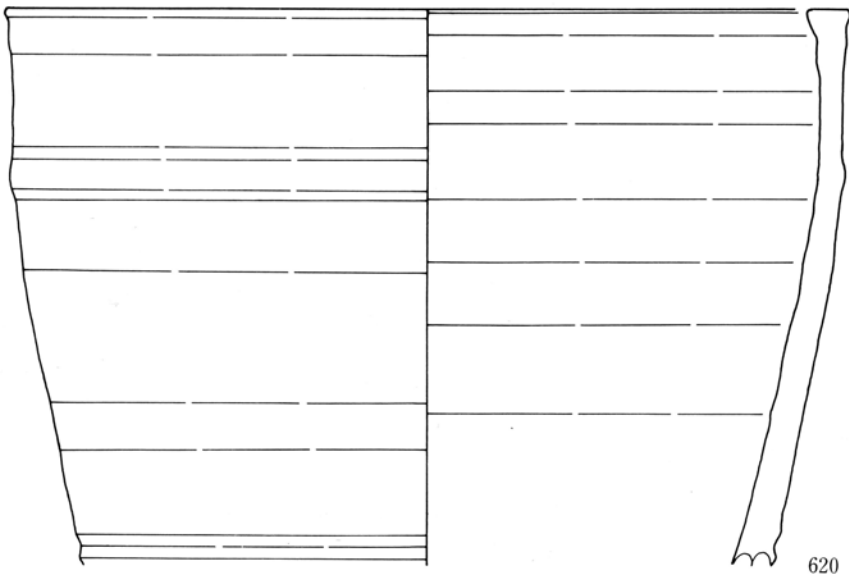
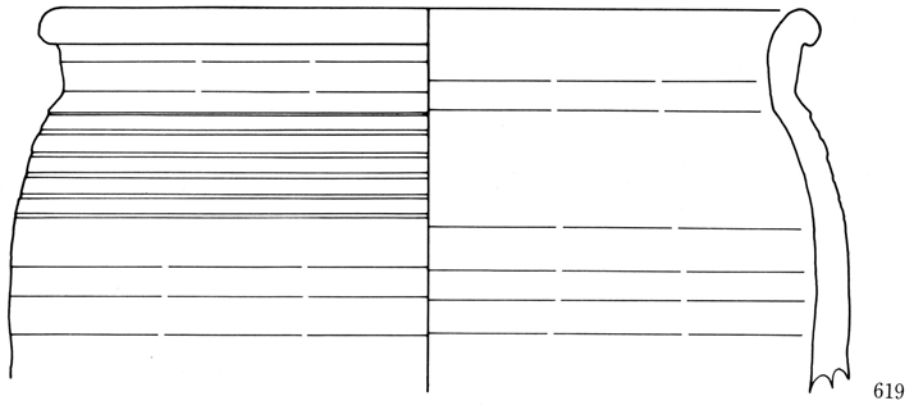
第54図 II期の遺物 (27)

SK189 (3)



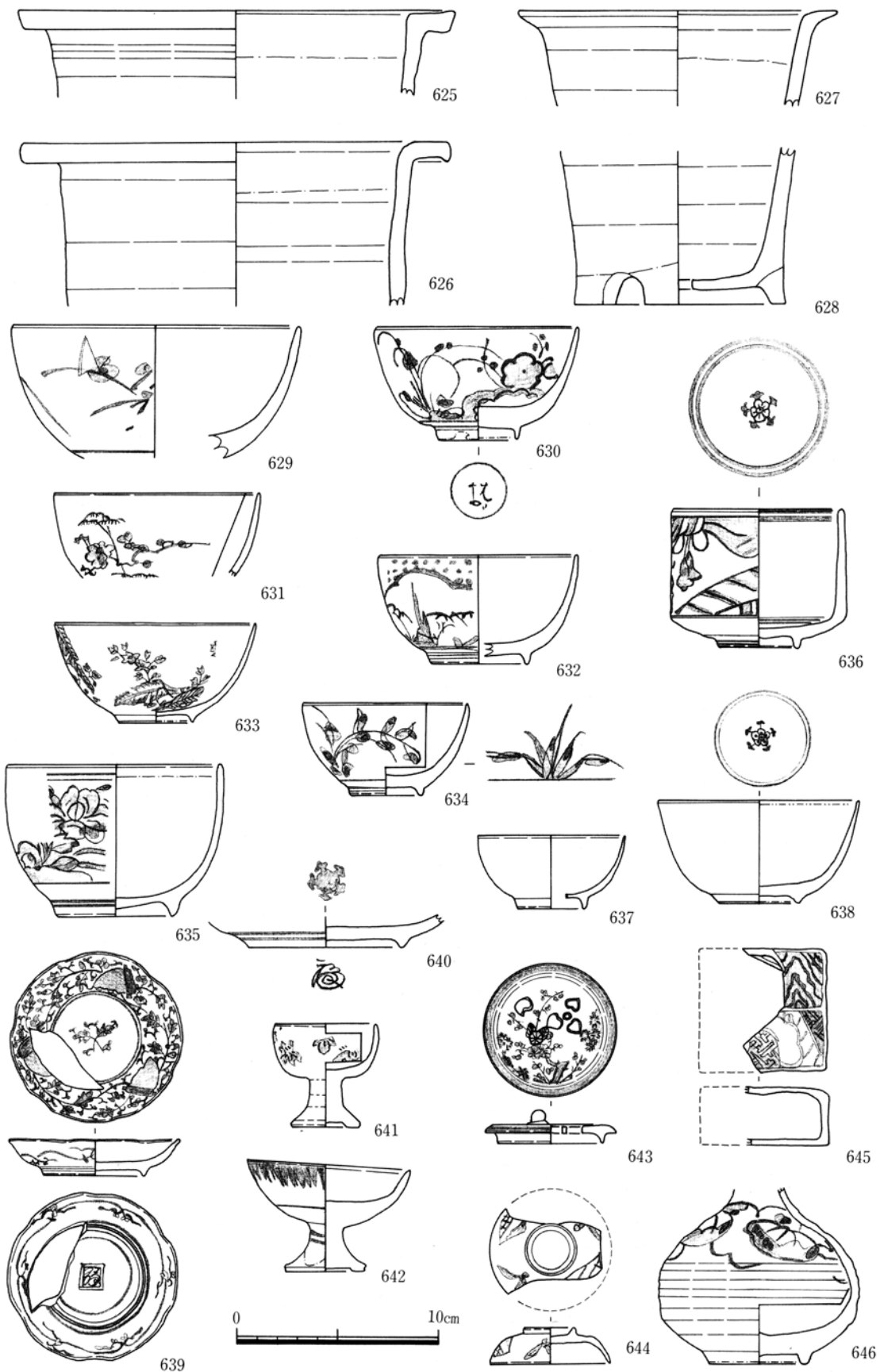
第55図 II期の遺物 (28)

SK189 (4)



第56図 II期の遺物 (29)

SK189 (5)



第57図 II期の遺物 (30)

SK189 (6)

呈した浅鉢、(624)は小型の七輪、(625~628)は鉢I-1の灰釉植木鉢である。(629~646)は磁器製品で産地は遺物観察表に記してある。(629・630)は碗Aの丸碗、(631~634)は小碗A-2の小形丸碗、(635)は小碗C-1の筒型碗、(636)は内底面にコンニャク判の五弁花のある碗Dの筒型碗、(637)は小杯A-1の丸型小杯、(638)は碗Aの外表面青磁釉、内底面に五弁花のコンニャク判が施された丸碗、(639)は皿Bの稜花皿で外底面には「福」か、文字が書かれている。(640)は皿Aの丸皿で外底面に「福」か、文字が書かれ、内底面に五弁花のコンニャク判が施されている。(641・642)は仏飯具、(643)は透かしのある、つまみがつぼみとなった蓋、(644)は赤絵が施された小蓋であるいは杯かもしれない。(645)は水滴か、(646)は小壺である。18世紀後半の時期に比定される。

S K 173 (第58~59図-647~699) 碗、皿、蓋、鬚盥、捏鉢、風炉、植木鉢、甕、土師質皿、鍋が出土している。(647)は胴下部より丸味を持って開いた鉄釉丸碗で、口縁にうのふ釉が流れており碗B-1に近い形である。(648)は胴中央部に指押えによるくぼみのある鉄釉筒型碗で長石釉が点々と流れており、いわゆる拳骨茶碗である。(649)は鉄釉の碗で口縁部には灰釉が施される。(650)は碗Hの端反碗で鉄釉が施されており、(651・652)も鉄釉碗である。(653)は碗B-4の灰釉碗、(654)は碗Eの灰釉筒型碗で胴部には呉須で楼閣山水文が描かれている。(655)は鉄絵のある長石釉の碗、(656)は碗Hの端反碗で、胴部には枝の部分鉄釉、花卉を白濁釉でやや隆帯した文様を描いた灰釉碗である。(657)は小碗B-1の灰釉丸碗で口縁には銅緑釉が施されている。(658)は端反気味の口縁を持った銅緑釉の半筒型の丸碗、(659)は碗Hの端反碗でいわゆる麦藁手碗である。(660~667)は磁器製品で産地は遺物観察表に記してある。(660)は磁器碗Aの丸碗で腰部に鉄釉が施釉されている。(661)は磁器碗Bの端反碗、(662)は磁器小碗、(663・664)は磁器小碗A-2の丸碗で、(664)は胴部に丸彫りによる縦の沈線が巡り、間に「寿」の文字が描かれている。(665)は小壺、(666)は磁器小杯A-2であるが蓋の可能性もある。(667)は磁器皿F-2の紅皿である。(668)は灰釉香合、(669)は鉄釉餌入れ、(670)は胴部に摺絵が施された灰釉の鬚盥、(671)は鉄釉蓋、(672)は蓋Eの灰釉蓋、(673)は蓋Cの灰釉蓋である。(674)は内面に呉須絵が施された灰釉皿、(675)は皿Hの内面に布目痕のある型打灰釉菊皿、(676)は灰釉の土瓶、(677)は口縁を折り返した内湾気味の鉢Fで灰釉捏鉢、(678)は外面胴部に文様が描かれた灰釉杓立て、(679・680)は鉄釉半胴甕、(681)は灰釉水差し、(682)は灰釉風炉、(683)は鉢H-2の小型鉢、(684・685)は鉢I-1で(684)は灰釉植木鉢、(685)は灰釉植木鉢である。(686)は常滑産の甕、(687~695)は土師質の製品で(687)は浅い内耳鍋、(688~695)は土師質皿で底部には糸切り痕があり(693)は底部穿孔である。(696~699)は加工円板で(696)は挿鉢片、(697)は長石釉鉢片、(698)は長石釉皿片、(699)は瓦片をそれぞれ再利用したものである。18世紀末から19世紀前半の時期に比定される上層出土の遺物である。

S K 162 (第60~68図-700~874) 碗、皿、鉢、餌鉢、壺、柄杓、捏鉢、涼炉、挿鉢、手水鉢、半胴甕、植木鉢、火鉢、燈明皿が出土し、半胴甕と植木鉢が多く出土した。(700)は碗B-4

の灰釉丸碗、(701・702)は碗Eの灰釉碗、(703)は碗B-5の灰釉丸碗、(704・705)は碗C-2の鉄釉筒型碗で口縁には灰釉が施されている。(706~708)は碗Hの端反碗で(706・707)は鉄絵が描かれた長石釉の端反碗、(708)は鉄釉・呉須の縦線が交互に描かれたいわゆる麦藁手碗である。(709)は、腰部に丸味を帯びて開き、口縁下に段のある長石釉の碗で口縁下に鉄釉による渦巻文が描かれている。(710)は胴部に段の付いた浅い灰釉碗で内底面には鉄絵が描かれ、内面に刷毛目装飾を施した現川焼の碗である。(711)は腰部の削りが強く段状になった灰釉碗、(712~714)は鉄釉碗で(714)は筒型を呈する。(715・716)は碗Cのいわゆる広東碗、(717)は腰部に段が付き開いた長石釉小鉢で外側面に鉄絵が描かれる。(718)は腰部から内湾気味に開いた灰釉碗で底部には「三」の墨書がある。(719・721)は皿A-2の灰釉丸皿、(722)は皿A-2で内面に呉須絵のある灰釉丸皿、(723・724)は高台が低く丸味を帯びて開いた皿A-1に似た内面に呉須絵が描かれた灰釉丸皿、(725)は胴部内外面に呉須絵が描かれた灰釉の小鉢、(726)は丸い高台が付き、内面に鉄絵が描かれた折縁の角皿、(727)は皿Hの型打皿で内面に鉄絵が描かれ銅緑釉を流し掛けた角皿で、内面に布目痕が残る。(729)は内側面に鉄絵のある大皿でいわゆる「馬目皿」である。(730)は鉢A-1の内側面に櫛描き波状文のある折縁の黄瀬戸皿である。(728)は周縁部に灰釉が施された戸車である。(731)は胴部に沈線が巡る灰釉香炉、(732~734)は灰釉の香合、(735)は灰釉の香炉、(736)は鉄釉の小型鍋でつまみ状の三足がつく。(737・738)は灰釉餌入れで(738)にはリング状の把手がつく。(739・740)は底部より丸味をもって開いた小碗型を呈した鉄釉餌入れで、(740)にはつまみ状の把手が付く。(741)は灰釉の双耳壺で胴部が丸味を持っている。(742・743)は灰釉の柄杓で胴部内面に呉須による線が一条巡る。(744・745)は鉄釉水差しで、(744)は小型の水差しである。(746)は胴部に鉄絵が描かれた長石釉の小壺、(747~749)は徳利で、(747)は徳利Aの鉄釉徳利、(748)は鉄釉徳利、(749)は徳利Dで胴部にくぼみのない灰釉小型徳利である。(750・751・753)は、灰釉捏鉢で、(750)は捏鉢F-2、(751)は捏鉢F-1、(753)は捏鉢F-4である。(752)は口縁が内湾した鉄釉の火鉢で、内面の胴部上半まで施釉される。(754)は円筒形の鉄釉花生で口縁周辺は白濁化し釉が流れている。(755~760)は鉄釉鍋で、把手穴は3対1のものと3対2の二種類ある。(761)は口縁が折縁を呈した灰釉甕、(762)は鉄釉涼炉、(763~768)は鉢H-2で、(763・764)は口縁が縁帯となる小型の鉄釉搗鉢、(765)は口縁が算盤玉状となった小型搗鉢、(766)は高台のない丸味を帯びた底部をもつ無釉の小型搗鉢、(769)は鉢H-1の鉄釉搗鉢である。(770)は折り縁の口縁下に五条の沈線が巡る鉄釉甕、(771~778)は各種蓋で、(771)は蓋Eの灰釉蓋、(772~774)は蓋A-2で(772)は上面に呉須絵のある灰釉蓋、(773)は鉄釉蓋、(774)は灰釉蓋、(775・776)は蓋D-1で(775)はつまみの下に沈線が巡る灰釉蓋、(776)は外面が無釉、内面鉄釉の蓋、(777・778)は蓋Cで、(777)には摺絵のある灰釉蓋、(778)は鉄絵のある灰釉蓋である。(779)は鉢K-1の手水鉢で腰部から底部に鉄釉が施され、口縁から胴部には灰釉が施されている。(780)は鉢K-2の灰釉手水鉢である。(781)は三足が付き鉄釉が施された火鉢である。(782~791)は鉄釉半胴甕で植木

鉢に転用されたものが多く、底部がぬけたり、穿孔されたもの(788・790)があり、半胴甕も長い胴部を持ったもの(782~784)、短い胴部を持ったもの(785~788・790・791)に大別される。(792~809)は鉢I-1の植木鉢で、大形の鉢(792)、中形の鉢(793~797)、小形の鉢(798~809)の三種に大別でき、灰釉・鉄釉が施され、(801)の底部には墨書がある。

(810~818)は燈明具各種で、(810~812)は皿I-2の鉄釉燈明皿、(813~817)は皿I-1の燈明皿で(813~816)は鉄釉が、(817)は灰釉が施されている。(818)は灰釉乗燭である。(819)は内湾する口縁の瓦質の三足火鉢で、ヘラ磨きが施され、黒色を呈した胴部には亀甲の押印が巡る、(820)は深い内耳鍋、(821)は浅い内耳のでいわゆる「焙烙鍋」である。(822~828)は土師質皿で底部には糸切り痕がある。(829)は軟質手の燈明具で受け皿か、(830)は常滑焼の甕である。(831)は七輪、(832)は火消し壺の蓋か、(833・834)は蚊いぶしで内面に煤がタール状に付着する。(835~838)は土錘である。(839~874)は磁器製品で産地は遺物観察表に記してある。(839)は腕Bの端反の腕、(840)は腕Eの麦藁手碗、(841)は腕Aの丸碗で外面に青磁釉が施され内底面に手描五弁花が描かれる。(842)は腕Bの端反の腕、(843~846)は腕Aの丸碗、(847)は腕Bの端反の腕、(848)は小腕Bの端反碗、(849~853)は腕Cの広東碗である。(854)は腕Dの筒型碗で明治に入る時期のものである。(855)は腕Dの筒型碗、(856)は腕Aの丸碗で筒型に近い。(857)は小腕C-3の筒型碗、(858)は小腕A-2の丸碗、(859)は小腕A-1の丸碗、(860)は小腕Bの端反碗である。(861)は型打の小型角皿で文様が全て隆帯となり、馬の周辺の底部に呉須を掛けた皿である。(862)は皿Aの丸皿で小型、(863・864)は皿F-2の紅皿、(865)は仏飯具、(866)は小腕C-2の筒型小碗か、(867)は腰部から垂直に立ち上った小碗である。(868~870)は蓋、(871)は鉢で内底面にはコンニャク判五弁花がある。(872)は蛇の目高台の皿、(873)は鉢Bの八角形の角鉢、(874)は鉢A-1の端反した口縁内には墨弾きによる文様が描かれている。19世紀の前半の時期に比定される。

S X 101 (第69~89図-875~1257) 腕、皿、鉢、香炉、香合、餌入れ、小壺、水差し、双耳壺、捏鉢、風炉、土瓶、急須、土鍋、蓋、挿鉢、徳利、半胴甕、水甕、植木鉢、七輪、芯押え、乗燭、燈明皿、土師質皿、内耳鍋等の遺物が大量に出土した。(875・876)は腕B-3の灰釉丸碗、(877)は腕B-5の内湾する丸碗で、胴部に篋による陰刻で童子が描かれ、その上を呉須でなぞった灰釉の大型碗である。(878)は灰釉丸碗、(879)は胴部が垂直気味に開いたやや小振りの丸碗で腕B-3を小型化した型となる。(880)は腕Hの端反の鉄釉碗、(881・882)は腰部より斜めに開いた鉄釉碗、(883)は筒型の灰釉流し掛けの施された鉄釉碗、(884)は灰釉流し掛けの施された鉄釉丸碗である。(885)は灰釉丸碗、(886)は外側面に呉須による小杉文を描いた灰釉碗、(887・888)は皿A-3で丸味を帯びて立ち上り、高台径が小さい丸皿で、(888)の内面には鉄絵が描かれる。(889)は低い高台とやや丸味を帯びた腰部から斜めに開いた灰釉碗で胴部には緑色の上絵付が施される。(890)は腕Fの広東碗で口縁下と内底面には呉須による文様が描かれる。(891)は腕C-3の灰釉筒形碗で、胴部には鉄絵が描かれ底部には「用」の墨書がある。(892)は刷毛目装飾による皿で外面はいわゆ

る「蚩手」となる現川焼の製品である。(893)も刷毛目装飾が施された地元産の碗である。(894~907)は各種の皿である。(894)は皿A-2の丸皿で内底面が輪禿となり、呉須による十五弁花文が描かれた灰釉皿で釉が白濁化している。(895~900)は皿A-1の長石釉丸皿、(901~903)は皿Dの稜皿で、(901)は口縁周辺から内面にかけて灰釉が施され、内底面に鉄絵の蘭竹文が描かれた灰釉皿、(902・903)は灰釉皿、(904)は皿A-2の内底面に摺絵が描かれた灰釉丸皿、(905)は皿A-2の内底面に呉須絵が描かれた灰釉丸皿、(906)は皿A-1で内面に鉄絵が描かれ、口縁に銅緑釉を流し掛けた碁笥底の丸皿、(907)も皿A-1で内面に鉄絵が描かれ、口縁端部にも鉄釉が施され、数カ所に削り込みがはいった碁笥底の長石釉丸皿である。(908)は鉢Dで、内・外面に鉄絵の描かれた長石釉の深鉢、(909・910)は象嵌のある三島手の唐津焼の鉢、(911)は鉢C-2で刷毛目装飾が内・外面に施された小鉢、(912)は、内面に鉄絵が描かれたいわゆる絵瀬戸の皿、(913)は腰部に丸味を持ち斜めに外反気味に開いた鉢で、内面に鉄絵が描かれ銅緑釉が流し掛けられている。(914)は内面に宝珠文などの鉄絵を描き、銅緑釉を流し掛けた盤状を呈した大皿でいわゆる「行灯皿」である。(915)は折縁口縁の鉄釉小壺、(916)は胴部上半に沈線が巡り、口縁が直立気味に開いた鉄釉の小壺、(917・918)は肩部に沈線が巡り、頸部が直立し折縁口縁となった鉄釉甕である。(919)は鉄釉香炉で、丸味を帯びた腰部より内湾して立ち上がり、口縁が端反になり口唇部には灰釉の流し掛けが施され、口縁周辺が打欠かれており灰落しに使用されている。(920)は腰部より垂直に開き、折り縁の口縁を呈した鉄釉香炉、(921)は口縁下に四条の沈線が巡るやや内湾気味の香炉である。(922)は鉢E-1の型打鉢で、丸味を帯びた角鉢で四隅の部分に縦の丸彫り沈線が施される。(923)は腰部より垂直に開いた外面胴部に鉄摺絵が描かれた小鉢である。(924~926)は灰釉餌入れで、(924)の底部には「盃□ □」の墨書がある。(927~929)は灰釉の香合で、(927)の底部には「佛前」の墨書がある。(930)は内湾した口縁を持ち丸味を帯びた鉄釉小壺、(931)は胴部外面に鉄絵が施された長石釉の筒型向付、(932)は胴部に沈線が巡り、丸彫りで縦の沈線を施した鉄釉の灰落しである。(933)は底部より内斜気味に立ち上った胴部に二条の沈線が巡り、呉須絵の描かれた灰釉小壺である。(934)は蓋A-1のつまみが沈線による六弁花となった蓋で(935)の蓋となる。(935)は底部よりほぼ垂直に開き受け口状の口縁を持った長胴型の壺で胴部上半に印花文が4個を1単位として7カ所巡り、肩部には灰釉が施される。(936・937)は腰部より垂直に開いた筒型に柄をさし込む把手をつけた灰釉の柄杓で、胴部内面には呉須による一条の線が巡り、把手には釘穴もある。(938)は丸味を帯びた胴部とやや端反気味の口縁を持った長石釉の小壺で胴部と内底面に鉄絵が描かれる。(940)は長石釉の散り蓮華で柄の部分は欠損しており、内外面には鉄絵が描かれ、銅緑釉が流し掛けられており、裏面には「春岱」の押印がある。(941~943)は把手の付いた灰釉の餌入れで、(941)の把手は縦に穴があいており、(942・943)は環状を呈している。(944~946)は鉄釉の餌鉢で、(944・945)は折り縁となった口縁が玉縁状の縁帯となった鍋型、(946)は内湾気味の丸碗型で片口と把手がつき、把手上面には十六弁花の陰刻が施される。(947~950)は灰釉

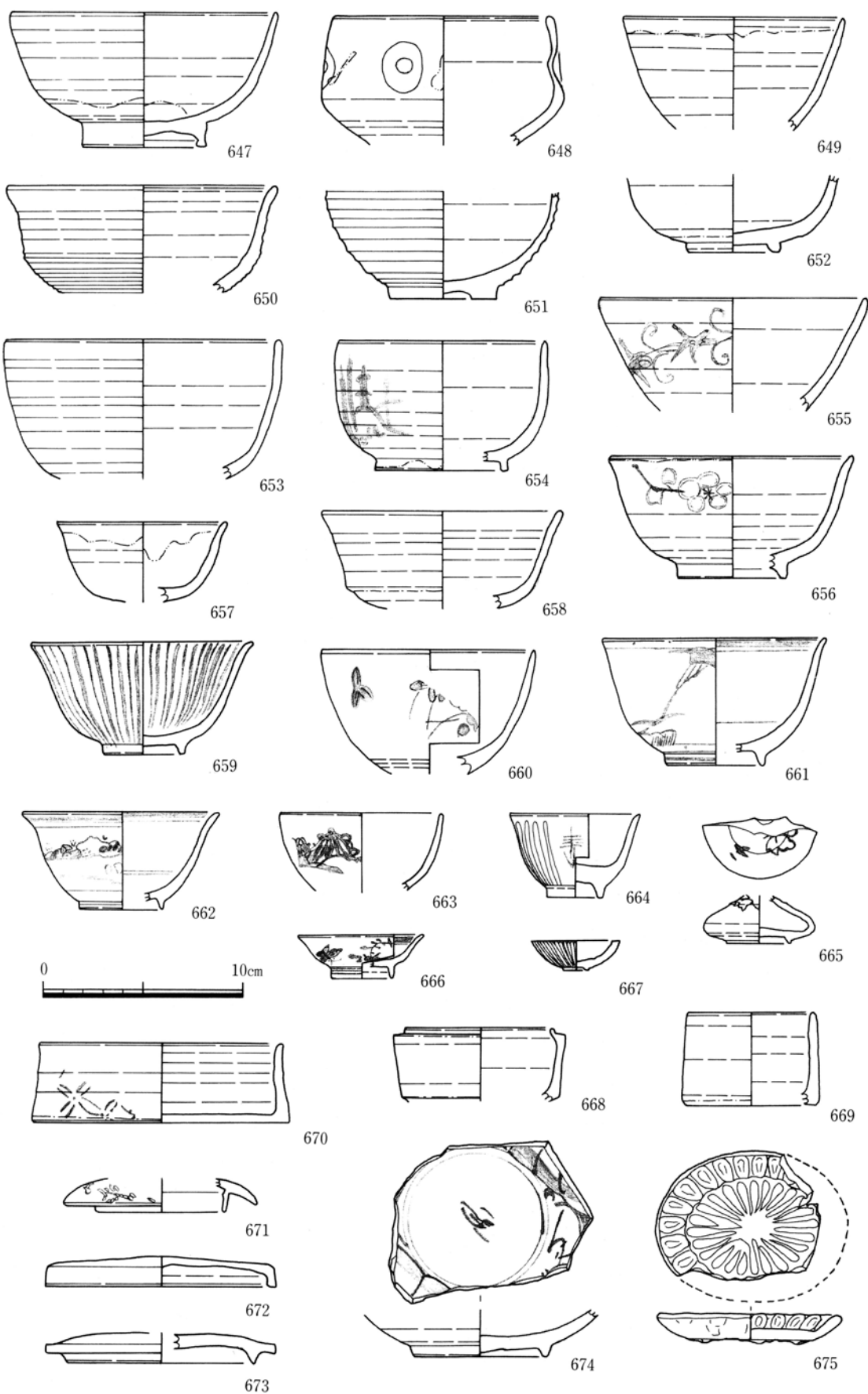
小壺で、(947)は胴中央が最大巾となる丸味を帯びた小壺、(948~950)は胴下部が最大幅となった下脹れの小壺である。(951・952)は灰釉水差しで、胴部には沈線が螺旋状に巡る。(953~955)は灰釉双耳小壺である。(956)は灰釉鬚盥、(957)は細長い筒型をした杓立てで、胴部に沈線が螺旋状に巡る。(958)は鉢Gの灰釉片口鉢、(959)は内外面素地の素焼きの鉢で口縁下に丸い把手痕があり、底部に焼成後の穿孔が施され、植木鉢の可能性もある。(960)は鉢F-1の玉縁状の口縁となった灰釉捏鉢である。(961)は灰釉に銅緑釉が流し掛けられた手水鉢で高台に丸い半球状の足が三カ所に付き風炉の可能性もある。(962)は胴部に鉄絵が描かれ、口縁に銅緑釉が施された灰釉の風炉で、高台に丸い半球状の足が三カ所に付く。(963~970)は土瓶で、(963・964)は白土化粧後鉄絵を描き、その上に緑釉を文様の一部に施釉した後、灰釉を施しており、(963)は耳が欠損、(964)は胴下半に「逢い」の文字があり、紐状の耳がつく。(965)は白土化粧後呉須で文様を描き、その後灰釉が施され、紐状の耳がつく。(966)は鉄釉の土瓶で内面にも薄い鉄釉が施され、(967)は胴部に十条の沈線が巡る灰釉の土瓶、(968・969)は胴部に幾重にも巡った沈線のある鉄釉のいわゆる「松皮土瓶」である。(970)は白土化粧後鉄絵を描き、梅花の部分に赤色を施釉した、受け口状の口縁の土瓶で被熱の為全体に釉が白くなっている。(971・974)は白土化粧後鉄絵を描き、その上に緑釉を文様の一部に施釉した土瓶である。(971)は紐状の耳である。(972)は鉄釉の土瓶で底部に三足がつく。(973)は白土化粧後鉄絵を描いた紐状の耳のついた土瓶である。(975・976・978)は急須で、(978)は外面が鮫肌状を呈した急須で、(977)の蓋A-1の鮫肌の落とし蓋と対になるものと思われる。(979~986)は行平で、把手が欠損したものが多い。(979)は胴部に篋で3回押圧した痕が巡り、口縁下に鉄釉が施され、内面には灰釉が施釉された行平である。(980)は胴上半に灰釉が施された小形の行平である。(981~986)は灰釉の行平で、(986)の底部には三足がつく。(987~995)は鍋で、(987~989・991)は鉄釉が、(990)は灰釉が施され、紐状の耳がつき、(989・990)には三足がつく。(992~995)は鉄絵の描かれた長石釉の浅い鍋で、(992・994)は環状の耳がつき、(993・995)はコの字を逆にしたような耳がつき、(995)はコの字を逆にした先端が獣足となった耳で、耳の部分のみ銅緑釉が施されている。(996~1023)は蓋各種である。(996~1000)は蓋A-1で、(996)は素地のままの無釉の落とし蓋、(997・998)は鉄釉落とし蓋、(999)はつまみのついた鉄釉落とし蓋で、空洞になったつまみの上面には長石釉が施される。(1000)はつまみが亀の型をした鉄釉の落とし蓋である。(1001~1005)は蓋A-2の折り縁をした落とし蓋で、(1001)は灰釉が施され、つまみが五弁花になっている。(1002)は鉄釉が施され、つまみが八弁花を呈し、(1003)は鉄釉が施され、つまみが六弁花を呈し、(1004)は鉄釉が施され、(1005)は灰釉が施され、紐状のつまみとなる。(1006~1009)は蓋Cで上部には沈線が巡った鉄釉の蓋で、松皮土瓶の蓋であり、(1006・1007)の内面には判読不能だが刻印がある。(1010)はつまみのついた上面に沈線の巡る鉄釉の蓋で急須の蓋か。(1011・1012)は蓋Bの鉄釉の蓋で、(1011)は紐状のつまみである。(1013・1014)は蓋Eの灰釉の蓋である。(1015・1016)は蓋D-2で、上面には篋で削られた痕が巡り、その

上を二条の鉄釉による太い線が巡っている灰釉蓋である。(1017~1023)は蓋D-1で(1017~1021)は灰釉蓋、(1022)は白土化粧の上に鉄絵が描かれ、その後銅緑釉を流し掛けた蓋、(1023)は白土化粧の上に鉄摺絵が描かれ、その後銅緑釉を流し掛けた蓋である。(1024~1029)は播鉢で、(1024・1025)は鉢H-2の鉄釉の口縁が縁帯となった小型播鉢、(1026)は蛇の目高台で腰部がやや丸味を帯びて開き、縁帯となった口縁には二条の沈線が巡り、胴部外面と内面の口縁下には鉄絵による文様が描かれ、長石釉と銅緑釉が施釉されたいわゆる「幕末織部」の播鉢である。(1027~1029)は鉢H-1の鉄釉播鉢で、(1027)は口縁直下が大きくくびれ、内面にも段が形成される播鉢、(1028)は胴部が直線的で、口縁直下がややくぼみ、内面に沈線が一条巡り、口縁端部が丸味を持った玉縁状を呈した播鉢、(1029)は胴部が直線的で、口縁直下のくぼみがなくなり、口縁端部が内側のややくぼんだ玉縁状を呈した播鉢で、胴部内面上方に㊦の押印がみられる。この他に実測図にはないが備前焼の播鉢も1例出土している。(1030~1047)は徳利各種である。(1030~1032)は徳利Aで灰釉が施された、いわゆる高田徳利で、(1030)はナデ肩で頸部が太短く、口縁が幅広い縁帯となる。(1031)はやや肩が張り、頸部が太短く口縁の縁帯がていねいに仕上げられている。(1032)は胴部が太く肩の張った長胴で、頸部は太短く、口縁も外側に張り出した玉縁状になっている。(1033)は徳利Cで灰釉の三角徳利で三カ所にくぼみがある。(1034~1036)は徳利Dのいわゆるペコカン徳利で、(1034)は鉄釉が、(1035)は灰釉が施され細短い頸部がつき、(1036)は鉄釉が施され細短い頸部で口縁が外反気味となる。(1037・1038)は細長い鉄釉の頸部、(1039)は胴中央部が最大幅となる胴部をもった鉄釉徳利である。(1040・1041)は徳利Fの刷毛目を施した細長い胴部を持った徳利で、(1041)の底部には「□つの近道□」の墨書がある。(1042~1047)は備前風の赤褐色を呈した徳利である。(1042)は胴中央部に布袋像を付着させた、いわゆる布袋徳利で、糸切痕のある底部には墨書があるが、判読できなかった。(1043・1044)は徳利Eで長頸壺に似たいわゆる船徳利である。(1045・1046)は徳利Gで、底部には三角形をした足が6カ所ついており、(1045)の底部には「陶之」の刻印がある。(1047)も徳利Gの爛徳利と思われるが足がなく、杓立ての可能性もある。(1048~1053)は鉄釉半胴甕で、胴部上半には二条の沈線が巡る。植木鉢に転用されたものが多くみられ、(1049・1050・1053)は焼成後底部に穿孔している。(1054・1055)は内湾した玉縁状の口縁を持った鉢J-1の火鉢で、玉縁状口縁より外面は鉄釉が施される。(1056)は鉄釉火鉢で半球状の丸い足が3カ所に付き、内底面にはトチン痕がある。(1057・1058)は水甕で浅形の胴部下方に稜が入り、上方はやや外反気味に立ち上り、口縁部は中央がくぼみ、端部がやや下り気味に張り出した(1057)と中央部があまりくぼまず、端部が水平に張り出す(1058)があり、胴部には流水文が彫られている。(1059)は鉢K-1の大形の手水鉢で高台部以外は全面に鉄釉が施され、胴上半部には銅緑釉、長石釉が流し掛けられている。(1060~1066)は植木鉢で、(1060~1065)は鉢I-1、(1066)は鉢I-2である。(1060)と(1063)は灰釉の植木鉢、(1061・1064)は鉄釉の植木鉢で(1064)には三足がつく。(1062)と(1065)は赤褐色を呈した胎土で無釉。(1065)

には花の文様が胴部に貼り付けてあり、(1066)には雲龍文様が胴部に貼り付けられ、底部に「元光齋」の刻印がある。(1067~1069)は七輪、(1070)は蚊いぶしか、内面に煤が厚く付着している。(1071・1072)は三本の足のある五徳で、底部の輪の断面が(1071)の台形状と(1072)の紐状のものがある。(1073~1077)は常滑焼の甕で、(1073~1075)は17世紀後半頃、(1077)は18世紀前半頃、(1076)は19世紀前半頃に比定される。(1078・1079)は芯押えで、(1078)は灰釉で陶製、(1079)は磁器製で呉須が流されている。(1080)は燈明具の蓋で鉄絵が描かれ長石釉が施されている。(1081)は灰釉が施された台脚を有する受皿の燈明具で脚部が空洞となる。(1082・1083)は鉄釉の乗燭で、杯部が丸味を帯びる(1083)と杯部の口縁端部が内湾する(1082)があり、いずれも台部外面に糸切り痕がある。

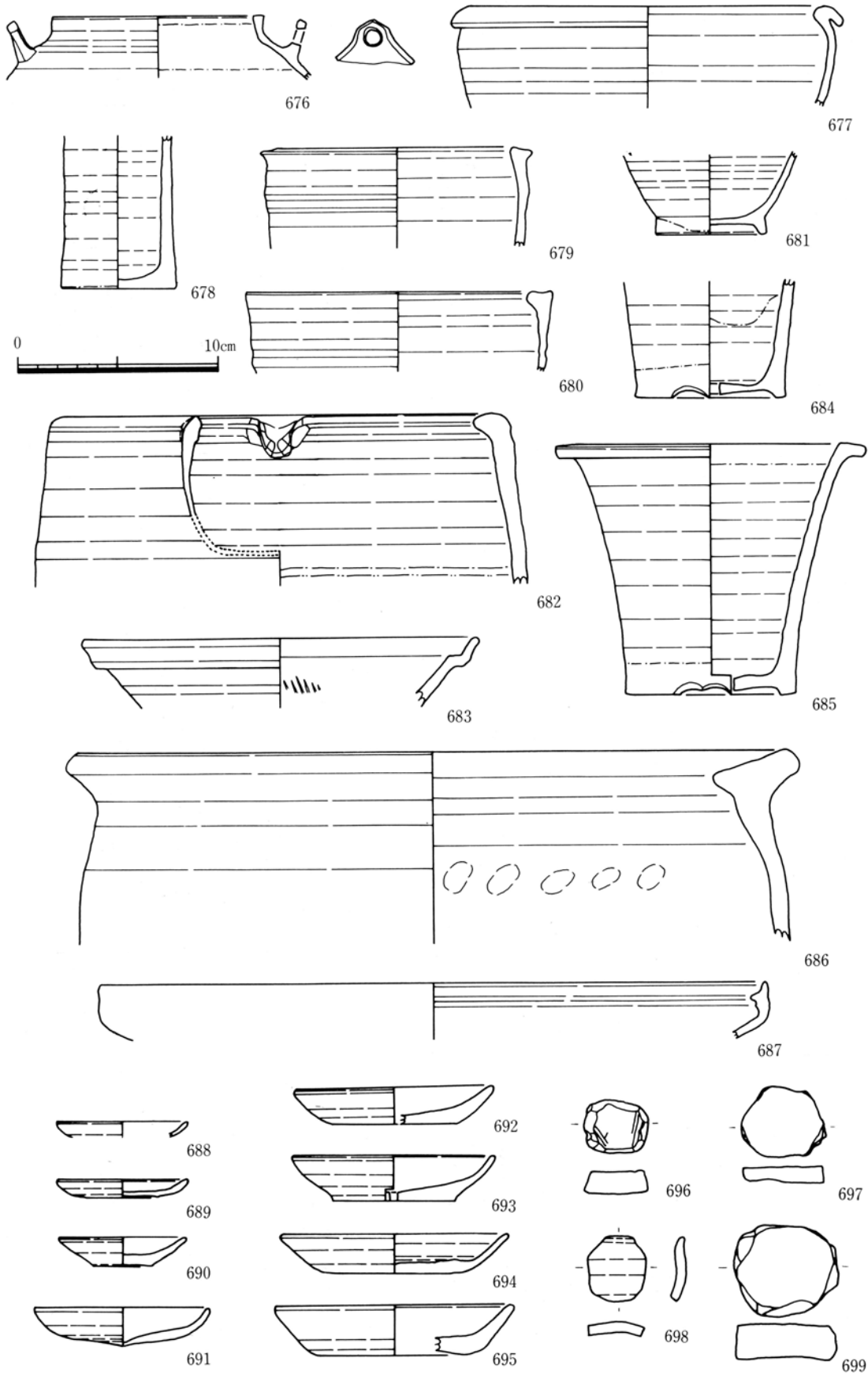
(1084~1131)は燈明皿で(1084~1110)は皿I-1の油皿、(1111~1131)は皿I-2の受皿である。油皿の(1084~1087・1096~1102・1107~1110)は灰釉、(1088~1095・1103~1106)は鉄釉が施され、底部周辺の釉が拭き取られている。受皿は皿の形状、棧部の高低など変化にとんでおり、(1111~1116・1123~1129)は灰釉、(1117~1122・1130・1131)は鉄釉が施され、底部周辺の釉は拭き取られている。(1111~1114・1128)の棧部の切り口はV字形を呈している。(1132~1158)は土師質皿で(1132・1133)は手捏ねの皿で、(1134~1156)の皿の底部には糸切り痕がある。(1157・1158)は型打の土師質皿で内面に擬木目文様の沈線があり、透明釉を内面のみに施し、底部には布目痕がみられる。(1159~1165)は浅い内耳鍋のいわゆる「焙烙鍋」である。(1166~1257)は磁器製品。(1166~1172・1174・1179~1186・1220・1222・1223)は椀Aの丸椀、(1173・1175~1178)、は椀Bの端反椀、(1188~1192)は小椀A-2の小形丸椀、(1187・1193~1199)は小椀Bの小形端反椀、(1200)は小椀C-3の筒型小椀である。(1201~1214)は小椀で、(1201~1203)が小杯Bの筒型、(1204~1208・1212・1214)は小杯Aの丸型、(1209~1211・1213)は小杯Cである。(1215~1218)は椀Dと筒型椀である。(1219・1221・1223~1231)は椀類の蓋、(1232)は壺の蓋か、(1233)は四角、(1234)は六角の香合の蓋、(1235)は赤絵の施された筒型椀か、(1236)も赤絵が施された箱型の水滴、(1238)は小壺で底部には墨書があるが判断不能である。(1239・1240)は爛徳利、(1241・1242)は御神器徳利、(1243・1244)は丸味を帯びた腰部に口縁がほぼ垂直に開いた鉢A-2で、腰部外面が青磁釉、口縁部の内外面と内底面には呉須絵が施されており、(1243)の底部には装飾印が、(1244)の底部には「富貴長春」の銘と朱文字で「三十一」と書かれており、(1243)と同じ鉢が他に2点、(1244)と同じ鉢が他に3点あり、5点で一組だったと思われる。(1245~1248)は仏飯具で(1248)には上絵付が施されている。

(1249)は土瓶で胴部に描かれた文様部分は隆起し花と蕾の部分には桃色の釉が施されている。(1250・1251)は皿Cの菊皿、(1252・1253)は皿Bの稜花皿、(1254・1255)は皿Aの丸皿で、(1254)の内底面には五弁花のコンニャク判が、胴部には墨弾きによる文様が描かれている。(1256)は皿Eの大皿、(1257)は皿Dの角皿である。19世紀の中頃の時期に比定される。



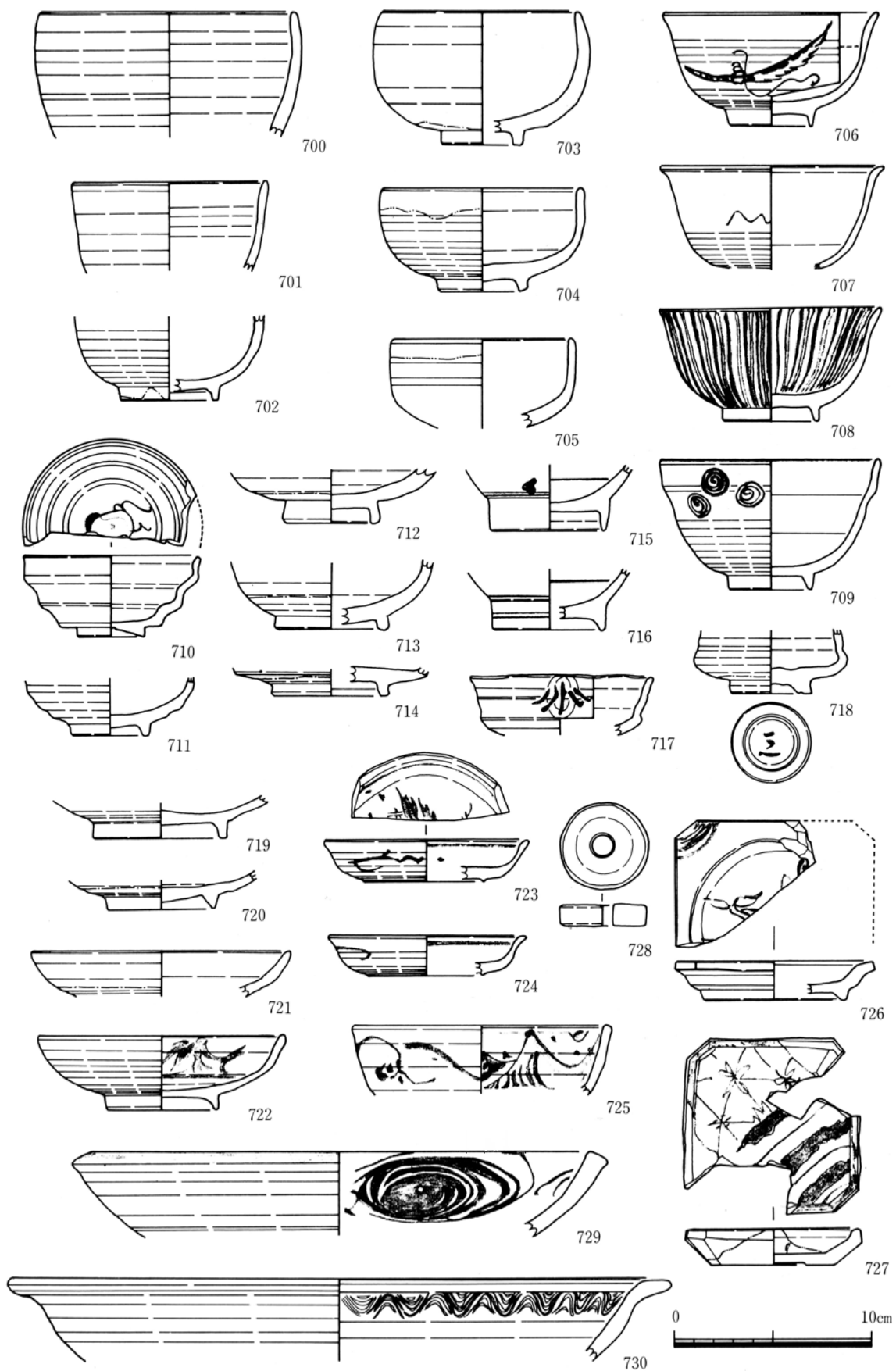
第58図 II期の遺物 (31)

SK173 (1)



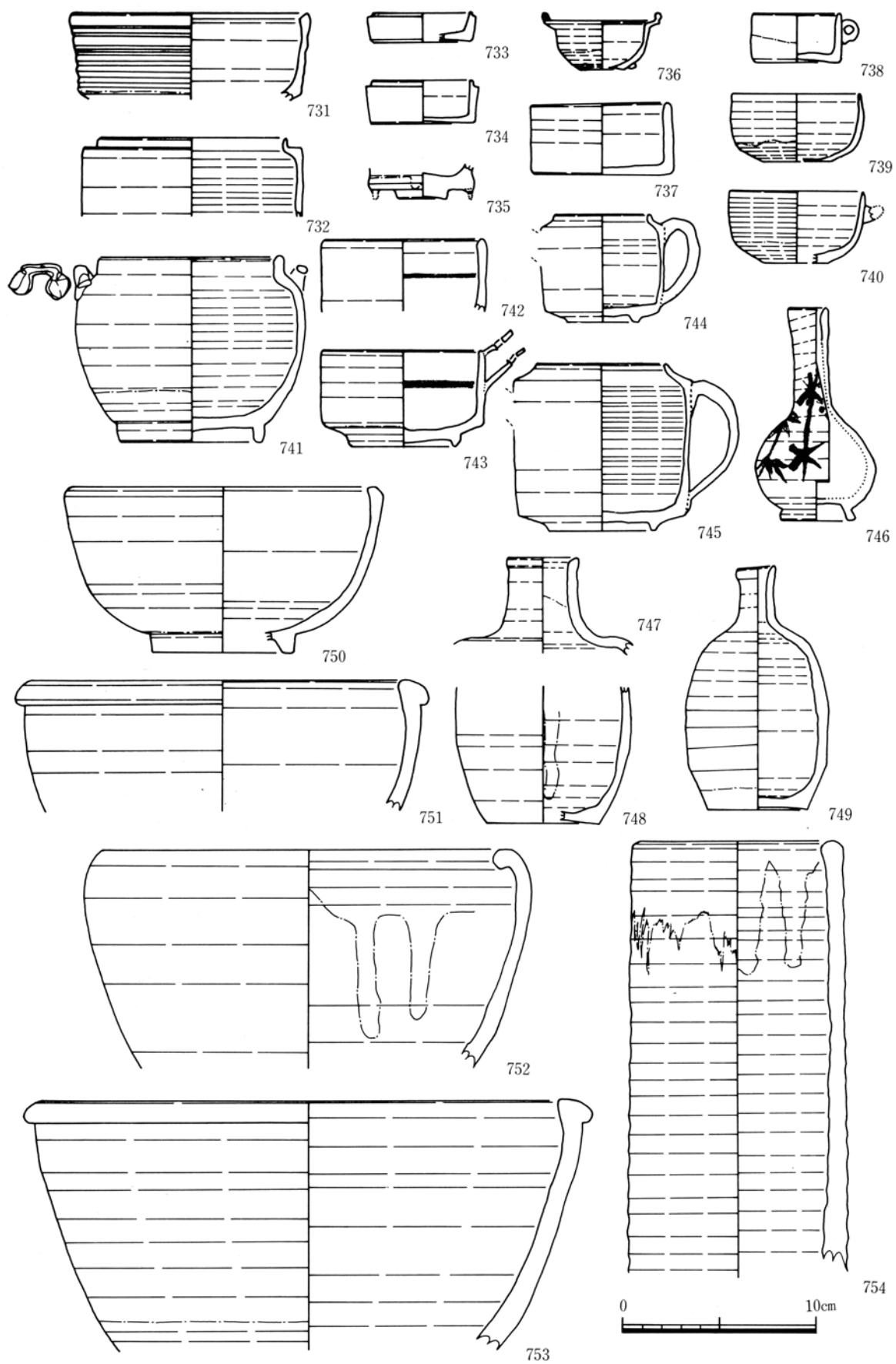
第59図 II期の遺物 (32)

SK172 (2)



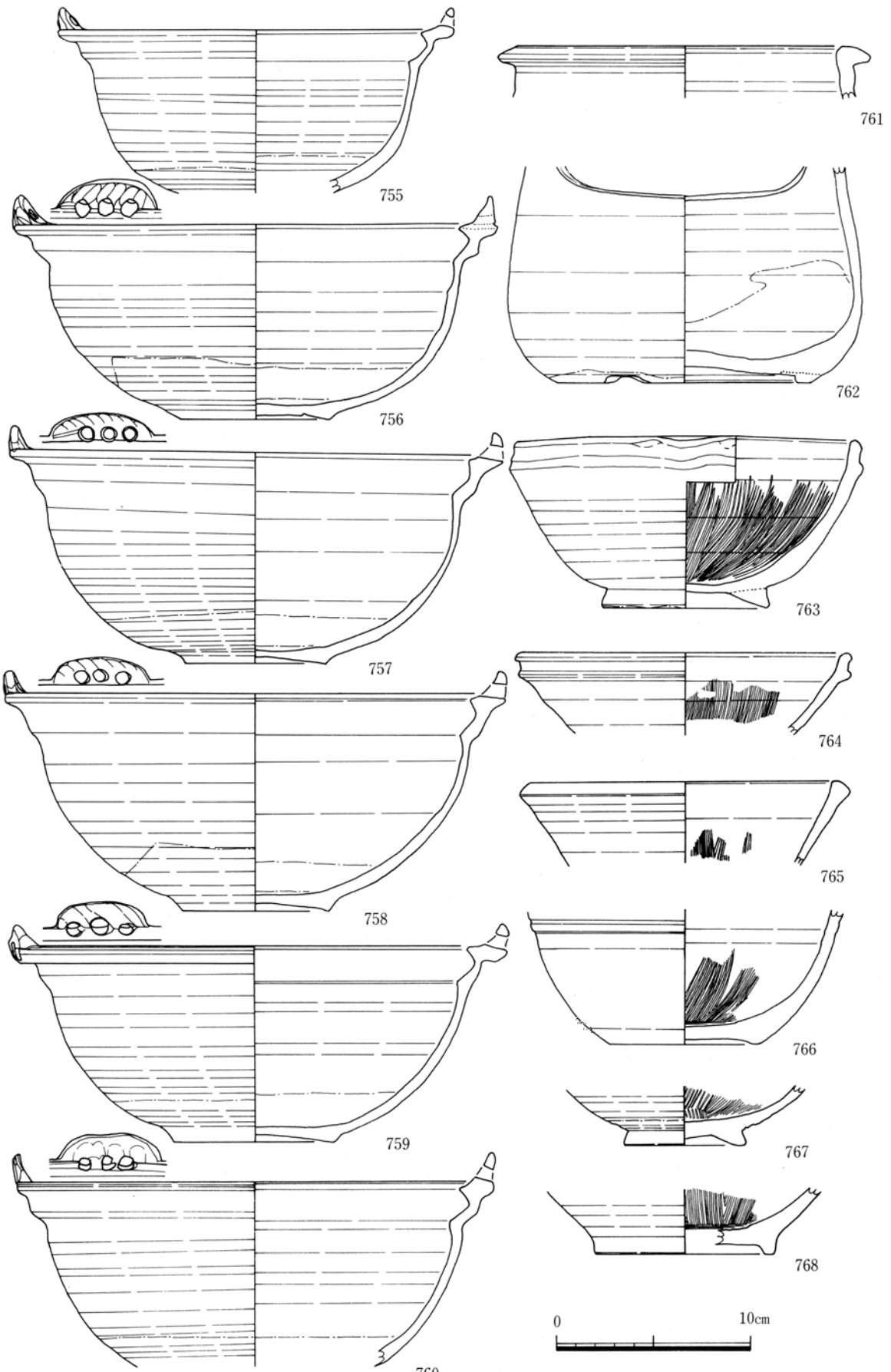
第60図 II期の遺物 (33)

SK162 (1)



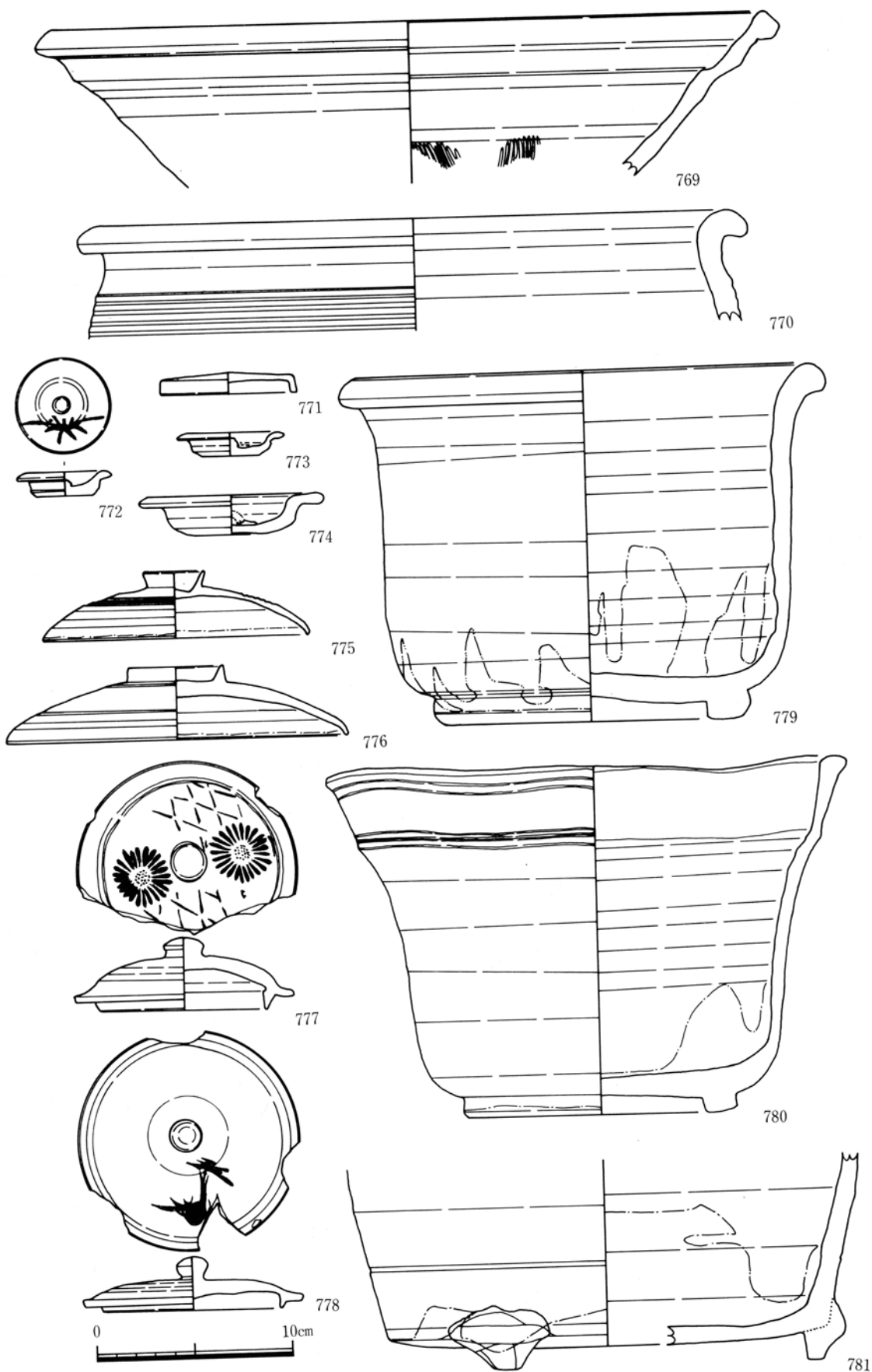
第61図 II期の遺物 (34)

SK162 (2)



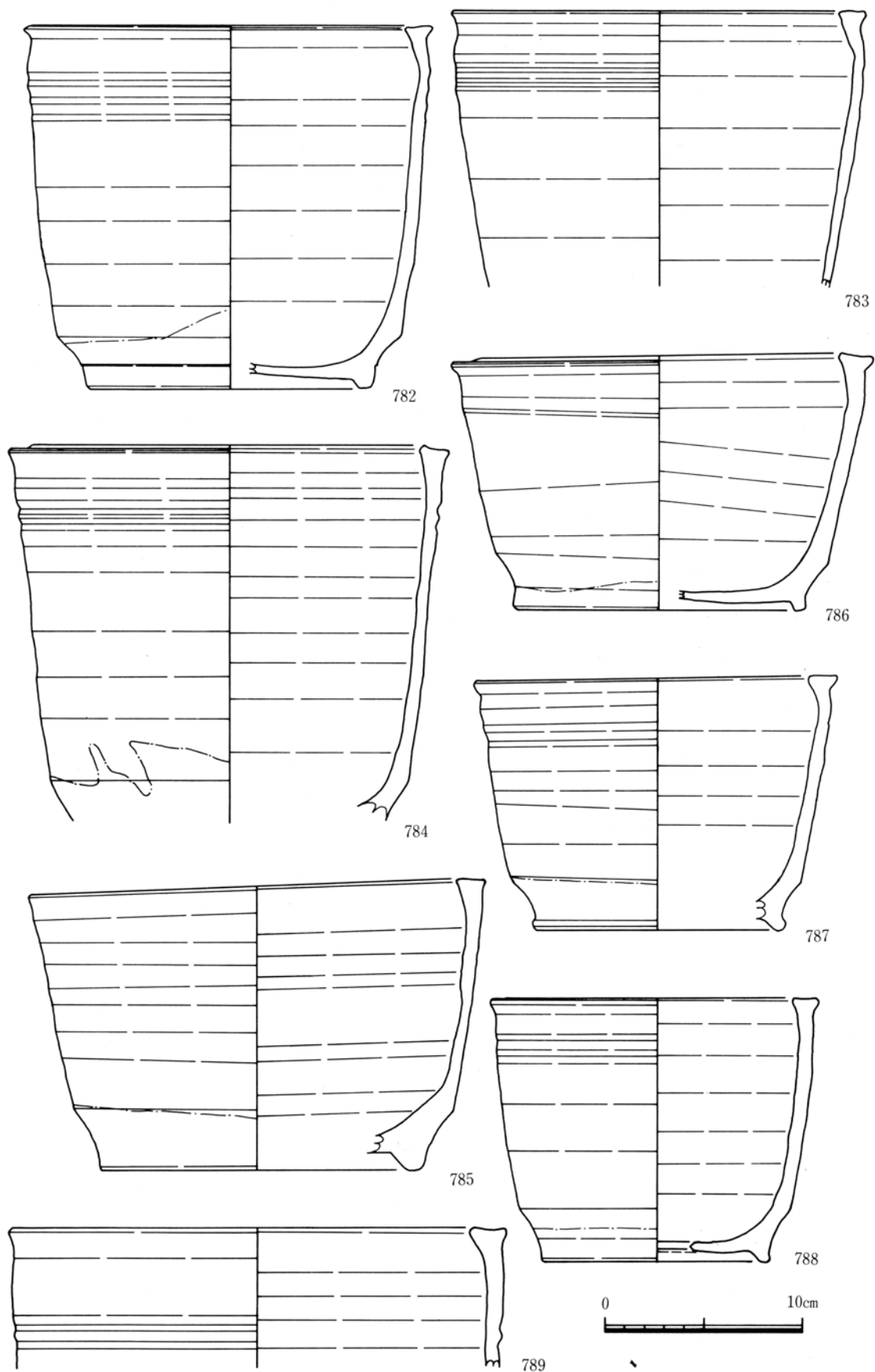
第62図 II期の遺物 (35)

SK162 (3)



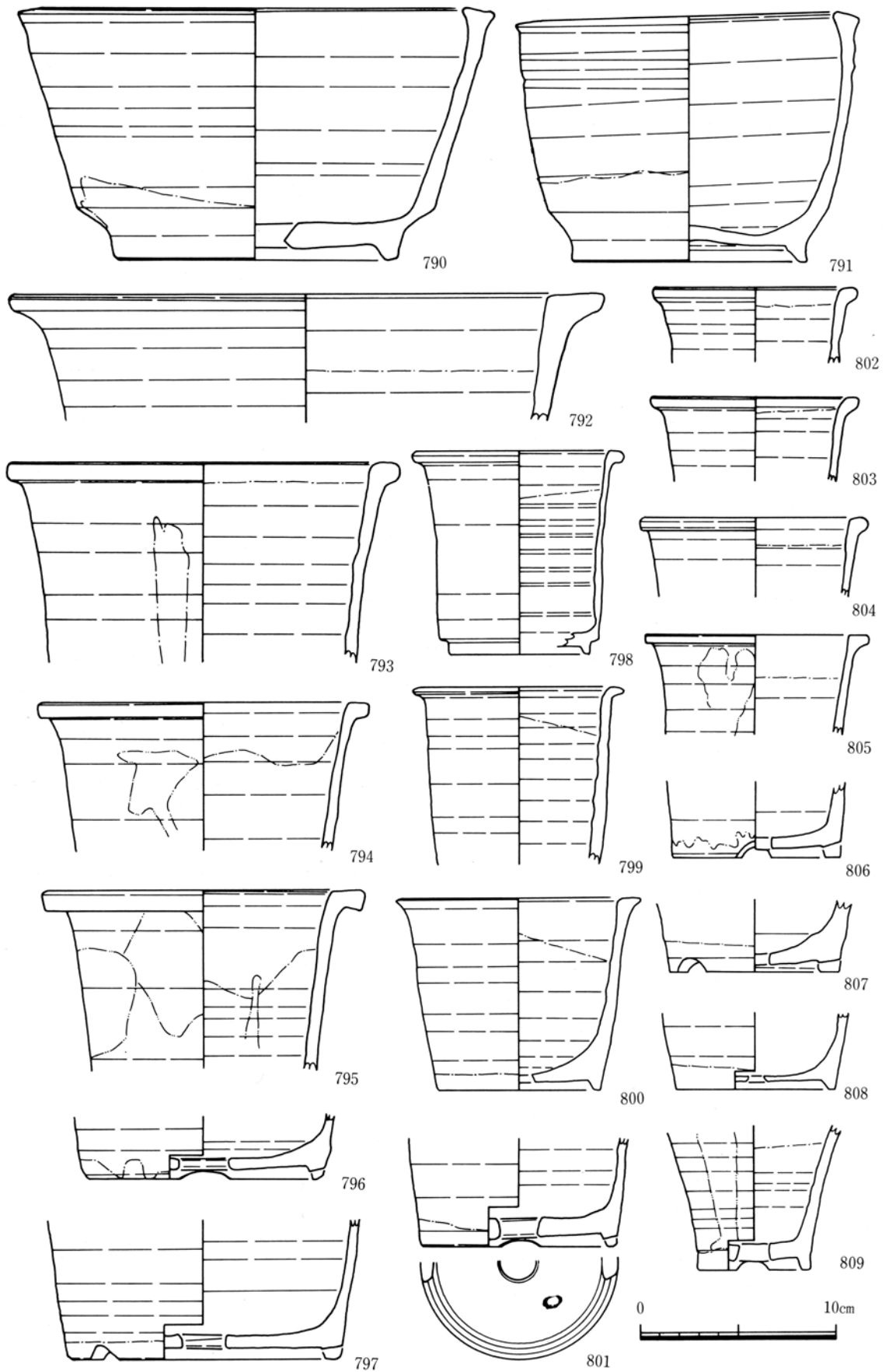
第63図 II期の遺物(36)

SK162(4)



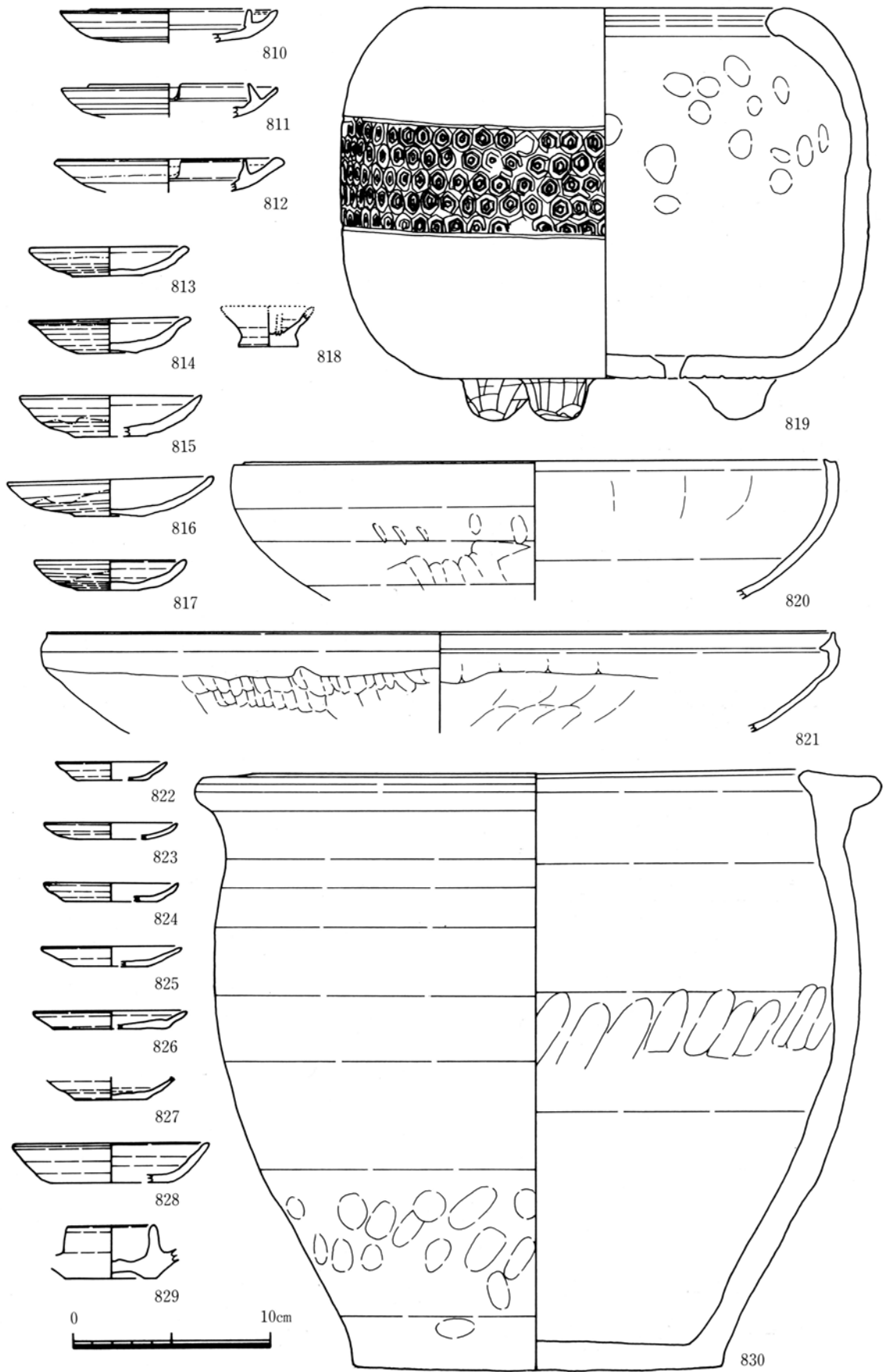
第64図 II期の遺物 (37)

SK162 (5)



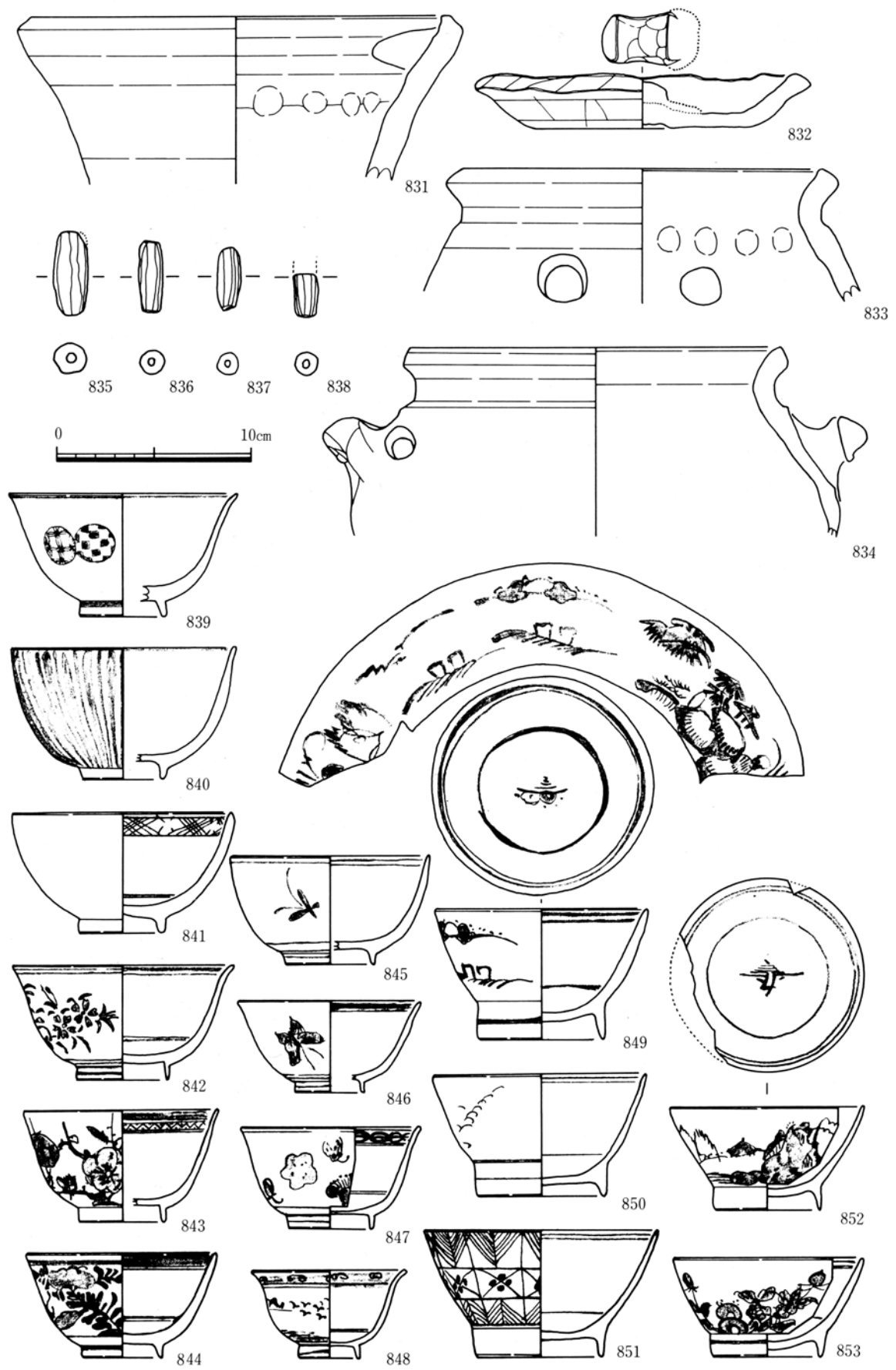
第65図 II期の遺物 (38)

SK162 (6)



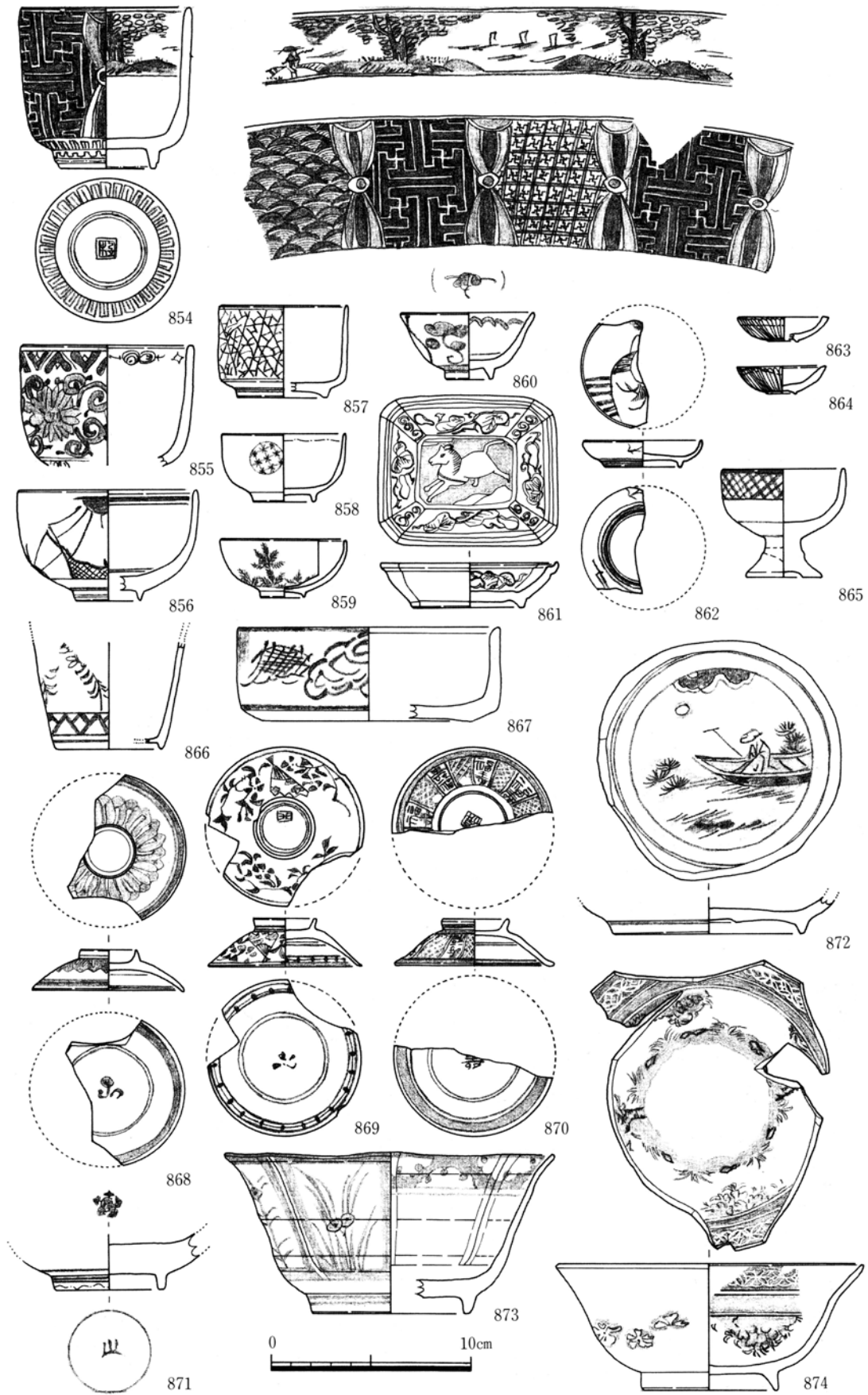
第66図 II期の遺物 (39)

SK162 (7)



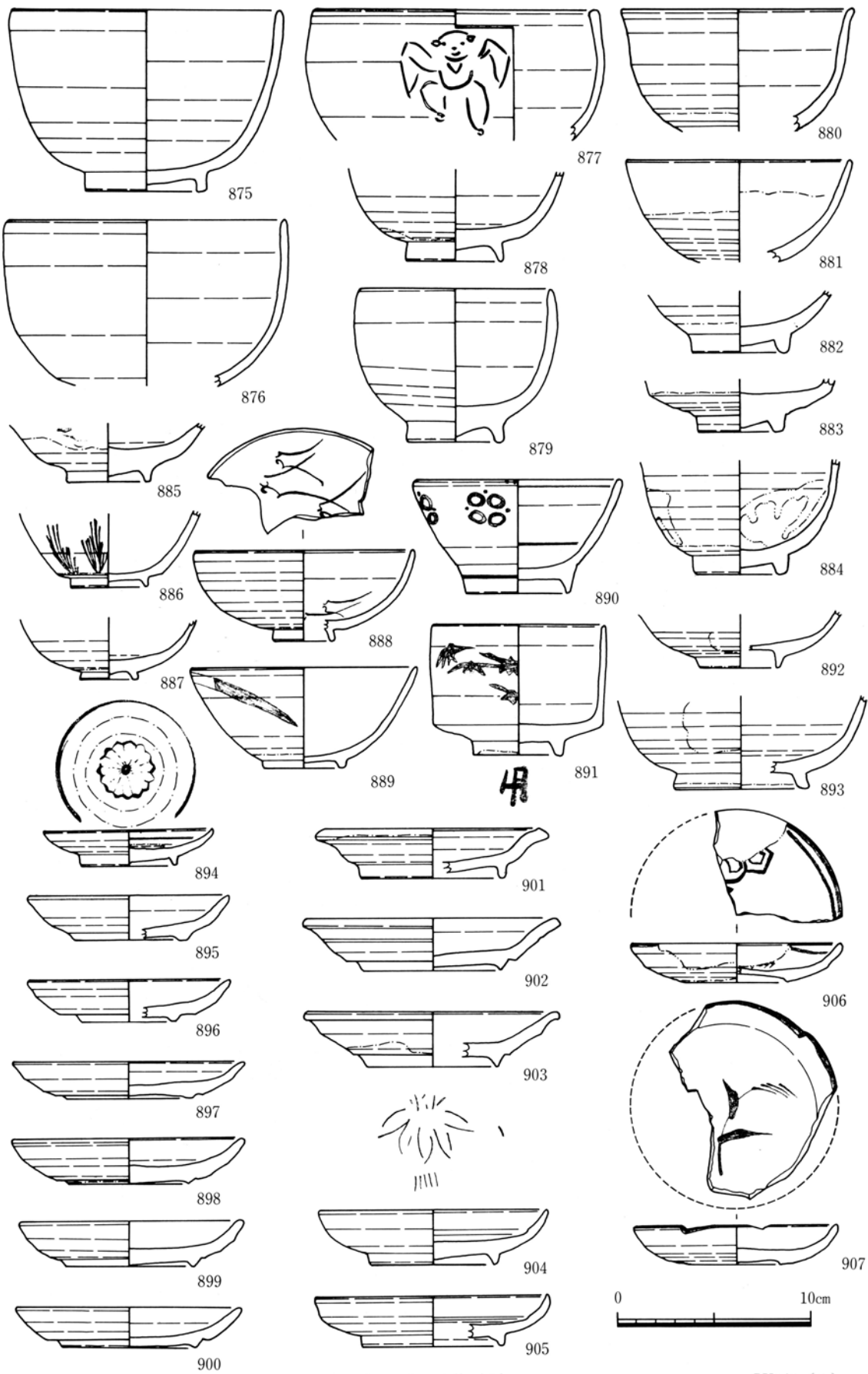
第67図 II期の遺物(40)

SK162(8)



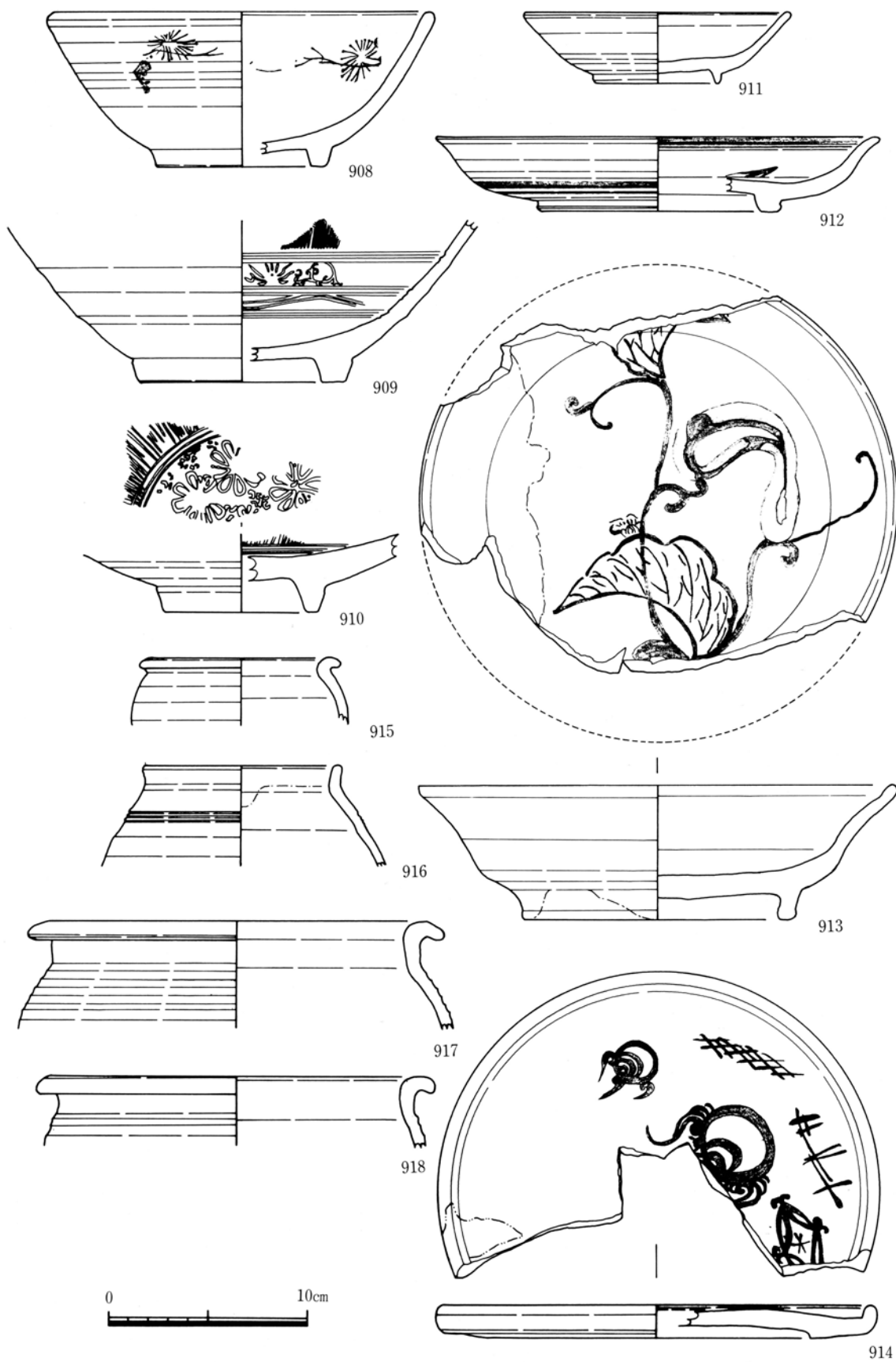
第68図 II期の遺物 (41)

SK162 (9)



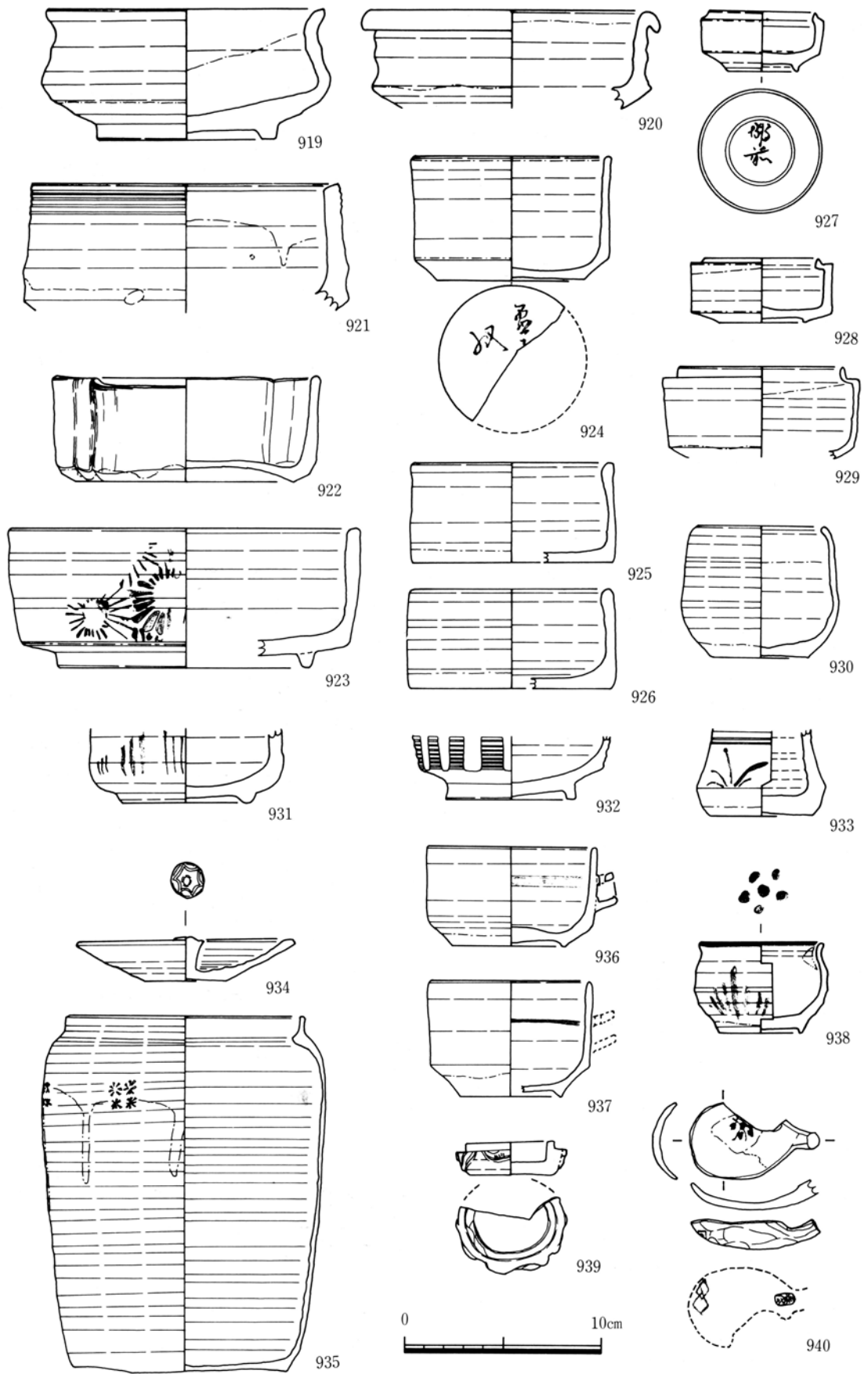
第69図 II期の遺物(42)

SX101(1)



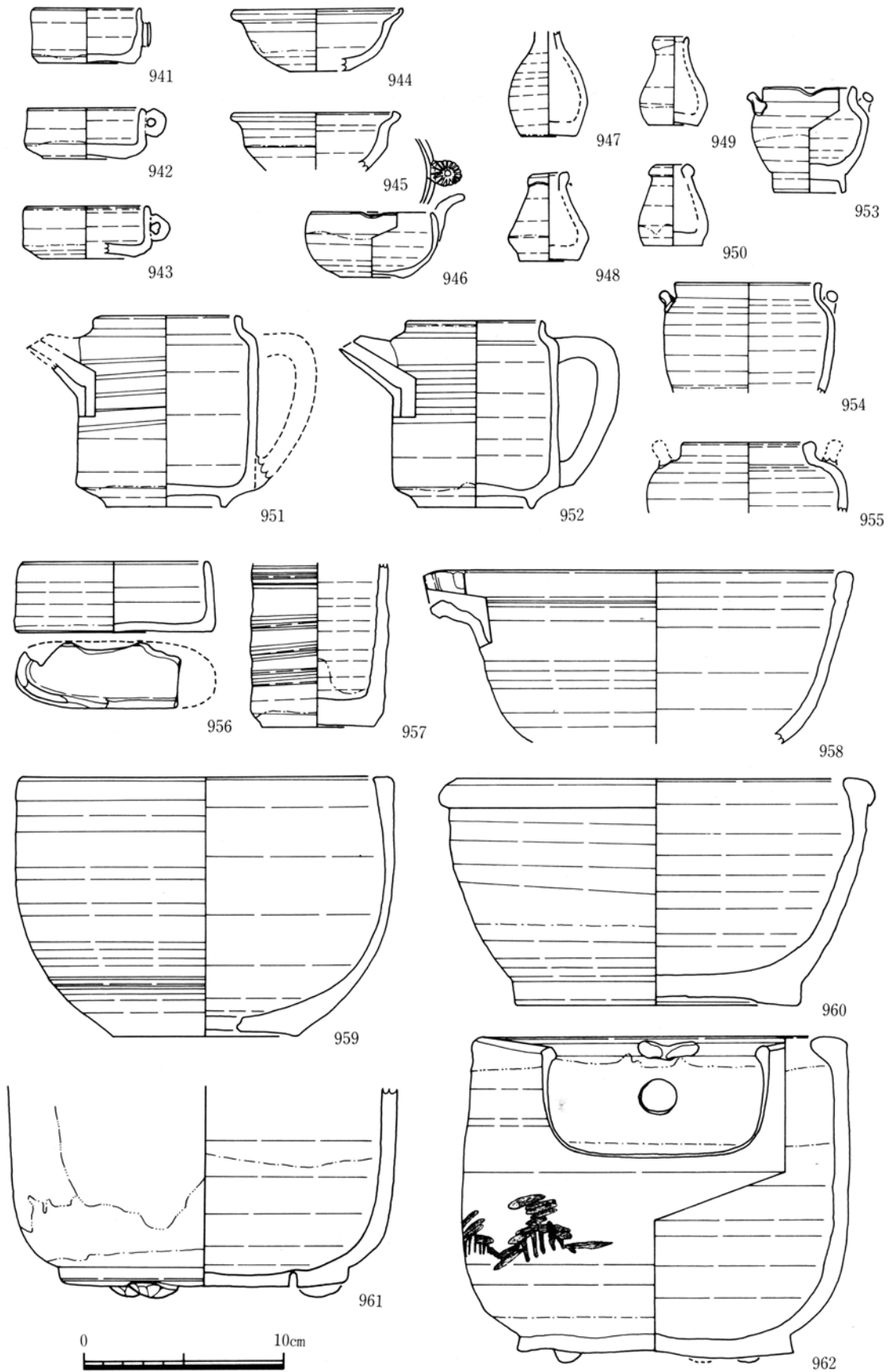
第70図 II期の遺物 (43)

SX101 (2)



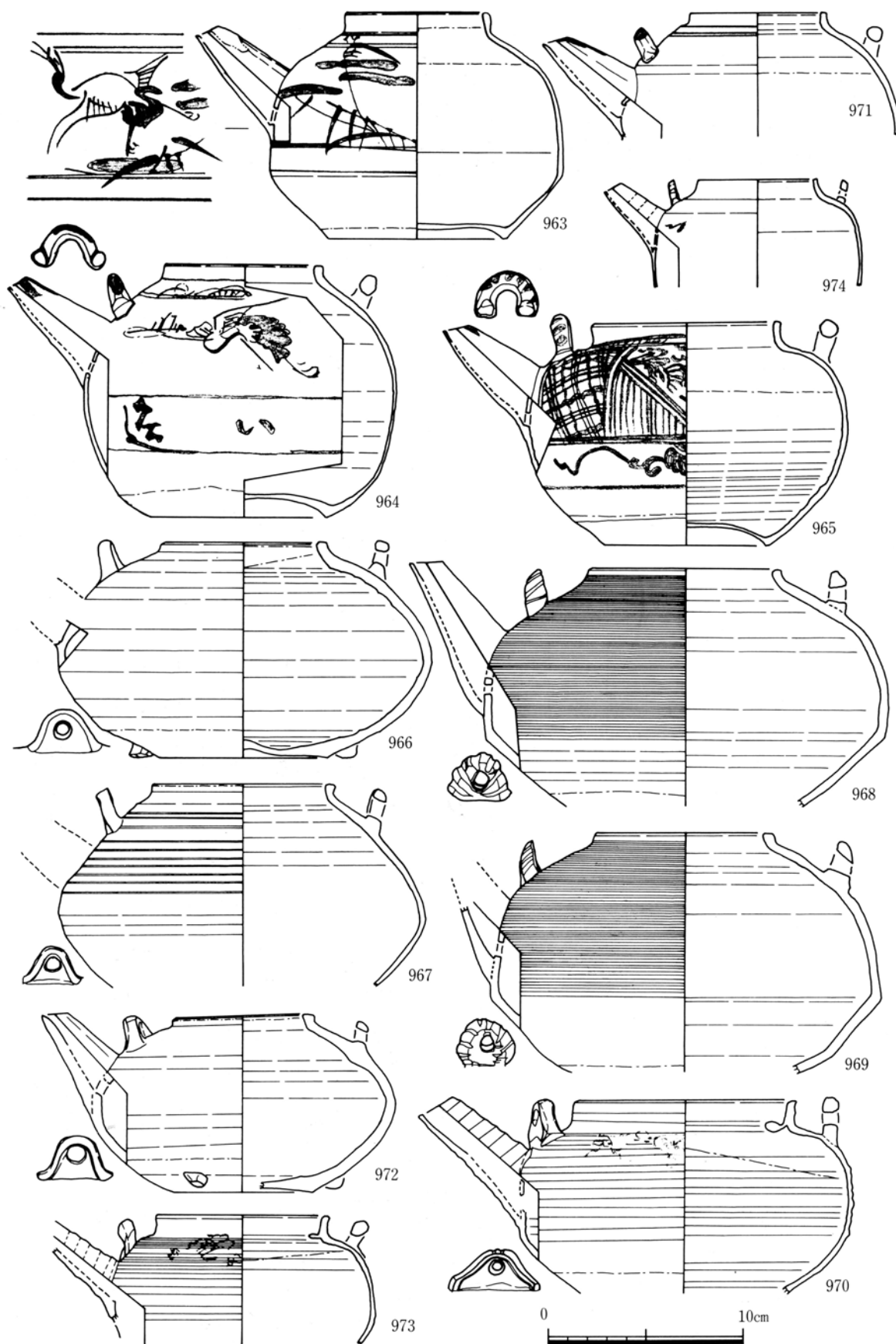
第71図 II期の遺物(44)

SX101(3)



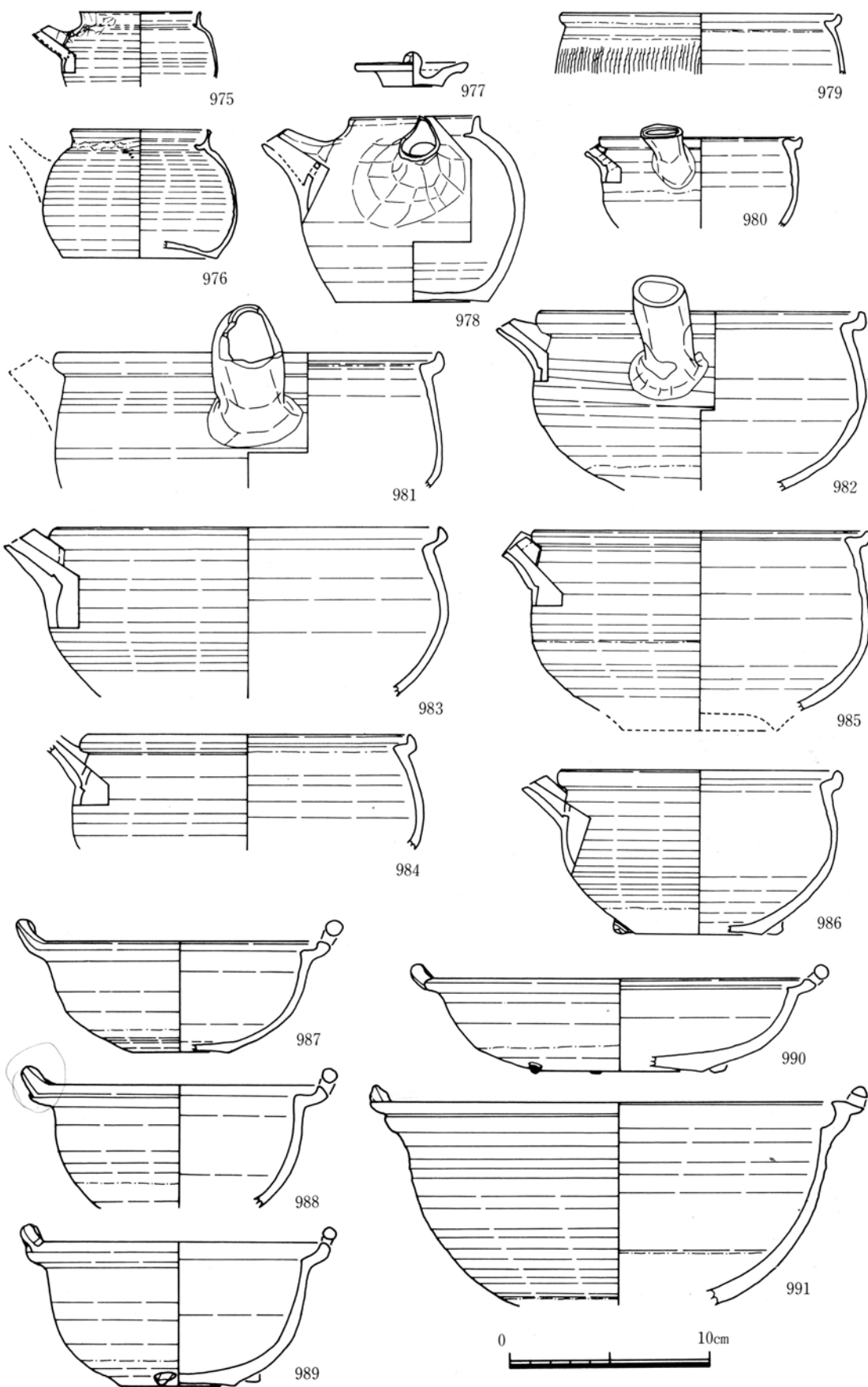
第72図 II期の遺物 (45)

SX101 (4)



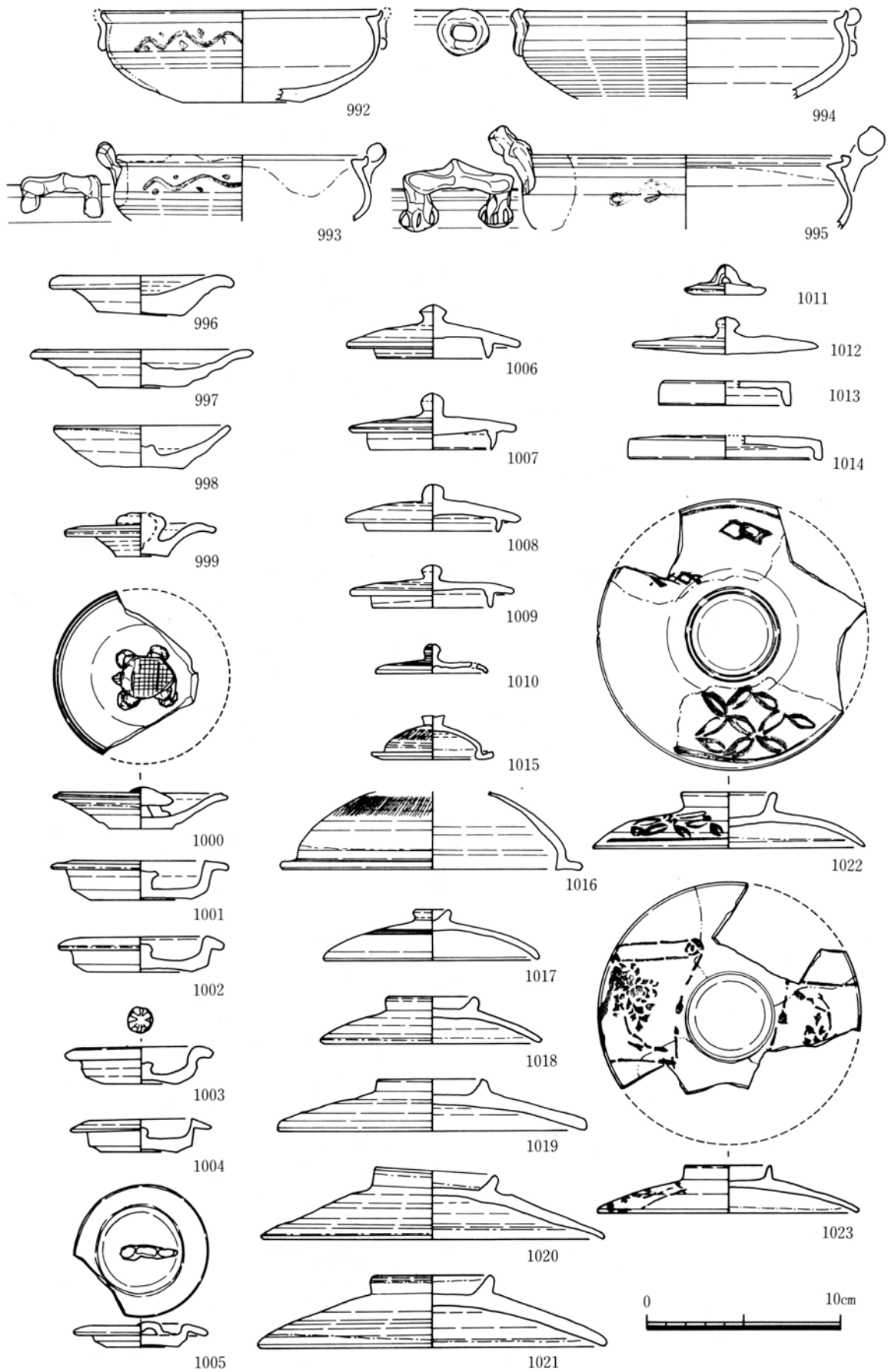
第73図 II期の遺物 (46)

SX101 (5)



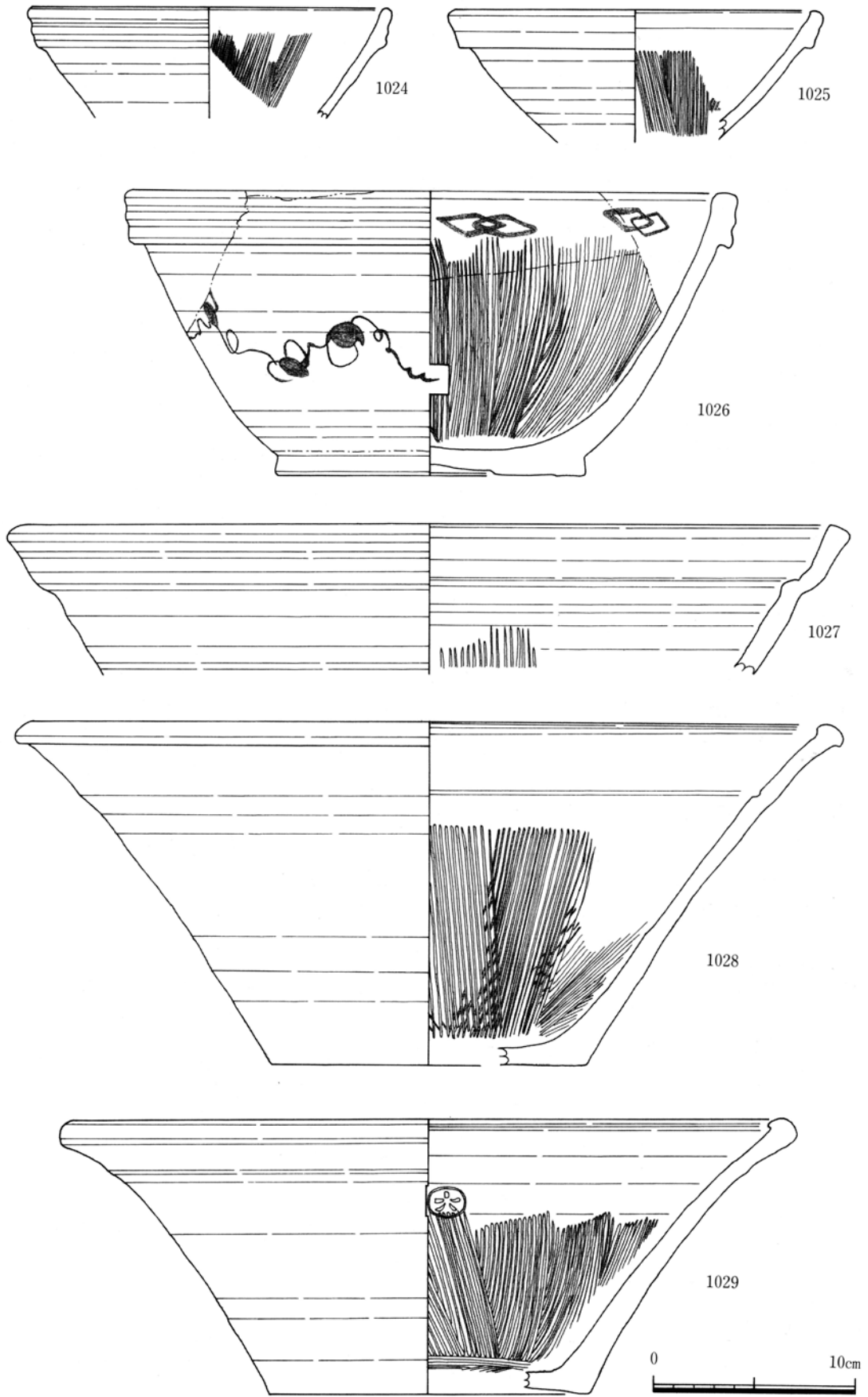
第74図 II期の遺物 (47)

SX101 (6)



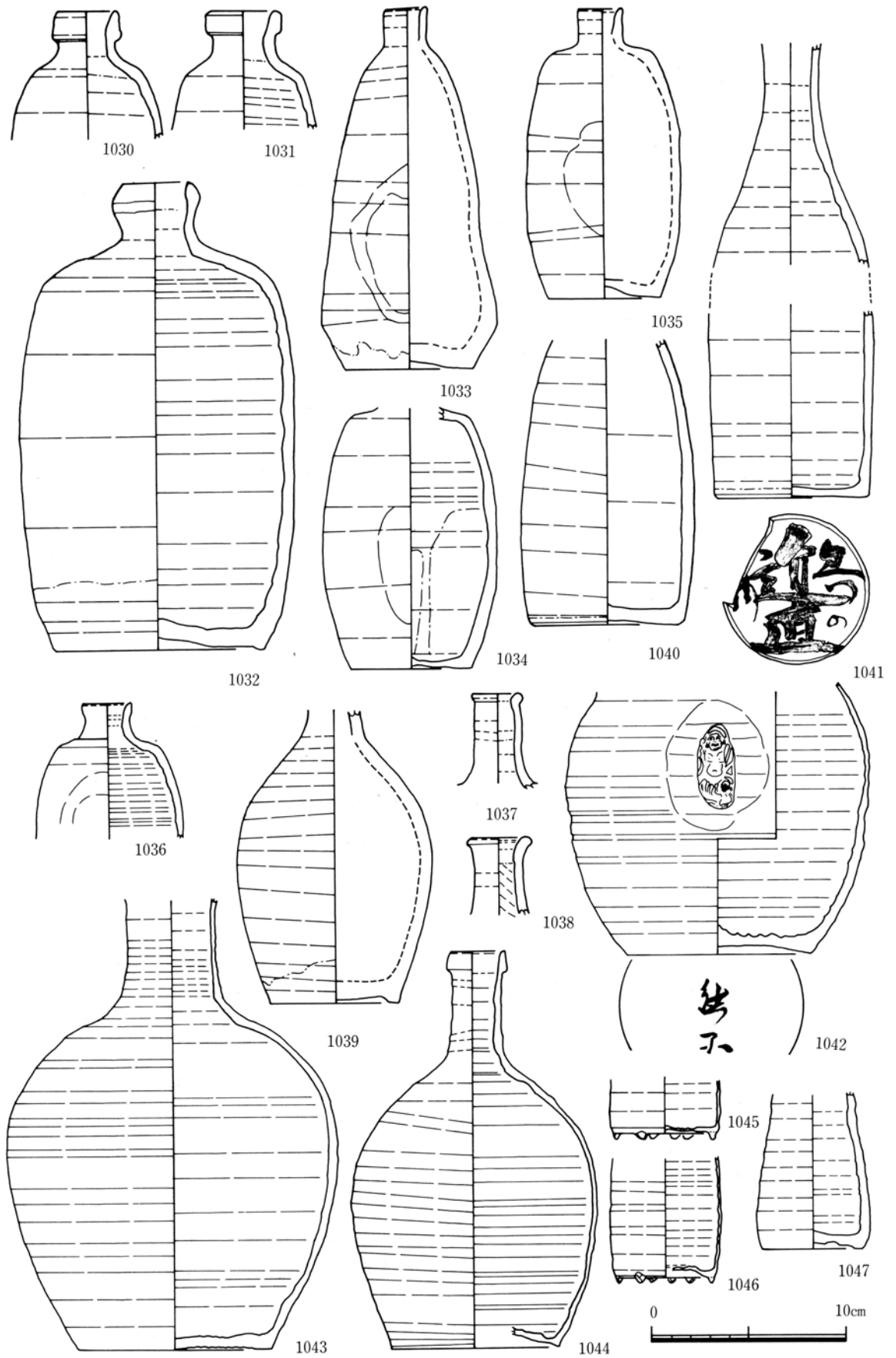
第75図 II期の遺物 (48)

SX101 (7)



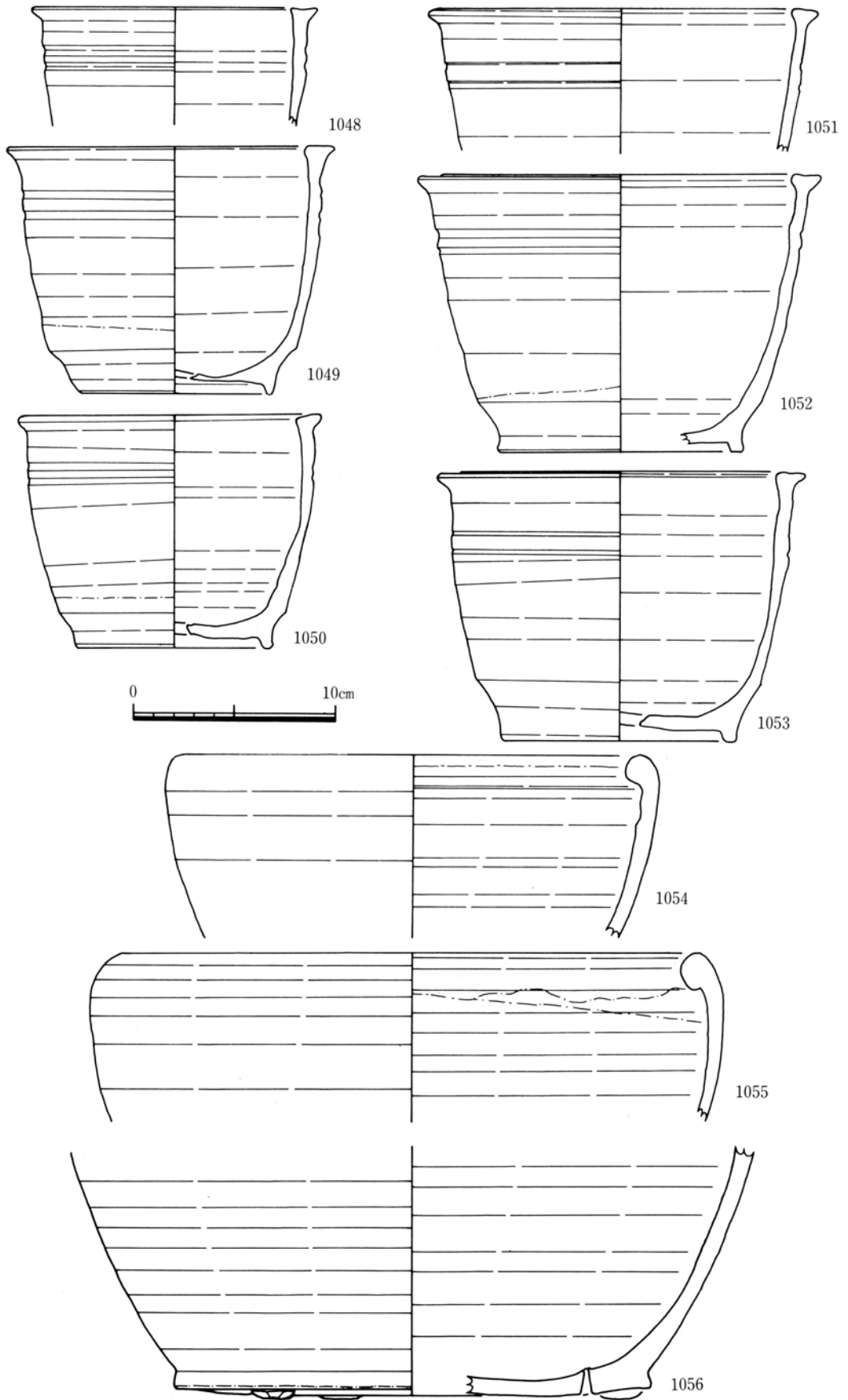
第76図 II期の遺物 (49)

SX101 (8)



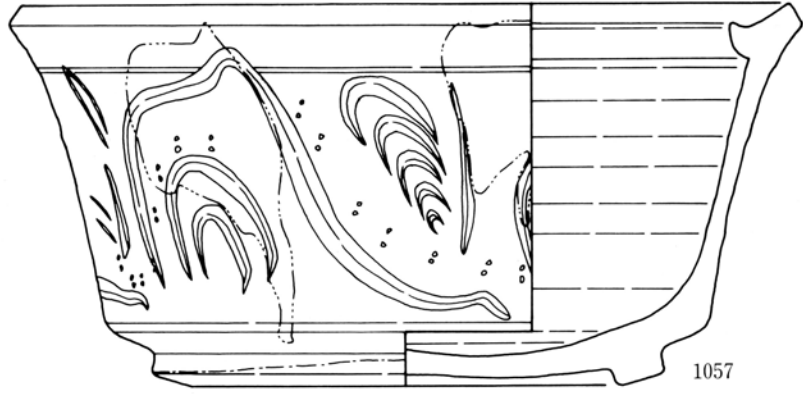
第77図 II期の遺物 (50)

SX101 (9)

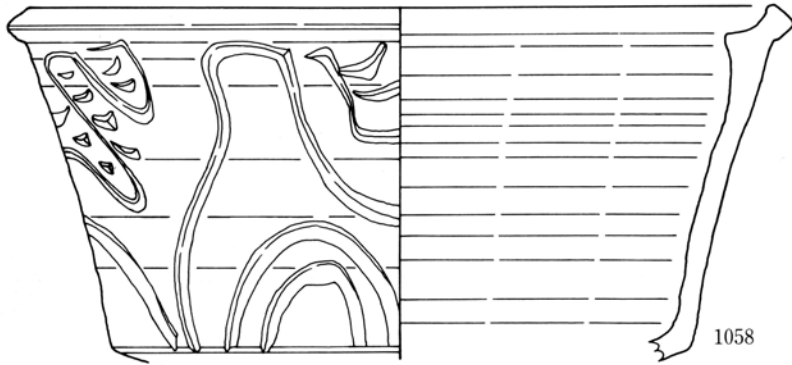


第78図 II期の遺物 (51)

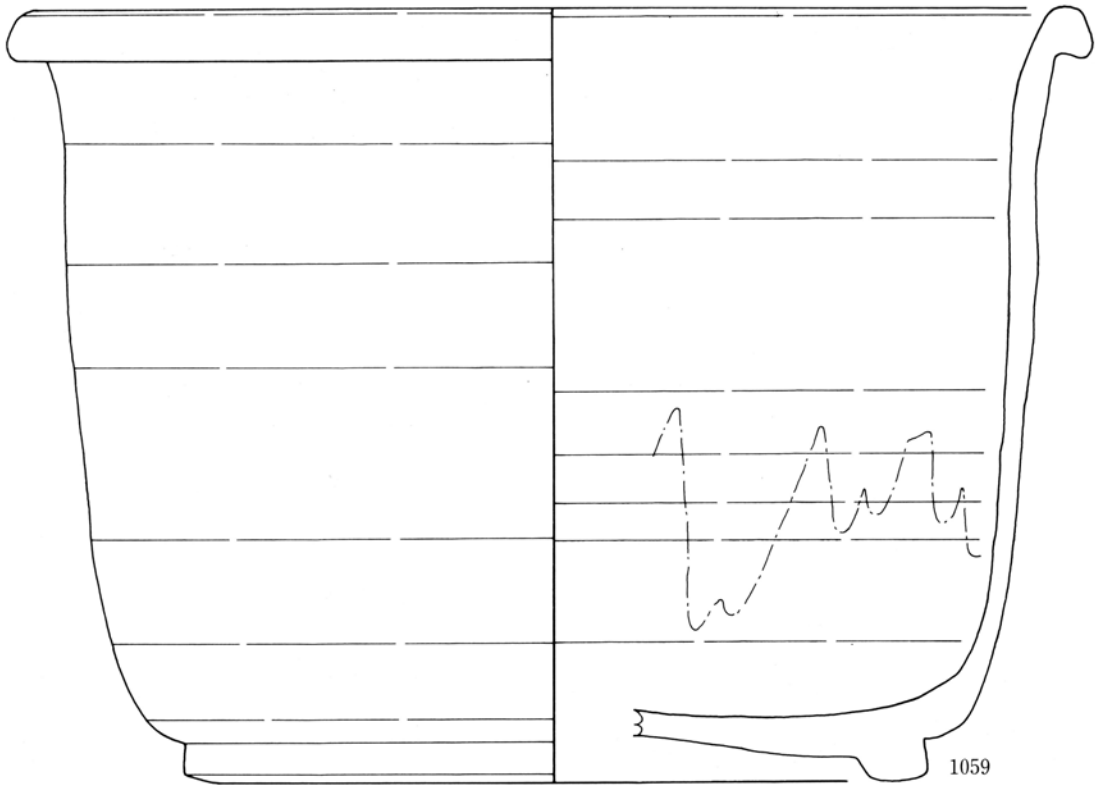
SX101 (10)



1057



1058

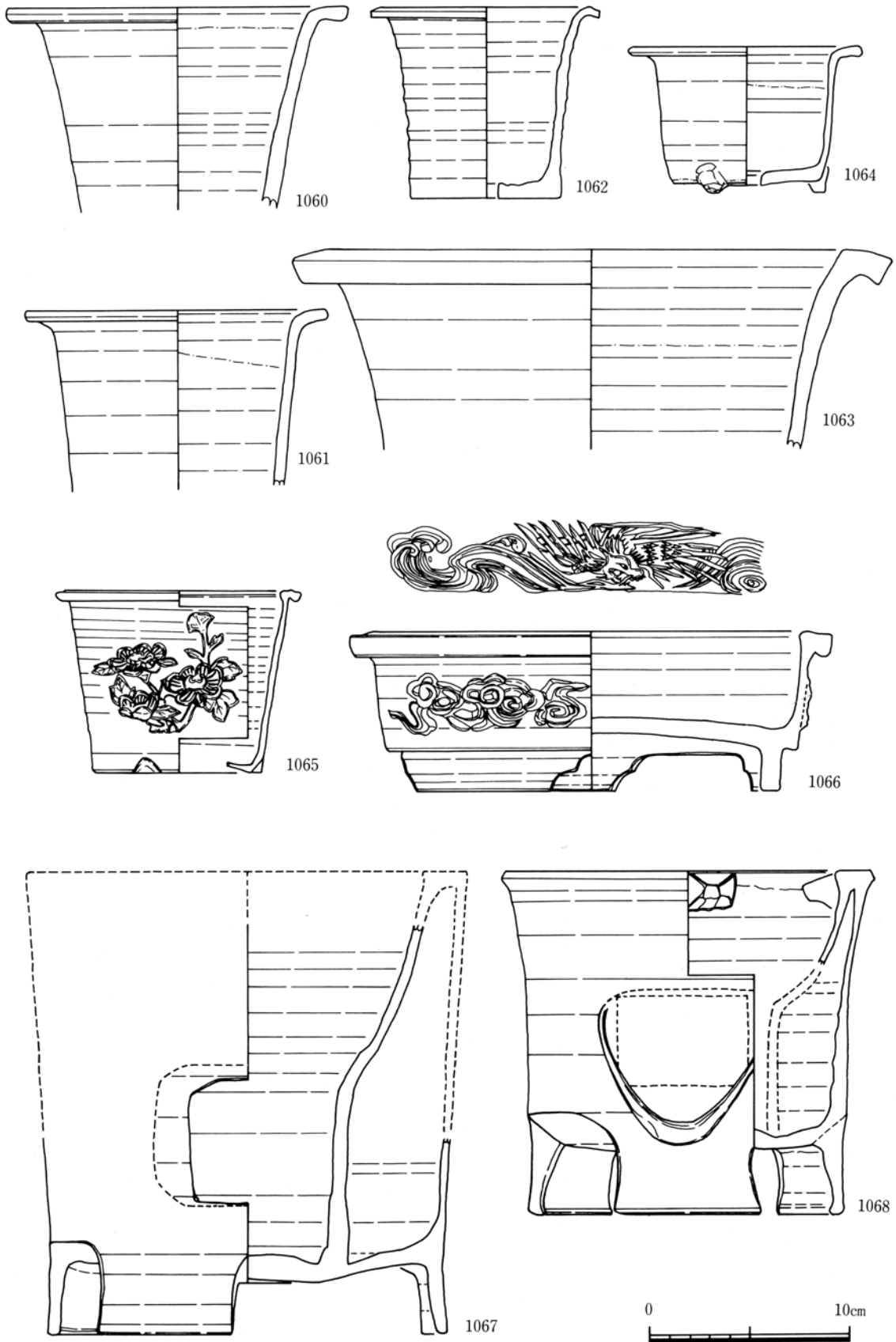


1059



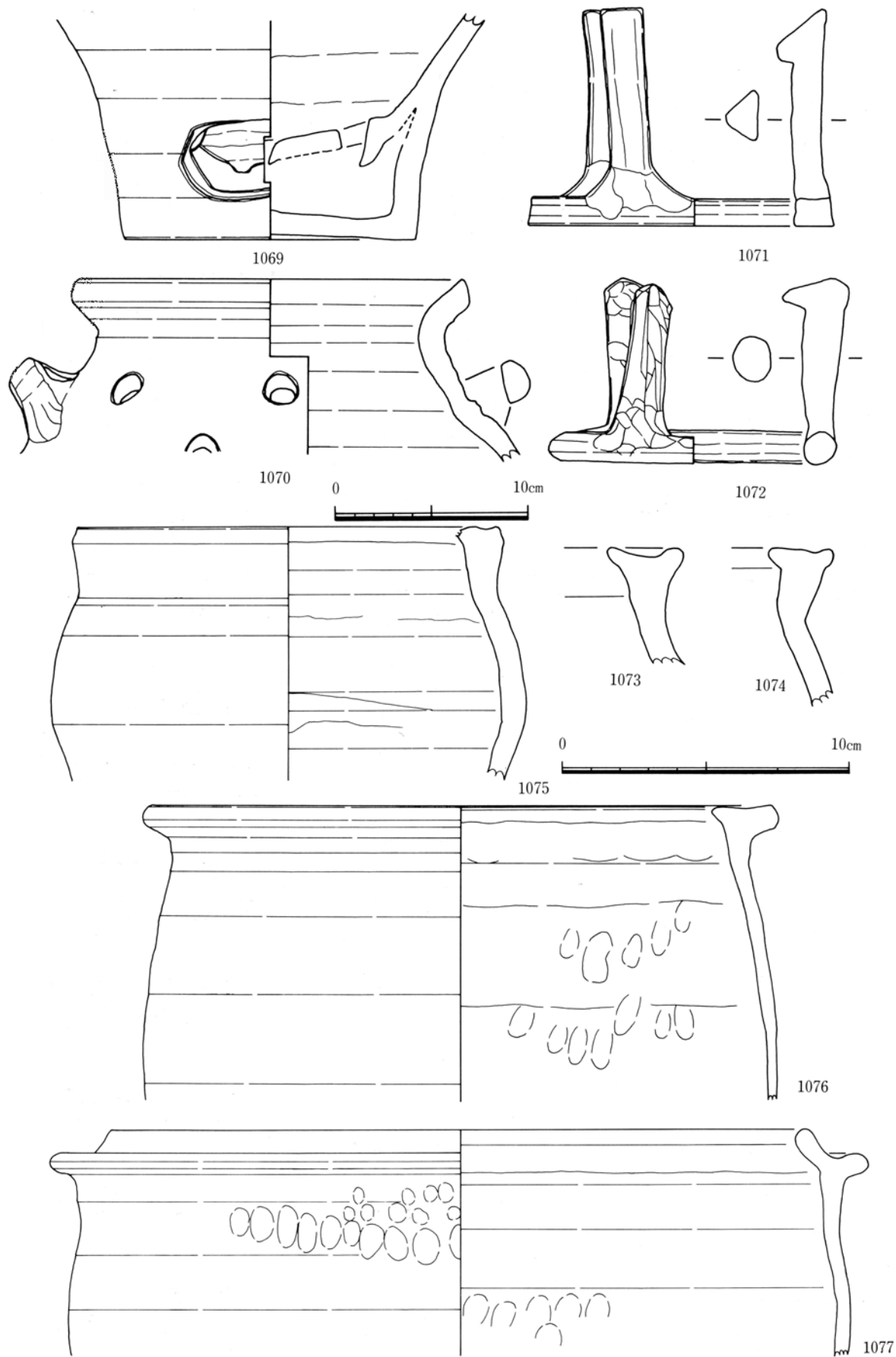
第79図 II期の遺物 (52)

SX101 (11)



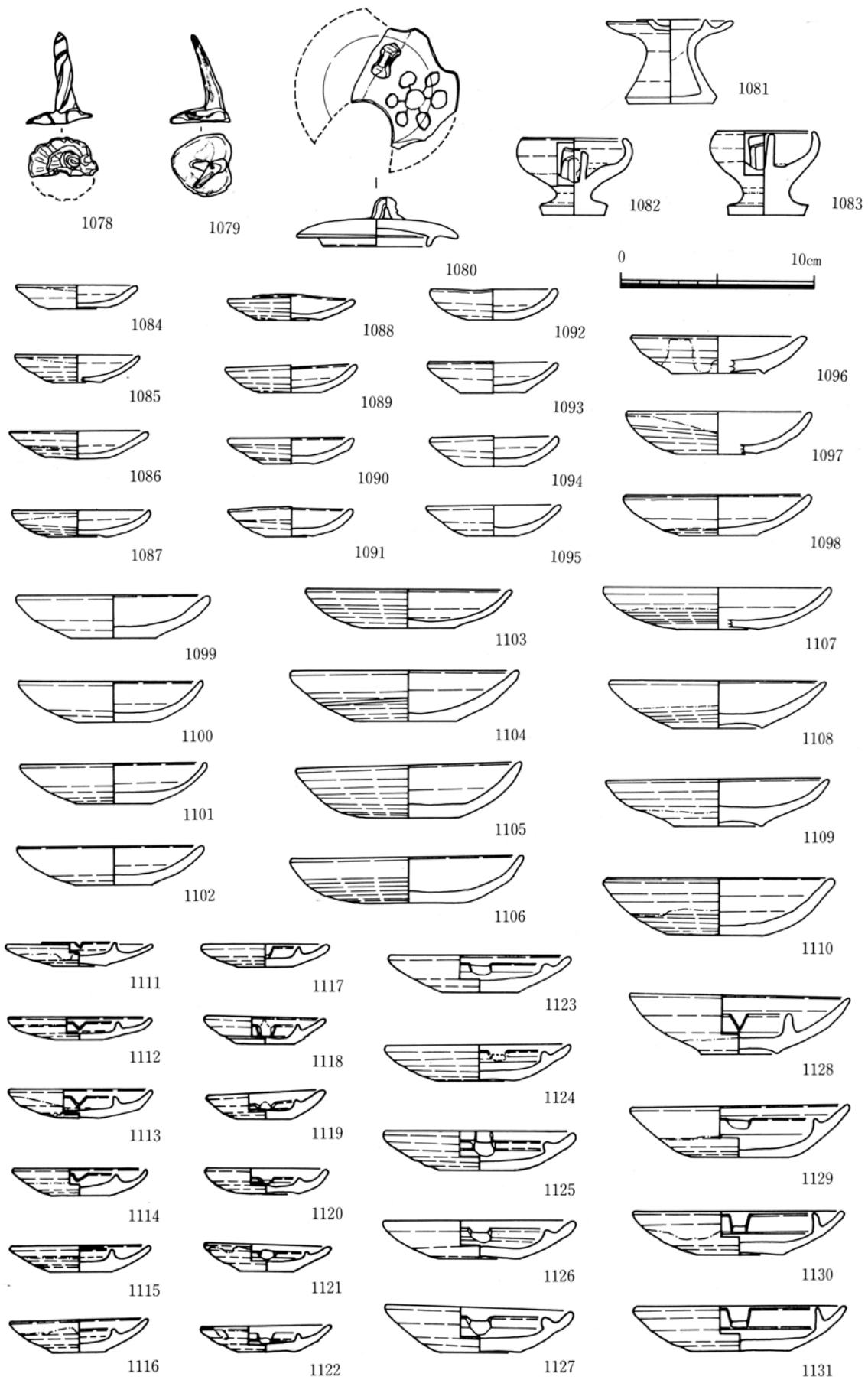
第80図 II期の遺物 (53)

SX101 (12)



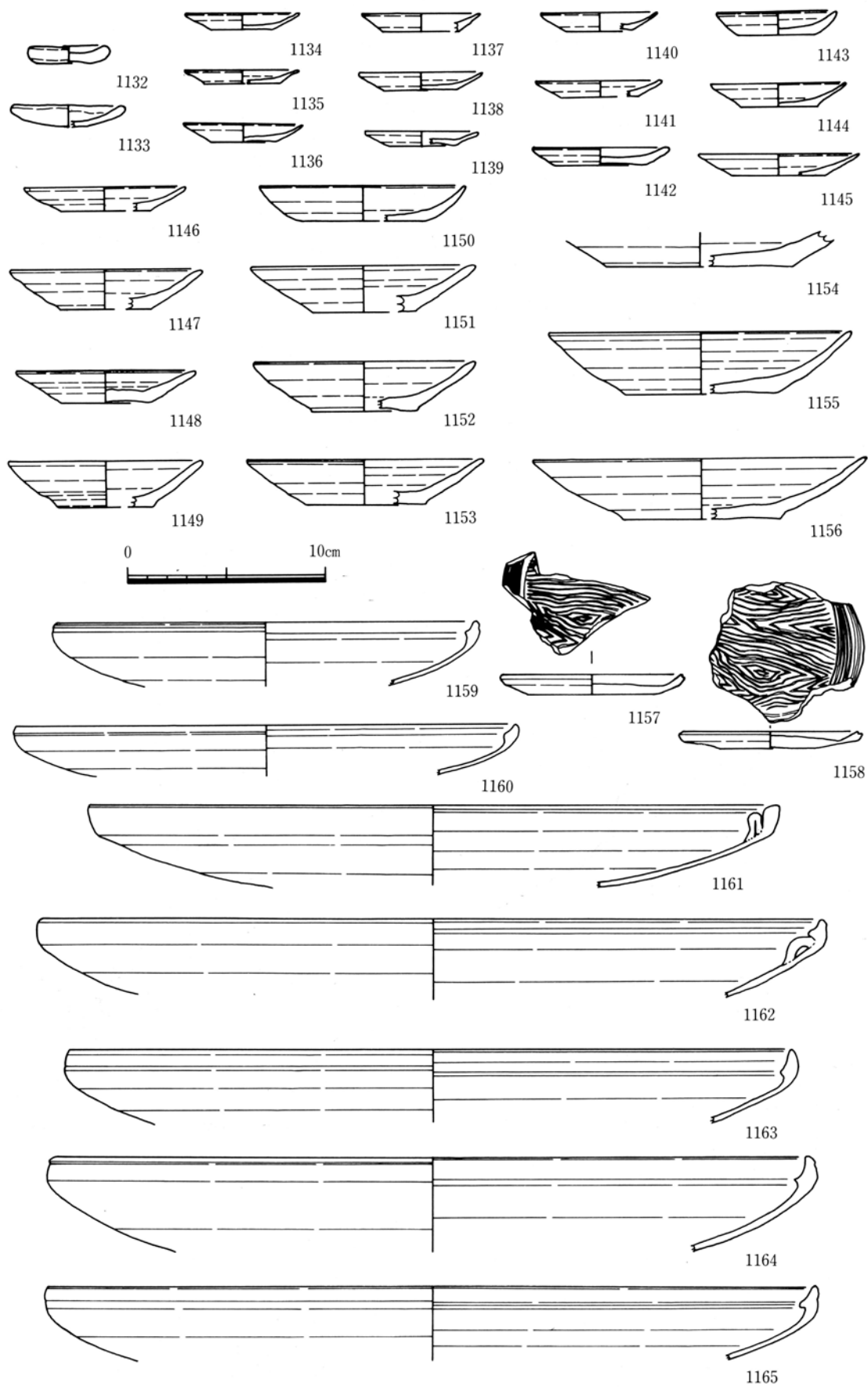
第81図 II期の遺物 (54)

SX101 (13)



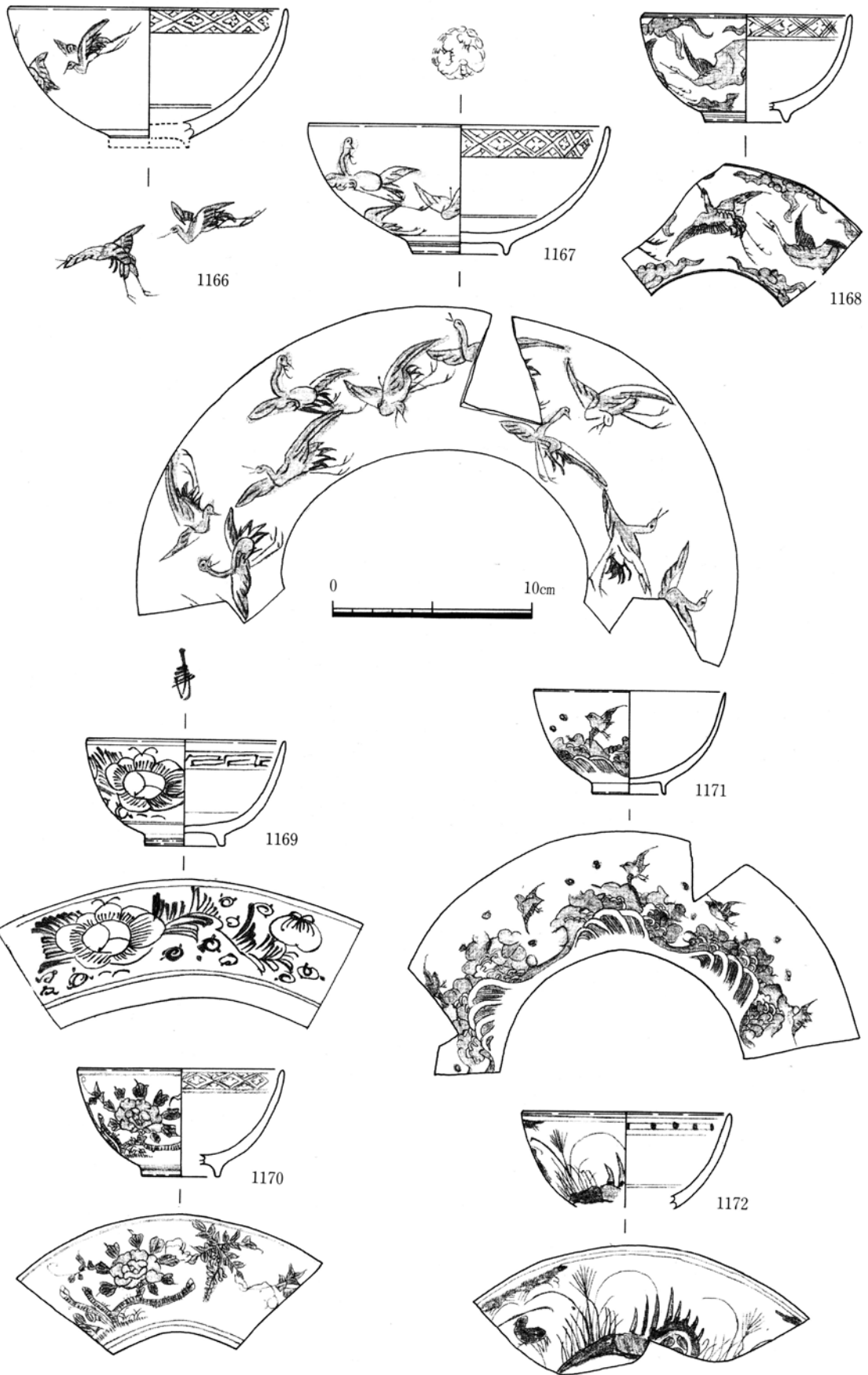
第82図 II期の遺物 (55)

SX101 (14)



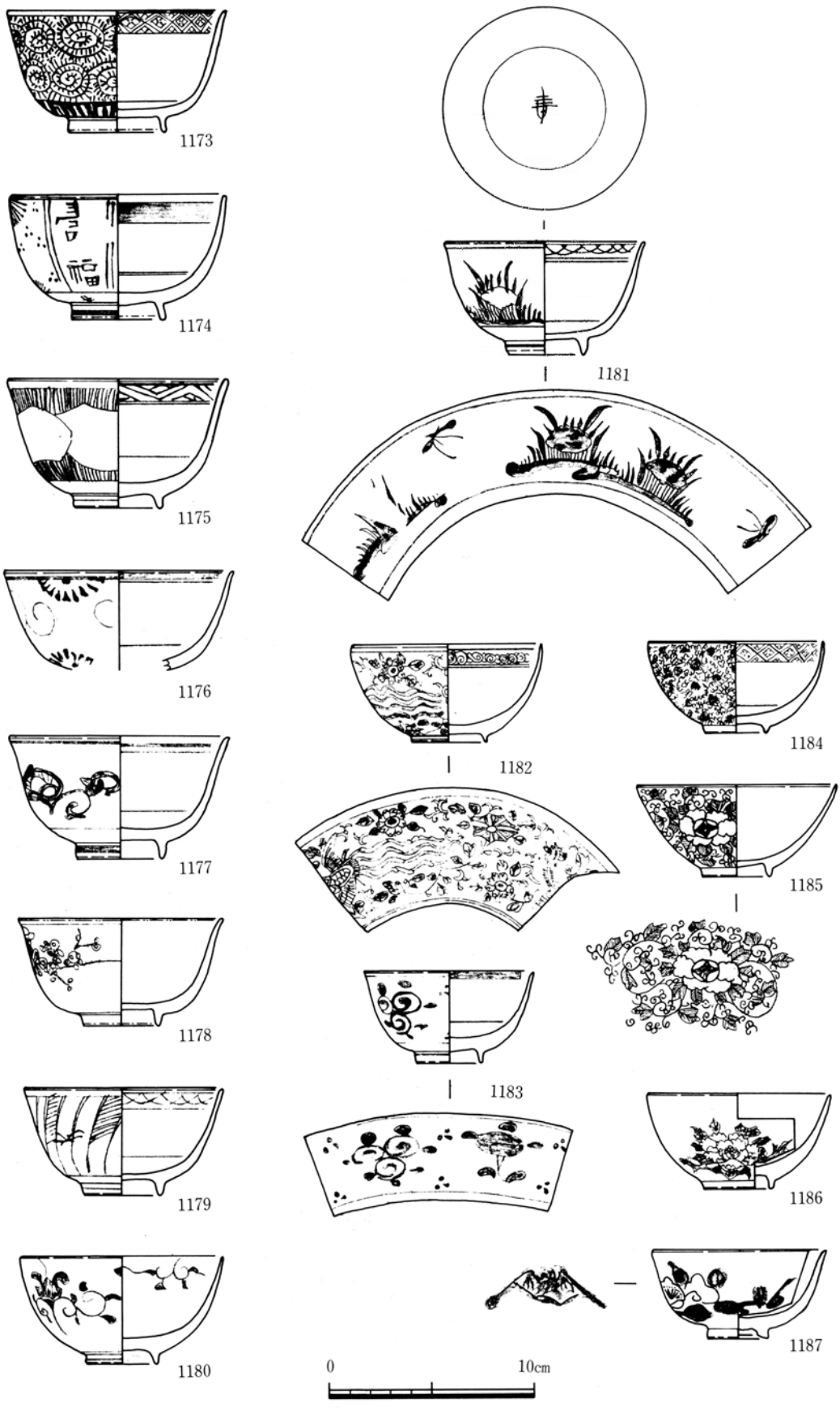
第83図 II期の遺物 (56)

SX101 (15)



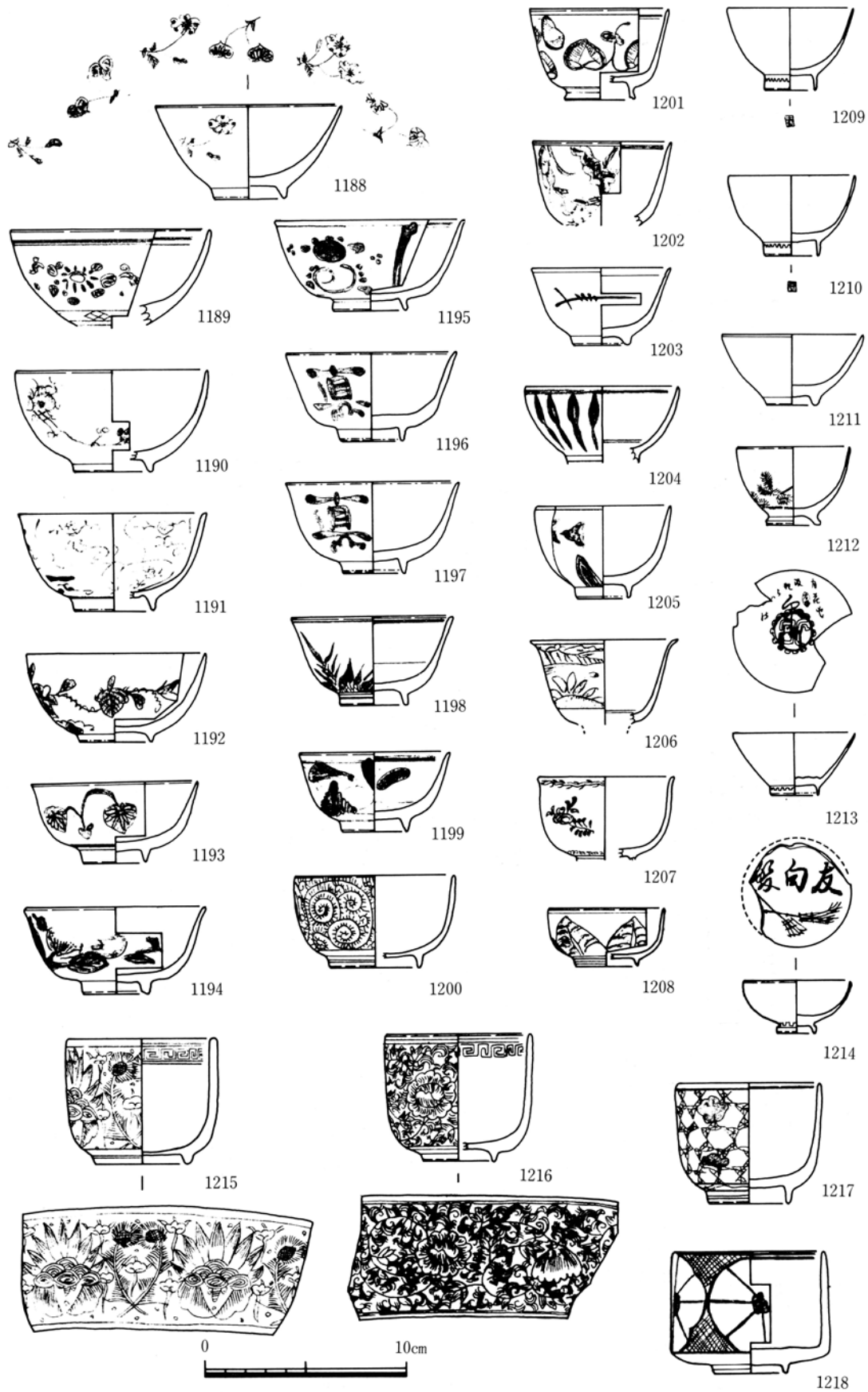
第84図 II期の遺物 (57)

SX101 (16)



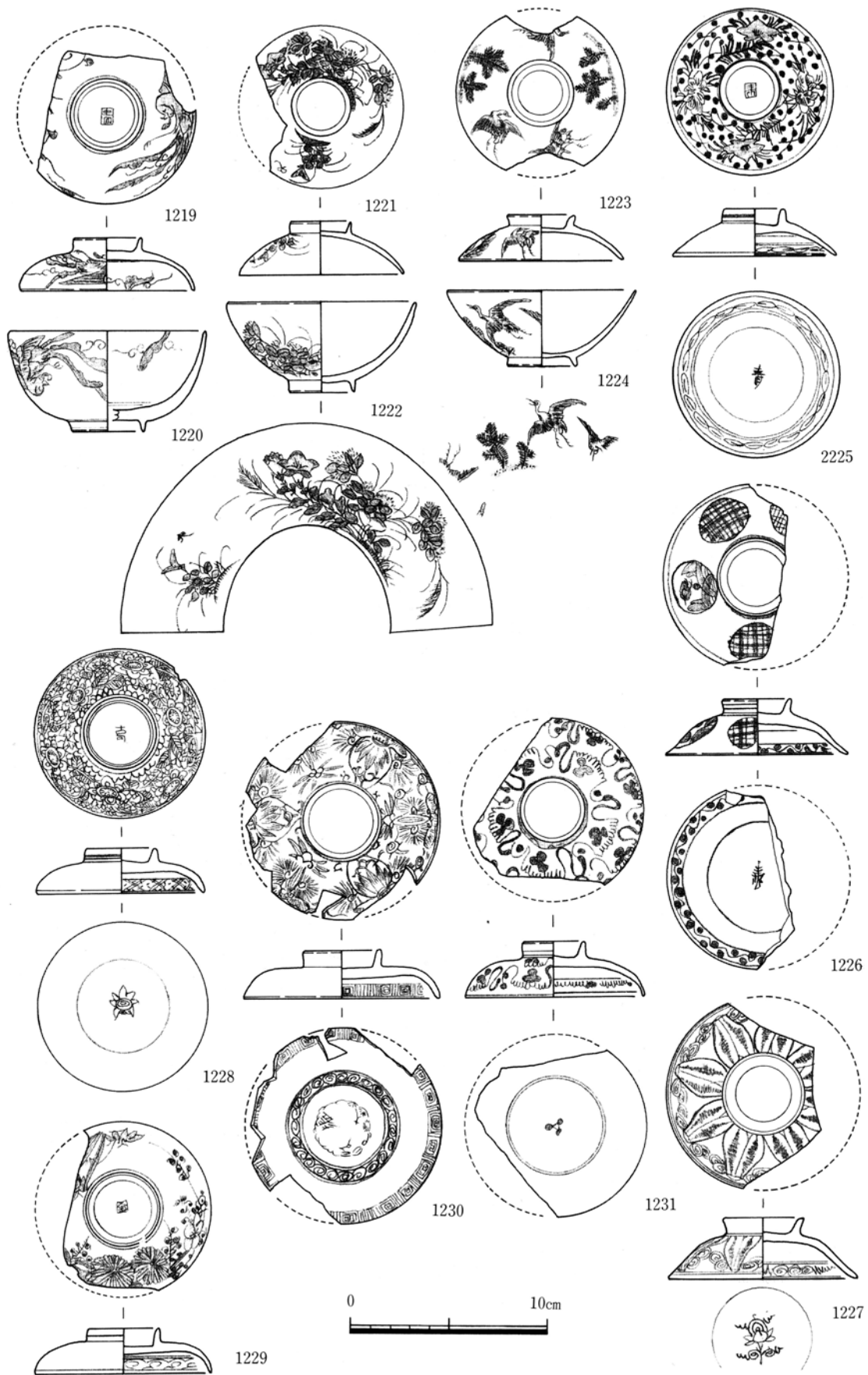
第85図 II期の遺物 (58)

SX101 (17)



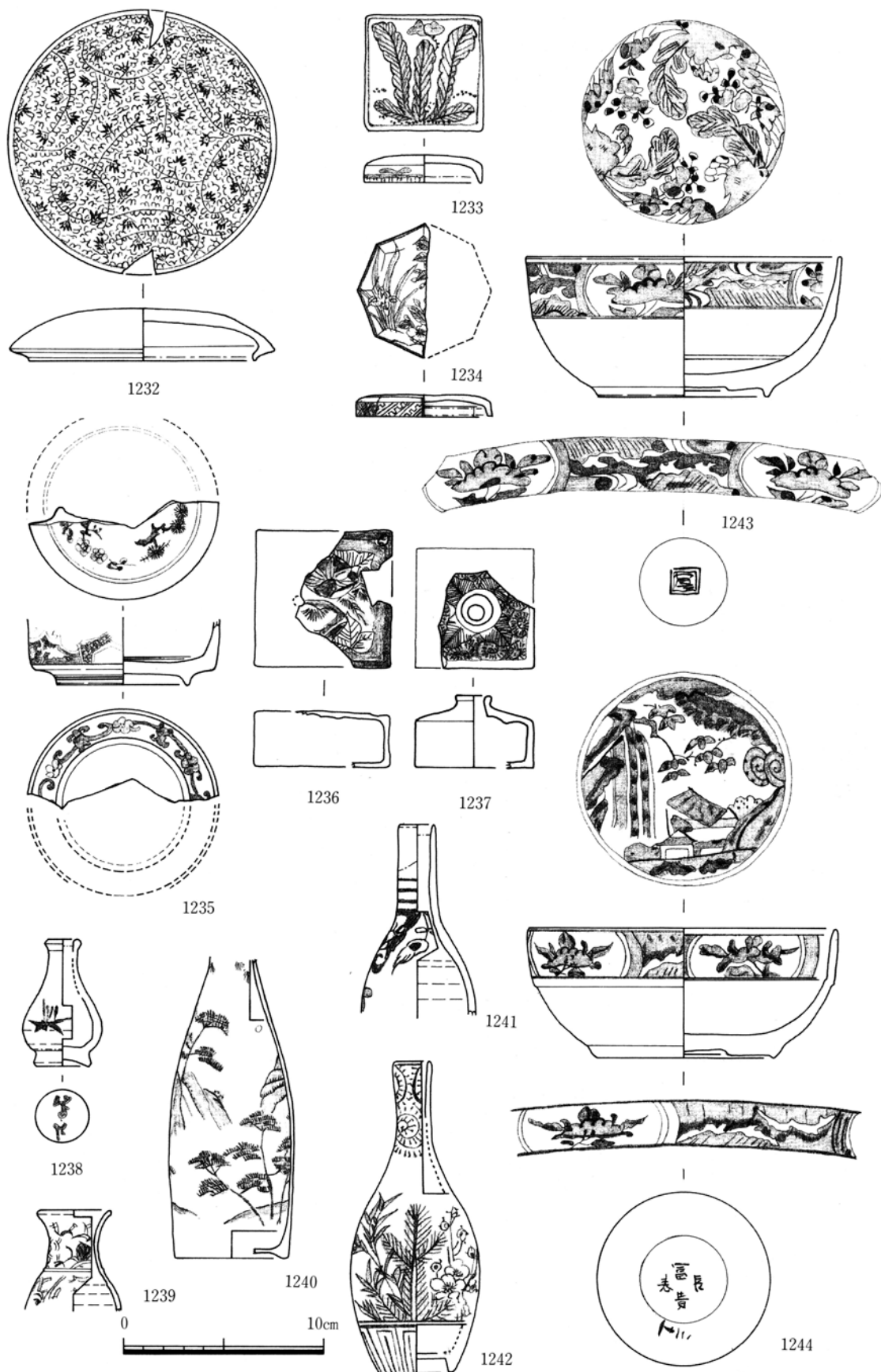
第86図 II期の遺物 (59)

SX101 (18)



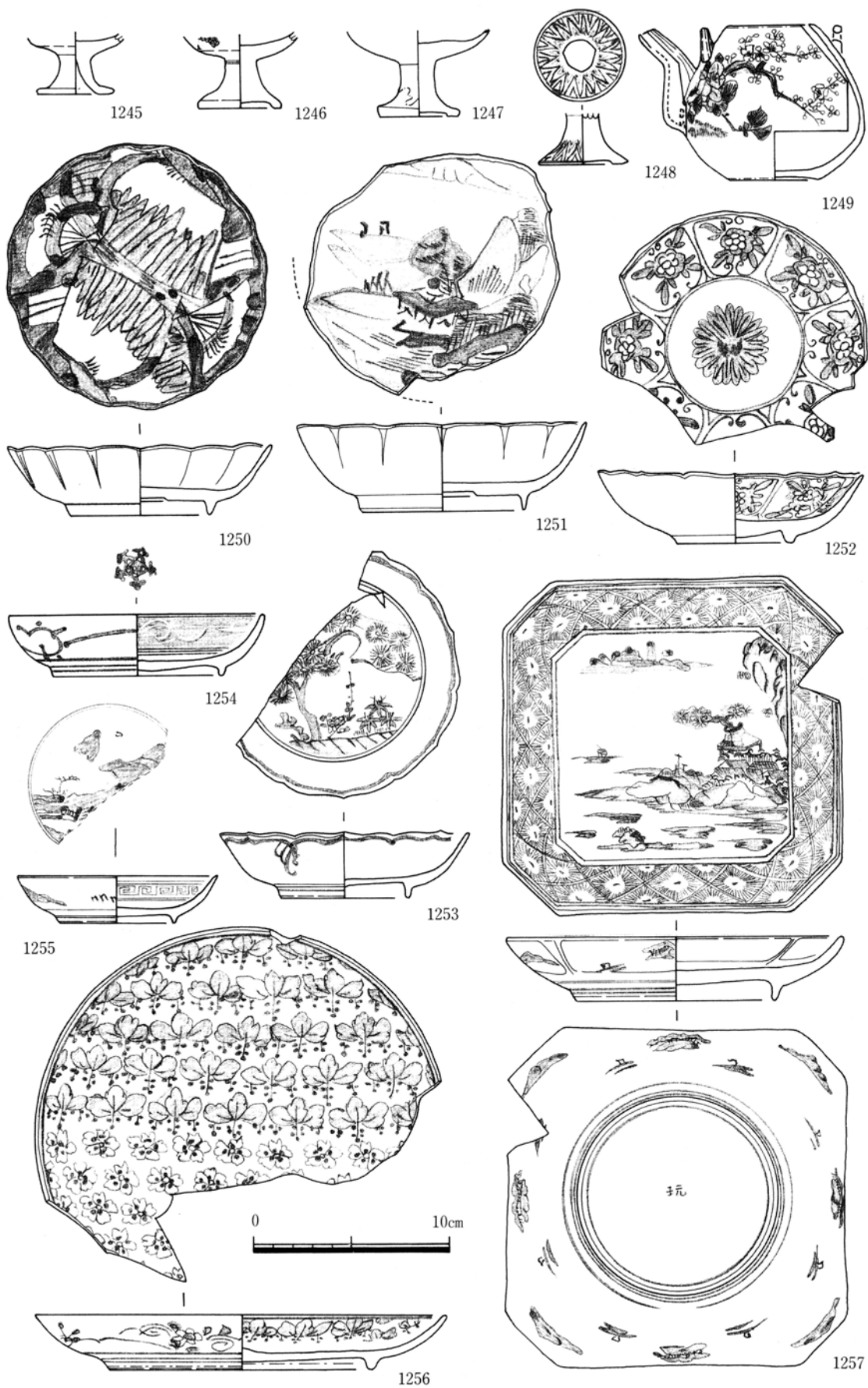
第87図 II期の遺物 (60)

SX101 (19)



第88図 II期の遺物 (61)

SX101 (20)



第89図 II期の遺物 (62)

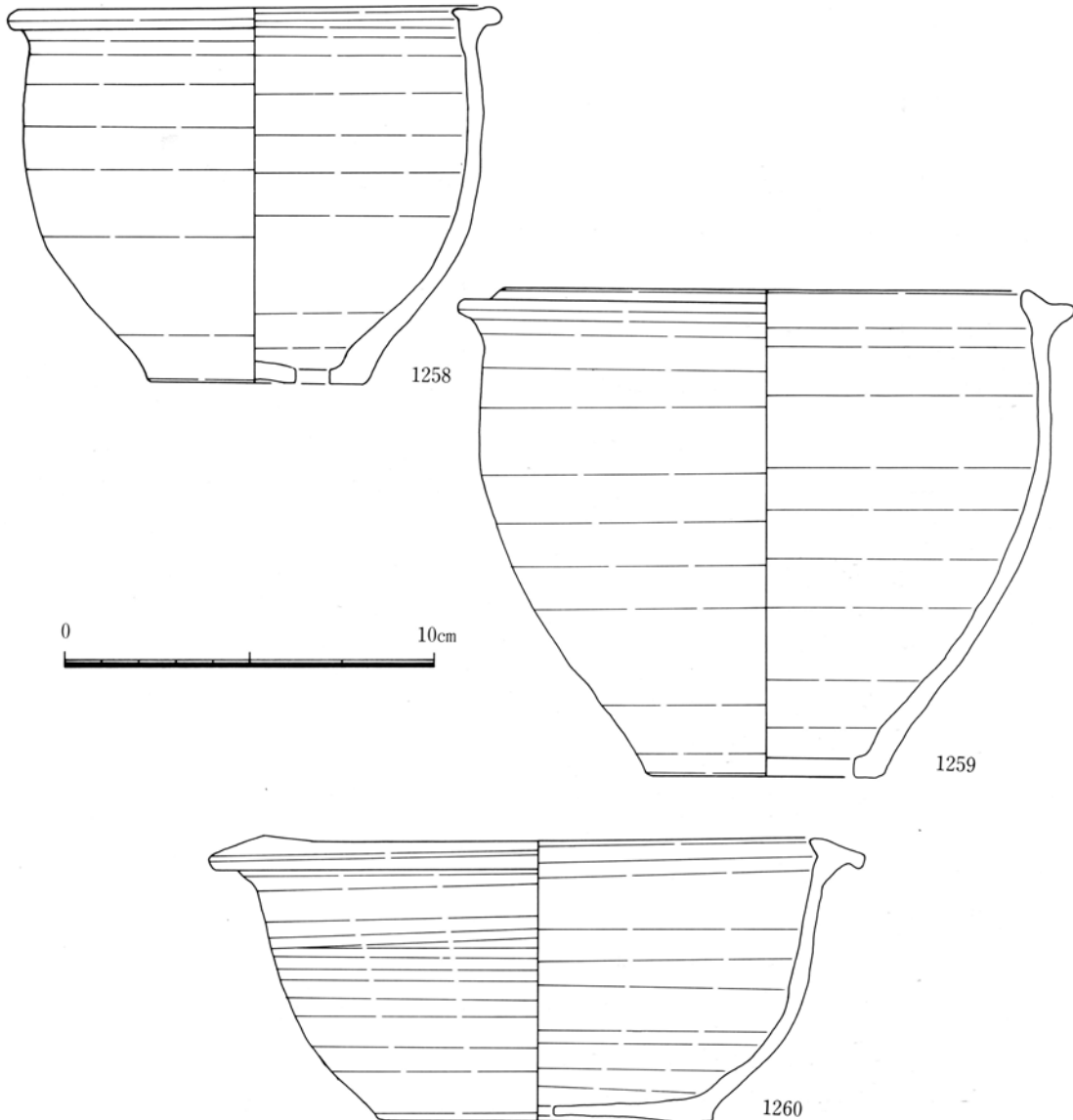
SX101 (21)

(2) 転置甕

S X 111 (第90図-1258) 常滑焼で赤褐色を呈し、底部より丸味を帯びて、やや内湾気味に開き、口縁部は中央部がややくぼんだ「T字」形となり、底部には焼成後の径3cmの穿孔があり。底部隅に寄って穿つ。18世紀前半の時期に比定される甕である。

S X 112 (第90図-1259) 常滑焼で赤褐色を呈し、底部より斜めに立ち上り、胴上半が最大幅となり、内湾気味に開き、口縁の内側端部が盛り上った「Y字」となり、底部は打ち欠かされている。18世紀後半の時期に比定される甕である。

S X 114 (第90図-1260) 常滑焼で暗赤褐色を呈し、底部より丸味を帯びて開き、口縁が折縁状に外反し、胴部が短く、底部に焼成後の2.5cm×3cmの穿孔がある。19世紀の新しい時期に比定される甕である。



第90図 II期の遺物(63)

SX111・112・114

(3) 京焼風陶器 (第92~95図・1261~1317・第91図)

今回の発掘調査により、京焼風陶器の碗、皿、鉢が出土したが、主な遺構の遺物を中心に述べる。

ここで述べる京焼風陶器とは

1. 草書体「清水」や「木下弥」「柴」「森」等の押捺された印が外底面にある。
2. 細線や太い線の濃淡により、楼閣山水文を描いている。
3. 胎土が非常に緻密で堅く、良く焼き締ったものとやや軟質のものがあり比較的薄い。
4. 卵黄色気味を呈した細い貫入の入る釉で、釉と素地の境に緋色がみられる。

等の特徴があげられるもので101点出土し、そのうち作図できるもの57点を図示した。

S K130からは35点出土している。(1265)は腰部からほぼ垂直に立ち上った筒形の碗、(1269)は底部片で高台は低く高台内中央に円圈を削り、円圈の横に草書体の「清水」の押印がみられる。(1273)も底部片で高台は低く、断面方形で鋭く削り出している。(1280)は断面方形の低い高台と腰部に稜がはいる碗の底部片である。(1284)は身の浅い皿の口縁片で内面には文様が描かれている。(1286)も身の浅い皿で内底面には文様が描かれている。(1287)は低い底部で丸味を持って立ち上った皿で、内面には濃い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線を用いた楼閣山水文が描かれ、高台内には草書体の「清水」の押印がみられる。(1290)は断面方形の高台で丸味を持って立ち上った皿で口縁部がやや内湾気味となっており、内面にはダミ的な筆づかいによる淡く太い線を用いたくずれた楼閣山水文が描かれ、高台内中央には0.8cm径の小円圈を削り、高台に接した位置に「木下弥」の押印がみられる。

S K189からは14点出土している。(1299)は腰部より丸味を持って開いた皿で、内面にはくずれた楼閣山水文がかすかに見られ、高台中央は器厚が薄くなり、印はない。(1300)も(1299)と同じ形の皿と思われる口縁片である。(1307)は高台の角が削られ丸味を帯びた底部片で、高台内には墨書があり、内底面にはうすくなった楼閣山水文が描かれている。(1310)はつまみの付く蓋で、上面には濃い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線による楼閣山水文が描かれており、つまみが欠損している。(1311)は高い脚部の高台が付いた鉢で、丸味を帯びた高台端部は、内側が隆帯となり、高台端部のみ素地である。脚部より丸味を帯び開き、やや盛り上った内底面には、淡い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線による楼閣山水文が描かれている。(1312)は腰部より丸味を帯びて立ち上り、口縁がやや外反する鉢で胴部には、5カ所に指押えによるくぼみがあり、盛り上った内底面にくずれた楼閣山水文が淡く描かれており、高台内には1.1cm径の円圈を削っている。

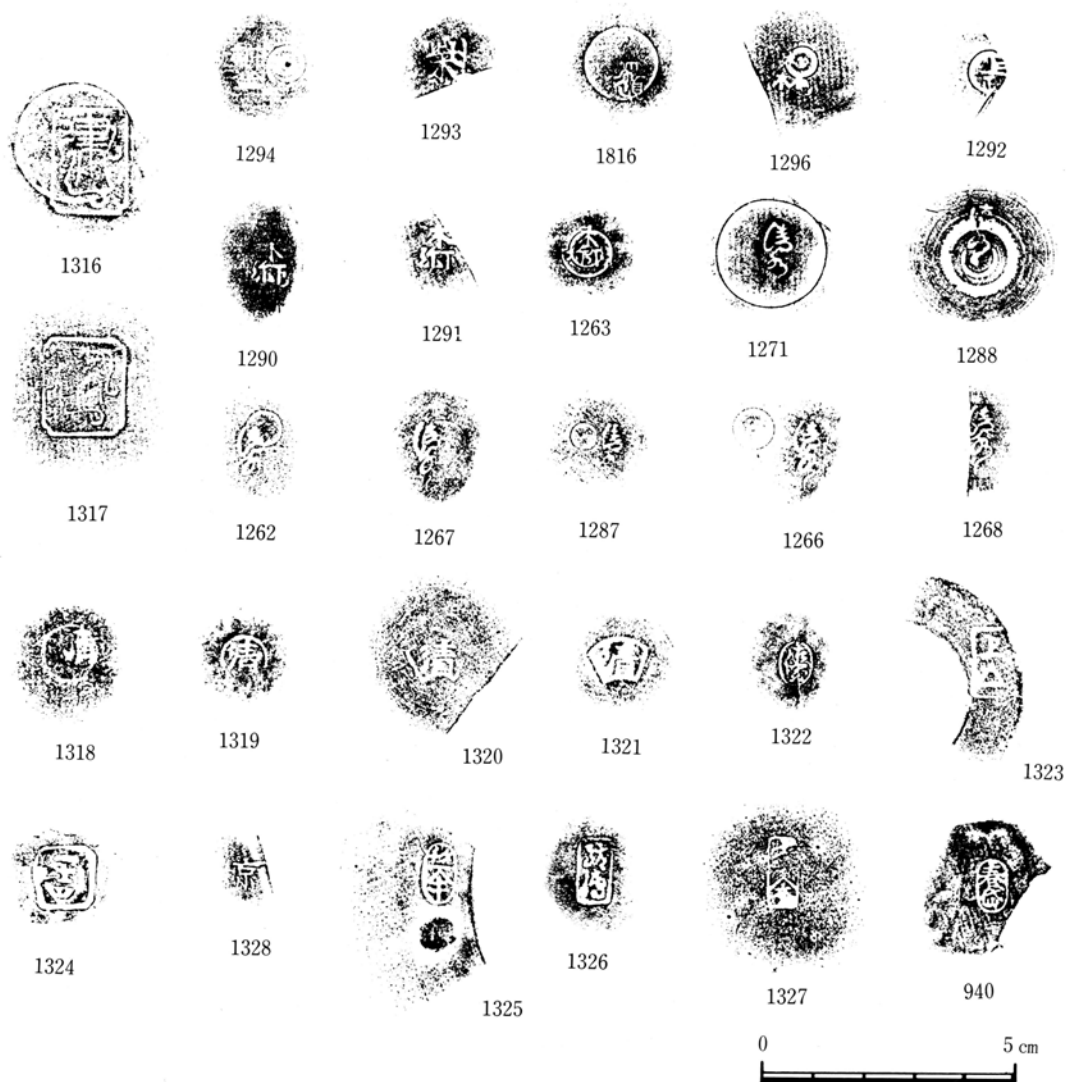
S X101からは19点出土している。(1261)は腰部よりほぼ垂直に立ち上った筒形の碗で、胴部に濃い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線を用いた楼閣山水文が描かれている。(1267)は腰部より丸味を帯びて開いた碗の高台片で、0.9cm径の円圈の上に草書体の「清水」の押印が見られる。(1270)は低い断面方形の高台片で円圈の横に草書体の「清水」の押印が見られる。(1271)は高台の器厚の厚い、丸味を帯びて開いた碗の高台片で、高台内には2.1cm径の円圈が削られ、その中に草書体の「清水」の押印が見られ高台内側の削りが浅いため、蛇の目高台風になっている。(1283)は蛇の目高台と腰部よりほぼ垂直に開いた碗の底部片である。(1291)は断面方形の高台で丸味を持って立ち上った皿で、内部底面に楼閣山水文が描かれ、高台内には「木下弥」の押印が見られる。(1292)は断面方形の細い高台を持った皿の底部片で、内部底面には文様が描かれており、0.8cm径の円圈内に押印が見られる。

(1296)は細い高台を持った皿の底部片で、内底面には濃い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線による楼閣山水文が描かれ、高台内には0.6cm径の円圈が削られ、その上に「森」の押印が見られる。

(1305)は皿の底部片で、内底面には濃い細線と、淡く太い線による楼閣山水文が描かれ、その上に上絵付を施しており、上絵付は二種類で一つは朱色でもう一つは上絵付痕があるのみで色は不明である。(1306)は皿の高台片で内には楼閣山水文が描かれている。

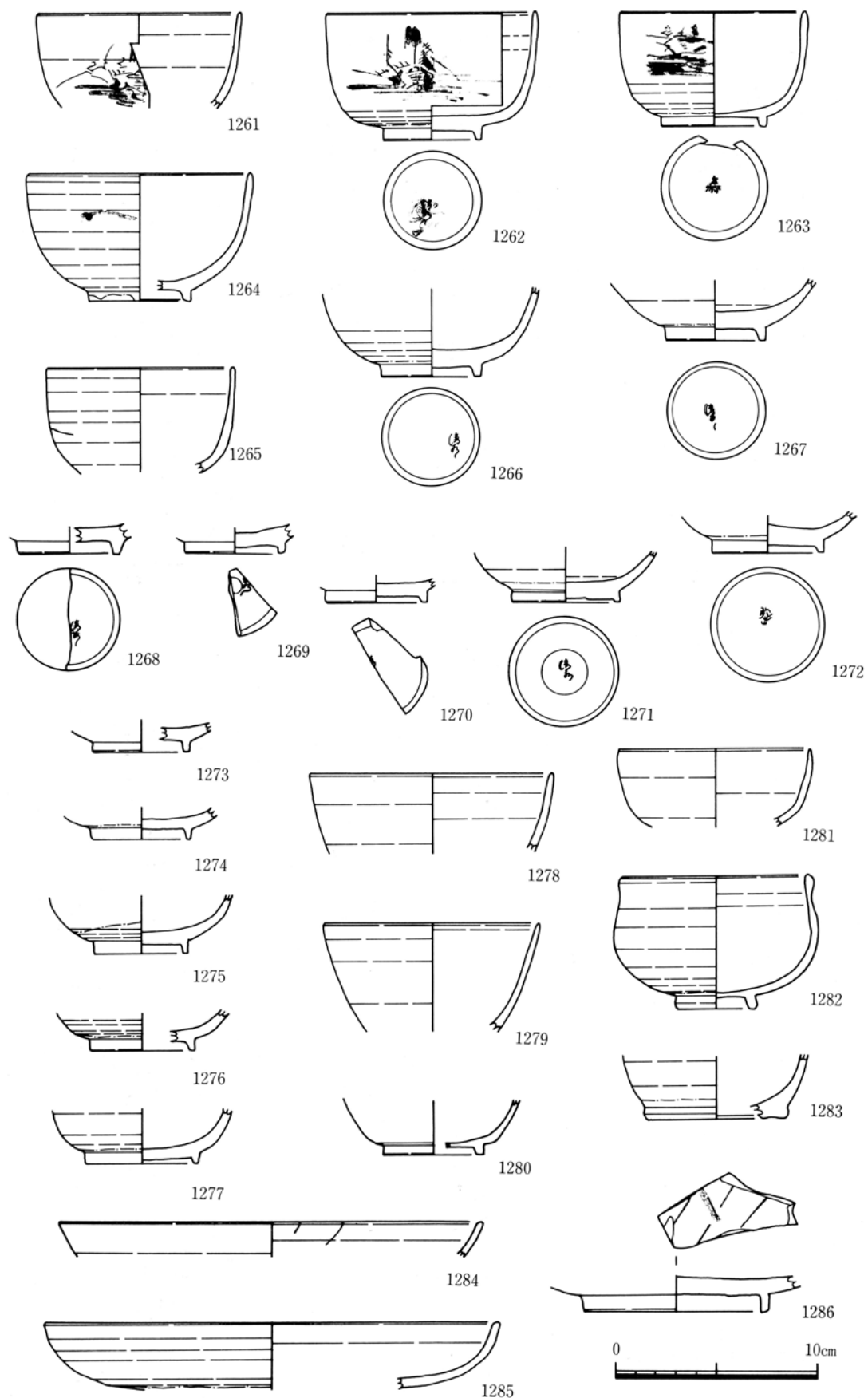
S K07から(1315)の腰部が丸く胴上半部が折り縁状になって開いた大鉢が出土しており、内底面には濃い細線とダミ的な筆づかいによる淡く太い線を用いた楼閣山水文が描かれ、高台内には3cm径の円圈が削られ、底部がうすくなっている。

その他には、(1316)は大鉢の底部片で、内底面には淡い細線と太い線を用いた楼閣山水文が描かれ、高台内の2.9cm径の円圈の上に1.5cm×2.1cmの長方形で囲んだ「建」の押印が見られる。(1317)は、腰部より丸味を帯びて立ち上り、口縁が折り縁となった大鉢で、盛り上った内底面には濃い細線とダミ



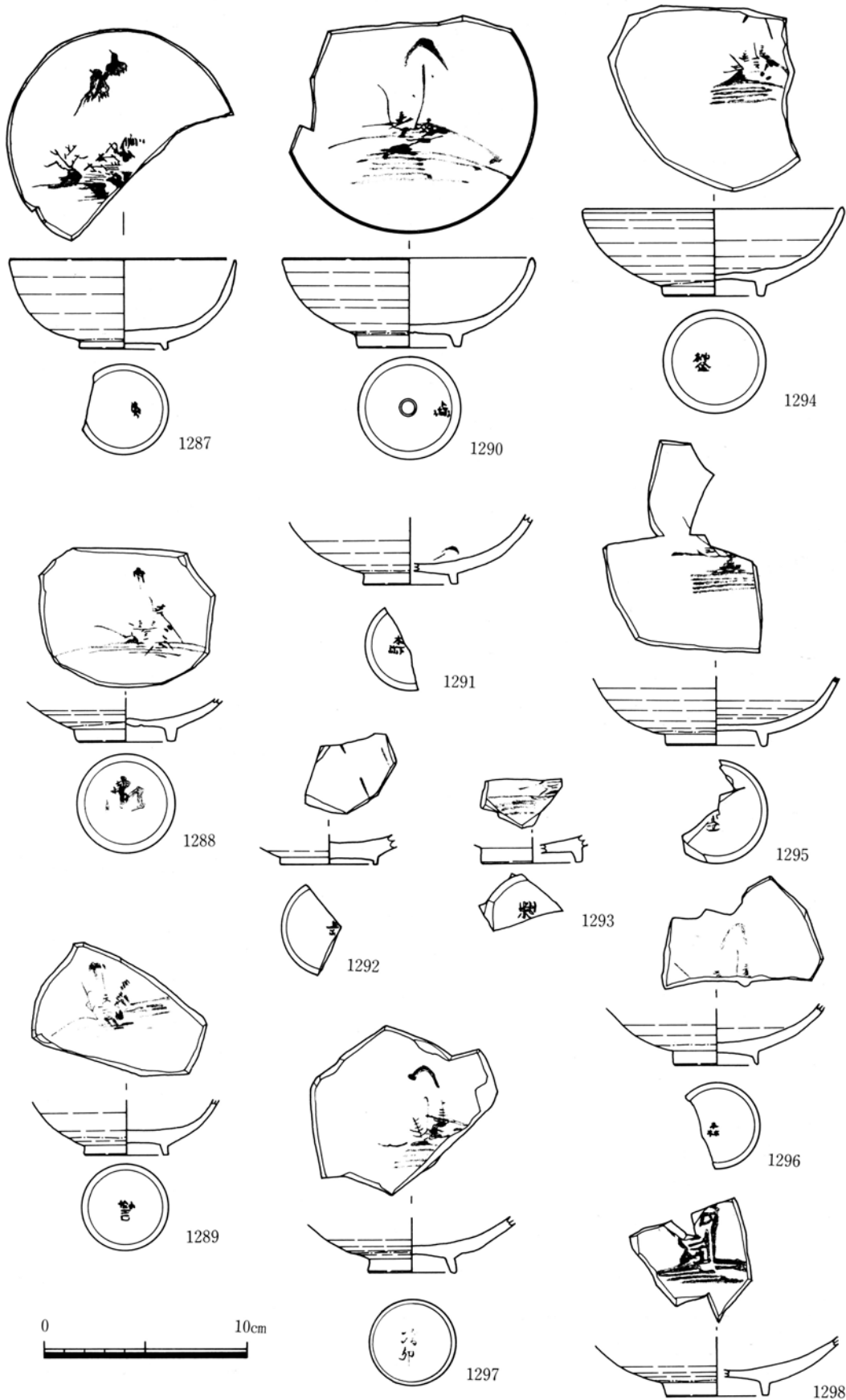
第91図 II期の遺物 (64)

刻印集成



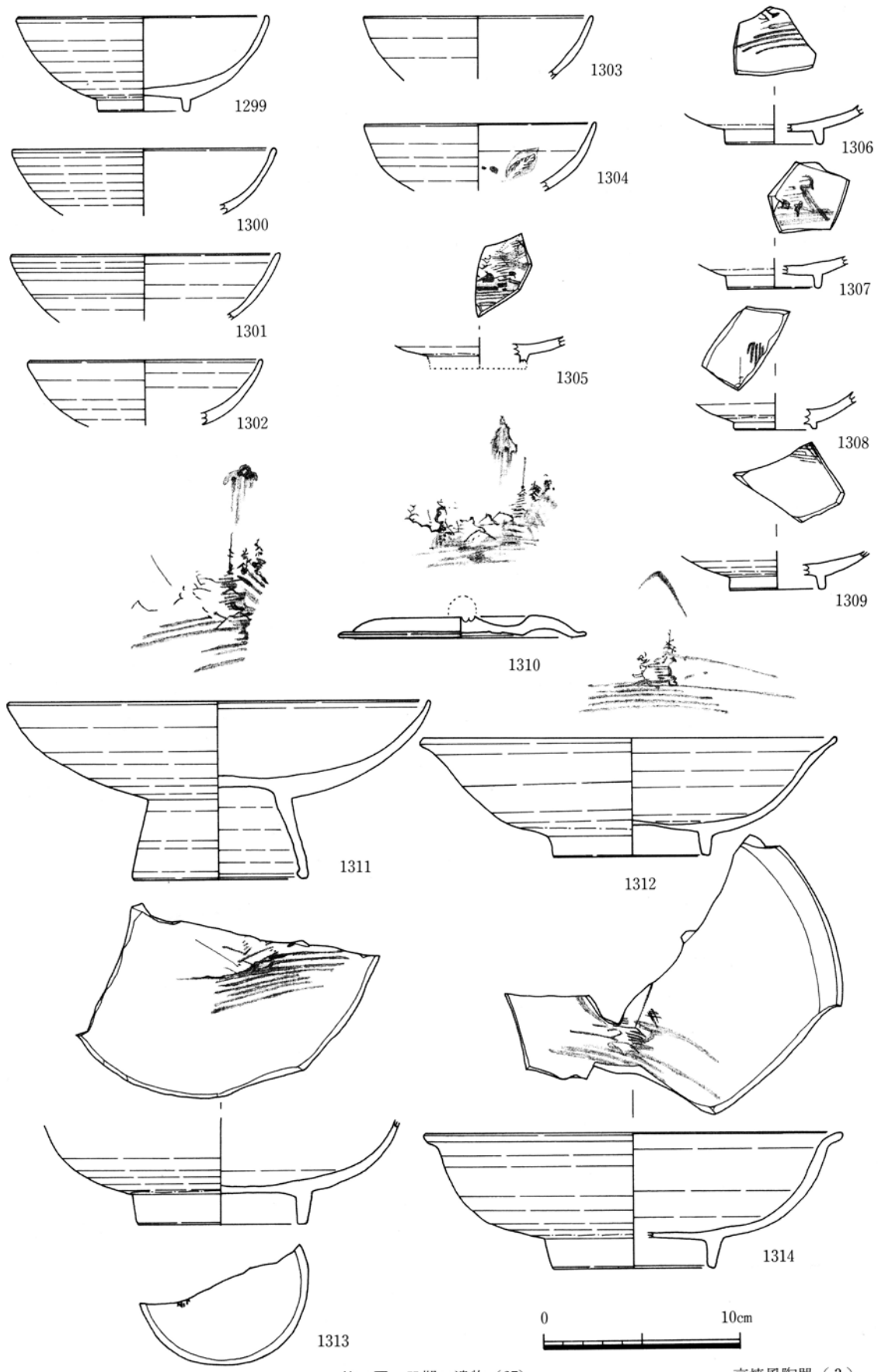
第92図 II期の遺物 (65)

京焼風陶器 (1)



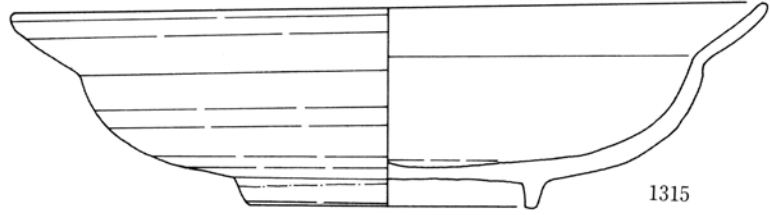
第93図 II期の遺物(66)

京焼風陶器(2)

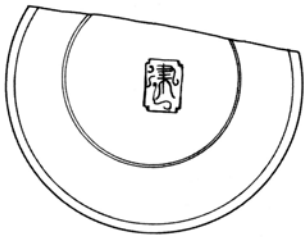


第94図 II期の遺物 (67)

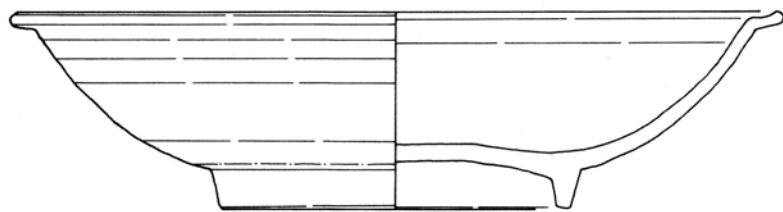
京焼風陶器 (3)



1315



1316



1317

第95図 II期の遺物(68)

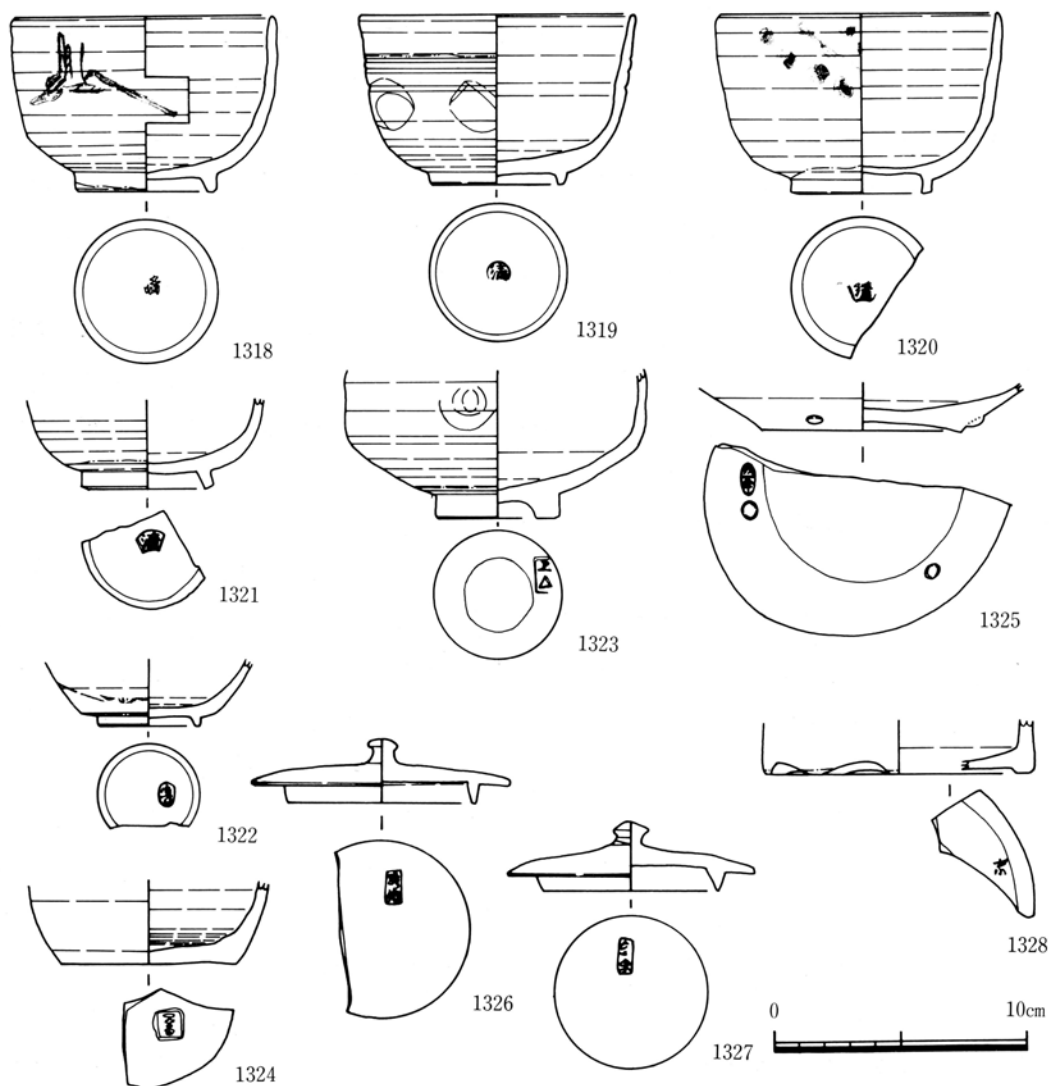
京焼風陶器(4)

的な筆づかいによる淡く太い線を用いて丁寧に楼閣山水文が描かれており、高台内には5.2cm径の円圏が削られ、円圏の中に1.6cm×2cmの長方形で囲んだ「建」の押印が見られる。

(4) 押捺印のある陶器 (第96図-1318~1328・第91図)

京焼風陶器以外の押捺印のある製品をまとめたものである。

(1318)は碗Eの御室茶碗で、呉須による楼閣山水文が崩れ、描線が太く、裏文様は三本の線描で、高台内に「清」の押印がみられる。(1319)は碗C-1の筒形碗で、いわゆる腰錆碗で、腰部の張りが強く口縁上端がやや開き気味に立ち上り、胴部に沈線が三条巡り、その下方には、隣りあわせに2カ所の指押えによるくぼみが認められ、口縁部外面上部及び内面全体に灰釉、その他は全面に鉄釉が施され高台端部は拭きとっており、胎土が非常に緻密で焼き締っており、京焼の可能性はある。高台内には0.9cm径の丸印の中に「清」の押印がみられる。(1320)は碗B-4の灰釉丸碗で胴部には呉須による文様が描かれ、高台内には扇印の中に「清」の押印がみられる。(1321)は碗Eで、断面が長形状を呈



第96図 II期の遺物 (69)

刻印のある製品

した高台内には扇印の中に「清」の押印がみられ、釉の境に褐色の緋色が見られ京焼風陶器の可能性がある。(1322)は腰部に稜のある灰釉の椀で高台内には楕円形印の中に「御室」の押印がみられる。(1323)は筒型を呈した鉄釉の椀で、長石釉が流れた拳骨茶椀で幅広い高台部に押印が見られる。(1324)は褐色を呈した備前風の小壺で、串彫りによる印風の文字がみられる。(1325)は土瓶の底部に1.2cm×0.7cmの楕円形印の中に「チタ 傘」の文字がある。(1326)は蓋Cの上面に沈線が巡った、いわゆる松皮土瓶の蓋で1.4cm×0.6cmの長方形印の中に「防像」の文字がある。(1327)も蓋Cの松川土瓶の蓋で1.3cm×0.6cmの長方形印の中に押印がみられる。

(5) 上絵付製品

上絵付が施された磁器製品 (第97図-1329~1338)

輸入磁器を含み10点出土しており、そのうち(1331~1333・1336・1338)が遺構内出土である。(1329)は中国産の明末~清初の折縁状の大鉢で、内面に上絵付が施されているが、ほとんど色が落ちて黒色と緑色が少し残っている。(1330)は波状口縁の鉢で、内面に赤色、金色、緑色、灰色で呉須以外の部分を充填しており、外面には呉須絵が施されており焼き継ぎがある。(1331)はS K120出土の肥前産椀で内面に赤色、緑色、青色、黄色の上絵付が残っている。(1332)はS K07出土の肥前産椀で花が描かれ、赤色、黄色の上絵付が残っている。(1333)はS E122出土の肥前産の筒形椀で、内面は呉須で文様が描かれ、内底面には手描き五弁花文があり、胴部外面に牡丹の花と飛びかう蝙蝠が上絵付され、赤色、黄色、黒色が残っている。(1334)は産地不明の小椀で口唇部と内底面には赤色が胴部外面には赤色、黄色、青色の上絵付による花文様が描かれている。(1335)は肥前産の小椀で胴部外面に、赤色、黄色の上絵付が施されている。(1336)はS E122出土の肥前産の小椀で、胴部外面に、赤色、黄色の上絵付花文様が描かれている。(1337)は産地不明の水差しで、白化粧の上に赤色、黄色、緑色によって花柄を描き、上絵付部分の盛り上っている。(1338)はS K130出土の肥前産人形の着物の裾部分で外面に赤色、緑色、青色からなる文様を上絵付している。

上絵付が施された陶器製品 (第98図-1339~1362)

椀、皿、蓋等に施され、24点の他に前述した(1236・1248・1249・1305)にも上絵付が施されている。S K189より(1348)の筒型椀が出土しており、胴部外面に黄色、緑色の上絵付が残り、手描きによる印状の文字が書かれている。S K130からは3点出土しており、(1342)はやや内湾気味の小椀で、胴部外面に赤色、青色の上絵付が残っている。(1351)は腰部から斜めに開いた椀で、赤色、緑色の上絵付が残っている。(1354)は杓立てで、底部より内斜気味に立ち上った筒形を呈し、胴部上半に青色と緑色で笹文を描いている。S X101の出土の(1356)は型打鉢で、内底面を中心に花文様が隆起し、赤色、黄色、緑色の上絵付が施されている。(1360)は信楽産の皿で青色、緑色の上絵付が残っている。その他では、(1346)の丸椀は鉄絵の小杉文の描かれた上に青色、緑色の笹文の上絵付が施されている。(1347)の丸椀は鉄摺絵の梅文が描かれ、その上に青色、緑色の笹文の上絵付が施されている。(1349)は胴部外面に、黄色、緑色の上絵付が施され、手描きによる印状の文字が書かれている。(1350)は鉄絵の小杉文が胴部に描かれ、胴上半に青色と緑色の上絵付が施されている。(1352)は軟質の楽系の椀である。(1353)は灰釉小椀で、赤色の上絵付が高台より胴部外面と口縁部内面および内底面に施されている。(1358・1359)の高台には墨書があり、(1358)は「栄」と書かれている。

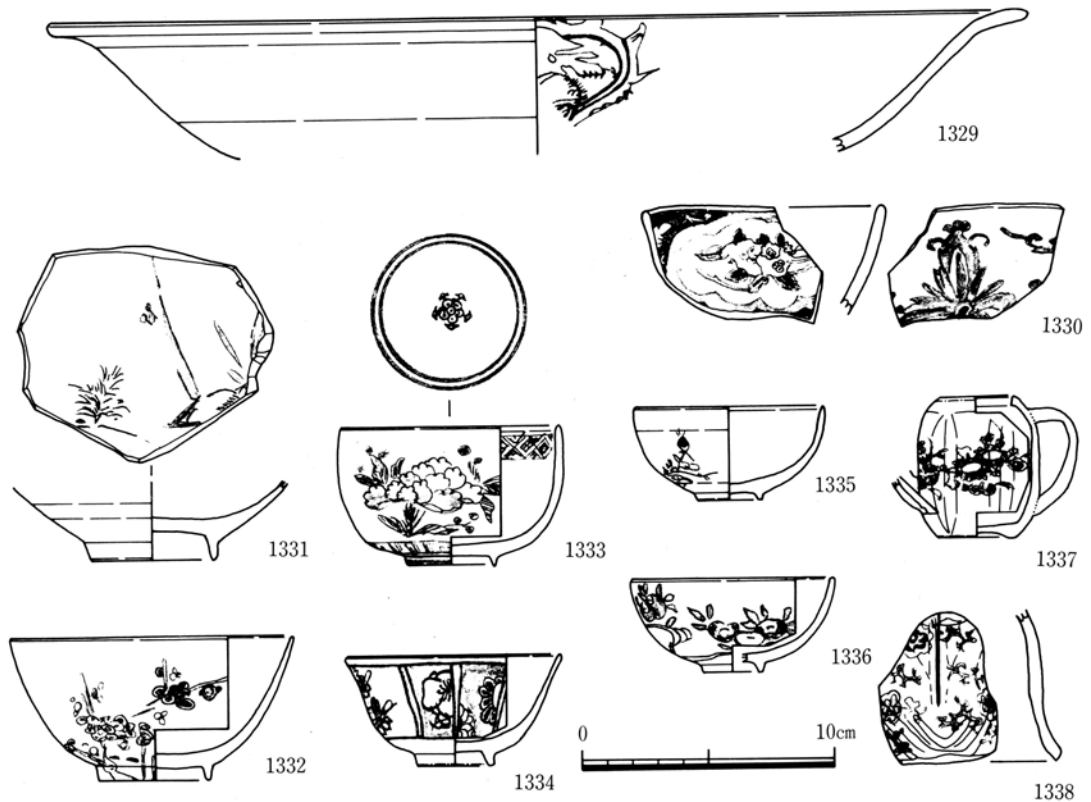
(6) 墨書のある製品 (第99・100図・1363~1393)

墨書のあるもの⁽⁶⁾をまとめたもので、41点出土している。

墨書をその積文から見てみると、紀年銘のあるものと、符号あるいは場所等をあらわす文字の二種類あり、器種は碗、皿、鉢、鉢、餌入れ、香炉、火鉢、甕のいずれも高台内に書かれているが、風炉では内底面にある。41点の墨書のうち10点はすでに提示しており、ここでは残りの31点を図示した。

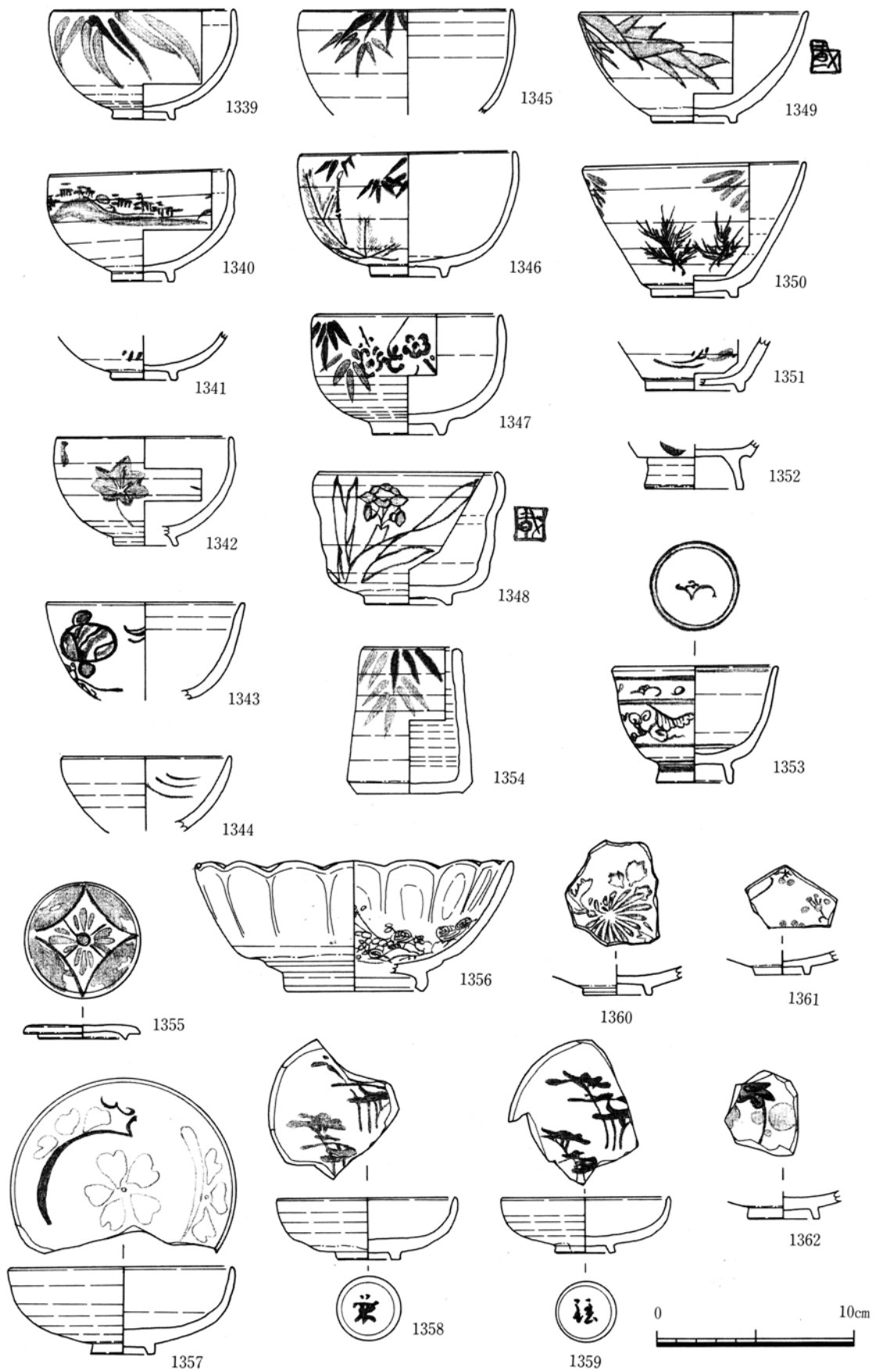
紀年銘のあるものとして、(1363・1373・1376・1383・1386)があり、(1363)は碗Eの御室茶碗で「正徳六(1716)年丙申四月廿日」、(1373)は筒型の小杯で「己亥三月三日□□□三ッカ□□□□□□」で己亥の年は安永8年(1779)と考えられる。SK189よりの出土である。(1376)は皿で「□保五□い所三月」で享保五年(1720)か天保五年(1834)か、(1383)は鉢Gの片口付の鉢で「文久三年(1863)六月吉日太田氏」でSX101よりの出土である。(1386)は甕で胴部に灰釉の流し掛けが施され、「天保二(1831)三州作」と書かれている。

場所をあらわすものとして(1389)の灰釉の大形蓋物の身があり、「台所」とある。その他のものは、(1364)の碗の「彼」、(1368)の碗「御用」、(1369)の碗「表」、(1370)の碗「久」、(1382)の甕の「や」、(1388)の油差しの「い」といった符合的要素の多い文字が書かれている。(1391~1393)は土師質の皿で、(1393)は内外両面に書かれている。(小澤一弘)



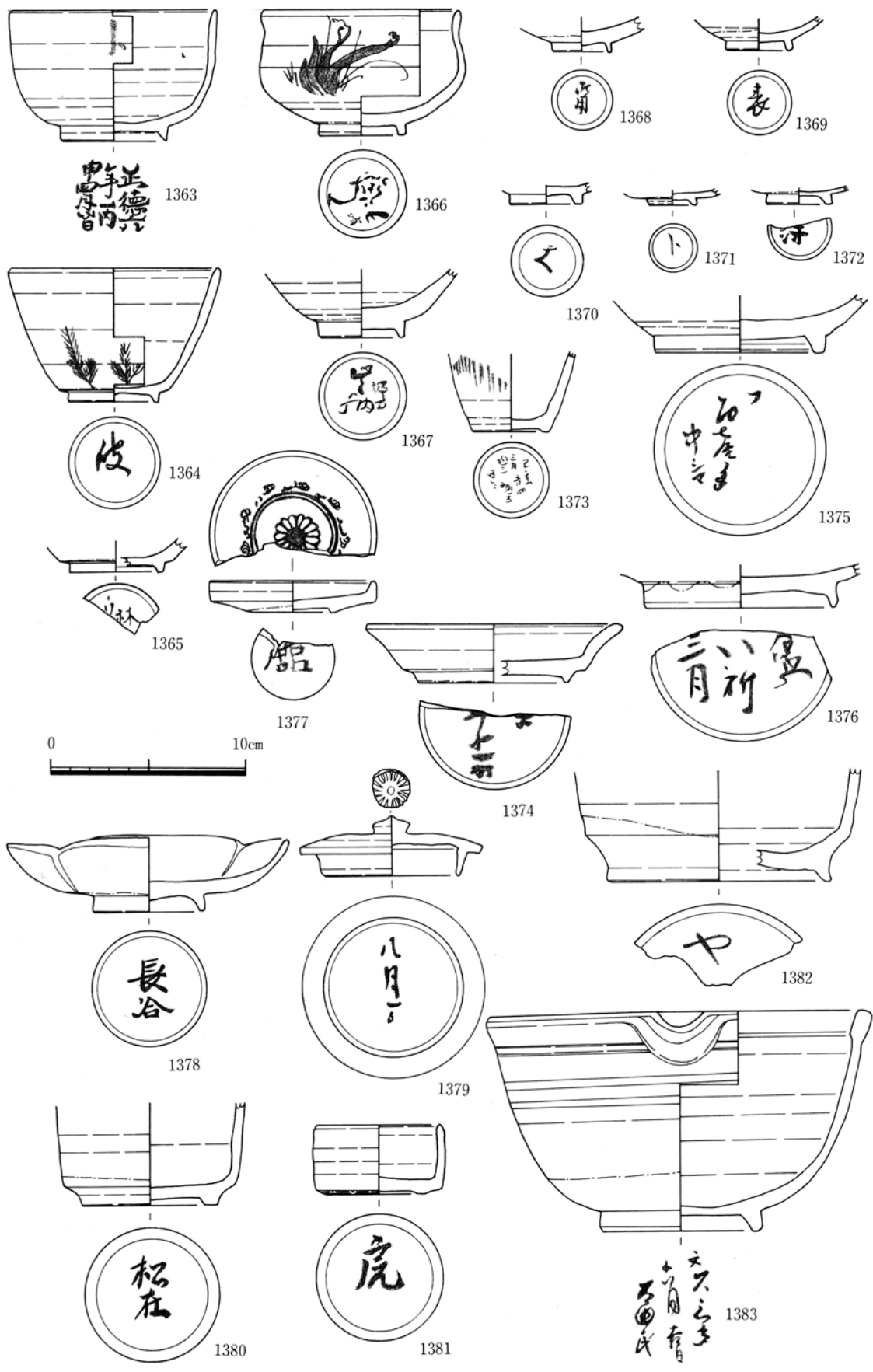
第97図 II期の遺物(70)

上絵付製品(1)



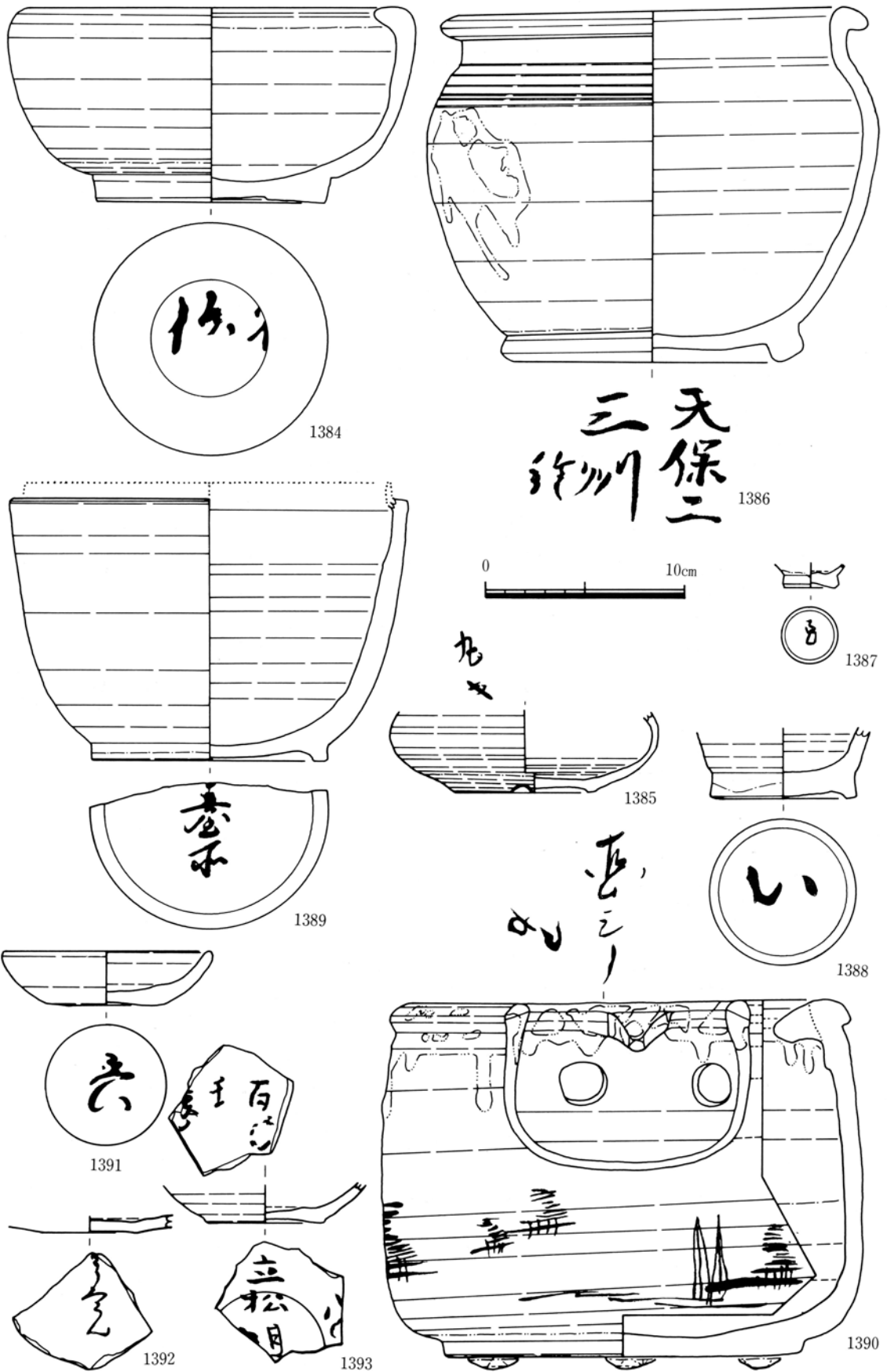
第98図 II期の遺物(71)

上絵付製品(2)



第99図 II期の遺物 (72)

墨書のある製品 (1)



第100図 II期の遺物 (73)

墨書のある製品 (2)

2. 焼塩壺

今回の調査で出土した焼塩壺は、総個体数身72点、蓋59点である。身、蓋の分類については、渡辺誠氏により詳細に行われているもの⁽⁶⁾に依拠し、これにしたがうこととする。

(1) 身(第102・103図-1394~1443)

身は成形技法により3種に大別することができる。粘土紐を積み上げて成形してあるもの(輪積み成形)を身A類、棒状の芯を布で履い、この型に板状粘土を巻いてから底部に粘土塊を充填してあるもの(板づくり成形)を身B・C類、型に粘土塊をつめ込んだと思われるもの(型づくり成形)は渡辺分類未出であるため、仮に身X類とする。

身A類は62点出土していて、このタイプが最も多い。(1394~1437)がこれに当たる。成形時の影響によるものか、ほとんどのものが胴部は六角柱形を呈しており、内、外面ともにわずかに稜線が認められる。口縁部は内、外両面に成形時の指頭圧痕が認められる。外側底部から胴部にかけては、最終調整としていねいな横ナデを施してあり、口縁部内側から外側にかけてはこれが特に顕著である。胴部内側には粘土紐による継目の痕跡が認められる。また指頭圧により口縁部を成形した後、さらに内側に粘土紐を带状に薄く足しているものも認められる。尚、接合痕は内傾である。色調は淡茶褐色及び淡赤褐色であり、胎土は密で直径1~3mmの粗粒砂及び極粗粒砂を含む。半数以上のものに塩焼きによる二次焼成痕が認められる。(1394~1399)は器壁が全体的に厚手で、外観に比して容量は少ない。この器形のものに限って、胎土に雲母を多く含むのが特徴的である。この輪積み成形のタイプには、時期及び生産地を決定する上で重要な判断材料となる刻印が押されているものが多い。しかしこの身A類の中で刻印が認められるのは2個体のみである。(1415・1435)ともに一重枠の中に「天下一堺ミなど 藤左衛門」と2行に分けて書かれたものである。この刻印は17C中頃から後半に使用されたものである。その他の無印タイプのもは有印のものに先行するものと考えられるが、各遺構内出土のものを共伴遺物と比較してみると、併行してつくられていたのではないかと思われるものも存在するため、併存の可能性も否定しきれない。ここでは壺A類の時期について、刻印で推察できるものを除いては、16C末から17C代のものとしておく。

身B類は2点出土している。(1441・1442)がこれに当たる。所謂「印籠型」と呼ばれるもので、胴部内側には、縦に板状粘土の継目の痕跡が残り、芯を履った粗い平織りの布目痕が認められる。口縁部の外側はへらで段状に削り出された後、ていねいなナデ調整を行い蓋受け部をつくっている。2点とも有印で、(1441)は「難波浄因」(1442)は「御壺塩師 堺湊伊織」の刻印が押されている。その刻印から(1441)は18C中項、(1442)は17C後半から18C前半のものと思われる。

身C類は9点出土している。(1439・1440)がこれに当たる。成形技法は身B類と同じであるが、口縁部はB類のようにはっきり削り出しておらず、痕跡的な程度蓋受け部を残すものである。2点とも無印であるが、蓋受け部の退化した形態であることから18C後半以降のものと思われる。

身X類は1点出土している。(1443)がこれに当たる。表面は剥落しているが、型づくりであろう。底部は削り高台状に成形されている。

(2) 蓋 (第103図・1444~1484)

蓋は形態上4種に大別することができる。上面がやや曲面的で側面がゆるやかに外側へ開くものを蓋A類、上面が平坦で側面への変換点をはっきりして、垂下か、やや内側に向くものを蓋B類、円盤型に近く内側断面が平坦もしくはわずかに窪むものを蓋C類、断面が逆凸字形を呈するものを蓋D類とする。

蓋A類は35点出土している。(1447~1469)がこれに当たる。内、外面ともにていねいにナデ調整されているものも多い。側面が特に顕著であるのは、整形に伴うものかと思われる。内側には、わずかに布目痕が残っているものも稀に見られる。上面とその裏側が完全な平面を呈するものは稀で、指頭圧等により凸凹な面になっている。この蓋A類は身A類と対応するものである。

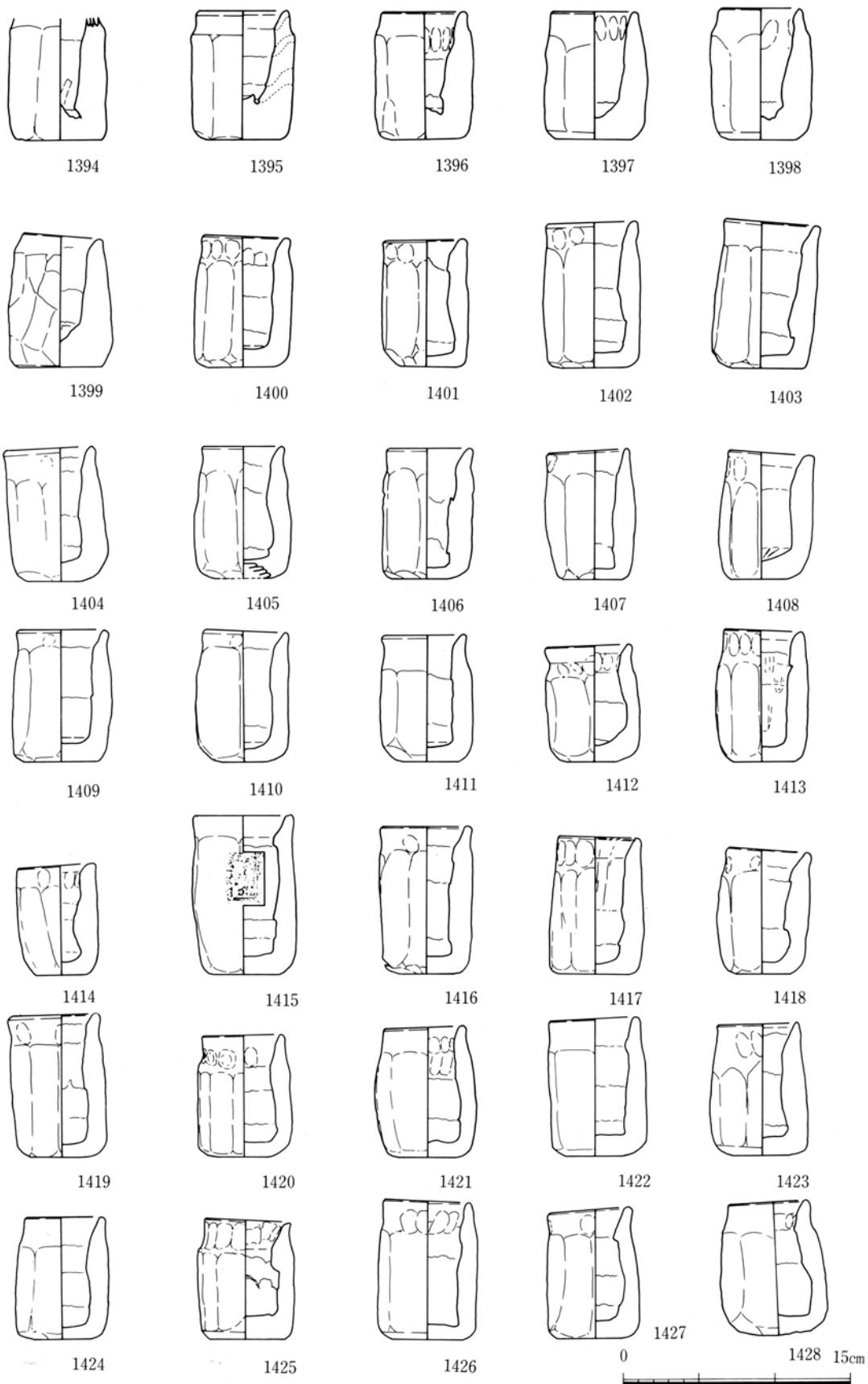
蓋B類は17点出土している。(1470~1480)がこれに当たる。内側には型づくりを示す布目痕が認められる。内側端部から外側全体にはこの布目痕は認められず、ていねいなナデ調整が施されているものが多いが、整形に伴うものかと思われる。内、外面とも平坦な仕上がりである。この蓋B類は身B類と対応するものである。

蓋C類は3点出土している。(1481~1483)がこれに当たる。成形技法の上では蓋B類と共通するが、断面の逆凹字形が退化し円盤状になったものである。(1444)は形態的には本類に属するものであるが、大径であること、裏面に痕跡的ではあるが身の内径に対応する浮線がまわることなどから、本類とは区別したい。尚、この(1444)には「花焼塩 イツミ ッタ」の刻印が押されている。裏面の浮線円の径が身X類の内径と合致するため、対応する可能性が強い。『丁珍法師日記』慶安元年(1648)九月二



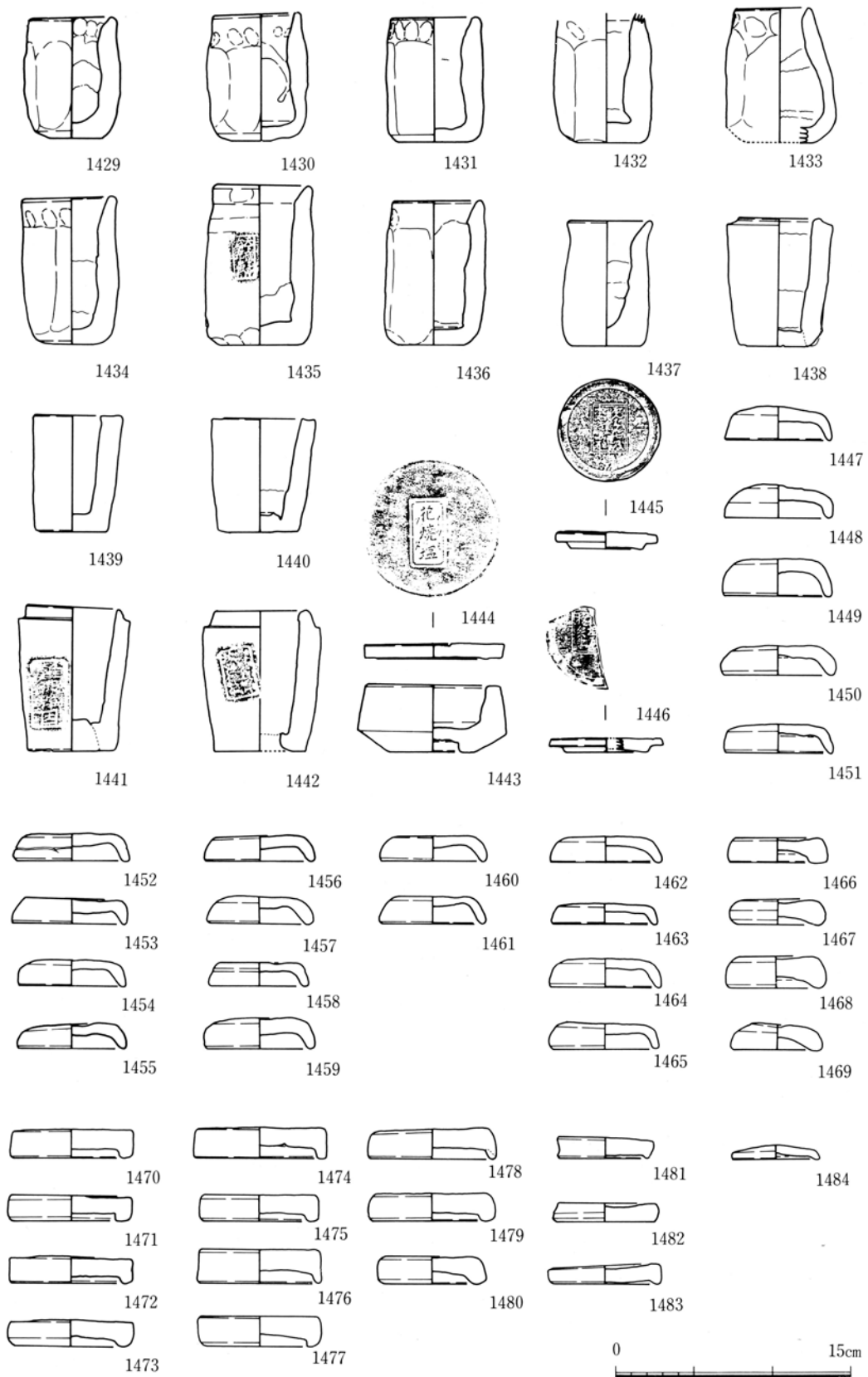
第101図 II期の遺物 (74)

焼塩壺刻印 (原寸)



第102図 II期の遺物 (75)

焼塩壺 (1)



第103図 II期の遺物 (77)

焼塩壺 (2)

三日の条にある、「津田 花焼塩五ッ入壱折」がこのセットに当たるのかもしれない。

蓋D類は2点出土している。(1445・1446)がこれに当たる。A・B類とは異なり、落とし蓋で、胎土は他の蓋、身とは全く異なり、灰白色で堅緻である。2点とも有印で、(1445)は方重に「奈んぼん七度 本やき志本」、(1446)は方重に「□□□□花塩屋 権兵衛」の刻印が押されている。(1446)の刻印は、正位置(中央)に押されたものと仮定すれば、全体の割り付けから考えて3～4行の印であったと思われる。

器形はさらに細分化できる可能性を有しているが、時期決定の有効資料が少なく、現資料において時期差につながる程の器形間の差異を追うことはできず、今後の課題としたい。(松田訓)

3 土 製 品

(1) 人形(第104～106図-1485～1526)

人、動物、魚の姿を模し、玩具、縁起物、土産品、年中行事関連の品等素焼き、あるいはそれに近い焼きの土製人形を人形とした。成形は型起しと手捏ねの二種類あり、型起しは一般的な方法で、前後の二つの型を張り合わせ内部が中空となっている。胎土は赤褐色のものと白色で緻密なものがあり、共に土師質である。土師質が中心であるが陶製、磁製もある。

人物(1485～1504) (1485～1487)は天神像、(1488)は大黒天像、(1489)は恵比須像、(1490)は陶製で長石釉が施された布袋像で香合の蓋の可能性もある。(1491)も陶製の布袋像である。(1492・1493)は頭布をかぶった男子坐像、(1494)は肩に燈籠をかついだ男子立像である。(1495)は人物坐像、(1496)は振袖女子坐像、(1497)は人物坐像、(1498・1499)は笠をかぶった男子像、(1500)は組み相撲像、(1501)は童子坐像で頭部、腕部、胴部はそれぞれ別個に作られ組み合わせとなっている。(1502)は婦人立像、(1503)は子抱き婦人立像、(1504)は親子立像である。

動物(1505～1513・1517～1519) (1505)は灰釉を施す陶製の猿で背中には穴がある。(1506)は猿の坐像、(1507)は犬で耳と耳の間に黒色の線がはいる。(1508)も犬である。(1509～1511)は狛犬か。(1512)は台座のある狐。(1513)は磁器製の狛犬か。(1517)は飾り馬、(1518・1519)も中空の馬である。

魚(1514～1516) (1514～1516)は型起しの板状を呈した魚で、(1514・1515)の裏側には穴がある。図示できなかったが、中空の魚の破片も出土している。

鳥(1520～1526) (1520・1521)は鶏で(1521)の胴部下には穴がある。(1522)は鳩、(1523)は鷹、(1524)は水鳥か、(1525)は鳥の胴部、(1526)は鳥の足と台座で足の部分には穴がある。

(2) ミニチュア(第106～109図-1527～1604)

忠実に実物を写した小型の建造物と道具類で、道具類は土師質製、陶器製、磁器製に分類できる。

建造物(1527～1539) (1527)は太鼓橋、(1528・1529)は舟、(1530～1532)は屋根で(1530・1531)は庇がついている。(1533)は祠で屋根と張り合わせて作られている。(1534)は塔で屋根とその上階を積上げていく。(1535～1537)は燈籠で型起しで笠と燈明部を作り張り合わせていく。(1538・1539)は燈籠の台部分でくぼんだ裏側には墨書がある。

道具類(1540～1604) (1540～1554)は各種の蓋で、(1543・1550)が土師質製で轆轤引き、(1551)が磁器製で轆轤引き、(1552・1553)は陶器製で、(1552)は赤色の上絵付が施された轆轤引きの京焼と思われる蓋である。その他は土製で型造りの技法による蓋である。(1555)は羽釜、(1556・1557)は籠、(1558)は陶器



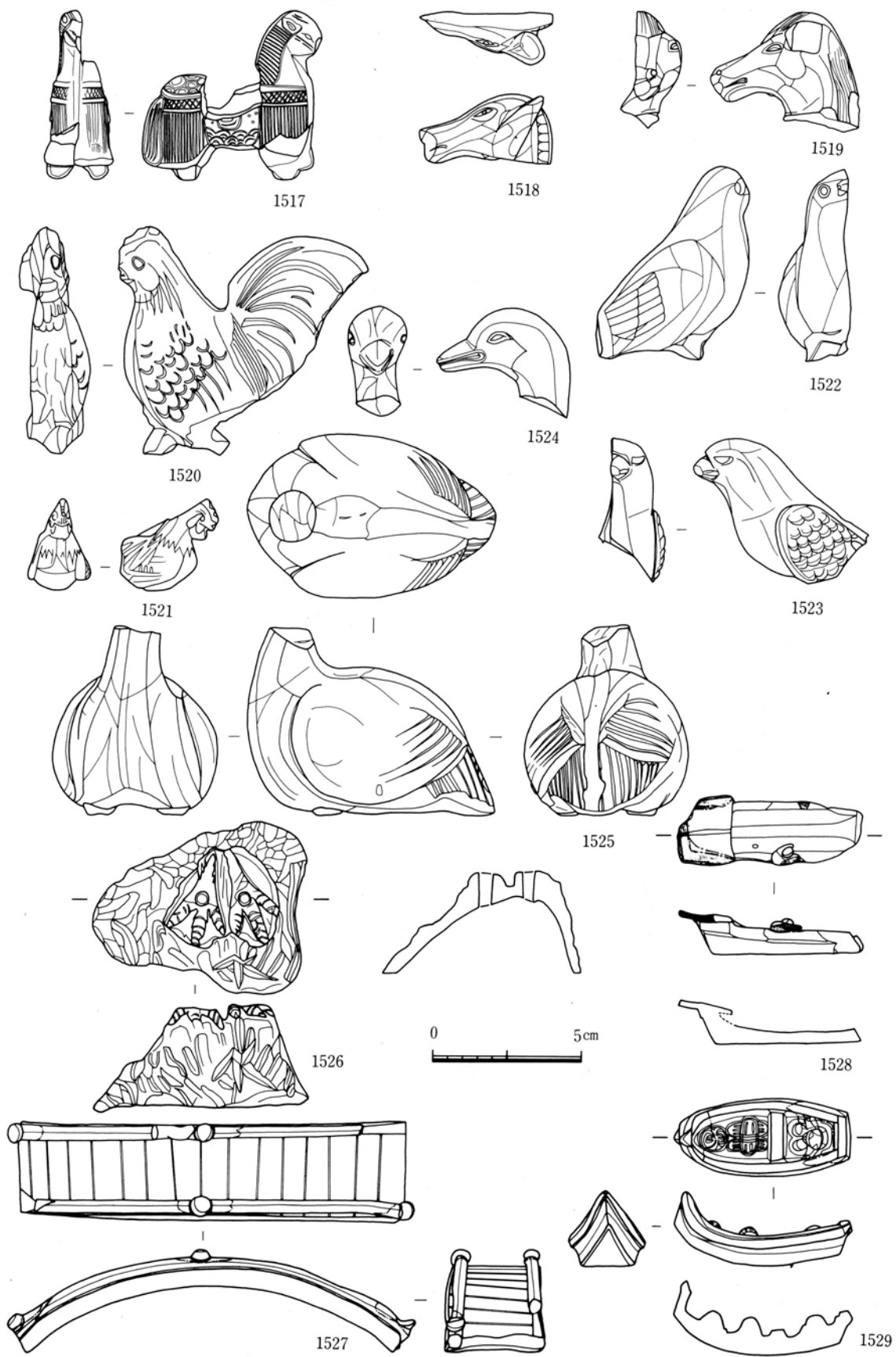
第104図 II期の遺物 (77)

土製品 (1)



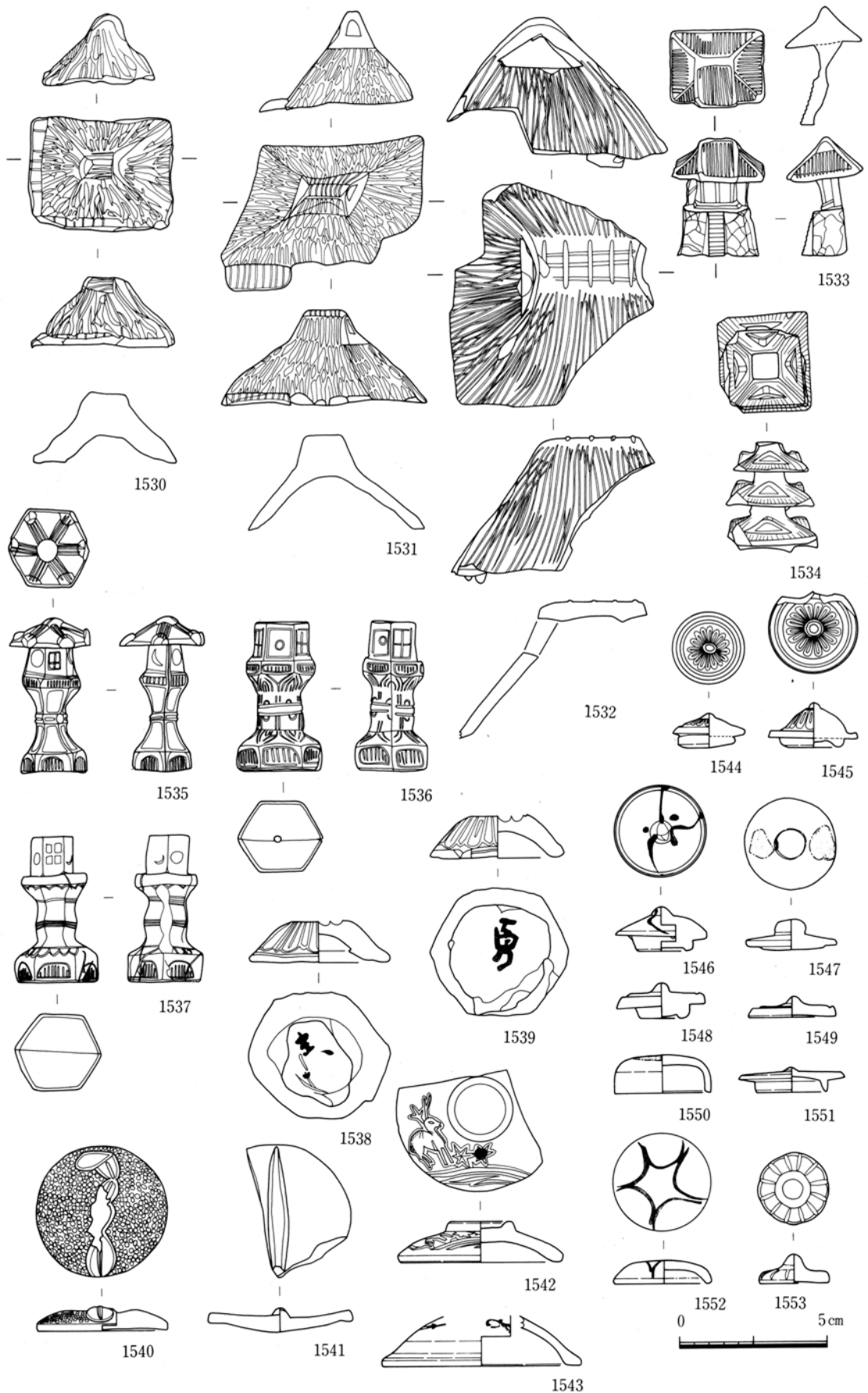
第105図 II期の遺物 (78)

土製品 (2)



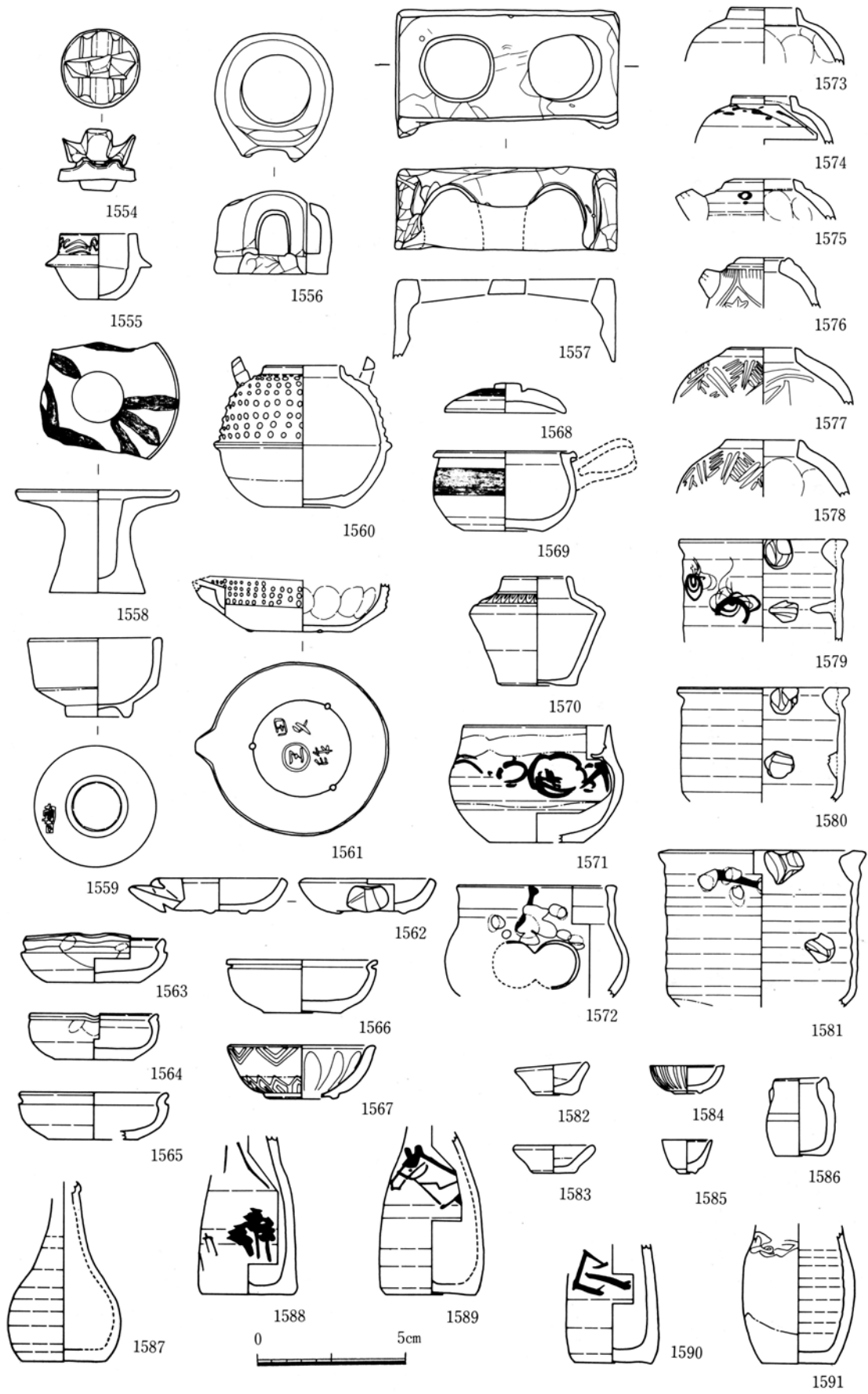
第106図 II期の遺物 (79)

土製品 (3)



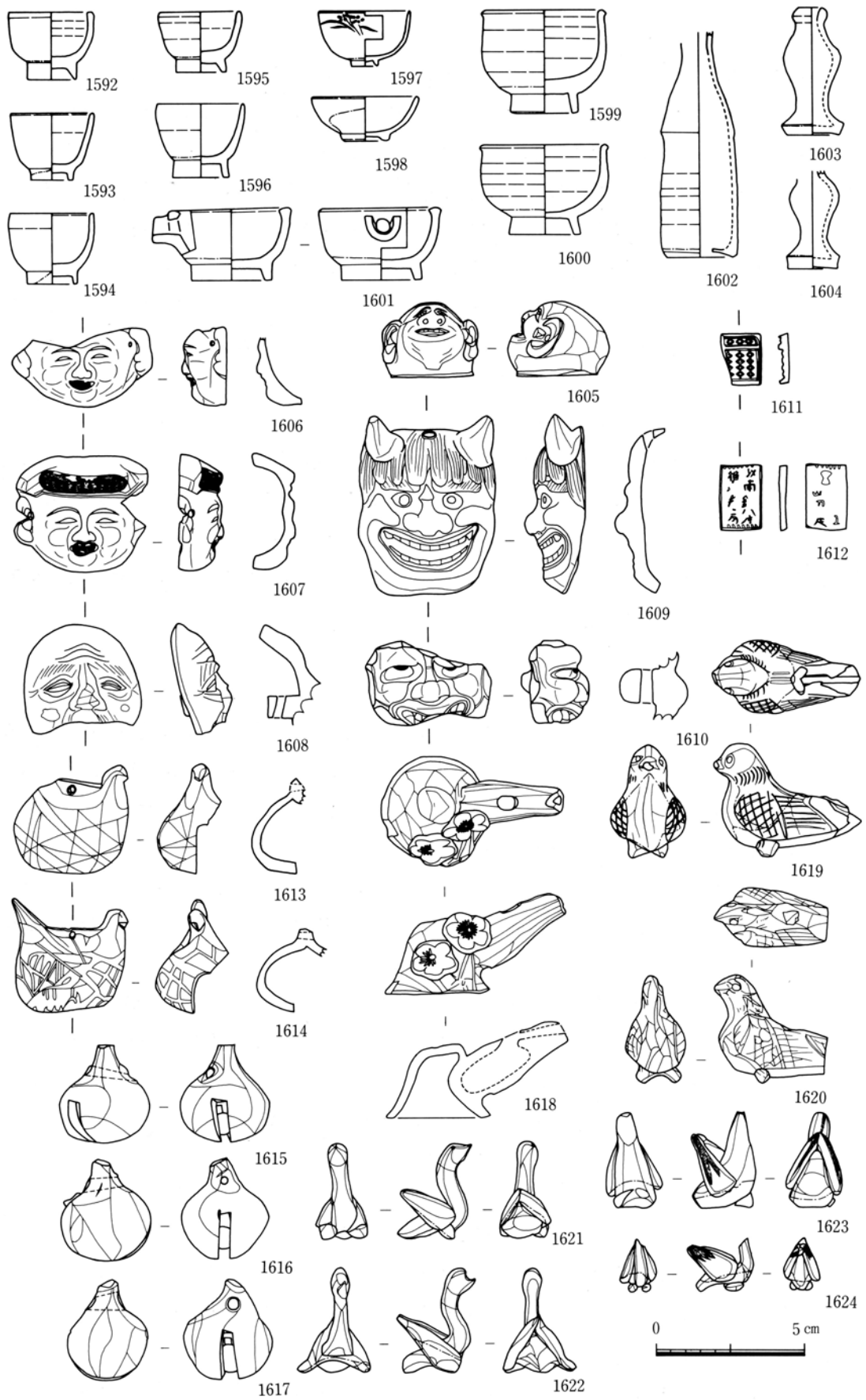
第107図 II期の遺物 (80)

土製品 (4)



第108図 II期の遺物 (81)

土製品 (5)



第109図 II期の遺物 (82)

土製品 (6)

製の燈明具、(1559)は筒型椀で腰部に「朝日」の印がある。(1560)は陶器製の茶釜、(1561)は陶器製の土瓶で底部に隆起した「田口三作」の印がある。(1562～1566)は片口、(1567)は型造りの椀、(1568)は陶器製の轆轤引き蓋で、(1569)の行平と対になるものである。(1570)は壺、(1571・1572)は風炉、(1573・1574)は壺、(1575・1576)は土瓶、(1577・1578)は内面に布目痕のある壺、(1579～1581)は風呂、(1582～1584)は皿で、(1584)は紅皿である。(1585)は型造りの椀、(1586)は手捏の壺、(1587～1591)は徳利で(1587)以外はすべて文様が描かれている。(1592～1597)、(1599～1604)は陶器製で、(1592～1596)の椀には青磁釉が、(1597)は灰釉が施された文様のある京焼の椀、(1599・1600)も灰釉が施された京焼の椀である。(1601～1604)の各器種には青磁釉が施されており、(1601)の片口の底部には墨書の丸印がある。

(3) 玩具(第109図-1605～1620)

人物像や顔の型起しした芥子面子や土鈴、鳩笛、押し型等が出土している。

(1605)は陶器製の布袋の頭部で中空となる。(1606・1607)は大黒面、(1608)は翁面、(1609)は鬼面、(1610)は般若面である。(1611)は押し型で算盤、(1612)は押し型の模造貨幣である。(1613～1617)は土鈴で、(1613・1614)のようなやや角張ったものと(1615～1617)の丸味のあるものがある。(1618)は花が貼り付けられた笛、(1619・1620)は鳩笛である。(1621～1624)は陶器製の手捏ねの鳥で灰釉が施されており箸置きかもしれない。

4. 瓦

今回の発掘調査により多量の瓦が出土したが、その全てを採取したわけではなく総量は不明である。ここでは遺存状態が良好で紋様がはっきりしているものを対象とした。瓦の種類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・菊瓦・鬼瓦で軒棧瓦と棧瓦は破損が著しく判別が不能なものも多い。

(1) 軒丸瓦(第110・112図-1625～1637・1651～1655)

軒丸瓦の紋様構成は三ッ巴紋が主で、三ッ巴紋はさらに大型の1類、中型の2類、小型の3類に分けられる。17世紀前半頃に比定できる瓦(1625～1636)とそれ以降の新しい時期の瓦(1637・1651～1655)がある。

(1625)は右巻三ッ巴紋を内区に、外区に推定12個の珠紋をめぐらしている。巴紋の頭部は丸く細い。尾部は細長くつくられており、外区の周縁には金箔が残っている中型の軒丸瓦である。清洲城下町遺跡出土の軒丸瓦II b₂類⁽⁷⁾と似た瓦である。

(1626)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に推定12個の珠紋をめぐらしており、巴紋の頭部は丸く、尾部は細長く、外区周縁幅がやや広い大型の軒丸瓦である。

(1627)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に推定15個の珠紋をめぐらしており、巴紋は扁平な頭部からなだらかに尾部に移行している大型の軒丸瓦である。

(1628～1635)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に珠紋をめぐらした中型の軒丸瓦である。

(1636)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に珠紋をめぐらした小型の軒丸瓦である。

(1637)は梅鉢紋か。

(1651)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に12個の珠紋をめぐらしており、珠紋径も1.9cmと大きくなり、巴紋の頭部は丸く、尾部は太短く、外区周縁幅がやや広く、全長37.9cmを測り、釘穴が二カ所ある中

型の軒丸瓦である。

(1652)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に16個の珠紋をめぐらしており、珠紋径も1.4cmと大きく、巴紋の頭部は扁平で尾部は太短い中型の軒丸瓦である。

(1653・1654)は左巻三ッ巴紋を内区に、外区に珠紋をめぐらした中型の軒丸瓦で、(1654)の外区周縁に「一」の押印が施されている。

(1655)は胎土が赤褐色を呈し、鉄釉が施された左巻三ッ巴紋の軒丸瓦で、本来あった珠紋が巴紋と一諸になった変形三ッ巴紋の大型軒丸瓦である。

(2) 軒平瓦(第111図-1638~1646)

軒平瓦の紋様は、均整桐唐草紋(1638・1639)の1類と均整唐草紋(1640~1643)の2類があり、均整唐草紋はさらに瓦当の中心飾りによってさらに細分できる。17世紀前半頃に比定する軒平瓦である。

(1638・1639)は均整桐唐草紋で瓦当紋様の中心飾りは桐で左右に唐草を巻き出しており、中心飾りの桐や唐草は細い。

(1640)は均整唐草紋で瓦当紋様の中心飾りは三つの子葉で、子葉の端が剣先のようにになっている。

(1641)は均整唐草紋で下向きと上向きの早蕨状の唐草を配している。

(1642~1643)は均整唐草紋である。

(1644・1645)は唐草紋、(1646)は唐草の先端が剣菱となるものである。

(3) 飾瓦(第111図-1647・1648)

飾瓦は(1647)の重ね菱の紋様のものと、紋様がなく篋による文字の記された(1648)がある。

(4) 磚(第111図-1649・1650)

(1649)は織部の磚で中心飾りは七弁花で唐草紋が配されており、全面に施釉。

(1650)は織部の磚で中心飾りは不明で唐草紋が配されている。

他に細かな磚の破片が出土している。

(5) 軒棧瓦(第113図~第114図-1656~1671)

軒棧瓦は軒丸部と軒平部から成り、軒丸部の紋様は、連珠三ッ巴紋で右巻と左巻に大別でき、軒平部の紋様は、均整唐草紋で、点珠による中心飾りと唐草の二反転で構成される。ここでは軒丸部の紋様を中心に5分類した。

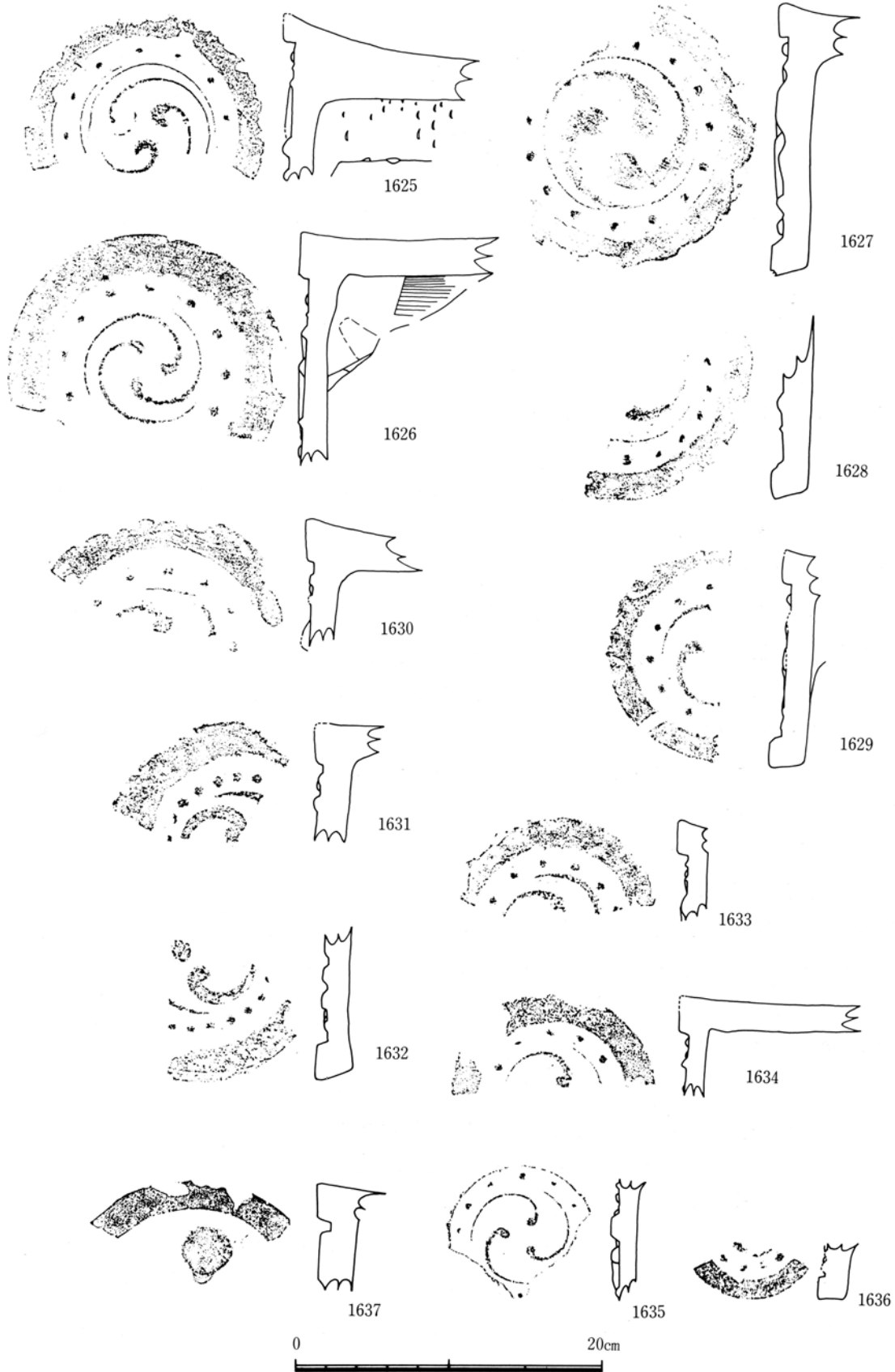
1類(1656~1659) 右巻三ッ巴紋を内区に、外区に12個の珠文をめぐらし、巴紋の頭部は丸く尾部は細く長い。瓦当径が9.1cm~9.3cmを測る。

2類(1660~1662) 右巻三ッ巴紋を内区に、外区に10個の珠文をめぐらし、巴紋の頭部は扁平で尾部は短い。瓦当径が8.9cm~9cmを測る。

3類(1663~1667・1670・1671) 左巻三ッ巴紋を内区に、外区に12個の珠文をめぐらし、巴紋の頭部は丸く、尾部が細く長い(1663)と短かいものがある。(1666)は瓦当径が7.6cmと小さい。瓦当径が7.6cm~9.1cmを測る。

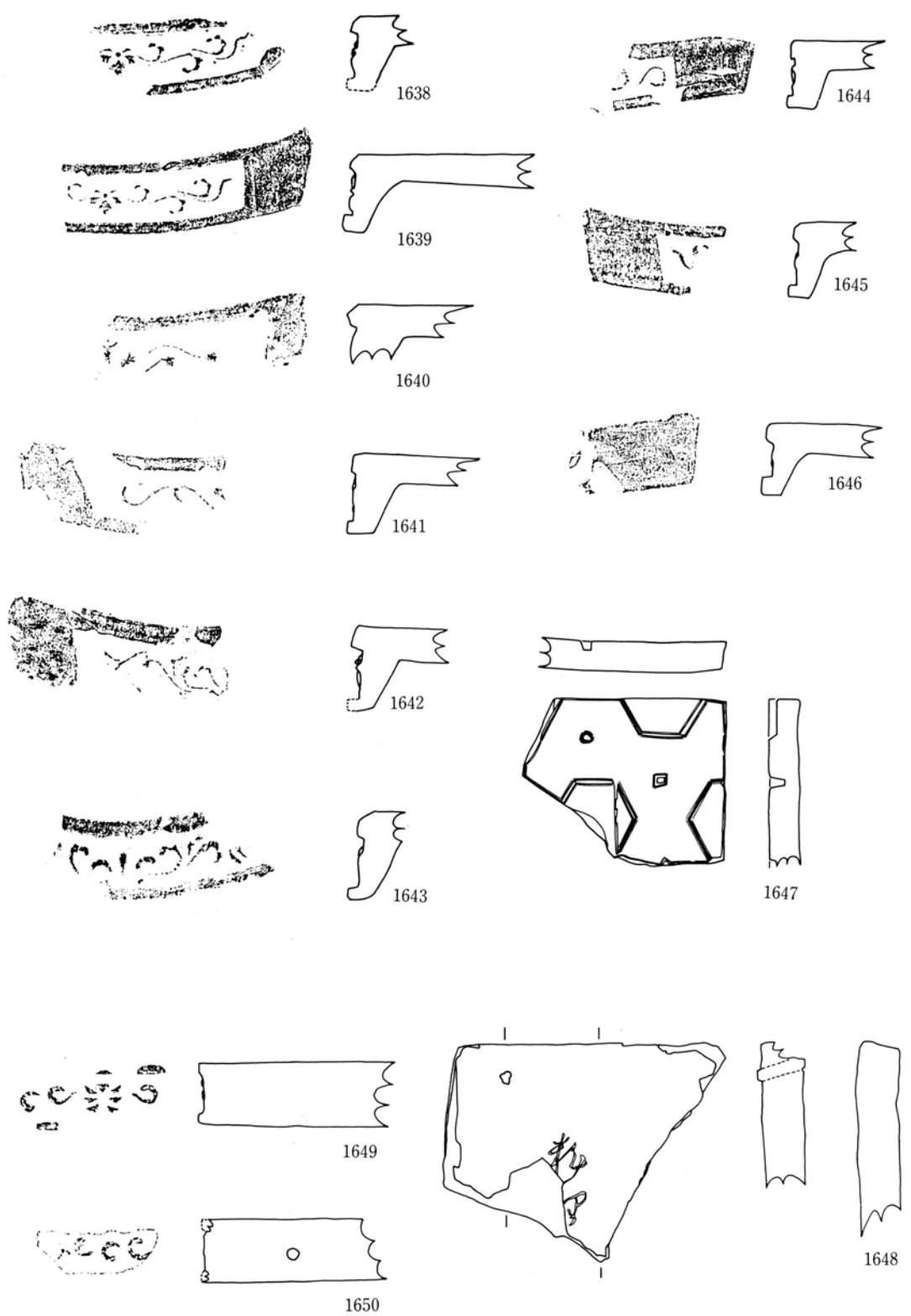
4類(1668) 左巻三ッ巴紋を内区に、外区に10個の珠文をめぐらし、巴紋の頭部は扁平で尾部は細く長い。瓦当径は9cmを測る。

5類(1669) 左巻三ッ巴紋を内区に、外区に11個の珠文をめぐらし、巴紋の頭部は丸く尾



第110図 II期の遺物 (83)

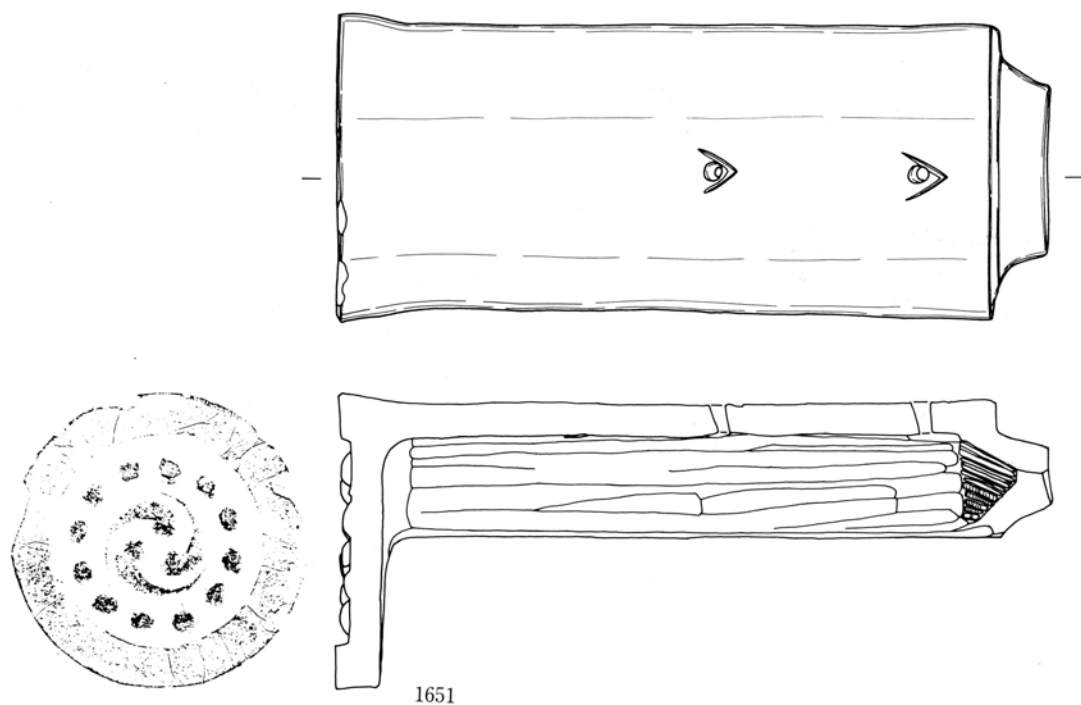
瓦 (1)



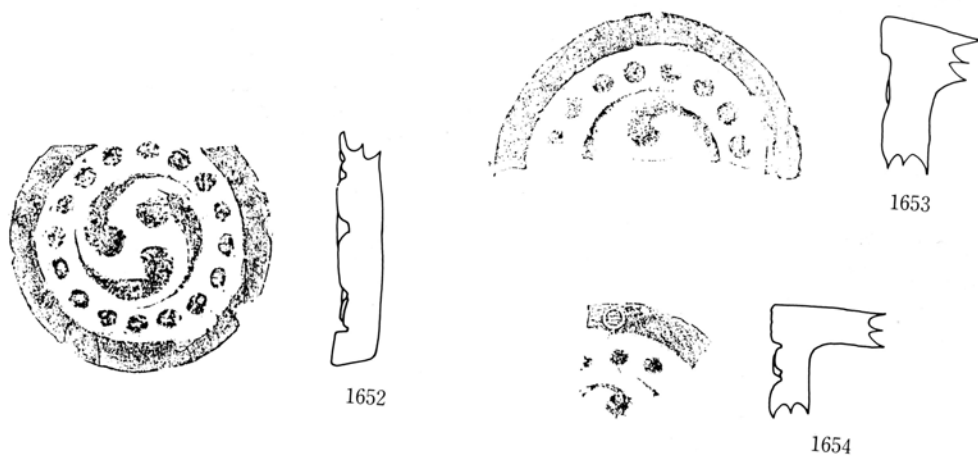
0 20cm

第111図 II期の遺物 (84)

瓦 (2)



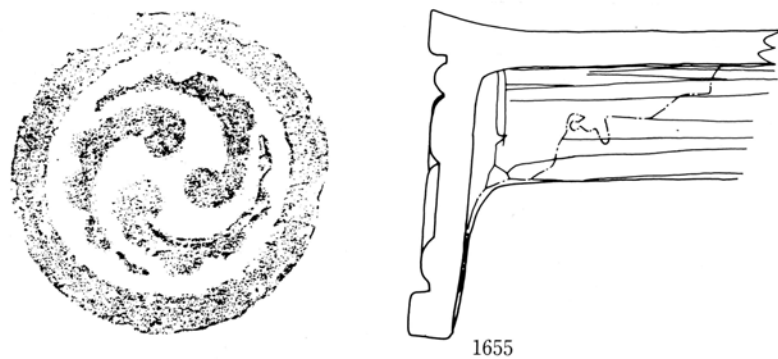
1651



1652

1653

1654

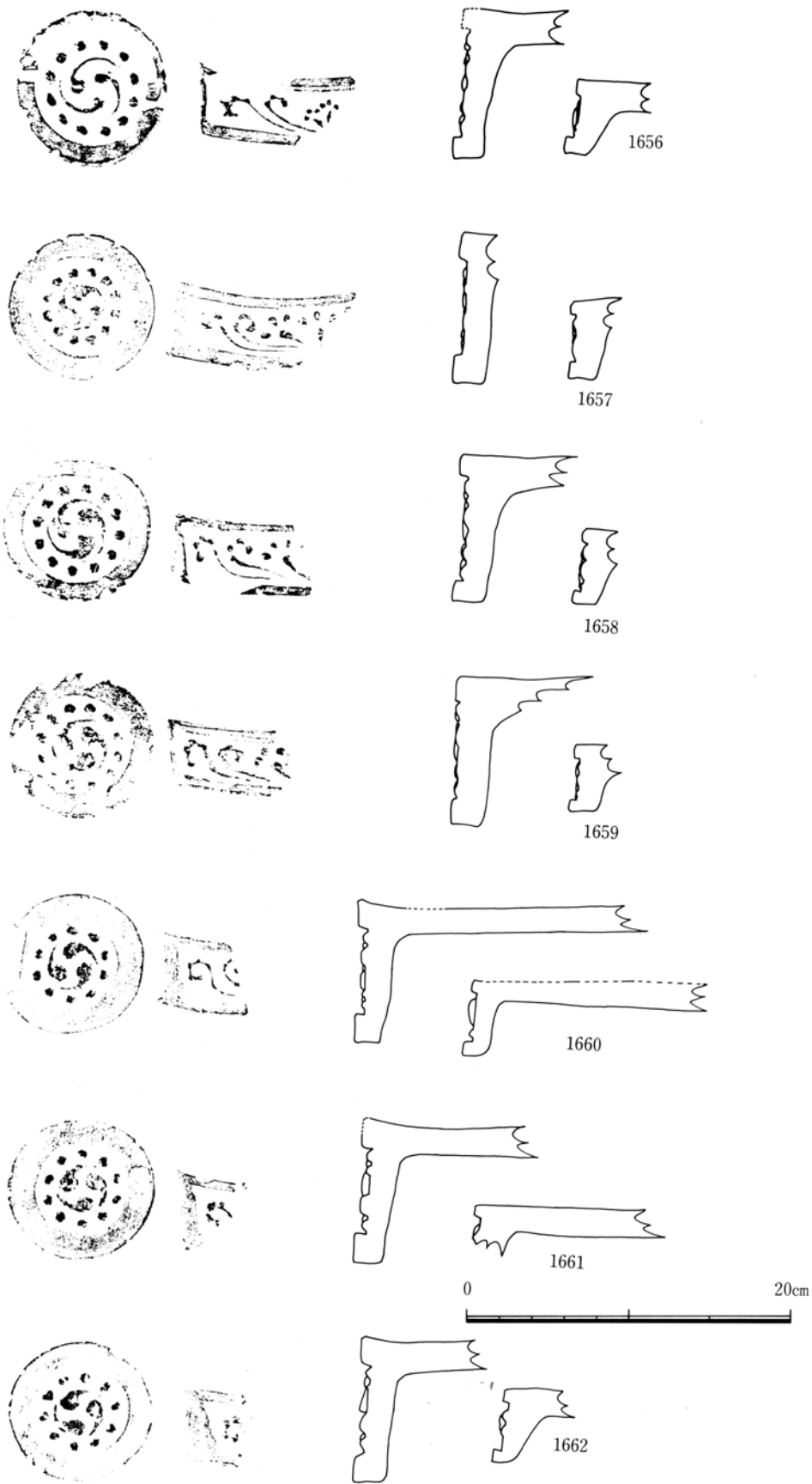


1655



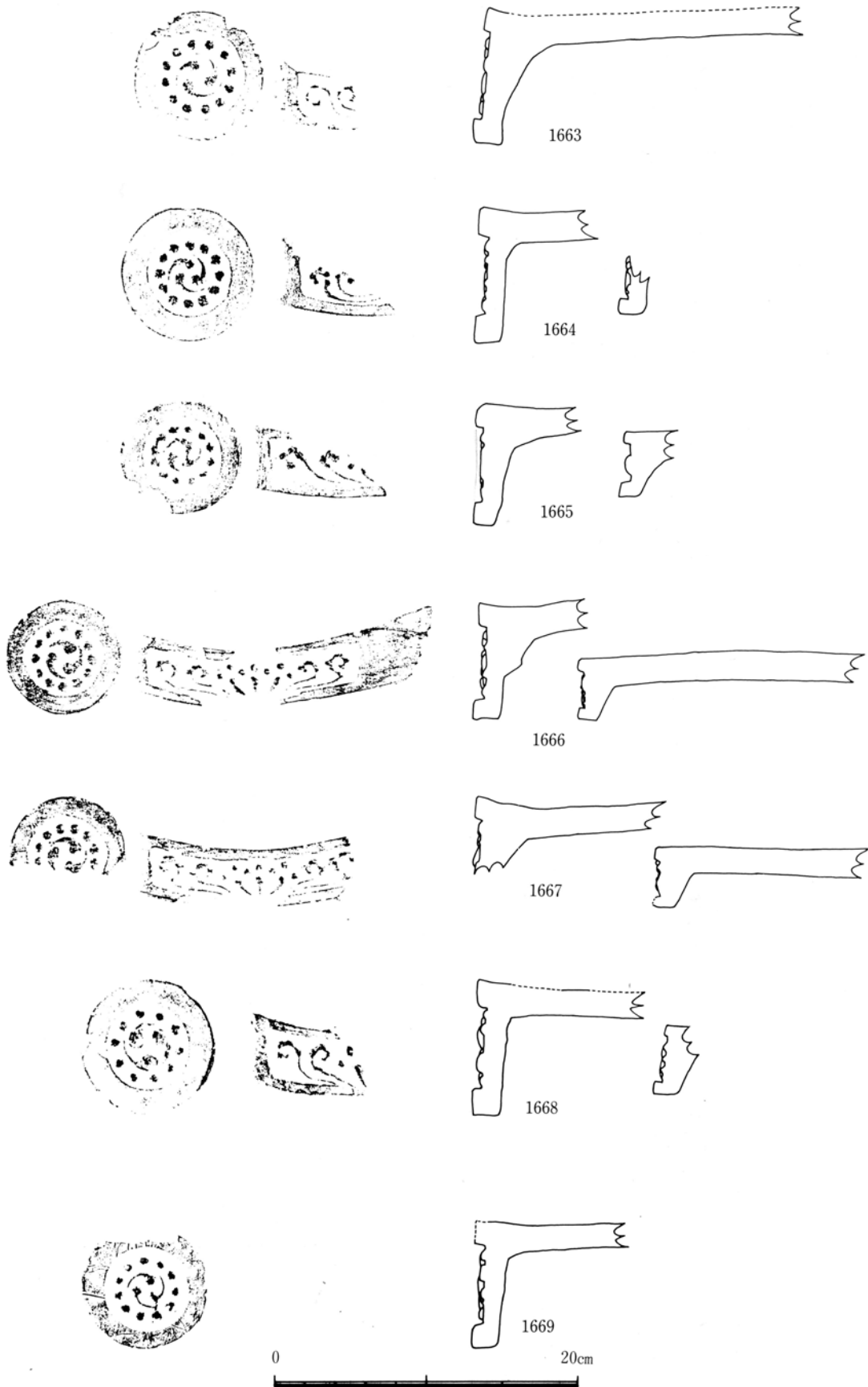
第112図 II期の遺物 (85)

瓦 (3)



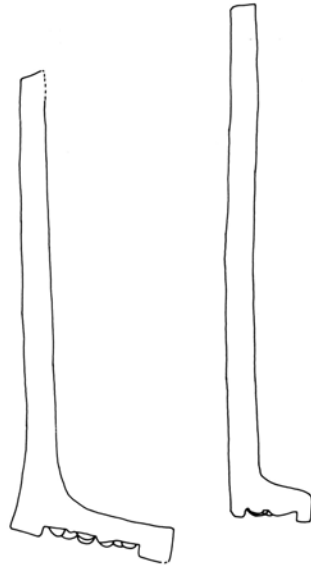
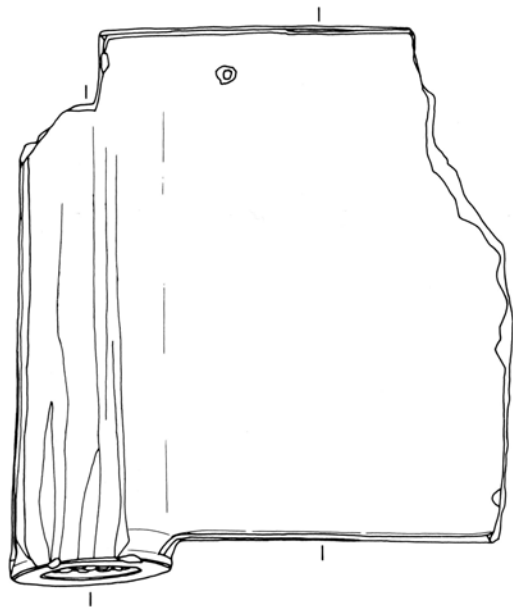
第113図 II期の遺物 (86)

瓦(4)

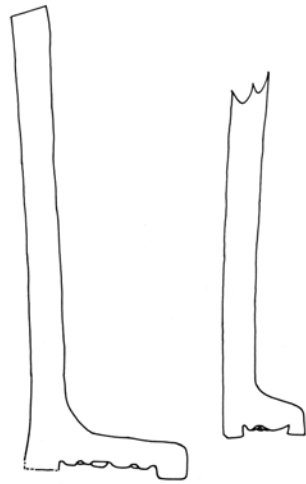
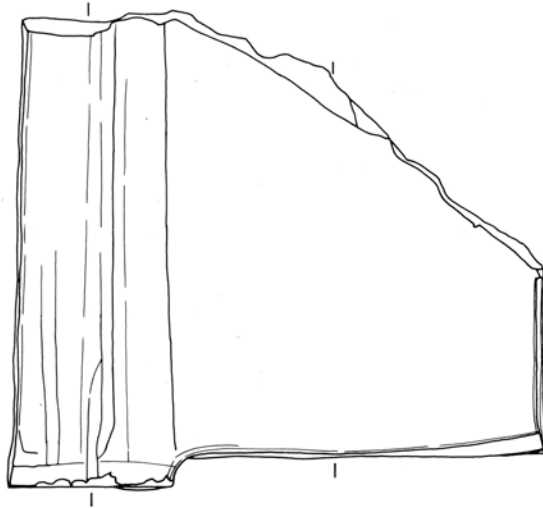
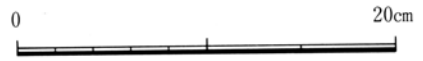


第114図 II期の遺物 (87)

瓦 (5)



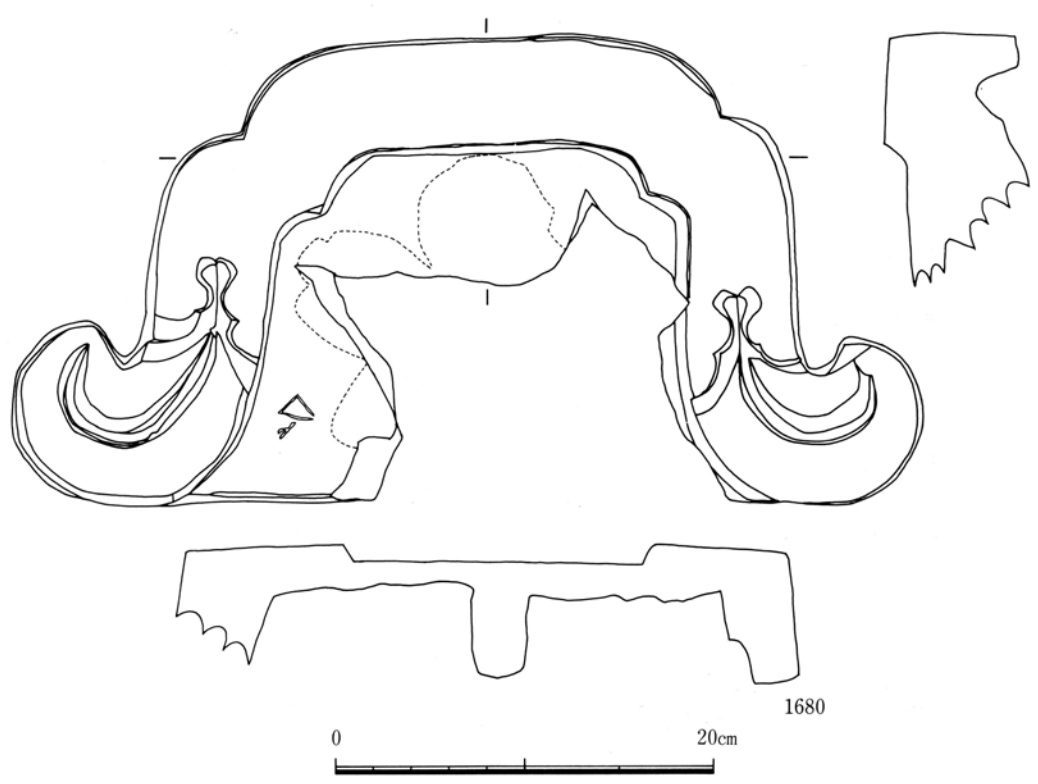
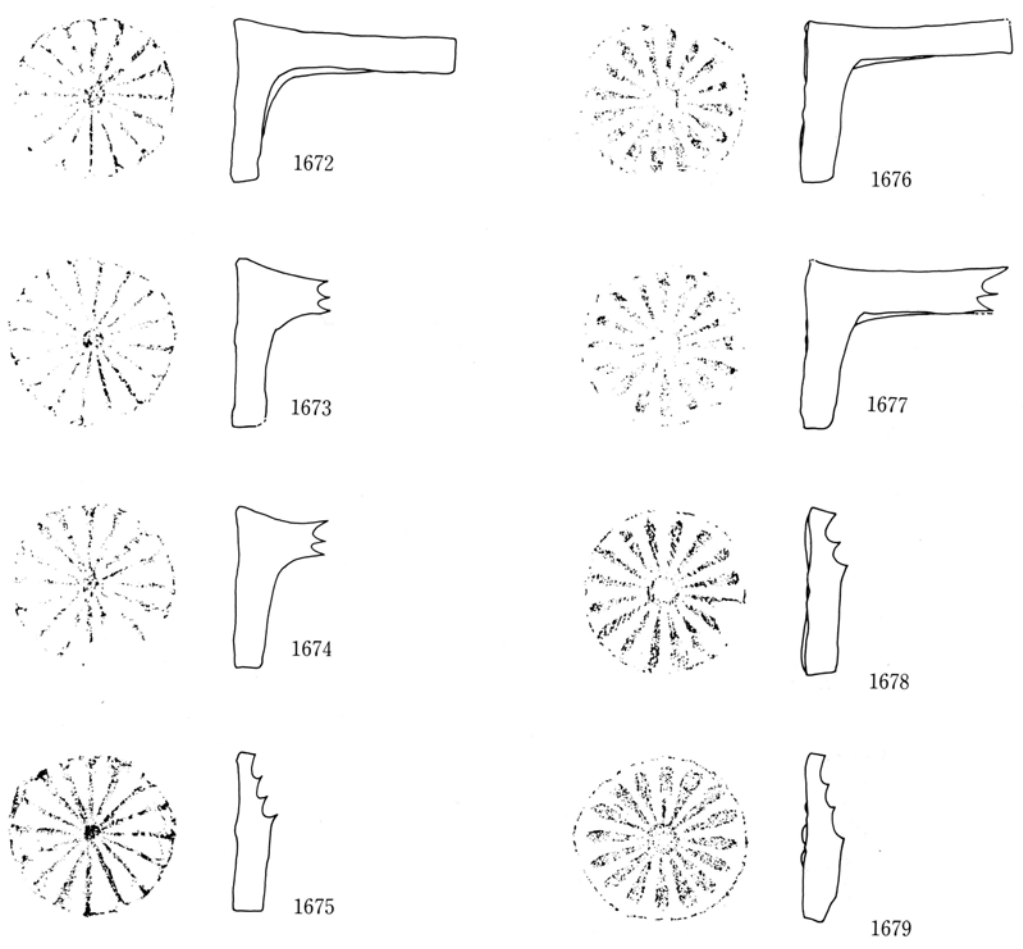
1670



1671

第115図 II期の遺物 (88)

瓦(6)



第116図 II期の遺物 (89)

瓦 (7)

部は細く長い。瓦当径は8.2cmを測る。

(6) 菊丸瓦(第116図-1672~1679)

慰斗瓦の間に組み込んで使う棟込瓦の一種で、十六弁の菊花紋が、くぼんで輪郭だけが隆起した(1672~1675)と、菊花が隆起した(1676~1679)の二種類ある。

(7) 鬼瓦(第116図-1680)

降棟の先端に据える、下部が直線状になった切据鬼で、中心に家紋がついていたのか、その痕跡があり、下部には篋による記号がある。

5. 石製品

(1) 硯(第117図-1681~1692)

硯は完形・破片を含めて14点出土した。ここでは形態が特徴的なものを取り上げた。すべて長方硯で、硯背に文字が線刻されたものや、覆手のものがあり、また海が両端にあるものもある。

(1681)は大型の硯、(1682)は海が両端にある。墨堂が磨滅によるくぼみとなった硯で、海の一部と硯背に鳥らしきものや、文字が線刻されている。(1683)は角が丸くなり、墨堂が大きくくぼんだ硯である。(1684)は墨堂に使用痕は認められるが、平坦である。(1685)は墨堂のくぼみが海まで続いた硯、(1686)は墨堂が少しくぼんだ硯、(1687)は小形で硯背には斜めの線刻のある硯である。(1688)はどちらが覆手となるのかははっきりしないが、両面共に墨堂に使用痕が認められる。(1689)は細長い短冊形をした覆手の面に「天保四歳 坂田村 石田初蔵」の文字が線刻され、墨堂が磨滅により深くくぼみとなった硯である。(1690)は覆手のある硯で、両面共墨堂に使用痕が認められる。(1691)は覆手の面の墨堂にも使用痕が認められるが硯縁がない。(1692)は両面共同じように墨堂に使用痕があり、片面には線刻による文字がある。

(2) 砥石(第118図-1693~1707)

砥石は総計42点出土したが、そのほとんどが破損品である。砥石は形態による分類より、砥石そのものの粒子の粗細による荒砥、中砥、仕上砥に分けるのが一般的であるが、中砥の判別ができなかったため平面と断面形態を基準に取り上げた。平面、横断面が長方形を呈し、側面観は中央部がレンズ状にくぼむ(1693~1698)と平面、横断面が長方形を呈した薄手の(1699~1707)があり、厚手の砥石に比べ、薄手の砥石の砥石面には使用痕と考えられる細くて浅い擦痕状の沈線が多く認められ、おそらく厚手の砥石が荒砥、薄手の砥石が仕上砥であったと思われる。

(1707)は両面に墨書のあるもので、片面には墨書以前の使用痕が認められる用途不明のもの。

(3) その他の石製品(第119・120図-1708~1728)

碁石(1708~1715) 径2cm~2.2cmを測る黒色の碁石である。

バンドコ(1716・1717) 越前の笏谷石で作られた小型バンドコの隋円形をした蓋(1716)で、菱文の透し彫りとそのまわりに葉状の文様が彫られている。(1717)は(1716)と対になる越前の笏谷石の小形バンドコの身で正面の部分には上半部に3本の細長い窓状のものがある。

火炉(1718) 底部に丸い脚の付いたもので越前の笏谷石で作られている。

石臼類(1719~1723) (1719)は石臼の上臼で上面のくぼみ部は表面がみがかれたように滑らか

である。(1720)は茶白の上白で、上面のくぼみ部の周縁には鑿痕が残る。(1721)は石白の下白で下面には鑿痕が残る。(1722)は茶白の上白で側面には鑿痕が残る。(1723)は茶白の上白で側面には鑿痕が残る。

五輪塔(1724) 焼成を受け周囲が欠損している。

軽石(1725～1727) (1725・1726)は上面部に鋭利な物で切った痕がある。(1727)は丸い軽石を半分に分割した形を呈し、下部の平になった部分は滑らかである。

印章(1728) 1.6cm×1.7cmのほぼ正方形を呈した私印で、四面のうち二面には文字が刻まれ、「森約之印」とある。

6. ガラス製品

江戸時代の所産と思われるガラス製品が3点出土しており、いずれも棒状である。(1729)は断面形状が長方形の棒状のもので半透明な白色を呈している。(1730)は断面正方形で緑色を帯びた棒状のものである。(1731)は断面長方形の棒状のもので黄褐色を呈している。

7. 金属製品

金属製品は鉄・銅・真鍮等の製品が130点出土したが、その大部分は腐食あるいは錆の付着がひどく、残存状態が悪い。ここでは比較的残存状態の良いものを72点取り上げた。

(1) 刀装具類(第121図-1732～1738)

刀装具として小柄が9点、鐔が1点、鍔(はばき)が2点出土しており、(1732)は小柄の刃部、(1733・1734)は鍔、(1735)は鞘金具か、(1736)は小柄の刃部、(1737・1738)は小柄で、共に文様が施されており、内部には鉄錆が詰まっている。

(2) 建具金具類(第121図-1739～1745)

(1739)は隋円形を呈した襖の取手でまわりに襖の木質部が残っている。(1740)は内側がくぼみ、その内面に線彫りによる菊花文が描かれた飾り金具。(1741)は両面に文様が施された菊花文の飾り金具。(1742)は碗状のものを二つ合わせて球形状とした飾り金具。(1743)は蓋の頂部に10弁花の菊花文を重ね、その上に角釘が打ち込まれた大きな飾り金具。

(3) その他の金属製品(第121・122図-1746～1774)

火燧金(1746) 2点出土している。(1746)は把手に穴のあいたもので、火打ち石と打ち合わせて火を出したもののだが、対となるべき火打ち石の出土はない。

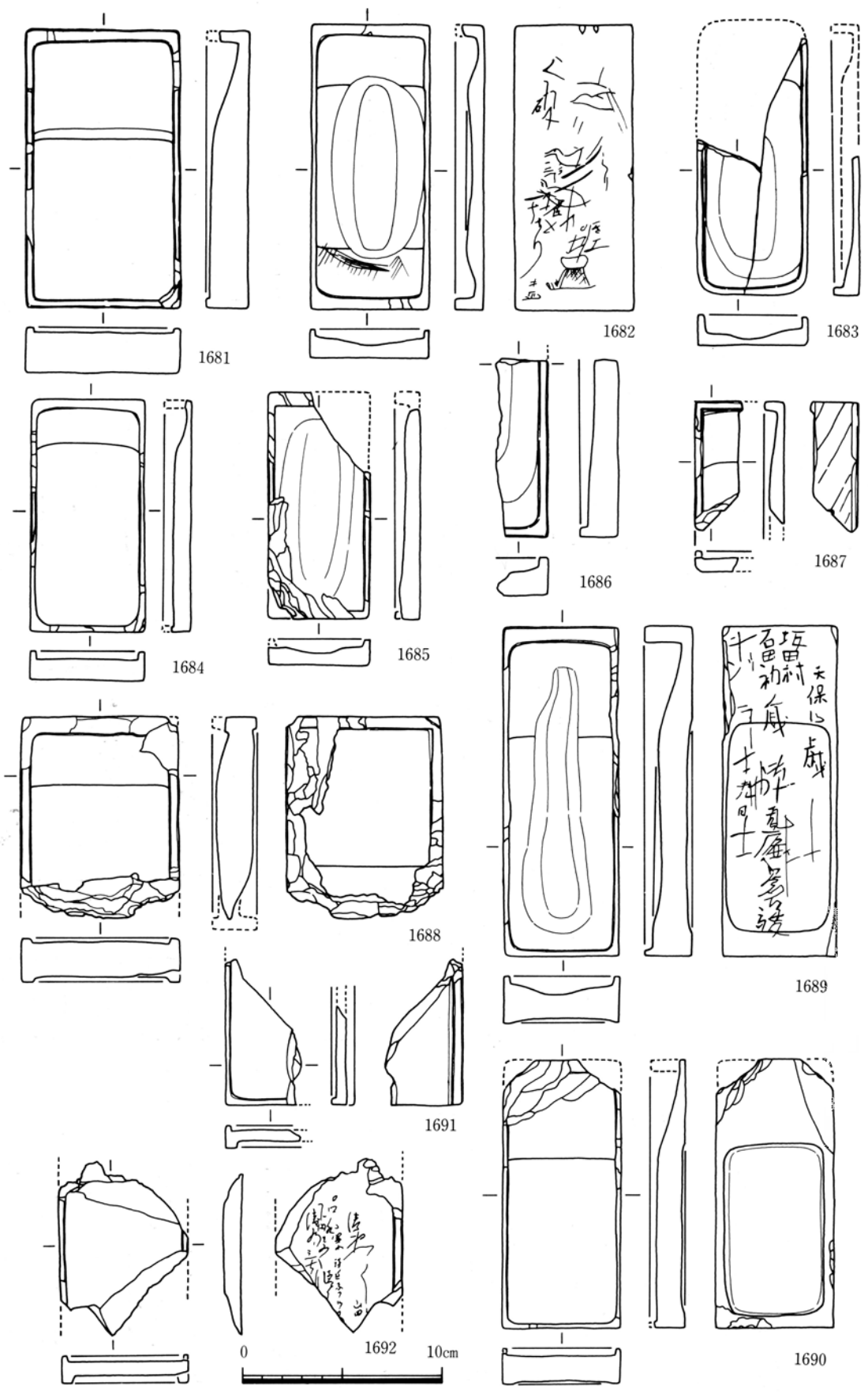
毛抜き(1747) 1点のみの出土である。

匙(1748・1749) 先の丸い(1748)と薄くて扁平な篋状をした(1749)とがある。

火箸(1750) 一端がとがり、もう一方の先端を削り、頭を造り出している。他に1点出土。

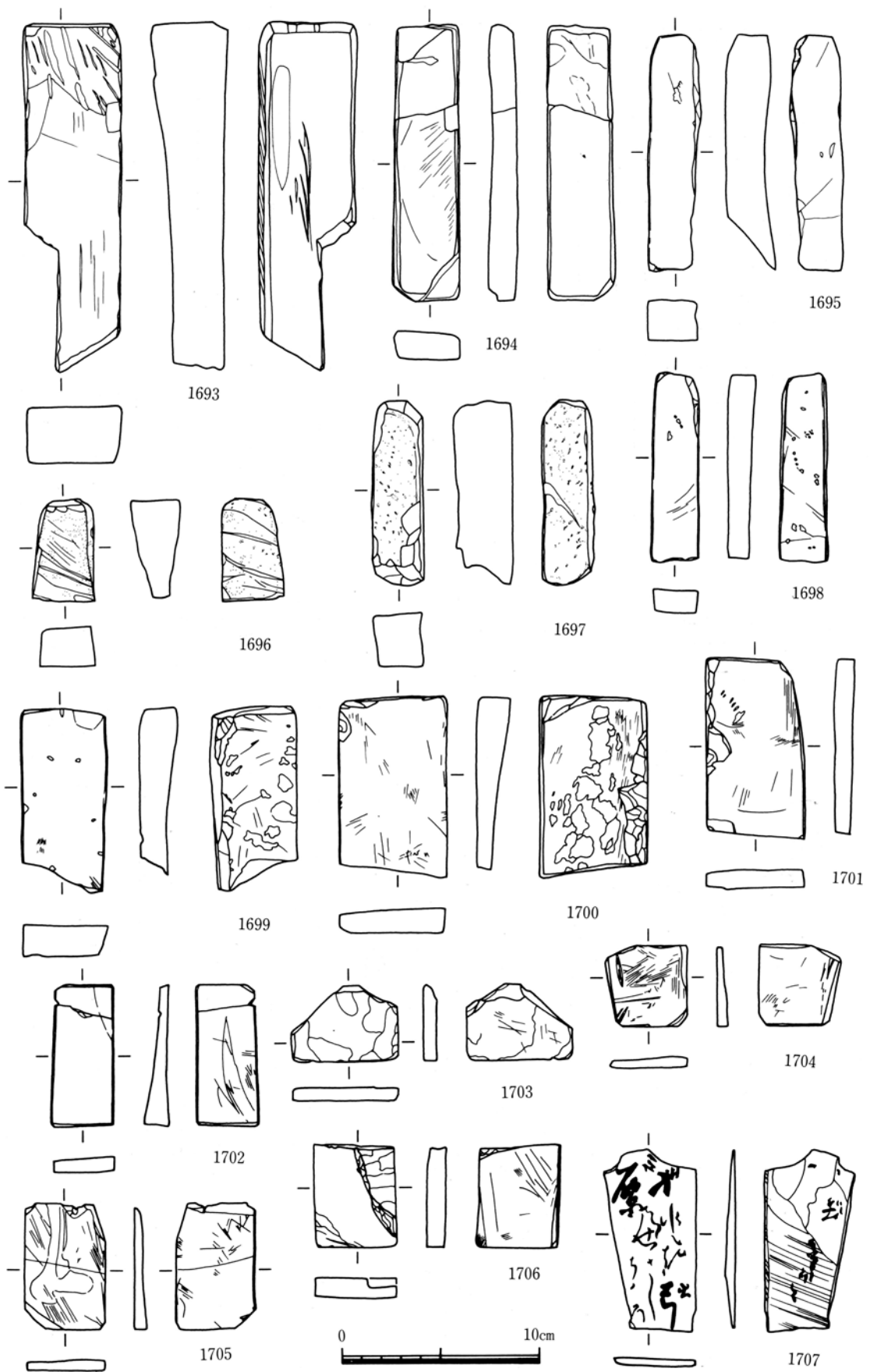
煙管(1751～1764) 17点出土しており、このうち雁首が10点、吸口が7点である。そのうち比較的遺存状態のよいものを掲載したが、完存品は(1760)のみであった。

釘(1765～1774) すべてが鉄釘で、そのほとんどが腐食のための破損や、錆の付着のために掲載したのは10点のみである。いずれも角釘で頭巻となったもので(1769)は頭部が欠損し、大きくまがった釘である。釘の長さも短いものは(1766)の6.3cm、長いものは(1770)の9.8cmを測る。



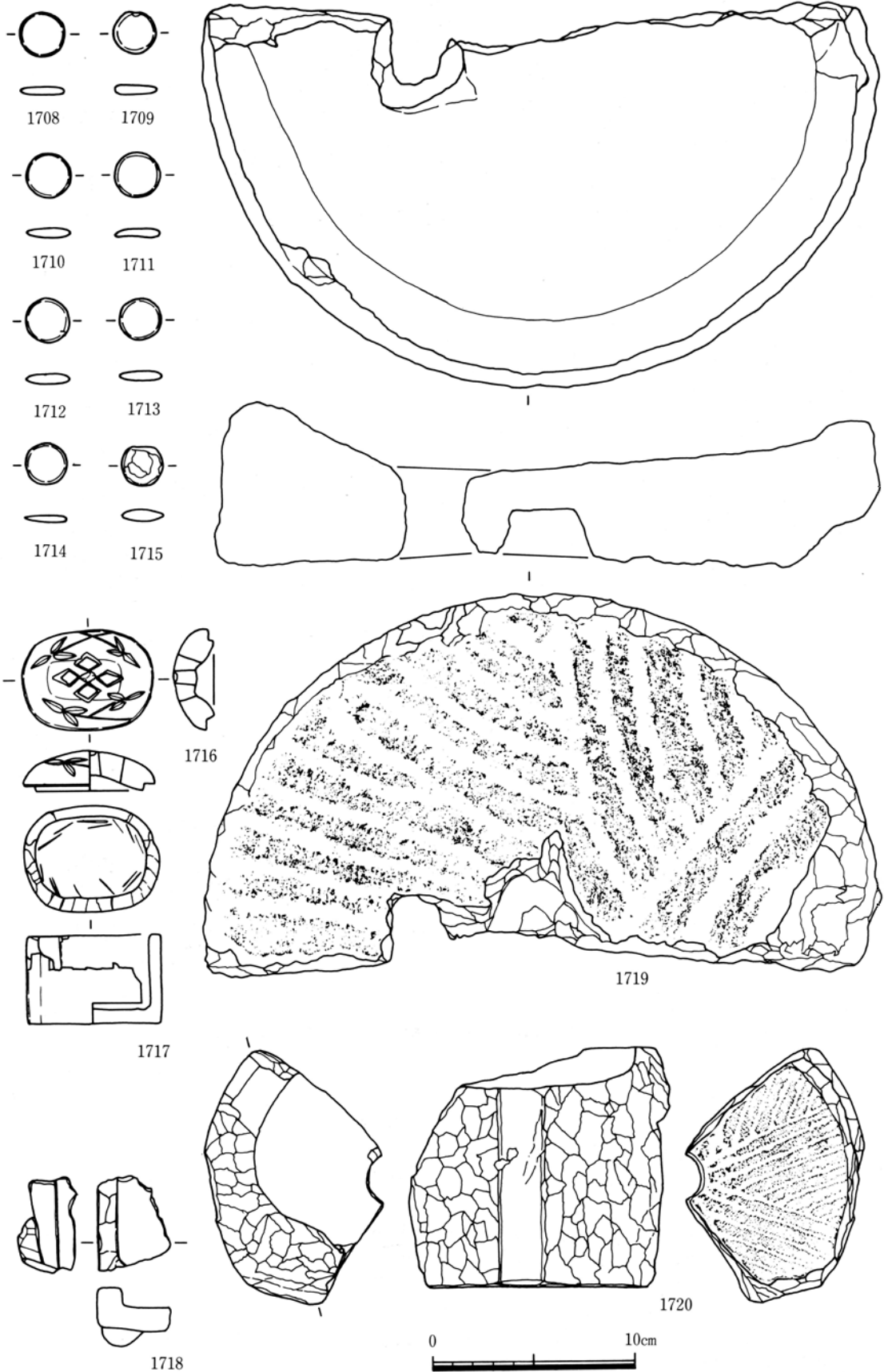
第117図 II期の遺物 (90)

石製品 (1)



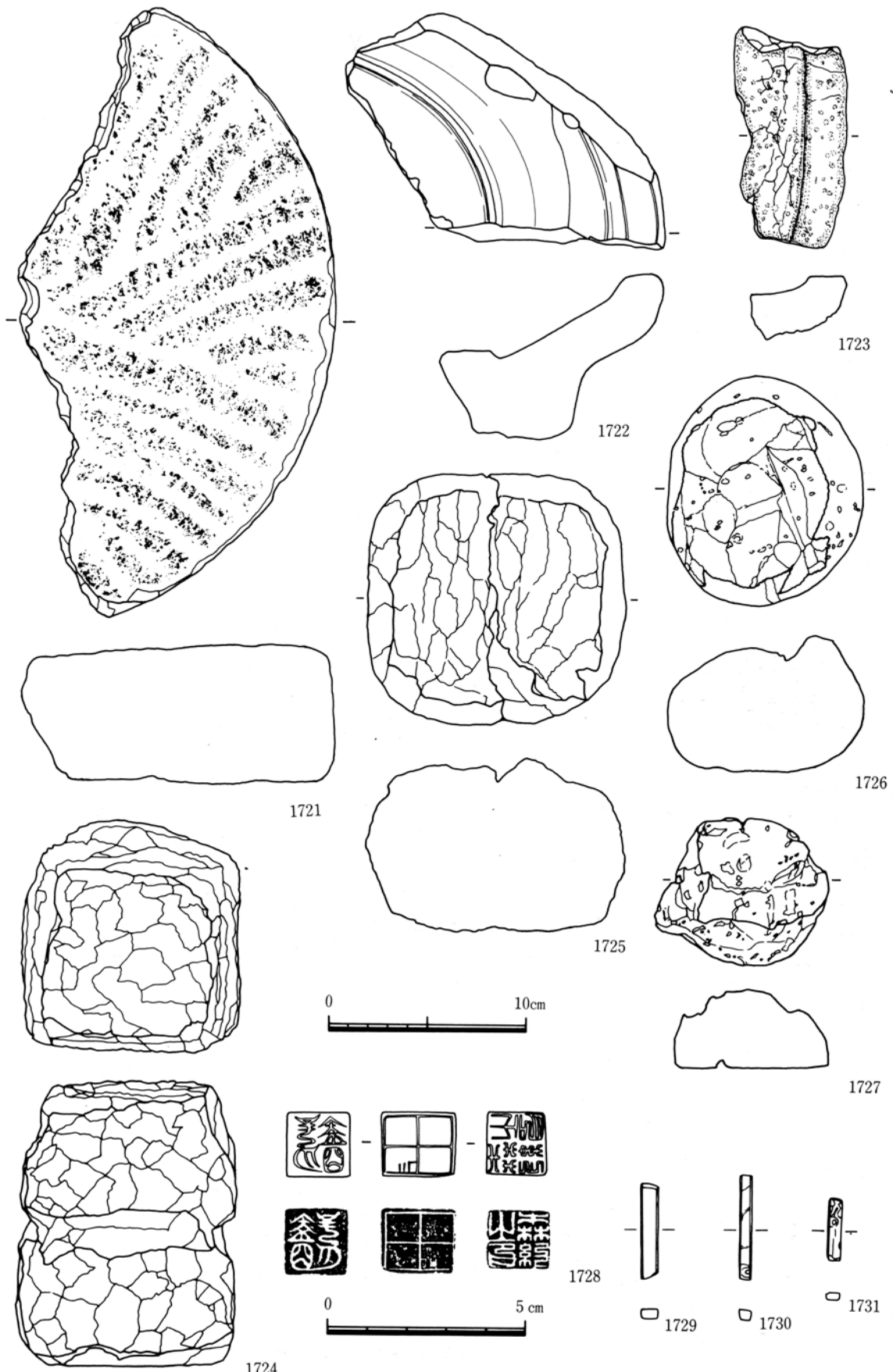
第118図 II期の遺物 (91)

石製品 (2)



第119図 II期の遺物 (92)

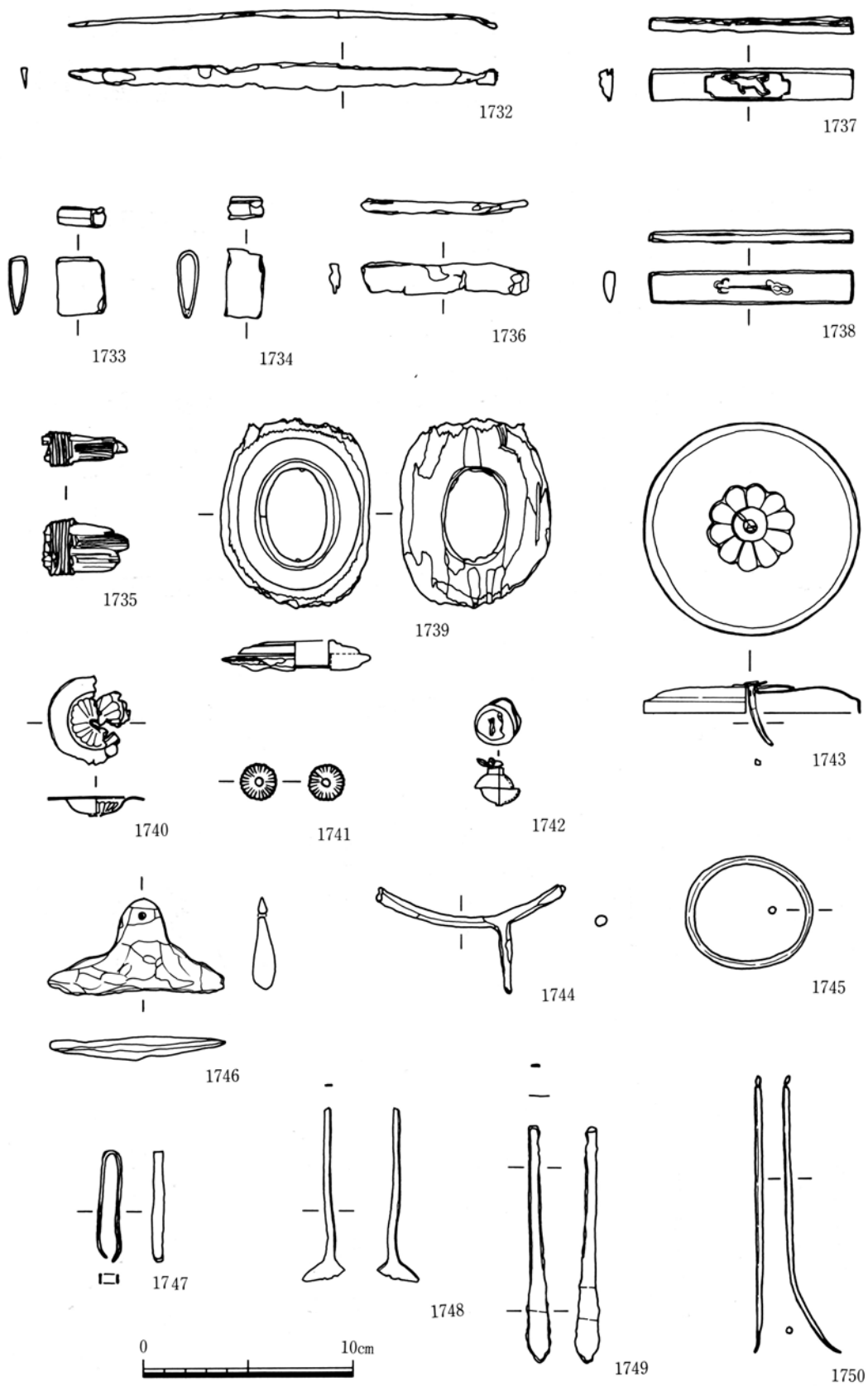
石製品 (3)



1724

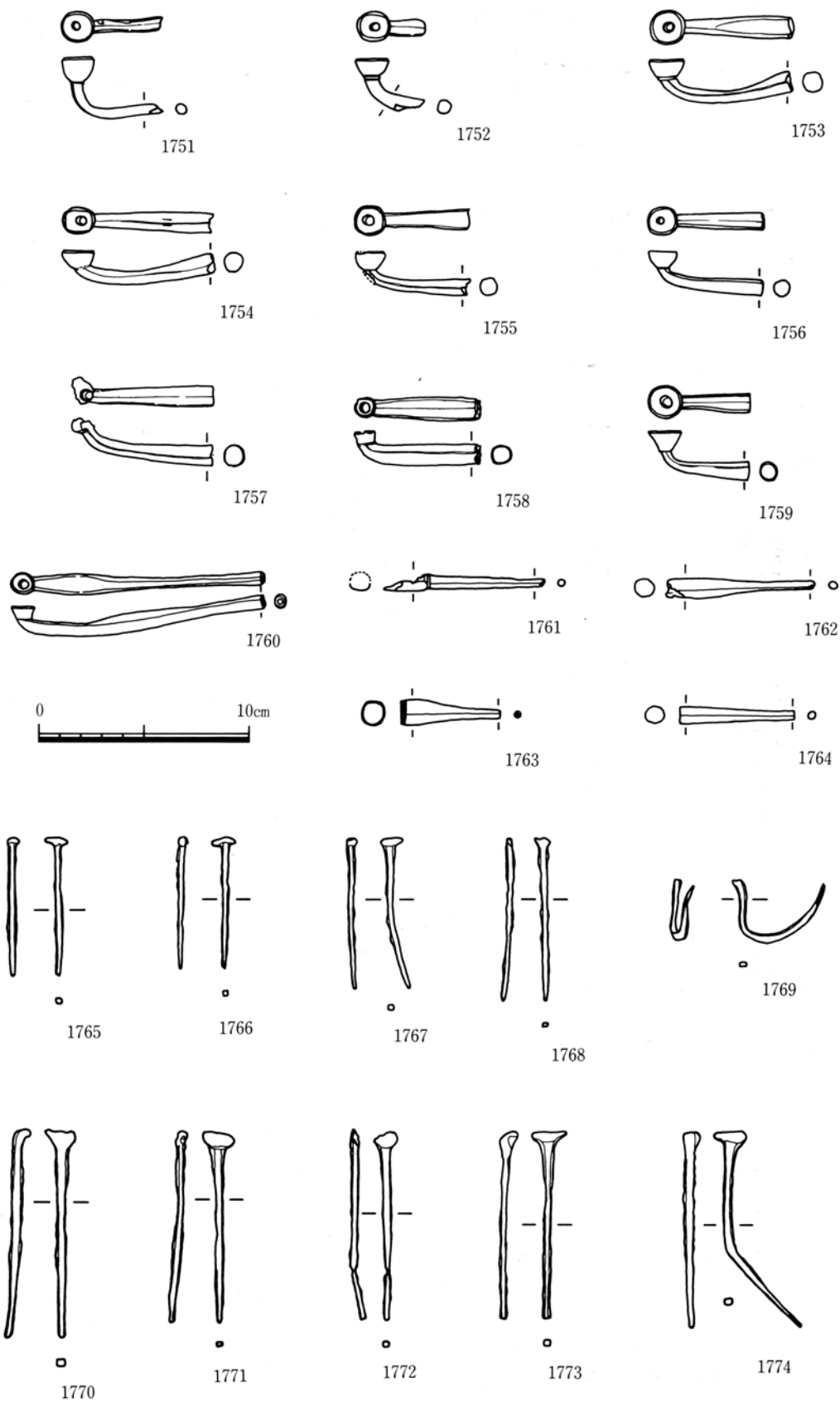
第120図 II期の遺物 (93)

石製品 (4)・ガラス製品



第121図 II期の遺物 (94)

金属製品 (1)



第122図 II期の遺物 (95)

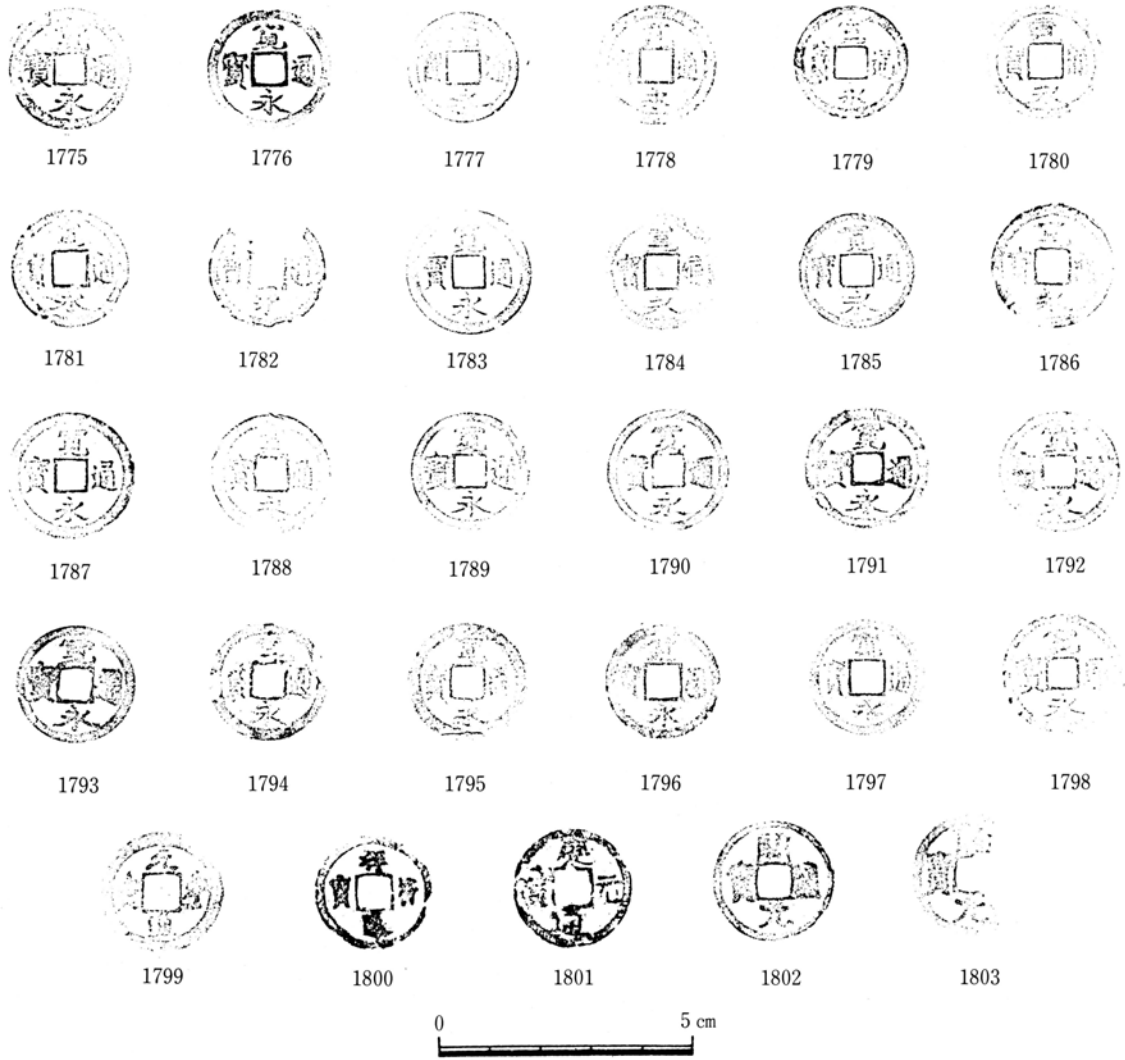
金属製品 (2)

8. 銭貨

銭貨は63点出土しているが、ここでは比較的遺存状態の良いものを掲載した。渡来銭は11枚出土しており、銭文により分類すると、開元通宝・皇朱通宝・治平通宝・元豊通宝・熙寧元宝・祥符通宝の7種で元豊通宝が4枚出土している。

寛永通宝42枚のうち、古寛永は15枚・新寛永は19枚・不明8枚である。

(小澤一弘)



第123図 II期の遺物 (96)

銭貨

3. I期以前の遺物

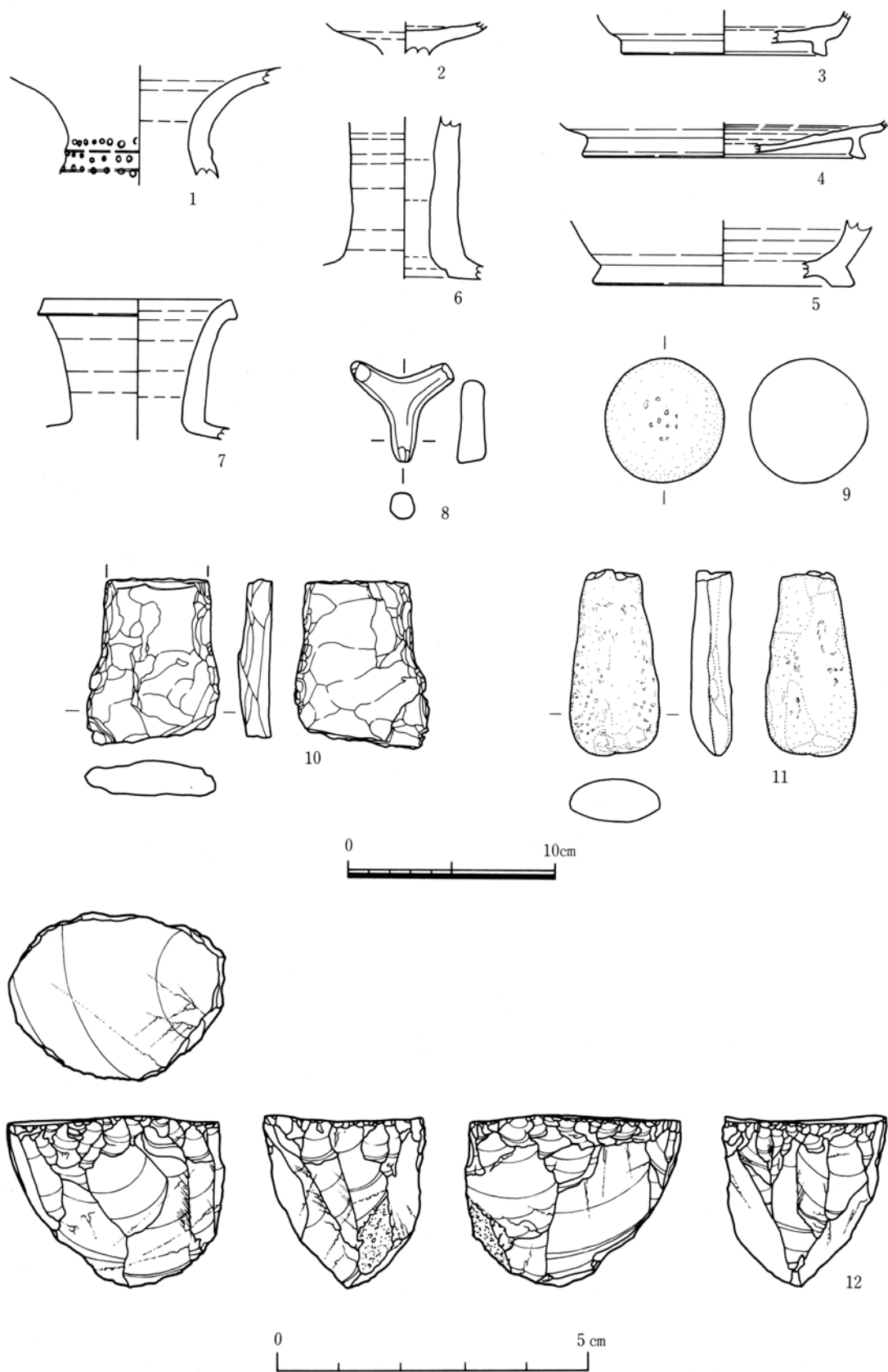
中世以前の遺構の検出には至っていないが、弥生土器、須恵器、石器が出土している。

(1)は朱がわずかに残った高蔵期の壺の頸部、(2)は7世紀後半の高杯、(3)は8世紀前半の杯、(4)は8世紀末の杯、(5・6)は8世紀前半の長頸壺、(7)は8世紀前半の横瓶、(8)は窯道具の三又トチンである。(9)は磨石、(10)は短冊型の打製石斧、(11)は磨製石斧である。

今回の調査において、予期せぬものとして、名古屋台地では初めての細石核(12)が出土した。出土した層位は、黄褐色～黄白色のシルト・粘土で構成される、いわゆる「熟田層」の上面、当遺跡ではIV層とした淡褐色の漸移層である。舟底形の体形を呈した東海地方特有の細石核で、細石刃をとりおえた最終段階のもので、正面の一端においてフルーティングが認められ、石核の体形を整えるために施された細かな調整痕が見られる。⁽⁸⁾ (小澤一弘)

註

- (1) 本稿で言う無釉陶器は一般に「山茶碗」と呼称されているが、本稿では無釉陶器という用語を取り敢えず用いる。また、施釉陶器は、「古瀬戸」と呼称されているものである。
- (2) 田口昭二「美濃窯における白瓷と山茶碗」(『美濃陶磁歴史館報』II 1983)、藤澤良祐「古瀬戸、概説」(『美濃陶磁歴史館報』III 1984)、井上喜久男「美濃窯の研究(1)―15～16世紀の陶器生産―」(『東洋陶磁』15・16 1988)を参照にした。
- (3) 鏝は竈にかけるためでなく、第18図(38)の例のように穿孔される例があることから、吊り下げる際の吊り手の保護のためにあると考えられる。よって、この形態の土器は本稿では「鍋」とする。
- (4) 杉崎章「知多古窯製品の編年と片口鉢」(『知多古文化研究』5 1989)によると、同様なものが、常滑市の野間口古窯で見られるという。
- (5) 釈文は、主に遠藤才文氏(県教育委員会文化財課)による。
- (6) 渡辺誠「焼塩」(永原慶二他編『講座日本技術の社会史2 塩業・漁業』1985)
- (7) 小澤一弘「清洲洲城下町遺跡出土の瓦について」(勤愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和61年度』1987)
- (8) 細石核の作図・トレースは鈴木忠司氏(京都文化博物館)による。



第124図 I期以前の遺物

IV ま と め

1. 三の丸出土の近世陶磁器について

名古屋城三の丸遺跡の主な遺構出土の陶磁器類については前述したとおりであるが、これらの陶磁器類の生産地も、瀬戸・美濃・常滑・志戸呂・信楽・京都・備前・肥前と多岐にわたり、陶器では、地元である瀬戸・美濃が、磁器では肥前がその中心をなしている。

瀬戸・美濃の陶器の時期は17世紀から19世紀にわたるが、18世紀後半以降に位置づけられる資料が量的に多数を占める。また肥前陶器については、17世紀後半に位置づけられるいわゆる「京焼風陶器」も出土しているが、推定廃棄年代が18世紀後半の遺構からの例が多く、18世紀末と考えられる遺構からはほとんど出土しない。

肥前磁器は16世紀後半から19世紀にわたるが、17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる資料が主で、推定廃棄年代が18世紀後半の遺構からの出土が多い。

ここでは主要遺構の陶磁器についてみていくこととする。なお、SK130・189、SX101の器種構成については第5表に示したが、炆器や半磁半陶器は陶器に含めている。

SK186 瀬戸・美濃の17世紀前半の陶器で、長石釉・銅緑釉の製品が出土したが、銅緑釉の製品が目立つ。黄瀬戸の折縁鉢が出土。遺物量は少ない。

焼塩壺は「天下一堺みなと 藤左衛門」の刻印のある身A類が出土。

SD102 瀬戸・美濃の陶器で、17世紀前半の鉄釉・灰釉・長石釉の製品が出土した。長石釉製品が多く、長石釉の丸皿には鉄絵が施され、二重圏線が巡るものがある。肥前磁器は16世紀後半の製品が含まれている。土師質の皿はロクロ成形と手捏ねによる二種類ある。

銭貨は「元豊通宝」が1枚出土している。

SK173 瀬戸・美濃の陶器で、17世紀前半の鉄釉・灰釉・長石釉・銅緑釉の製品が出土した下層の遺物群である。長石釉製品が多く、鼠志野や織部の向付も出土。長石釉の丸皿には鉄絵が施され、二重圏線の中に蘭竹文が描かれている。黄瀬戸の折縁鉢も深めの鉢となる。

焼塩壺は身A類が出土。

SK145 瀬戸・美濃の陶器で、17世紀前半の鉄釉・灰釉・長石釉の製品が主体を占め、常滑の甕・挿鉢や輸入陶磁である明染付も出土している。また胎土が赤褐色を呈した、いわゆる「赤織部」と胎土が軟質の楽焼系の製品も出土している。

SK179 瀬戸・美濃の陶器で、17世紀前半から中頃にかけての鉄釉・灰釉・長石釉の製品が出土し、長石釉製品が多い。長石釉の丸皿には鉄絵が施されるが、二重圏線がなくなり、蘭竹文のみとなる。南蛮人が描かれた五角皿や織部の角皿、狛犬の水滴、唐津の鉢が出土。

焼塩壺は身A類が出土。

SK148 瀬戸・美濃の陶器で、17世紀後半から18世紀はじめの頃の灰釉・鉄釉製品で、長石釉製品は出土していない。17世紀前半の唐津の椀や肥前磁器の小杯、また現川の椀、志戸呂の燈

明皿等各地の製品が出土している。灰釉(御深井釉)の製品が目立ち、灰釉皿の内面には呉須絵が描かれている。

S K 130 遺物量の多い廃棄土坑で、瀬戸・美濃の陶器は18世紀の中頃から後半頃の製品が出土し、器種も豊富である。器種別の出土量も碗・内耳鍋・甕・挿鉢・皿・土師質皿・鉢・徳利・半胴甕・人形・小型製品の順となる。釉の種類も多くなり、灰釉としたものの中にはうのふ釉や透明釉が、鉄釉としたものの中には飴釉・漆黒釉・柿釉・錆釉などがある。御深井釉については、灰釉と区別するのがむずかしく灰釉として扱っている。碗では、丸碗・御室茶碗・腰錆茶碗・柳茶碗といった多種類の碗があるが、広東碗は出土していない。皿では灰釉丸皿の内底面に摺絵が施された製品が多い。

また京焼風陶器の碗、皿が多く出土した。高台内中央が円圈となり、「清水」「木下弥」の印が押捺され、碗は外面に、皿は内面にくずれた「楼閣山水文」が描かれており、17世紀後半頃の製品である。

京焼風陶器とは別に、緻密な胎土で刷毛目装飾や蜃手装飾を施した薄手のシャープな造りの碗、皿がみられた。現川の製品である。現川は元禄4年(1691)に始まり、寛延2年(1729)に廃窯となっている。

磁器製品も瀬戸と肥前の製品が出土しているが、主体は肥前磁器で、墨弾き技法の装飾を施した17世紀後半の古い皿や、18世紀前半を中心に盛行したコンニャク判による装飾法の製品が見られ、赤絵の施されたものもあるが、広東碗はない。

焼塩壺は「難波浄因」の刻印のある身B類と身C類が、蓋では「花焼塩 イツミ ッタ」の刻印のある蓋C類が出土している。人形や小型製品が96点出土。

銭貨は「寛永通宝(1739年鑄造)」が2枚出土している。

S K 189 瀬戸・美濃の陶器で、18世紀後半頃の灰釉・鉄釉製品が出土している。器種別の出土量も内耳鍋・土師質皿・甕・碗・半胴甕・挿鉢・皿・手水鉢・植木鉢・徳利の順となり、土師質製品の多さが目立つ。碗類の中に箱型をした湯呑み茶碗がみられ、丸碗・腰錆茶碗・柳茶碗といった碗類はやや小振りとなる。腰部に段が付いた胴部の短い小鉢が、群馬県渋川市中村遺跡出土の天明3年(1783)の浅間山大噴火に伴う泥流堆積層出土の小鉢とよく似ており、18世紀第4四半期を前後する時期のものであることがいえる。皿では摺絵製品が少なくなっており、呉須絵製品が目立つ。

京焼風陶器の碗・皿・鉢・蓋が出土し、皿の内面に描かれた「楼閣山水文」は丁寧である。蓋や鉢の「楼閣山水文」は、細く文様が描かれており、17世紀後半でも古い段階のものと思われる。他に内湾した口縁を呈した信楽の碗も出土している。

磁器製品もそのほとんどが肥前の製品で、外面青磁釉で内底面に五弁花のコンニャク判を施した碗や、底面裏銘が「大明年製」「福」をくずした銘となった碗・皿がみられ、赤絵を施した上絵付製品もある。

焼塩壺は身A類が出土している。

S K 173 瀬戸・美濃の陶器で18世紀末から19世紀前半の鉄釉・灰釉製品が出土した上層の遺物群で

ある。丸碗や拳骨茶碗の他に端反の碗が多く、いわゆる「麦藁手茶碗」も出土している。
磁器製品は瀬戸と肥前のものが出土しており、肥前製品の中には腰部に鉄釉が施された18世紀の碗がみられる。

S K 162 瀬戸・美濃の陶器で19世紀前半の鉄釉・灰釉・長石釉の製品が出土している。碗類では鉄絵が施された長石釉の碗や麦藁手茶碗、広東碗も出土している。灰釉丸皿の内面には呉須絵が描かれている。鍋や半胴甕・植木鉢が多く出土した。鍋の把手穴は3対1のものと3対2の2種類ある。半胴甕では底部が欠損している製品がほとんどで、植木鉢に転用されたものと思われる。現川の刷毛目飾を施した胴部に段のある碗も出土している。

磁器製品も瀬戸と肥前の製品が出土しており、瀬戸の磁器製品がやや多い。瀬戸、肥前共に広東碗がある。肥前の製品では口縁を少し外反させた端反碗が出土している。また伊万里製品や墨弾き技法のある上手物の鉢など17世紀や18世紀の製品が出土しているが、いずれも伝世品と考えられる。瀬戸の製品では、麦藁手茶碗や天保から幕末にかけて盛行した角皿が出土している。

磁器製品の中には焼継が施された碗や鉢があり、焼継は「守貞漫稿」などによれば、寛政頃以降に流行したことが知られている。

S X 101 瀬戸・美濃の陶器で17世紀から19世紀の製品が混在しているが、その主たる時期は19世紀中頃である。遺物量が最も多い廃棄土坑で、器種別の出土量も甕・碗・土師質皿・内耳鍋・播鉢・人形・小型製品・土瓶・徳利・鉢・半胴甕の順となり、主体を占めるのが、碗・皿・鉢の食生活用品である。陶磁製品の他に、人形が96点、小型製品が102点、陶磁製の小型製品が40点出土しており、人形や小型製品が他の廃棄土坑に比較しても多い。碗では広東碗や丸碗が小振りとなり、筒型を呈した湯呑茶碗もある。大形の丸碗は18世紀の製品である。また土瓶・急須・土鍋が目立ち、播鉢では幕末織部といわれる蛇の目高台で縁帯をもった口縁の播鉢が出土している。徳利にも各種あり、高田徳利・三角徳利・ペコカン徳利・布袋徳利・船徳利が出土している。

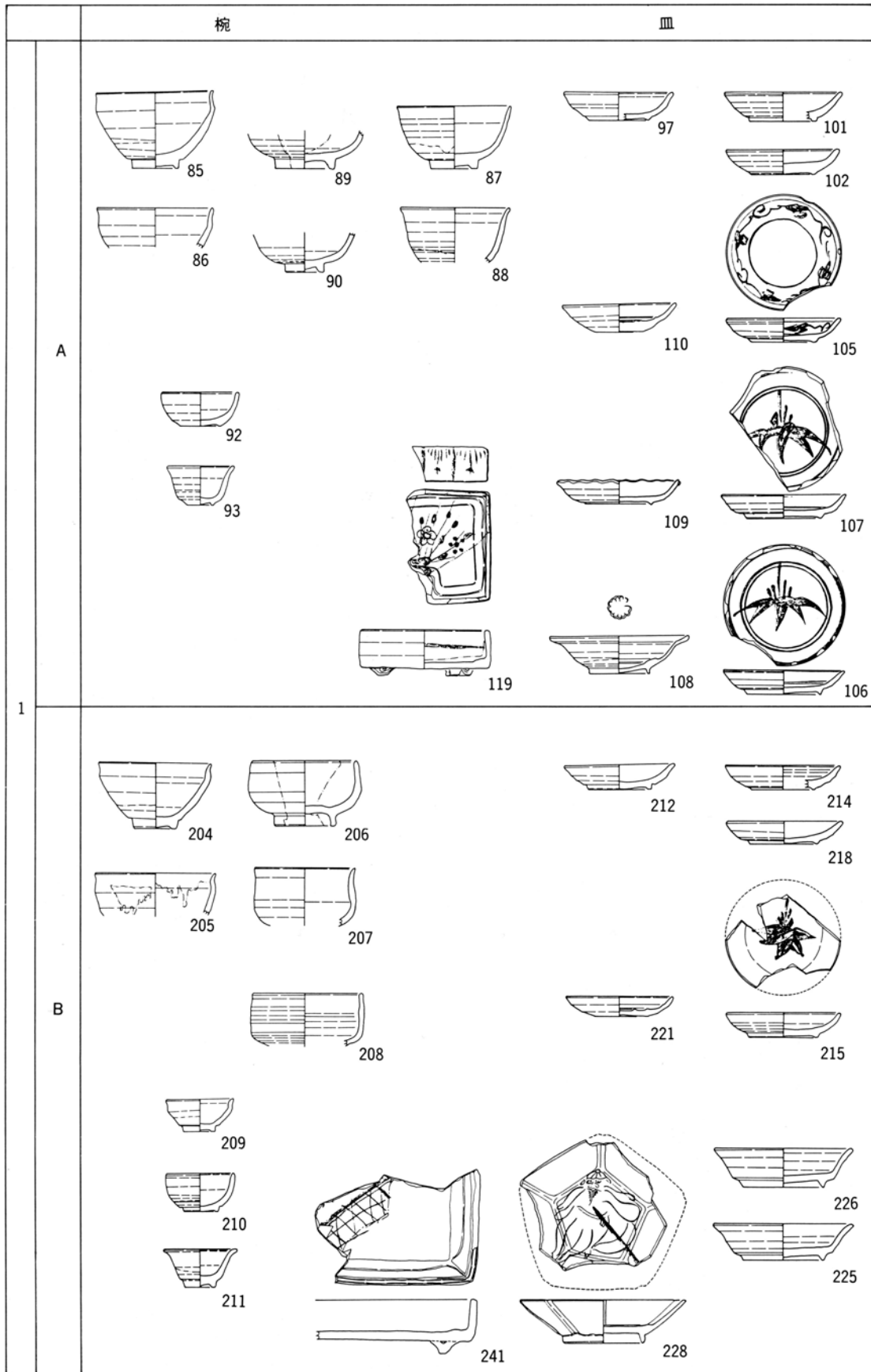
京焼風陶器の碗、皿が多く出土し、高台内中央の円圈の上や横に「清水」「木下弥」「森」の印が押捺され、碗は外面に皿は内面に「楼閣山水文」が描かれ、その上に朱色の上絵付が施された製品も出土しており、17世紀後半頃の製品である。

京焼風陶器とは別に、緻密な胎土で薄手の刷毛目装飾や蜃手装飾を施した現川の製品も出土している。

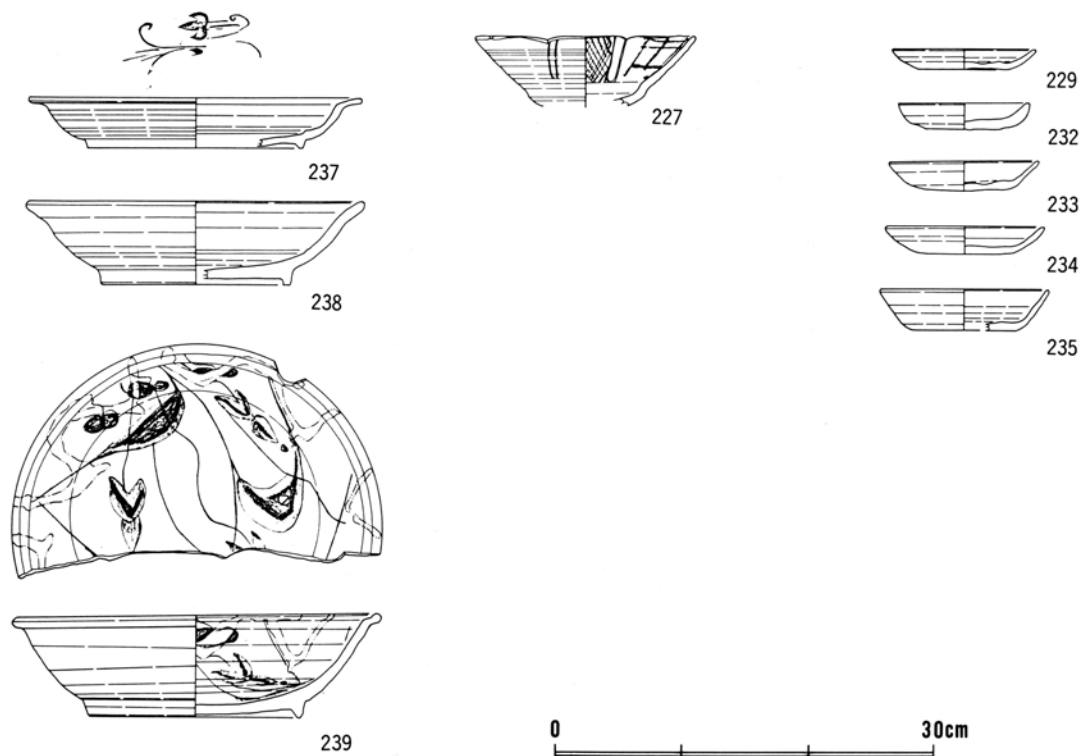
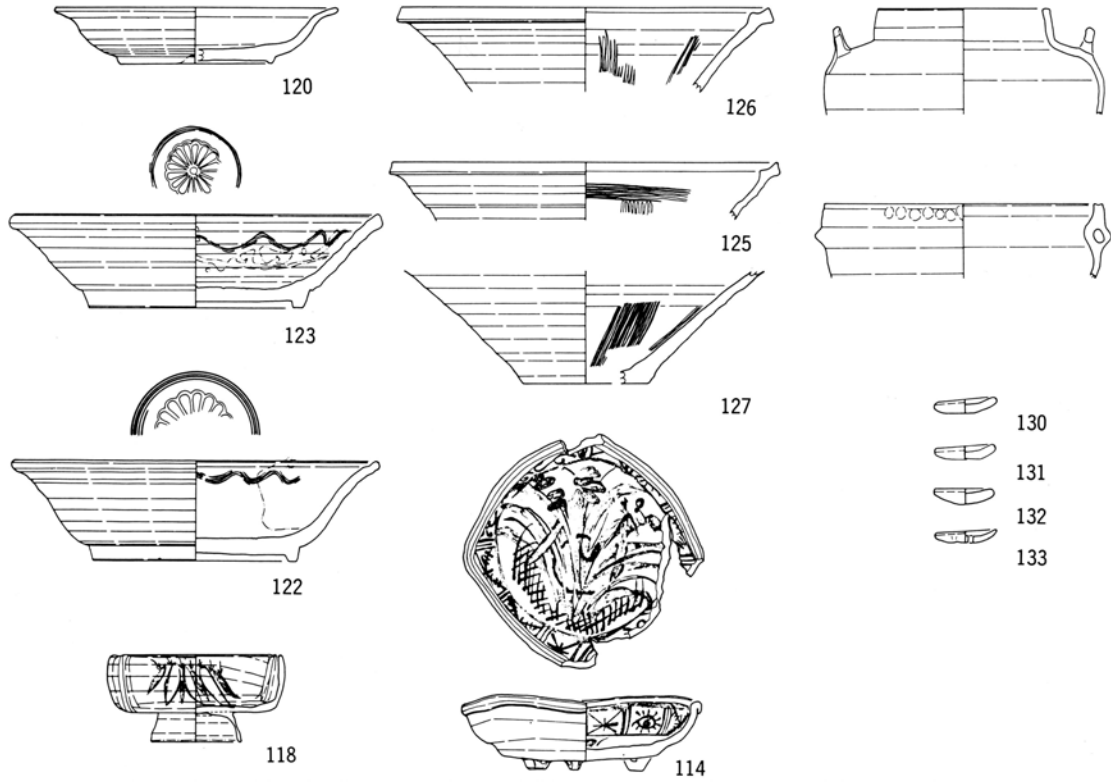
磁器製品も瀬戸と肥前の製品が出土しているが、肥前の磁器製品がやや多い。碗では、広東碗が見られなくなり、端反気味の碗と筒型の湯呑茶碗が目立ち、全体に小振りの碗となる。他の器種も豊富で、水滴や筒型碗の一部には赤絵が施されたものもある。磁器製品の中には焼継が施されたものも出土している。

焼塩壺は身A類が出土している。

(小澤一弘)



第125图 编年表 (1-①)



第126図 編年表(1-②)

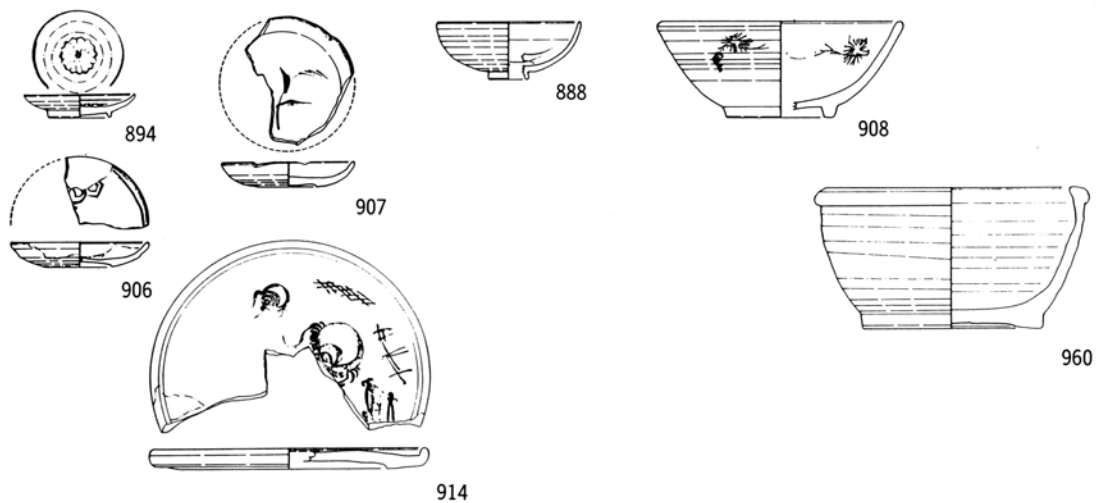
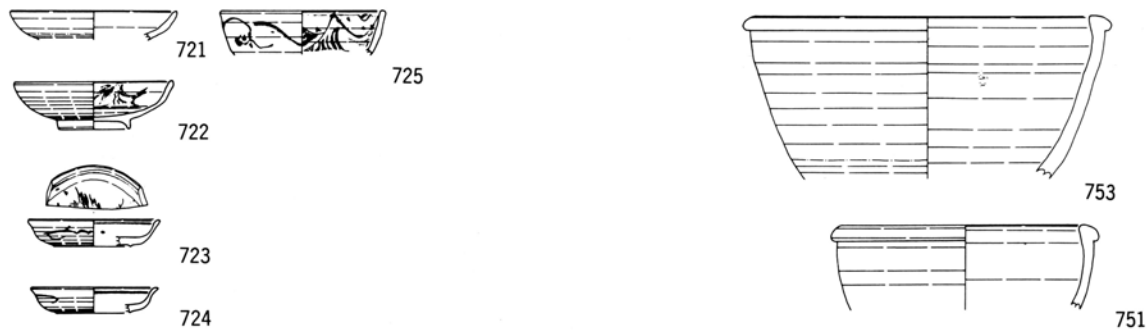
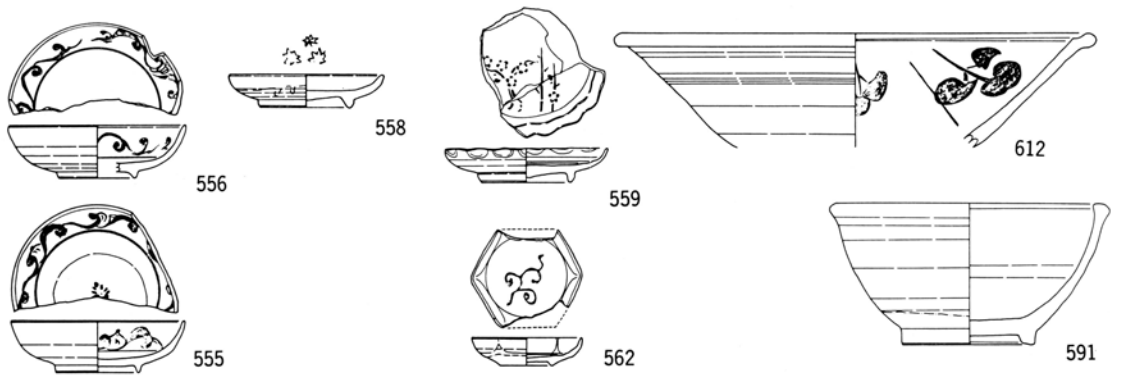
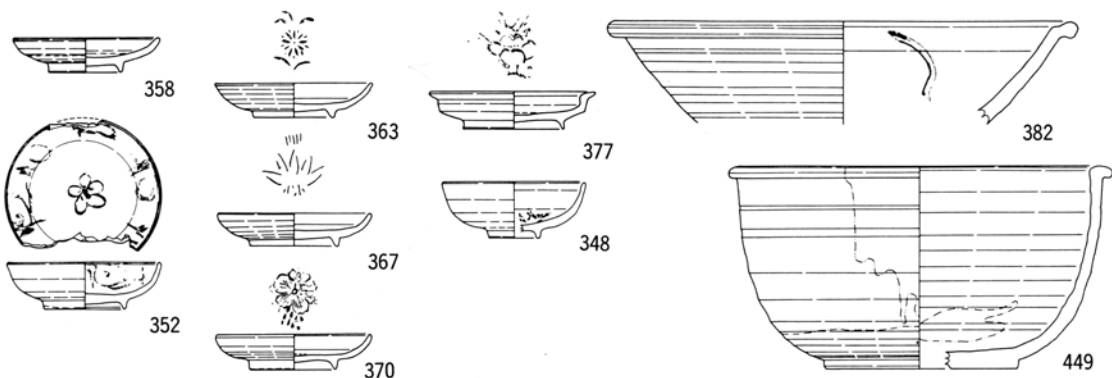
椀

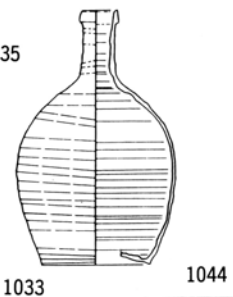
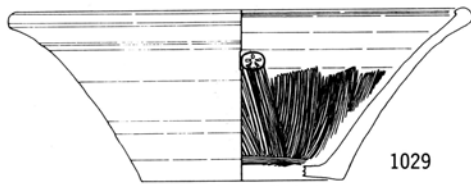
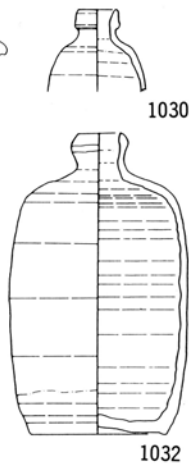
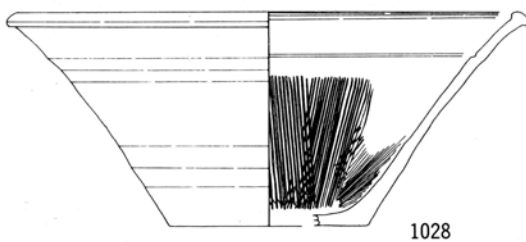
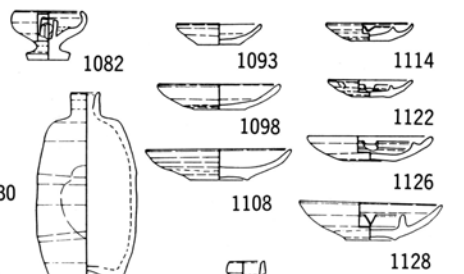
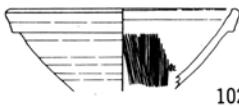
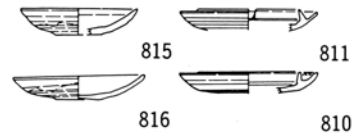
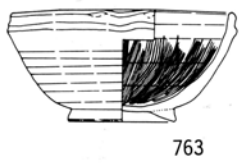
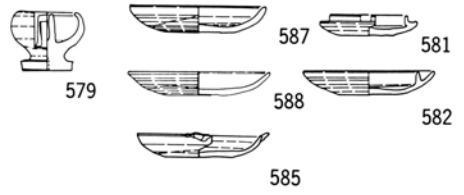
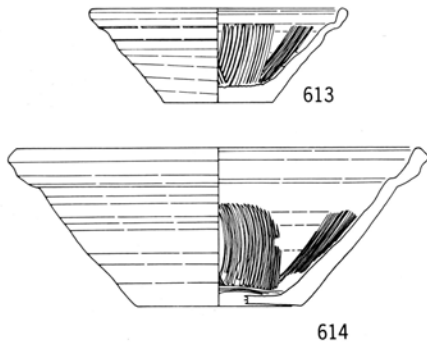
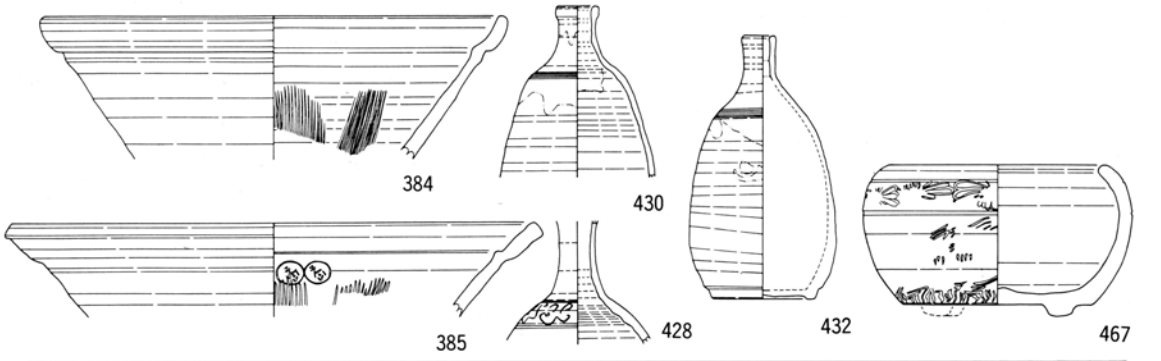
2	<p>A</p> <p>288 291 314 310 302 309</p> <p>287 292 315 311 303</p>
2	<p>B</p> <p>532 546 549 537 538 551 554</p> <p>536</p>
3	<p>A</p> <p>700 703 709 704 705 715 716 708 706 717</p>
3	<p>B</p> <p>877 878 879 891 890 880</p>

第127図 編年表(2-①)

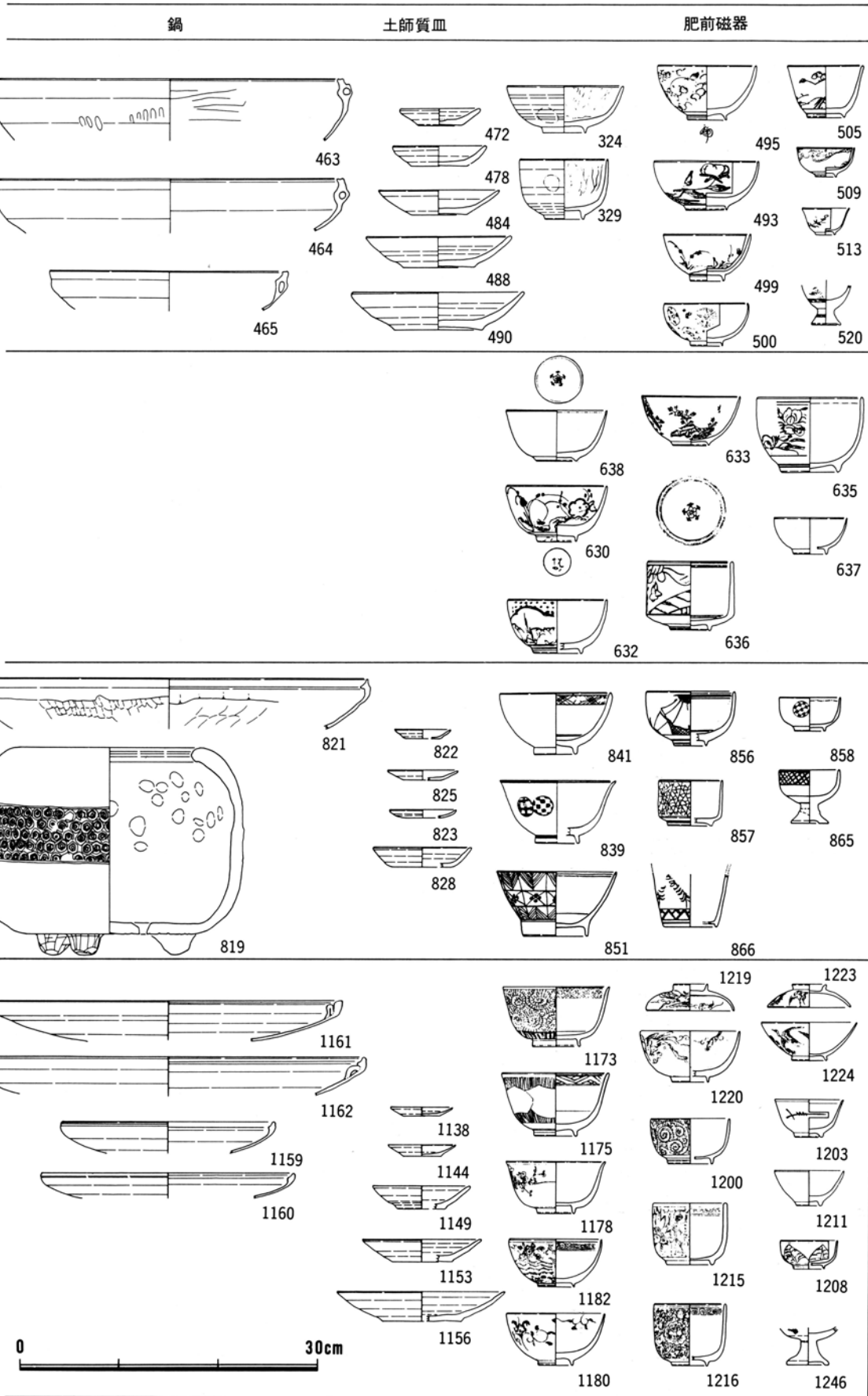
皿

鉢





第129図 編年表(2-③)



第130図

第130図 編年表(2-④)

第5表 器種別出土状況

器種	釉・産地	SK130	SK189	SX101	
椀	陶器	灰鉄釉	177	191	131
		鉄石	15	6	6
		長掛		14	47
		分け	8	10	52
	磁器	肥瀬	34	56	152
		前戸	1	10	144
		明		3	105
		小計	35 (2.5)	69 (3.2)	401 (9.9)
皿	陶器	灰摺	58	69	42
		須石	29	2	3
		焼	5	15	3
		風	4	12	16
	磁器	肥瀬	4		2
		前戸	6	4	26
		明			23
		小計	6 (0.4)	4 (0.1)	53 (1.3)
鉢	陶器	灰鉄		1	
		石	2		1
		釉			
		小計	2 (0.1)	1 (0.0)	1 (0.0)
	磁器	肥瀬			14
		前戸			1
		明			6
		小計			21 (0.5)
折縁鉢	灰肥	37		65	
	小計	39 (2.8)		65 (1.6)	
程鉢	灰鉄	7	15	22	
	小計	9 (0.6)	17 (0.8)	28 (0.6)	
片口鉢	灰鉄			2	
	小計			3 (0.0)	
播鉢	鉄石	147	111	243	
	小計	147 (10.5)	111 (5.2)	245 (6.0)	
土鍋	灰鉄	6	23	15	
	小計	6 (0.4)	27 (1.2)	58 (1.4)	
行平	灰			96 (2.3)	
	小計			96 (2.3)	
土瓶	灰鉄			14	
	小計			172 (4.2)	
急須	灰	2		42	
	小計	2 (0.1)		45 (1.1)	
蓋物	陶器	灰鉄	19	20	26
		石	6	5	32
		土			3
		小計	29 (2.0)	25 (1.1)	67 (1.6)
	磁器	肥瀬	5	7	14
		前戸			8
		明			4
		小計	5 (0.3)	7 (0.3)	26 (0.6)
水差し	灰鉄		2	3	
	小計	2 (0.1)	2 (0.0)	4 (0.0)	
油差し	鉄	2 (0.1)			
	小計	2 (0.1)			
壺	灰鉄	2	2	17	
	石	4	8	1	
	土		1	22	
	小計	6 (0.4)	11 (0.5)	89 (2.1)	
焼塩壺・蓋	無	9 (0.6)	3 (0.1)	8 (0.1)	

器種	釉・産地	SK130	SK189	SX101	
德利器	陶器	灰鉄	34	2	56
		掛分け	6	26	28
	磁器	肥瀬	1	3	3
		小計	41 (2.9)	31 (1.4)	98 (2.4)
神仏具	陶器	肥瀬	6	6	8
		小計	7 (0.5)	6 (0.2)	15 (0.3)
	磁器	肥瀬	1		3
		小計	1 (0.0)		3 (0.0)
香炉	陶器	灰鉄	3	1	2
		小計	3 (0.2)	1 (0.0)	3 (0.0)
	磁器	肥瀬	1	2	6
		小計	2 (0.1)	2 (0.0)	3 (0.0)
茶入れ	陶器	灰鉄	4		9
		小計	8 (0.5)		2
	磁器	肥瀬	1		2
		小計	1 (0.0)		3 (0.0)
茶壺	鉄	8 (0.5)		5 (0.1)	
風炉・涼呂	鉄		6 (0.2)		
灰落し	鉄	3 (0.2)		3 (0.0)	
香合	灰鉄	3		6	
	小計	3 (0.2)		1 (0.0)	
餅入	灰無	2	2	5	
	小計	3 (0.2)	2 (0.0)	5 (0.1)	
餅鉢	鉄	7 (0.5)		2 (0.0)	
餅播	鉄	13 (0.9)		3 (0.0)	
植木鉢	灰鉄	1	45	6	
	小計	2 (0.1)	49 (2.3)	5 (0.1)	
手水鉢	灰鉄		69	50	
	小計		69 (3.2)	4 (0.0)	
火鉢	鉄常		1	3	
	小計	20 (1.5)	1 (0.0)	3 (0.0)	
甕	鉄滑	5	8	45	
	小計	159 (11.8)	286 (13.9)	828 (21.5)	
半胴甕	鉄滑	43 (3.0)	121 (5.7)	101 (2.4)	
	小計	4 (0.2)	21 (0.9)		
疑盥	灰	2 (0.1)		1 (0.0)	
水滴	肥瀬		1	2	
	小計		1 (0.0)	1 (0.0)	
燈明具	陶器	鉄		2	
		小計	2 (0.1)	2 (0.0)	
	磁器	肥瀬	3		1
		小計	3 (0.2)		1 (0.0)
燈明皿	灰鉄	5	19	30	
	小計	5 (0.3)	19 (0.9)	21 (0.5)	
土師質皿	無	58 (4.1)	389 (18.4)	390 (9.6)	
内耳鍋・椀格	無	237 (17.0)	456 (21.6)	252 (6.2)	
直立釜	無	4 (0.2)			
七輪	無	18 (1.2)	32 (1.5)	146 (3.6)	
人子	形	22 (1.5)		96 (2.3)	
	小計	2 (0.1)		102 (2.5)	
土	形	9 (0.6)		40 (0.9)	
	小計	11 (0.7)	7 (0.3)	4 (0.0)	
その他				33 (0.8)	
総計		1389 (97.8)	2108 (98.2)	4046 (97.4)	

※ 数値は出土陶片を含む資料数で個体数ではない。
 ※ 瓦および16世紀以前の陶片は資料数に含んでいない。
 ※ () 内は百分率を示す。

2. 遺構と遺跡の変遷

今回の調査地周辺は、中世以前では「那古野荘」あるいは「那古野城」の所在地として、また近世では、「名古屋城」三の丸として、比較的多くの文献が残されている。以下、これらの史料と考古学的な調査成果を基に、遺跡の変遷を考えたい。

(1) 文献史料による調査地点

A. 「那古野荘」の時代

那古野荘は、安元1年(1175)頃、九条顕頼の子で東大寺別当の、小野顕恵を開発領主として成立した荘園である。立荘後、顕恵は本家職を建春門院に寄進し、鎌倉時代には、建春門院法花堂領として相伝されるが、南北朝の争乱のなかで崩壊したと考えられている。

荘域は不詳であるが、関係文書に「天主坊」、「万松寺」等とあることから、現在の三の丸、丸の内周辺を含む名古屋台地北部とされている。

B. 「那古野城」の時代

醍醐寺座主満済の『満済准后日記』の永享5年(1433)7月7日条には、今川下野所領として、「尾張那古屋」とあり、15C初頭には、今川氏の支配下にあったものと考えられているが、永正2年(1505)以前には、一担その手を離れた様である。

城が築かれるのは、大永4年(1524)頃、今川氏親によってであり、末子氏豊がその城主となっている。当時の城は、近世の二の丸あたりに位置し、城域は「八町四方」であったという。

この城が、織田信秀に奪取されるのは、天文1年(1532)のことであり、天文3年(1535)には、その長子信長もこの城で誕生している。この後、信長は、弘治1年(1555)清須へと移り、城は織田信光、次いで林通勝の支配となるが、天正10年(1582)頃には廃城となったとされている。

戦国期の那古野には、城周辺に、「今市場」「中市場」「下市場」があり、「天王社」「安養寺」などの寺社が存在し、「大工尾州名古屋住斎藤新左衛門正直」等の職人も居住しており、一定規模の「城下町」が形成されていたものと思われる。

『金城温古録』所収の「御城取大体之図」⁽¹⁾によれば、調査区付近は、琵琶島に至る街道に沿って、かなりの数の民家が描かれている。

C. 「名古屋城」の時代

調査地点は、三の丸内で、「中小路」と「太鼓櫓筋」の交点の北東角にあたり、「尾府名古屋図」⁽²⁾等によれば、(a)～(d)の4軒の屋敷地の存在が考えられる。この部分は、絵図などでみる限り、慶長年間から幕末に至るまで、目立った地割りの変化はみられないといってよい。

また、屋敷地内の建物についても、基本的には、「拝領」という形態であるため、居住者に変更が無い場合は勿論、転居の際にも、前住者の家宅をそのまま使用するのが一般的であったと考えられている。従って、近世を通じ、最も多かった屋敷地(a)で11家19代、少なかった屋敷地(b)でも4家11代の当主の入れ替りがあったにもかかわらず⁽³⁾、文献の上から「屋敷地」と「屋敷」に何らかの画期を設定することは困難と言わざるを得ない。

1. 築城以前

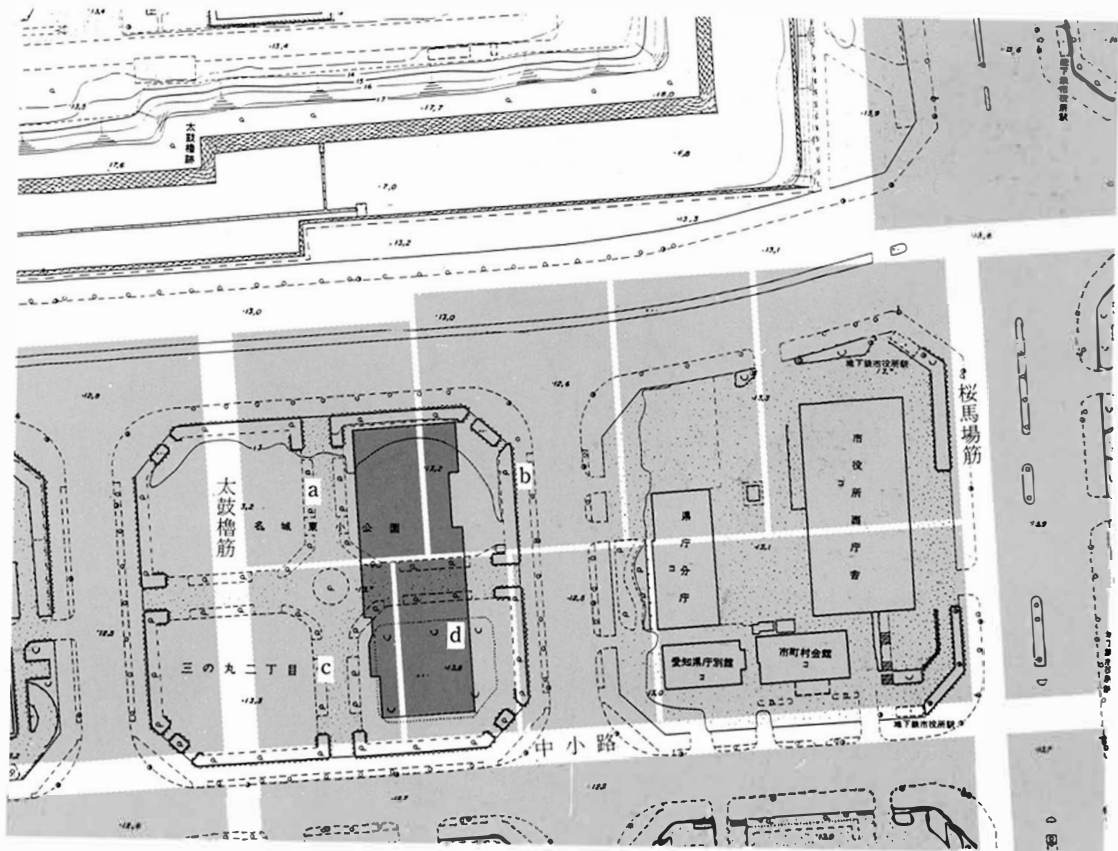
『金城温古録』所収
「御城取大体之図」

2. 三の丸形成期

『金城温古録』所収
「三の丸内邸宅古図」

3. 幕末期

『名古屋城史』所収
「名古屋城主要部」



第133図 調査区周辺の屋敷地の復原

第6表 屋敷地(a)~(d)居住者の変遷

屋敷地(a)	屋敷地(b)	屋敷地(c)	屋敷地(d)
松井 助左衛門 助左衛門	小笠原 土佐 与一右衛門	松平 文右衛門 三太夫 治郎右衛門	松井 庄之助 鈴木 兵藏 野崎 左近 宮内
鈴木 主殿 土屋 主水 新五左衛門	遠山 彦左衛門 重郎左衛門 重郎左衛門 百太郎 [※]	松井 三太夫 小山 市兵衛 市之丞	浜島 伊織 上野 市之助 市之助
久野 柰太夫 柰太夫	下条 庄右衛門 ^{※※}	横井 重郎左衛門 [※]	
成瀬 半太夫 竹之助	津田 悦三郎 左馬助 太郎左衛門 ○	中根 新六 松井 与兵衛 式部 上田 半右衛門 頼母 岩田 数馬 ^{※※} 金之丞 ○ ○ ○	生駒 三左衛門 熊谷 与兵衛 [※] 門太郎 河村 松三郎 ^{※※} 多門 小三郎 ○
中条 主水 *横井 頼母 [*] 河村 兵馬 渡辺 主馬 横井 伊折 鈴木 千七郎 ^{※※} 嘉十郎 ○ ○ ○			

※ 「名古屋図」(享保18年頃)による居住者

※※ 「尾州名古屋御城下之図」(明和~安永年間)による居住者

(2) 遺構の変遷

調査により確認された遺構群は、築城以前で4段階、近世三の丸期で2段階に区分し得た。

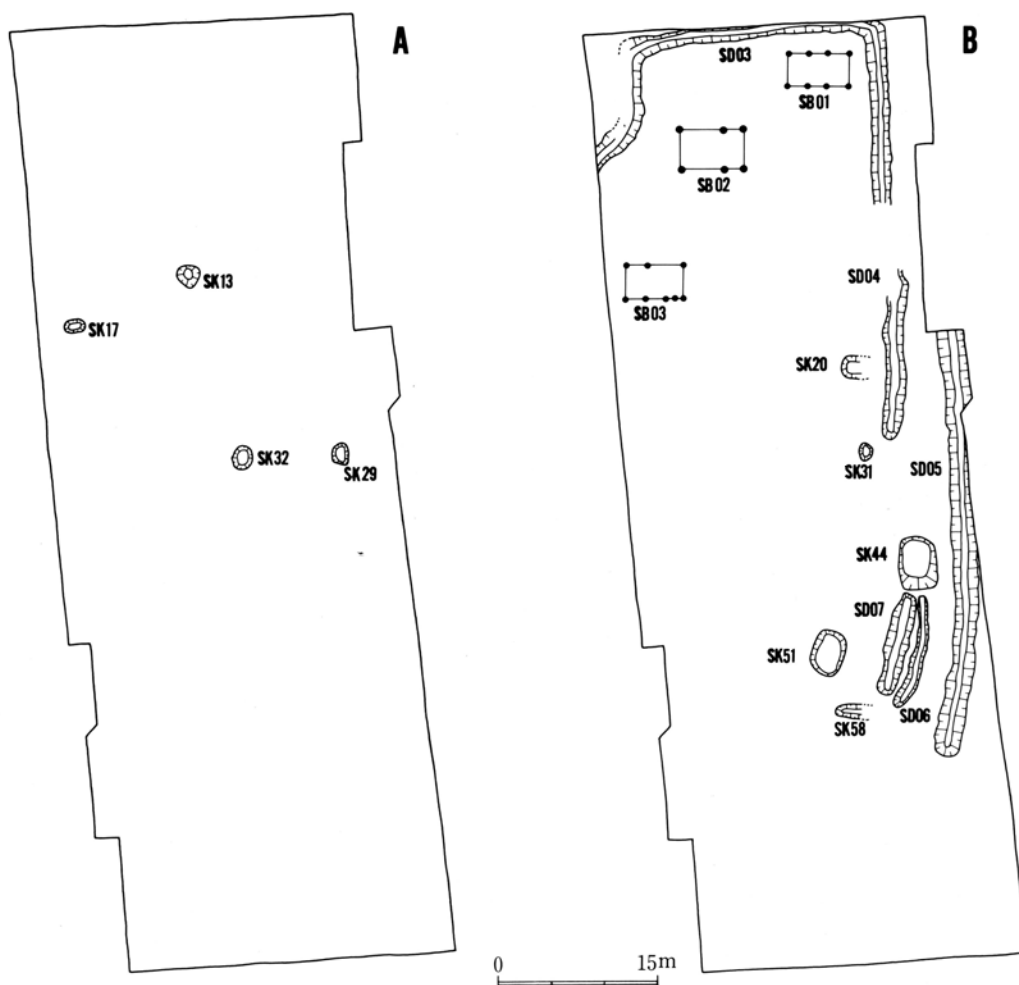
1 築城以前

A期 用途不明の土坑SK13・17・29・32等が散在する時期。遺構の配置に特定の傾向は見出せない。遺物の編年ではI-1期、14C後半代が考えられる。

B期 コ字状に屈曲する溝SD03、及びその延長と考えられるSD04、これと平行しやや規模の大きいSD05、土坑では、SK44・51等の時期である。また、遺物からの確認はし得なかったが、恐らく、建物SB01~03、土坑状の溝SD06・07もこの時期に属すると考えられる。

溝群は、形状から単なる排水用ではなく、防衛施設としての機能を有するものと考えられ、「居館」の堀に比定することができる。

遺物の編年では、I-2期1段階、15C前半代を想定し得る。



第134図 遺構の変遷(1)

C a 期 溝 S D 08・09、井戸 S E 05、土坑 S K 47・57・66等の時期である。また、大溝 S D 01もこの頃「薬研堀」として開削されたものと考えられる。溝 S D 04～07は、埋土中に、基盤となる熟田層の黄褐色シルト、あるいは黄白色の粘土ブロックを多量に含んでおり、恐らくこの大溝の開削に伴い埋め戻されたものであり⁽⁴⁾、大溝の南側を中心に、かなり大規模な整地が行なわれたようである。大溝 S D 01は、城郭の「堀」と考えるのが妥当であり、また、韃の羽口が出土する土坑(S K 47)の存在等から、小規模ながら、「鍛冶」の存在も推定できる。

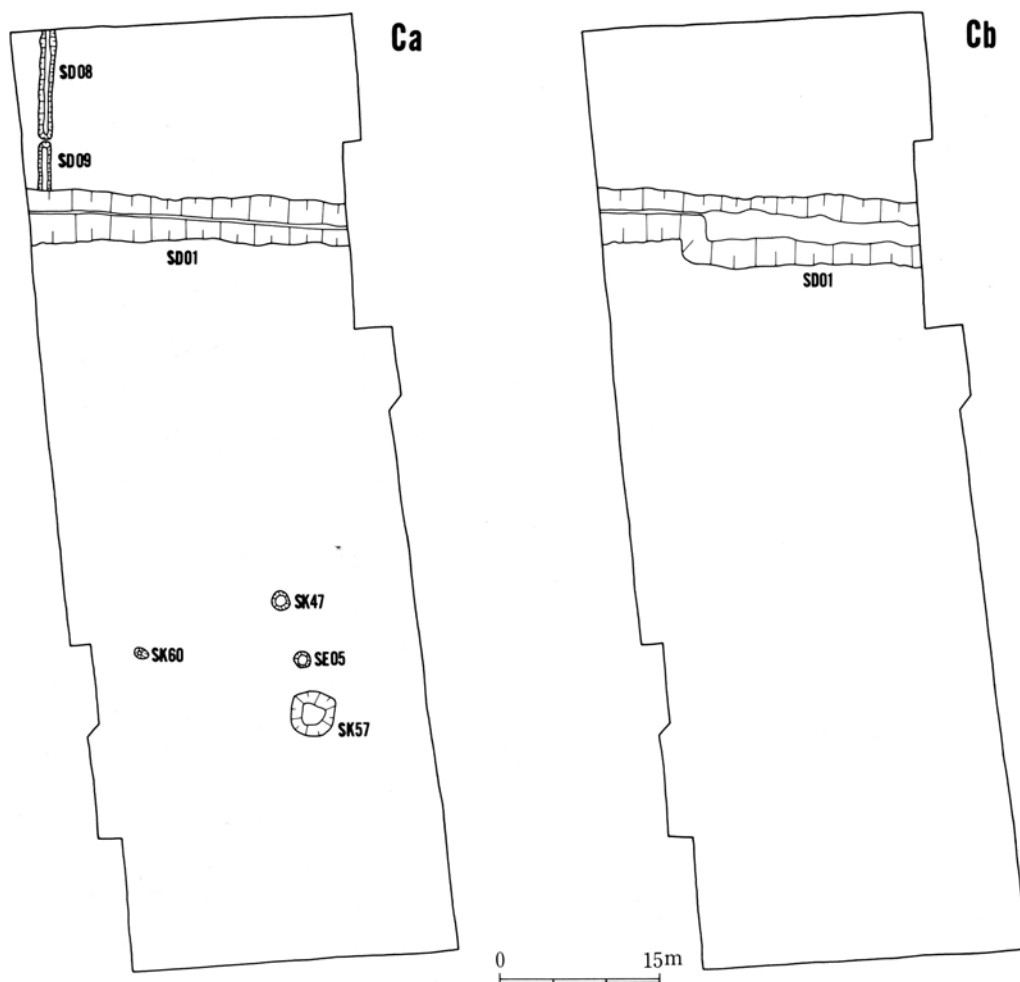
遺物の編年では、I-2期2段階、15C末～16C初頭を考えることができる。

C b 期 堀 S D 01が「薬研堀」から、一部分「箱堀」に改修される。他の遺構は消滅し、堀の周辺は、「広場」状となり、非日常的な空間となる。

遺物の編年では、I-2期3段階、16C中葉を想定し得る。

2 近世三の丸期

D a 期 柱穴列 S A 109・110・111及びこれに平行する小規模な溝 S D 107～111のみがみられる時期、



第135図 遺構の変遷(2)

これらの遺構群は、堀SD01の埋土を覆う暗褐色のシルト層の上面から掘削されるものの、層位的には、三の丸期と考えられる他のあらゆる遺構よりも古い。またこれらは、近世の大多数の遺構が、N-6°-Wの方向を取るのに対し、N-2°-Wの方向性を有しており、その点でも特異な遺構とすることができる。

存在時期は、17C初頭のごく限られた期間を考えることができる。

D b 期 三の丸期の遺構の大半が含まれる。調査区内は、東西方向の溝SD102、及び礎石列SA103、南北方向の溝SD117・114・115で四分割され、屋敷地(a)～(d)となる。時期的には、17C前半～幕末までのかなり長期間にわたる。

屋敷地(a) 調査地点は敷地内の南東部にあたる。北半は井戸の存在が目立ち、18基を数える。また南半は当初廃棄土坑SK130等が掘削されるが、後には、門SB101、及び竪穴建物SX101が設けられる。

屋敷地(b) 北に竪穴施設SX103が設けられ、南隅には、廃棄土坑群が掘削される。

屋敷地(c) 北部には、東西方向の溝が集中し、南半は、廃棄土坑群が形成される。



第136図 遺構の変遷(3)

屋敷地（d） 最もまとまった面積を調査し得た屋敷地。南半に廃棄土坑群が形成され、北半には、かなり大規模な建物の存在が推定できる。

調査地点は、4軒の屋敷地のいずれも最奥部に近い場所にあっており、これは結果として、廃棄土坑群の形成という形で示されている。これらの土坑群は、いずれも、一定範囲内でくり返し掘削されているが、これは、屋敷地内における建物と空間との関係が、b期を通じて、ほとんど変化がなかった為と思われる。

（3） 遺構と遺跡の画期

調査により確認された各時期の遺構群は、前項で示した通り、4時期6段階の変遷をたどることができる。本項では、各段階の遺構の性格の分析から、遺跡の画期の設定を試みたい。

A期（荘園期）

調査区内には、土坑が散在するのみであり、特定の傾向は見出せない。集落の一部に相当すると思われる。

年代的には「那古野荘」の解体期にあたり荘園内の集落の一部にあたると思われる。

B期（居館期）

溝を巡らす「居館」が形成される時期であり、文献上でも14C末～15C初頭と考えられていた今川氏の「那古野荘」進出に対応させることが可能である。

居館の全容は把握し得なかったが、単純な方形プランではなく、複数の区画を有するかなり大規模なものを想定することができる。

C期（中世城郭期）

堀が掘削され「城郭」が形成される時期である。a・bの2小期に区分できる。

a期 大溝S D01が、「薬研堀」として掘削される時期であり、大永1年（1522）頃とされる「那古野城」の築城に対応させることが可能である。

調査地点が、城郭のどの部分に相当するか不明であるが、堀の北側には小区画を形成する溝S D08・09が存在し、また南側にも鍛冶関係の遺物が出土した土坑S K47がみられることから、調査区全体が郭内に含まれる可能性が高い。

b期 大溝S D01が「薬研堀」から「箱堀」に改修され、周辺が「広場」として確保される等、防衛力の強化が図られる時期である。

文献によれば、織田信秀が、天文1年（1532）頃、今川氏から城を奪取することに成功しており、これに伴う修築と考えることも可能である。

D期（近世城郭期）

C期から若干の断絶期間をおいて、近世城郭としての「名古屋城」三の丸が形成される時期に相当する。C期と同様、a・bの2小期に区分される。

a期 近世の地割方向とやや異なるN-2°-Wの方向性を有する溝、柱穴列で構成される。この遺構群の存続期間は、17C初頭のごく限られた時期であり、遺構自体も小規模なものであることから、三の丸整備段階における何らかの仮の施設に伴うものと考えられる。

b期 17C中葉～19C中葉とかなり長期にわたる期間を設定し得る。遺構も多種多様であり、量的にも他の時期を圧倒するが、その配置は非常に固定的といえる。

現在残されている絵図等においても、調査地点は一貫して、4軒分の武家屋敷の裏側に相当しており、長期にわたる安定的な土地利用を想定することができる。

(4) 小結

今回の調査では、前節までに示した様に、中世～近世の多くの遺構、遺物を確認することができた。以下、調査の成果について簡単にまとめ、結語としたい。

1. 遺構群の変遷のうち、B期からC期、即ち、「居館」から「城郭」への変化は、あまり時間的な断絶を得ずに行なわれている。台地上における両者の関係を示す良好な例といえよう。
2. D-a期、即ち、三の丸整備に伴い形成されたと考えられる遺構群の存在は、注目すべきものといえる。これまでも、名古屋市教育委員会による三の丸東南隅部分の調査⁽⁵⁾において、これらとほぼ同じ方向性を有し、「屋敷割以前の土地区画に伴う」と考えられる溝が検出されており、これで、成立期の三の丸には、D-b期と異なる地割がかなり広い範囲で存在したことが確認できたといえる。築城作業それ自体が、どの様な方法で行なわれたか、あるいはどの様な施設が設けられたのか等が今後の検討課題といえよう。
3. 変化の少ないD-b期の遺構の中で、屋敷地 a・b と c・d の間の東西の背割り線はやや特異な変遷をとげている。

この境界は、当初、最大幅3m程の「溝」で示されているが、最終段階では、礎石を用いた「屏」へと移り変わっている、即ち当初は、背割排水路を挟み、南北の武家屋敷が独立して存在しているのに対し、後には、境界の屏を「共有」する関係へと変化しているとみなすことができるのである。

この変化は、単に、排水経路の変更といったことに止まらず、明らかに、武家屋敷の「独立性」の喪失を示すものであり、見方を変えれば、戦国期において、それぞれ「在所」を有する家居団の出仕先における居館の集合体として出発した、城下町における「武家屋敷」の最終的な到達点を示すものともいえる。

名古屋城三の丸に居住した尾張藩の家臣団は、名目的には「知行取」でありながら、実際には在地性を失ない、藩への従属性を強め「官僚」化し、従って、その屋敷も、官僚としての役職に対応する「官舎」的性格を強めていったものと思われる。調査の結果に示された、屋敷地の長期的、安定的土地利用もこれを反映した現象とすることができよう。(梅本博志)

註

- (1) 『金城温古録』凡例編(『名古屋叢書続編第13巻』1984)
- (2) 宝永6年(1709)頃の写と考えられる。名古屋市蓬左文庫蔵
- (3) 『名古屋市史』地理編(1926)
- (4) 黄白色の粘土は、調査地点付近では、熟田層上面より概ね1m以上掘削しないと露出せず、従って、この粘土のブロックが大量に混入する為には、相当規模の掘削が前提となる。
- (5) 名古屋市教育委員会『名古屋城三の丸遺跡』(1989)

参考文献

- 赤羽一郎 1984 『常滑焼』
阿部直輔 『尾藩世記』（名古屋市蓬左文庫編 1987『名古屋叢書三編』第2・3巻所収）
- 有田町史編纂委員会 1988 『有田町史』古窯編
江戸遺跡研究会 1988 『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会第1回大会発表要旨
1989 『江戸の住空間とその周辺』 江戸遺跡研究会第2回大会発表要旨
1990 『江戸の陶磁器』 江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』
奥村得義 1858 『金城温古録』（名古屋市教育委員会編 1965～67 『名古屋叢書続編』13～16巻所収）
- 加藤唐九郎編 1962 『原色陶器大辞典』
角川日本地名大辞典編纂委員会 1989 『角川日本地名大辞典23愛知県』
喜多川守貞 『守貞漫稿』
- 九州陶磁文化館編 1984 『国内出土の肥前陶磁』
古泉弘 1987 『江戸の考古学』
児玉幸多・坪井清足監修 1981 『日本城郭大系』別巻I・II
五島美術館編 1984 『江戸のやきもの』
高橋康夫・吉田伸之編 1989 『日本都市史入門』I・II・III
東海埋蔵文化財研究会 1988 『清須・資料編』
内藤昌編 1985 『名古屋城』
永原慶二他編 1984 『窯業』講座・日本技術の社会史4
名古屋市 1915 『名古屋市史』
1959 『名古屋城史』
- 檜崎彰一監修 1976 『美濃の古陶』
林英夫編 1987 『図説愛知県の歴史』
林英夫他編 1981 『愛知県の地名』日本歴史地名大系23
松平君山 1747 『士林派回』（名古屋市教育委員会編 1968～68 『名古屋叢書続編』第17～20巻所収）
- 矢守一彦編 1987 『城下町の地域構造』日本史研究叢書12

付 表

凡 例

()	残存・現存値
[]	推定値
—	計測・観察不能

遺 構 表

下層（I期）の遺構

建 物 (SB)	遺 構 番 号	規 模(m)		長軸方向	備 考	時 期	登 番 録 号
		長辺	短辺				
	SB 01	5.7	3.2	E-0°-N	東西3間×南北1間の堀柱建物 面積18.2㎡	I	SB 01
	02	5.9	3.9	E-0°-N	〃 〃 23.0㎡	〃	02
	03	5.4	3.3	E-0°-N	〃 〃 17.8㎡	〃	03

柵 列 (SA)	遺 構 番 号	規 模(m)		方 向	群	備 考	時 期	登 番 録 号
		柱穴数	延長					
	SA 01	4	27.0	E-3°-N	東西 A		I	—
	02	3	7.8	E-2°-N	〃		〃	—
	03	6	15.1	E-23°-S	東西 B		〃	—
	04	3	2.6	E-23°-S	〃		〃	—
	05	3	3.8	E-23°-S	〃		〃	—
	06	3	1.8	E-25°-S	〃		〃	—
	07	7	13.0	N-4°-W	南北 A		〃	—
	08	4	9.4	N-4°-W	〃		〃	—

溝 (SD)	遺 構 番 号	規 模(m)		方 向	底部の傾斜	類 型	備 考	時 期	登 番 録 号
		幅	深さ						
	SD 01	6.8	3.0	E-3°-S	ほぼ水平	A		I	SD 51
	02	0.4	0.2	E-12°-N	〃	C		〃	—
	03	1.8	1.0	E-5°-S	東→西	B	コ字状に屈曲・東側南北部分ではN-2°-W	〃	53
	04	1.8	1.2	N-1°-E	北→南	〃	SD03と同一か	〃	64
	05	2.5	1.7	N-3°-W	南→北	〃		〃	61
	06	1.3	1.0	—	北→南	〃		〃	63
	07	2.1	1.0	N-14°-E	ほぼ水平	〃		〃	62
	08	1.5	0.8	N-2°-E	〃	〃		〃	52A
	09	1.1	0.5	N-2°-E	〃	〃		〃	52B
	10	1.0	0.2	—	〃	C		〃	54
	11	0.7	0.3	—	南→北	〃	SD10と同一か	〃	54
	12	0.2	0.1	N-0°-E	ほぼ水平	〃		〃	55
	13	0.2	0.3	N-6°-W	〃	〃	SD12と同一か	〃	55

井 戸 (SE)	遺 構 番 号	規 模(m)		備 考	時 期	登 番 録 号	遺 構 番 号	規 模(m)		備 考	時 期	登 番 録 号
		長径	短径					長径	短径			
	SE 01	1.5	1.4		I	SE 51	SE 04	0.9	—		I	SE 53
	02	1.2	1.0		〃	58	05	1.6	1.4		〃	52
	03	2.7	1.8		〃	55						

土 堀 (SK)	遺 構 番 号	規 模(m)			備 考	時 期	登 番 録 号	遺 構 番 号	規 模(m)			備 考	時 期	登 番 録 号
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
	SK 01	(1.0)	1.0	0.1		I	SK317	SK 16	1.2	0.9	0.7		I	SK356
	02	(1.4)	1.4	0.1		〃	318	17	1.4	1.2	1.1		〃	348
	03	1.4	1.2	0.1		〃	316	18	3.5	(1.3)	0.7		〃	324
	04	1.4	1.1	0.4		〃	304	19	1.1	1.0	0.5		〃	352
	05	1.2	0.9	0.1		〃	305	20	(2.1)	(1.9)	0.7		〃	347
	06	2.4	(1.5)	0.3		〃	303	21	2.5	1.2	0.4		〃	377
	07	1.5	1.1	0.1		〃	314	22	(1.3)	(0.7)	0.2		〃	379
	08	(1.5)	(1.1)	0.1		〃	315	23	(1.5)	(0.7)	0.3		〃	349
	09	1.4	0.8	0.2		〃	309	24	1.7	1.4	0.4		〃	364
	10	0.9	0.8	0.1		〃	302	25	1.3	(1.0)	0.1		〃	123
	11	1.6	1.5	0.1		〃	301	26	1.5	1.1	0.4		〃	102
	12	(4.1)	3.8	1.0		〃	328	27	1.9	1.8	1.4		〃	131
	13	2.3	2.2	1.0		〃	306	28	2.3	1.9	0.4		〃	365
	14	1.3	0.9	0.2		〃	334	29	2.1	1.4	0.4		〃	366
	15	2.0	0.8	1.0		〃	335	30	2.3	(1.3)	1.2		〃	357

遺構番号	規模(m)			備考	時期	登録番号	遺構番号	規模(m)			備考	時期	登録番号
	長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
SK 31	1.5	(1.2)	0.3		I	SK370	SK 49	3.9	2.3	0.4		I	SK332
32	2.1	2.0	0.9		"	368	50	3.0	(0.8)	0.4		"	344
33	3.4	(2.2)	0.4		"	371	51	(3.8)	3.2	0.7		"	341
34	(2.8)	(2.1)	0.3		"	372	52	1.8	(1.1)	0.9		"	333
35	(4.7)	3.0	0.6		"	337	53	2.8	1.8	0.5		"	326
36	3.9	3.7	0.3		"	353	54	3.6	(1.5)	0.7		"	351
37	2.7	(1.0)	0.2		"	362	55	2.2	(1.5)	0.2		"	338
38	2.4	(0.9)	0.4		"	361	56	1.6	1.1	0.2		"	350
39	1.6	(0.4)	0.2		"	—	57	4.5	4.0	1.1		"	464
40	1.3	(1.2)	0.2		"	—	58	(2.5)	1.3	0.4		"	466
41	1.8	0.8	0.1		"	—	59	1.4	1.3	0.55		"	467
42	1.2	1.0	0.3		"	359	60	1.3	1.0	0.5		"	321
43	2.0	1.5	0.3		"	378	61	(2.3)	2.1	0.3		"	458
44	5.2	3.5	—		"	367	62	(3.5)	1.1	0.4		"	SD101
45	(3.0)	1.6	0.3		"	374	63	5.2	1.2	1.0		"	102
46	1.4	1.2	0.2		"	373	64	3.3	(2.0)	0.6		"	SK452
47	1.6	1.6	0.8		"	43	65	1.9	(0.8)	0.5		"	465
48	2.1	1.5	0.3		"	354	66	—	—	—		"	375

上層 (II期) の遺構

建物
(SB)

遺構番号	規模(m)			長軸方向	群	備考	時期	登録番号
	長辺	短辺	深さ					
SB101	5.9	2.7	—	N-6°-W	南北A		II	SX 01
102	6.2	4.2	—	N-5°-W	"		"	—

竪穴施設
(SX)

遺構番号	規模(m)			長軸方向	群	備考	時期	登録番号
	長辺	短辺	深さ					
SX101	8.0	7.5	1.8	N-5°-W	南北A		II	SX 04
102	3.3	2.7	2.8	E-5°-N	東西A		"	62
103	9.7	3.0	0.8	N-30°-W	南北B		"	29

柵列
(SA)

遺構番号	規模(m)		方向	群	備考	時期	登録番号
	柱数	延長					
SA101	5	5.9	E-6°-N	東西A		II	
102	3	4.0	E-6°-N	"	全て礎石 (河原石)	"	SX 03
103	(14)	(30.0)	E-6°-N	"		"	
104	5	11.5	E-2°-N	東西B		"	
105	7	9.4	E-5°-N	東西A	一カ所のみ礎石 (角礎)	"	
106	5	10.0	E-29°-N	—		"	
107	3	4.0	E-2°-S	東西B		"	
108	4	4.2	E-5°-N	東西A		"	
109	5	7.5	N-2°-W	南北B		"	
110	10	12.5	N-2°-W	"		"	
111	7	10.0	N-6°-W	南北A		"	
112	5	3.0	N-4°-W	"		"	
113	5	5.0	N-6°-W	"	一カ所のみ礎石 (角礎)	"	
114	4	6.5	N-5°-W	"	三カ所礎石 (角礎)	"	
115	3	2.8	N-2°-W	南北B		"	
116	4	5.6	N-1°-W	"		"	
117	5	5.8	N-6°-W	南北A	二カ所礎石 (角礎)	"	
118	4	6.2	N-23°-E	—		"	

溝
(SD)

遺構番号	規模(m)		方向	底部の傾斜	群	備考	時期	登録番号
	幅	深さ						
SD101	1.2	0.8	E-5°-N	ほぼ水平	東西A		II	SD 01
102	2.0	1.0	E-6°-N	中央部最深	"		"	05
103	1.0	1.2	E-9°-N	ほぼ水平	—		"	04
104	0.6	0.3	E-5°-N	西→東	東西B		"	13

溝 (SD)

遺番 構号	規 模(m)		方 向	底部の傾斜	群	備 考	時 期	登 録 番 号
	幅	深さ						
SD105	0.8	1.0	E-6°-N	ほぼ水平	東西A		II	SD 07
106	0.7	0.1	E-1°-N	西→東	—		〃	09
107	0.3	0.1	E-2°-W	ほぼ水平	南北B		〃	26
108	0.3	0.1	N-2°-W	〃	〃		〃	—
109	0.2	0.1	N-2°-W	〃	〃		〃	—
110	0.3	0.2	N-2°-W	〃	〃		〃	17・20
111	0.5	0.2	N-2°-W	〃	〃		〃	—
112	0.3	0.1	N-2°-E	ほぼ水平	—		〃	19
113	0.3	0.1	N-2°-W	〃	南北B		〃	19
114	0.7	0.5	N-5°-W	南→北	南北A		〃	23
115	—	0.4	N-5°-W	ほぼ水平	〃		〃	—
116	0.5	0.2	N-5°-W	〃	〃		〃	22
117	1.2	1.1	N-5°-W	〃	〃		〃	08

井 戸 (SE)

遺番 構号	規 模(m)		類型	備 考	時 期	登 録 番 号	遺 構 番 号	規 模(m)		類型	備 考	時 期	登 録 番 号
	長径	短径						長径	短径				
SE101	1.3	1.3	A		II	SE 31	SE120	1.0	0.9	A		II	SE 32
102	1.2	1.0	〃		〃	103	121	1.3	1.2	〃		〃	18
103	1.1	1.0	〃		〃	17	122	2.7	2.4	B		〃	13
104	1.1	0.9	〃		〃	15	123	1.7	1.4	A		〃	54
105	0.9	0.9	〃		〃	25	124	1.3	—	〃		〃	101
106	1.1	1.0	〃		〃	26	125	1.1	1.0	〃		〃	102
107	1.0	0.9	〃		〃	22	126	1.1	1.0	〃		〃	19
108	1.0	0.8	〃		〃	21	127	0.9	0.9	〃		〃	20
109	1.0	1.5	〃		〃	16	128	2.6	2.1	B		〃	01
110	0.9	0.9	〃		〃	29	129	1.7	1.5	A		〃	07
111	1.0	0.9	〃		〃	24	130	2.8	1.9	B		〃	06
112	1.3	1.1	〃		〃	27	131	3.6	1.7	〃	掘り方 共有	〃	10
113	1.0	0.8	〃		〃	30	132		1.7	〃		〃	11
114	1.5	1.3	〃		〃	28	133	1.0	1.0	A		〃	03
115	1.4	1.0	〃		〃	14	134	2.0	1.9	B		〃	08
116	1.5	1.3	〃		〃	23	135	0.9	0.9	〃		〃	33
117	1.5	1.4	〃		〃	56	136	1.4	1.3	〃		〃	57
118	1.2	1.1	〃		〃	104	137	1.1	1.0	〃		〃	12
119	1.4	1.2	B		〃	05							

転 置 甕 (SX)

遺番 構号	規 模(m)			備 考	時 期	登 録 番 号
	長径	短径	深さ			
SX111	1.0	0.9	0.4	常滑鉢	II	鉢 2
112	0.6	—	0.6	常滑甕	〃	3
113	—	—	0.6	常滑鉢	〃	4
114	—	—	—	常滑甕+瀬戸植木鉢	〃	5

土 坑 (SK)

遺番 構号	規 模(m)			備 考	時 期	登 録 番 号	遺 構 番 号	規 模(m)			備 考	時 期	登 録 番 号
	長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
SK101	3.1	2.7	0.3		II	SK 35	SK116	4.6	2.6	0.1		II	SK114
102	2.9	1.9	1.0		〃	36	117	3.7	3.3	2.2		〃	60
103	5.8	1.0	0.4		〃	215	118	3.0	1.9	1.1		〃	37
104	3.6	2.1	0.1		〃	109	119	2.5	2.2	1.5		〃	22
105	1.9	1.1	0.7		〃	02	120	3.8	2.2	1.5		〃	22
106	2.2	1.6	0.2		〃	119	121	2.7	1.9	0.2		〃	SE 02
107	2.7	2.2	0.2		〃	127	122	1.4	0.6	0.2		〃	SK346
108	2.3	1.3	0.1		〃	115	123	1.3	0.6	0.2		〃	136
109	1.6	0.6	0.1		〃	111	124	2.2	0.8	0.4		〃	46
110	1.7	0.8	0.1		〃	118	125	3.0	1.0	0.4		〃	104
111	1.5	1.3	0.2		〃	28	126	2.2	1.8	0.6		〃	61
112	4.7	3.4	0.9		〃	25・26	127	4.3	1.1	0.4		〃	SD 12
113	2.9	2.0	1.1		〃	27	128	4.6	2.1	0.2		〃	SK103
114	5.2	4.0	0.3		〃	28	129	1.5	1.0	0.1		〃	101
115	3.5	2.5	0.8		〃	30	130	4.6	4.5	0.9		〃	24

遺構 番号	規 模(m)			備 考	時 期	登 録 番 号	遺 構 番 号	規 模(m)			備 考	時 期	登 録 番 号
	長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
SK131	—	(2.1)	0.1		II	SK214	SK168	1.9	1.7	0.9		II	SK 18
132	1.5	1.0	1.4		"	15	169	2.1	1.8	0.9		"	08
133	3.1	0.5	0.1		"	SD 10	170	4.2	2.6	0.9		"	208
134	5.5	1.6	1.1		"	SK 25	171	2.2	2.0	1.0		"	70
135	1.7	1.5	1.2		"	17	172	2.9	2.0	0.1		"	208
136	4.0	1.4	1.0		"	16	173	5.8	4.2	1.3		"	10
137	2.2	1.4	1.0		"	19	174	2.4	1.2	0.4		"	210
138	3.1	2.4	1.0		"	18	175	2.4	1.2	0.4		"	205
139	2.7	0.9	0.2		"	72	176	1.8	1.0	0.7		"	01
140	1.4	1.3	0.2		"	93	177	1.3	1.2	1.6		"	63
141	5.2	2.6	0.4		"	14	178	1.3	1.2	0.3		"	211
142	3.2	0.4	0.7		"	95	179	1.4	1.4	1.1		"	32
143	1.6	0.8	0.3		"	148	180	2.2	1.7	0.8		"	09
144	2.2	1.6	1.2		"	38	181	1.9	1.2	1.3		"	84
145	2.2	1.6	1.2		"	38	182	2.9	2.1	0.6		"	212
146	—	2.5	0.5		"	358	183	1.6	0.8	1.1		"	207
147	3.3	2.1	1.1		"	143	184	2.2	1.3	1.4		"	07
148	3.1	2.7	0.9		"	88	185	2.3	1.3	0.6		"	213
149	1.3	1.1	0.5		"	147	186	3.2	1.4	0.5		"	04
150	3.1	2.3	0.2		"	42	187	1.8	0.5	0.1		"	100
151	1.9	1.2	0.4		"	51	188	1.0	1.0	0.3		"	P 37
152	3.3	2.1	0.2		"	40	189	1.85	0.8	0.5		"	SK858
153	1.9	1.7	0.2		"	50	190	—	—	—		"	69
154	3.6	2.0	0.7		"	59・374	191	1.8	1.0	0.9		"	02
155	2.5	2.0	0.2		"	154	192	—	2.4	0.5		"	31
156	2.7	0.9	0.1		"	54	193	—	—	0.6		"	74
157	1.5	1.3	0.8		"	80	194	1.9	1.4	0.2		"	20
158	3.0	—	0.8		"	209	195	—	—	—		"	23
159	1.4	1.2	0.5		"	77	196	—	—	0.6		"	35・88
160	2.3	0.9	0.1		"	03	197	—	1.4	0.3		"	342
161	1.9	0.8	0.6		"	79	198	—	—	—		"	06
162	3.1	3.0	1.4		"	12	200	—	—	0.7		"	78
163	1.8	1.4	0.2		"	65	201	1.7	1.1	0.8		"	05
164	1.8	1.5	0.2		"	53	201	1.7	1.1	0.8		"	05
165	1.8	1.6	0.5		"	11	202	—	2.5	0.9		"	21
166	3.9	1.2	0.4		"	SD 32	203	—	1.0	0.4		"	P 370
167	2.4	1.1	1.6		"	SK201	204	—	—	—		"	341

遺物表

I期の遺物

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
18-1	SK17	陶器	碗A	4.9	13.6		4.0	無釉	無釉	胎土きめ細かい	E-3462
2	"	"	皿C	1.5	8.6		-	"	"	"	3463
3	"	土器	皿M	2.7	11.8		-			手捏成形	3464
4	"	陶器	鉢A	-	25.7		-	灰釉	灰釉		3465
5	SK29	陶器	碗A	4.3	13.0		4.8	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3466
6	"	"	皿C	1.1	8.2		5.0	"	"	"	3467
7	"	"	"	1.1	8.2		5.0	"	"	"	3468
8	"	"	鉢	-	[18.8]	[19.2]	-	緑釉	緑釉	中国製	3469
9	SK13	"	碗A	4.9	12.6		4.7	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3418
10	"	"	"	4.5	13.2		4.3	"	"	"	3416
11	"	"	"	4.2	13.8		4.4	"	"	"	3423
12	"	"	"	4.2	14.2		4.3	"	"	"	3422
13	"	"	"	4.0	13.1		4.0	"	"	"	3417
14	"	磁器	"	-	-		4.8	青釉	青釉	青磁 中国製	3407
15	"	陶器	皿C	1.2	8.2		4.7	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3419
16	"	"	"	1.2	8.6		4.6	"	"	"	3432
17	"	"	"	0.7	8.0		4.0	"	"	"	3441
18	"	土器	碗	-	11.6		-			手捏成形	3456
19	"	"	皿M	-	10.8		-			"	3457
20	"	"	皿O	1.5	^{8.4} / _{-9.4}		-			"	3443
21	"	"	"	-	8.6		-			"	3459
22	"	陶器	鉢A	4.9	17.4		9.6	灰釉	灰釉		3409
23	"	"	"	-	30.0		-	"	"		3411
24	"	陶器	鉢B	10.9	30.8		14.7	無釉	無釉	常滑産	3412
25	"	土器	鍋A	-	18.8	-	-			口縁外面に鐏	3460
26	"	"	"	-	24.6	-	-			"	3413
27	SK32	陶器	碗A	4.3	12.9		4.0	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3451
28	"	"	碗B	4.1	14.1		5.8	"	"	"	3451
29	"	"	皿C	0.9	8.3		4.6	"	"	"	3453
30	"	陶器	"	25.0	10.4		5.6	灰釉	灰釉		3445
31	"	"	壺	-	5.6	11.2	-	無釉	"	胴部に菊のスタンプ	3446
32	"	"	"	-	11.2	18.8	-	"	"	胴部に草花文の陰刻	3444
33	"	"	碗A	-	13.3		-	"	無釉	胎土きめ細かい	3470
34	SK51	陶器	碗D	-	14.6		-	鉄釉	鉄釉		3471
35	"	土器	皿M	12.5	3.2		-			手捏成形	3472
36	"	"	皿N	-	13.0		-			"	3473
37	"	"	"	1.9	7.9		-			"	3474
38	"	"	鍋A	-	20.1		-			口縁に焼成前の穿孔1カ所確認	3475
39	"	"	鍋B	-	23.4		-			内耳鍋	3476
19-40	SK31	陶器	碗A	3.3	10.2		3.6	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3477
41	"	"	碗D	6.2	12.4		5.4	灰釉	灰釉		3478
42	"	"	碗C	-	11.0		-	鉄釉	鉄釉		3479
43	"	磁器	"	-	8.6		-	透明釉	透明釉	白磁 中国製	3480
44	"	陶器	皿C	1.4	9.2		5.5	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3481
45	"	土器	"	1.5	5.2		-			轆轤成形・口縁に煤付着	3515
46	"	陶器	鉢C	-	27.7		-	鉄釉	鉄釉		3482
47	SK44	"	碗B	3.4	12.6		-	無釉	無釉	胎土きめ細かい	3483
48	"	"	碗C	6.9	12.0		3.6	鉄釉	鉄釉		3484
49	"	土器	皿O	1.3	0.6		-			手捏成形	3485
50	"	"	皿Q	-	-		6.8			轆轤成形	3486
51	"	陶器	鉢	3.0	6.8		4.7	鉄釉	鉄釉		3487
52	"	"	"	-	24.0	24.0	-	"	"		3488
53	"	"	鉢B	-	28.1		-	無釉	無釉	常滑産	3489
54	"	"	"	-	28.2		-	灰釉	灰釉		3490

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
19-55	S K44	陶器	鉢C	—	26.5		—	鉄釉	鉄釉		3491
56	S K20	〃	〃	9.0	23.0		11.0	〃	〃		3492
57	〃	〃	瓶	—	3.2	8.0	—	不明	不明	火を受け釉薬がとぶ	3493
20-58	S D03	〃	椀A	3.1	11.8		2.8	無釉	無釉	胎土きめ細い	3243
59	〃	〃	椀B	3.9	12.8		3.9	〃	〃	〃	E-3244
60	〃	〃	〃	2.2	12.6		4.8	〃	〃	〃	4247
61	〃	〃	鉢	3.1	9.0		5.2	灰釉	灰釉		3251
62	〃	〃	皿A	2.2	11.4		5.4	無釉	無釉	胎土きめ細い	3269
63	〃	〃	〃	2.2	9.0		3.2	〃	〃	螺旋状の沈線	3250
64	〃	〃	皿B	2.2	9.2		3.8	〃	〃		3241
65	〃	〃	皿C	0.9	8.2		5.6	〃	〃	胎土きめ細い	3246
66	〃	〃	壺	—	3.3		—	鉄釉	鉄釉		3247
67	〃	〃	瓶	—	3.6		—	無釉	灰釉		3245
68	〃	〃	壺	—	12.6		—	灰釉	〃		3053
69	〃	〃	鉢	8.9	30.0		13.2	〃	〃		3262
70	〃	土器	鍋B	—	24.0	25.2	—			口縁内面に吊り手1対	3252
71	S D04	陶器	椀	—	13.6		—	無釉	無釉	胎土きめ細い	3494
72	〃	磁器	〃	—	—		5.6	青釉	青釉	青磁 中国製	3495
73	〃	土器	皿Q	2.3	14.2		7.2			轆轤成形	3496
74	〃	陶器	壺	—	5.6	11.2	—	鉄釉	鉄釉		3497
75	〃	〃	鉢	—	27.6		—	灰釉	灰釉	内面に格子状の摺り目	3323
76	〃	〃	鉢C	9.9	28.0		10.0	鉄釉	鉄釉		3498
77	〃	〃	〃	—	28.0		—	〃	〃	口縁内面に吊り手1対	3327
78	〃	瓦質土器	〃	—	31.0	—	—				3324
79	〃	土器	鍋B	—	25.0	—	—			口縁内面に吊り手1対	3341
80	〃	〃	〃	—	24.2	—	—			〃	3342
81	〃	〃	釜B	—	—	24.8	—				3340
82	〃	〃	鍋A	—	18.9	—	—			口縁外面に鈔	3499
83	〃	陶器	甕	—	47.4	60.4	—	無釉	無釉	常滑産	3343
21-84	S D05	〃	椀C	6.3	12.0		3.0	鉄釉	鉄釉		3311
85	〃	〃	椀D	6.2	16.1		4.8	灰釉	灰釉		3297
86	〃	〃	椀	—	14.6		—	〃	〃		3316
87	〃	〃	鉢	—	8.6		—	〃	〃		3314
88	〃	〃	〃	—	—		6.8	〃	〃		3321
89	〃	磁器	椀	—	—		5.8	青釉	青釉	青磁 中国製	3315
90	〃	陶器	皿A	2.2	9.6		4.6	無釉	無釉	胎土きめ細い	3270
91	〃	〃	〃	2.1	9.8		3.4	〃	〃	内面に螺旋状の沈線	3268
92	〃	〃	〃	2.5	10.1		3.6	〃	〃	胎土きめ細い	3271
93	〃	〃	〃	$\frac{3.7}{3.9}$	10.0		3.9	〃	〃	内面に螺旋状の沈線	3322
94	〃	〃	皿	2.5	7.8		5.0	〃	〃	胎土砂質	3273
95	〃	〃	皿C	0.8	8.8		6.0	〃	〃	胎土きめ細い	3272
96	〃	〃	皿D	2.6	10.8		5.2	灰釉	灰釉		3293
97	〃	〃	〃	2.5	10.6		5.4	〃	〃		3292
98	〃	〃	〃	—	10.6		—	〃	〃		3291
99	〃	〃	〃	$\frac{3.0}{3.2}$	12.4		5.7	鉄釉	鉄釉		3320
100	〃	〃	〃	3.1	9.8		4.6	灰釉	灰釉		3294
101	〃	〃	皿	3.2	9.0		4.2	鉄釉	鉄釉		3275
102	〃	〃	壺	—	—	6.0	4.6	〃	〃		3277
103	〃	〃	蓋	1.6	4.0	4.2	—	〃	〃		3286
104	〃	〃	壺	—	3.1	7.2	—	灰釉	灰釉		3298
105	〃	〃	椀	—	—	8.0	4.2	鉄釉	鉄釉	鈔付椀	3284
106	〃	〃	鉢C	—	38.0		—	無釉	無釉	内面に細く浅いハケ目 常滑産	3309
107	〃	〃	〃	7.8	26.8		9.0	鉄釉	鉄釉		3317
108	〃	〃	鉢	7.3	23.8		9.5	灰釉	灰釉		3313
109	〃	〃	鉢B	10.5	28.0		12.8	無釉	無釉	常滑産	3263
110	〃	〃	釜	—	—	24.0	—	鉄釉	鉄釉		3310
111	〃	土器	鍋B	—	23.0		—			口縁内面に吊り手1対	3278
112	〃	〃	〃	—	32.0		—			〃	3280
113	〃	陶器	壺	—	—	27.4	—	灰釉	灰釉		3287
22-114	S D08	〃	椀C	—	10.4		—	鉄釉	鉄釉		3224

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
22-115	S D08	陶器	椀C	—	11.8		—	鉄釉	鉄釉		E-3272
116	"	磁器	椀	—	—		4.0	透明釉十呉須	透明釉十呉須	染付 中国製	3223
117	S D09	陶器	皿E	2.5	10.1		—	灰釉	灰釉		3221
118	"	"	皿G	2.2	10.4		6.4	鉄釉	鉄釉		3230
119	"	陶器	皿A	2.2	10.2		4.4	無釉	無釉	同心円状の突線	3231
120	"	土器	皿R	2.6	11.4		5.2			轆轤成形	3228
121	"	"	"	2.8	11.2		5.2			"	3229
122	"	"	皿O	0.7	5.8		—			手捏成形 口縁外面にヨコナデ	3232
123	"	"	釜	—	12.8	23.3	—				3235
124	"	"	鍋B	—	21.2		—			口縁に穿孔1カ所	3234
125	"	"	"	—	29.8		—			口縁内面に吊り手1対	3238
126	"	"	"	—	25.0		—			"	3233
127	"	"	釜C	—	44.0	47.8	—				3240
128	S K66	陶器	皿A	2.5	10.0		3.5	無釉	無釉	内面にラセン状の沈線	3506
129	"	"	皿E	2.8	11.6		5.4	灰釉	灰釉	釉は白く発色	3507
130	"	"	皿A	2.5	10.4		4.0	無釉	無釉	内面にラセン状の沈線	3508
131	"	"	器台	—	—		—	鉄釉	鉄釉	燭台	3509
132	"	"	鉢C	—	28.4		—	"	"		3510
133	S K58	"	椀C	—	12.8		—	"	"		3511
134	"	"	皿E	3.5	9.6		5.8	灰釉	灰釉		3512
135	"	"	鉢C	—	25.2		—	鉄釉	鉄釉		3513
136	"	土器	鍋B	13.3	26.0		—			口縁内面に吊り手1対	3514
23-137	S E05	陶器	椀C	5.5	11.0		4.9	鉄釉	鉄釉		3353
138	"	"	"	—	12.0		—	"	"		3354
139	"	"	皿A	2.2	10.3		4.3	無釉	無釉	内面に螺旋状の沈線	3344
140	"	"	皿B	2.5	10.6		4.7	"	"		3346
141	"	"	椀B	3.3	12.6		4.4	"	"	焼成があまい	3345
142	"	"	皿I	2.1	10.6		5.4	鉄釉	鉄釉		3352
143	"	土器	皿R	1.7	11.6		7.0			轆轤成形	3405
144	"	"	皿Q	—	10.8		—			"	3404
145	"	"	皿O	1.0	5.4		—			手捏成形 口縁外面にヨコナデ	3381
146	"	"	"	1.0	5.6		—			" "	3385
147	"	"	"	1.0	5.2		—			" "	3401
148	"	"	"	1.2	5.8		—			" "	3366
149	"	"	"	1.0	5.3		—			" 口縁外面に幅狭のヨコナデ	3363
150	"	"	"	0.9	5.4		—			" "	3369
23-151	S E05	"	"	0.7	5.7		—			" "	3403
152	"	"	"	1.0	5.4		—			" "	3364
153	"	陶器	鉢C	—	30.0		—	鉄釉	鉄釉		3361
154	"	"	"	13.0	31.0		11.6	"	"		3359
155	"	土器	鍋B	—	20.0		—			口縁内面に吊手1対	3356
156	"	石製品	皿	—	40.8		—				S-3001
157	S K47	陶器	椀C	—	13.0		—	鉄釉	鉄釉		E-3500
158	"	磁器	"	—	—		6.3	青釉	青釉	青磁 中国製	3501
159	"	陶器	皿G	2.7	10.1		6.4	鉄釉	鉄釉		3502
160	"	"	鉢C	12.0	28.0		10.6	"	"		3503
161	"	土製	羽口	—	—		—				3504
162	S K57	土器	釜C	23.0	40.2	44.0	—				3505
24-163	S D01	陶器	椀C	6.1	12.6		5.0	鉄釉	鉄釉		3011
164	"	"	"	5.8	12.0		4.5	"	"		3007
165	"	"	"	5.6	10.8		4.6	"	"		3010
166	"	"	"	6.1	11.4		4.6	"	"		3009
167	"	"	"	6.0	12.0		4.9	"	"		3006
168	"	"	"	5.3	10.8		4.6	"	"		3001
169	"	"	"	6.0	11.3		4.1	"	"		3004
170	"	"	"	5.4	11.4		4.2	"	"		3002
171	"	"	"	5.4	11.0		4.5	"	"		3003
172	"	"	"	—	11.8		—	"	"		3208
173	"	"	"	—	12.6		—	"	"		3212
174	"	"	"	—	12.0		—	"	"		3217
175	"	磁器	椀	6.0	12.0		4.4	透明釉十呉須	透明釉十呉須	染付 中国製	3142

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
24-176	SD01	陶器	皿B	2.5	11.0		5.2	無釉	無釉	同心円皿	E-3065
177	"	"	"	1.8	10.5		5.4	"	"	"	3057
178	"	"	"	2.1	11.6		5.6	"	"	"	3056
179	"	"	"	2.2	9.4		3.8	"	"	"	3073
180	"	"	"	2.2	10.6		5.4	"	"	"	3063
181	"	"	"	2.1	10.4		5.0	"	"	"	3016
182	"	"	皿F	2.7	11.0		6.0	灰釉	灰釉		3031
183	"	"	"	2.2	10.4		5.8	"	"		—
184	"	"	"	2.3	10.0		5.6	"	"		3035
185	"	"	"	2.5	10.2		5.6	"	"	内底面は円形に無釉	3036
186	"	"	"	2.6	10.4		6.0	"	"	内底面に菊花の刻印	3042
187	"	"	"	2.3	11.0		5.8	"	"	"	3045
188	"	"	皿	1.6	12.0		6.4	"	"	"	3044
189	"	"	皿G	2.3	10.0		6.2	"	"	内底面は円形に無釉	3037
190	"	"	皿	2.5	10.6		5.4	"	"		3040
191	"	"	皿G	2.3	10.0		6.0	"	"		3030
192	"	"	皿K	2.5	11.0		6.4	"	"		3043
193	"	"	皿G	2.3	11.0		6.3	鉄釉	鉄釉		3019
194	"	"	"	2.3	10.2		5.5	"	"		3015
195	"	"	皿H	2.6	10.4		5.6	"	"		3025
196	"	"	皿G	2.2	10.2		5.5	"	"		3016
197	"	"	"	2.2	11.6		6.0	"	"		3017
198	"	"	皿	1.8	10.8		6.0	"	"		3014
199	"	"	"	2.5	11.0		4.8	"	"		3028
200	"	"	皿I	2.3	10.0		4.7	"	"		3026
201	"	"	皿H	2.5	11.0		5.2	銅緑釉	銅緑釉		3047
202	"	"	皿J	2.8	12.4		3.4	長石釉	長石釉	菊皿。型押し成形	3051
203	"	"	皿L	2.8	9.6		4.2	銅緑釉	銅緑釉	灯明皿	3048
204	"	"	皿	3.0	17.2		10.0	鉄釉	鉄釉		3029
205	"	磁器	"	3.3	12.4		7.0	透明釉	透明釉	白磁 中国製	3145
206	"	"	"	2.2	8.2		4.4	透明釉十呉須	透明釉十呉須	染付 "	3143
207	"	土器	皿O	1.0	5.4		—			手捏成形。口縁外面に幅狭のヨコナデ	3141
208	"	"	"	1.0	5.8		—			" "	3105
209	"	"	"	0.9	5.4		—			" "	3117
210	"	"	"	1.1	5.0		—			" "	3107
211	"	"	皿P	0.7	5.0		—			" "	3115
212	"	"	"	1.2	4.6		7.3			" "	3111
213	"	"	"	1.8	5.8		—			" "	3118
214	"	"	皿Q	2.6	11.4		6.0			轆轤成形	3099
215	"	"	"	2.6	11.4		6.0			"	3098
216	"	"	"	2.6	12.0		6.4			"	3102
217	"	"	皿	2.0	13.0		—			"	3103
218	"	"	"	2.1	12.4		—			"	3101
219	"	"	"	2.3	11.6		—			"	3092
220	"	"	皿R	2.0	12.0		6.0			"	3093
221	"	"	皿	2.9	11.6		4.4			"	3097
25-222	"	陶器	瓶	—	6.6	—	—	鉄釉	鉄釉	船徳利	3183
223	"	"	壺	5.6	4.5	—	5.0	"	"		3176
224	"	"	鉢	9.7	13.8		8.4	"	"		3182
225	"	"	甕	—	19.4	—	—	"	"		3187
226	"	"	鉢	11.3	26.8		10.8	"	"		3186
227	"	"	"	17.8	16.5		14.0	"	"		3179
228	"	"	"	8.0	9.0		6.0	無釉	"		3177
229	"	"	"	7.6	11.8		10.0	鉄釉	"		3178
230	"	"	鉢C	11.5	28.0		10.0	"	"		3170
231	"	"	"	12.6	29.2		11.0	"	"		3175
232	"	土器	鍋B	11.9	23.6		11.4			口縁内面に吊り手1対	3152
233	"	"	"	—	20.1		—			"	3158
234	"	"	"	7.0	27.2		—			"	3146
235	"	"	釜C	—	40.4		—				3162
236	"	"	釜A	—	13.8		—				3161

II期の遺物

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
28-1	S K186	陶器	碗A-1	4.8	[11.4]			鉄釉	鉄釉		E-4795
2	"	"	"	—	—		[4.4]	"	"		4796
3	"	"	"	1.5	—		4.0	長石釉	長石釉		4797
4	"	"	碗B-1	6.8	[11.2]		4.4	銅緑釉	銅緑釉		4798
5	"	"	皿B	—	[18.0]		—	灰釉	灰釉		4811
6	"	"	皿A-1	—	[13.0]		—	長石釉	長石釉	口縁部煤付着 志野織部	4803
7	"	"	"	2.5	[11.0]		6.5	"	"		4799
8	"	"	"	2.5	10.8		6.2	"	"		4800
9	"	"	"	—	[11.2]		—	"	"	志野織部	4801
10	"	"	"	—	—		[6.4]	"	"	志野織部	4802
11	"	"	"	1.6	[10.2]		[6.2]	灰釉	灰釉+銅緑釉	黄瀬戸	4804
12	"	土器	皿	1.6	8.6		[5.6]				4815
13	"	"	"	2.2	[11.0]		5.6				4816
14	"	"	"	2.4	[11.1]		6.3			全面に煤付着	4812
15	"	"	"	2.1	12.1		6.8			見込み部一部煤付着	4814
16	"	陶器	皿E	3.1	[15.0]		9.0	灰釉	灰釉		4805
17	"	"	鉢A-1	3.4	19.4		9.6	"	灰釉+銅緑釉		4807
18	"	"	鉢A-2	5.0	[23.0]		13.0	"	"		4806
19	"	"	煙管	—	—		—	"	"		4810
20	"	"	壺	—	—	16.5	10.9	銅緑釉	銅緑釉		4808
21	"	"	香炉	—	8.3		—	"	"		4809
29-22	S D102	"	碗A-1	7.2	—	[11.4]	4.0	鉄釉	鉄釉		4821
23	"	"	"	6.2	—	[11.9]	4.0	"	"		4822
24	"	"	碗B-1	6.2	10.5		3.9	灰釉	灰釉		4820
25	"	磁器	小碗A-2	4.7	8.6		3.3				4817
26	"	"	小碗	—	—		3.9				4818
27	"	"	小碗B-1	4.2	[7.9]		[3.0]				4819
28	"	陶器	皿A-1	2.8	12.2		6.7	長石釉	長石釉	ピン痕内外に3カ所	4824
29	"	"	"	—	[12.4]		—	"	"		4825
30	"	"	"	2.4	12.4		6.7	"	"		4826
31	"	"	"	2.4	[12.2]		6.6	"	長石釉		4827
32	"	"	"	2.4	[13.3]		6.0	"	"		4828
33	"	"	"	2.5	[12.0]		6.4	"	"		4829
34	"	"	"	2.1	[11.0]		6.0	"	"		4832
35	"	"	皿A-2	—	[11.8]		—	灰釉	灰釉		4830
36	"	"	皿A	2.7	12.2		6.8	"	"		4831
37	"	"	"	2.7	14.3		8.8	長石釉	長石釉		4836
38	"	"	"	2.5	14.5		8.7	灰釉	灰釉+長石釉		4835
39	"	"	"	2.3	[14.4]		8.7	長石釉	長石釉		4837
40	"	"	"	2.1	14.0		8.9	"	"		4840
41	"	"	"	2.5	14.5		9.1	"	"	高台より底の方が深い	4838
42	"	"	"	2.1	14.4		9.2	"	"		4839
43	"	"	"	2.0	14.8		8.5	"	"		4834
44	"	"	皿C	4.6	15.8		7.2	"	"		4833
45	"	"	向付	4.3	—		—	"	"	高台3カ所	4841
46	"	"	"	5.6	6.4		3.9	"	"		4823
47	"	"	燭台	—	—		—	銅緑釉	銅緑釉		4846
48	"	"	鉢C-2	5.2	[20.7]		8.2	灰釉	灰釉		4842
30-49	"	"	鉢H	5.0	[16.5]		—	鉄釉	鉄釉		4845
50	"	"	"	11.3	32.0		—	"	"		4843
51	"	"	"	9.0	—		9.8	"	"		4844
52	"	土器	釜	—	[12.5]	—	—				4879
53	"	"	内耳鍋	—	[27.0]	—	—				4880
54	"	"	土錘	6.6	1.2	3.4	—			最大長6.4cm, 最大幅3.7cm	4847
55	"	"	皿	2.0	[10.7]		6.7			糸切り痕2回有その後板おこし	4849
56	"	"	"	2.5	[13.4]		[7.4]			糸切り後糸起し	4850
57	"	"	"	1.9	[12.6]		[7.0]				4855
58	"	"	"	1.6	[12.0]		[6.4]				4856

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
30-59	SD102	土器	皿	—	[10.1]		[8.0]			口縁一部煤付着	E-4859
60	"	"	"	2.5	10.5		4.6			口縁部煤付着	4858
61	"	"	"	2.6	[10.0]		[5.6]				4854
62	"	"	"	1.8	[10.4]		[6.6]			口縁部煤付着	4852
63	"	"	"	1.7	[10.7]		[6.9]				4851
64	"	"	"	1.8	[10.8]		[7.5]				4853
65	"	"	"	1.9	[10.4]		[6.6]			内部側面部分的に煤付着	4858
66	"	"	"	1.7	[10.3]		[7.0]				4857
67	"	"	"	1.7	[10.2]		[7.6]				4861
68	"	"	"	1.5	[9.7]		[6.0]				4862
69	"	"	"	1.3	5.1						4863
70	"	"	"	1.2	5.3						4864
71	"	"	"	1.0	5.4						4865
72	"	"	"	1.4	5.1						4866
73	"	"	"	1.1	4.9						4867
74	"	"	"	1.2	5.1						4868
75	"	"	"	1.2	5.0						4869
76	"	"	"	1.2	5.2						4870
77	"	"	"	1.2	5.0						4871
78	"	"	"	1.2	5.1						4872
79	"	"	"	1.0	5.0						4873
80	"	"	"	1.3	5.4						4874
81	"	"	"	1.2	4.9						4875
82	"	"	"	1.1	5.0						4876
83	"	"	"	1.1	5.6						4877
84	"	"	"	1.0	5.2						4878
31-85	SK173	陶器	椀A-1	7.7	11.9		4.7	鉄釉	鉄釉		5306
86	"	"	"	—	[11.8]		—	"	"		5307
87	"	"	椀B-1	7.4	11.4		4.7	銅緑釉	銅緑釉		5309
88	"	"	"	—	[11.0]		—	"	"		5310
89	"	"	椀B	—	—		5.9	鉄釉	鉄釉		5311
90	"	"	"	—	—		4.0	長石釉	長石釉	内底3カ所ビン跡	5312
91	"	"	"	—	[9.0]		—	鉄釉	鉄釉		5308
92	"	"	小椀B-2	3.4	7.8		3.8	灰釉	灰釉		5313
93	"	"	小椀C	3.9	[6.5]		2.6	長石釉	長石釉		5315
94	"	"	"	5.0	5.9		3.3	"	"		5314
95	"	"	皿A-1	1.5	[8.2]		5.2	灰釉	灰釉		5317
96	"	"	"	—	—		[5.4]	"	"		5316
97	"	"	"	2.8	[10.6]		[6.1]	"	"	二次的に被熱	5318
98	"	"	"	2.2	[11.3]		[6.6]	長石釉	長石釉	"	5319
99	"	"	"	2.8	[11.6]		[6.9]	"	"		5320
100	"	"	"	2.7	[10.6]		[5.8]	"	"		5321
101	"	"	"	2.9	[11.4]		[6.5]	"	"		5322
102	"	"	"	2.5	[11.0]		[6.2]	"	"		5324
103	"	"	"	2.7	[12.4]		7.7	"	"		5326
104	"	"	"	2.3	[12.1]		7.2	"	"	素地部分なし	5325
105	"	"	"	2.4	[11.6]		6.5	"	"	底部ビン痕3カ所	5329
106	"	"	"	2.5	12.2		7.4	"	"	" 二次的に被熱	5327
107	"	"	"	2.4	12.6		7.6	"	"	"	5328
108	"	"	皿B	3.8	13.8		6.0	"	"		5341
109	"	"	皿F	2.4	12.4		6.4	"	"	志野織部	5330
110	"	"	皿G	2.9	11.2		4.6	無釉	無釉		5332
111	"	"	"	2.5	[10.8]		[6.0]	"	"		5331
112	"	"	蓋A-1	1.9	6.2		[3.0]	鉄釉	鉄釉		5334
113	"	土器	土錘	—	—	2.7	—				5420
32-114	"	陶器	向付	6.0	19.0		12.0	長石釉	鉄釉+長石釉	三足	5335
115	"	"	"	4.6	17.1		—	"	長石釉	鼠志野 三足(?)	5336
116	"	"	"	5.5	[13.4]	13.8	—	"	"	三足(?)	5338
117	"	"	鉢E-1	—	[17.8]		—				5340
118	"	"	鉢E-2	6.9	[13.2]	14.8	[7.0]			鉄絵各面文様同じ	5339

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
32-119	S K173	陶器	向付	4.6	[12.6]	13.6	[11.6]	長石釉	長石釉	志野織部 三足	E-5337
120	〃	〃	鉢A-1	4.4	22.0		12.0	灰釉	灰釉		5342
121	〃	〃	鉢A-2	—	32.6		—	〃	〃	表面が白くかせる部分有 黄瀬戸	5345
33-122	〃	〃	〃	7.9	29.2		[16.2]	灰釉+銅緑釉	〃	黄瀬戸	5343
123	〃	〃	〃	7.4	29.6		[17.0]	〃	〃	〃	5344
124	〃	〃	水滴	3.3				灰釉	〃	長幅5.9cm, 短幅4.5cm	5333
125	〃	〃	鉢H	—	[30.9]		[30.4]	鉄釉	鉄釉		5349
126	〃	〃	〃	—	[29.4]		[29.2]	〃	〃		5350
127	〃	〃	〃	—	—		[9.7]	〃	〃		5351
128	〃	〃	壺	—	—	—	[11.0]	〃	〃	糸切り後ヘラで調整	5346
129	〃	〃	〃	—	—	[16.2]	[13.0]	〃	〃		5347
130	〃	土器	皿	1.1	4.8						5352
131	〃	〃	〃	1.1	4.7						5353
132	〃	〃	〃	1.2	4.6						5354
133	〃	〃	〃	1.0	4.9					底部穿孔2カ所 内面凸凹	5355
134	〃	〃	焼塩壺蓋	2.1	7.2					転用 内面漆付着	5358
135	〃	〃	両耳釜	—	[13.5]	[23.4]	[11.0]			口縁直立 耳付	5356
136	〃	〃	内耳鍋	—	[21.9]	[22.2]	[13.4]				5357
34-137	S K145	陶器	碗A-1	—	[11.4]		—	鉄釉	鉄釉		4881
138	〃	〃	〃	—	[11.4]		—	〃	〃		4882
139	〃	〃	〃	—	[12.8]		—	〃	〃		4884
140	〃	〃	〃	—	4.4		—	〃	〃	内面灰釉流し掛け	4885
141	〃	〃	〃	—	[4.0]		—	〃	〃		4887
142	〃	〃	碗A-2	—	11.6		—	長石釉	長石釉		4891
143	〃	〃	碗B-1	—	10.4		—	鉄釉	鉄釉		4883
144	〃	〃	〃	—	—		4.7	鉄釉+白濁釉	〃		4888
145	〃	〃	〃	—	11.4		—	灰釉	灰釉		4892
146	〃	〃	碗B-3	—	11.8		—	〃	〃		4898
147	〃	〃	碗B-1	—	[12.8]		—	鉄釉	鉄釉		4894
148	〃	〃	〃	—	11.4		—	長石釉	長石釉		4893
149	〃	〃	小碗B-1	—	8.6		—	灰釉	灰釉		4899
150	〃	〃	〃	—	7.6		—	長石釉	長石釉		4895
151	〃	〃	〃	—	7.4		—	〃	〃		4897
152	〃	〃	〃	—	8.0		—	〃	〃		4896
153	〃	〃	小碗B-2	2.7	5.3		2.9	〃	〃		5030
154	〃	〃	小壺	—	—	—	3.2	〃	〃		4906
155	〃	〃	碗B	—	—		3.8	〃	〃	内面の釉穴に紅付着 赤織部	4902
156	〃	〃	鉢	—	—		4.1	〃	〃	〃	4901
157	〃	〃	〃	—	—		3.5	〃	〃	鉄釉の渦巻き文様 (左回り)	4900
158	〃	〃	皿A-1	2.6	[9.0]		[5.0]	灰釉	灰釉	見込み部分に酢漿印花文	4915
159	〃	〃	〃	2.3	[18.8]		5.8	〃	〃		4917
160	〃	〃	〃	2.2	[10.9]		6.0	〃	〃	釉が白くかせる	4919
161	〃	〃	〃	2.8	[11.3]		6.0	〃	〃	二次的に被熱	4916
162	〃	〃	〃	2.9	[12.0]		6.0	灰釉+銅緑釉	〃		4918
163	〃	〃	〃	2.3	[11.0]		[6.0]	長石釉	長石釉		4913
164	〃	〃	〃	2.4	[11.6]		[6.6]	〃	〃	長石釉がかせる	4908
165	〃	〃	〃	2.7	[11.4]		[6.2]	〃	〃		4909
166	〃	〃	〃	2.5	[11.3]		[6.6]	〃	〃	釉が黄色味をおびる	4910
167	〃	〃	〃	2.3	[11.6]		[6.6]	〃	〃	〃	4912
168	〃	〃	〃	2.5	[11.7]		7.2	〃	〃		4911
169	〃	〃	〃	3.0	[12.4]		[7.4]	〃	〃	底部が高台よりでる。底削り出しの痕	4907
170	〃	〃	皿D	3.4	[15.0]		[8.4]	〃	〃	底部円錐ピン3カ所付	4914
35-171	〃	〃	鉢C-1	—	[16.2]		—	銅緑釉	銅緑釉	内面口縁と底部に釘彫りによる文様	4921
172	〃	〃	小鉢	5.6	17.1		6.9	長石釉	長石釉		4923
173	〃	〃	皿H	3.3	—		—	〃	〃	型打 貫入はいる	4922
174	〃	〃	向付	—	—		[6.4]	〃	〃	胴部の3本線鉄釉	4904
175	〃	〃	壺	—	[10.2]	15.0	—	〃	〃	表面かせる 肩部に鉄絵	4905
176	〃	〃	杓立て	—	—	—	4.9	〃	〃	胴上半部灰白色粘土 鳴海織部	4903
177	〃	〃	鉢E-1	6.1	[15.8]		5.8	〃	〃	内面に布目痕 高台部灰白色粘土	5305
178	〃	〃	〃	6.0	—		5.6	〃	〃	〃	5304

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
35-179	S K145	磁器	小壺	—	4.0	9.3	—				E-4951
180	"	"	皿	—	—	—	13.8				4952
181	"	陶器	鉢H	—	—	—	[17.0]			常滑	4936
182	"	"	甕	—	[29.3]	—	—			"	4935
36-183	"	"	鉢A-1	4.0	23.2	—	11.6	灰釉+銅緑釉	灰釉	内面に直径1cm大の銅緑釉流す	4924
184	"	"	鉢A-2	—	—	—	12.0	灰釉	"	黄瀬戸	4926
185	"	"	"	—	[23.0]	—	—	"	鉄釉	内面灰釉流しかけ	4930
186	"	"	"	—	—	—	—	灰釉+銅緑釉	灰釉	"	4929
187	"	"	鉢A-3	5.8	[26.4]	—	[14.4]	"	"		4932
188	"	"	"	—	[28.2]	—	—	"	"		4933
189	"	"	"	—	[30.0]	—	—	"	"		4931
190	"	"	鉢B	9.1	[31.6]	—	16.0	鉄釉	鉄釉	内・外面白濁釉流れる	4934
191	"	土器	内耳鍋	—	[24.0]	—	—				4950
192	"	"	皿	2.0	[9.8]	—	[6.0]			底部側面に煤付着	4945
193	"	"	"	2.1	[10.4]	—	6.0			雲母含	4941
194	"	"	"	1.7	[11.4]	—	6.0			0.1cm前後の小石多い	4940
195	"	"	"	2.2	11.8	—	5.0			雲母含	4942
196	"	"	"	2.2	[12.7]	—	[7.6]			小石多く含	4944
197	"	"	"	2.0	[13.2]	—	8.6			小石含	4943
198	"	"	"	2.3	[12.8]	—	[8.0]				4946
199	"	"	"	2.5	[12.8]	—	7.0			内外面煤付着	4939
200	"	"	"	2.8	[12.4]	—	6.4			灰白色, 雲母多く含	4938
201	"	"	"	1.9	7.8	—	5.3				4947
202	"	"	"	—	4.1	—	—			最大径4.7cm	4948
203	"	"	杯	3.8	8.0	—	5.0	灰釉	灰釉	楽系	4949
37-204	S K179	陶器	碗A-1	6.7	11.3	—	4.2	鉄釉	鉄釉		4751
205	"	"	"	—	[12.0]	—	—	鉄釉+灰釉	鉄釉+灰釉		4752
206	"	"	碗B-2	11.5	[10.3]	—	3.1	鉄釉+長石釉	鉄釉+長石釉		4753
207	"	"	"	—	[10.0]	—	—	長石釉	長石釉		4754
208	"	"	"	—	[11.4]	—	—	鉄釉	鉄釉		4755
209	"	"	小碗A	3.3	6.7	—	3.3	長石釉	長石釉		4756
210	"	"	小碗B-1	3.8	6.7	—	3.4	"	"		4757
211	"	"	小碗C	3.8	[7.6]	—	3.0	灰釉	灰釉	高台付近円錐ピン付着	4758
212	"	"	皿A-1	3.55	11.2	—	6.4	"	"	内面ピン痕3カ所	4759
213	"	"	"	2.5	[11.2]	—	[6.0]	長石釉	長石釉	文様不明の鉄絵	4760
214	"	"	"	2.4	[11.6]	—	[6.4]	"	"		4761
215	"	"	"	2.5	[11.3]	—	6.9	"	"	鉄絵	4762
216	"	"	"	2.5	[11.3]	—	[6.9]	"	"		4763
217	"	"	"	3.0	[11.6]	—	6.8	"	"		4764
218	"	"	"	2.3	11.8	—	6.8	"	"		4765
219	"	"	"	2.2	11.8	—	6.9	"	"		4766
220	"	"	"	2.6	12.0	—	6.7	"	"		4767
221	"	"	皿G	2.0	10.7	—	5.2			煤付着	4773
222	"	"	皿D	3.2	14.2	—	7.2	長石釉	長石釉	稜皿タイプ	4768
223	"	"	"	3.4	14.5	—	7.6	"	"	"	4769
224	"	"	"	3.6	14.4	—	7.9	"	"	"	4770
225	"	"	"	3.7	14.2	—	8.2	"	"		4771
226	"	"	"	3.9	14.1	—	8.2	"	"		4772
227	"	"	鉢E-1	—	17.4	—	—	"	"	赤織部	4780
228	"	"	皿H	4.3	[16.8]	—	8.2	"	"	南蛮人絵	4750
229	"	土器	皿	1.7	[11.4]	—	6.8			口縁部煤付着	4788
230	"	"	"	—	11.6	—	—				4792
231	"	"	"	2.0	10.8	—	6.4				4791
232	"	"	"	—	10.5	—	—			煤付着	4790
233	"	"	"	—	11.7	—	—			"	4789
234	"	"	"	2.2	[12.6]	—	6.0			口縁部煤付着	4787
235	"	"	"	3.3	[13.4]	—	8.2				4786
38-236	"	陶器	香炉	—	[12.8]	—	—	鉄釉	鉄釉	内面上部のみ鉄釉	4781
237	"	"	鉢A-1	4.0	[26.2]	—	17.0	長石釉	長石釉		4775
238	"	"	鉢A-2	6.4	26.8	—	14.8	灰釉	灰釉	黄瀬戸	4776

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
38-239	SK179	陶器	鉢A-3	8.1	28.3		16.7	灰釉	灰釉	鉄絵の後銅緑釉を口縁内側に流し掛け	E-4777
240	"	"	鉢	—	—		28.2	"	"	灰釉一部白濁化 唐津	4778
241	"	"	鉢	5.4	—		—	長石釉	長石釉	裏面に鉄釉による文字(判読不明)	4779
242	"	"	水滴	5.1	—		—	—	銅緑釉	全長8.9cm 胴囲13.0cm 一部欠損	4783
243	"	"	徳利	—	4.2		—	—	灰釉		4782
244	"	"	"	—	—	15.6	12.8	鉄釉	鉄釉	糸切り後ヘラで調整	4793
39-245	S K148	"	碗B-3	9.3	13.3		7.1	灰釉	灰釉		4720
246	"	"	"	9.8	[13.9]		6.9	"	"		4721
247	"	"	碗B	7.5	11.6		4.0	"	"	唐津	4748
248	"	"	碗B-4	6.5	[10.3]		5.3	"	鉄釉		4724
249	"	"	碗	—	—		4.3	"	灰釉	内外面白土化粧 肥前現川	4726
250	"	"	"	4.9	[12.2]		[4.6]	"	"	内外面白土化粧 肥前現川	4725
251	"	"	皿	—	—		4.6	"	"	印花文	4734
252	"	"	小碗B-1	4.2	7.4		3.6	鉄釉	鉄釉		4727
253	"	磁器	小杯A-2	2.9	6.6		2.7			呉須絵 肥前磁器(伊万里)	4741
254	"	陶器	皿H	3.9	^{14.6} _{10.4}		6.0	灰釉	灰釉	変形四角皿 型打	4706
255	"	"	"	4.3	16.6		8.2	長石釉	長石釉	南蛮人絵	4700
256	"	"	鉢A-2	—	28.6		—	—	—	黄瀬戸	4746
257	"	"	鉢	—	—		17.0	灰釉	灰釉	鉄絵	4747
258	"	"	皿A-1	2.4	12.8		6.4			外面煤付着	4730
259	"	"	"	2.5	[12.4]		[5.8]	灰釉	灰釉		4731
260	"	"	"	2.7	12.0		4.8	"	"	素地面に煤付着	4732
261	"	"	皿	—	—		[6.6]	"	"	輪花(?) 呉須絵	4707
262	"	"	蓋物	5.8	8.8		4.4	"	"		4728
263	"	"	仏花瓶	—	9.8	8.2	—	"	灰釉+銅緑釉		4704
264	"	"	"	—	4.2	4.0	—	灰釉	灰釉+鉄釉		4701
265	"	"	"	—	4.5	5.0	—	"	灰釉+銅緑釉	上部銅緑釉 下部灰釉	4702
266	"	"	"	—	4.7	5.3	—	"	鉄釉		4703
267	"	"	油差し	11.4	[4.8]	[10.2]	8.0	鉄釉	鉄釉+灰釉		4715
268	"	"	水差し	—	—	[9.6]	7.6	"	鉄釉		4716
269	"	"	"	—	—	15.0	—	"	"		4714
40-270	"	"	鉢G	9.8	15.3		[7.4]	灰釉	灰釉		4719
271	"	"	半胴甕	—	24.0		—	鉄釉	鉄釉		4718
272	"	"	匣鉢	7.0	[11.8]	[11.7]	[7.0]	"	"		4698
273	"	"	"	6.9	[18.6]	[18.9]	[18.2]	"	"		4699
274	"	"	鉢H-2	—	21.3		—	鉄釉	鉄釉		4736
275	"	"	"	—	20.0		—	"	"		4735
276	"	"	鉢H-1	—	35.2		—	"	"		4713
277	"	磁器	香炉	—	—	—	3.6	青磁	青磁	高台付人面三足(?) 蕾座推定12カ所 肥前	4739
278	"	"	"	—	—	—	6.0	無釉	"		4740
279	"	陶器	"	—	—	—	—	"	灰釉	外面鉄絵 欠損のため文様不明	4733
280	"	"	蓋A-1	1.7	8.7		3.8		鉄釉		4705
281	"	土器	皿	1.1	6.8		4.2				4708
282	"	"	"	1.3	7.3		4.4			口縁部煤付着	4709
283	"	"	"	1.9	9.1		4.9			"	4710
284	"	"	"	2.0	9.3		5.1			"	4711
285	"	陶器	皿I-2	3.0	7.1		5.8	鉄釉	鉄釉	最大11.1cm 内側に窓3カ所 志戸呂	4729
286	"	"	甕	28.5	[26.0]		[14.0]			内側煤付着 常滑	4749
41-287	S K130	"	碗B-3	9.3	[14.6]		6.2	灰釉	灰釉		4953
288	"	"	"	10.1	[14.8]		6.4	"	"		4954
289	"	"	"	9.3	[12.8]		6.2	"	"		4955
290	"	"	"	8.3	13.1		6.2	"	"	呉須文様	4956
291	"	"	碗B-4	8.0	[11.6]		5.4	"	"		4957
292	"	"	"	7.5	11.0		4.8	"	"		4958
293	"	"	"	7.0	11.8		5.0	"	"		4959
294	"	"	"	7.3	11.0		4.6	"	"		4960
295	"	"	"	7.3	10.9		4.6	"	"		4961
296	"	"	"	—	[11.2]		—	"	"		4962
297	"	"	"	7.0	10.9		4.3	"	"		4963
298	"	"	"	7.3	11.1		4.4	"	"	外面細い貫入	4963

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
41-299	SK130	陶器	碗B-4	6.5	10.3		4.6	灰釉	灰釉	釉剥落	E-4965
300	"	"	"	—	[11.0]		—	"	"		4966
301	"	"	"	6.9	9.6		4.5	"	"	呉須文様	4967
302	"	"	碗E	7.1	10.0		5.1	"	"		4968
303	"	"	"	6.2	[9.6]		5.2	"	"	18C中頃	4969
304	"	"	"	—	—		5.0	"	"		4970
305	"	"	"	—	—		[5.4]	"	"		4971
42-306	"	"	碗	6.8	10.3		4.7	"	"	一部鉄吹き出す	4972
307	"	"	碗C-1	7.0	10.6		5.0	"	"	一部鉄釉	4973
308	"	"	碗C	5.9	[9.8]		5.0	"	"		4974
309	"	"	碗G	6.9	[12.0]		3.8	"	"	鉄絵(柳)	4975
310	"	"	碗D	7.2	11.3		5.0	鉄釉	鉄釉		4976
311	"	"	"	—	[11.0]		—	"	"	口縁~胴部白濁釉	4977
312	"	"	碗B	7.1	[11.4]		4.8	"	"		4978
313	"	"	"	7.2	12.2		5.0	"	"		4979
314	"	"	碗C-2	7.0	[10.3]		5.2	灰釉	鉄釉+灰釉	外面胴上半から内面灰釉	4980
315	"	"	"	6.7	10.0		5.5	"	"	"	4981
316	"	"	"	6.7	9.8		4.9	"	"	"	4982
317	"	"	"	—	—		[5.3]	"	"	"	4983
318	"	"	"	6.3	[9.8]		[4.1]	鉄釉	灰釉+鉄釉	外面胴上半から内面鉄釉	4984
319	"	"	"	—	—		6.0	鉄釉+灰釉	鉄釉+灰釉		4985
320	"	"	"	—	—		4.6	"	"		4986
321	"	"	碗B-5	6.8	[10.7]		3.6	"	"	鉄釉の上に灰釉流す	4987
322	"	"	碗B	—	[12.4]		—	"	"	"	4988
323	"	"	皿A-3	4.9	11.5		4.3			肥前・現川	4989
324	"	"	"	4.7	[11.7]		4.3			"	4990
325	"	"	"	4.7	[11.0]		4.2			内面ハケ 外面ホタル	4992
326	"	"	"	4.6	11.6		4.0			" " "	4993
327	"	"	"	5.0	11.8		4.4			" " "	4994
328	"	"	"	4.5	10.8		4.4			内外面ハケ	4996
329	"	"	碗B	6.1	8.9		4.0			内面ハケ 外面ホタル[3カ所]	4997
330	"	"	"	—	[9.6]		—			内外面ハケ	4999
331	"	"	"	5.6	11.2		4.2			"	4998
43-332	"	"	"	—	[10.6]		—			外面横ハケ 内面左上りのハケ	5000
333	"	"	"	—	[11.2]		—			内外面ハケ	5001
334	"	"	"	—	[11.2]		—			"	5002
335	"	"	"	—	—		[5.0]			内外面ハケ	5003
336	"	"	"	—	—		[4.4]			内面ハケ	5004
337	"	"	"	—	[9.2]		—			練込み	5005
338	"	"	"	—	[13.6]		—	灰釉	灰釉	呉須絵 産地不明	5006
339	"	"	小碗B	—	—		3.3	"	"	底部に墨書「コ」 信楽	5007
340	"	"	"	—	[9.4]		—	"	"	花文様が呉須 他は鉄絵	5008
341	"	"	"	—	[10.0]		—	"	"	"	5009
342	"	"	"	—	—		3.2	"	"	鉄絵の上に一部呉須をぬる	5010
343	"	"	小碗B-1	4.1	[7.0]		2.8	"	"	欠損のため文様不明 呉須絵	5012
344	"	"	"	—	[7.4]		—	"	"	"	5013
345	"	"	"	—	6.7		—	"	"	呉須絵	5014
346	"	"	"	—	[6.6]		—	"	"	"	5015
347	"	"	小碗C	4.2	[8.0]		3.2	"	"	内面口縁より呉須流す	5011
348	"	"	皿A-3	5.4	[11.2]		2.0	"	"	呉須絵手描 文様不明	5041
349	"	"	"	—	[10.3]		—	"	"	呉須絵	5042
350	"	"	"	—	—		3.9	"	"	19C 呉須絵	5044
351	"	"	皿	1.9	[12.0]		7.0	"	"	四角皿(?) 鉄絵	5050
352	"	"	皿A-2	3.7	12.2		6.6	"	"	19C 呉須絵	5043
353	"	"	皿	1.9	[8.2]		[4.6]	"	"	口縁部にくぼみ	5037
354	"	"	皿A-2	1.9	8.5		4.2	"	"	"	5040
355	"	"	"	2.7	[12.6]		[6.0]	"	"	17C	5016
356	"	"	"	—	[11.6]		—	"	"	17C	5017
357	"	"	皿H	5.2	16.0		7.2	"	"	四角型 鉄絵	5051
358	"	"	皿A-2	2.7	[11.3]		5.6	"	"	"	5038

図版番号	遺構	器種	法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号		
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
43-359	SK130	陶器	皿A-2	4.0	16.2		8.6	灰釉	灰釉		E-5039	
44-360	"	"	"	2.6	11.5		7.1	"	"		5018	
361	"	"	"	2.8	11.2		6.6	"	"		5019	
362	"	"	"	2.7	12.4		6.7	"	"		5020	
363	"	"	"	2.7	12.5		6.4	"	"		5021	
364	"	"	"	2.7	12.0		6.3	"	"		5022	
365	"	"	"	2.3	12.1		6.8	"	"		5027	
366	"	"	"	2.8	13.1		7.7	"	"		5023	
367	"	"	"	2.6	12.1		7.0	"	"		5024	
368	"	"	"	2.6	12.5		6.9	"	"		5025	
369	"	"	"	2.8	[12.4]		6.5	"	"		5026	
370	"	"	"	2.8	12.2		6.9	"	"		5028	
371	"	"	"	—	—		5.5	"	"		5029	
372	"	"	"	3.4	[12.4]		5.8	"	"		5030	
373	"	"	"	—	—		5.6	"	"		5031	
374	"	"	"	3.1	[12.2]		5.2	"	"		5032	
375	"	"	"	2.8	[12.4]		5.9	"	"		5034	
376	"	"	皿B	3.2	[12.8]		7.6	"	"		5035	
377	"	"	"	2.9	12.9		7.8	"	"		5036	
45-378	"	"	鉢	—	[28.0]		—			内面象浅いため文様はっきりせず	唐津	5061
379	"	"	"	7.2	29.4		9.4	長石釉	長石釉		肥前・現川	5060
380	"	"	鉢A-1	5.2	[27.1]		[15.6]	灰釉	灰釉	黄瀬戸		5052
381	"	"	鉢A-3	—	[30.6]		—	"	"			5053
382	"	"	"	—	[35.8]		—	"	"			5054
383	"	"	鉢H-2	—	[20.2]		—	鉄釉	鉄釉			5125
384	"	"	鉢H-1	—	[36.4]		—	"	"			5122
385	"	"	"	—	7.4		[41.6]	"	"	「元山」刻印		5123
46-386	"	"	蓋B	1.4	5.5				"			5062
387	"	"	蓋A	1.9	6.3				"			5063
388	"	"	"	2.2	6.3				"			5064
389	"	"	蓋	1.4	5.5				灰釉			5065
390	"	"	蓋C	1.1	6.5				"			5066
391	"	"	"	1.1	7.8				"			5067
392	"	"	蓋B	2.1	9.3				"			5068
393	"	"	蓋C	2.7	9.7				"			5069
394	"	"	"	3.4	12.2				"			5070
395	"	"	蓋	—	[12.0]				"			5071
396	"	"	"	—	[10.6]				"			5072
397	"	"	蓋E	1.4	9.0				"			5075
398	"	"	"	1.6	9.2				"			5076
399	"	"	蓋D-3	—	15.8				"			5073
400	"	"	"	5.8	17.9				"			5074
401	"	"	蓋	—	—		—	鉄釉	鉄釉	上辺部20.6cm 底辺部13.6cm 四角形		5080
402	"	"	"	—	—		11.0			口唇部煤有 最大径[15.4]cm		5078
403	"	"	"	—	—		11.2			内面煤有 " 15.6cm		5079
404	"	"	合子	6.3	9.8	11.2	6.2	灰釉	灰釉			5081
405	"	"	"	3.1	6.1	7.0	4.9	"	"			5082
406	"	"	"	—	[5.6]	7.0	—	"	"			5083
407	"	"	香炉	—	[13.6]		—	鉄釉	鉄釉			5084
408	"	"	"	—	—		—	灰釉	灰釉	釘かへらで文様		5085
409	"	"	"	7.9	18.0		11.2	"	"			5086
410	"	"	鬘盥	—	—		—	"	"			5087
411	"	"	"	—	—		—	"	"			5088
412	"	"	灰落し	6.4	5.6		5.5		鉄釉+灰釉			5090
413	"	"	"	7.9	10.0		6.2		"			5089
414	"	"	唾壺	—	—	9.0	4.4	灰釉	灰釉			5109
415	"	"	"	6.8	[10.6]	8.7	5.2	"	"			5110
47-416	"	"	茶入れ	8.5	[3.6]	6.3	3.0	鉄釉	鉄釉+灰釉	口縁から肩に灰釉流す		5104
417	"	"	双耳壺	—	[6.0]	9.0	—	"	鉄釉			5105
418	"	"	"	—	[10.7]	14.1	—	"	"			5106

図版番号	遺構	器種	法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
47-419	SK130	陶器	短頸壺	—	[7.2]	—	—	鉄釉	鉄釉		E-5108
420	"	"	"	—	[11.2]	—	—	"	"		5107
421	"	"	鍋	—	16.0	—	—	"	"		5146
422	"	"	急須	—	[9.6]	—	—		灰釉		5111
423	"	"	水差し	—	—	—	7.2	長石釉	長石釉		5112
424	"	"	杓立て	10.8	5.2	6.8	6.0	灰釉	灰釉		5115
425	"	"	仏花瓶	12.3	5.9	4.8	6.0	鉄釉	鉄釉		5113
426	"	"	"	—	—	7.5	5.6	"	"		5514
427	"	"	德利B	—	—	9.0	6.7	灰釉	灰釉		5119
428	"	"	"	—	—	—	—	"	"		5120
429	"	"	"	—	—	—	—	鉄釉	鉄釉		5121
430	"	"	"	—	3.3	—	—	灰釉	灰釉		5116
431	"	"	"	—	—	11.4	7.8	—	鉄釉		5118
432	"	"	"	20.8	[2.4]	11.7	8.0	—	灰釉		5117
48-433	"	"	餌入れ	3.3	4.8		3.7	灰釉	"	鉄絵	5091
434	"	"	"	2.6	3.8		2.9	"	"		5092
435	"	"	餌挿り	3.8	9.7		3.7	鉄釉	鉄釉		5093
436	"	"	"	4.1	9.1		4.1	"	"		5094
437	"	"	"	3.8	[10.0]		4.0	"	"		5095
438	"	"	"	3.8	9.2		4.0	"	"		5096
439	"	"	"	3.9	10.0		[3.4]	"	"		5097
440	"	"	"	4.1	[9.6]		3.6	"	"		5098
441	"	"	"	3.1	[9.4]		4.5	"	"		5099
442	"	"	餌鉢	3.3	8.2		4.2	"	"		5101
443	"	"	"	3.3	[9.4]		4.4	"	"		5102
444	"	"	"	3.5	[10.0]		4.0	"	"		5100
445	"	"	"	3.9	[8.6]		4.4	"	"		5103
446	"	"	鉢F-1	—	[21.2]		—	灰釉	灰釉	釉剥落	5058
447	"	"	鉢F-2	—	[28.0]		—	"	"		5057
448	"	"	鉢F-3	12.8	[28.8]		[17.2]	"	"		5056
449	"	"	鉢F-4	16.0	[30.6]		[15.2]	"	灰釉+鉄釉	ゆがみが激しい	5127
450	"	"	水甕	—	—		19.6	"	"	常滑	5126
451	"	"	甕	—	[29.6]		—				5136
452	"	"	"	—	[37.4]		—				5140
453	"	"	"	—	[36.4]		—				5141
454	"	"	浅鉢	5.1	[21.2]		14.1				5130
455	"	"	"	6.4	[22.8]		16.1				5134
456	"	"	"	5.2	[26.6]		15.8				5131
457	"	"	"	6.3	28.4		20.3				5132
458	"	"	"	—	[28.0]		—				5133
459	"	"	"	9.6	28.2		19.6				5135
460	"	"	甕	—	[24.0]		—			内外面うすい釉をぬっている	5138
461	"	"	"	—	[21.0]		—				5137
462	"	"	半胴甕	25.5	26.8		17.6	鉄釉	鉄釉		4044
50-463	"	土器	内耳鍋	—	[35.0]		—				5207
464	"	"	"	—	[34.8]		—				5209
465	"	"	"	—	[24.0]		—				5211
466	"	"	小形鍋	4.4	[7.2]		—			三足	5147
467	"	瓦器	火鉢	12.0	[17.0]	[21.6]	[15.0]			外面スタンプ	5145
468	"	陶器	蓋	1.8	8.3			長石釉	長石釉	志野織部 内面煤付着	5077
469	"	"	皿I-1	2.4	11.6		4.6	鉄釉	鉄釉	外面腰~底部釉をふきとる	5047
470	"	"	皿I-3	2.6	12.9		5.0	"	"		5045
471	"	"	皿I-1	2.6	12.8		5.6	"	"		5046
472	"	土器	皿	1.7	[8.0]		[4.2]				5154
473	"	"	"	1.9	[8.0]		[4.2]				5155
474	"	"	"	2.0	[8.4]		[4.4]				5153
475	"	"	"	1.8	9.4		5.1				5163
476	"	"	"	2.0	[9.6]		4.2				5164
477	"	"	"	2.2	[10.0]		5.2				5165
478	"	"	"	20.3	9.6		5.6				5166

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
50-479	SK130	土器	皿	2.2	[10.8]		[5.2]			底に径4mmの穿孔	E-5203
480	"	"	"	2.5	11.6		5.2			底に鉄の角釘〔5mm〕有	5200
481	"	"	"	2.1	[11.6]		5.8			底に径4mmの穿孔	5201
482	"	"	"	2.3	[12.4]		[6.0]			底に径3mmの穿孔	5199
483	"	"	"	2.4	12.0		6.1			被熱の為釉剥落	5177
484	"	"	"	2.5	11.2		5.6				5178
485	"	"	"	2.6	12.4		6.7				5179
486	"	"	"	2.2	11.6		5.6				5180
487	"	"	"	3.0	[14.4]		8.0			全面に煤付着	5188
488	"	"	"	3.1	[14.6]		7.1			"	5191
489	"	"	"	2.6	[15.3]		7.3			幅3cmのみ煤付着	5192
490	"	"	"	3.8	17.5		[8.8]				5194
491	"	"	"	3.5	[17.4]		[8.2]			内面煤付着	5196
492	"	"	"	3.7	[17.0]		[8.8]				5198
51-493	"	磁器	椀A	5.0	10.6		4.4		呉須絵		肥前 4003
494	"	"	"	5.5	10.2		4.4		"	しょうぶ柄3分割	4002
495	"	"	"	5.5	10.0		4.0		"	「福」	肥前 4000
496	"	"	"	5.2	10.0		4.0		"		4001
497	"	"	"	5.5	9.2		4.1		"		4004
498	"	"	"	—	—		4.0		"	「大明年製」	肥前 4007
499	"	"	小椀A-1	4.7	8.8		3.4		"		" 4005
500	"	"	"	4.3	8.4		3.2		"		" 4006
501	"	"	"	—	7.6		—		"	産地不明	4019
502	"	"	小椀A-2	4.0	7.0		2.4		"		肥前 4018
503	"	"	小椀B	4.0	8.0		3.4	呉須絵	"		瀬戸 4016
504	"	"	小椀A-1	3.6	7.5		3.4		"	桐文が二つで1組になり4組巡る	4017
505	"	"	小椀C-1	5.1	7.8		3.8		"		肥前 4014
506	"	"	小椀C-2	5.4	8.0		5.0		"	産地不明	4012
507	"	"	小杯A-2	2.4	4.0		1.4		"		肥前 4025
508	"	"	"	—	6.0		—		"		4028
509	"	"	"	3.0	5.8		2.2		"		肥前 4022
510	"	"	"	2.5	6.6		2.7		"		4023
511	"	"	小杯A-1	3.0	6.2		2.4		"		肥前 4020
512	"	"	"	2.8	6.0		2.3		"		4021
513	"	"	小杯B-1	2.7	4.8		2.0		"	赤絵	肥前 4024
514	"	"	"	3.5	5.0		2.4		呉須絵		" 4026
515	"	"	"	—	—		3.2		"		" 4013
516	"	"	"	5.4	5.1		3.1		"	18C初	" 4011
517	"	"	蓋	1.6	5.4				呉須絵		4037
518	"	"	"	1.4	7.2				"		肥前 4038
519	"	"	仏飯具	5.2	7.7		3.9		"	産地不明	5128
520	"	"	"	—	—		3.0		"		肥前 4034
521	"	"	香炉	4.5	7.0	7.0	—		"	青磁	産地不明 4036
522	"	"	壺	—	—	9.8	6.0		呉須絵		4033
523	"	"	皿F-2	—	3.6		—		"	円ではなく楕円型を呈す	肥前 4043
524	"	"	皿F-1	1.5	5.8		3.5		"	産地不明	4042
525	"	"	"	1.2	6.5		4.0		"		5129
526	"	"	皿A	2.3	9.6		5.6	呉須絵	呉須絵	呉須で梅等の文様描きその上に又呉須をぬる	4029
527	"	"	"	3.0	11.6		5.8	"	"		肥前 4030
528	"	"	"	3.7	13.4		8.0	"	"	五弁花印	" 4031
52-529	SK189	陶器	椀B-3	—	[16.4]		—	灰釉	灰釉		4209
530	"	"	"	—	—		6.9	"	"		4207
531	"	"	"	—	[13.8]		—	"	"		4206
532	"	"	"	9.9	13.6		6.4	"	"		4205
533	"	"	"	—	—		5.6	"	"		4208
534	"	"	椀A-1	—	[11.4]		—	"	"		4296
535	"	"	椀	6.5	11.6		3.6	"	"	鉄絵巴文風	4225
536	"	"	椀G	5.2	10.8		3.2	"	"	鉄絵〔柳〕有	4216
537	"	"	椀C-1	7.4	11.2		5.3	"	"	鉄釉による文様〔流し〕	4287
538	"	"	"	8.0	11.4		5.2	"	"	鉄釉による文様〔流し〕	4288

図版番号	遺構	器種	法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
52-539	SK189	陶器	碗C	7.9	11.8		4.8	鉄釉	鉄釉		E-4289
540	"	"	"	6.1	10.8		4.4	"	"		4290
541	"	"	碗C-2	6.5	9.4		4.8	灰釉	灰釉	口唇部・高台部-鉄釉	4221
542	"	"	碗C	6.3	10.6		2.7	"	"		4218
543	"	"	小碗C	6.6	10.7		3.7	"	"	鉄絵	信楽 4217
544	"	"	小碗D	4.9	7.4		3.4	長石釉	長石釉		4224
545	"	"	碗B-5	4.8	[6.4]		3.8	灰釉	灰釉		4321
546	"	"	"	5.5	9.0		4.2	"	"		4212
547	"	"	"	5.5	8.4		3.4	鉄釉	鉄釉		4294
548	"	"	"	5.1	10.0		4.0	灰釉	灰釉	鉄絵	4213
549	"	"	"	5.5	9.4		2.8	"	"		4214
550	"	"	"	5.8	9.0		3.0	"	"	鉄絵[松]	4215
551	"	"	碗C-3	6.0	9.8		5.6	"	"	文様	4219
552	"	"	"	6.0	9.5		5.0	"	"	梅文様 二次被熱により黒くくすむ	4220
553	"	"	"	—	9.6		—	銅緑釉	銅緑釉		4222
554	"	"	鉢C	—	[9.8]		—	灰釉	灰釉		4223
53-555	"	"	皿A-2	4.1	13.6		6.6	"	"		4266
556	"	"	"	4.1	14.0		6.0	"	"		4267
557	"	"	"	3.5	14.2		7.2	"	"		4268
558	"	"	皿A-1	2.6	[12.2]		[7.2]	"	"	被熱のため白くかせる	4330
559	"	"	皿F	2.7	12.8		7.2	"	"		4308
560	"	"	皿H	3.7	12.7		3.7	"	"	見込み部に布目痕有	4328
561	"	"	杯	3.9	11.2		6.2	"	"	襷絵(?)	4227
562	"	"	皿H	2.2	8.6		4.0	"	"	内面鉄絵	4329
563	"	"	皿A	2.5	[9.9]		4.1	"	"	重ね焼き痕	4332
564	"	"	"	2.6	[12.0]		[6.2]	"	"		4331
565	"	"	皿D	2.4	14.6		7.6	"	"		4257
566	"	"	皿A-2	—	[13.6]		—	"	"		4307
567	"	"	"	—	[17.0]		—	"	"		4254
568	"	"	合子	2.9	5.2		3.0	"	"		4232
569	"	"	餌入れ	2.9	[4.5]		3.1	"	"		4351
570	"	"	"	2.8	[6.0]		[4.0]	"	"		4352
571	"	"	小壺	—	—		3.1				4324
572	"	"	茶入れ	—	—		3.7	鉄釉	鉄釉		4326
573	"	"	"	—	—		[4.0]	"	"		4325
574	"	"	壺	—	—		5.6	灰釉	灰釉		4303
575	"	"	杓立て	—	—		5.6	"	"		4299
576	"	"	"	9.0	5.8		5.6	"	"		4298
577	"	"	"	10.7	6.0		5.8	"	"	口唇部打ち欠く 灰落し(?)	4297
578	"	"	乗燭	4.9	5.0		4.5	鉄釉	鉄釉	芯欠損 底部に穿孔	4349
579	"	"	"	4.6	4.6		4.0	"	"	底部に穿孔	4348
580	"	"	"	2.0	3.5		2.2	灰釉	灰釉	芯欠損	4350
581	"	"	皿I-2	1.6	7.8		4.2	鉄釉	鉄釉		4259
582	"	"	"	1.9	10.5		4.3	"	"		4258
583	"	"	皿I-3	—	9.8		—	"	"		4264
584	"	"	"	1.9	10.2		5.2	"	"		4263
585	"	"	"	1.8	9.9		4.4	"	"		4265
586	"	"	皿I-1	1.9	11.0		4.2	"	"		4260
587	"	"	"	2.1	10.8		5.6	"	"		4261
588	"	"	"	1.8	11.3		4.4	"	"		4262
54-589	"	"	鉢F-3	—	20.4		—	灰釉	灰釉		4230
590	"	"	"	13.5	28.0		16.8	"	"		4229
591	"	"	鉢F-2	11.2	22.0		10.6	"	"	中に粘土塊痕	4228
592	"	"	鍋	—	[20.4]		—	鉄釉	鉄釉		4309
593	"	"	"	—	[24.4]		—	"	"		4347
594	"	"	大皿	5.2	26.7		8.6	灰釉	灰釉	内面に鉄釉流し トチン痕	4250
595	"	"	水差し	11.2	10.2		6.2	"	"		4356
596	"	"	香炉	7.1	[11.6]		[7.7]	"	"		4353
597	"	"	匣鉢	—	[14.4]		—				4354
598	"	"	香炉	—	[15.5]		—	灰釉	灰釉		4338

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
54-599	S K189	陶器	壺	—	15.4	17.2	—	灰釉	灰釉		4235	
600	〃	〃	〃	—	[8.4]		—	鉄釉	鉄釉+灰釉		4341	
55-601	〃	〃	蓋B	1.4	4.1		—	灰釉	灰釉		4346	
602	〃	〃	〃	—	[9.0]		—	〃	〃		4345	
603	〃	〃	蓋C	3.6	14.5		—	〃	〃		4241	
604	〃	〃	蓋A-1	2.2	8.8		—	〃	〃		4245	
605	〃	〃	〃	2.0	10.5		—	鉄釉	鉄釉		4243	
606	〃	〃	〃	3.4	14.0		—	〃	〃		4242	
607	〃	〃	蓋C	—	8.2		—	灰釉	灰釉		4344	
608	〃	〃	蓋	—	[11.7]		—	〃	〃		4343	
609	〃	〃	蓋E	1.6	12.5		—	〃	〃		4342	
610	〃	〃	鉢C-2	6.0	21.0		7.7	〃	〃	呉須による線	4253	
611	〃	〃	鉢A-2	7.3	28.4		15.6	銅緑釉	〃	内面に銅緑釉流し 内面花卉の印	4252	
612	〃	〃	鉢A-3	—	38.2		—	灰釉	〃	鉄絵 笠原鉢	4251	
613	〃	〃	鉢H-2	7.5	19.8		8.6	鉄釉	鉄釉		4362	
614	〃	〃	鉢H-1	12.4	[31.8]		[13.0]	〃	〃		4363	
615	〃	〃	仏花瓶	—	—	[7.9]	—	灰釉	灰釉	底部鉄釉	4358	
616	〃	〃	徳利	—	—	2.8		鉄釉	鉄釉		4339	
617	〃	〃	〃	—	2.8	—	—	〃	〃		4238	
618	〃	〃	徳利B	—	—	10.8	8.0	灰釉	灰釉+鉄釉	肩部鉄釉 胴部~底部灰釉	4236	
56-619	〃	〃	甕	—	[29.0]	—	—	鉄釉	鉄釉	肩部に六条の沈線	4359	
620	〃	〃	半胴甕	—	[23.4]	—	—	〃	〃		4246	
621	〃	〃	鉢J-2	11.5	17.4	28.0	13.8	〃	〃	三足欠損	4234	
622	〃	〃	鉢	5.6	[25.6]		[19.0]				常滑	4360
623	〃	〃	〃	—	[28.0]						〃	4361
624	〃	〃	七輪	22.7	14.0	15.8	14.2			四足		4282
57-625	〃	〃	鉢I-1	—	21.7			灰釉	灰釉			4285
626	〃	〃	〃	—	[21.4]		—	〃	〃			4280
627	〃	〃	〃	—	[16.0]		—	〃	〃			4283
628	〃	〃	〃	—	—	11.9	10.6	〃	〃			4284
629	〃	磁器	椀A	—	[14.0]		—					4311
630	〃	〃	〃	5.7	10.2		4.2			底に文様「印状」		4270
631	〃	〃	小椀A-2	—	[10.2]		—				肥前	4271
632	〃	〃	〃	5.4	10.0		4.8			底に絵「印」あるが不明	〃	4272
633	〃	〃	〃	5.0	10.0		3.8					4274
634	〃	〃	〃	4.5	8.2		3.4					4275
635	〃	〃	小椀C-1	7.7	10.8		5.6				肥前	4273
636	〃	〃	椀D	6.9	8.4		4.0			コンニャク判五弁花	〃	4276
637	〃	〃	小杯A-1	3.7	7.4		3.4				〃	4277
638	〃	〃	椀A	5.2	10.2		4.2		青磁釉	コンニャク判五弁花		4269
639	〃	〃	皿B	1.8	8.5		5.0			外面に「印」風文字		4278
640	〃	〃	皿A	—	—		7.6			底に「福」(?)コンニャク判五弁花		4317
641	〃	〃	仏飯具	5.2	5.0		3.3					4316
642	〃	〃	〃	5.6	8.1		3.9					4315
643	〃	〃	蓋	1.6	6.6		—			つまみがつぼみになる		4313
644	〃	〃	小蓋	1.8	6.0		—			赤絵		4314
645	〃	〃	水滴(?)	2.9	—		—			上絵付		4310
646	〃	〃	小壺	—	—	10.0	5.0					4179
58-647	S K173	陶器	椀B	6.9	[13.5]	1.3	6.3	鉄釉	鉄釉	内外口縁下より白濁気味		5359
648	〃	〃	椀C	—	[11.2]		—	〃	〃	部分的に長石釉流す		5360
649	〃	〃	椀	—	[11.2]		—	〃	鉄釉+灰釉	口縁部灰釉をかける		5361
650	〃	〃	椀H	—	[13.6]		—	〃	鉄釉			5362
651	〃	〃	椀	—	—		5.4	〃	〃			5363
652	〃	〃	〃	—	—		4.6	〃	灰釉	釉と素地の境に緋色がでる		5364
653	〃	〃	椀B-4	—	[13.8]		—	灰釉	〃			5365
654	〃	〃	椀E	6.5	[10.3]		6.7	〃	〃	呉須で楼閣山水		5366
655	〃	〃	椀	—	[13.4]		—	長石釉	長石釉	口唇部鉄釉・鉄絵		5367
656	〃	〃	椀H	6.2	[12.1]		5.4	灰釉	灰釉	枝部鉄釉・花卉白濁釉		5368
657	〃	〃	小椀B-1	—	[8.5]		—	〃	〃	口縁銅緑釉		5370
658	〃	〃	椀B	—	[12.0]		—	銅緑釉	銅緑釉	19C		5371

図版番号	遺構	器種	法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
58-659	S K 173	陶器	椀H	5.7	[11.4]		4.6	灰釉	灰釉	19C呉須と鉄釉のくりかえし 麦藁手	E-5369
660	"	磁器	椀A	—	[10.6]		—			腰部鉄釉 18C 伊万里	5412
661	"	"	椀B	6.4	11.3		5.0			"	5413
662	"	"	小椀	4.9	[9.9]		4.2				5414
663	"	"	小椀A-2	—	[8.0]		—			19C(?) 伊万里	5415
664	"	"	"	4.2	[6.6]		2.8			ノミ彫りの間に「寿」字	5417
665	"	"	小壺	—	—		[3.2]			上絵付の痕跡	5419
666	"	"	小杯A-2	2.2	[6.4]		[3.0]			蓋(?)	5416
667	"	"	皿F-2	1.5	4.5		1.3				5418
668	"	陶器	香合	—	[7.4]		—	灰釉	灰釉		5381
669	"	"	餌入れ	—	[3.2]		—	鉄釉	鉄釉		5382
670	"	"	鬚盥	4.0	[12.2]		[12.8]	灰釉	灰釉		5383
671	"	"	蓋	—	—		6.7		鉄釉	全体が紫色になる	5398
672	"	"	蓋E	1.5	—		[11.6]	灰釉	灰釉		5379
673	"	"	蓋C	—	—		[9.4]	"	"		5380
674	"	"	皿	—	—		6.6	"	"	呉須絵	5373
675	"	"	皿H	1.5	—		4.0	"	"	型押し 内面布目痕 三足	5375
59-676	"	"	土瓶	—	[10.5]	—	—	"	"		5390
677	"	"	鉢F	—	[19.8]		—	"	"		5377
678	"	"	杓立て	—	—	—	—	"	"	文様不詳	5384
679	"	"	半胴甕	—	[11.8]	—	—	鉄釉	鉄釉		5389
680	"	"	"	—	[15.2]	—	—	"	"		5388
681	"	"	水差し	—	—	—	5.4	灰釉	灰釉		5387
682	"	"	風炉	—	[21.6]	—	—	"	"		5385
683	"	"	鉢H-2	—	[20.0]		—	鉄釉	鉄釉		5395
684	"	"	鉢I-1	—	—		7.5	"	"		5392
685	"	"	"	12.6	[15.6]		8.5	灰釉	灰釉		5393
686	"	"	甕	—	[36.8]	—	—			常滑	5396
687	"	土器	内耳鍋	—	[33.5]		—				5397
688	"	"	皿	—	[6.6]		—				5400
689	"	"	"	0.9	[6.6]		3.5				5401
690	"	"	"	1.5	6.4		2.9				5402
691	"	"	"	2.0	[8.8]		5.2				5403
692	"	"	"	1.9	[10.0]		6.0				5404
693	"	"	"	2.3	10.2		6.0			底部穿孔	5407
694	"	"	"	2.0	[11.4]		6.4				5406
695	"	"	"	2.5	[12.0]		7.2				5405
696	"	陶器	加工円板	—	—		—	鉄釉	鉄釉	播鉢片	5408
697	"	"	"	—	—		—	長石釉	長石釉		5409
698	"	"	"	—	—		—	"	"	四片	5411
699	"	"	"	—	—		—			瓦片	5410
60-700	S K 162	"	椀B-4	—	[13.0]		—	灰釉	灰釉		5429
701	"	"	椀E	—	[10.0]		—	"	"		5431
702	"	"	"	—	—		[5.0]	"	"		5432
703	"	"	椀B-5	6.8	[10.0]		[4.0]	"	"		5430
704	"	"	椀C-2	5.3	10.3		4.6	鉄釉	鉄釉+灰釉		5433
705	"	"	"	—	[9.4]		—	"	"		5434
706	"	"	椀H	5.7	11.0		4.3	長石釉	長石釉	鉄絵	5437
707	"	"	"	—	[11.4]		—	"	"		5436
708	"	"	"	5.7	11.2		4.8			鉄釉・呉須の縦線・麦藁手	4045
709	"	"	椀	6.6	11.3		4.2	長石釉	長石釉		5435
710	"	"	"	4.1	[8.8]		[3.3]	灰釉	灰釉	現川	5441
711	"	"	"	—	—		3.6	"	"		5442
712	"	"	"	—	—		4.4	鉄釉	鉄釉	内面に朱の付着物	5439
713	"	"	"	—	—		[5.5]	"	"		5440
714	"	"	"	—	—		[5.6]	"	"		5453
715	"	"	椀C	—	—		[5.6]	灰釉	灰釉		5446
716	"	"	"	—	—		[5.4]	"	"		5447
717	"	"	小鉢	—	[8.4]		—	長石釉	長石釉		5449
718	"	"	椀	—	—		4.0	灰釉	灰釉	底部墨書「三」	5450

図版番号	遺構	器種	法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
719	S K162	陶器	皿A-2	—	—		[6.7]	灰釉	灰釉	内底の真中のみ施釉	E-5454
720	"	"	"	—	—		5.5	"	"		5451
721	"	"	"	—	[13.0]		—	"	"		5452
722	"	"	"	3.8	[12.2]		5.6	"	"	呉須絵	5458
723	"	"	皿A-1	2.1	[10.2]		[5.8]	"	"	"	5457A
724	"	"	"	2.0	[9.8]		[5.8]	"	"	"	5457B
725	"	"	鉢C	—	[12.8]		—	"	"	"	5459
726	"	"	皿	2.0	[10.0]		[7.0]	"	"	鉄絵	5455
727	"	"	皿H	1.8	8.8		6.2	長石釉	長石釉	志野織部・内面に布目痕	5456
728	"	"	戸車	1.05	4.4		—	無釉	無釉	周円部に灰釉	5577
729	"	"	大皿	4.3	25.4		—	長石釉	長石釉	口唇部鉄釉・馬目皿	5461
730	"	"	鉢A-1	—	33.0		—	灰釉	灰釉+銅緑釉	黄瀬戸	5460
61-731	"	"	香炉	—	[12.4]		—	"	灰釉		5489
732	"	"	香合	—	[9.6]		—	"	"		5486
733	"	"	"	1.5	5.0		4.9	"	"		5485
734	"	"	"	2.2	5.1		5.2	"	"		5484
735	"	"	香炉	—	—		—	"	"		5490
736	"	"	小型鍋	25.0	[6.0]		2.3	鉄釉	鉄釉	三足有	5481
737	"	"	餌入れ	3.6	6.9		7.2	灰釉	灰釉		5487
738	"	"	"	2.5	[4.5]		4.2	"	"		5480
739	"	"	"	3.5	[6.6]		3.4	鉄釉	鉄釉		5478
740	"	"	"	3.7	[6.9]		3.2	"	"		5479
741	"	"	双耳壺	9.5	9.6	—	7.2	灰釉	灰釉	白土化粧	5498
742	"	"	柄杓	—	8.2		—	"	"	内面に一条呉須線	5465
743	"	"	"	4.9	[8.4]		5.3	"	"	"	5064
744	"	"	水差し	5.5	5.0	—	3.6	鉄釉	鉄釉	"	5467
745	"	"	"	8.6	6.8	—	5.4	"	"		5466
746	"	"	小壺	10.9	2.0	—	3.8	長石釉	長石釉	鉄器	5497
747	"	"	德利A	—	3.5	—	—	鉄釉	鉄釉		5494
748	"	"	德利	—	—	—	5.8	"	"	墨書不明	5493
749	"	"	德利D	12.5	1.9		5.1	灰釉	灰釉		5495
750	"	"	鉢F-2	8.5	[15.4]		7.2	"	"		5448
751	"	"	鉢F-1	—	[19.2]		—	白濁釉	白濁釉		5462
752	"	"	火鉢	—	[21.0]		—	鉄釉	鉄釉		5503
753	"	"	鉢F-4	—	[29.2]		—	灰釉	灰釉		5499
754	"	"	花生	—	10.8		—	鉄釉	鉄釉	19C (勇衛門)	5502
62-755	"	"	鍋	—	20.4		—	"	"		5518
756	"	"	"	10.1	24.8		7.6	"	"	取手穴3ヶと2ヶ 底部煤付着	5517
757	"	"	"	12.1	25.1		7.2	"	"	取手穴3ヶと1ヶ	5519
758	"	"	"	12.4	25.6		7.4	"	"	底部煤付着	5520
759	"	"	"	11.2	21.4		[8.3]	"	"	取手穴3ヶと1ヶ	5521
760	"	"	"	—	21.0		—	"	"	"	5522
761	"	"	甕	—	17.0	—	—	灰釉	灰釉		5543
762	"	"	涼炉	—	—		13.0	鉄釉	鉄釉		5501
763	"	"	鉢H-2	8.6	17.4		8.4	"	"	9本で1単位[38単位]	5506
764	"	"	"	—	[17.0]		—	"	"		5507
765	"	"	"	—	[16.0]		—	"	"		5508
766	"	"	"	—	—		7.7	"	"	内底同心円状	5511
767	"	"	"	—	—		[6.0]	鉄釉	鉄釉		5510
768	"	"	"	—	—		[9.2]	"	"		5509
63-769	"	"	鉢H-1	—	[36.4]		—	"	"		5505
770	"	"	甕	—	31.7	—	—	"	"	沈線五条	5515
771	"	"	蓋E	1.1	6.9		—		灰釉		5473
772	"	"	蓋A-2	1.2	4.8		—		"	呉須絵	5477
773	"	"	"	1.2	[5.5]		—		鉄釉		5476
774	"	"	"	2.0	[9.4]		—		灰釉		5474
775	"	"	蓋D-1	3.4	[13.6]		—		"		5470
776	"	"	"	3.7	[17.4]		—	鉄釉			5471
777	"	"	蓋C	3.7	11.2		—		灰釉		5468
778	"	"	"	3.7	11.2		—	灰釉	"	鉄絵	5469

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
63-779	S K162	陶器	鉢K-1	17.9	24.8		16.1	灰釉	鉄釉+灰釉	内底部トチン痕5カ所	E-5549
780	"	"	鉢K-2	17.8	26.5		13.9	"	灰釉	" 4カ所	5550
781	"	"	火鉢	—	—		22.4	鉄釉	鉄釉		5491
64-782	"	"	半胴甕	18.4	[20.7]		14.4	"	"	口唇上部・内底部トチン痕	5531
783	"	"	"	—	[21.0]		—	"	"	口唇上部トチン痕	5512
784	"	"	"	—	[19.6]		—	"	"		5525
785	"	"	"	14.3	22.6		16.0	"	"	口唇トチン痕6カ所	5516
786	"	"	"	12.9	[21.4]		14.8	"	"	口唇部に長方形のピン痕	5530
787	"	"	"	13.1	18.0		12.7	"	"		5529
788	"	"	"	12.4	15.2		11.5	"	"		5528
789	"	"	"	—	[25.2]		—	"	"	口唇上部にトチン痕	5513
65-790	"	"	"	12.8	[21.6]		[13.9]	"	"	半胴甕を転用 楕円形にゆがむ	5526
791	"	"	"	12.4	15.2		11.5	"	"		5527
792	"	"	鉢I-1	—	29.9		—	灰釉	灰釉		5544
793	"	"	"	—	[19.8]		—	鉄釉	鉄釉	一部に白濁釉流れる	5534
794	"	"	"	—	[16.5]		—	灰釉	灰釉+銅緑釉		5541
795	"	"	"	—	[16.0]		—	"	"	白濁釉とブルー系の釉を交互に流す	5542
796	"	"	"	—	—		[11.4]	鉄釉	鉄釉		5537
797	"	"	"	—	—		13.9		鉄釉+白濁釉	底部にくぼみ3カ所	5535
798	"	"	"	10.3	[9.4]		[7.1]	灰釉	灰釉		5545
799	"	"	"	—	[9.8]		—	鉄釉	鉄釉		5523
800	"	"	"	9.8	[12.4]		8.2	"	"		5524
801	"	"	"	—	—		9.6	"	"	墨書「〇」	5538
802	"	"	"	—	[10.2]		—	"	"		5540
803	"	"	"	—	[10.6]		—	"	"		5539
804	"	"	"	—	[11.8]		—	灰釉	灰釉		5547-(B)
805	"	"	"	—	[11.4]		—	"	灰釉+銅緑釉		5446-(B)
806	"	"	"	—	—		[8.4]	"	灰釉		5547-(A)
807	"	"	"	—	—		[8.6]	"	"		5548
808	"	"	"	—	—		8.0		鉄釉		5583
809	"	"	"	—	—		5.8	灰釉	灰釉		5546-(A)
66-810	"	"	皿I-2		[10.8]		—	鉄釉	鉄釉		5557
811	"	"	"	—	[10.8]		—	"	"		5558
812	"	"	"	—	[11.2]		—	"	"		5559
813	"	"	皿I-1	1.4	[7.8]		[3.4]	"	"		5564
814	"	"	"	1.7	[8.0]		[3.0]	"	"		5562
815	"	"	"	2.0	[9.0]		[3.6]	"	"		5563
816	"	"	"	1.9	10.2		3.6	"	"		5561
817	"	"	"	1.5	7.5		3.1	灰釉	灰釉		5565
818	"	"	乗燭	—	—		3.0	"	"		5560
819	"	瓦器	火鉢	20.9	[18.2]		17.0			へらみがき 内外面黒色 穴2カ所	5500
820	"	土器	内耳鍋	—	[29.2]		—				5575
821	"	"	"	—	[40.0]		—				5576
822	"	"	皿	0.9	[5.6]		3.2				5574
823	"	"	"	—	[3.4]		—				5572
824	"	"	"	0.9	[6.8]		4.6			一部煤付着	5573
825	"	"	"	1.0	7.2		3.8				5571
826	"	"	"	0.9	[7.8]		5.6				5570
827	"	"	"	—	—		3.8				5569
828	"	"	"	2.0	[10.0]		6.2				5568
829	"	"	"	—	—		4.6				5567
830	"	陶器	甕	30.2	35.3		18.7			内面に厚く付着物	5556
67-831	"	"	七輪	—	[20.8]		—				5554
832	"	"	蓋	2.8	[17.2]		10.4			火消し壺(?)	5553
833	"	"	蚊いぶし	—	[20.1]		—			内面に厚く煤付着	5552
834	"	"	"	—	[19.0]		—			内面煤付着	5551
835	"	土器	土錘	4.3	—	1.7	—				5578
836	"	"	"	3.6	—	1.2	—				5579
837	"	"	"	3.1	—	1.2	—				5580
838	"	"	"	2.2	—	1.2	—				5581

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
67-839	S K162	磁器	椀B	6.3	11.6		4.4			瀬戸	E-4052
840	"	"	椀E	6.8	11.4		4.2			麦藁手	" 4051
841	"	"	椀A	6.2	12.4		4.2		青磁	内面に呉須絵	肥前 4085
842	"	"	椀B	5.9	11.4		4.8			ガラスによる接合	4054
843	"	"	椀A	5.7	10.0		4.4			" 花のみ印刻	瀬戸 4055
844	"	"	"	5.4	9.8		4.0				" 4056
845	"	"	"	5.6	10.2		4.4				" 4057
846	"	"	"	4.7	9.4		4.6			ガラスによる接合	4064
847	"	"	椀B	5.2	9.2		4.2			"	4058
848	"	"	小椀B	4.5	8.0		3.0			釉中に気泡多い	瀬戸 4063
849	"	"	椀C	6.7	10.9		6.2				4047
850	"	"	"	6.3	11.0		6.4				4049
851	"	"	"	6.5	12.0		5.3				4046
852	"	"	"	5.3	10.0		5.4				4048
853	"	"	"	5.1	9.8		5.6				4050
68-854	"	"	椀D	8.0	8.4		4.8				4062
855	"	"	"	—	8.6		—				4061
856	"	"	椀A	5.5	9.0		3.2				4060
857	"	"	小椀C-3	4.6	6.4		4.4				4070
858	"	"	小椀A-2	3.4	6.2		4.2				4065
859	"	"	小椀A-1	2.9	6.4		2.2				4066
860	"	"	小椀B	3.3	6.4		2.3				4067
861	"	"	角皿	2.2	8.9		5.5				4077
862	"	"	皿A	1.3	6.0		3.9				4081
863	"	"	皿F-2	1.2	4.5		1.6				4082
864	"	"	"	1.4	4.5		1.5				4083
865	"	"	仏飯具	5.4	6.2		3.8				4084
866	"	"	小椀C-2	—	—		5.4				4069
867	"	"	鉢	4.7	13.2		10.4				4078
868	"	"	蓋	2.0	7.6						4072
869	"	"	"	2.4	7.8						4073
870	"	"	"	2.3	8.0						4074
871	"	"	鉢	—	—		5.6			コンニャク判五弁花	肥前 4079
872	"	"	皿	—	—		9.4			蛇の目高台	4076
873	"	"	鉢B	8.0	17.2		8.0			8角形 2つの文様のくり返し	肥前 4075
874	"	"	鉢A-1	6.3	15.4		6.8			ガラスによる接合	" 4075
69-875	S X101	陶器	椀B-3	9.3	13.8		6.2	灰釉	灰釉		4691
876	"	"	"	8.5	14.4			"	"		4690
877	"	"	椀B-5	6.7	[14.7]			"	"	顔の部分鉄釉 それ以外呉須	4696
878	"	"	椀B	—	—		5.0	"	"		4693
879	"	"	"	7.7	9.7		5.0	"	"		4694
880	"	"	椀H	6.2	12.0			鉄釉	鉄釉		4685
881	"	"	椀	5.2	11.6			"	"	うすい鉄化粧	4689
882	"	"	"	—	—		4.9	"	"		4688
883	"	"	"	—	—		4.4	鉄釉+灰釉	鉄釉		4687
884	"	"	椀B	—	—		4.8	"	"		4686
885	"	"	"	—	—		4.3	灰釉	灰釉	鉄絵	4672
886	"	"	"	—	—		4.0	"	"	呉須絵 (小杉文)	4679
887	"	"	皿A-3	—	—		2.9	"	"		4682
888	"	"	"	4.6	[11.2]		[5.0]	"	"		4675
889	"	"	椀	5.1	[11.6]		[4.2]	"	"	銅緑釉の上絵付	4680
890	"	"	椀F	5.8	10.4		5.4	"	"	呉須文様	4697
891	"	"	椀C-3	6.7	8.8		4.6	"	"	鉄絵 底部に墨書「用」	4695
892	"	"	皿	—	—		4.2				現川 4678
893	"	"	椀	—	—		[6.8]				4677
894	"	"	皿A-2	4.9	8.8		4.9	灰釉	灰釉	十五弁花 内面輪禿	4600
895	"	"	皿A-1	2.3	[10.2]		5.7	長石釉	長石釉		4604
896	"	"	"	2.2	[10.4]		5.0	"	"		4605
897	"	"	"	1.9	[11.7]		6.4	"	"	ピン痕	4607
898	"	"	"	2.3	[11.6]		[6.2]	"	"		4606

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
69-899	S X101	陶器	皿A-1	2.3	11.5		6.6	長石釉	長石釉		E-4608
900	"	"	"	2.1	11.7		6.8	"	"	ピン痕2カ所	4609
901	"	"	皿D	5.6	[12.0]		7.5	灰釉	灰釉	内見込み部鉄絵(蘭竹文)	4603
902	"	"	"	2.6	13.3		7.1	"	"	ピン痕2カ所	4594
903	"	"	皿	2.8	13.1		6.8	"	"		4597
904	"	"	"	2.8	11.8		6.3	"	"		4598
905	"	"	皿A-2	2.6	12.0		7.2	"	"	呉須絵	4599
906	"	"	皿A-1	2.0	10.8		5.2	長石釉	長石釉	志野織部	4602
907	"	"	"	2.0	[10.2]		4.6	"	"	鉄絵 碁笥底	4601
70-908	"	"	鉢D	7.7	18.8		[8.4]	"	"	碁笥底 鉄絵	4669
909	"	"	鉢	—	—		[10.0]	鉄釉	鉄釉	三島手風	4670
910	"	"	"	—	—		[7.8]				4671
911	"	"	鉢C-2	—	—		9.4				4676
912	"	"	皿	3.5	[13.2]		6.2			絵瀬戸	4674
913	"	"	鉢	—	[10.1]		—	鉄釉			4204
914	"	"	大皿	1.7	21.3		15.9	長石釉	長石釉	志野織部 宝珠文 行灯皿	4667
915	"	"	小壺	6.8	23.8	—	13.4	"	"		4504
916	"	"	"	—	[10.0]	—	—	鉄釉	鉄釉		4503
917	"	"	甕	—	[20.8]	—	—	"	"		4506
918	"	"	"	—	[20.8]	—	—	"	"		4505
71-919	"	"	香炉	6.6	[13.9]	—	9.0	"	"	灰落しに再利用か(?)	4478
920	"	"	"	—	[15.2]	—	—	"	"		4479
921	"	"	"	—	[15.6]	—	—	灰釉	灰釉		4480
922	"	"	鉢E-2	—	—		—	"	"		4500
923	"	"	小鉢	7.0	[17.6]		[12.6]	"	"	文様鉄絵	4482
924	"	"	餌入れ	6.3	10.0		7.4	"	"	底部墨書「盃□□」	4466
925	"	"	"	5.0	[9.8]		[10.2]	"	"		4467
926	"	"	"	5.0	[10.0]		[10.2]	"	"		4468
927	"	"	香合	3.0	5.4	6.4	3.6	"	"	底部墨書「佛前」	4465
928	"	"	"	3.3	5.8	7.2	4.4	"	"		4463
929	"	"	"	—	8.4	10.7	—	"	"		4464
930	"	"	小壺	6.6	6.4	8.0	4.8	鉄釉	鉄釉		4462
931	"	"	向付	9.3	7.0		5.8	灰釉	灰釉	螺旋状に沈線	4684
932	"	"	灰落し	—	—	—	6.5	鉄釉	鉄釉		4477
933	"	"	小壺	4.3	—	—	5.2	灰釉	灰釉	胴部沈線(3mm巾)二条有	4473
934	"	"	蓋A-1	2.2	11.2		—			E4514と対	4515
935	"	"	壺	18.0	11.8		10.8	灰釉	灰釉	E4515の蓋と対 印花文	4514
936	"	"	柄杓	5.0	8.7		5.7	"	"	把手に釘穴	4469
937	"	"	"	5.8	8.4		5.2	"	"		4470
938	"	"	小壺	4.6	[6.2]		[4.2]	長石釉	長石釉	一部緑釉と紫色が流れる 鉄絵	4683
939	"	"	香合	1.7	4.0	5.6	4.2	鉄釉	鉄釉	大窯期	4499
940	"	"	散蓮華	—	—	—	—	長石釉	長石釉	志野織部 刻印「春岱」 内外面共鉄絵	4498
72-941	"	"	餌入れ	2.7	5.5		4.8	灰釉	灰釉		4452
942	"	"	"	2.5	5.7		4.2	"	"		4454
943	"	"	"	2.6	[6.2]		[4.6]	"	"		4453
944	"	"	餌鉢	3.1	[8.6]		[2.8]	鉄釉	鉄釉	耳有	4449
945	"	"	"	—	[8.6]		—	"	"		4450
946	"	"	"	3.3	1.2		3.2	灰釉	灰釉	取手部分十六弁花	4447
947	"	"	小壺	—	—	3.9	2.8		"		4458
948	"	"	"	4.4	2.1	4.0	3.0		"		4459
949	"	"	"	4.4	1.7	3.4	2.4		"		4460
950	"	"	"	4.1	1.6	3.5	2.9		"		4461
951	"	"	水差し	9.3	7.0	—	5.8	灰釉	"	螺旋状に沈線	4484
952	"	"	"	9.5	7.4	—	6.0	"	"	" 一胴部	4483
953	"	"	双耳小壺	5.2	4.7	—	3.5	"	"	口縁の一部凹む(片口状でない)	4457
954	"	"	"	—	7.4	8.6	—	"	"		4456
955	"	"	"	—	6.7	10.0	—	"	"		4455
956	"	"	鬚盥	—	[9.4]		—	"	"		4497
957	"	"	杓立て	—	—	—	5.5	"	"	沈線螺旋状に上がる	4471
958	"	"	鉢G	—	[19.6]		—	"	"		4502

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
72-959	SX101	陶器	鉢	12.9	[18.8]		9.2				E-4538
960	"	"	鉢F-1	11.4	21.8		14.0				4512
961	"	"	手水鉢	—	—		14.3	灰釉	灰釉	銅緑釉流し掛け 三足	4548
962	"	"	風炉	16.1	18.7		13.8	長石釉	長石釉	志野織部 三足	4516
73-963	"	"	土瓶	11.5	7.2	—	9.1	白土化粧	白土化粧	鉄絵(松・鶴)	—
964	"	"	"	12.9	8.2	—	9.4	"	"	胴下半に「逢い」	4391
965	"	"	"	11.5	9.7	—	8.4	"	"	呉須文様	4390
966	"	"	"	11.0	8.6	—	8.6	褐釉	褐釉		4389
967	"	"	"	10.3	9.4	—	—	灰釉			4392
968	"	"	"	12.2	9.9	—	—	鉄釉	鉄釉		4386
969	"	"	"	12.3	9.2	—	—	"	"		4387
970	"	"	"	10.0	11.0	—	—	長石釉	長石釉	被熱痕 鉄絵	4393
971	"	"	"	6.3	7.1	—	—	灰釉+白土化粧	灰釉+白土化粧	鉄絵 (文様不明)	—
972	"	"	"	9.1	7.3	—	7.1	灰釉	鉄釉	三足	4388
973	"	"	"	—	9.0	—	—	鉄釉+灰釉	灰釉+白土化粧	鉄絵	—
974	"	"	"	5.5	[6.2]	—	—	灰釉	"	鉄絵	—
74-975	"	"	急須	—	5.9	—	—				4398
976	"	"	"	6.4	7.0	—	7.7				4400
977	"	"	蓋A-1	1.7	5.7		3.1			表面が鮫肌	4395
978	"	"	急須	9.3	6.6	—	7.6			外側鮫肌 E4395と対	4394
979	"	"	行平	—	[14.0]	—	—	灰釉	鉄釉		4410
980	"	"	"	—	[10.1]	—	—	"	灰釉		4407
981	"	"	"	—	19.6	—	—	"	"		4408
982	"	"	"	—	[16.5]	—	—	"	"		4409
983	"	"	"	—	[19.6]	—	—	"	"		4404
984	"	"	"	5.7	[16.2]	—	—	"	"		4405
985	"	"	"	9.0	17.0	—	—	"	"		4403
986	"	"	"	8.2	[14.0]	—	[6.2]	"	"	三足	4406
987	"	"	鍋	6.1	15.2	16.4	4.8	鉄釉	鉄釉		4487
988	"	"	"	—	[14.0]		—	"	"		4486
989	"	"	"	8.0	14.6		5.6	"	"	三足	4485
990	"	"	"	4.7	[17.7]		8.4	灰釉	灰釉	"	4489
991	"	"	"	—	[24.8]		—	鉄釉	鉄釉		4488
75-992	"	"	"	4.7	[14.4]		6.0	長石釉	長石釉	志野織部 鉄絵	4494
993	"	"	"	—	[12.8]		—	"	"	"	4493
994	"	"	"	—	16.4		—	"	"	丸い耳	4490
995	"	"	"	—	[16.6]		—	"	"	志野織部	4492
996	"	"	蓋A-1	2.0	9.6					長径9.8cm 短径9.6cm	4445
997	"	"	"	2.0	11.5			鉄釉	鉄釉		4423
998	"	"	"	2.2	9.1				"		4424
999	"	"	"	2.2	7.8				鉄釉+長石釉		4425
1000	"	"	"	2.1	9.0				鉄釉+灰釉	亀のつまみ付	4444
1001	"	"	蓋A-2	2.0	9.2				灰釉	つまみが五弁の花	4442
1002	"	"	"	1.8	8.6				鉄釉	つまみに菊花風八弁	4418
1003	"	"	"	1.9	7.8				"	つまみに花卉	4419
1004	"	"	"	1.7	7.4				"		4420
1005	"	"	"	1.3	7.0				灰釉		4443
1006	"	"	蓋C	2.7	9.0				鉄釉		4412
1007	"	"	"	2.9	6.3				"	最大径8.5cm	4413
1008	"	"	"	2.4	9.0				"		4415
1009	"	"	"	2.2	8.5				"		4416
1010	"	"	蓋	1.5	7.6				"		4427
1011	"	"	蓋B	1.6	4.2				"	古い(16C)段階の蓋	4451
1012	"	"	"	1.9	9.6				"		4421
1013	"	"	蓋E	1.2	[6.8]				灰釉		4438
1014	"	"	"	1.2	[10.0]				"		4437
1015	"	"	蓋D-2	2.2	6.2			灰釉	鉄釉		4428
1016	"	"	"	—	15.6			白土化粧		鉄釉一帯状に2つ	4411
1017	"	"	蓋D-1	2.6	11.2			灰釉	灰釉		4435
1018	"	"	"	2.4	11.4			"	"		4434

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
75-1019	S X 101	陶器	蓋 D-1	2.6	16.0			〃	〃	貫入多い	E-4432
1020	〃	〃	〃	3.5	[17.6]			〃	〃		4430
1021	〃	〃	〃	1.9	9.6				鉄釉		4429
1022	〃	〃	〃	2.8	13.8			長石釉	長石釉+銅緑釉	手描鉄絵 小型鍋の蓋	4495
1023	〃	〃	〃	2.5	13.5			〃	〃	型紙摺絵	4496
76-1024	〃	〃	鉢 H-2	—	[18.2]	—	—	鉄釉	鉄釉	20本1組	4523
1025	〃	〃	〃	—	[18.6]	—	—	〃	〃		4524
1026	〃	〃	鉢 H	14.1	30.4	15.0	—	長石釉	長石釉	13本1組 鉄絵	4517
1027	〃	〃	鉢 H-1	—	[40.0]	—	—	鉄釉	鉄釉		4520
1028	〃	〃	〃	16.9	[41.2]		15.6	〃	〃	21本1組	4519
1029	〃	〃	〃	13.7	[35.2]		[16.0]	〃	〃	17本1組 刻印「㊦」	4518
77-1030	〃	〃	徳利 A	—	3.1	—	—		灰釉		4370
1031	〃	〃	〃	—	3.9	—	—		〃		4369
1032	〃	〃	〃	23.9	3.4	14.2	10.7		灰釉+鉄化粧		4365
1033	〃	〃	徳利 C	18.5	2.0	9.1	6.6		灰釉	胴部3カ所くぼみ有	4368
1034	〃	〃	徳利 D	—	—	9.0	6.2		鉄釉		4375
1035	〃	〃	〃	14.8	2.2	8.0	5.8		灰釉	胴部3カ所くぼみ有	4367
1036	〃	〃	〃	—	2.4	—	—		鉄釉+白土化粧		4376
1037	〃	〃	徳利	—	2.3	—	—		鉄釉		4377
1038	〃	〃	〃	—	2.75	—	—		〃		4378
1039	〃	〃	〃	—	—	10.0	6.6		鉄釉+鉄化粧		4373
1040	〃	〃	徳利 F	—	—	—	7.9	鉄釉	灰釉		4380
1041	〃	〃	〃	—	—	8.5	7.6	〃		三島手風 底部に墨書「□つの近道□」	4381
1042	〃	〃	徳利	—	—	15.7	9.4			胴部に布袋像貼付 底部に墨書	4385
1043	〃	〃	徳利 E	—	—	17.0	9.8			被熱痕 肩部降灰 備前	4382
1044	〃	〃	〃	20.3	3.0	12.8	8.7				4383
1045	〃	〃	徳利 G	—	—	—	5.4			六足 底部に刻文「陶□」	4402
1046	〃	〃	〃	—	—	5.8	5.2			〃	4401
1047	〃	〃	〃	—	—	—	5.0			降灰	4384
78-1048	〃	〃	半胴甕	—	[13.8]		—		鉄釉		4508
1049	〃	〃	〃	12.2	16.2		9.7		〃	半胴甕の底部に穿孔し転用	4503
1050	〃	〃	〃	11.5	14.8		9.6		〃	焼成後底部穿孔	4532
1051	〃	〃	〃	—	[22.4]	—	—	鉄釉	鉄釉		4509
1052	〃	〃	〃	13.7	20.0		12.2	〃	〃		4533
1053	〃	〃	〃	13.3	18.2		11.1	〃	〃	底部穿孔し転用	4531
1054	〃	〃	鉢 J-1	—	[22.4]	—	—	〃	〃		4543
1055	〃	〃	〃	—	[28.6]	—	—	〃	〃		4544
1056	〃	〃	火鉢	—	—		[23.6]	〃	〃	三足 内底面にトチン痕	4542
79-1057	〃	〃	水甕	15.1	[30.3]	—	[17.0]	灰釉	灰釉	外側—鉄釉・銅緑釉を流す 流小文	4545
1058	〃	〃	〃	—	[29.6]	—	—	〃	〃	外側—銅緑釉を流す	4546
1059	〃	〃	鉢 K-1	30.5	[43.0]	1.6	29.4	鉄釉	鉄釉+長石釉	釉に小石含む 内底面にトチン痕	4541
80-1060	〃	〃	鉢 I-1	—	[17.0]	—	—	灰釉	灰釉		4529
1061	〃	〃	〃	—	[15.2]	—	—	鉄釉	鉄釉		4527
1062	〃	〃	〃	9.5	11.6		7.6				4526
1063	〃	〃	〃	—	[30.0]	—	—	灰釉	灰釉		4549
1064	〃	〃	〃	[7.3]	[11.4]		7.4	鉄釉	鉄釉	足部3カ所	4528
1065	〃	〃	〃	9.1	12.2		8.4			花文貼付	4525
1066	〃	〃	鉢 I-2	8.0	24.2	2.1	18.8			刻印「元米齋」 文様型打ち貼り付	4513
1067	〃	〃	七輪	—	[20.0]	—	—				4536
1068	〃	〃	〃	—	18.7	—	—			三足	4537
81-1069	〃	〃	〃	—	—		15.0			6穴 常滑	4540
1070	〃	〃	蚊いぶし	—	19.8	—	—			内面厚く煤付着	〃 4539
1071	〃	〃	五徳	—	—		[16.0]			三足 足の断面三角形	4534
1072	〃	〃	〃	—	—		13.4			三足	4535
1073	〃	〃	甕	—	—	—	—				常滑 4554
1074	〃	〃	〃	—	—	—	—				〃 4553
1075	〃	〃	〃	—	[29.0]	—	—		鉄釉		〃 4552
1076	〃	〃	〃	—	[44.4]	—	—				〃 4550
1077	〃	〃	〃	—	[48.0]	—	—				〃 4551
82-1078	〃	〃	芯押え	4.7			3.6		灰釉	中央に穴	4665

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
82-1079	S X101	磁器	芯押え	4.5			3.3			呉須	E-4666
1080	"	陶器	蓋	2.5	8.3					長石釉 鉄絵	か
1081	"	"	灯明皿	4.3	6.8		4.4				4201
1082	"	"	乗燭	3.9	5.4		3.2	鉄釉	鉄釉		4663
1083	"	"	"	4.3	5.0		3.9	"	"		4664
1084	"	"	皿 I - 1	1.2	[6.2]		2.9	灰釉	灰釉		4613
1085	"	"	"	1.4	[6.4]		—	"	"		4614
1086	"	"	"	1.4	7.2		2.9	"	"		4615
1087	"	"	"	1.4	7.2		2.9	"	"		4616
1088	"	"	"	1.4	6.4		3.0	鉄釉	鉄釉	内面重ね焼き痕	4642
1089	"	"	"	1.4	6.6		3.0	"	"	内面に輪トチン痕	4643
1090	"	"	"	1.3	6.2		2.6	"	"	ピン痕 3カ所	4644
1091	"	"	"	1.4	6.3		2.5	"	"	内外共にピン痕 3カ所	4645
1092	"	"	"	1.6	6.3		2.3	"	"	底部側面重ね焼き痕	4646
1093	"	"	"	1.6	6.4		3.3	"	"		4647
1094	"	"	"	1.6	6.4		3.0	"	"		4648
1095	"	"	"	1.6	6.7		2.5	"	"		4649
1096	"	"	"	1.9	9.1		4.8	灰釉	灰釉		4617
1097	"	"	"	2.1	[9.6]		3.8	"	"	ピン痕 2カ所	4618
1098	"	"	"	2.1	9.8		4.0	"	"	" 4カ所	4619
1099	"	"	"	2.2	10.0		4.2	"	"	" 3カ所	4620
1100	"	"	"	2.2	9.7		4.0	"	"	" 5カ所	4621
1101	"	"	"	2.1	9.8		4.0	"	"	" "	4622
1102	"	"	"	1.9	9.7		4.7	"	"		4623
1103	"	"	"	2.0	10.7		4.7	鉄釉	鉄釉		4651
1104	"	"	"	2.7	11.8		5.1	"	"		4652
1105	"	"	"	2.7	11.7		4.7	"	"		4653
1106	"	"	"	2.4	12.1		5.1	"	"		4654
1107	"	"	"	2.1	[11.7]		4.0	灰釉	灰釉		4624
1108	"	"	"	2.5	11.0		4.6	"	"	口縁(5mm巾)に煤付着	4625
1109	"	"	"	2.5	11.3		4.6	"	"	貫入多い	4626
1110	"	"	"	3.0	11.7		4.5	"	"	口縁部付着 ピン痕 5カ所	4627
1111	"	"	皿 I - 2	1.2	7.4		2.7	"	"		4635
1112	"	"	"	1.2	7.3		2.6	"	"		4636
1113	"	"	"	1.5	7.2		2.1	"	"		4637
1114	"	"	"	1.4	2.9		6.8	"	"		4638
1115	"	"	"	1.4	7.2		3.2	"	"		4639
1116	"	"	"	1.7	7.0		2.7	"	"		4640
1117	"	"	"	1.1	6.6		2.8	鉄釉	鉄釉		4655
1118	"	"	"	1.4	6.3		3.0	"	"		4656
1119	"	"	"	1.4	6.2		2.7	"	"	底部に重ね焼き痕	4657
1120	"	"	"	1.3	6.4		3.1	"	"		4658
1121	"	"	"	1.4	6.6		2.7	"	"		4659
1122	"	"	"	1.3	6.7		2.8	"	"		4660
1123	"	"	"	1.9	[9.2]		3.8	灰釉	灰釉		4634
1124	"	"	"	1.9	9.5		3.9	"	"		4631
1125	"	"	"	2.0	9.6		3.9	"	"		4633
1126	"	"	"	2.0	9.9		4.1	"	"		4630
1127	"	"	"	2.3	9.7		4.2	"	"		4632
1128	"	"	"	3.0	11.6		4.0	"	"		4628
1129	"	"	"	2.7	11.1		5.1	"	"		4629
1130	"	"	"	2.2	10.9		4.5	鉄釉	鉄釉	重ね焼き痕	4661
1131	"	"	"	2.3	11.0		5.1	"	"	"	4662
83-1132	"	土器	皿	0.9	4.2		—				4580
1133	"	"	"	1.1	5.8		—				4579
1134	"	"	"	0.9	5.7		3.2				4583
1135	"	"	"	0.7	[5.8]		[3.8]				4590
1136	"	"	"	0.9	[6.0]		3.2				4584
1137	"	"	"	0.9	[5.9]		[3.9]				4585
1138	"	"	"	0.9	[6.2]		3.7				4586

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
1139	S X101	土器	皿	0.7	[5.8]		3.5				E-4587
1140	"	"	"	0.9	[5.9]		3.5				4588
1141	"	"	"	0.8	[6.4]		[3.9]				4589
1142	"	"	"	0.9	6.8		4.4				4574
1143	"	"	"	1.2	6.1		3.9				4575
1144	"	"	"	1.2	[6.8]		3.8				4581
1145	"	"	"	1.1	[8.2]		4.6				4582
1146	"	"	"	1.2	[8.2]		4.5				4576
1147	"	"	"	3.0	[9.6]		4.6				4570
1148	"	"	"	1.6	[9.1]		4.4				4571
1149	"	"	"	2.3	[9.6]		[4.8]				4572
1150	"	"	"	1.8	10.4		5.8				4569
1151	"	"	"	2.3	[11.3]		[5.2]				4564
1152	"	"	"	2.5	[11.0]		[5.2]				4567
1153	"	"	"	2.3	[11.9]		[6.0]			全体に煤付着	4568
1154	"	"	"	[1.8]	—		[9.4]			内面に "	4565
1155	"	"	"	3.1	[15.3]		7.6				4566
1156	"	"	"	3.1	[16.8]		[8.0]				4563
1157	"	"	"	1.0	9.4		6.6			底部布目痕	4592
1158	"	"	"	0.9	[9.4]		—			"	4591
1159	"	"	内耳鍋	—	[21.0]					耳不明	4561
1160	"	"	"	—	[25.3]						4562
1161	"	"	"	4.1	[35.0]						4558
1162	"	"	"	3.8	40.0						4557
1163	"	"	"	3.8	[36.6]						4559
1164	"	"	"	4.7	[37.8]						4556
1165	"	"	"	—	[38.8]					耳不明	4560
84-1166	"	磁器	椀A	1.2	[8.2]		4.5				4176
1167	"	"	"	0.9	6.8		4.4				4174
1168	"	"	"	5.6	[10.5]		[4.2]			鳥 産地不明	4101
1169	"	"	"	5.3	10.0		4.0			花 見込みに「寿」 瀬戸	4089
1170	"	"	"	5.4	10.4		4.0			花 "	4105
1171	"	"	"	5.2	9.8		3.8			鳥 産地不明	4100
1172	"	"	"	—	10.6		—			肥前	4094
85-1173	"	"	椀B	6.0	[10.8]		4.8			"	4098
1174	"	"	椀A	6.1	10.0		4.6			側面に「寿福」の文字 産地不明	4097
1175	"	"	椀B	6.3	10.8		4.2			肥前	4088
1176	"	"	"	—	[11.2]		—			瀬戸	4093
1177	"	"	"	6.0	10.8		4.2			見込みに文様有	4091
1178	"	"	"	5.2	10.0		3.9			肥前	4128
1179	"	"	椀A	5.2	9.8		3.8			見込みに「寿」 産地不明	4096
1180	"	"	"	5.3	10.0		3.6			肥前	4095
1181	"	"	"	5.5	9.8		3.6			見込みに「寿」 瀬戸	4090
1182	"	"	"	4.8	9.4		3.6			銘有 肥前	4104
1183	"	"	"	4.5	8.4		3.2			見込みに文様 瀬戸	4113
1184	"	"	"	4.5	8.6		3.0			肥前	4117
1185	"	"	"	4.5	9.8		3.4			瀬戸	4099
1186	"	"	"	4.7	9.0		3.4			反対側に揚羽蝶 "	4115
1187	"	"	小椀B	4.3	8.6		3.0			反対側に蝙蝠(?) "	4121
86-1188	"	"	小椀A-2	4.7	9.4		3.6			花 "	4106
1189	"	"	"	—	10.0		—			産地不明	4130
1190	"	"	"	5.0	9.6		4.0				4131
1191	"	"	"	4.7	9.4		4.0			瀬戸	4114
1192	"	"	"	4.4	8.9		4.6			産地不明	4102
1193	"	"	小椀B	4.0	8.3		3.2			瀬戸	4119
1194	"	"	"	4.3	9.0		3.3			文様の線陰刻 上に具須により濃淡 "	4122
1195	"	"	"	4.5	9.4		3.7			見込みに文様・銘(?) "	4116
1196	"	"	"	4.4	8.5		3.2			四文字有 "	4118
1197	"	"	"	4.5	8.6		3.1			四文字有 "	4123
1198	"	"	"	4.9	8.0		3.4			見込みに「寿」 "	4125

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号	
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
86-1199	S X 191	磁器	小椀B	3.9	7.4		3.2				瀬戸	E-4124
1200	"	"	小椀C-3	4.6	8.0		4.6				肥前	4136
1201	"	"	小杯B-1	4.5	[7.0]		3.6				瀬戸	4137
1202	"	"	"	—	[7.0]		—				"	4142
1203	"	"	"	3.8	[7.0]		2.8				肥前	4141
1204	"	"	小杯A	—	7.6		—				瀬戸	4140
1205	"	"	"	4.6	6.8		2.6				"	4139
1206	"	"	"	—	[7.6]		—				肥前	4153
1207	"	"	"	—	[6.8]		—				"	4138
1208	"	"	"	2.9	5.8		3.0				"	4143
1209	"	"	小杯	4.1	6.4		2.6				産地不明	4144
1210	"	"	"	4.0	6.4		2.8				"	4145
1211	"	"	"	3.5	7.0		2.6				肥前	4146
1212	"	"	小杯A	3.9	5.6		2.6				産地不明	4148
1213	"	"	小杯	3.1	6.1		2.4				"	4149
1214	"	"	小杯A	2.6	5.4		2.0				"	4151
1215	"	"	椀D	6.2	7.6		4.8				肥前	4132
1216	"	"	"	6.3	7.2		3.6				"	4133
1217	"	"	"	6.0	7.1		4.0				瀬戸	4135
1218	"	"	"	6.0	7.6		3.8				"	4134
87-1219	"	"	蓋	2.7	9.0					E-4107と対	肥前	4108
1220	"	"	椀A	5.1	10.0		3.8			鳥 E-4108と対	"	4107
1221	"	"	蓋	2.7	8.4					花 E-4109と対	瀬戸	4110
1222	"	"	椀A	4.7	9.6		4.4			花 E-4110と対	"	4109
1223	"	"	蓋	2.3	8.5					鳥 E-4111と対	"	4112
1224	"	"	椀A	3.8	9.6		3.5			鳥 E-4112と対	肥前	4111
1225	"	"	蓋	2.4	8.4						瀬戸	4165
1226	"	"	"	2.8	9.3						産地不明	4164
1227	"	"	"	3.1	9.8					内面に文様	肥前	4160
1228	"	"	"	2.3	8.6						産地不明	4167
1229	"	"	"	2.3	9.0						瀬戸	4162
1230	"	"	"	2.4	10.0						肥前	4159
1231	"	"	"	2.8	9.2						瀬戸	4161
88-1232	"	"	"	2.6	12.9						肥前	4158
1233	"	"	"	1.4	—		5.9				瀬戸	4169
1234	"	"	"	0.7	6.8						"	4168
1235	"	"	椀D	—	—		6.6			赤絵	"	4154
1236	"	"	水滴	2.8	—		—			型打ち 2カ所穿孔 上絵付	肥前	4194
1237	"	"	"	3.6	1.8	6.0	—				"	4195
1238	"	"	小壺	6.4	1.6	3.9	2.6			底部墨書	"	4193
1239	"	"	徳利	—	3.5	4.8	—				産地不明	4191
1240	"	"	"	—	—	6.3	5.6				瀬戸	4189
1241	"	"	"	—	1.8	5.8	—			上絵付	肥前	4190
1242	"	"	"	15.6	1.8	6.5	3.8				"	4188
1243	"	"	鉢A-2	7.1	15.9		8.6			外面青磁	"	4172
1244	"	"	"	6.5	15.5		8.8				"	4173
89-1245	"	"	仏飯具	—	—		3.9				産地不明	4199
1246	"	"	"	—	—		4.1				肥前	4197
1247	"	"	"	—	—		4.0				"	4196
1248	"	"	"	—	—		4.6			上絵付	"	4198
1249	"	"	土瓶	7.8	3.9	9.0	4.6				産地不明	4120
1250	"	"	皿C	3.5	11.6		7.2				肥前	4185
1251	"	"	"	4.5	14.8		8.4				"	4183
1252	"	"	皿B	3.5	13.5		6.0				"	4182
1253	"	"	"	2.3	12.8		6.8				産地不明	4184
1254	"	"	皿A	3.1	13.0		8.8			内面五弁花コンニャク判	肥前	4186
1255	"	"	"	2.4	10.4		6.0				"	4187
1256	"	"	皿E	2.8	21.0		13.4				肥前	4181
1257	"	"	皿D	3.2	17.0		10.0				"	4180
90-1258	S X 112	陶器	甕	—	—	—	—			焼成後底部穿孔	常滑	5866

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
90-1259	S X 114	陶器	甕							常滑	E-5867
1260	S X 111	"	"							"	5868
92-1261	S X 101	"	碗		[10.0]			灰釉	灰釉		5231
1262	S K 112	"	"	6.3	10.5		4.9	"	"	刻印「清水」墨書	5260
1263	I層	"	"	5.7	9.3		5.3	"	"	"「森」	5259
1264	S K 177	"	"	6.3	11.2		[5.1]	"	"	"「木下弥」	5261
1265	S K 130	"	"	—	[9.4]		—	"	"		5219
1266	S D 117	"	"	—	—		4.9	"	"	刻印「清水」	5263
1267	S K 101	"	"	—	—		4.9	"	"	" "	5225
1268	S K 113 S K 114	"	"	—	—		[5.1]	"	"	" " 墨書	5267
1269	S K 130	"	"	—	—		[5.0]	"	"	" "	5221
1270	S X 101	"	"	—	—		[5.0]	"	"	" "	5226
1271	"	"	"	—	—		5.4	"	"		5224
1272	II層	"	"	—	—		5.6	"	"		5262
1273	S K 130	"	"	—	—		[5.0]	"	"		5220
1274	S K 113 S K 114	"	"	—	—		[5.0]	"	"		5265
1275	I層	"	"	—	—		4.7	"	"		5264
1276	S K 101	"	"	—	—		[5.2]	"	"		5266
1277	II層	"	"	—	—		[5.6]	"	"		5240
1278	I層	"	"	[3.9]	[12.0]		—	"	"		5257
1279	"	"	"	[5.4]	[10.6]		—	"	"		5258
1280	S K 130	"	"	—	—		[5.0]	"	"		5222
1281	S K 189	"	"	—	[9.7]		—	"	"		5238
1282	II層	"	"	6.6	[9.8]		4	"	"		5268
1283	S X 101	"	"	—	—		[7.4]	"	"		5232
1284	S K 130	"	皿	—	[21.2]		—	"	"		5223-A
1285	I層	"	"	—	[22.4]		—	"	"		5246
1286	S K 130	"	"	—	—		[9.2]	"	"		5223-B
93-1287	"	"	"	4.5	11.0		4.2	"	"	刻印「清水」	5217
1288	I層	"	"	[2.5]	—		4.6	"	"	" " 墨書	5253
1289	"	"	"	[2.7]	—		4.2	"	"	" "	5252
1290	S K 130	"	"	4.5	12.3		5.0	"	"	"「木下弥」	5215
1291	"	"	"	[3.4]	—		[4.6]	"	"	" "	5216
1292	S X 101	"	"	—	—		[4.8]	"	"	" "	5227
1293	II層	"	"	[1.2]	—		[4.9]	"	"	"「柴」	5256
1294	I層	"	"	4.3	12.8		5.0	"	"	" "	5250
1295	"	"	"	—	—		[4.8]	"	"		5251
1296	S X 101	"	"	—	—		[4.3]	"	"	刻印「森」	5228
1297	"	"	"	—	—		4.4	"	"	" "	5269
1298	S K 130	"	"	[2.9]	—		5.0	"	"		5218
94-1299	S K 189	"	"	4.8	12.9		4.8	"	"		5236
1300	"	"	"	—	[13.6]		—	"	"		5237
1301	S K 137	"	"	—	[13.7]		—	"	"		5248
1302	"	"	"	—	[11.9]		—	"	"		5249
1303	"	"	"	—	—		[5.9]	"	"		5271
1304	II層	"	"	—	[11.7]		—	"	"		5247
1305	S X 101	"	"	—	—		—	"	"	上絵付	5230
1306	"	"	"	—	—		[4.8]	"	"		5229
1307	S K 189	"	"	—	—		[4.8]	"	"		5239
1308	S K 112	"	"	[1.4]	—		[4.2]	"	"		5255
1309	S K 137	"	"	—	—		[4.8]	"	"		5270
1310	S K 189	"	蓋	—	—		—	"	"	最大径12.7cm	5234
1311	"	"	鉢	9.0	[21.6]		8.6	"	"	脚付	5233
1312	"	"	"	6.1	21.1		7.8	"	"		5235
1313	S K 148	"	"	—	—		8.6	"	"	押印	5243
1314	S K 101	"	"	6.9	21.6		8.2	"	"		5244
95-1315	S K 184	"	大鉢	8.2	29.2		11.2	"	"		5245
1316	II層	"	"	—	—		11.7	"	"	刻印「建」	5242
1317	"	"	"	7.9	30.6		13.9	"	"	" "	5241
96-1318	S E 18	"	碗E	6.9	10.2		5.6	"	"	"「清」	5272

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号	
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
96-1319	S K69	陶器	椀C-1	6.7	10.8		10.8	灰釉	鉄釉	刻印「◎」	京都(?)	E-5274
1320	S K21	〃	椀B-4	7.1	[11.0]		5.6	〃	〃	〃 「躰」		5275
1321	I層	〃	椀E	—	—		[5.2]	〃	〃	〃 「清」		5273
1322	〃	〃	椀	—	—		3.8	〃	〃	〃 「御室」	京都	5276
1323	〃	〃	〃	—	—		4.8	鉄釉	鉄釉+長石釉			5277
1324	S E08	〃	小壺	—	—		[6.8]	無釉	無釉	串彫り印有		5281
1325	I層	〃	土瓶	—	—		7.9	〃	鉄釉	押印 三足有		5280
1326	〃	〃	蓋C	2.6	10.2			〃	〃	〃 「防像」最大径10.2cm		5278
1327	〃	〃	〃	2.8	9.7			〃	〃	〃 最大径9.8cm		5279
1328	〃	〃	植木鉢	—	—		[10.5]	〃	灰釉	〃 「京」		5282
97-1329	〃	磁器	大鉢	—	[38.8]		—			上絵付		5295
1330	〃	〃	鉢	—	—		—			〃		5296
1331	S K120	〃	椀	—	—		4.8			〃	肥前	5297
1332	S K184	〃	〃	5.7	[11.2]		4.4			〃	〃	5427
1333	S E122	〃	〃	5.5	8.8		3.6			〃	〃	5425
1334	I層	〃	小椀	4.4	[8.4]		3.0			〃	産地不明	5301
1335	〃	〃	〃	3.7	[7.4]		2.4			〃	肥前	5298
1336	S E122	〃	〃	3.7	[8.1]		2.4			〃	〃	5426
1337	I層	〃	水差し	5.6	2.9	4.7	3.0			〃	産地不明	5300
1338	S K130	〃	人形	—	—		—			〃	肥前	5299
98-1339	I層	陶器	椀B	5.6	9.3		3.2	灰釉	灰釉	〃		5283
1340	S E122	〃	〃	5.7	9.1		3.1	〃	〃	〃		5424
1341	I層	〃	〃	—	—		3.3	〃	〃	〃		5289
1342	S K130	〃	〃	5.5	[8.8]		[3.2]	〃	〃	〃		5213
1343	I層	〃	〃	—	[10.0]		—	〃	〃	〃		5286
1344	S E122	〃	〃	—	[8.6]		—	〃	〃	〃		5423
1345	S K112	〃	〃	5.3	10.8		—	〃	〃	〃		5285
1346	I層	〃	〃	6.3	11.0		3.9	〃	〃	〃		5290
1347	S K137	〃	〃	6.1	[9.5]		3.7	〃	〃	〃		5284
1348	S K189	〃	〃	6.8	9.0		4.5	〃	〃	〃		4226
1349	I層	〃	〃	5.6	[11.2]		4.3	〃	〃	〃		5287
1350	S K165	〃	〃	6.9	11.2		4.3	〃	〃	〃		5288
1351	S K130	〃	〃	—	—		[4.9]	〃	〃	〃		5214
1352	I層	〃	〃	—	—		4.9	〃	〃	〃	楽系	5302
1353	S D106	〃	小椀	5.9	8.4		3.8	灰釉	灰釉	〃		5291
1354	S K130	〃	勺立て	7.4	5.0	5.6	5.4	〃	〃	〃		5212
1355	S E122	〃	蓋	0.8	5.9			〃	〃	〃		5422
1356	S X101	〃	鉢	6.7	16.2		6.9	〃	〃	〃		4668
1357	II層	〃	皿	4.4	11.5		3.2	〃	〃	〃		5292
1358	I層	〃	〃	3.1	9.2		3.2	〃	〃	〃 墨書		5293
1359	S E122	〃	〃	2.8	8.6		3.0	〃	〃	〃		5294
1360	S X101	〃	〃	—	—		3.4	〃	〃	〃	信楽	4681
1361	S K180	〃	〃	—	—		[2.8]	〃	〃	〃		5421
1362	S K162	〃	〃	—	—		3.1	〃	〃	〃		5428
99-1363	II層	〃	椀E	6.8	10.5		5.3	〃	〃	紀年銘「正徳六(1716)」		5627
1364	S K180	〃	椀	6.8	10.6		4.4	〃	〃	墨書		5584
1365	S X101	〃	〃	—	—		[4.8]	〃	〃	〃		5585
1366	S K191	〃	〃	6.4	[9.9]		4.3	〃	〃	〃		5586
1367	II層	〃	〃	—	—		[4.1]	〃	〃	〃		5587
1368	〃	〃	〃	—	—		2.9	〃	〃	〃		5590
1369	I層	〃	〃	—	—		3.2	〃	〃	〃		5591
1370	S K165	〃	〃	—	—		3.6	〃	〃	〃		5592
1371	I層	〃	皿	—	—		2.4	〃	〃	〃		5593
1372	S E122	〃	〃	—	—		3.2	〃	〃	〃		5594
1373	S K189	〃	小杯	—	—		3.8	〃	〃	紀年銘「巳亥(1779)か」		5588
1374	II層	〃	皿	3.0	[13.0]		[7.6]	〃	〃	墨書		5599
1375	S K189	〃	鉢	—	—		8.2	〃	〃	〃		5608
1376	S E122	〃	皿	—	—		[9.6]	〃	〃	紀年銘「□保五」		5600
1377	I層	〃	小皿	1.6	8.5		4.2	銅緑釉	銅緑釉			5598
1378	II層	〃	鉢	3.8	14.4		5.6	灰釉	灰釉			5603

図版番号	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		備考	登録号
				器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
99-1379	S K189	陶器	蓋	3.0	9.3				灰釉	墨書	E-5607
1380	I層	"	香炉	—	—		6.9	灰釉	"	"	5596
1381	S E122	"	餌入れ	3.6	6.3		4.8	"	"	"	5597
1382	II層	"	半胴甕	—	—		[11.4]	鉄釉	鉄釉	"	5612
1383	"	"	鉢G	11.4	19.2		7.8	灰釉	灰釉	紀年銘「文久三年[1863]」	5626
100-1384	I層	"	火鉢	9.9	[16.2]	[20.4]	11.4		"	墨書	5622
1385	S E122	"	涼炉	—	—	[13.5]	6.9		"	墨書(内底面)	5611
1386	"	"	甕	18.0	[19.2]	[23.1]	13.2		鉄釉	紀年銘「天保二[1831]」	5628
1387	I層	磁器	燈明具	—	—		2.7			墨書	5615
1388	"	陶器	水差し	—	—	—	7.5		鉄釉	"	5604
1389	"	"	甕	—	—	[20.1]	12.0	灰釉	灰釉	"	5609
1390	"	土器	風炉	18.9	9.9	24.0	18.0		"	墨書(内底面)	5623
1391	S K152	"	皿	2.7	10.5		5.7				5619
1392	S K192	"	"	—	—		[4.8]				5621-A
1393	I層	"	"	—	—		[6.0]			墨書(内底面)	5620

焼塩壺

図版番号	遺構	種類	法量 (cm・cc)					備考	登録号
			器高	口径	内径	底径	容積		
102-1394	S X101	身 A	—	—		6.2	—		E-1016
1395	"	"	8.5	[5.7]		6.2	[50]		1014
1396	S K113	"	8.4	5.0		5.8	[60]		1033
1397	"	"	8.5	5.2		6.0	[60]		1035
1398	"	"	8.7	5.0		5.8	50		1038
1399	I層	"	8.8	4.8		5.2	50		1091
1400	II層	"	9.7	5.3		6.0	80		1001
1401	"	"	8.4	5.0		5.4	70		1002
1402	"	"	9.7	5.6		5.8	100		1003
1403	"	"	9.9	5.9		6.1	100		1004
1404	"	"	8.9	5.6		5.5	70		1005
1405	"	"	8.7	5.2		5.8	—		1006
1406	"	"	8.6	[5.4]		—	—		1007
1407	"	"	8.6	5.1		4.5	[60]		1008
1408	"	"	8.5	5.5		4.8	60		1009
1409	"	"	8.7	[5.7]		5.9	—		1010
1410	"	"	8.8	5.3		5.6	[70]		1011
1411	"	"	8.3	5.1		5.7	[50]		1012
1412	S K145	"	7.8	5.3		5.7	90		1013
1413	I層	"	8.8	5.0		5.0	90		1015
1414	S X101	"	7.4	4.9		4.2	40		1017
1415	S K186	"	10.5	[6.2]		5.7	[130]	刻印「ミなと藤左衛門」	1019
1416	S K117	"	9.8	5.6		5.2	90		1020
1417	S K118	"	9.2	5.2		5.7	70		1021
1418	S K137	"	8.4	5.3		4.7	60		1022
1419	II層	"	9.5	5.5		5.8	95		1023
1420	S K152	"	8.2	5.0		5.6	90		1026
1421	S K173	"	8.2	5.1		5.1	95		1027
1422	S K113	"	9.2	5.2		6.1	[110]		1028
1423	S K115	"	8.8	5.2		5.8	70		1029
1424	"	"	8.0	5.1		5.8	[70]		1030
1425	S K179	"	8.0	5.3		5.9	[60]		1031
1426	S K113	"	9.3	5.5		6.0	[100]		1032
1427	S K132	"	8.7	5.1		5.8	[70]		1034
1428	S K139	"	8.4	4.9		6.2	100		1036
103-1429	II層	"	7.7	5.1		4.8	[50]		1037
1430	S K138	"	8.2	5.3		5.3	—		1039

図 番	版 号	遺 構	種 類	法 量 (cm・cc)					備	考	登 録 号
				器 高	口 径	内 径	底 径	容 積			
103-1431	SK132	身 A		8.0	5.2		5.7	[70]			E-1040
1432	SK115	"	"	—	—		5.5	[60]			1041
1433	SK173	"	"	3.7	4.5		7.0	[100]			1042
1434	SK136	"	"	10.0	5.4		5.1	90			1043
1435	II層	"	"	9.3	5.9		6.3	[140]	「天下一堺ミなと藤左衛門」		1046
1436	I層	"	"	8.2	5.4		5.8	[100]			1089
1437	SD05	"	"	8.0	5.2		4.8	30			1090
1438	SX101	"	"	8.2	4.7	6.8	4.8	—			1018
1439	SK130	身 C		7.5	5.1		4.5	[40]			1024
1440	I層	"	"	7.3	[5.4]		5.1	[80]			1025
1441	SK130	身 B		9.4	5.2	7.1	5.5	125	刻印「難波浄因」		1044
1442	II層	"	"	9.0	5.6	7.4	5.8	130	" 「御壺塩師 堺湊伊織」		1045
1443	SK116	身 X		4.3	8.2	9.5	5.5	90			1047
1444	II層	蓋		1.0	8.7	7.2			刻印「花焼塩 イツミ ッタ」		1048
1445	SK138	蓋 D		1.1	6.6	4.7			" 「奈んばん七度 本やき志本」		1051
1446	II層	"	"	1.0	7.5	5.4			" 「花塩屋 権平衡」		1052
1447	SK147	蓋 A		1.8	6.9	5.4					1060
1448	SK173	"	"	2.2	6.5	5.4					1061
1449	"	"	"	2.5	6.6	5.0					1068
1450	II層	"	"	2.0	6.9	4.8					1073
1451	SK145	"	"	1.9	6.6	5.2					1075
1452	II層	"	"	1.8	7.0	5.5					1050
1453	SE137	"	"	2.5	7.0	5.6					1059
1454	"	"	"	1.7	6.5	4.6					1066
1455	II層	"	"	1.7	6.6	5.6					1071
1456	SK145	"	"	1.9	6.3	4.2					1072
1457	II層	"	"	1.9	6.3	4.2					1076
1458	SE116	"	"	[1.5]	[5.9]	[4.6]					1077
1459	I層	"	"	2.0	6.6	5.0					1078
1460	"	"	"	1.7	6.6	4.4					1084
1461	SK145	"	"	1.8	[6.8]	4.2					1086
1462	SK120	"	"	1.7	6.7	6.0					1056
1463	SK115	"	"	1.4	6.4	5.4					1063
1464	SK147	"	"	1.9	6.7	5.4					1069
1465	SK115	"	"	1.8	6.6	5.2					1070
1466	SK120	"	"	1.6	5.5	3.6					1057
1467	II層	"	"	1.7	5.1	3.0					1058
1468	SD102	"	"	2.1	5.8	3.4					1080
1469	I層	"	"	1.8	5.2	2.6					1083
1470	SK130	蓋 B		1.9	7.0	5.8					1049
1471	II層	"	"	2.1	7.8	6.8					1053
1472	I層	"	"	1.7	4.2	6.2					1054
1473	SD101	"	"	1.7	6.8	5.6					1055
1474	SK130	"	"	1.5	7.8	7.0					1064
1475	"	"	"	1.7	[4.7]	5.8					1074
1476	"	"	"	2.2	[7.5]	[6.6]					1079
1477	SX101	"	"	1.9	[7.5]	6.0					1087
1478	SK130	"	"	2.1	7.7	7.0					1062
1479	II層	"	"	1.9	7.1	5.8					1067
1480	I層	"	"	1.9	6.0	4.2					1082
1481	SX101	蓋 C		1.4	5.8	4.8					1081
1482	"	"	"	1.3	6.4	3.2					1085
1483	"	"	"	1.3	6.6	5.8					1088
1484	II層	蓋		1.0	5.4	4.8					1065

土製品

図 番	版 号	遺 構	材 質	形状・種別	成形技法	法 量 (cm)				備 考	登 番 号
						口径	高さ	最大幅	底径		
104-1485	S X 101	II層	土師質	天神	型起し		3.9	2.5		袍は黒	E-5737
1486	"	"	"	"	"		[2.2]	2.3			5738
1487	"	"	"	"	"		[3.7]	[3.6]		中空 烏帽子・眉・目は黒	5739
1488	II層	"	"	大黒天	"		3.6	2.3		施釉 腰部より下は緑で前面のみ 底部穿孔	5731
1489	"	"	"	恵比須	"		4.2	2.5		施釉 膝下の一部緑	5730
1490	S X 101	II層	陶製	布袋	手捏		[2.8]	[4.0]		合子の蓋か 長石釉 眉・目・文様は鉄釉	5740
1491	S K 130	II層	陶製	"	型起し		4.1	3.9		施釉 眉・目・足の部分は黒	5742
1492	S X 101	II層	土師質	人物	"		3.7	3.5		施釉 髪・眉・目は黒 肩より膝部は緑 底部穿孔	5734
1493	"	"	"	"	"		2.4	2.3		髪・眉・目は黒	5732
1494	S X 101	II層	"	"	"		8.1	4.9		燈籠の台座は黒 雲母付着	5733
1495	II層	"	"	人物坐像	手捏		[3.1]	2.2			5729
1496	"	"	"	振袖女坐像	"		[2.8]	3.8		底部に穿孔	5728
1497	S X 101	II層	"	人物坐像	"		3.5	2.9			5736
1498	"	"	"	人物	"		[4.4]	[3.0]		施釉 笠は赤 髪・眉・目は黒 腰部は緑	5735
1499	II層	"	"	"	"		[6.3]	[4.5]			5726
1500	[S K 95]	II層	"	組み相撲	"		[3.7]	9.8			5727
1501	II層	"	"	童子坐像	"		6.8	[5.5]		髪・眉・目は黒	5725
105-1502	[S K 14]	II層	"	婦人立像	"		[8.5]	4.8			5724
1503	II層	"	"	子抱き婦人立像	"		[10.6]	5.2			5722
1504	"	"	"	親子立像	型起し		[10.8]	5.2		中空	5723
1505	"	"	陶製	猿	"		6.5	[4.2]		中空 灰釉施釉 目は鉄釉 背に有孔	5765
1506	S X 101	II層	土師質	"	手捏		3.7	[2.7]		施釉 頭・腕は緑	5764
1507	"	"	"	犬(頭部)	"		[2.2]	2.7		両目は孔 両耳の間に黒の線	5767
1508	II層	"	"	"(")	"		[5.2]	[3.5]			5766
1509	"	"	"	"(狛犬)	型起し		[3.6]	[3.4]		中空	5763
1510	S X 101	II層	"	"(")	"		[3.0]	2.4		中空 施釉：眉・目は黒 その他緑	5762
1511	S K 130	II層	"	"(")	"		3.0	2.5		施釉 胴部は赤 尻尾は緑	5761
1512	II層	"	"	狐	"		6.0	[3.3]		施釉 眉・目は黒 台座は緑	5760
1513	S X 101	II層	磁製	犬(狛犬)	"		8.7	6.5		中空 両耳の下に孔 底部に布痕	5768
1514	II層	"	土師質	魚	"		1.8	4.3		雲母付着、裏面に有孔	5772
1515	S X 101	II層	"	"	"		2.3	[3.1]		雲母付着 裏面に有孔	5771
1516	"	"	"	"	"		2.9	[3.5]		雲母付着	5770
106-1517	"	"	"	飾り馬	"		5.7	6.0		中空	5759
1518	II層	"	"	馬(頭部)	"		[2.3]	[4.5]		中空	5758
1519	"	"	"	"(")	"		[4.1]	[5.0]		中空 雲母付着(?) (金粉)	5757
1520	"	"	"	鶏	"		[17.7]	[8.4]		中空	5754
1521	S K 130	II層	"	"	"		3.1	[3.3]		胴部下に有孔	5755
1522	II層	"	"	鳥	"		6.5	[5.2]		中空 雲母付着(金粉)	5750
1523	S K 130	II層	"	鳥(頭部)	"		[4.9]	[5.9]		中空	5753
1524	II層	"	"	"(")	"		[3.7]	[4.5]			5756
1525	S K 130	II層	"	"	"		[6.4]	[8.4]		中空 両足に有孔	5748
1526	"	"	"	鳥(台座)	"		[3.5]	7.2		中型	5749
1527	S X 101	II層	"	太鼓橋	"		3.5	13.7		施釉 擬宝珠に緑	5818
1528	"	"	"	舟	"		1.5	6.2		施釉 舟尾の縁に緑	5820
1529	II層	"	"	"	"		2.5	6.0		施釉 舟首・俵・舟尾に緑	5819
107-1530	S X 101	II層	"	屋根	"		2.4	4.9		施釉 棟・庇に緑	5826
1531	"	"	"	"	"		3.3	6.9		施釉 棟・軒に緑 庇に茶	5827
1532	II層	"	"	"	"		5.0	[6.9]		施釉 棟に緑	5828
1533	S X 101	II層	"	祠	"		4.0	3.2		施釉 棟・土台の石垣に緑	5821
1534	"	"	"	塔	"		3.8	3.1		施釉 軒に緑	5822
1535	"	"	"	燈籠	"		5.3	2.7		施釉 燈明部以下・笠の隆起部に緑	5823
1536	II層	"	"	"	"		[5.1]	[2.9]		雲母付着	5825
1537	S X 101	II層	"	"	"		[5.0]	[2.8]		施釉 4カ所に緑 底部穿孔	5824
1538	"	"	"	燈籠(台座)	"		[1.4]	4.8		施釉 燈籠を中心に三角の太い緑線 墨書	5850
1539	II層	"	"	"(")	"		[1.4]	4.5		施釉 燈籠を中心に三角の太い緑線 墨書「勇」(?)	5851
1540	S K 162	II層	"	蓋	"		4.4	0.9		施釉 葉に緑 他は凸凹のアバタ状で黄色	5843
1541	S X 101	II層	"	"	"		4.9	0.9		雲母付着	5844
1542	II層	"	"	"	型造り		5.6	1.4		施釉 紅葉に赤と緑 文様は隆帯 雲母付着	5845

図 番 号	版 号	遺 構	材 質	形状・種別	成形技法	法 量 (cm)				備 考	登 録 番 号
						口径	高さ	最大幅	底径		
107-1543	S X 101	土師器	蓋	轆轤	6.8	[1.7]			施釉 文様は黒 内面は赤	E-5846	
1544	"	"	"	型造り	2.4	1.2			施釉 上面は緑	5837	
1545	II層	"	"	"	3.0	1.5			施釉 上面の一部に緑	5838	
1546	"	"	"	"	3.1	1.5			施釉 文様は黄	5839	
1547	S K 130	"	"	"	3.1	1.0			施釉 上面の斑点は緑	5842	
1548	S X 101	"	"	"	3.0	1.2			施釉	5840	
1549	"	"	"	"	3.0	0.7			施釉	5841	
1550	"	"	"	"	3.3	1.3			施釉 頂部に緑	5847	
1551	"	磁製	"	"	3.6	0.9				5848	
1552	II層	陶製	"	"	3.3	0.8			施釉 文様は赤 上絵付 京焼(?)	5836	
1553	"	"	"	"	2.4	1.0			灰釉 つまみ下に釉溜	5849	
108-1554	S X 101	土師質	"	"	2.6	2.1			施釉 羽釜の蓋	5798	
1555	"	"	羽釜	"	2.6	2.2	3.6	1.3	施釉 上面のみ緑	5797	
1556	II層	"	竈	"		2.8	4.0		施釉 底部に指痕	5817	
1557	S X 101	"	"	"		2.8	6.9			5816	
1558	II層	陶製	器台	轆轤	5.5	3.5		3.2	施釉 文様は緑と茶 底部糸切り痕	5795	
1559	S X 101	土師質	椀	"	4.5	2.7		2.1	施釉 腰部に刻印「朝日」	5815	
1560	"	陶製	茶釜	型造り	2.5	4.8	6.0	2.7	施釉 濃い鉄釉を上面に	5789	
1561	II層	"	土瓶	"		[1.9]		3.4	施釉 底部に刻印「田◎作」	5800	
1562	"	土師質	片口	轆轤	4.2	1.2	5.4	2.2	施釉 見込み部に緑 底部糸切り痕	5799	
1563	S X 101	"	"	"	4.6	1.7	4.9	3.2	施釉 内面に黄色 底部	5802	
1564	"	"	"	"	4.3	1.6		2.6	施釉 内面に黄色 内面4カ所に緑色の斑点	5803	
1565	"	"	"	"	[4.9]	1.6		[3.0]	施釉 内面に黄色 一部に緑色	5804	
1566	"	"	"	"	5.6	1.8		2.6	施釉 内面に黄色	5801	
1567	II層	"	椀	型造り	4.1	1.8		[2.1]	施釉	5814	
1568	S X 101	陶製	蓋	轆轤	4.1	1.0			肩部のみ鉄釉施釉 内面に墨書	5794	
1569	"	"	行平	"	4.6	2.7		2.6	胴部のみ鉄釉施釉 底部に墨書	5794	
1570	II層	土師質	壺	"	2.2	3.7	4.6	2.7	施釉 肩部3カ所に緑色流す	5793	
1571	S X 101	"	風炉	"	[4.9]	4.0	5.8	[3.2]	施釉 口縁下に緑 文様は黒	5792	
1572	"	"	"	"	[5.2]	[3.8]	[6.2]		施釉 梅の文様か 茶で枝、その上に白と緑	5791	
1573	"	"	壺	型造り	[2.2]	[2.0]			施釉 内面指圧痕 雲母付着	5805	
1574	"	"	"	轆轤	[2.1]	[1.7]			施釉 文様は白	5806	
1575	"	土師質	土瓶	型造り	[2.0]	[1.4]			施釉 文様は白 内面指圧痕	5807	
1576	"	"	"	"	[1.7]	[1.7]			施釉 全面緑	5808	
1577	"	"	壺	"	[2.2]	[2.0]			内面に布目痕	5809	
1578	"	"	"	"	[2.5]	[2.0]			"	5810	
1579	"	"	風呂	轆轤	[5.6]	[3.9]			宝珠文は黒	5811	
1580	"	"	"	"	[5.7]	[3.8]				5812	
1581	"	"	"	"	[6.2]	[5.3]			施釉 枝は茶 その上に白と緑	5790	
1582	"	"	皿	"	2.3	1.0		1.2	施釉 見込部に緑	5829	
1583	II層	"	"	"	2.6	1.0		1.4	施釉 見込部に緑	5830	
1584	S X 101	"	紅皿	"	2.5	1.0		0.8	施釉 内面のみ緑	5831	
1585	"	"	椀	型造り	1.6	1.2		0.6	施釉	5832	
1586	"	"	壺	手捏	1.7	2.6	2.2	1.6	施釉	5833	
1587	"	"	徳利	轆轤		2.7	3.8		施釉	5777	
1588	"	"	"	"		[5.3]		3.1	施釉 文様は黒	5773	
1589	II層	"	"	"		[5.5]	3.5	3.0	施釉 文様は黒 反対側に緑流す	5774	
1590	"	"	"	"		[4.0]	3.1	2.6	施釉 文様は黒 被熱	5775	
1591	"	"	"	"		[4.7]	3.8	2.5	施釉 文様は白	5776	
109-1592	"	陶製	椀	"	2.8	2.3		1.7	青磁釉 底部に墨書「〇」	5781	
1593	"	"	"	"	2.7	2.3		1.4	青磁釉	5782	
1594	"	"	"	"	2.7	2.4		1.7	青磁釉	5783	
1595	"	"	"	"	2.6	2.0		1.7	青磁釉	5785	
1596	"	"	"	"	2.8	2.5		1.9	青磁釉	5784	
1597	"	"	"	"	3.0	1.9		0.9	灰釉 葉は鉄釉、花は呉須 京焼か	5835	
1598	"	磁製	紅皿	"	3.0	1.5		1.4		5834	
1599	S X 101	陶製	椀	"	3.9	3.5		1.9	灰釉 京焼か	5786	
1600	"	"	"	"	4.0	3.0		2.4	灰釉 京焼か	5787	
1601	"	"	片口	"	3.3	2.4	4.6	2.7	青磁釉 底部に墨書「〇」	5788	
1602	"	"	徳利	"		[7.6]	2.6	2.2	青磁釉	5778	

図 番	版 号	遺 構	材 質	形状・種別	成形技法	法 量 (cm)				備 考	登 録 番 号
						口径	高さ	最大幅	底径		
109-1603	S X 101	陶製	仏花瓶	轆轤	0.7	4.3	2.1	1.7	青磁釉	E-5779	
1604	"	"	"	"		[3.3]	1.8	1.7	青磁釉	5780	
1605	II層	陶製	布袋(頭部)	手捏		2.5	3.2		中空 施釉 目・口・耳は穿孔	5741	
1606	S K 130	土師質	大黒面	型起し		[2.6]	4.7		施釉 口は赤	5746	
1607	"	"	"	"		3.9	4.6		施釉 頭巾は緑 頭巾の正面部と口は赤	5747	
1608	II層	"	扇面	"		[3.6]	3.9		施釉	5745	
1609	"	"	鬼面	"		6.0	4.6		頭部真中に穿孔	5743	
1610	S K 162	"	般若面	"		[2.9]	[4.7]		施釉 全面緑	5744	
1611	II層	"	算盤	"		1.7	[1.4]		施釉	5864	
1612	"	"	二朱銀	"		2.2	1.4			5865	
1613	S K 130	"	土鈴	手捏		3.5	3.8			5862	
1614	"	"	"	"		3.9	[3.9]			5863	
1615	"	"	"	"		[3.3]	3.0			5857	
1616	"	"	"	"		[3.4]	3.0			5858	
1617	"	"	"	"		[3.4]	3.0			5859	
1618	"	"	笛	"		3.3	6.1			5769	
1619	II層	"	鳩笛	型起し		3.8	5.0		施釉 頭部から羽根にかけて緑	5751	
1620	S K 142	"	"	"		3.6	[3.8]		施釉	5752	
1621	S K 130	陶製	鳥	手捏		3.3	2.5		灰釉 目は鉄釉	5853	
1622	S K 23	"	"	"		3.5	2.7		灰釉	5854	
1623	S K 130	"	"	"	[3.3]	2.2			灰釉 首と羽根の一部鉄釉	5852	
1624	S K 195	"	"	"		[1.8]	[2.3]		灰釉 羽根の先端鉄釉	5855	

瓦 (軒丸瓦)

図 番	版 号	遺 構	類 型	直 径	内 区			外 区		全長	備 考	登 録 番 号
					径	珠文数	珠文径	巴 径	幅			
110-1625	P-370	2類	16.0	11.8	(7)	0.65	9.0	1.3	0.85	(13)	金箔付着	E-5631
1626	土層	1層	18.5	12.5	(9)	0.8	8.0	2.8	0.6	(13)		5627
1627	S K 179	"	18.0	13.5	(12)	1.0	10.3	2.8	0.6	(5.4)		5875
1628	"	2類	—	—	(6)	0.8	—	2.1	0.9	—		5874
1629	II層	"	14.3	10.0	(6)	0.7	—	2.0	0.7	—		5636
1630	S X 101	"	—	—	(6)	0.9	—	2.4	0.6	(7.6)		5628
1631	II層	"	—	—	(7)	0.9	—	2.6	0.6	—		5630
1632	"	"	—	—	(6)	1.0	—	2.1	0.8	—		5635
1633	"	"	—	—	(6)	0.5	—	1.8	0.8	—		5634
1634	II層	"	—	—	(5)	0.6	—	2.4	0.7	—		5632
1635	S K 177	"	—	—	(7)	0.55	6.1	—	—	—		5638
1636	II層	3類	—	—	(4)	0.8	—	1.4	0.45	(12.0)		5639
1637	S K 162	2類	—	—	—	—	—	2.1	0.9	—		5640

(軒平瓦)

図 番	版 号	遺 構	類 型	上弦幅	弧 梁	下弦幅	厚 さ	内区幅	外 区 幅		脇 幅		備 考	登 録 番 号
									上	下	右	左		
111-1638	II層	1類	—	—	—	4.7	—	0.6	0.7	—	—		E-5641	
1639	S K 177	"	—	—	—	4.9	—	0.4	0.7	4.7	—		5642	
1640	S K 147	2類	—	—	—	—	—	0.7	—	—	—		5643	
1641	II層	"	—	—	—	5.2	—	1.0	0.8	—	—		5644	
1642	"	"	—	—	—	—	3.1	1.2	—	—	4.8		5645	
1643	S K 367	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—		5873	
1644	II層	"	—	—	—	—	2.4	1.0	0.8	5.3	—		5646	
1645	"	"	—	—	—	—	2.7	0.7	0.6	—	5.0		5647	
1646	S K 177	"	—	—	—	—	2.1	0.9	1.1	6.8	—		5648	

(飾瓦・磚他)

図版番号	遺構	厚さ	内区幅	外区幅		備考	登録番号
				上	下		
111-1647	S D01	2.0	—	—			E-5872
1648	S K02	2.7	—	—			5707
1649	S X101	3.8	2.4	0.55	0.55	銅緑釉	5665
1650	S K130	4.0	2.5	—		〃	5666

(軒丸瓦)

図版番号	遺構	類型	直径	内区				外区		全長	備考	登録番号
				径	珠文数	珠文径	巴径	幅	高			
112-1651	S X102	2類	16.0	10.7	12	1.9	5.9	2.5	0.7	37.9	穴に銅線(約17cm)残存	E-5668
1652	I層	〃	—	11.1	16	1.4	7.0	1.5	0.8	—		5670
1653	S X101	〃	—	—	(8)	1.3	[7.5]	1.7	0.5	—		5669
1654	〃	〃	—	—	(3)	1.3	—	1.9	0.5	—		5671
1655	II層	1類	17.4	12.6	—	—	—	2.3	1.0	(20.5)	鉄釉	5667

(軒棧瓦)

図版番号	遺構	類型	径	軒丸部						軒平部						備考	登録番号	
				外区		内区		外区幅		脇幅		内区幅						
				幅	高	径	珠文数	珠文径	巴径	上	下	右	左	上下	左右			高
113-1656	S X101	1類	9.3	1.3	0.5	6.8	12	1.0	4.1	0.9	1.0	—	—	2.6	—	—	E-5674	
1657	〃	〃	9.2	1.7	0.4	5.7	12	0.9	3.0	0.5	0.9	—	2.9	—	—	—	5675	
1658	S X165	〃	9.1	1.3	0.5	6.4	12	0.9	4.0	0.8	0.8	—	—	3.0	—	—	5673	
1659	II層	〃	9.2	1.5	0.3	6.0	12	0.9	3.5	0.8	0.7	—	—	2.6	—	—	5672	
1660	S K165	2類	8.9	1.5	0.7	5.4	10	0.7	3.3	0.5	0.6	—	—	—	—	0.4	5679	
1661	〃	〃	9.0	1.5	0.7	5.4	10	0.5	3.3	0.6	—	—	—	—	—	0.5	5680	
1662	〃	〃	9.0	1.5	0.7	5.4	10	0.8	3.3	0.7	0.8	—	2.5	2.9	—	0.5	5678	
114-1663	S K162	3類	8.8	1.4	0.5	5.8	12	0.9	3.1	—	—	—	0.8	—	—	0.5	5696	
1664	S X101	〃	9.1	1.7	0.7	5.1	12	0.9	2.8	—	0.9	—	—	—	—	0.6	5697	
1665	〃	〃	8.0	1.3	0.5	5.0	12	0.8	2.0	0.5	0.9	—	1.1	2.6	—	0.6	5703	
1666	S X101	3類	7.6	1.2	0.6	4.8	12	0.8	1.7	0.4	0.6	5.0	1.1	2.5	14.2	0.4	5687	
1667	〃	〃	7.5	1.3	0.6	4.9	(8)	0.8	2.7	0.7	0.5	—	1.0	2.5	—	0.4	5688	
1668	S K165	4類	9.0	1.5	0.6	5.4	10	0.8	—	—	3.0	—	0.5	—	—	—	5681	
1669	S X101	5類	8.2	1.2	0.7	5.6	11	0.8	2.6	—	—	—	—	—	—	—	5704	
115-1670	S A103	3類	[8.4]	1.6	0.7	5.1	12	0.9	2.8	0.4	0.7	—	0.8	2.6	13.4	0.5	全長27.8	5685
1671	II層	〃	[8.6]	1.5	0.5	5.2	12	0.75	2.6	0.6	0.7	4.5	1.2	2.4	14.5	0.5		5686

(軒丸瓦)

図版番号	遺構	類型	瓦当径	瓦当厚	備考	登録番号
116-1672	S K192	菊丸瓦	9.7	1.5	全長 11.8cm	E-5649
1673	II層	〃	8.9	1.7		5650
1674	〃	〃	8.6	1.9		5651
1675	〃	〃	8.5	1.7		5652
1676	S X101	〃	8.6	1.9	全長 11.0cm	5656
1677	〃	〃	9.1	2.0		5657
1678	S K192	〃	8.9	1.6		5659
1679	II層	〃	8.7	1.9		5661
1680	S X101	鬼瓦	—	—		5626

石製品 (硯)

図版番号	遺構	長さ	幅	高さ	石質	備考	登録番号
117-1681	I層	14.0	7.7	2.2	頁岩	海のまわりに墨痕	S-5
1682	S K148	14.3	6.0	1.4	〃	線彫りで字・絵	8
1683	S K152	—	5.5	1.3	泥岩	内面に墨痕	11
1684	I層	11.6	5.7	1.5	頁岩		13
1685	S K173	11.4	5.1	1.3	泥岩		14
1686	I層	—	—	1.9	〃	内面に墨痕	12
1687	S K173	—	—	—	〃		15
1688	S E05	—	8.0	2.2	頁岩	両面硯	6
1689	II層	16.5	5.8	2.4	〃	両面硯 両面共に墨痕	7

図版番号	遺構	長さ	幅	高さ	石質	備考	登録番号
117-1690	S K162	13.5	6.0	1.8	頁岩	両面硯 両面共に墨痕	S-9
1691	S K138	-	-	1.2	〃	〃 A面 丘まわり墨痕 B面 縁の内面墨痕	16
1692	S D101	-	-	1.4	〃	〃 線彫りで字	10

(砥石)

図版番号	遺構	長さ	幅	高さ	石質	備考	登録番号
118-1693	S K198	(17.6)	4.8	2.9	ホルソフェルス		S-19
1694	S K342	(14.0)	3.3	1.4	凝灰岩		36
1695	S K162	(11.8)	(2.5)	2.0	〃		33
1696	S K193	(5.2)	(2.8)	2.0	〃		29
1697	S K136	(9.4)	(2.6)	2.7	流紋岩		25
1698	II層	(9.4)	(2.3)	1.2	凝灰岩		32
1699	S K162	(9.2)	(4.2)	1.6	〃		23
1700	S K ₁₁₃ ₁₁₄	(9.2)	5.4	1.2	泥岩		43
1701	II層	(9.0)	5.0	1.0	凝灰岩質泥岩		44
1702	S K151	(7.2)	3.1	0.8	泥岩		48
1703	S K136	(3.8)	5.4	0.7	凝灰岩		41
1704	S K184	(4.2)	(4.2)	0.6	凝灰岩質		52
1705	S X101	(6.4)	4.1	0.6	凝灰岩質泥岩		53
1706	S K173	(5.2)	4.1	1.0	凝灰岩		56
1707	S K137	(9.1)	(4.7)	0.4	泥岩	表裏面 墨書有	50

(その他)

図版番号	遺構	種別	石質	備考	登録番号
119-1708	S X101	碁石	頁岩	最大径 2.2cm	S-74
1709	II層	〃	〃	〃 2.15cm	75
1710	〃	〃	〃	〃 2.2cm	76
1711	S K130	〃	凝灰質泥岩	〃 2.2cm	77
1712	I層	〃	頁岩	〃 2.15cm	79
1713	S K135	〃	〃	〃 2.15cm	80
1714	II層	〃	〃	〃 2.1cm	81
1715	S K130	〃	泥岩	〃 2.0cm	71
1716	II層	バンドコ蓋	緑色凝灰岩	高さ 2.0cm 最大長 6.5cm 奥行 5.0cm	71
1717	〃	バンドコ	〃	〃 4.4cm 〃 6.7cm 〃 5.3cm	72
1718	S K193	火炉	〃		73
1719	S E05	石臼	花崗岩	[径 33.0cm]	64
1720	S D01	茶臼	砂岩	[〃 9.0cm]	63
120-1721	II層	石臼	花崗岩	[〃 17.0cm]	65
1722	S E101	茶臼	砂岩	[〃 11.1cm]	62
1723	S D101	〃	安山岩		61
1724	S D01	五輪塔	花崗岩		67
1725	S K127	軽石	〃		66
1726	S D102	〃	軽石		68
1727	I層	〃	〃		68
1728	S D15	印章	頁岩	印文「森約之印」	70

ガラス製品

図版番号	遺構	材質	断面形状	色調	備考	登録番号
121-1729	S K188	ガラス	長方形	白		X-1
1730	I層	〃	正方形	緑		2
1731	I層	〃	長方形	黄褐		3

金属製品

図版番号	遺構	種別	全長(cm)	備考	登録番号
121-1732	S K145	小柄	(20.6)		M-582
1733	II層	鍬	(2.4)		400
1734	S E137	〃	(9.8)		418

図版番号	遺 構	種 別	全長(cm)	備 考	登録番号
121-1735	S K 50	鞆金具	(10.0)		M-359
1736	S E 137	小柄	(8.0)		540
1737	S K 184	"	(9.8)		417
1738	I 層	"	(9.8)		409
1739	S K 130	襖の取手	7.3×6.8 の楕円		424
1740	I 層	飾り金具	径4.6		485
1741	"	"	径1.7		426
1742	I 層	"	径2.0		433
1743	II 層	"	径10.3		373
1744	S X 101	不明	(9.0)		587
1745	"	把手	径6.0		399
1746	S D 01	火燧金	8.4		583
1747	S X 101	毛抜き	5.2		393
1748	S K 136	匙	(8.2)		431
1749	S X 101	"	11.4		595
1750	S K 130	火箸	13		357

(煙管)

図版番号	遺 構	種 別	部 位	全長(cm)	長さ(cm)	火皿径(cm)	備 考	登録番号
122-1751	II 層	煙管	雁首	(4.9)	4.1	1.5		M-377
1752	S E 122	"	"	(3.3)	—	1.6		608
1753	S K 130	"	"	(7.0)	7.0	1.6		383
1754	II 層	"	"	(7.2)	(5.5)	1.5		403
1755	S K 130	"	"	(5.6)	(5.5)	1.4		403
1756	S K 136	"	"	(5.6)	5.5	1.4		430
1757	S K 177	"	"	(6.9)				449
1758	S X 101	"	"	(6.0)		1.0		394
1759	S K 184	"	"	(4.9)		1.6		365
1760	I 層	"	完形	12.2	12.2	1.1		437
1761	S K 171	"	吸口	(7.7)	7.2			392
1762	S X 101	"	"	(7.2)	7.2			412
1763	I 層	"	"	(4.7)	4.7			370
1764	II 層	"	"	(5.5)	5.5			371

(釘)

図版番号	遺 構	種 別	全長(cm)	備 考	登録番号
122-1765	S K 130	頭巻釘	(6.6)		M-600
1766	S K 120	"	(6.3)		548
1767	S E 137	"	(7.2)		541
1768	S E 122	"	(7.8)		607
1769	S X 101	"	(8.4)	頭巻欠損	597
1770	S K 145	"	(9.8)		606
1771	"	"	(9.2)		592
1772	S K 120	"	(9.0)		602
1773	S K 116	"	(9.0)		546
1774	S K 177	"	(10.8)		579

銭貨

図版番号	遺 構	銭 銘	径(cm)	孔径(cm)	初 鑄 年	備 考	登録番号
122-1775	S K 184	寛永通宝	2.4	0.6	寛永13年(1636)		M-478
1776	"	"	2.4	0.6	"		482
1777	S K 162	"	2.2	0.6	寛保元年(1741)		511
1778	S K 189	"	2.4	0.6	元文2年(1737)		473
1779	"	"	2.2	0.6	元文3年(1738)		523
1780	S K 138	"	2.3	0.7			486
1781	S K 130	"	2.3	0.7	元文4年(1739)		531
1782	"	"	2.3	0.7	"		532
1783	II 層	"	2.5	0.6			488
1784	S E 122	"	2.3	0.6	元文4年(1739)		491

図版番号	遺構	銭銘	径(cc)	孔径(cm)	初鑄年	備考	登録番号
122-1785	II層	寛永通宝	2.3	0.6	元文4年(1739)		M-508
1786	"	"	2.4	0.7	寛永13年(1636)		520
1787	"	"	2.5	0.6			521
1788	"	"	2.4	0.6			521
1789	S D 116	"	2.3	0.6	寛永13年(1636)		434
1790	S X 101	"	2.4	0.6	"		510
1791	II層	"	2.4	0.6	元禄13年(1700)		368
1792	"	"	2.4	0.6	寛永13年(1636)		477
1793	"	"	2.3	0.6	"		487
1794	"	"	2.3	0.6	"		493
1795	"	"	2.3	0.6	享保20年(1735)		497
1796	"	"	2.3	0.6	宝永5年(1708)		500
1797	"	"	2.3	0.7	寛永13年(1636)		507
1798	"	"	2.4	0.6			515
1799	"	元豊通宝	2.4	0.7	元宝1年(1078)	中国銭	480
1800	"	祥符通宝	2.3	0.7			481
1801	"	慶元通宝	2.3	0.7	寧宗慶元1年(1195)	中国銭	516
1802	"	開元通宝	2.4	0.7	高祖武徳4年(621)	"	512
1803	"	"	2.4	0.7	"	"	538

I 期以前の遺物

図版番号	遺構	器種	法量(cm)				釉薬・調整等		備考	登録番号
			器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
124-1	II層	弥生土器	壺	—	—	—	—			E-5721
2	"	"	高杯	—	—	—	—			5711
3	"	須恵器	杯	—	—	—	(12.8)			5709
4	"	"	"	—	—	—	(16.8)			5708
5	III層	"	長頸壺	—	—	—	(12.4)			5710
6	S K 116	"	"	—	—	—	—			5712
7	III層	"	横瓶	—	9.2	—	—			5713
8	II層		三又トチン	1.5						5715
9	S D 03	石器	磨石	長さ5.8						S - 4
10	S D 01	"	打製石斧	長さ(7.8) 幅6.3 厚さ1.5						2
11	S D 103	"	磨製石斧	長さ9.0 幅4.5 厚さ2.0						3
12	IV層	"	マイクロア							1

版 圖

1 2-1 3

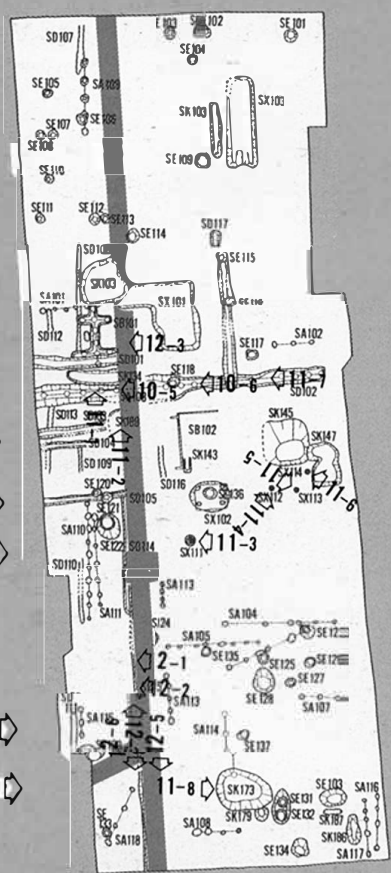
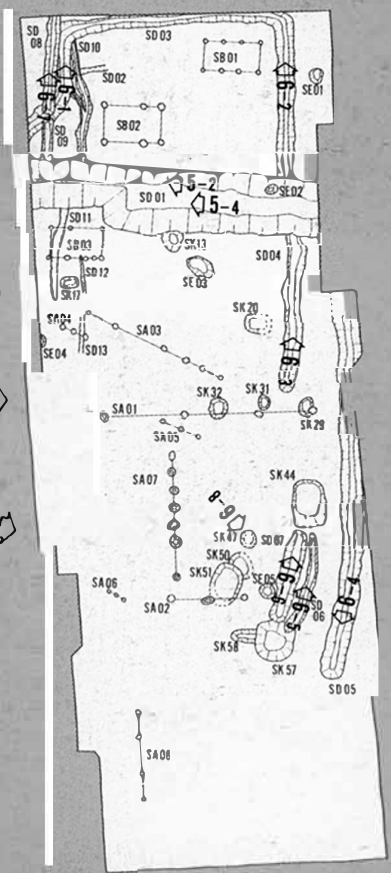
7

◀ 撮影位置

5-3
5-1
4-1
4-2
4-3

8-1
8-2
9-1
10-3
9-2
10-1
10-4
10-2

2-2



上層

下層

図版 1



1 ▶
調査区周辺



2 ▶
調査区より天守閣方面

図版3
I期の遺構(1)



図版 4
I 期の遺構 (2)



1 ▶
北部分



2 ▶
中央部分

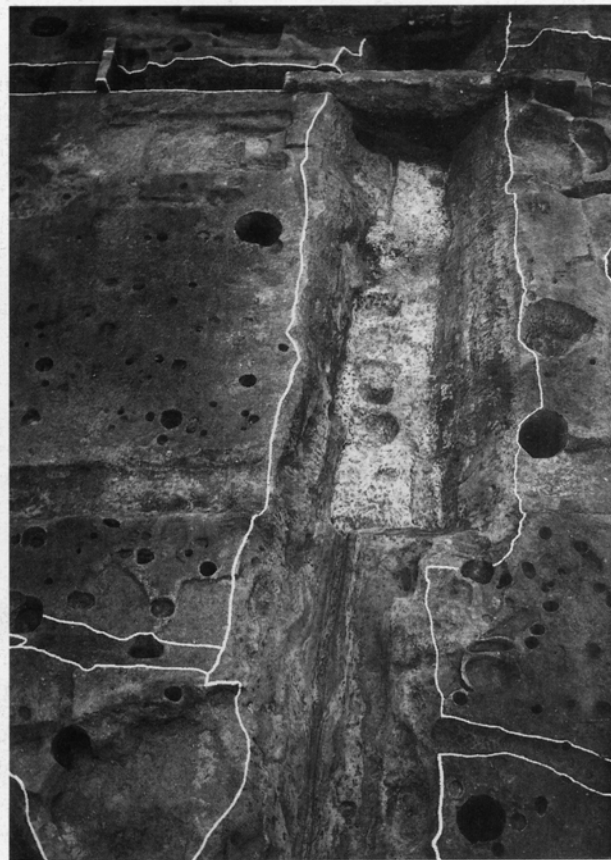


3 ▶
南部分

図版 5
I 期の遺構 (3)



◀ 1
S D01
S D03

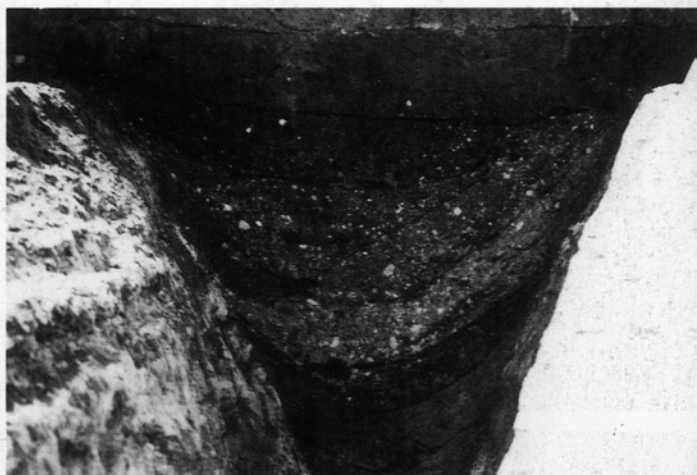


◀◀ 2
S D01

◀ 3
S D01



◀ 4
S D01



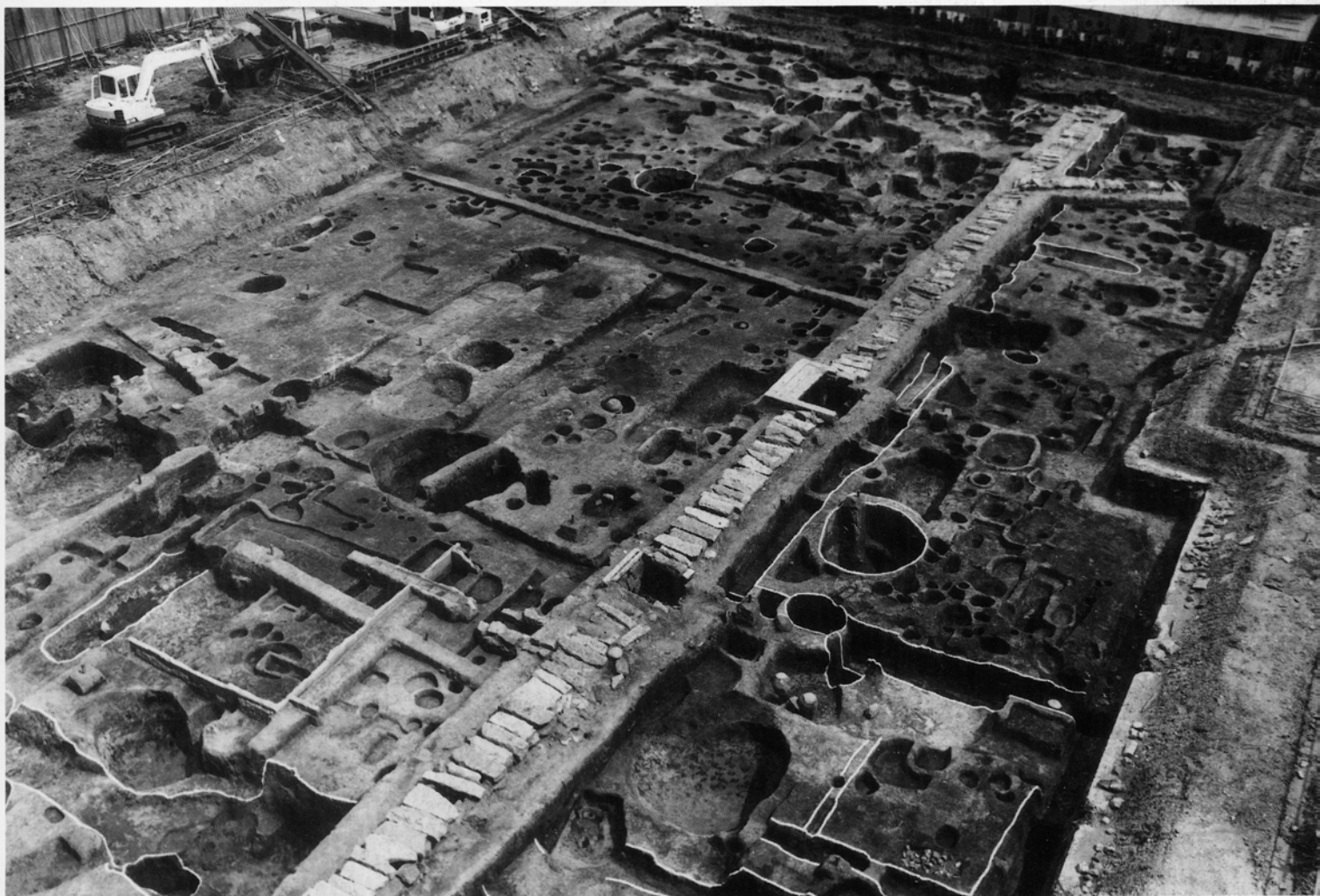
▲ 1 SD03
3 SD04
5 SD06
7 SD08

▲ 2 SD03
4 SD05
6 SD07
8 SK47

図版 7
II期の遺構(1)



◀ 調査区全景
(II期)



▲ 1 北部分
2 南部分

図版9
II期の遺構(3)

図版10
II期の遺構(4)



1 ▶
中央部分
2 ▶▶
南部分

◀ 1
中央部分

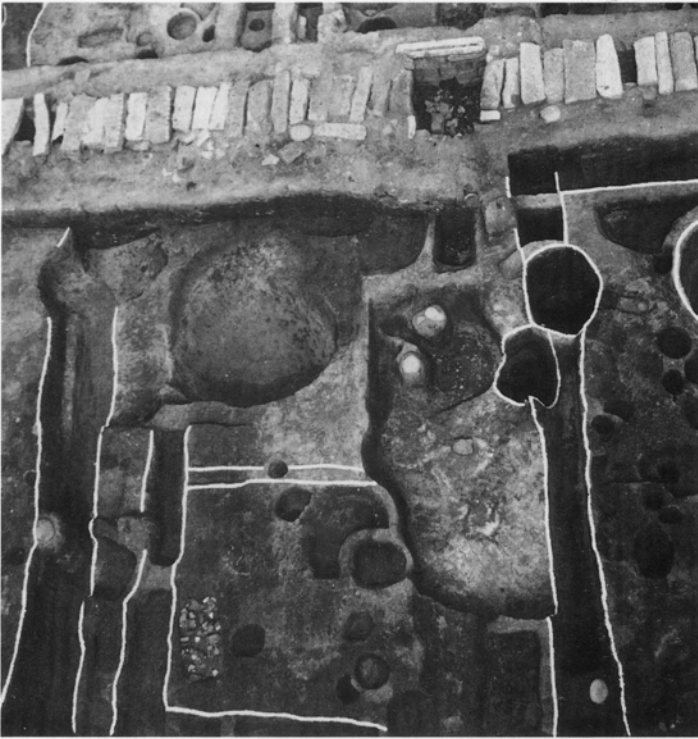
3 ▶
中央部分
4 ▶▶
南部分

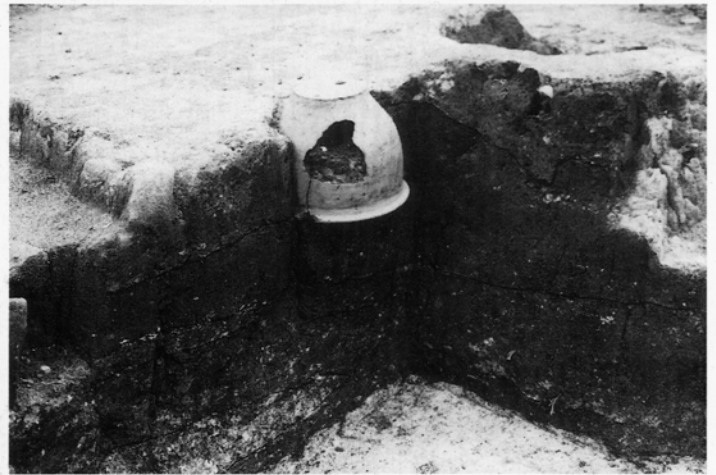


5 ▶
SA103 礎石

6 ▶▶
SA103 礎石
SD102

◀ 2
中央部分





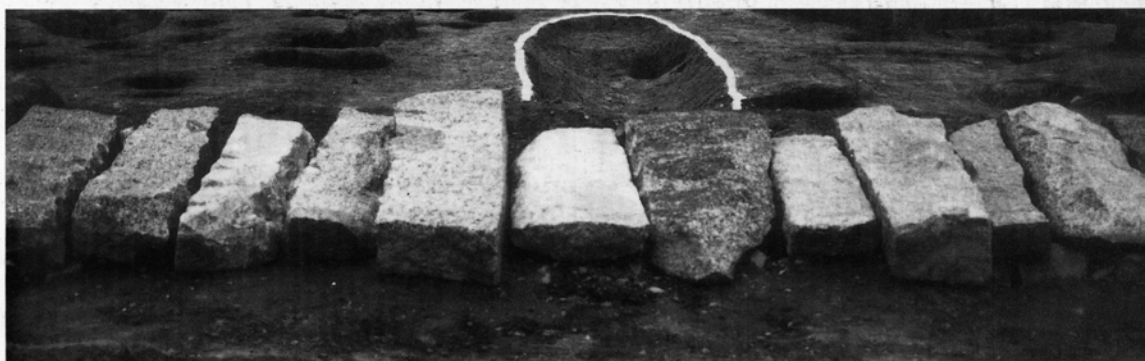
▲ 1 SD102 土師皿出土状態
 3 SX111 鉢出土状態
 5 SX113 鉢出土状態
 7 SD102 土層断面

▲ 2 SK136 土師皿出土状態
 4 SX112 甕出土状態
 6 SX114 甕・植木鉢出土状態
 8 SK173 土層断面

図版12
近代の遺構



1 ▶
暗渠蓋石



2 ▶
暗渠蓋石



3 ▶
暗渠蓋石

4 ▶▶
暗渠側石

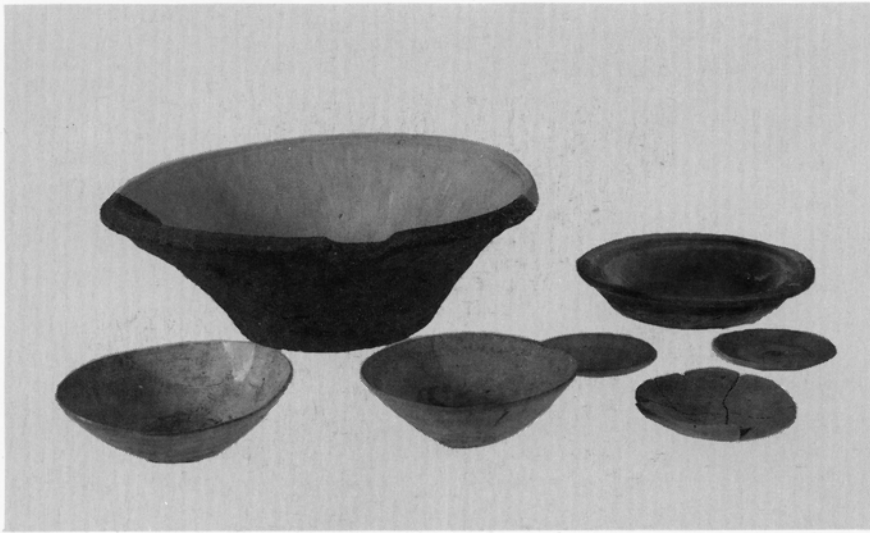


5 ▶
暗渠側面
(東側)



6 ▶▶
暗渠側面
(西側)

図版13 I期の遺物(1)



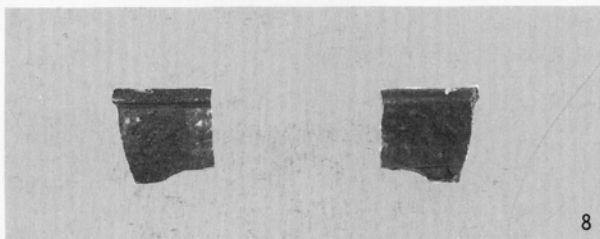
SK13

		24		22	
10		11	15		17
				20	



SD05

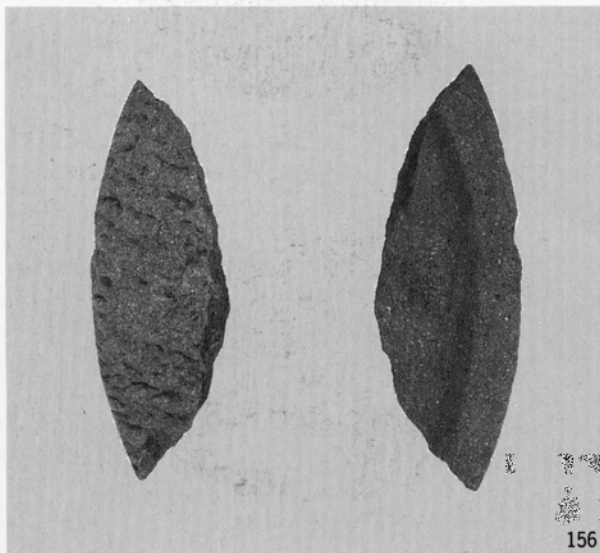
				113	
107			84		104
	99			105	
	101		100		93



8



26



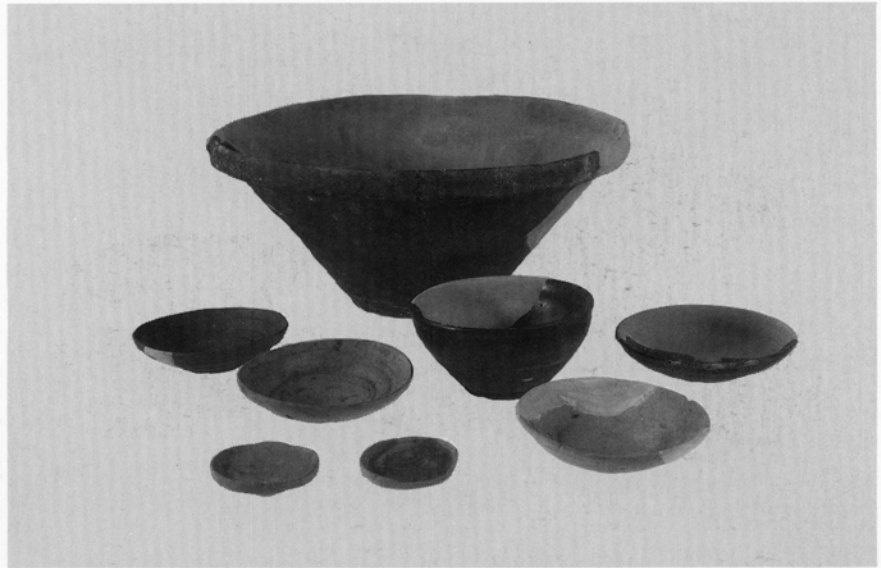
156



161

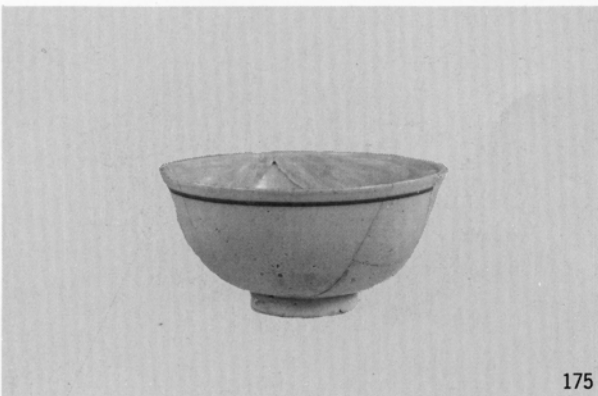
SE05

154			
140	139	137	142
148	150	143	



SD01

231		227	
175	164	223	228
219	182	200	



175



162

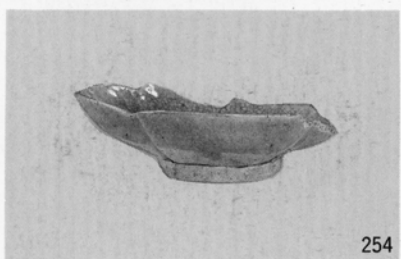
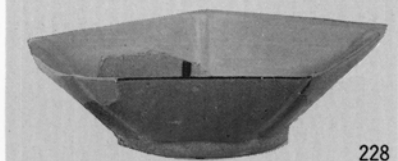
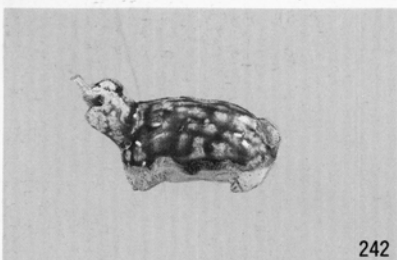
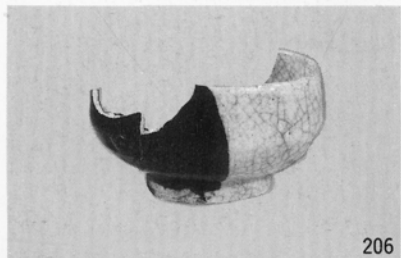
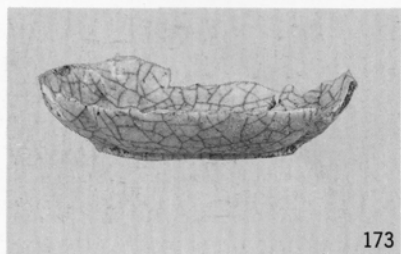
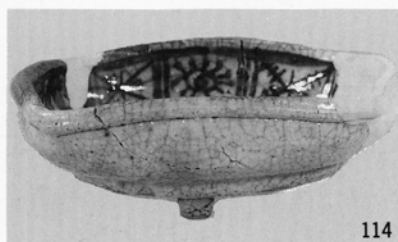
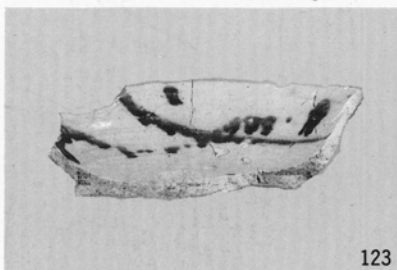
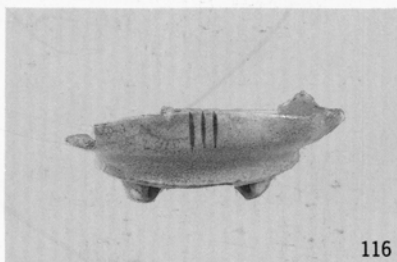
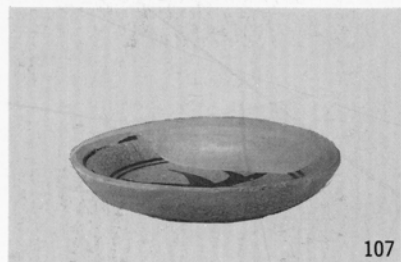
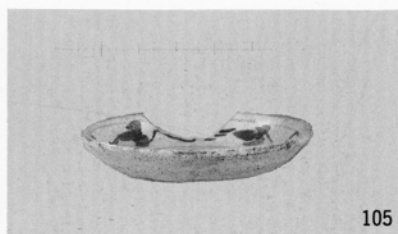
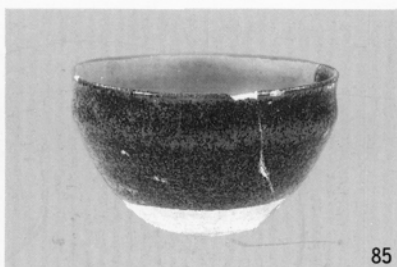


126

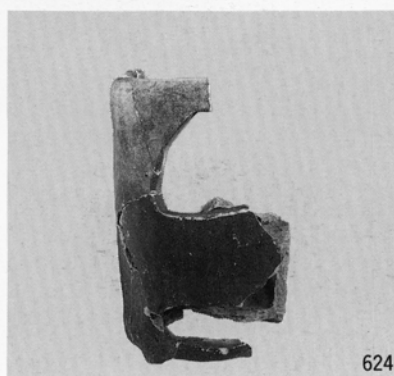
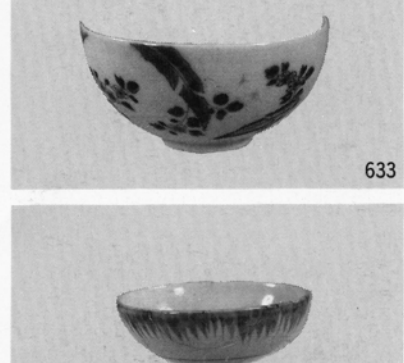
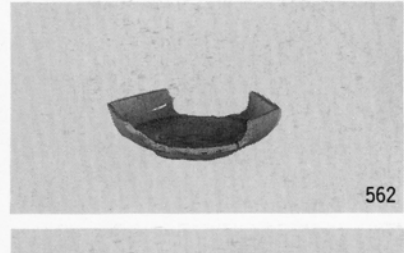
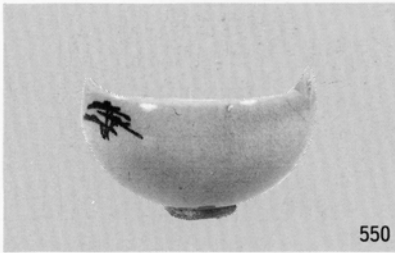
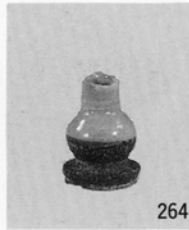
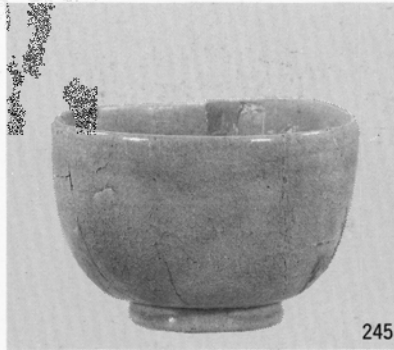
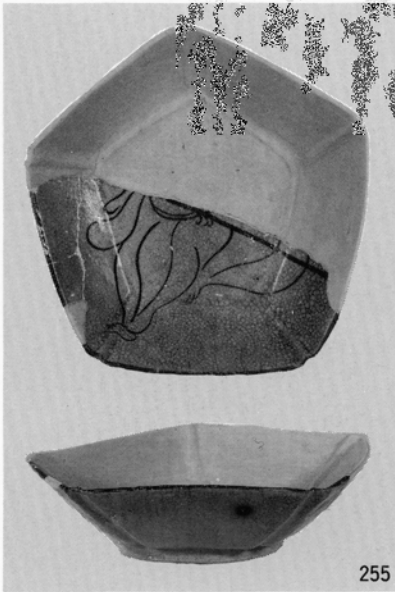


123

図版15 II期の遺物(1)



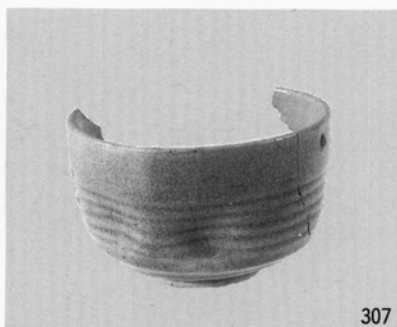
図版16 II期の遺物(2)



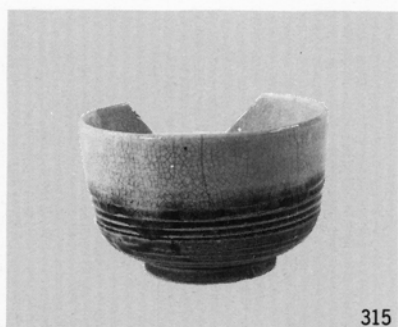
図版17 II期の遺物(3)



290



307



315



323



379



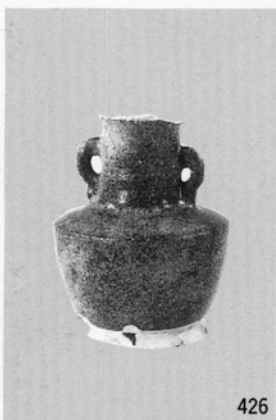
412



435



425



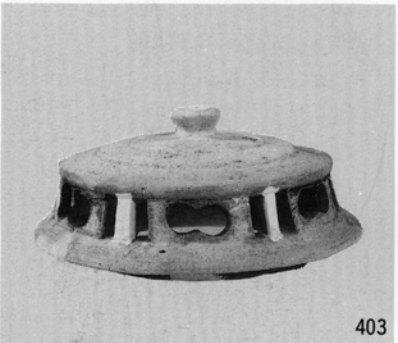
426



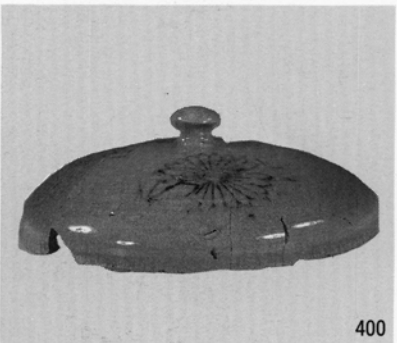
432



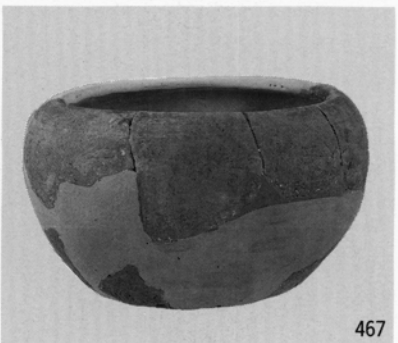
410



403



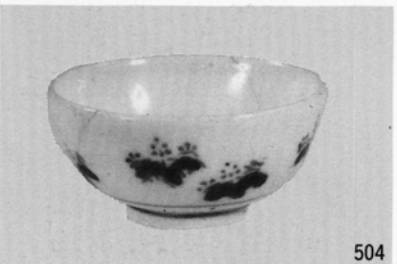
400



467



494



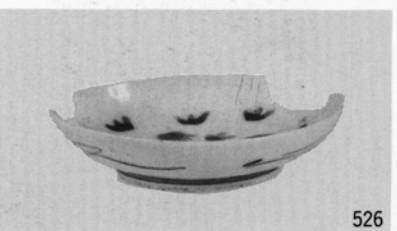
504



510



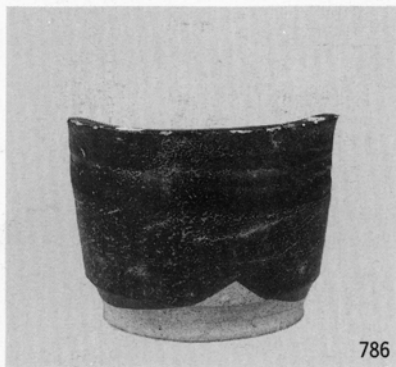
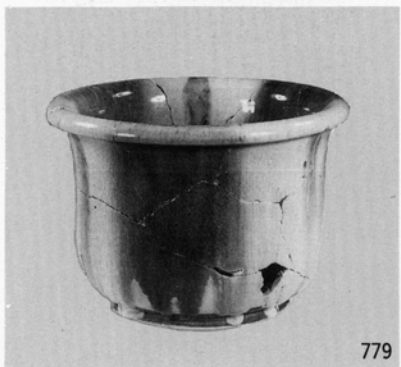
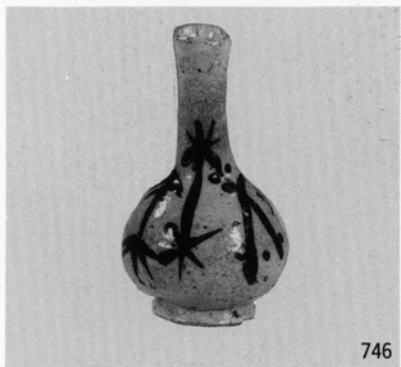
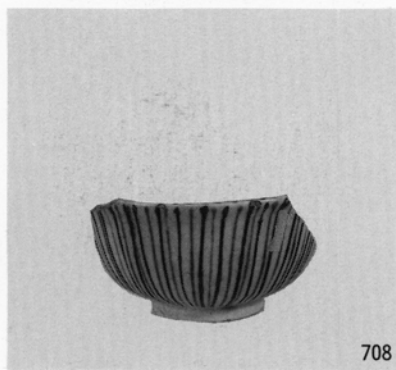
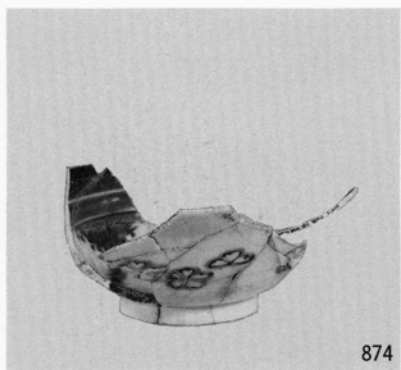
512



526



517



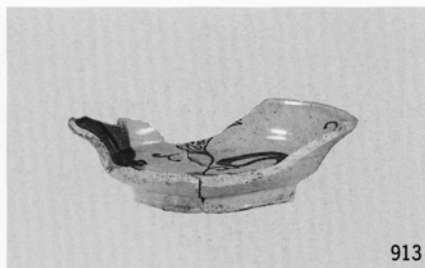
図版19 II期の遺物 (5)



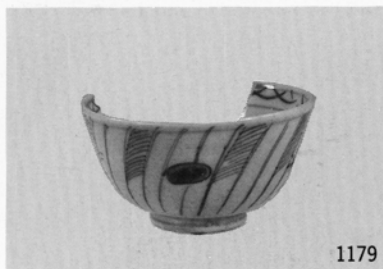
1184



1186



913



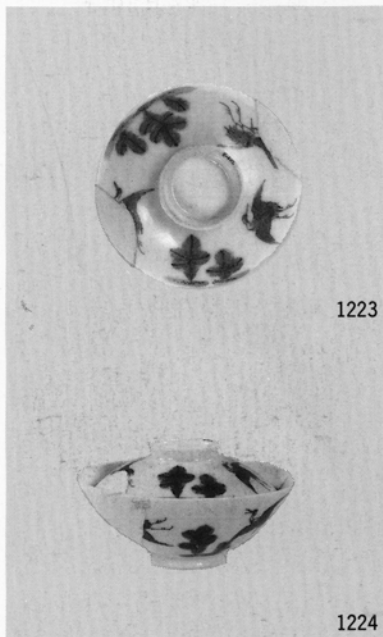
1179



1181



1175



1223



1219



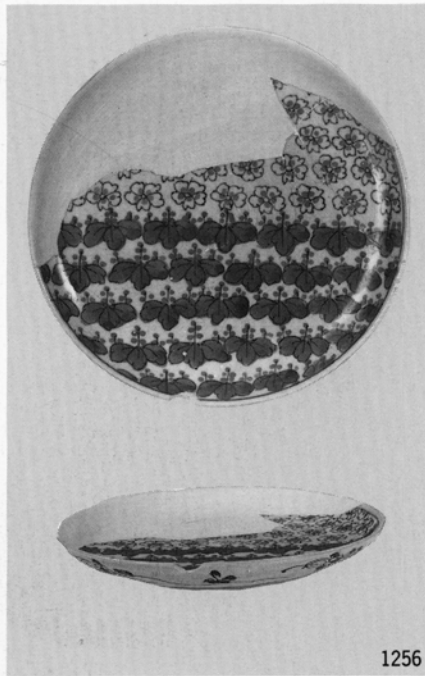
1257



1243

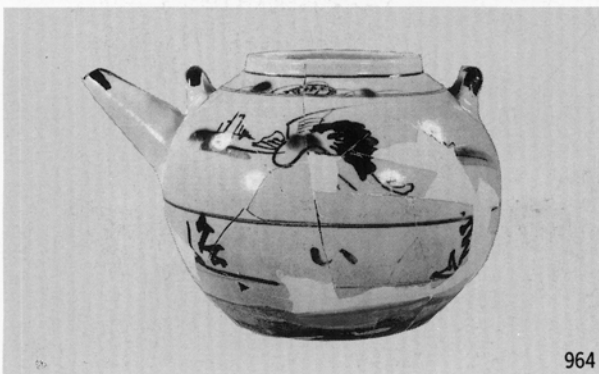
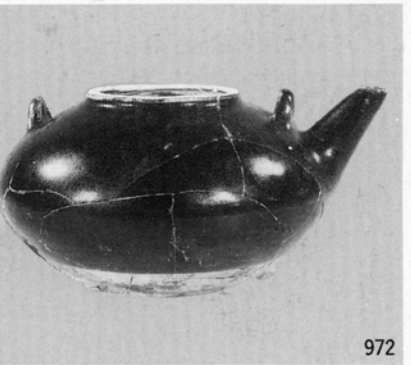
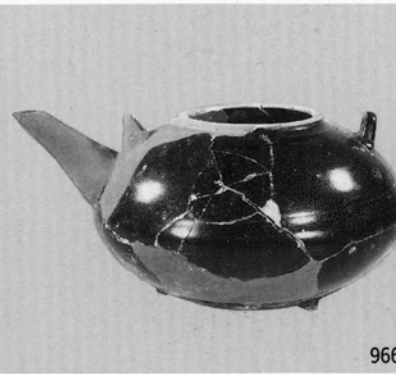
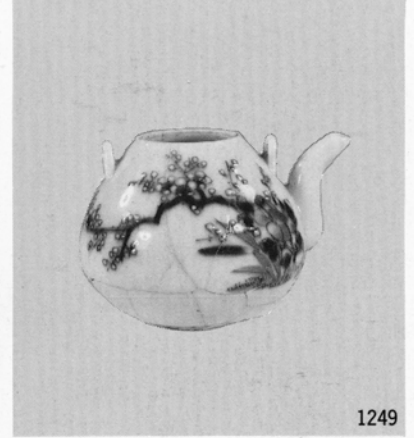


1244

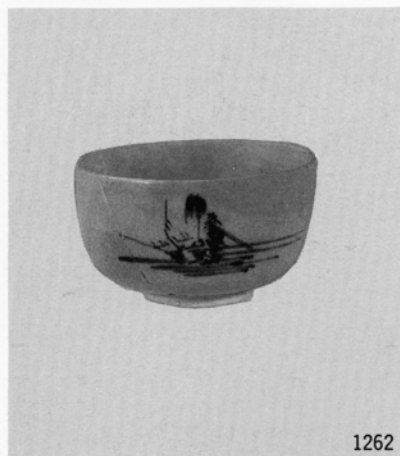


1256

図版20 II期の遺物(6)



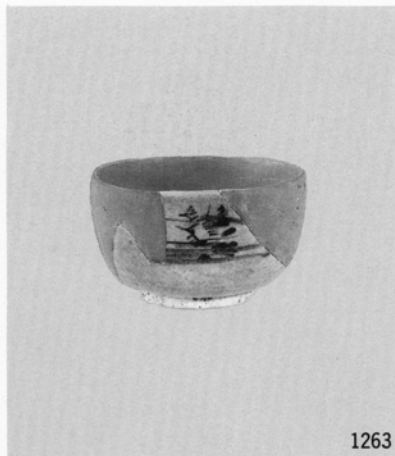
図版21 II期の遺物（7）



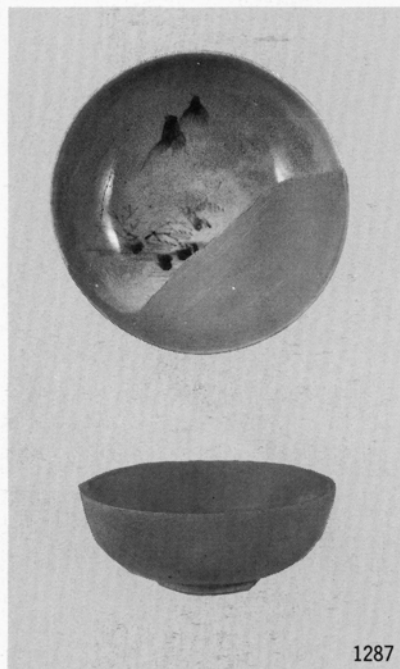
1262



1318



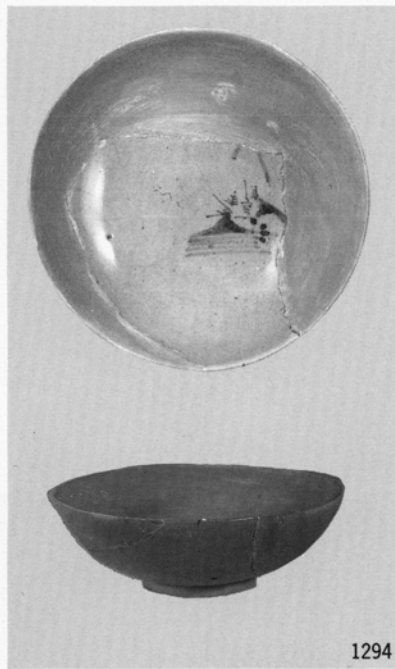
1263



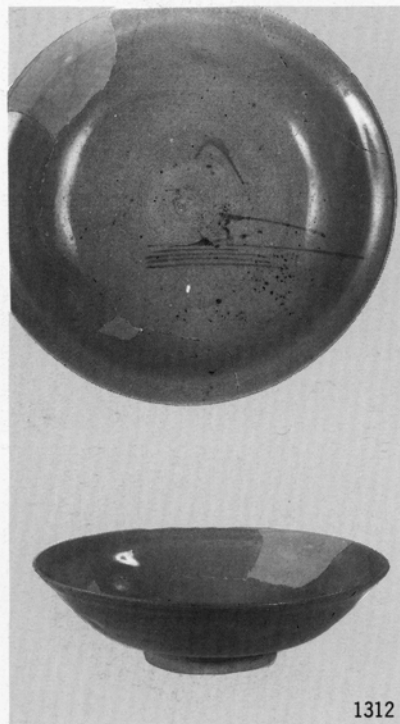
1287



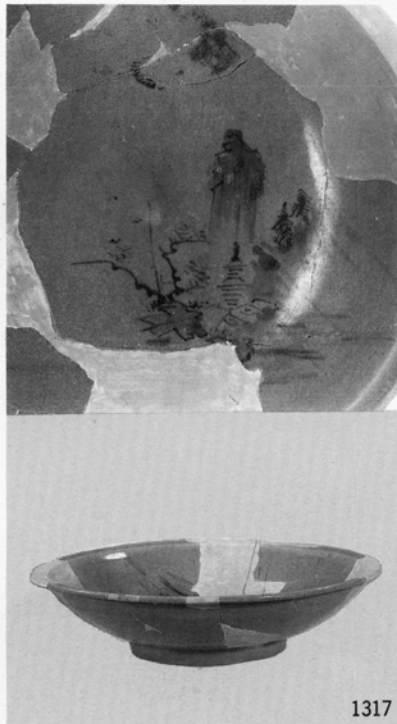
1290



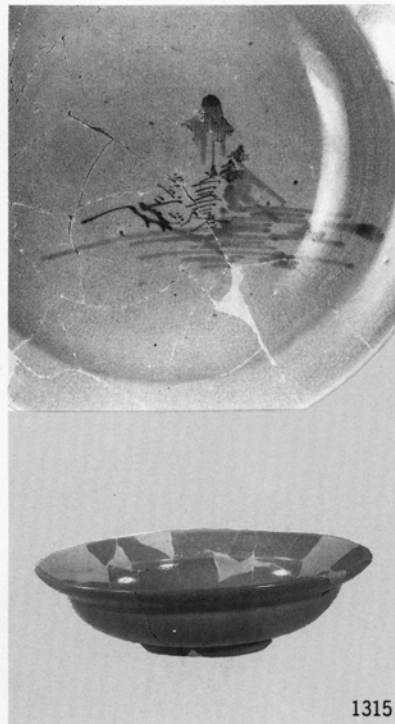
1294



1312

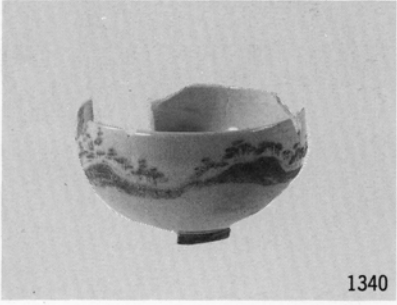
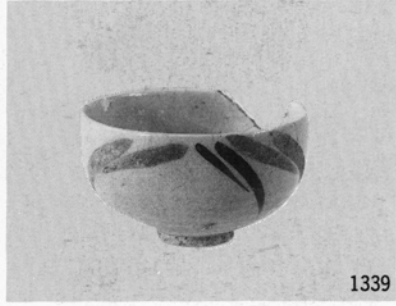
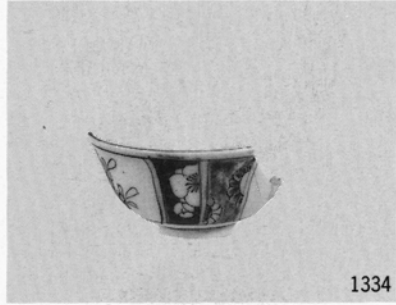
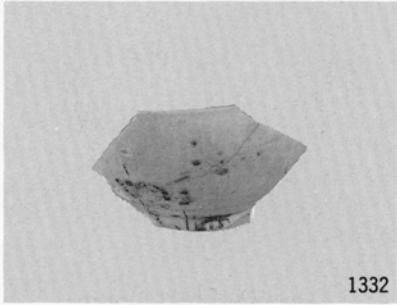
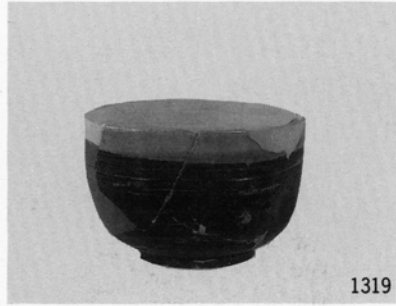
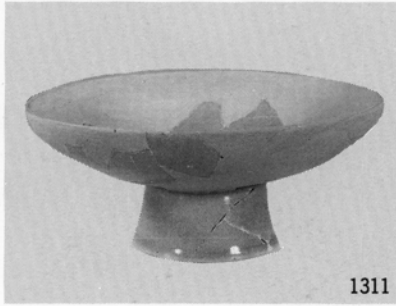
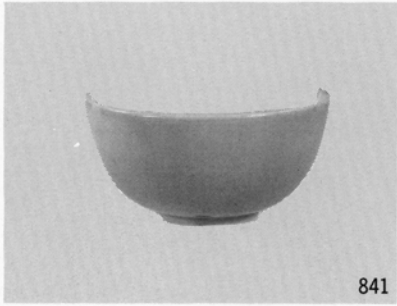
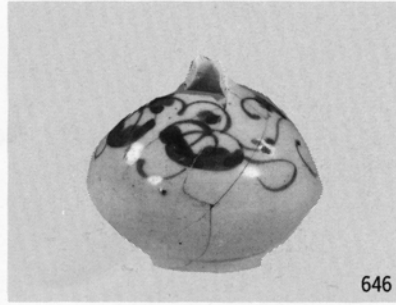
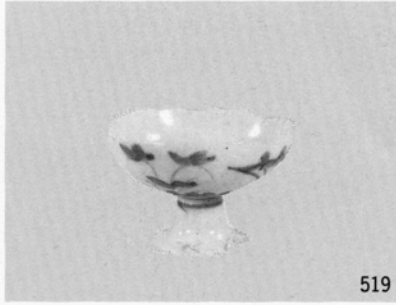
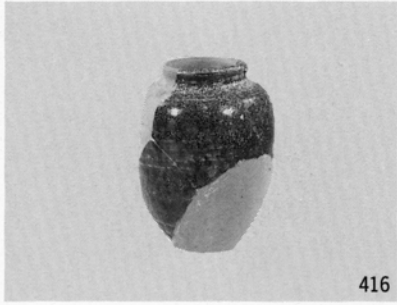


1317

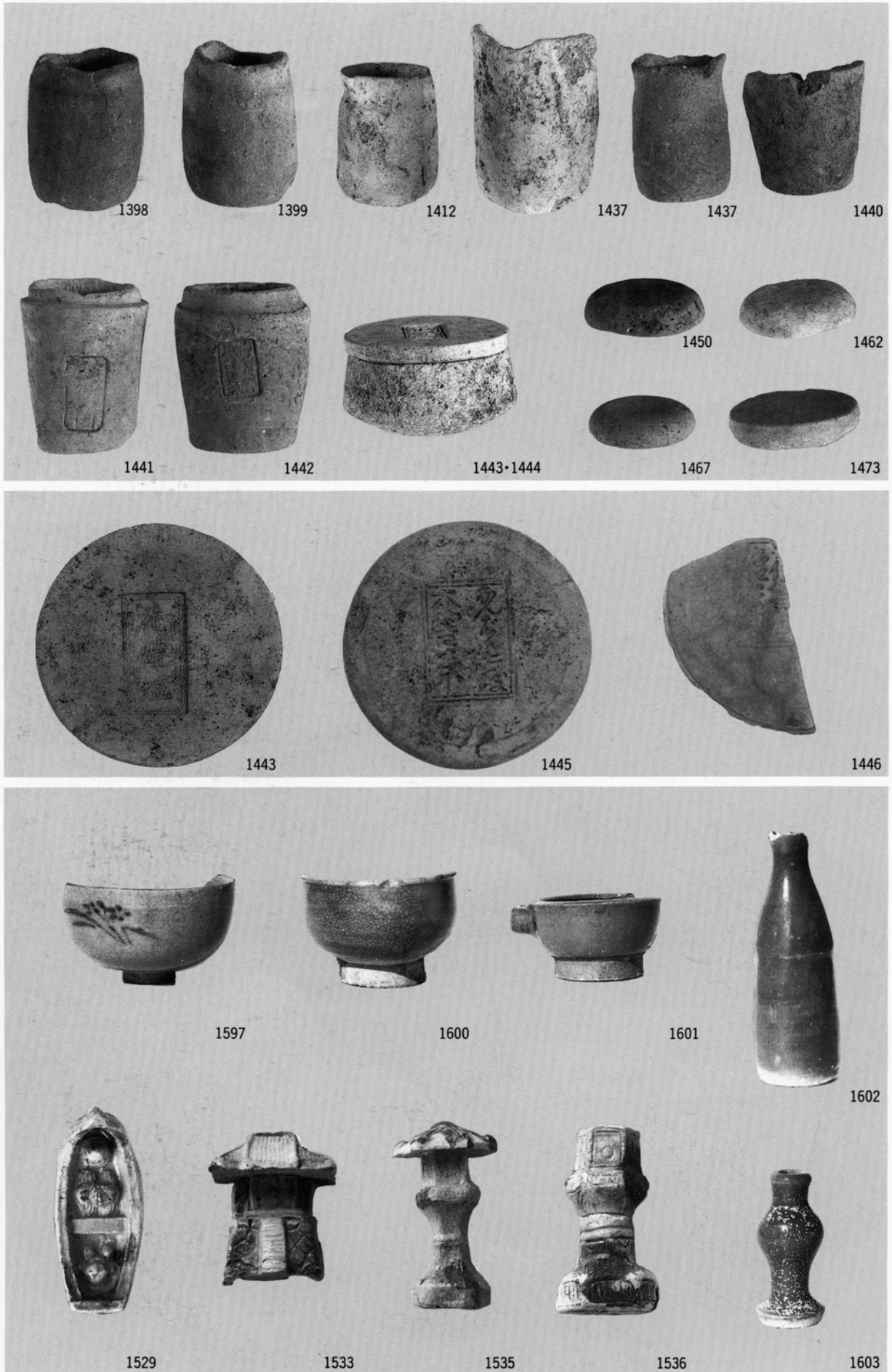


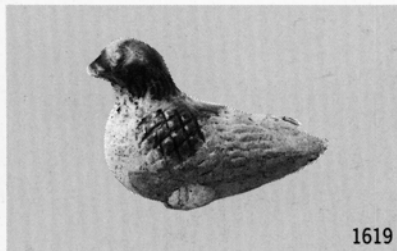
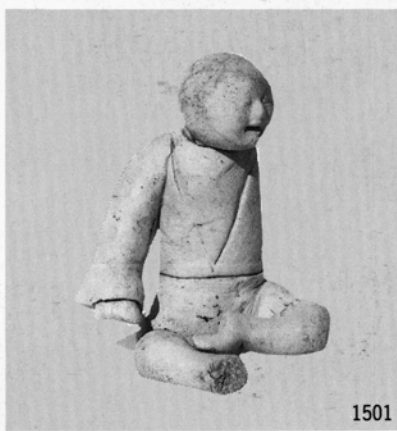
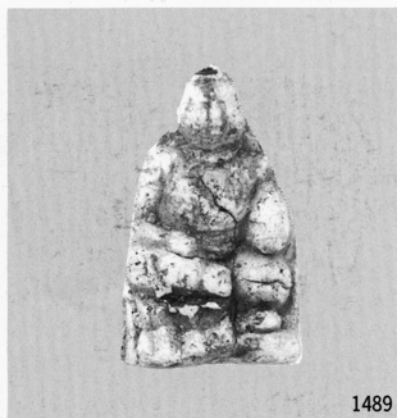
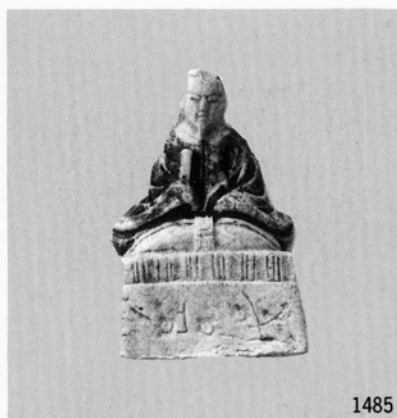
1315

図版22 II期の遺物(8)

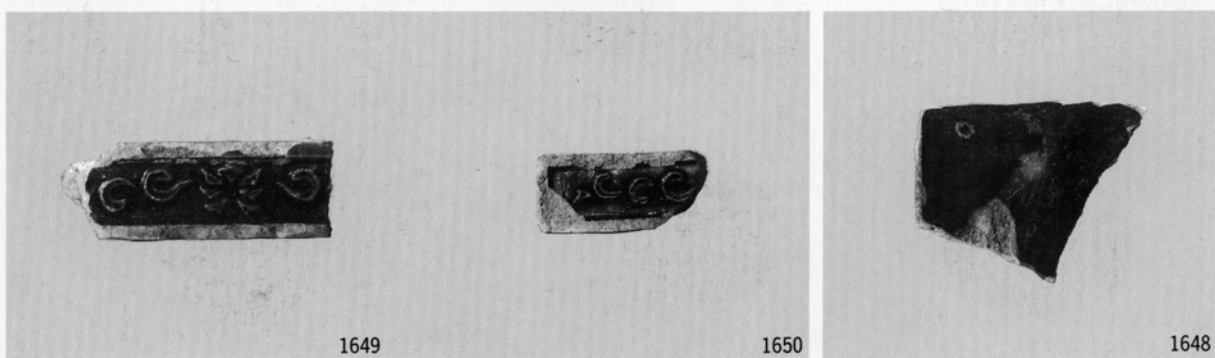
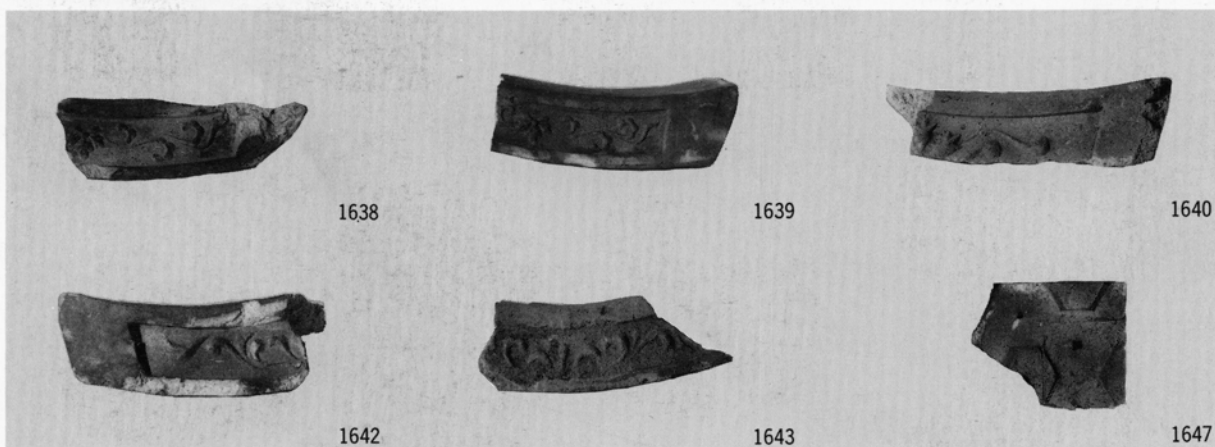
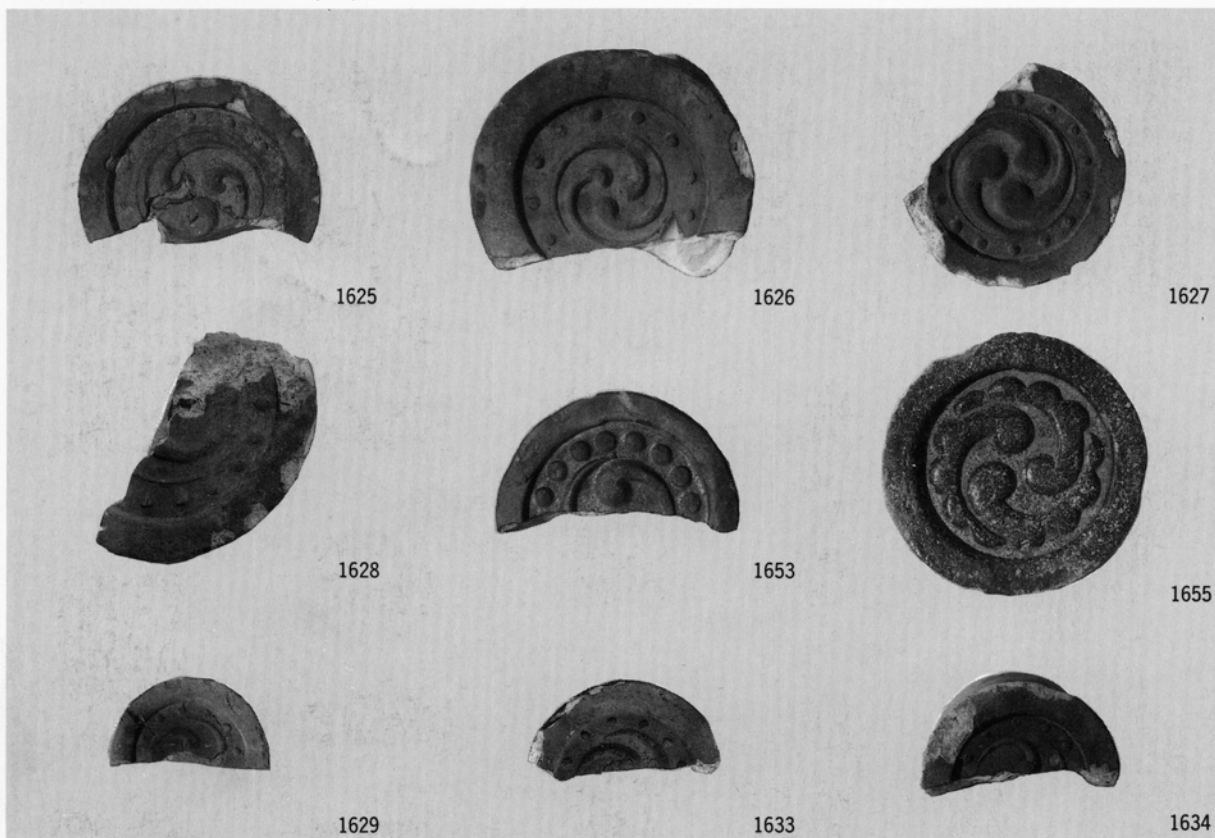


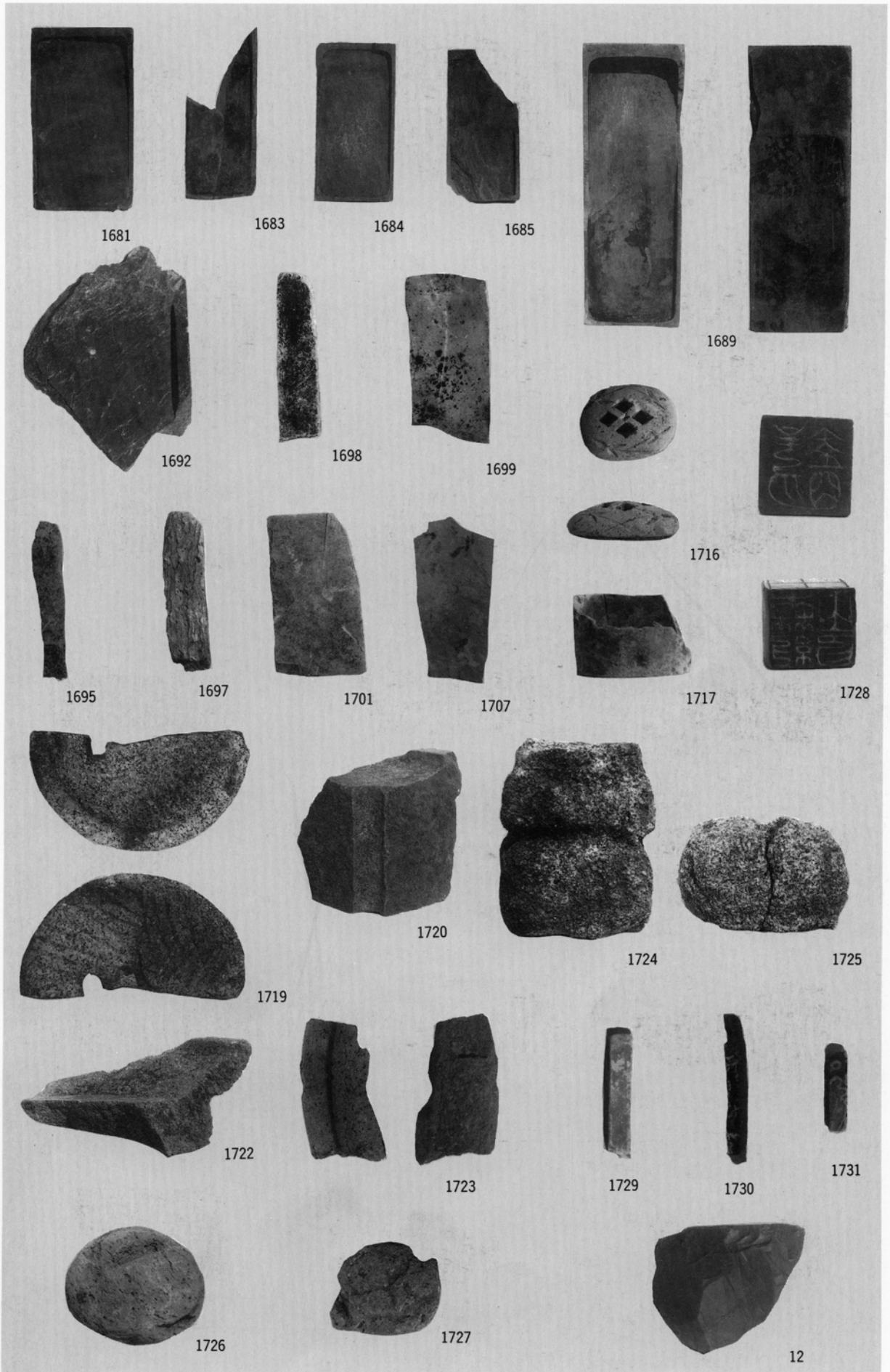
図版23 II期の遺物（9）

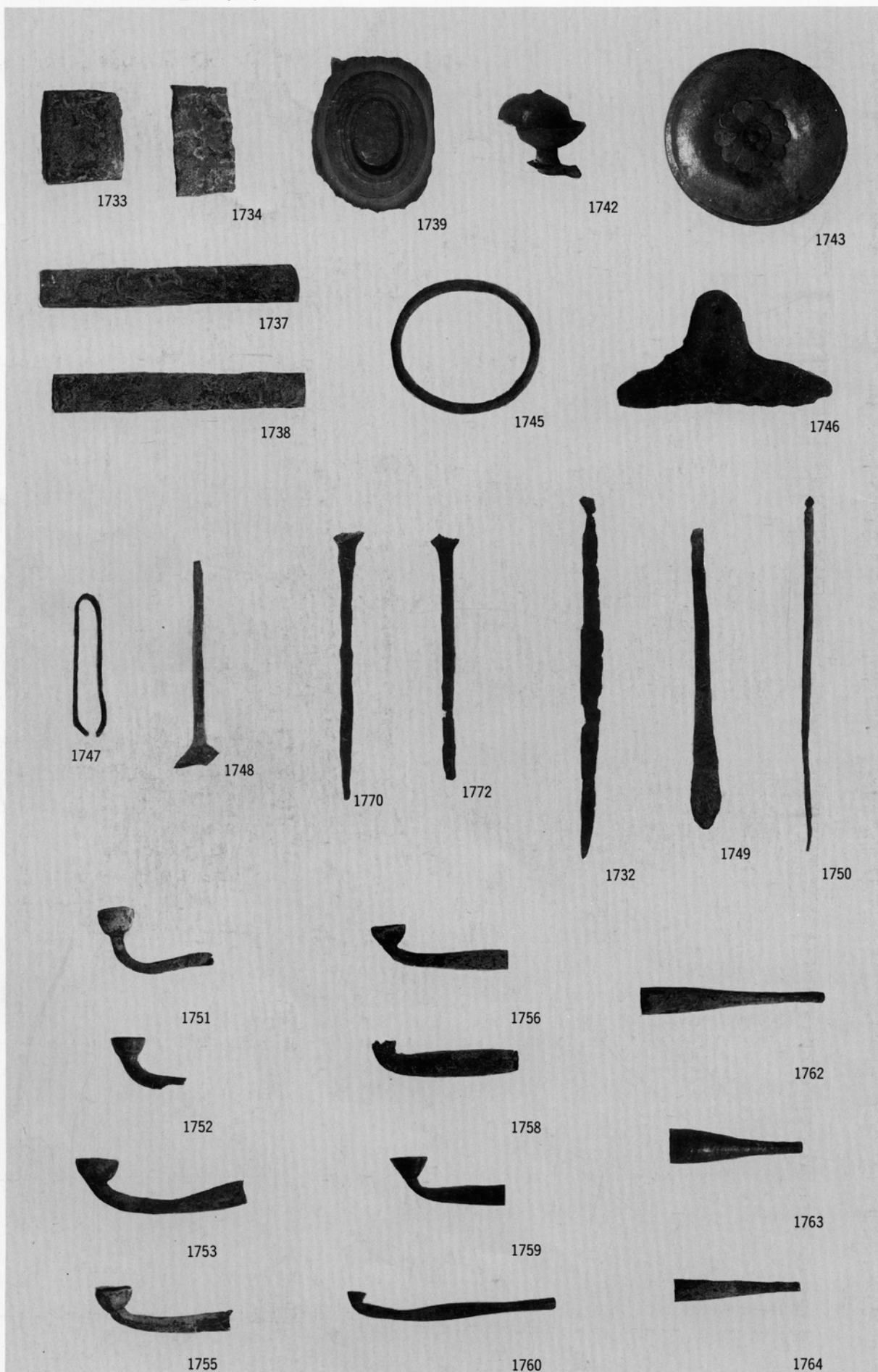




図版25 II期の遺物 (11)

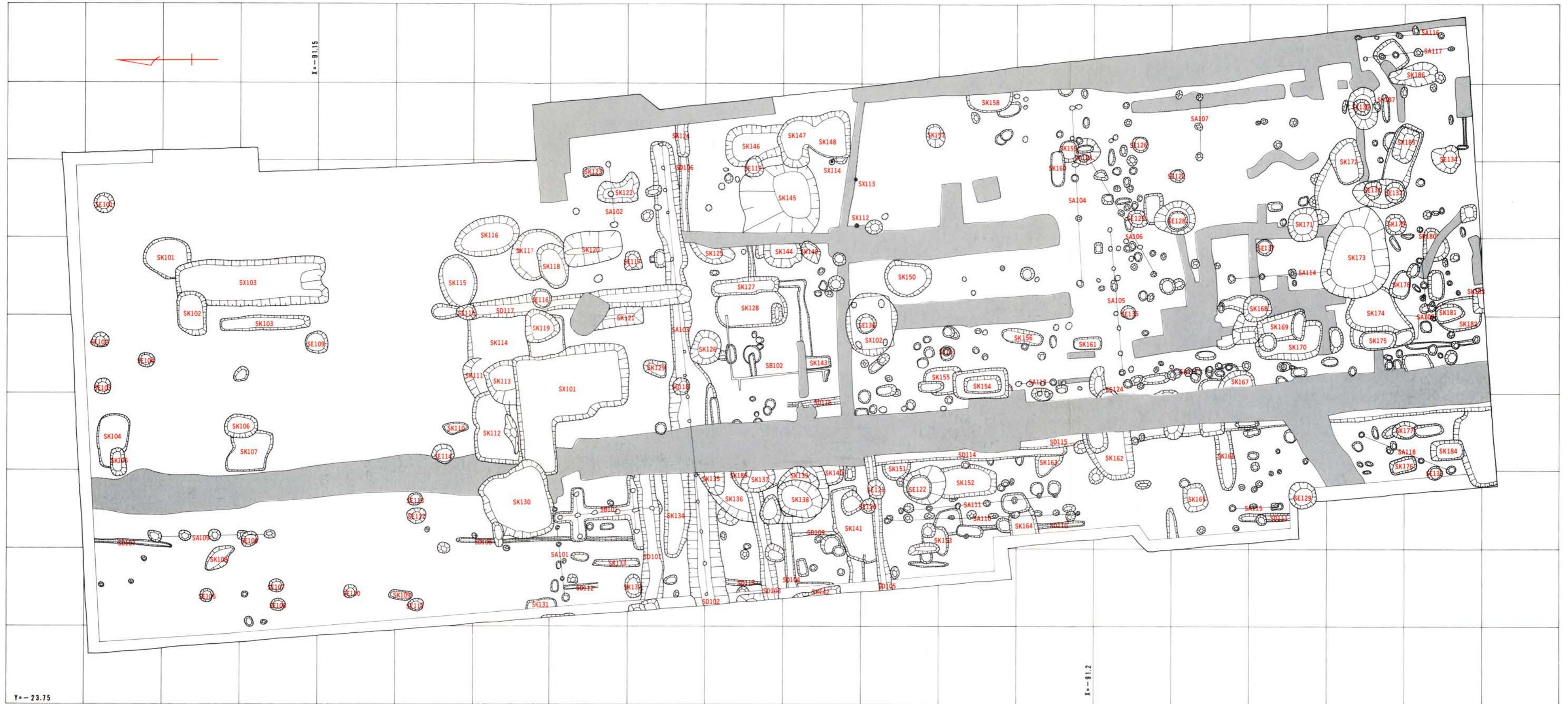








図版29 調査区全体図 (II期)



X--91.15

Y--23.75

X--91.2

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第16集

名古屋城三の丸遺跡(II)

1990年3月31日

編集発行 財団法人
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社